82
08
スペースデザイン
都市・建築・芸術の総合誌
第215号
昭和57年8月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日
第3種郵便物認可
昭和55年12月2日国鉄首都
特別扱承認雑誌第5347号

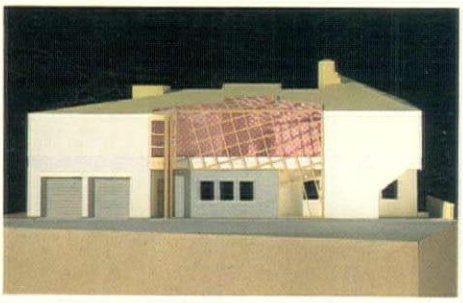
SD
Space Design

特集＝
渦巻くポスト・モダニズム

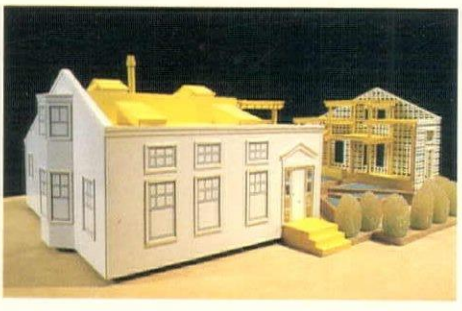
Eric Owen Moss
Morphosis
Fisher/Roberts
Ronald Filson
Barton Phelps
Ace Design
Taft Architects
Lonnecker/Papademetriou
Friday Architects
John Blatteau
Hammond/Beeby/Babka
Voorsanger/Mills
Abbey/Dripps
Rubin/Smith-Miller
Giuseppe Zambonini
Mark Cigolle
Livesey/Rosenstein
Kenneth Schroeder
Sartogo/Schwarting
Ralph Lerner
Duany/Plater-Zyberk
Randall Korman
Peter Wilson
Martin/Jones
Lauretta Vinciarelli
Richard Oliver
Peter Hoppner
Kelbaugh/Lee
Tod Williams
Kliment/Halsband
Timothy Wood
Stuart Cohen
Koetter/Kim
Schwartz/Silver
Gerald Allen
Roger Ferri
Lebbeus Woods
Giuliano Fiorenzoli

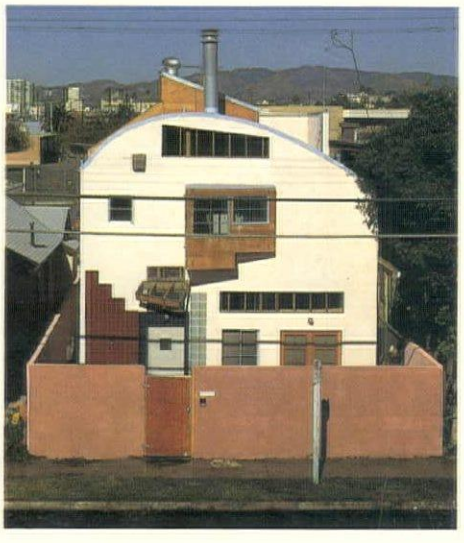
Young American Architects











対談＝
アメリカの若い建築家たちは今…
竹山実×石井和紘

アメリカ建築の新しい波と古い伝統
片木 篤

エリック・モス：表象としての建築
松永安光

カリフォルニア・ドリーミン'
竹山 聖

タフト・アーキテクツ：
テキサスの中のもうひとつのスケール
沼辺国夫

フライデイ・アーキテクツ：異化の流れの中で
安山宣之

イメージ・パラダイムの回転ドア
彦坂 裕

コッター／キム：都市の文脈の解読
渡辺真理

★

流 政之の《北追岬》
奥尻島の新しいモニュメント
小川 熙

［2001年の Space Design］
過去・現在・未来——歴史の中で考える
早川和男

海外建築情報
クラフトマンシップ・NOW

国内建築ノート
今，つまらないと思えること

SEP 15 1982

Bernard Buffet

ビュッフェの
《全貌展》
— 九　州 —

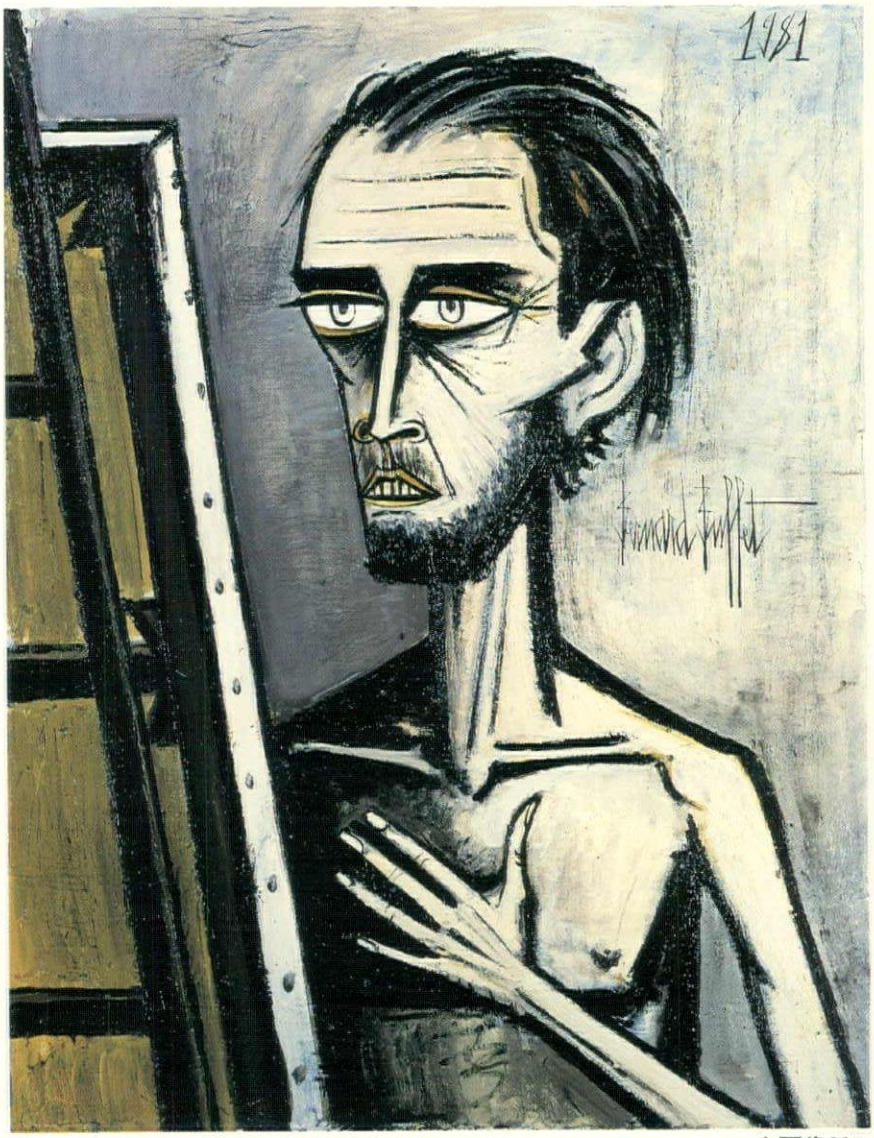
〈展覧会会期〉

8月16日(月) — 20日(金)

10:00 AM — 7:00 PM

会場　西日本新聞会館　15階中ホール
福岡市中央区天神1—4—1

(期間中直通)　092(712)—2294



自画像80P

galerie taménaga

日仏画壇の接点となる“ためなが グループ”

印象派，エコール・ド・パリの巨匠を中心に
現在活躍中の多数の作家を取扱っております。

近頃、ビュッフェの贋作が出廻っております。
作品についてのお問合せ及び判定は、ビュッフェの東洋における
独古販売契約を結んでおります当画廊にてうけたまわります。

契約作家：ビュッフェ・バブレーヌ・フサロ・ギアマン・イスカン・荻須高徳・他

ギャルリー　ためなが

東京　東京都中央区銀座7—5—4　TEL：03-573-5368
大阪　大阪市東区道修町4—7　TEL：06-202-3434
パリ　18，Av. MATIGNON, 75008　PARIS, FRANCE
TEL：266-61-94

tac 東邦アート株式会社

東京　東京都中央区銀座8—9—13　TEL：03-573-5377
大阪　大阪市東区道修町4—7　TEL：06-202-0852

パリでのお買上げの作品はご帰国後日本で円払いの便宜もございます。

OSAKI

検針業務は自動化の時代

大崎集中自動検針
OSCAM-USシステム

飛躍的に都市化が進行し、各種ビルや建物の高層化、過密化、さらに人件費の高騰などが問題となっている今日、電気・ガス・水道事業の分野では検針業務の省力化、自動化が望まれ、集中自動検針システムが着々と採用されています。このような潮流に応える当社の集中自動検針システムは、当社独自の伝送技術と中央処理装置で、完璧なまでの稼動をお約束します。

1本のケーブルで124点の集中自動検針が可能です。

当社が開発した集中自動検針システムは、ケーブル1本（0.9mm×5PCPEV銅シールド線）124点の検針を処理し、検針ラインの自動チェックも一定時間毎に行なえます。

OSCAM-USシステムの主なフィールド

- テナントビル、ステーションビル、ニュータウン、オフィスビル、工場、卸売市場
- そのほか、計量値を遠方で確認したい所すべてがOSCAM-USシステムの活躍の場です。

大崎電氣工業株式會社

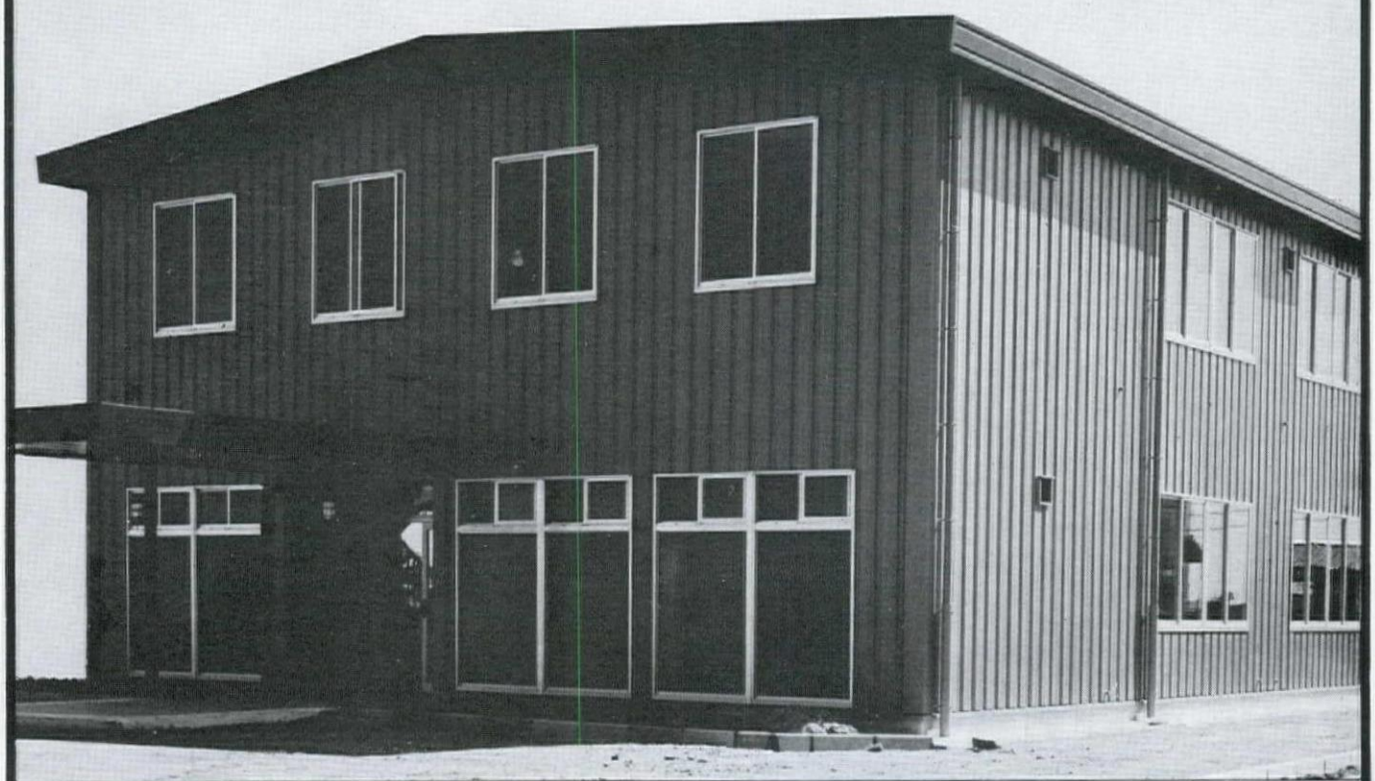
本　社　〒141 東京都品川区東五反田2-2-7
☎03(443)7171(大代表)
営業所　札幌・仙台・大阪・広島



OSCAM-USシステムのカタログをご請求ください。

スッキリ、スマート

スミフレームパック



■ 先進のシステム建築です

スミフレームパックは徹底した合理化、省力化を追求した中から生まれた先進のシステム建築。鉄骨骨組スミフレームHに屋根、壁、開口部、さらには断熱、採光、換気などの機能、設備をそっくりパックした上で、設計から現場施工に至るすべての建築をシステムアップしてお届けしています。
現場での施工は搬入された部材を組立てるだけですから、専門職を必要としません。工期の大幅短縮も可能です。

倉庫、工場、事務所など、頑丈さと美しさ、機能性が求められる建築にぜひスミフレームパックをご検討ください。

住友金属

住友金属工業株式会社

大　阪＝〒541 大阪市東区北浜5－15(新住友ビル)☎(220) 5111
東　京＝〒100 東京都千代田区丸の内1－3－2(新住友ビル)☎(282) 6111
営業所＝九州・広島・岡山・高松・名古屋・富山・静岡・新潟・北関東・東北・札幌・那覇

技術の日立

HITACHI



ビルを鮮麗に彩る、展望用エレベーター。
標準形機種をラインナップ。

展望用エレベーターのあるビル。
それだけで新鮮なイメージが広がります。

街角のデパートやショッピングストア、レジャービル、あるいはホテルで、さまざまな工夫をこらした展望エレベーターの活躍が目立ってきています。このように展望用エレベーターが一般のビルに数多く取りつけられるようになったのは、比較的最近のこと。その傾向は、今後ますます増えつつあり、用途も多彩に。ショッピングストアのオープンスペースを、よりいっそうひきたてることにも役立っています。それは、展望用エレベーターの斬新なファッション性によるもの。展望用エレベーターは、ビルを新鮮に彩り、ファンタジックに演出します。

日立は、展望用エレベーターの先駆者。
デザイン・形状のバリエーションも豊富です。

日立は、今日見られるような商業ビルに初めて展望用エレベーターを納入しました。以来今日まで、さまざまなデザインの展望用エレベーターが、ビルをファッショナブルに彩っています。その洗練されたデザインも日立ならではのもの。六角形、隅丸形の標準展望用エレベーター20機種をはじめ、特殊形としてカプセルタイプ。サークルタイプ、さらにバードケージタイプなど、バラエティも豊富です。ビルに"動きと夢"を与え、街を美しく彩る、日立の展望用エレベーター。ビルのシンボルとして、またビルのイメージ・アップに、ぜひお役立てください。

日立
展望用
エレベーター

株式會社 日立製作所

お問い合わせは 機電事業本部・エレベータ技術本部／営業本部 〒100 東京都千代田区大手町二丁目6番2号(日本ビル) 電話 東京(03)270-2111 または最寄りの支店へ
大阪(06)203-5781・福岡(092)741-5831・名古屋(052)251-3111・札幌(011)261-3131・仙台(0222)23-0121・富山(0764)33-8511・広島(082)223-4111・高松(0878)31-2111

National

エネルギーの効率利用と設備工事の合理化には、ビル空調も個別方式をおすすめします

ナショナルのビル個別空調システム

イニシアルコスト13%減 ※
ランニングコスト22%減 ※
ともに有利な個別方式

省エネルギー関係法令の公布に見るまでもなく、建築物にとっての省エネ対策——特に空調エネルギーの効率化は、ビル建築計画にとって重要テーマです。

住宅と異なり、ビル空調に個別方式が主流となりえなかったのは、設備費と機能の対比（コスト・パーフォーマンス）や、工事・メインテナンスに問題があったようです。

これらの問題を解決したのがナショナル・ビル個別空調機——大幅なコストダウンを可能にした省エネタイプの個別空調システムです。

※弊社計算による

多機能で、しかも簡単な操作
工事の合理化と省スペースにも

冷房・暖房・換気・除塵・外気冷房・熱回収など、ビルの空調に必要なほとんどの機能をコンパクトにまとめていますが、負荷に応じた冷暖切替を自動化していますので、操作はまったく簡単で特殊な技術を必要としません。また個別方式ですから、冷凍機・ボイラーなどの大型機器や、複雑なダクト工事が省略できますので、工事の省力化、ビル本体の省スペース化にも役立ちます。

あらゆる面で有利なナショナル・ビル個別空調システムを、皆様の設備計画・設計に、ぜひご採用ください。

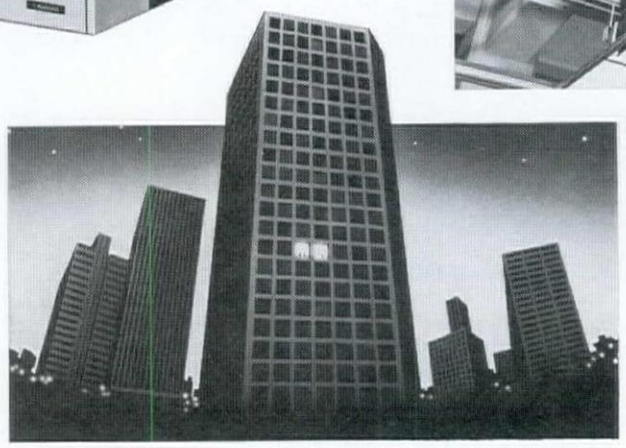


エアーバランサー

室内の汚れた空気の強制排気が可能な、全電気ヒートポンプ方式。

- 大口径シロッコファンにより高静圧を得ています。外風の影響を受けず安定運転が可能。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 半導体ヒータを補助として採用、暖房の立上り特性がよく、吹出温度を自動的に一定化。
- 2段サーモスタットによる節電運転。
- 白を基調としたシンプルデザイン。



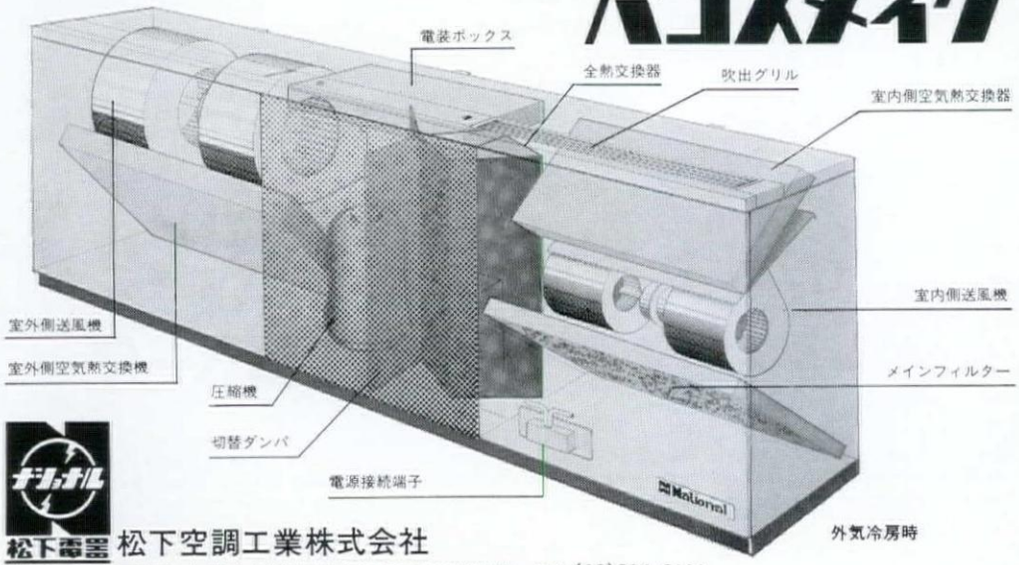


ヒートバランサー

天井裏の空気を熱源とする、天井埋込型空冷ヒートポンプ方式。

- 内部で発生するドレン水を、冷房時は冷媒凝縮熱、暖房時はヒーターを利用して気化処理するドレン処理装置を内蔵。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 2段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 照明器具との結合を考えたコンパクトな設計。

パコスメイク

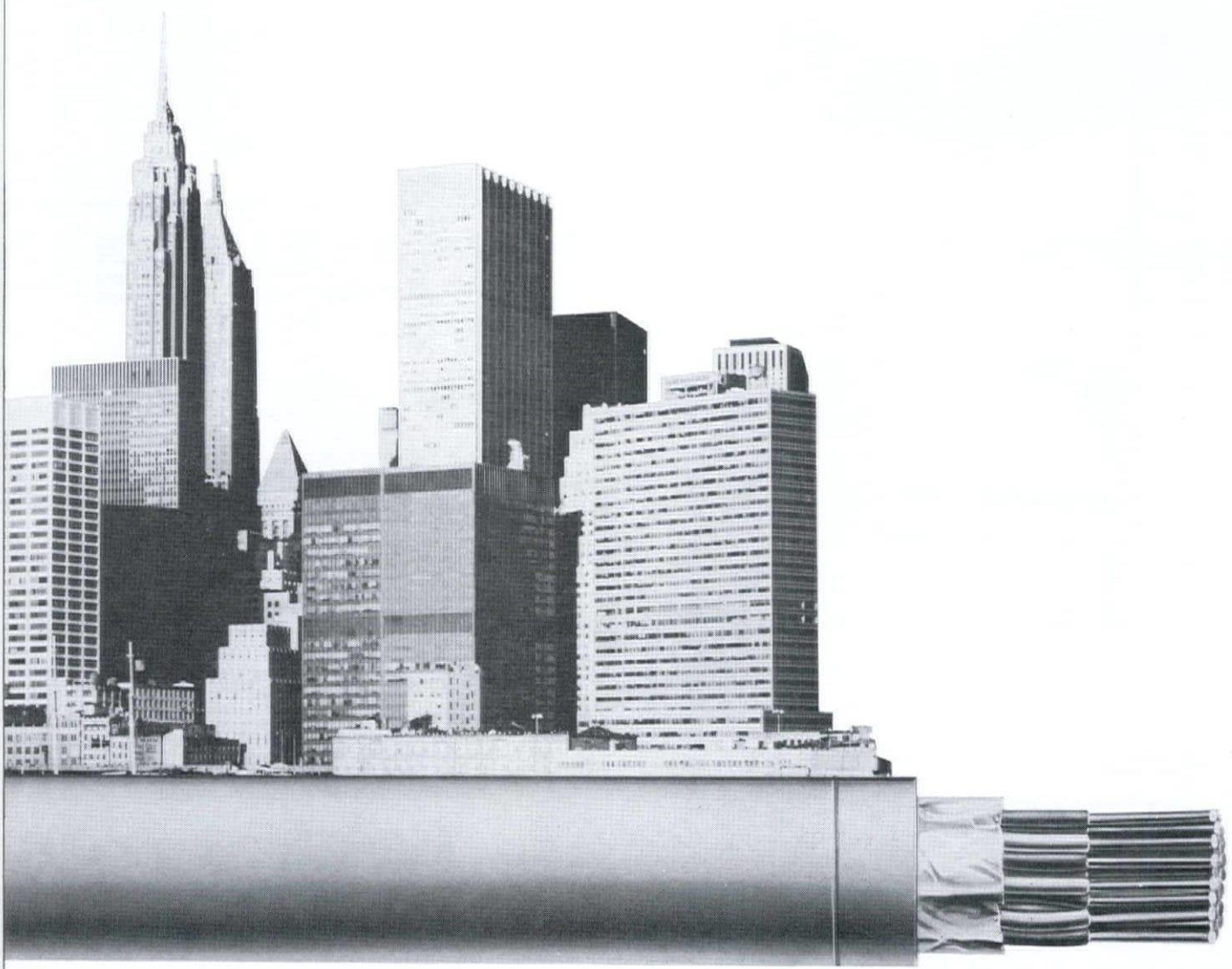


熱交換により排気熱を回収、エネルギーを有効に利用する全電気ヒートポンプ方式。建築モジュールに合わせた施工により、内・外観ともにシンプルに納まるスルー・ザ・ウォールタイプ。

- 全熱交換器による冷・暖房の排気熱を回収。
- 低入力、低騒音を可能にしたインジェクションタイプのロータリーコンプレッサ。
- 高圧圧力調整弁の採用で、高い外気温度での暖房運転が可能。
- 3段サーモスタットによる冷房・暖房切替の自動化。
- 高性能カートリッジ形フィルター内蔵による高い空気清浄力。
- 白を基調としたシンプルデザイン。

ナショナル
松下電器
松下空調
松下空調工業株式会社
〒536 大阪市城東区今福西6丁目2番61号 TEL(06)934-2131

ビルにも神経があります。



古いビルも最新のビルも確実な電気工事で支えています。

ビルにとって電気系統の働きは、人体にはりめぐらされた神経の働きに似ています。外部の情報を収集したり、整理して送るなど、まさにコントローラーの役目をもっているからです。とくにこれからの高層ビルは、複雑な建築技術が必要なだけに、ビルの中枢神経といわれる電気系統の安全性、合理性、経済性などは、ビルがより良く機能するうえで欠かすことのできない条件です。私ども弘電社は1本の配線にも、細心の注意を払って確実な設計、施工を行なっています。

電気工事のパイオニア

株式会社 弘電社

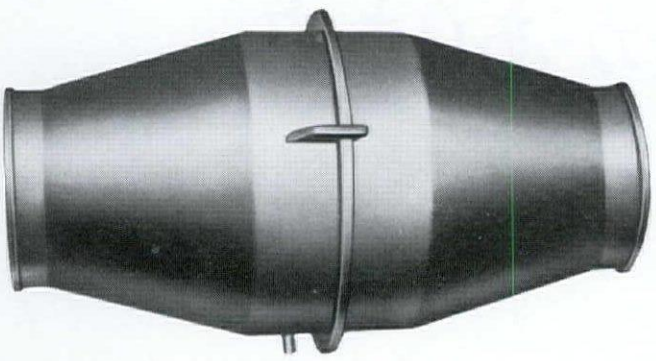
取締役社長 松井 睦

〒104 東京都中央区銀座6丁目14番13号

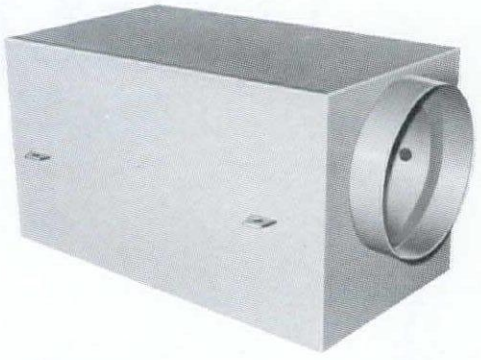
TEL 03(542)5111

低騒音を追求する……

チューブラーファン-TFM型

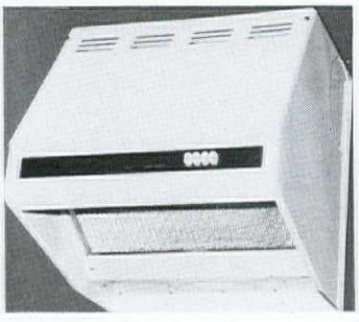


消音ボックス付-LL型



レンジ用フードファン

AR-35TBL-Ⅰ
AR-35TBL-Ⅱ



ベントキャップ（ダンパー付）

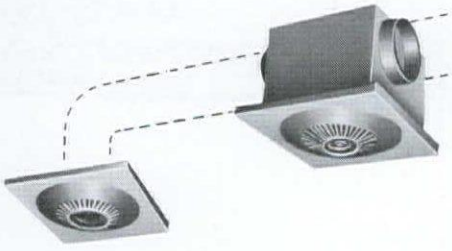
BC型
FBC型



BLマーク証紙
品名 換気システム
この商品は建設大臣が優良住宅部品として認定したものです。
財団法人 住宅部品開発センター

低騒音のチューブラーファンを組込んだ

天井埋込扇　STF15G型



STF20G型



ASAHI Domy

旭電業株式会社

カタログご請求下さい。

本　　社	埼玉県浦和市南浦和2－12	電話 0488（82）2288(代)	〒336
東京事務所	東京都中央区八重洲2-11-2(城辺橋ビル4F)	電話 03（273）1981(代)	〒103
大阪営業所	東大阪市長田東5－44新栄ビル	電話 06（744）1882	〒577
埼玉工場	埼玉県熊谷市大字小曽根字北浦599	電話 0485（24）1196(代)	〒360



石の心と樹々の精に，

新たなる生命を語らう，自然の造形

岩城造園株式会社

取締役社長　岩城亘太郎

取締役副社長　岩城庄次郎

東京都世田谷区深沢8丁目9番12号　TEL(703)1311

たしかに、そして堅牢に。

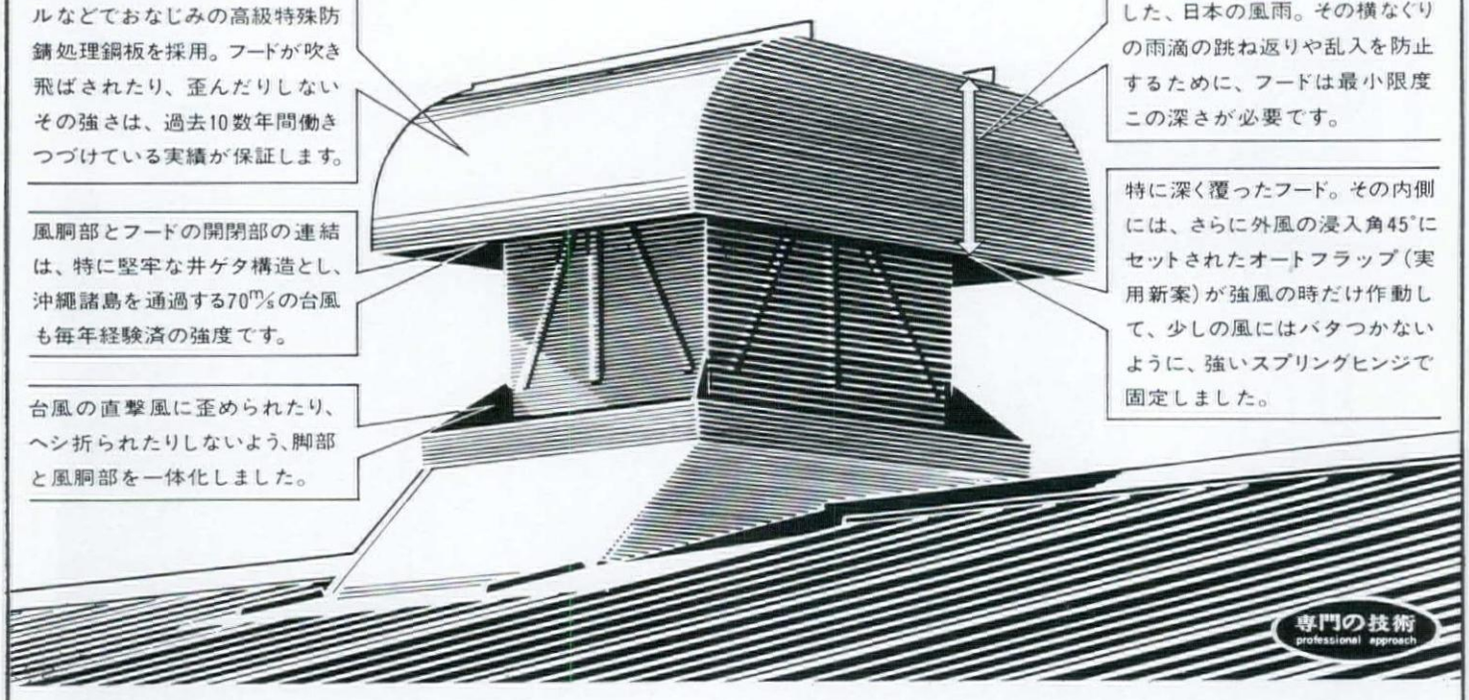
洗濯機、冷蔵庫そしてガードレールなどでおなじみの高級特殊防錆処理鋼板を採用。フードが吹き飛ばされたり、歪んだりしないその強さは、過去10数年間働きつづけている実績が保証します。

風胴部とフードの開閉部の連結は、特に堅牢な井ゲタ構造とし、沖縄諸島を通過する70㍍/秒の台風も毎年経験済の強度です。

台風の直撃風に歪められたり、ヘシ折られたりしないよう、脚部と風胴部を一体化しました。

これまで10数年にもわたって経験した、日本の風雨。その横なぐりの雨滴の跳ね返りや乱入を防止するために、フードは最小限度この深さが必要です。

特に深く覆ったフード。その内側には、さらに外風の浸入角45°にセットされたオートフラップ（実用新案）が強風の時だけ作動して、少しの風にはバタつかないように、強いスプリングヒンジで固定しました。

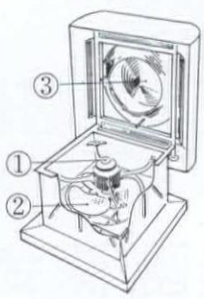


日夜風雨にさらされるルーフファンにとって、耐久性はまず第一の条件です。材質も構造もきわめて強度のものが要求されてきます。——カマクラはこの問題ととり組み10数年。現在のこのルーフファンを生み出しました。高級特殊防錆処理鋼板を用いた全溶接仕上げで、塗装も万全。すべてが厳選された材料とすぐれた製作技術から生まれた堅牢な構造です。全国70,000もの事業所にお納めしてきたルーフファンは、今も変らず活躍中です。

産業用強制換気装置 カマクラ ルーフファン

低騒音N型ルーフファン

低騒音N型ルーフファンは、①多極モートルの採用②特別設計の3枚羽根の採用③新機構のケーシングにより、音の感覚量を大幅に低下させるとともに、豊かな風量を保ちました。



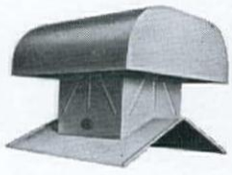
（上図はフードを90°開いた図です。）

FRP製ルーフファン



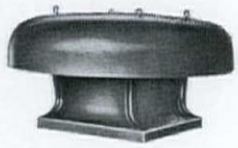
強化プラスチック製のルーフファン。軽量、耐薬品性、耐候性に優れた特性を発揮します。

畜舎用ルーフファン



標準型ルーフファンを畜舎用として軽量化したルーフファン。屋根の傾斜に合わせた直接取付型です。

RP型ルーフファン



FRP製ルーフファンをより軽量化したルーフファン。軽量鉄骨構造の建物、ビニールハウスなどに使われています。

株式会社 鎌倉製作所

●カタログ・換気情報誌ご請求ください。

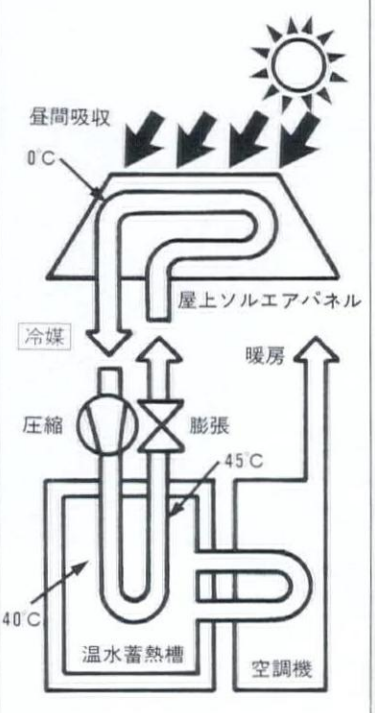
本　　社　東京都港区北青山2－7－11 〒107 TEL(03) 403-4311㈹
大阪支店　大阪市南区谷町9－43 新谷九ビル 〒542 TEL(06) 768-0345㈹
名古屋支店　名古屋市千種区仲田本通4-22御幸ビル 〒464 TEL(052)733-2811㈹
広島支店　広島市中区西十日市町8－9新十日市ビル 〒733 TEL(0822)91-4771㈹
福岡支店　福岡市博多区美野島3-15-6大久ビル 〒812 TEL(092)441-6460
仙台支店　仙台市小田原2－2－43 佐幸ビル 〒983 TEL(0222)57-0319
小山営業所　栃木県小山市駅東通り2－30－14 〒323 TEL(0285)23-7847
富山営業所　富山市元町1－3－22 矢郷ビル 〒930 TEL(0764)91-2231

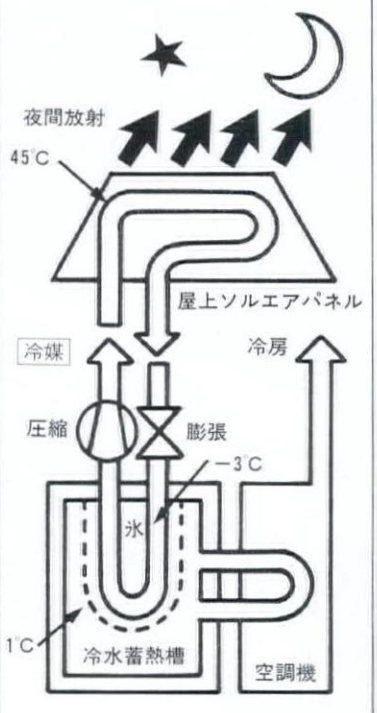
さらに太陽熱利用が一歩進みました。

ソルエア　ヒートポンプシステム　'82省エネルギー優秀製品賞受賞

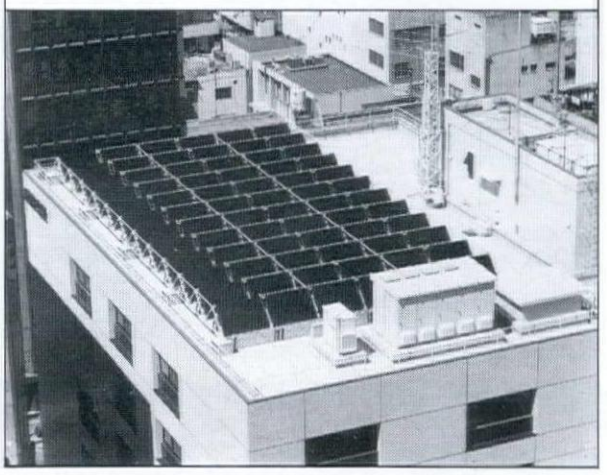
ソルエアヒートポンプは、太陽熱の得られない日(雨、曇、雪)でも外気から集熱することができるソルエアパネルと、夜間放熱で氷を造る氷蓄熱システムなどを有機的に結びつけた、太陽・空気熱源ヒートポンプ方式の画期的な省エネルギー型冷暖房システムです。

暖房時〔冬〕	冷房時〔夏〕
暖房時のソルエア ヒートポンプシステムは太陽熱と空気熱を吸収して、自然エネルギーを建物内へ導き入れます。	冷房時のソルエア ヒートポンプシステムは、昼間の電力消費のピークを避けて、夜間に放射冷却を利用して屋外へ放熱します。

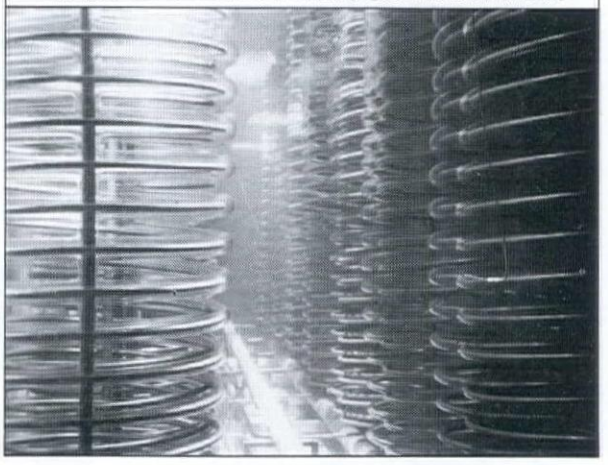




建物屋上　ソルエアパネル(太陽熱集熱器)



アイスバンク(氷蓄熱槽)
夏期に蓄熱槽内に氷を生成して冷熱を貯えます。
これにより蓄熱槽スペースを大巾に小さくすることができます。
また電力のピークシフトによって、夜間電力の利用が図れます。



ソルエア ヒートポンプシステムの特徴

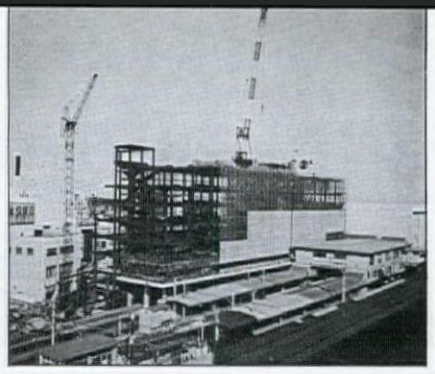
- ■ 省エネルギー　太陽熱空気熱を有効に利用し、大巾に化石燃料を節約します。
- ■ 環境保全　全電気方式ですから環境を汚すことなく屋外騒音もありません。
- ■ 経済的　従来のソーラーシステムより設備費がかからず、高効率の運転が可能です。
- ■ 広い適用性　太陽熱の得られない気象条件下や夜間でも集放熱することができ、寒冷地での実証もされました。(補助熱源は不要です)

実績

● 鹿島建設四国支店ビル　高松市1981　● 志木ニュータウン駅前総合ビル(施工中)

鹿島建設
KAJIMA CORPORATION
本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7
お問合せ先 建築技術部(03)404-3311
建築設計本部(03)344-2111











あらゆるニーズにお応えできる建設の

総合商社

●建設資材

鉄鋼及び加工製品・仮設材・セメント・生コン・コンクリート二次製品・防水養生剤・内外装材 etc.

●建設工事

鋼管杭・H形鋼・シートパイル・PCパイル各種打込工事・現場造成杭工事・ウエルポイント薬液注入工事・内外装仕上工事・サッシ・シャッター工事・パーティション工事・耐火被覆工事・断熱吸音工事・ALC材工事 etc.

●建設機械

運搬機械・クレーンその他・基礎工事用機械
せん孔機械及びトンネル掘進機・締固め機械
骨材生産機械・コンクリート機械・空気圧縮機・送風機・ポンプ・原動機・各種施工機械・完成部品及び特殊機械器具 etc.

●設備機器・工事

空調設備機器・衛生設備機器・電気設備機器
防災設備工事・厨房設備工事・昇降設備工事
駐車設備工事 etc.

●インテリア

家具・応接セット・スチール棚・保管庫・移動書庫・ロッカー・施設用品 etc.

●輸入業務

マグネット磁石応用機器及び振動機器（米国エリーズ社提携）スリップ　トルクコンベヤ及びスインガー（米国シャトルワース社提携）天然氷晶石・ニュージランドカゼイン etc.

●一級建築士事務所

計画・基本設計・実施設計・工事管理・構造物のチェックと対策 etc.

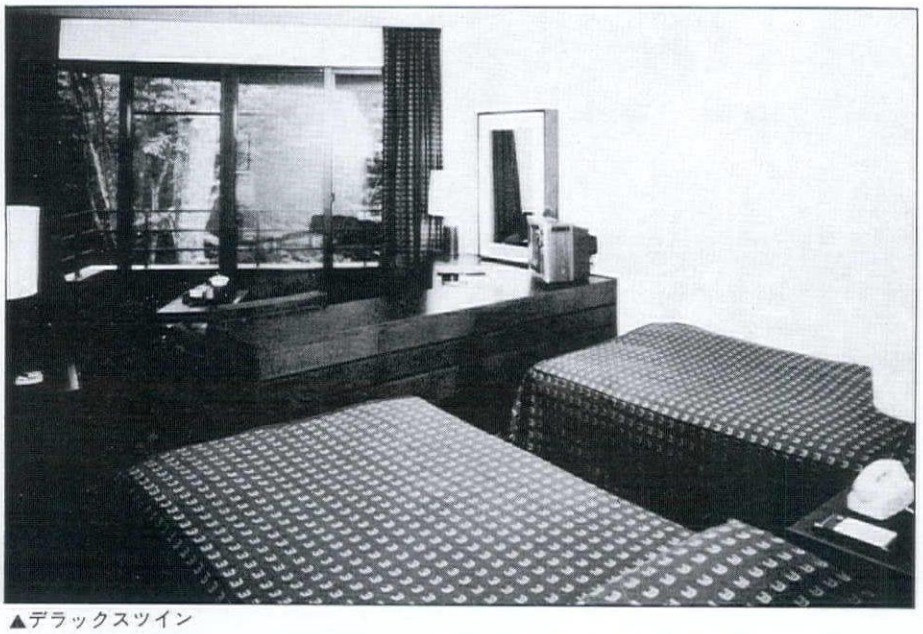
大興物産株式会社

会長　渥美健夫　社長　石川 誠

本　社	〒160 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル 35F	☎(03)348-1351(大代)	
名古屋	〒460 名古屋市中区新栄町2－14	☎(052)962－5741代	
大　阪	〒540 大阪市東区谷町5－27	上野ビル	☎(06)762－5661代
札　幌	〒060 札幌市中央区北3条西3丁目	三井ビル	☎(011)231－6841～2
仙　台	〒980 仙台市二日町1－27	鹿島建設㈱内	☎(0222)61－4141～3
北　陸	〒950 新潟市万代1－3－4	鹿島建設㈱内	☎(0252)47－2286～7
横　浜	〒231 横浜市中区弁天通り3－42	第3須賀ビル	☎(045)212－3925
広　島	〒730 広島市中町6－13	鹿島建設㈱内	☎(0822)49－9221
高　松	〒760 高松市瓦町2－7	冠野ビル	☎(0878)34－7070
福　岡	〒812 福岡市博多区博多駅前3-12-10	鹿島建設㈱内	☎(092)441－2624～5

軽井沢

HOTEL KAJIMA NO MORI



▲デラックスツイン



▲ 鹿島ノ森ホール



▲テニスコート（全天候型コート）



▲コンチネンタルルーム



▲ゴルフクラブ（60年の伝統を誇る旧軽井沢ゴルフクラブ）

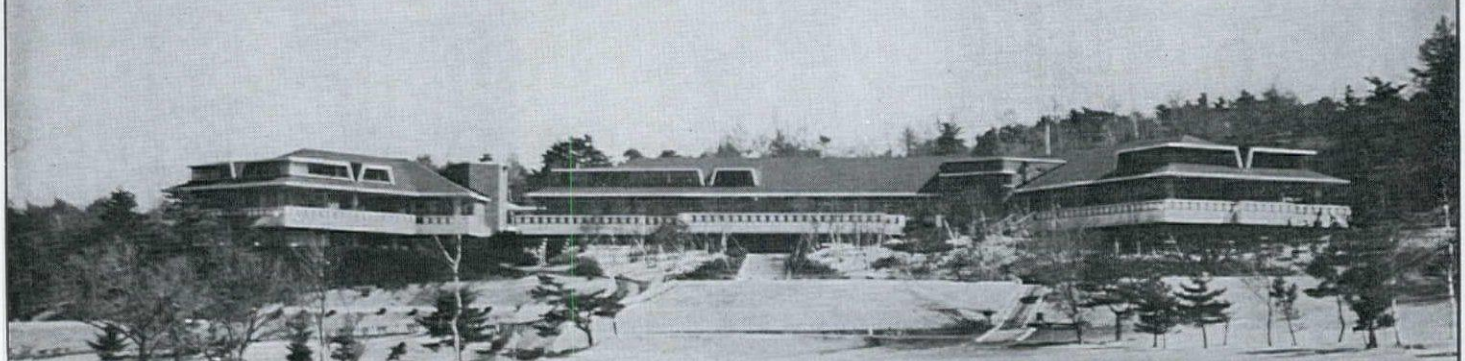
Seminar & Golf・Tennis

株式会社 ホテル 鹿島ノ森

ホテル　オークラ チェーン

●ご予約・お問い合せ：ホテル鹿島ノ森予約係 ☎03-478-6220　現地 ☎02674-2-3535㈹ TELEX 3328676

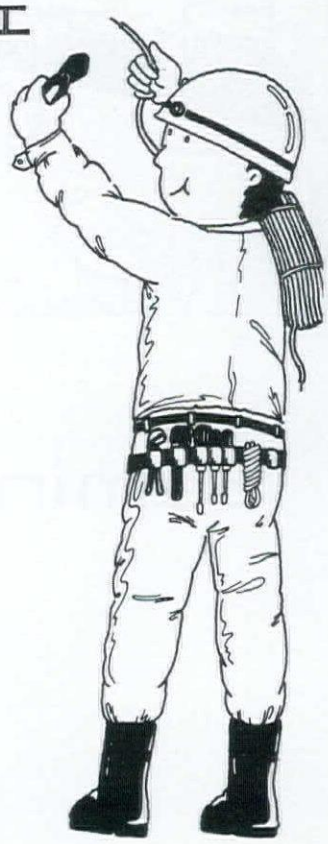
豊かな人間生活と
明かるい光の創造に



中立電気株式会社
取締役社長　斉藤　勲
本　社　東京都新宿区新宿1丁目13番12号
電話 東京(356)2511(代表)
吉田営業所　富士吉田市下吉田町2005番地
電話 吉田(0555)2−3258番(代表)
大月出張所　大月市大月町2丁目10番地14号
電話 大月(05542)(2)1013番

ROKKO
電気設備工事　設計／施工

“ろっこう”は
「信頼」にお応えして
「満足」をお届けします。



六興電気株式会社
取締役社長　長江健太郎
東京都港区芝5−26−30
TEL (03)452−5311大代表



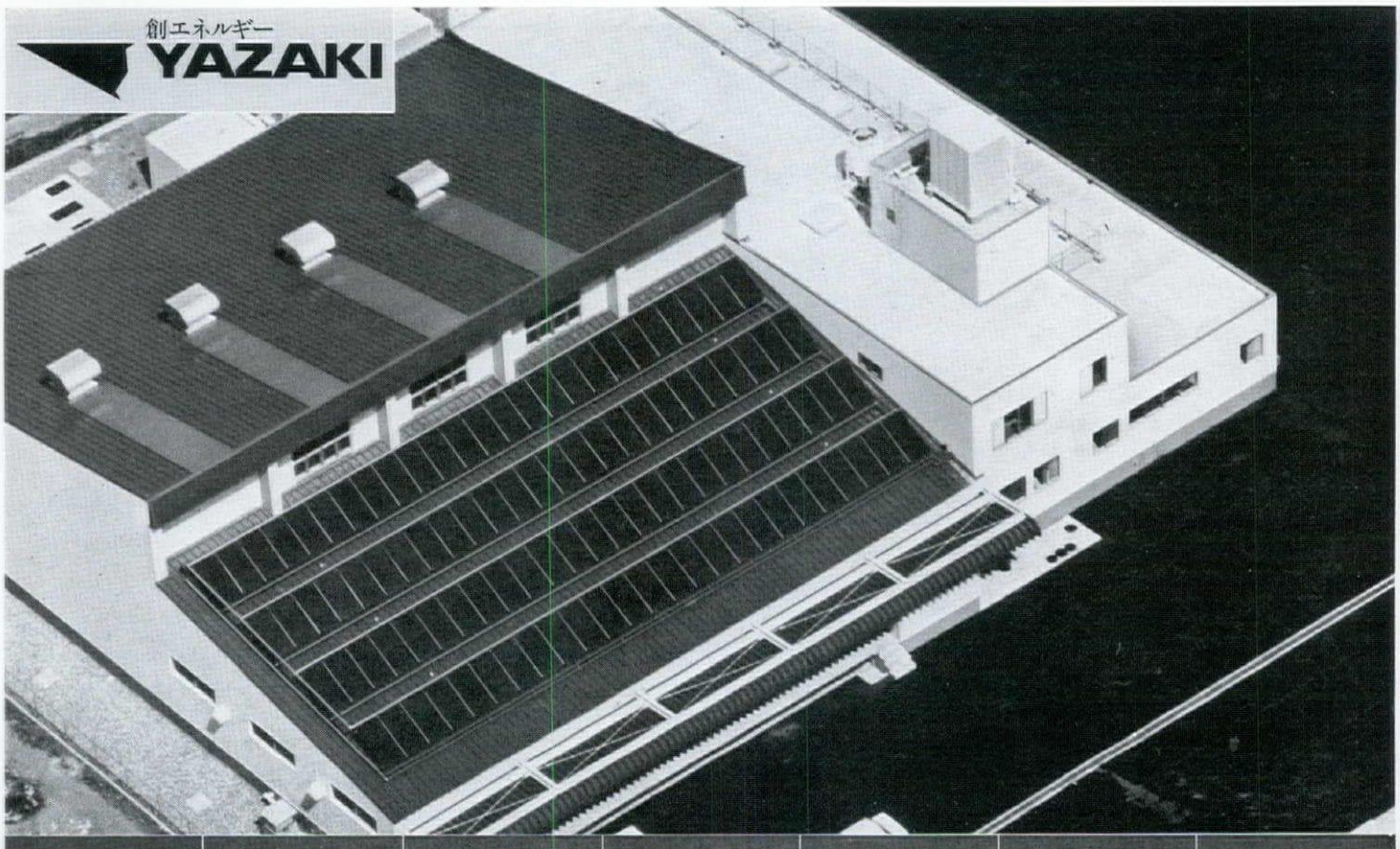
協和銀行本店

「ようこそ、協和へ」
街角から、笑顔のごあいさつ。

《協和銀行》は全国230余の街角から、笑顔のごあいさつをいたします。
ふだんの暮らしのアドバイザーとして、親身のお世話をいたします。
この一年を大切に、「ようこそ、協和へ」、お立寄りください。

いつもごいっしょ
協和銀行

創エネルギー
YAZAKI



調理用に、食器洗い用に、毎日50~60m³のお湯を給湯。

入間市立学校給食センター（埼玉県）

1日あたり6000食もの食事をまかなう給食センターで活躍しています。

この学校給食センターでは、入間市にある公立小学校の給食、6000食分を一手に引き受けています。調理用、食器洗い用と、大量のお湯が使われますが、ソーラーシステムによって50℃のお湯を毎日50～60m³供給する体制を整えています。昭和56年3月のシステム導入以来、稼動実績は良好で、年間平均の太陽依存率は約40%～50%の見込みです。（太陽集熱器〈ブルーパネル〉100枚／蓄熱槽15m³／補助熱源・灯油焚蒸気ボイラー）

矢崎のソーラーシステムは太陽依存率70%以上。この性能が、太陽熱の利用普及時代をつくりつつあります。

昭和49年7月に実験ソーラーハウスを完成。世界初の太陽熱浴房の実験に成功して以来、矢崎はすでに数多くのソーラー施設へ機器を納入してきました。さらに、実用実験を重ねるとともに、スーパーブルーパネルの開発など一連の実績をふまえて、実用性を確固としたものに高めています。いま、その性能は「太陽依存率70%以上」。晴れの日なら100%太陽熱だけで冷房がおこなえ、冬には暖房もできる。冷暖房、給湯に必要な年間燃料の70%以上が太陽熱でまかなえる。他の追随をゆるさないこの実用性能が、太陽エネルギーの本格的な利用時代をつくりつつあります。

資料請求券
SD・7・25

矢崎総業株式会社
本社 〒108東京都港区三田1-4-28三田国際ビル17F ☎03(455)8811

スペースデザイン

SD

第215号
昭和57年8月号
特別定価＝2,200円
年間直接購読料＝18,000円（送料込み）

編集長：
長谷川堯子
副編集長：
伊藤公文
編集スタッフ：
森徹
吉田雅彦
相川幸二
浜地三千世
デザインエディター：
羽原肇郎

発行者：
河相全次郎

発行所：
鹿島出版会
〒107
東京都港区赤坂六丁目5番13号
電話（03）582-2251（代）
振替 東京 6-180883 番

印刷：製本
凸版印刷株式会社
〒174
東京都板橋区志村1-11-1
電話（03）967-1111（代）

取次店：
東販・日販・大阪屋・栗田出版販売・誠光堂
鈴木書店・西村書店・中央社

■特集＝渦巻くポスト・モダニズム——Young American Architects 3–142

エリック・モス：表象としての建築 松永安光 14

カリフォルニア・ドリーミン' 竹山聖 32–33

タフト・アーキテクツ：テキサスの中のもうひとつのスケール 沼辺国夫 44–45

フライデイ・アーキテクツ：異化の流れの中で 安山宣之 56–57

アメリカ建築の新しい波と古い伝統 片木篤 66–69

コゥター／キム：都市の文脈の解読 渡辺真理 122

イメージ・パラダイムの回転ドア 彦坂裕 134–135

対談：アメリカの若い建築家達は今... 竹山実×石井和紘 136–141

カリフォルニア： 4–13,15–31
E. O. モス，モルフォシス，フィッシャー／ロバーツ，R. フィルソン，B. フェルプス，エース・デザイン，他
タフト対フライデイ： 34–43,46–55
タフト・アーキテクツ，ロネッカー／パパデメトリオ，フライデイ・アーキテクツ
クラシカル・アメリカ： 58–61
J. プラトー，A. グリーンバーグ
シカゴ： 62–65
ハモンド／ビービィ／バブカ，クルエック／オルセン，ブース／ハンセン
多彩色のインテリア： 70–79
フォアサンガー／ミルズ，アビイ／ドリップス
ロフトのインテリア： 80–91
ルービン／スミス-ミラー，G. ザンボニーニ，M. シゴレ，リブゼイ／ローゼンスタイン，K. シュローダー，サルトゴ／シュヴァルティング
住宅： 92–115
R. レルナー，デュアニー／P. ジバーク，R. コルマン，P. ウィルソン，マーティン／ジョーンズ，L. ヴィンシアレッリ，R. オリバー
P. ホブナー，ケルバウ／リー，T. ウィリアムズ，クリメント／ハルスバンド，T. ウッド，S. コーエン
都市の文脈：コゥター／キム，シュヴァルツ／シルバー，G. アレン，他 116–121,123–127
想像の建築：R. フェリ，L. ウッズ，G. フィオレンツォーリ 128–133

Serial Essay——2001年のSpace Design ⑧ 過去，現在，未来——歴史の中で考える 早川和男 143–144

流政之の《北追岬》 小川熙 145–148

海外建築情報 クラフトマンシップ・NOW 岡田新一＋ARCOLUMN編 161–166

国内建築ノート いま，つまらないと思えること グルッポ・スペッキオ編 169–174

表紙＝（上から）E. モス，E. モス，T. ウィリアムズ，P. ウィルソン，F. フィッシャーの作品

Space Design:

SD

A Monthly Journal of
Art and Architecture
No. 215
August 1982

Chief Editor:
Aiko Hasegawa
Editor:
Kobun Ito
Associate Editors:
Toru Mori
Masahiko Yoshida
Koji Aikawa
Michiyo Hamaji
Design Editor:
Shukuro Habara

Publisher:
Zenjiro Kawai

Published by
Kajima Institute Publishing, Co. Ltd. ©
5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,
Tokyo, 107 Japan
Telephone: (03) 582–2251
Printed in Japan

★
This copy: $12.00

Subscription price
$90.00 a year
$170.00 two years
(including shipping)
Order form: pp. 177–178

■SPECIAL FEATURE

The Whirlpool: Post-Modernism——Young American Architects 3-142

Eric Owen Moss: Architecture as Representation, *by Yasumitsu Matsunaga* 4

California Dreamin', *by Kiyoshi Takeyama* 32–33

Taft Architects: Another Scale of Texas, *by Kunio Numabe* 44–45

Fly Friday, *by Noriyuki Yasuyama* 56–57

New Waves and Old Traditions in American Architecture, *by Atushi Katagi* 66–69

Koetter / Kim: Reading the Urban Context, *by Makoto Watanabe* 122

The Revolving Door of the Image Paradigm, *by Yutaka Hikosaka* 134–135

Dialogue: Young American Architects Now, *by Minoru Takeyama and Kazuhiro Ishii* 136–141

California: 4–13, 15–31
E. O. Moss, Morphosis, Fisher / Roberts, R. Filson, B. Phelps, Ace Design, etc.

Taft vs. Friday: 34–43, 46–55
Taft Architects, Lonnecker / Papademetoriou, Friday Architects

Classical America: 58–61
John Blatteau, Allan Greenberg

Chicago: 62–65
Hammond / Beeby / Babka, Krueck / Olsen, Booth / Hansen

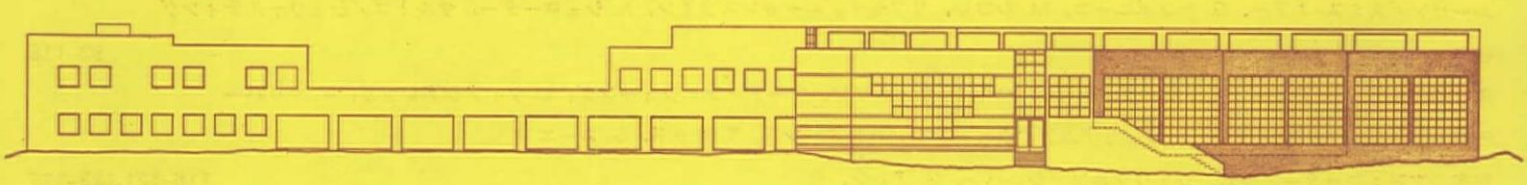
Polychrome Interiors: 70–79
Voorsanger / Mills, Abbey / Dripps

Loft Scene: 80–91
Rubin / Smith-Miller, G. Zambonini, M. Cigolle, Livesey / Rosenstein, K. Schroeder, Sartogo / Schwarting

House & Housing: 92–115
R. Lerner, Duany / Plater-Zyberk, R. Korman, P. Wilson, Martin / Jones, L. Vinciarelli, R. Oliver
P. Hoppner, Kelbaugh/Lee, T. Williams, Kliment/Halsband, T. Wood, S. Cohen

Urban Contexts: 116–121, 123–127
Koetter / Kim, Schwartz / Silver, G. Allen, etc.

Imaginary Architecture: 128–133
R. Ferri, L. Woods, G. Fiorenzoli



YWCA, by Taft

●SERIAL ESSAY——Space Design in 2001 [8] 143–144
Thinking in the Context of Histoy: Past, Present and Future, *by Kazuo Hayakawa*

●TOPICS 145–148
Masayuki Nagare in Hokkaido, *by Hiroshi Ogawa*

●EMINENT WORKS ABROAD 161–166
Crafts'manship Now——compiled from foreign architectural magazines, *by Shin'ichi Okada and ARCOLUMN*

●DOMESTIC ARCHITECTURAL NOTES 169–174
What Today Seems Trifling, *by Gruppo Specchio*

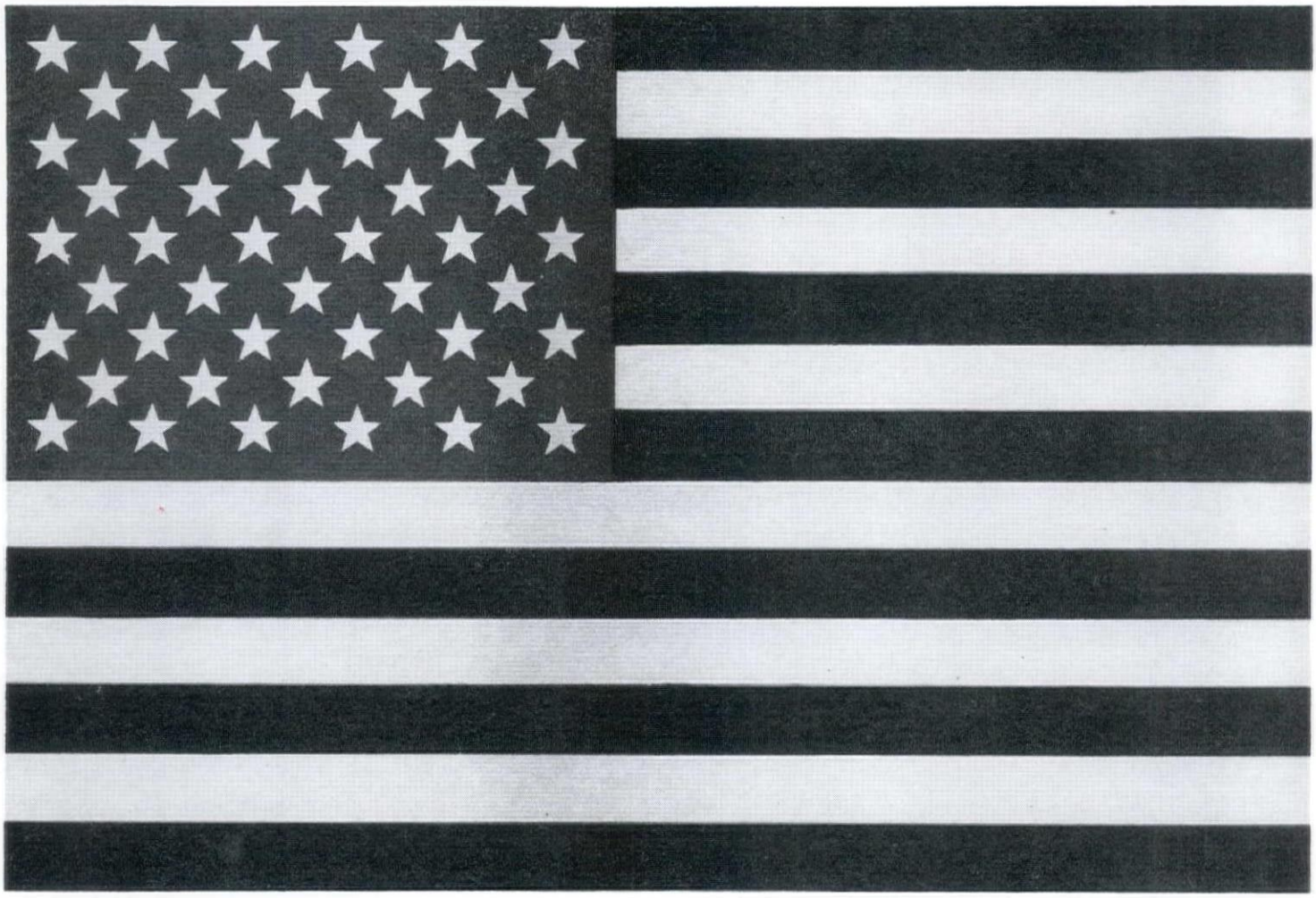
Cover=Projects *by E.O. Moss, E.O. Moss, T. Williams, P. Wilson, and F. Fisher*

特集＝

渦巻くポスト・モダニズム

Special Feature＝

Young American Architects



ここに紹介する，アメリカの若い建築家たちの作品は，
あるものは鋭い閃光を，あるものは鈍い輝きを放ちながら，
天空に広く舞い散って，魅惑的な光景をかたち作っている．
しかし，それは
冷ややかに静止しているのではなく，
熱っぽく変動しているのである．
アメリカの建築は今，連綿と続く古い伝統と，
ポスト・モダニズムの新しい波との間で，激しく動いているのだ．
その変動の後には，何らかの定まった様式が確立されるのか，
それとも，底知れぬ混迷が待ち受けているのだろうか．

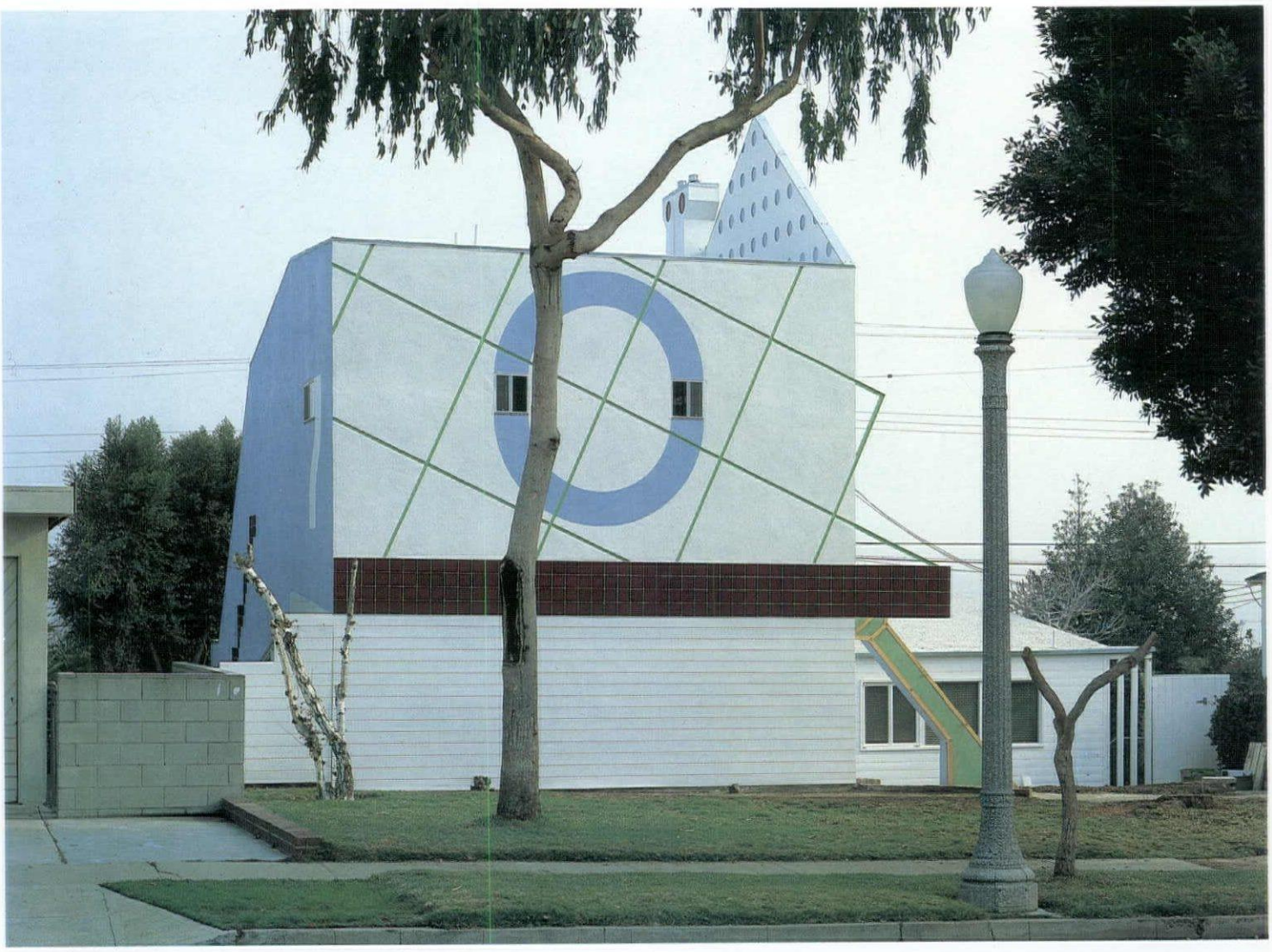
The works of the young American architects we have introduced here are dazzlingly diverse, and the uninhibited flights of creativity they embody is both exciting and pleasing. The ardor and impulse to dramatic change they represent is only natural, however, for the world of architectural design in the Unied States is now at a turning point;
it is in the throes of moving from the rigid patterns of established tradition to the new horizons of Post Modernism.
Will this change lead to the emergence of a new, identifiable style of architecture?
Or is it simply the beginning of a period of even more profound upheaval?

Eric Owen Moss

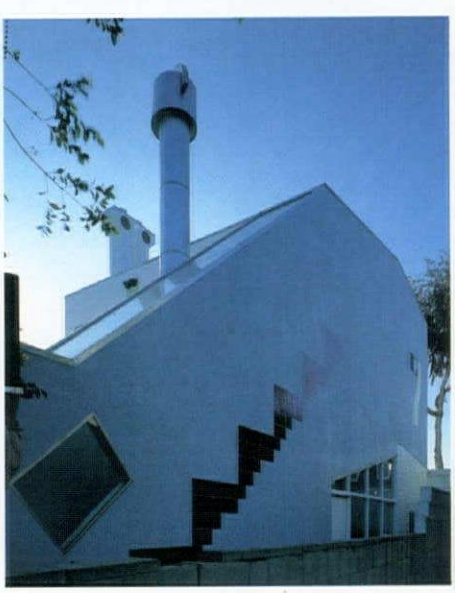


エリック・オーエン・モス：1943年生まれ.
カリフォルニア大学バークレー校とハーバード大学で学ぶ.
1976年より自らの事務所を開設して，今日に至っている.

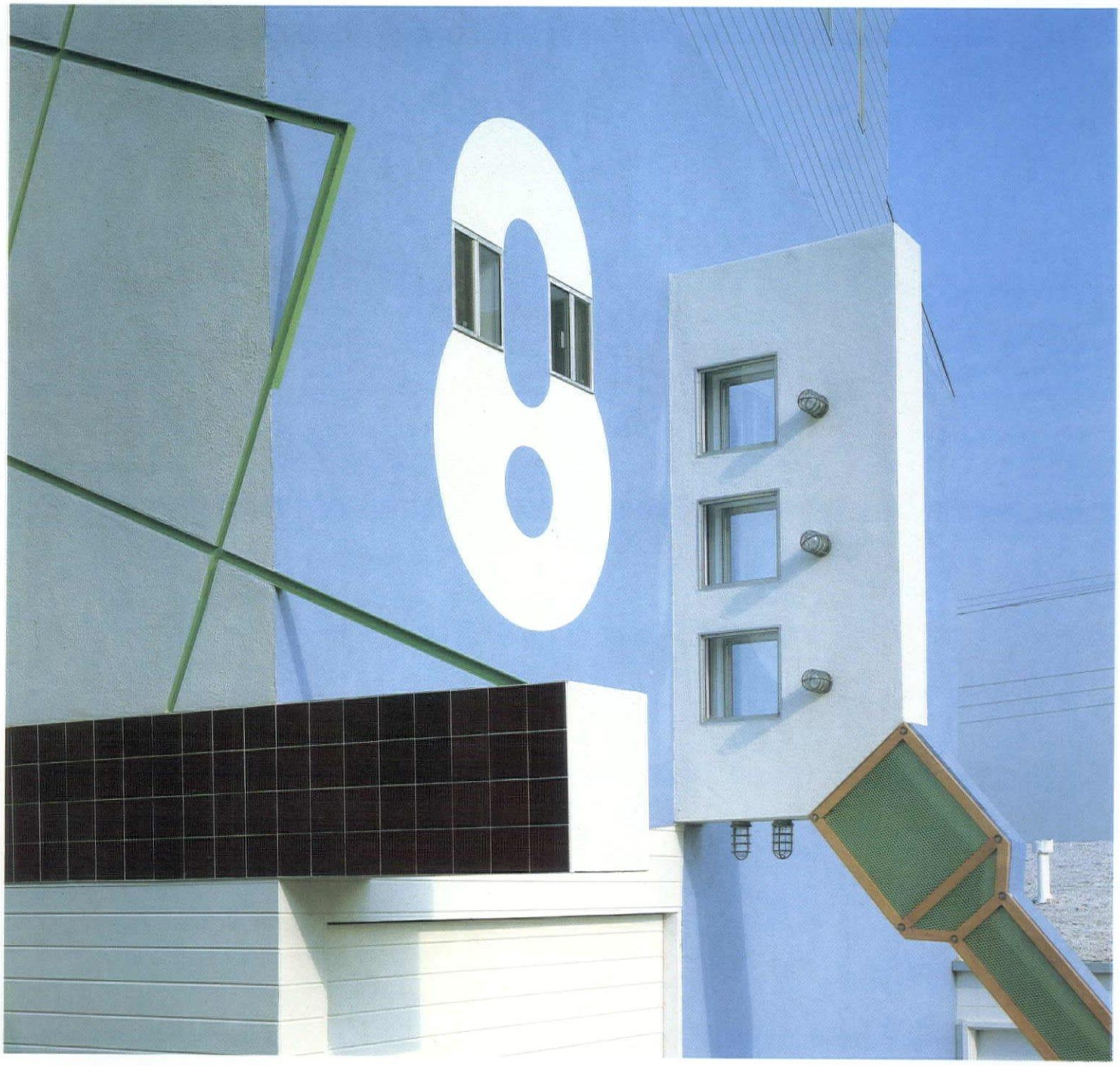
708 House *Pacific Palisades, Ca. 1981*

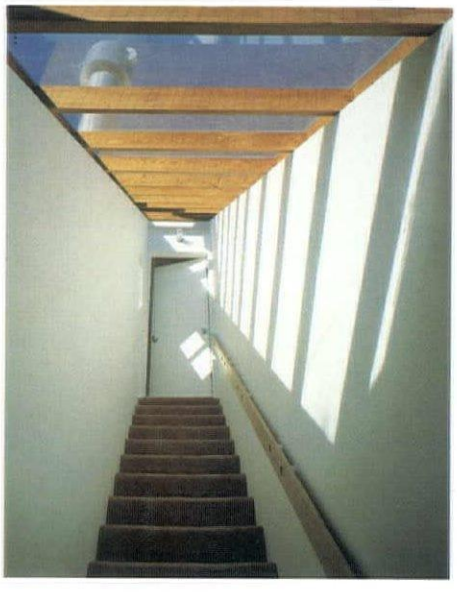


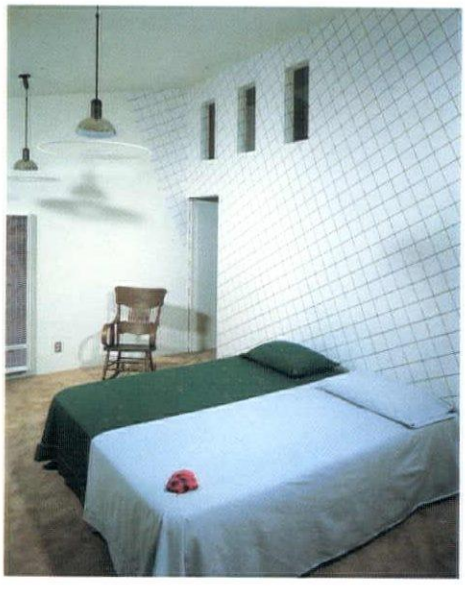


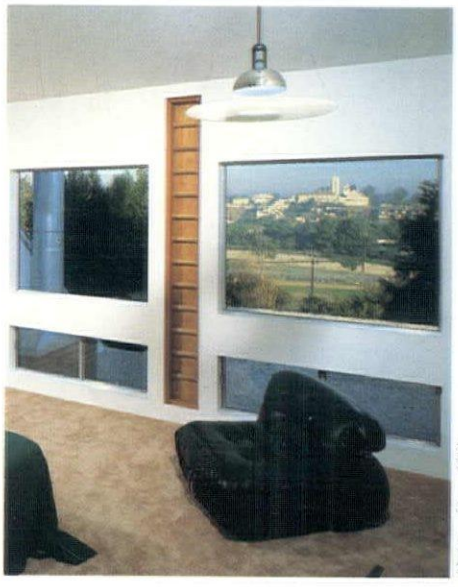


photos=Doug Hill

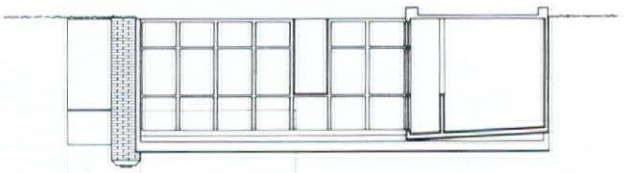


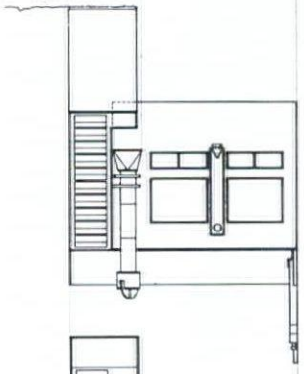




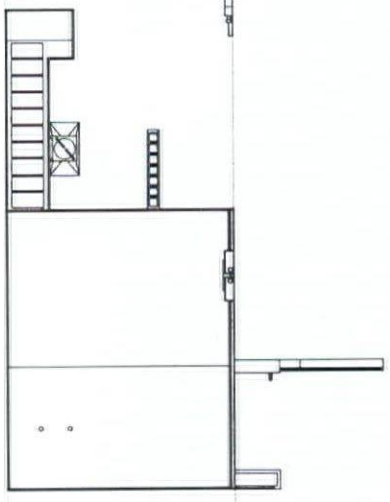


photos = Doug Hill

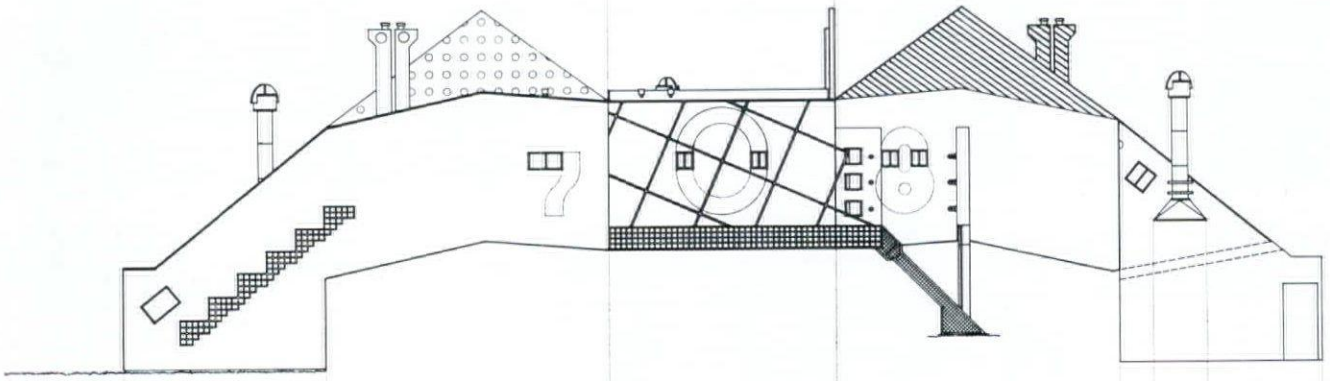


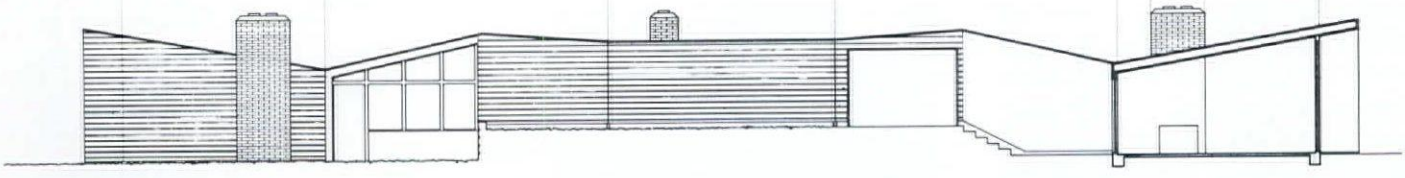


立面図　elevation



屋根伏図　roof plan





立面図　elevation

1948年に建てられた住宅に対する約56m²の増改築である。　以下は数項目の批評的ノートである。

1. フライイングバットレス：エントランスには，一方がもう一方の上にまたがったふたつの相似形から成るバットレスがある。　第1のものは木製とプラスター仕上げで青に塗装されている。　もうひとつは，緑に塗られた穴あき鉄板が樫材のフレームに取り付けられたものである。　玄関路から少し離れて立つこのバットレスは，建築物の構造の役割，モダニズムが神聖視してしまった役割を，控え目に戯画化している。

2. フライイングドア：バットレスは，2階からはね出している大きな角型のウィンドーボックスにむかって傾いている。　このボックスは壁面を越えて迫り出す（内部の間仕切りというよりもむしろ）ドアを収納している。　グラフィック・パネルがこのドアに貼られていて，ドアがボックスの隙間に押し込まれると，そのグラフィックが，（約46cm角の小窓を通して）通行人や，ボックスとバットレスの下の玄関路を出入りする人達から見える仕掛けになっている。

3. フライイングウォール：南側の壁は屋根面より垂直に約2.1m上部にまで（バルーンフレームで）延長されている。　これは，近隣の人々の好みの様式をごろ合わせ的に取り入れた，一種の「いないいないばあ」式の，2方向に壁のある舞台装置のようなものである。

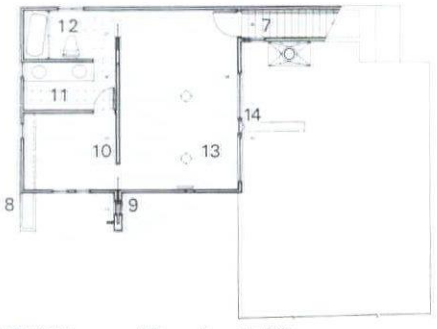
4. スイスチーズ：フライイングウォールの北面には，青と白に塗装された12mm厚の合板が層状に貼られそこに直径約20cmの穴が規則正しくあけられている。

5. 「7」「0」「8」：外部に面した南，西，北の3面の壁に，この通りの住所番号が表示されている。　数字は通りに面した小窓の組み合わせによってできているということは，数字は部分的には窓であり，窓は部分的には数字であるということになる。　このアイデアは郵便配達夫から拍手をもって迎えられることだろう。

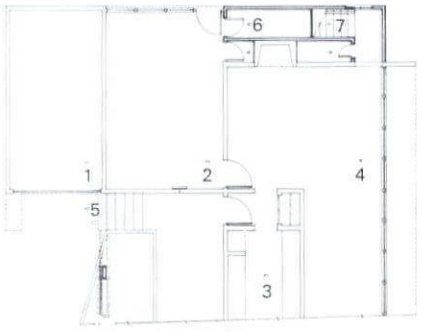
6. フライインググリッド：風下にむかって傾いている約5cm厚にプラスターが塗られたグリッドが，西側の壁面を細分割している。　これは直交グリッドだが，地盤面に対しては傾いている。

7. フライイング花壇：グリッドは壁から抜け出て2方向に延長されているが，これは延長という概念，あるいは無限という概念を暗示し，あるいは冷やかしている。　南端部ではグリッドは壁（テンションロッド？）を越えて延長され，これも建物の壁面を越えてしまっている角型の箱とつながっている。　この箱に植え込まれた植物が，いつの日にか，グリッドをよじ登り始めることだろう。

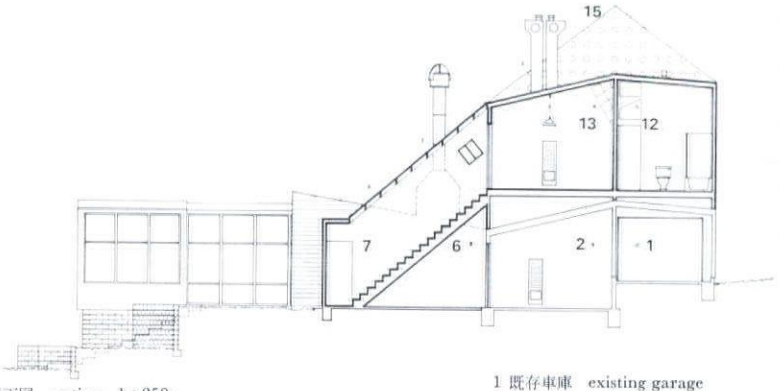
8. 舟の渡し板：舟の渡し板が東側壁面から腕をさし出すように設けられ，1階屋根面への(海賊のための)アクセスとなっている。



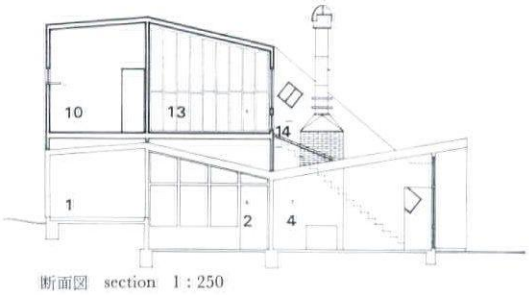
2階平面図　second floor plan　1：250



1階平面図　first floor plan　1：250



断面図　section　1：250



断面図　section　1：250

1 既存車庫　existing garage
2 既存寝室　existing bedroom
3 既存台所　existing kitchen
4 既存居間　existing living
5 バットレス　buttress
6 倉庫　storage
7 階段　stair
8 フライイング花壇　flying planter
9 フライイング・ドア　kinetic exhibits door
10 収納　closet
11 便所　labatory
12 浴室　bath
13 寝室　bedroom
14 舟の渡し板　gangplank
15 フライイングウォール／スイスチーズ
flying wall／swiss cheese

A 600 square foot expansion of a 1948 1 story wood frame and stucco Case Study house. Several critical features should be noted:

1. Flying Buttresses: The entrance to the house is framed with two buttresses of identical shape layed one over other. The first is of wood and plaster, painted blue; the second bolted to the first is of perforated 20 guage steel, painted green, set in a hardwood frame. Aside from defining the path to the door, the buttresses gently caricature the role of structure in building, a role modernism deified.

2. Flying Door: The buttresses incline toward a large, rectangular windowed box projecting from the second floor. The box encloses a door which slides out the wall (rather than within an interior partition). Graphic panels are attached to the door, the door pushed into the slot, and the graphics become visible (through the 18" square windows), from the street, sidewalk, or as one passes under the box/buttress to enter or exit the house.

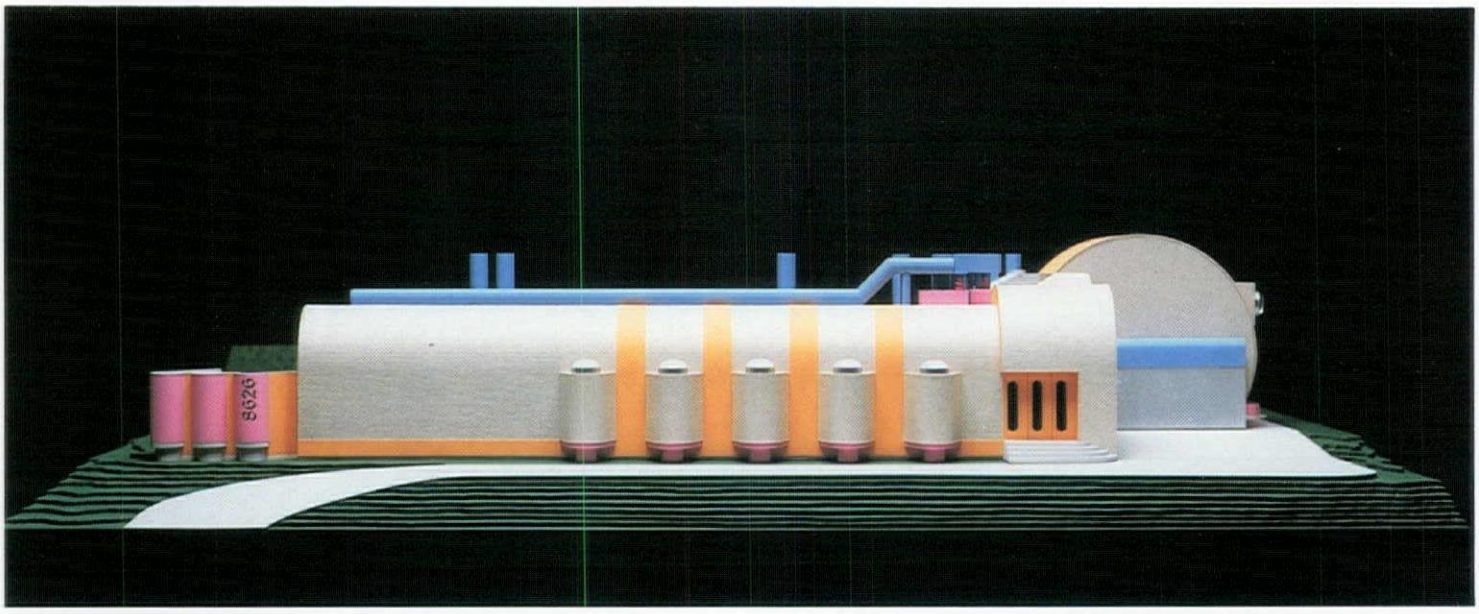
3. Flying Wall: The South wall of the building is extended vertically (balloon framed) 7 feet above the roof—a stage set, two dimensional wall with profile configured as a sort of "Little-Bo-Peeps" House, a pun on existing stylistic preferences in the neighborhood.

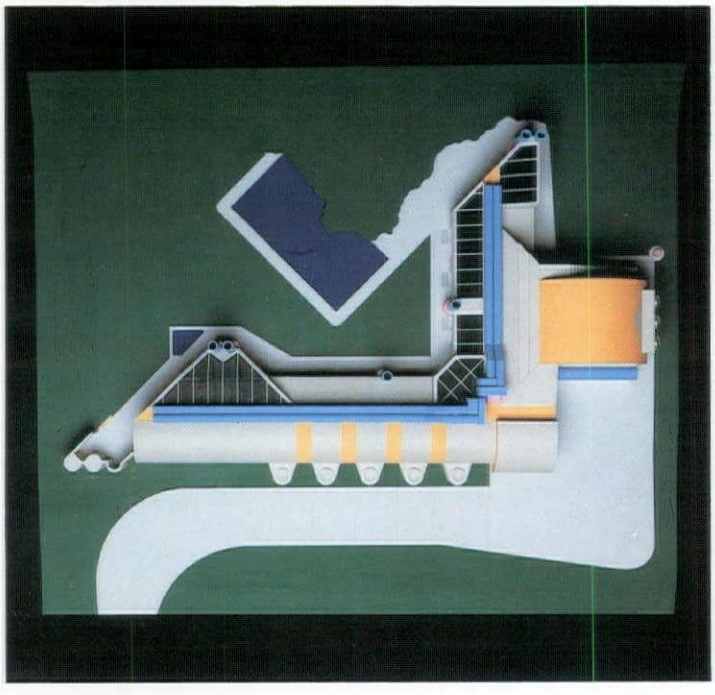
4. Swiss Cheese: The north face of the flying wall is made with two layers of half inch plywood, the first blue, the second white with 8 inch diameter holes cut in it.

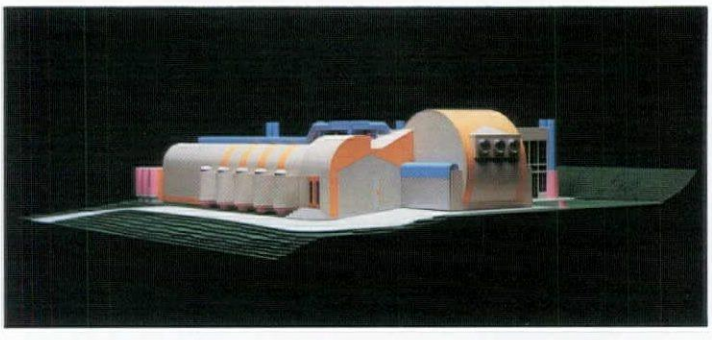
5. "7", "0", "8": The street address is delineated on the building's three public faces, one number on south, west, and north walls. The numbers are made in combination with the tiny street side window system so that the numbers are part windows and the windows are part numbers, an insight sure to be applauded by the local mailman.

6. Flying Grid: A 2" plaster stop grid tilting to the leeward, sub-divides the west wall. The angles remain right angles but the positioning relative to the ground plane is no longer Cartesian.

Pin Ball House　*Hollywood Hills, Los Angeles, Ca. 1980*



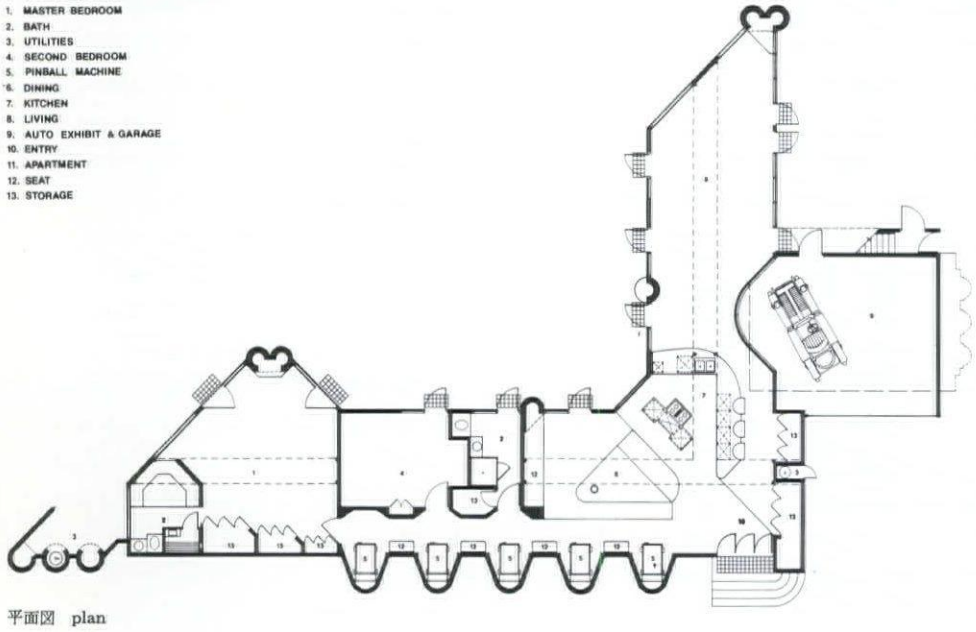






photos = Leo Fernandez

1. MASTER BEDROOM
2. BATH
3. UTILITIES
4. SECOND BEDROOM
5. PINBALL MACHINE
6. DINING
7. KITCHEN
8. LIVING
9. AUTO EXHIBIT & GARAGE
10. ENTRY
11. APARTMENT
12. SEAT
13. STORAGE



平面図　plan

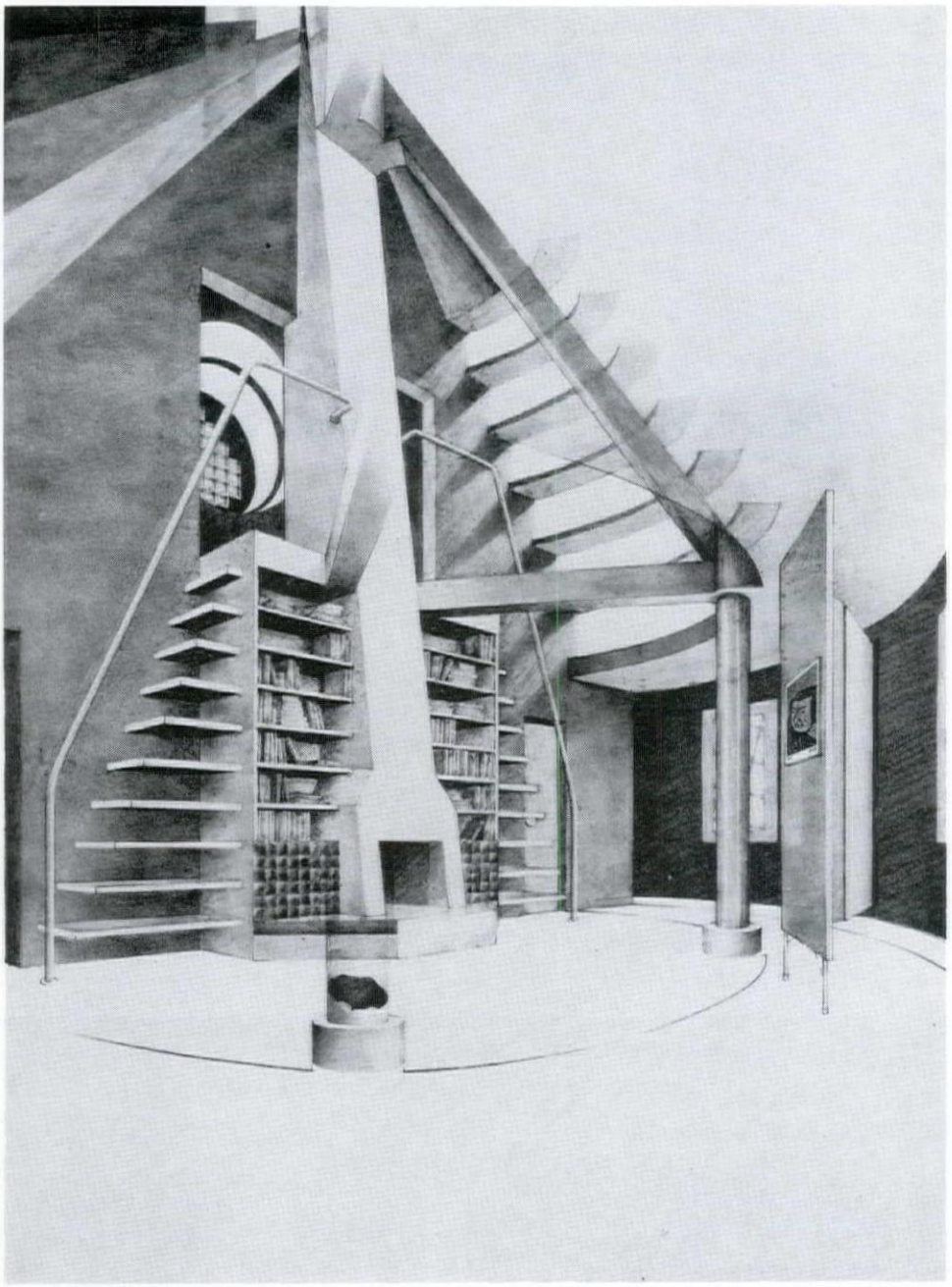
ピンボールという名称は，施主の所有する５台のピンボールマシンのコレクションに由来し，それらは東側壁面のピンボール・アーケードに設けられたアルコーヴに１台ずつ納められる．　６台目の〈ピンボール〉はクラシックカーで，かたちはずっと大きいが，ピンボール・アルコーヴに類似した形態の部屋に納められる．　主要な構造と設備は，この住宅の長さいっぱいに走っているプラットフォームに沿ってまとめられており，屋根面に設置された２台の暖房空調ユニットからの給排気ダクトが屋根の長さいっぱいに走り，必要に応じてプラットフォームに貫入している．　ピンボール・ハウスは，施主と設計者の両者にとって，単なる道楽以上のものである．　この住宅は，内部においても外部においても，ひとつのオブジェとして，たぶん，この近隣を越えて人々を驚嘆させ，活性化させ，さらに楽しませることだろう．

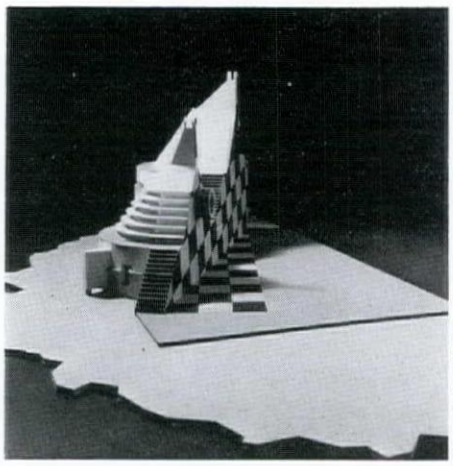
Fun House *Suburb of Los Angeles, Ca. 1980*





photos = Joe Duda

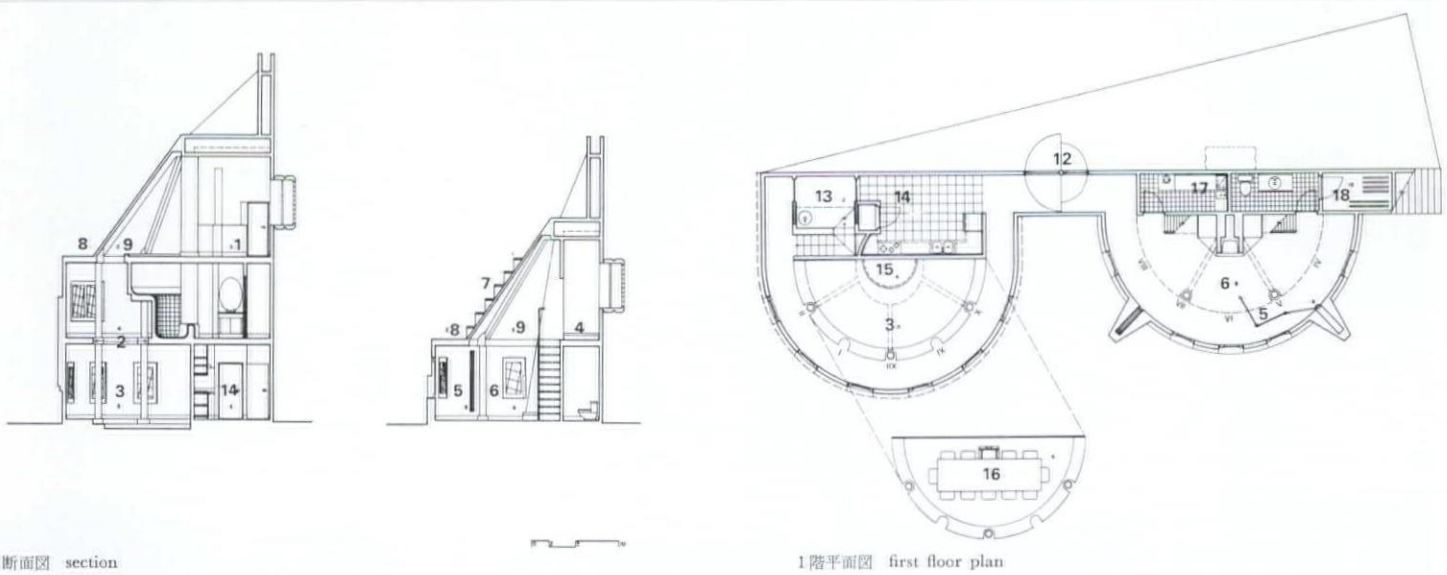




photo=Mort Neikrug

オーナーはロスアンゼルスの多少風変わりな整形外科医で，フランス王朝様式あるいはプロヴァンス様式の既存住宅がある約11万m² の敷地内に計画された2番目の〈住宅〉に対して，いくつかの特別な要求を持っていた．　彼は2人の子供達，16才の男の子と14才の女の子のための〈オブジェ〉，つまり〈ファン・ハウス〉を要求したのだ．　ファン・ハウスに対する要求は詳細をきわめ，しかも，とらえどころのないものであった．　彼は〈物〉を求め，ユーモアを求め，娘のための絵画室およびそれを展示する部屋，子供達がフォーマルおよびインフォーマルに集うことのできる部屋，子供達や来客用の寝室，演奏会や詩の朗読会などの集会のための小さなホール等を要求した．

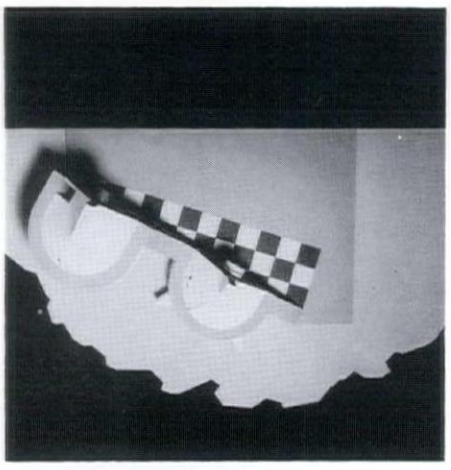
この住宅は，アクセス道路に面した玄関側の〈チェックボード〉の立面，周囲の景観に面した裏側の半円筒形の立面の，ふたつの全く異なった立面を持っている．〈王様〉の窓のついたチェッカーボードは，オーナーの望むちょっとした軽薄さと〈物性〉に応じたものである．　ふたつの〈小塔〉はシャンボール城を先例としたもので，これは既存住宅のまがいもののフランス文化的遺産に対してこっそり舌を出しているようなものである．



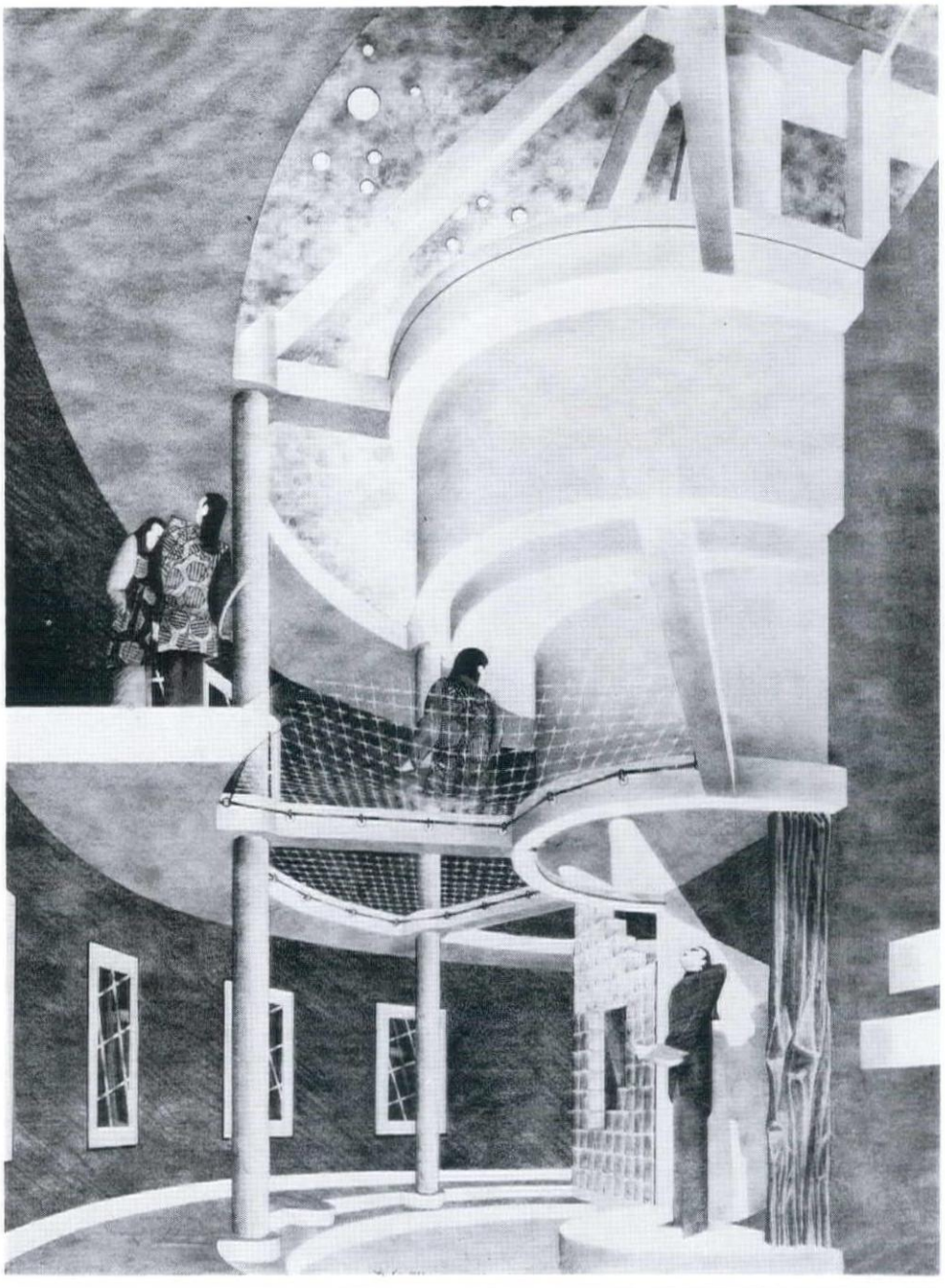
断面図　section

1　書斎　study
2　網　nets
3　多目的室　multi-purpose
4　屋根裏寝室　sleeping loft
5　可動間仕切　removable partition
6　スタジオ　studio
7　見晴し台　bleacher
8　デッキ　deck
9　吹き抜け　open

1階平面図　first floor plan

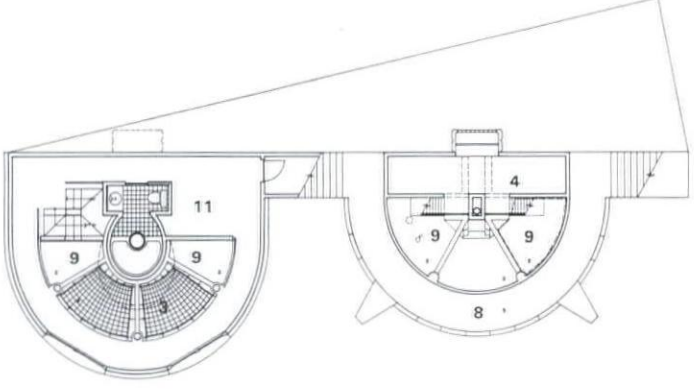


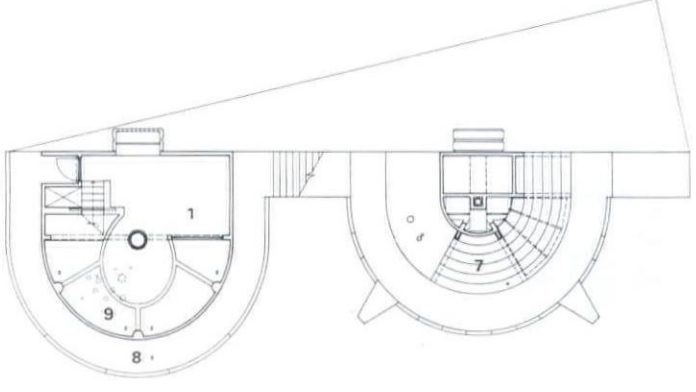
photo=Mort Neikrug



The owner, a somewhat eccentric Los Angeles plastic surgeon, had several specific requirements for a second "house" on the site. He wanted to build a "Fun House" (his term), an "object" as he put it, for his two teen-age children, a boy of 16 and a girl of 14. The site is to be the "sawed-off" top of a near-by hill with access from an existing dirt road. The program for the fun-house was both precise and amorphous.

The final design solution which the owner has approved has two distinct faces, one, a "checkerboard" entry wall facing the access road, and two, the half-cylinders on the opposite which face the surrounding landscape. The checkerboard elevation with "king" windows provides something of the levity and "thingness" the owner sought. The two "turrets" have antecedents in Chambord, a tongue-in-cheek reference to the pseudo-French heritage of the existing residence.





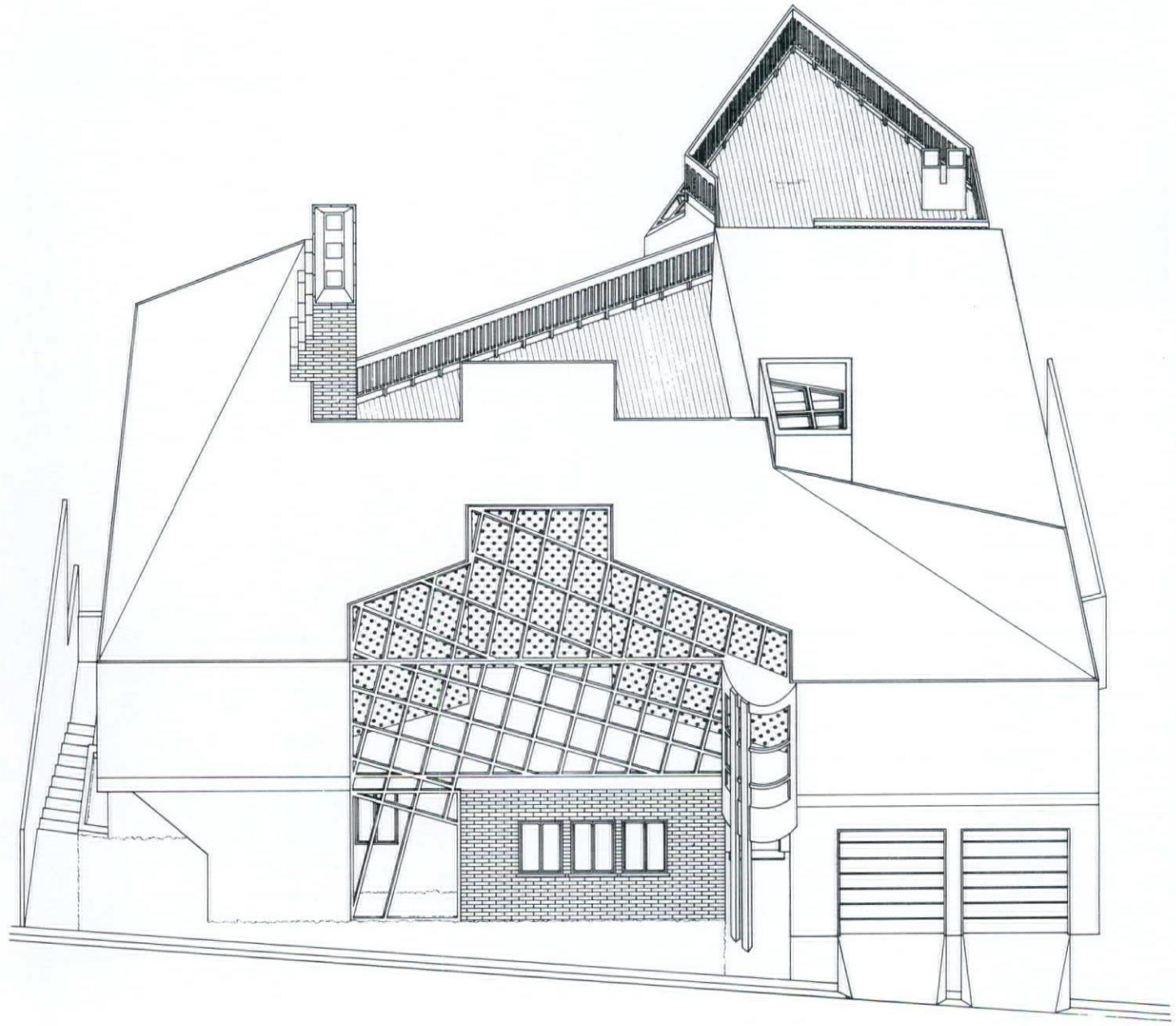
2階平面図 second floor plan

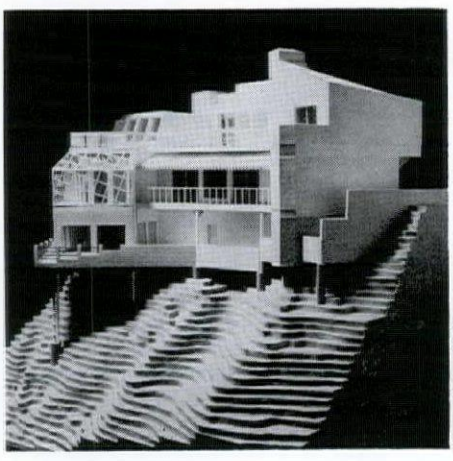
10 便所 toilet
11 屋根裏運動室 exercise loft
12 玄関 entry

3階平面図 third floor plan

13 機械室 mechanical equipment
14 台所 kitchen
15 可動舞台 portable stage
16 食堂 banquet
17 暗室 darkroom
18 絵画収蔵庫 painting storage

Adams House *Los Angeles, Ca. 1980-*

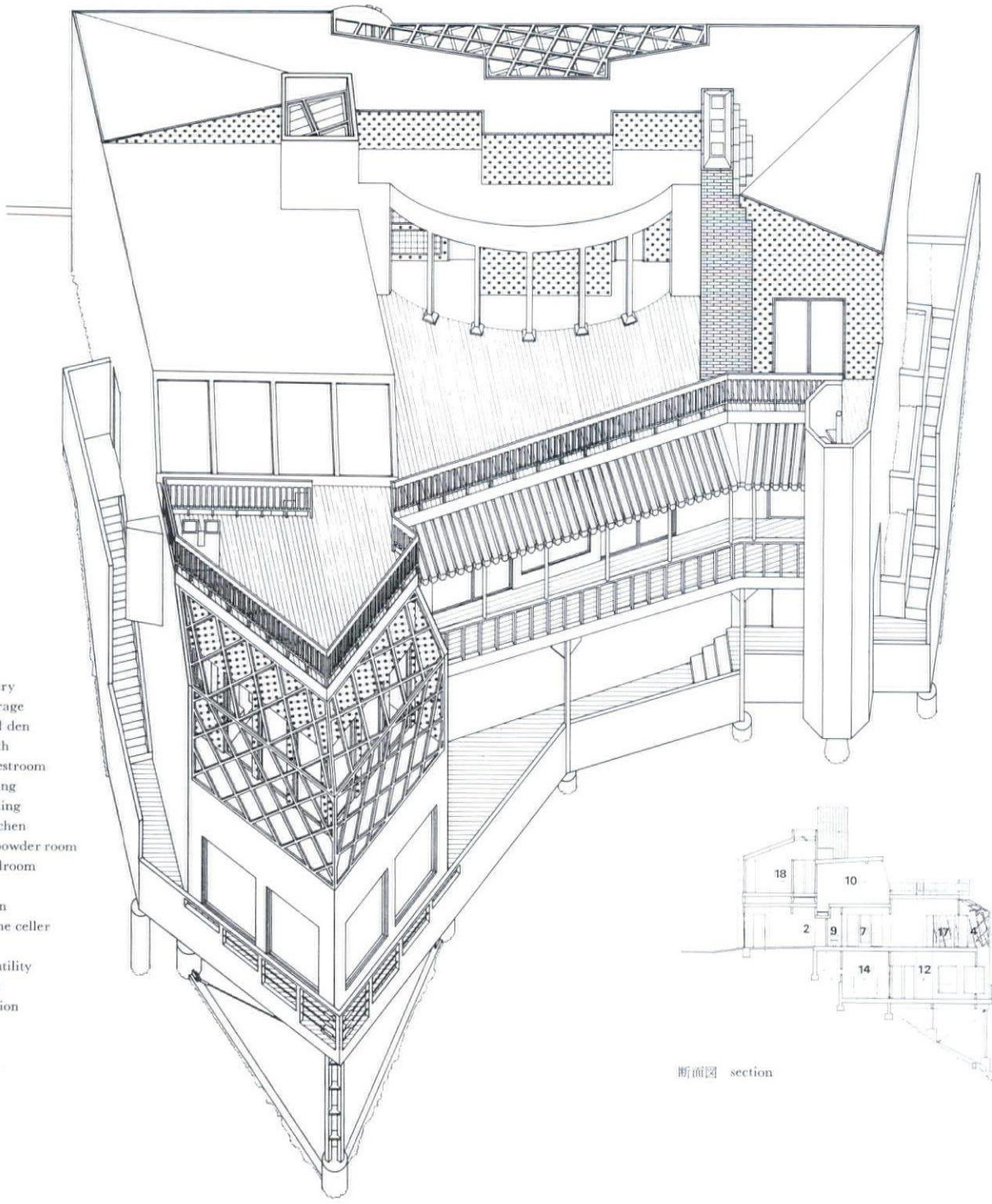




photo=Mort Neikrug

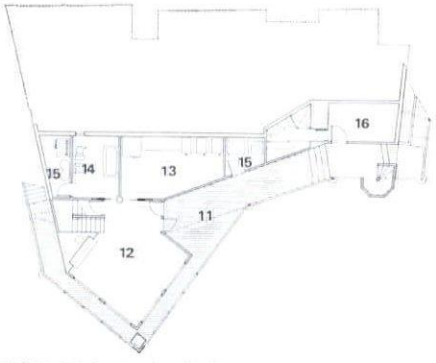
1979年秋にロスアンゼルスを襲った大雨によって斜面上のコンクリートデッキが破壊され建物から分離してしまった3階建の住宅の増築である．　これまでにも数回にわたって増築が繰り返されたために各要素が矛盾しあって不調和であるという既存住宅の特徴を保ち，さらに拡大するということが増築のデザイン戦略であった．　この既存建物の性格を決定しているのは，単に部分間の雑多な不連続といったものだけではなく，羽目板，煉瓦，スタッコ，コンクリート，金属製の日除け，あちらこちらに立てられている様々な手摺といった種々雑多な材料と形態も大いに関係しており，それは増築部分でも保たれ，繰り返された．

The general design strategy was to retain and extend the somewhat discordant character of the colliding elements of the existing house (several earlier additions have been carried out). This existing character is defined not only in terms of a variety of discontinuous pieces, but with materials. Wood siding, brick, stucco, concrete, metal awnings, a variety of rails already stand side by side. This quality of diverse shapes and materials was to be retained and reiterated in the expansion.

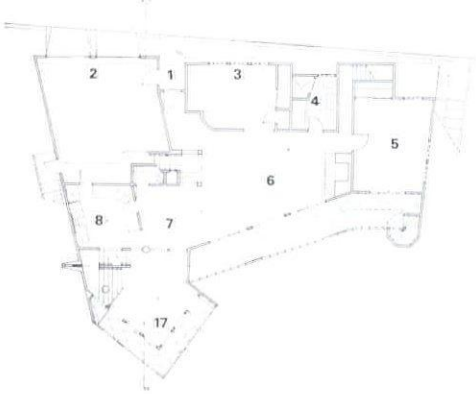


1 既存玄関 old entry
2 既存車庫 old garage
3 既存仕事部屋 old den
4 既存浴室 old bath
5 既存客室 old guestroom
6 既存居間 old living
7 既存食堂 old dining
8 既存台所 old kitchen
9 既存化粧室 old powder room
10 既存寝室 old bedroom
11 デッキ deck
12 娯楽室 recreation
13 ワイン貯蔵庫 wine celler
14 浴室 bath
15 ユーティリティ utility
16 使用人室 servant
17 食堂 dine extension
18 倉庫 storage
19 サウナ sauna
20 客室 guest room

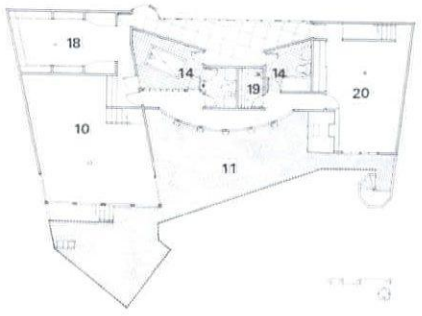
断面図 section



1階平面図 bottom level plan



2階平面図 middle level plan



3階平面図 top level plan

エリック・モス：表象としての建築 Eric Moss: Architecture as Representation *by Yasumitsu Matsunaga* 松永安光

建築の永遠性の否定

エリック・モスはドムス誌のインタビューに応えて次のような興味深い発言をしている．

「カーンはかねがね建築というものは，少なくともその本質に於て永遠のものであり，それを作る人にくらべればはるかに長い寿命を持つものだと語っていた．　私は，今のような作り方をしていれば全く逆だと思う．　無論，トラバーチンやコンクリートで出来たナショナル・ギャラリーの類いは別だけど．　こういうものをどうにかしようとするには原子爆弾か何かそういうものが必要だから．　でも，この辺で建てられているものといえば木やモルタルで作ったものだし，変な奴に家を貸したりすれば，それで一巻の終りという訳だ．　こういった事情からすれば建築というのは永遠性というものの対極にあると考えざるを得ない……ロサンジェルスというのはチャランポランな都市だからね……．」

カリフォルニアン・ウェイ・オブ・ライフというものがあるという．　要は無頓着にテイク・イット・イージィーの精神で暮らす精神であろう．　《ブルータス》好みのオキラク人生でそれはそれなりに面白そうだ．　しかしモスの言葉の中にはいま少し普遍性をもった問題点が含まれているように思われる．　南カリフォルニアという世界でも稀な気候の良い風土が，彼らの作る，はかないボール紙細工のような建築の存在を許しているのだという事は別にしても，建築の永遠性の否定という事は決して多くの建築家が口にしているものではない．

建築の実体の否定

伊東豊雄は建築の〈実体〉を否定してその〈表面〉に固執する．　「紙のように薄いスクリーンの上をどのように丁寧になぞって見ても，その表面を単に滑っていくだけであり，その奥にある実体には決して到達することが出来ない」（《日本建築のニューウェーヴ展》のカタログ）．　表面をなぞるのみで，その裏側には決して入れない建築，それはとりもなおさず映像の中の建築と等価なものである．　全く当を得た事であるが伊東の建築はテレビのセットとして用いられるばかりではなく，彼自身そのようなセットを設計している．　ブラウン管の中にうたかたのように再現され，消えていく建築．　アーキグラムの描いた《インスタント・シティ》よりもさらに実体のない建築．　見る人がスイッチで消してしまえる建築．　ビデオテープによってのみ再現される建築．　モスが太平洋の彼方で作っているボール紙の建築は伊東ほどにソフィストケートされてはいない無器用なものであるが，建築というものに瞬間の意義しか見ないという決然たる態度がそこに現われているという点に於て，私はそこばくの共通点を両者の間に見出す．

表象としての建築

建築をその表象の中にしか見ない，という態度は，アール・デコの建築家達に多く見られ，中でもロベール・マレ＝ステファンなどは建築そのものより映画作りに情熱を傾けたりしている．オーストラリアの建築家レイモンド・マグラスが1930年にケンブリッジで改装を行なった家は〈フィネラ〉と呼ばれそのたとえようもない美しさについて，私はかって別の所に書いた事があるが，その美も実は写真家達が，机の下にもぐり，脚立の上によじ登り１週間に亘って撮り続けたという写真によってのみ今日に伝わっているのである．　庭の噴水に反射する室内からの明り，入口から入って来る仄かな光に映えるヒスイ色のガラスの天井，そのようなものを今，我々が実体として体験することは出来ない．
しかし，そのイメージは数葉の写真と共に建築の歴史の中に深く銘記されるのであろう．

建築は常に様々なメディアの中に表象として存在し，増幅されたイメージを発散し続けて来た．　突如としてワイマールからイタリアに向けて出立したゲーテを誘ったものはパラディオの《建築四書》であり，その建築そのものではなかった．　そしてまた，ゲーテの遺した描写によって我々はまだ見ぬパラディオの建築についてその神韻縹緲たる所を知る事となる．

篠原一男は更に単刀直入である．　「虚構の空間を美しく演出したまえ．」　この言葉は多くの反撥を招いた．　しかし，これ程本質を貫いた言葉はないのではないか．　一方彼は言う．「私のつくった住宅はいつまでも地上に立ちつくしてほしい．」　この言葉は建築の永遠性への希求を切なくも吐露している．　しかしこれら二つの言葉を結びつけるとどういう事になるか．　私はそこに表象化され銘刻された建築を見出す．

モスの建築が最も美しい時

単純に言えば，建築は今や実体を離れて写真，ドローイング，映画，ビデオ，そして評論の中により大きく存在する．　ワルター・ベンヤミンが遙か昔に《複製技術時代の芸術》で説いた実体の持つアウラですら今日の建築では応々にして否定される．　モスの建築に使われているキッチュな材料の数々，如何にも納りの悪そうなディテールの数々，こういったものから考えると，おそらく彼の作品が最も美しいのは，その模型の段階ではないかと考えるのである．
そして，そのように私がいうのは，決して彼の能力を軽んじるが故ではなく，それこそ彼が意図した事ではないかと考えるからである．

思い出のエリック・モス

実を申すと，エリック・オーウェン・モスはハーバードに於て私の同級生であった．　当時（約10年前），既に私は彼を，その特異な風貌と独特な話し方（作品説明にもよく表現されている）とで注目していた．　彼は当時の我々が主としてカードボードと呼ばれる褐色の厚紙で模型を作るのに対して鮮やかな色紙を組合わせてオモチャ箱のようなものを作っており，既に現在の作風を表現していた．　モスはアメリカ人には珍らしい努力家で，ステュディオでは私と張り合って徹夜を続けた．　という訳で，かつてのライバルがこのように世界的に注目されて来るに至ったのは極めて当然と思うと共に心から喜ばしく思うのである．　彼は卒業後，当時母校の隣りの TAC で働いていた私に，はるばるロサンジェルスから電話をくれて，ティム・ヴリーランド（バークレーの学部長か何かだった）が人をさがしている．　君の事を話したら是非来て欲しいと言っていた，と伝えて来た．
私は物臭であるので，大陸横断の引越など思いもよらず，丁重に断ってしまったが，この小文が，そのような彼の親切に対していくらかでも返礼という事となれば，幸甚である．

●まつなが・やすみつ／建築家

Morphosis





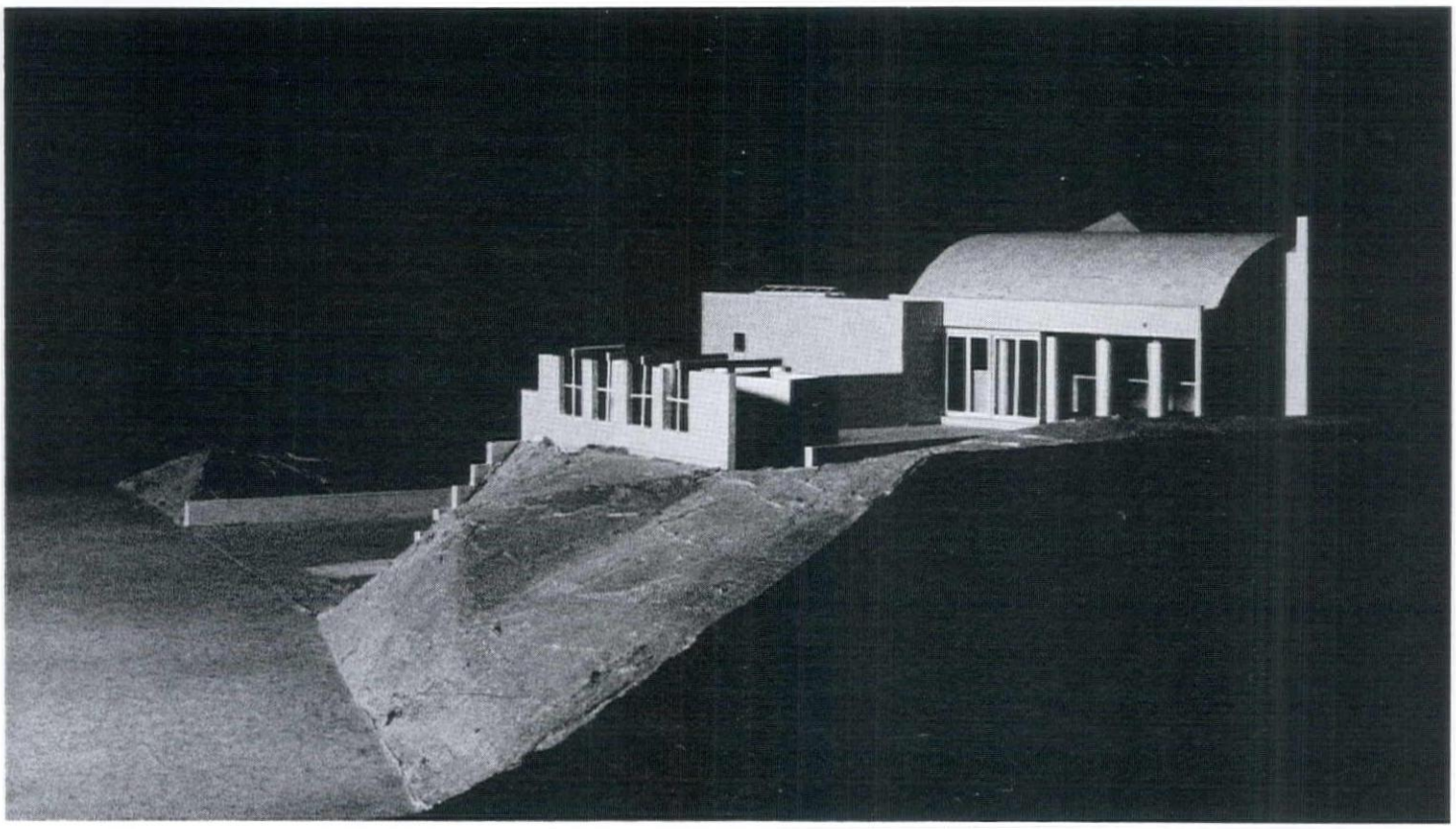
モルフォシス

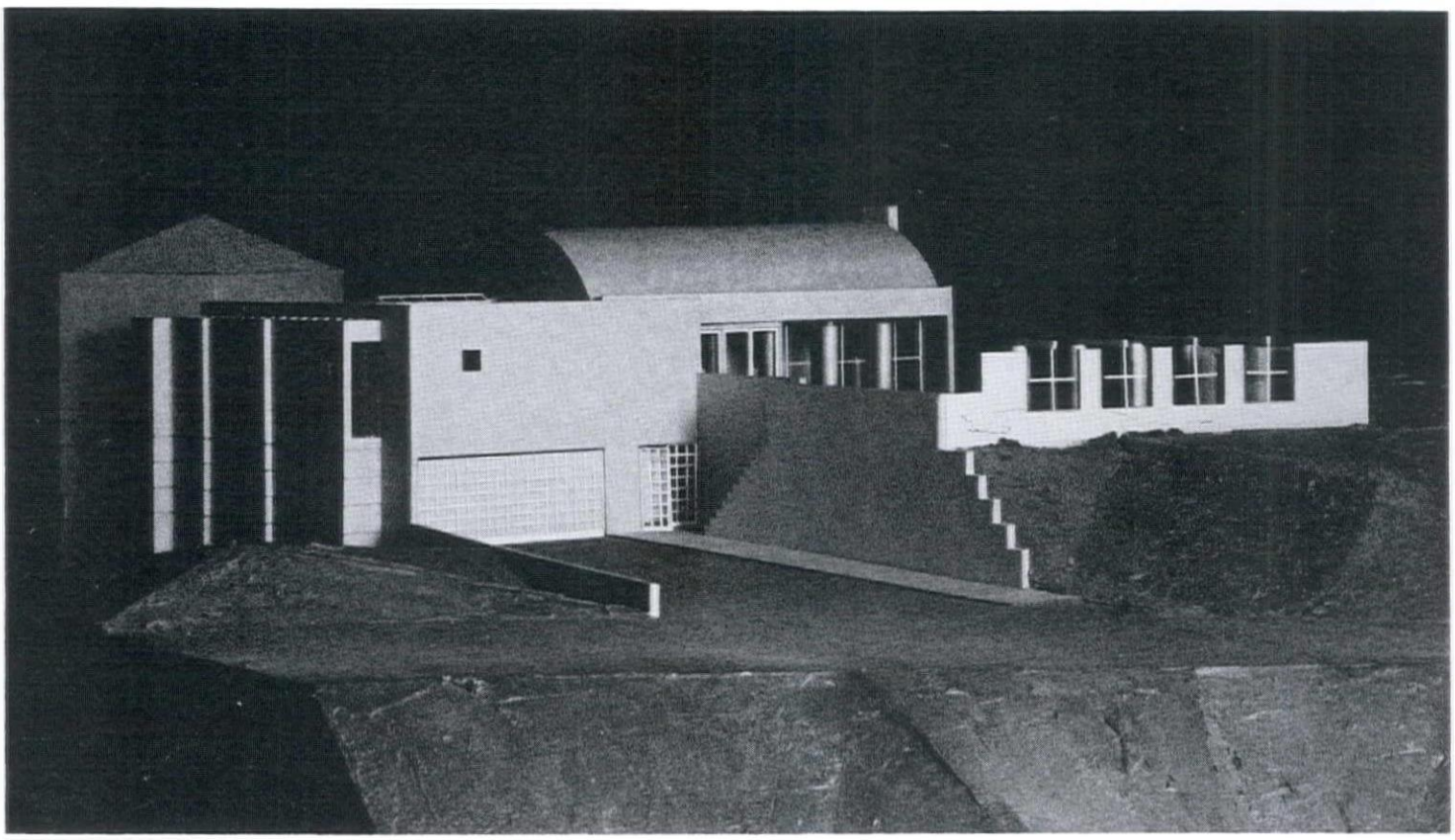
Thom Mayne：1968年南カリフォルニア大学で BA，1978年ハーバード大学で MA を取得． 1971年にカリフォルニア州立大学パノマ分校環境デザイン学部で教鞭をとる． 1972年以降，南カリフォルニア建築大学で教える．

Michael Rotondi：1973年南カリフォルニア建築大学で BA を取得． 1976年以降，南カリフォルニア建築大学で教える．

モルフォシスは，1974年にセコイヤ教育研究センター，1977年にリーデル・メディカル・ビル，1980年にフローレス邸でそれぞれ PA 賞を受賞している．

Cohen Residence *Los Angeles, Ca.*





この計画では，場所と，場所と場所の関係の概念に設計者の関心が注がれている．　つまり，住宅と敷地との適合，そして移動の体験．　それぞれのカテゴリーの機能には，〈それ自身〉の形態が与えられている．ふたつの中心的空間，リビングダイニングとふたつの寝室は，それぞれヴォートとピラミッドが上にのった立方体として表現されている．　サービス機能（台所，浴室，ガレージ，階段等）は，両者をつなぐ無性格な直方体的なヴォリュームとして構成されている．　設計者はこの三分割した案を通じて，それぞれが固有のアイディティを確立すべき自律的空間のタイプを生み出すことに挑んだ．　各部分が敷地上に占めている位置が，それぞれの自律性を強調している．　展望の良い北西のファサードは別として，この複合体は，プライヴァシーを守るため，内部にむかって焦点を合わせている．　各部分のアイデンティティは，それぞれが面した外部空間のタイプによってさらに強調されている．　パティオに面したリビングダイニング，庭に面した寝室，中庭に面したサービス機能（浴室）．　内部と外部の空間の境界領域に設定されたサーキュレーションは，明瞭なシークエンスを確立するためにさまざまに変化させられている．　このシークエンスこそがコンセプトの中心をなすもので，プールから庭，中庭のプールそして浴室と至る特に配慮された水の象徴的な使用にそれは表われている．

Our interests with this project are concerned with the notion of place and the relationship of places; the fit of house and site; and the experience of movement. Each category of uses was given its "own" form. The two major areas, the living-dining and the bedrooms, are expressed as a compressed vault and pyramided cube, respectively. The service functions (kitchtn, bath, garage, stairs, etc.) form the neutral connceting rectanglar volume. The location of each piece on the site rienforces its autonomy. The complex focuses inward for privacy except on the northwest face which addresses the view. The identity of each of the arts is further reinforced by its association with outdoor spatial types: living-dining to patio, bedrooms to lower garden, service (bathroom) to court. Circulation which occurs at the edges of indoor and outdoor spaces variesin order to establish a definite sequence of movement which is central to the main concept and demonstrated by the special attention given to the use and symbolism of water by the connection of the pool with the lower yard, the court pool, and ending in the bath.

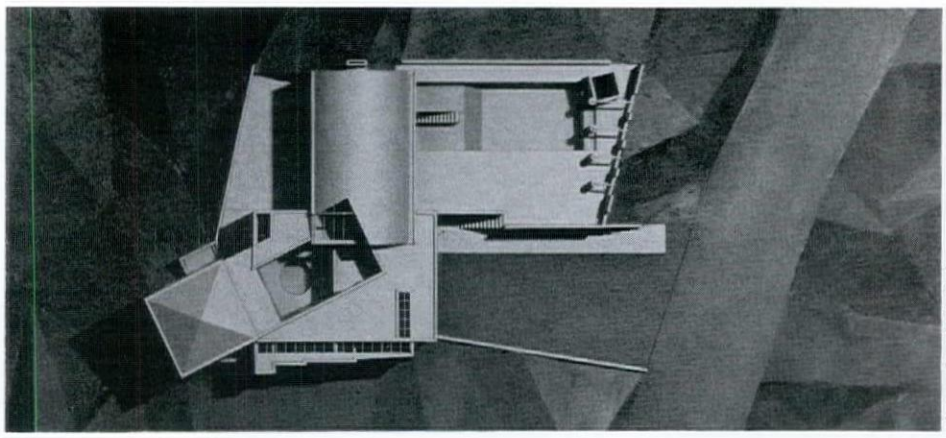
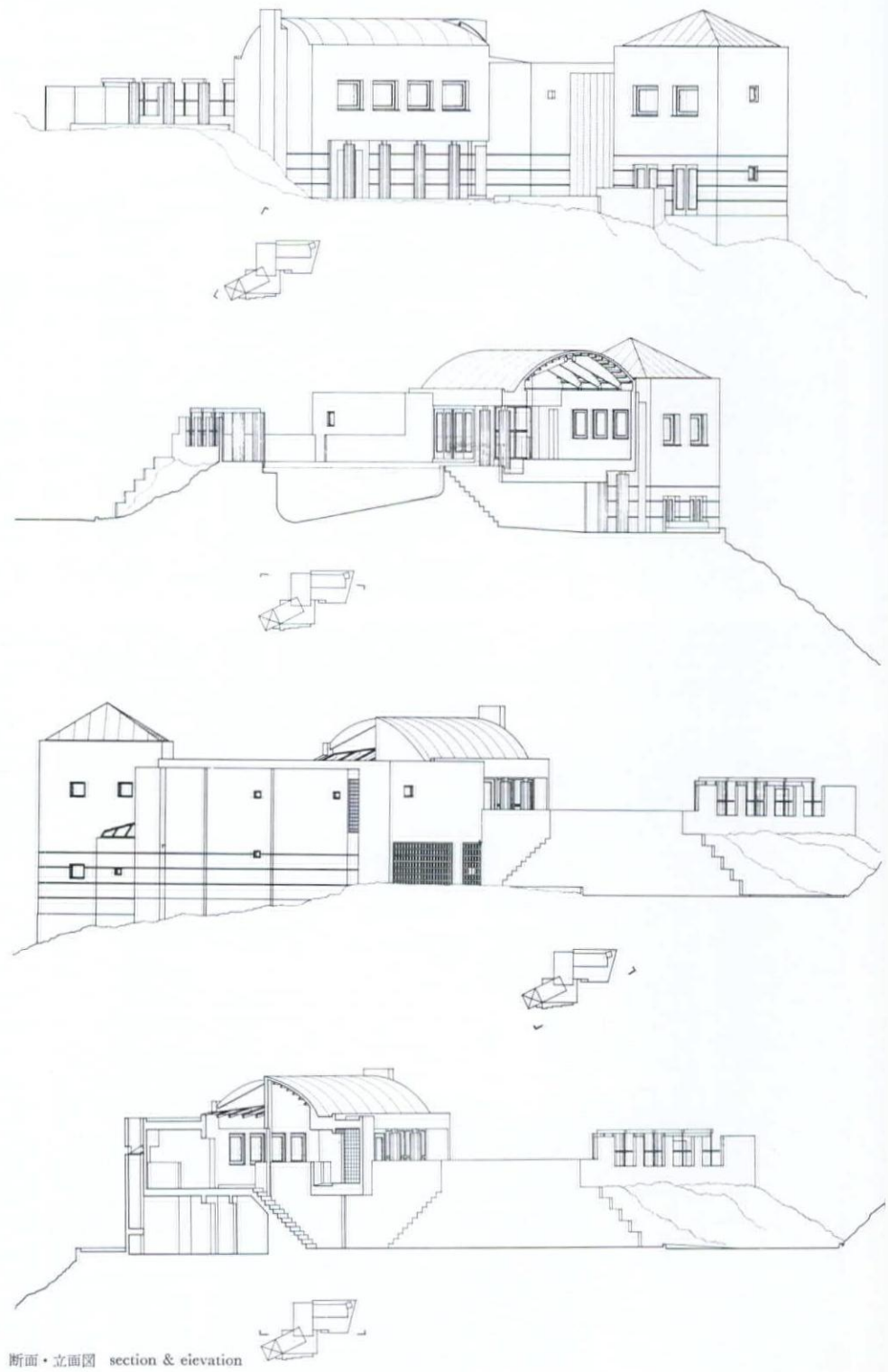
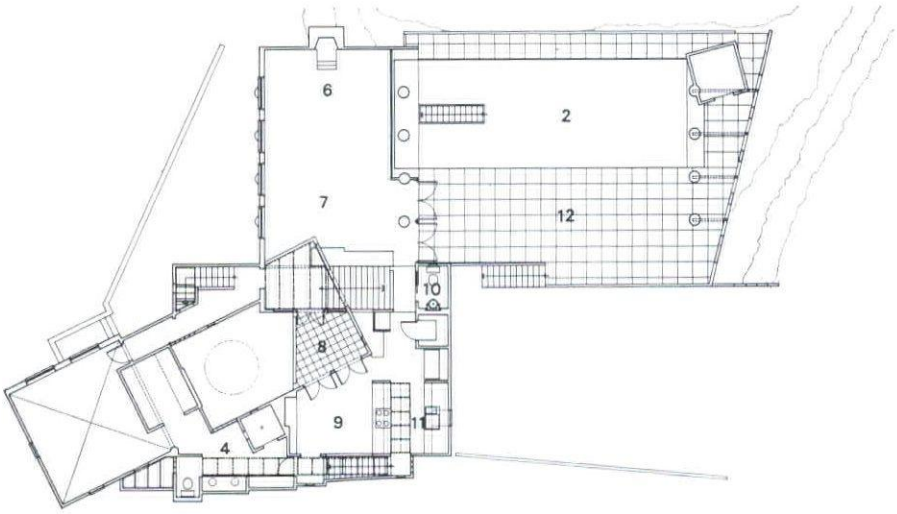


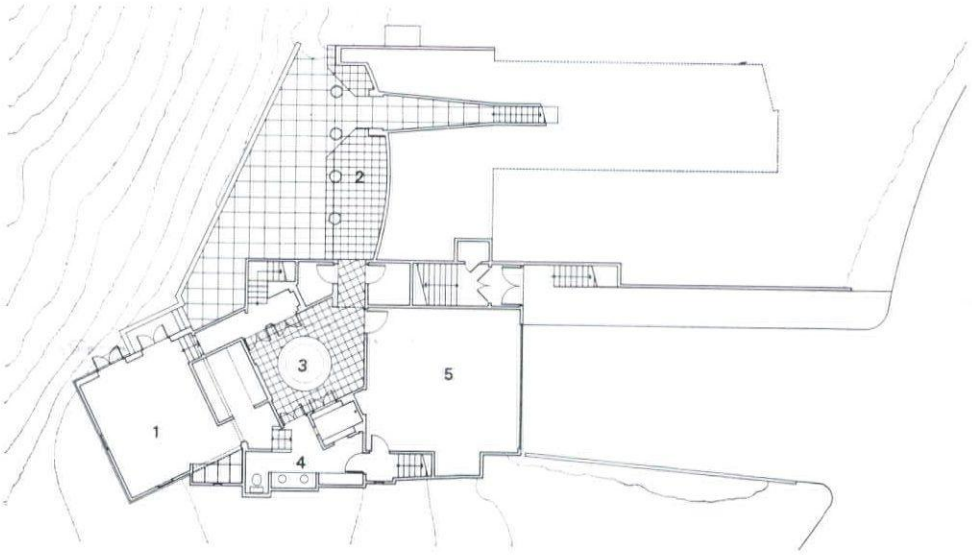
photo = Jaseph C. Dula



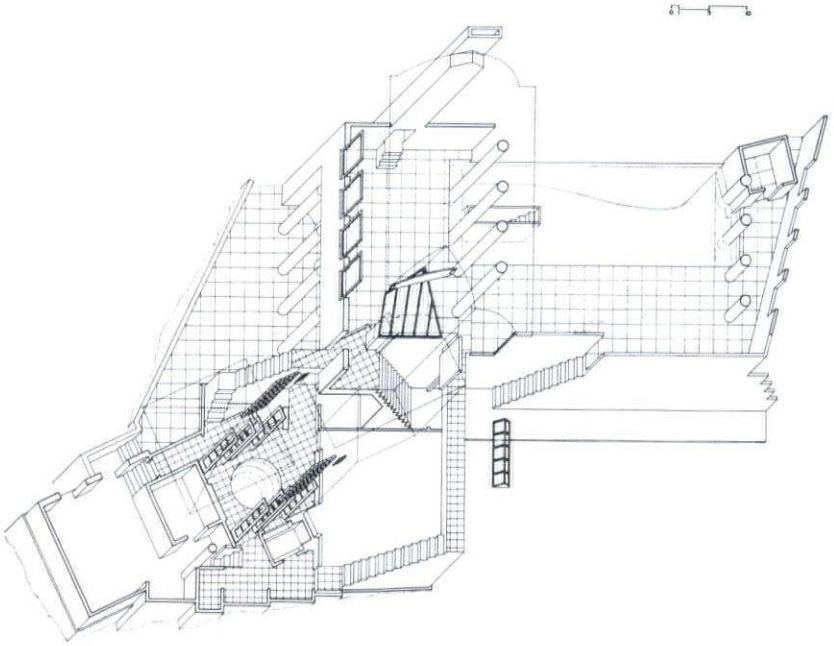
断面・立面図　section & elevation



2階平面図　upper plan

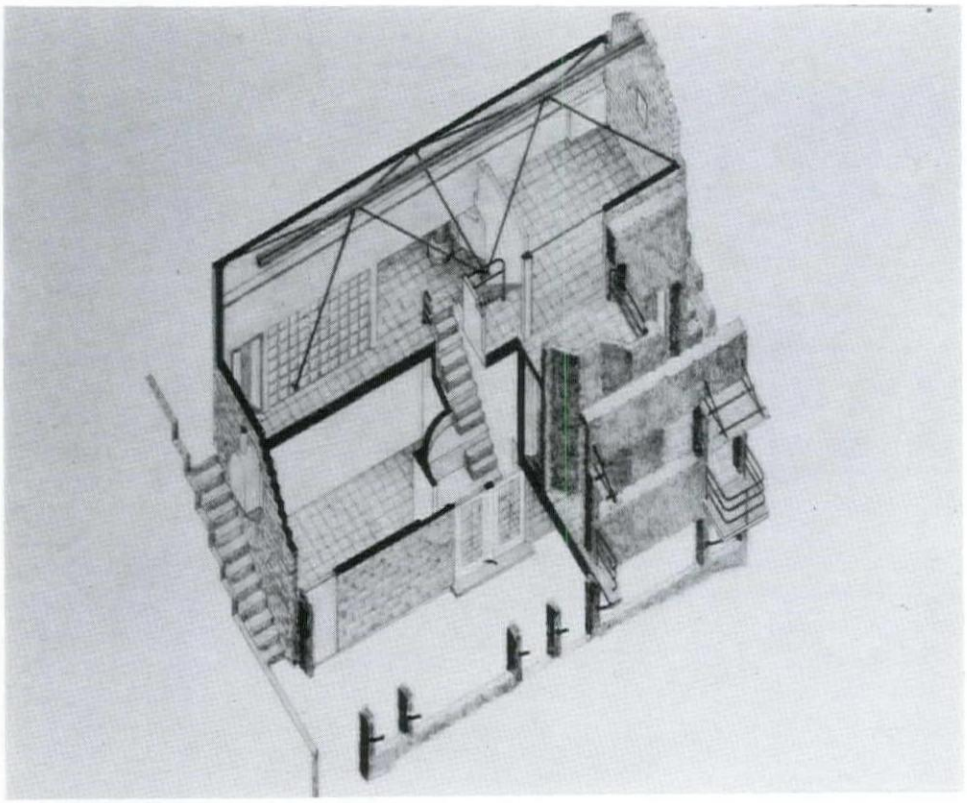


1階平面図　lower plan



1 寝室　bedroom
2 パティオ　patio
3 中庭のプール　jacuzzi
4 浴室 bathroom
5 車庫　garage
6 居間　living
7 食堂　dining
8 デッキ　deck
9 朝食室　breakfast
10 便所　toilet
11 台所　kitchen
12 プール　pool

Flores House　*Pacific Palisades, Ca.*



1950年代に建てられた平屋の住宅に対する増築である．　既存建物の水平に連続している空間に対して，垂直性を持った大空間を作ることで明確に区別するというのが，この増築に対する考え方である．

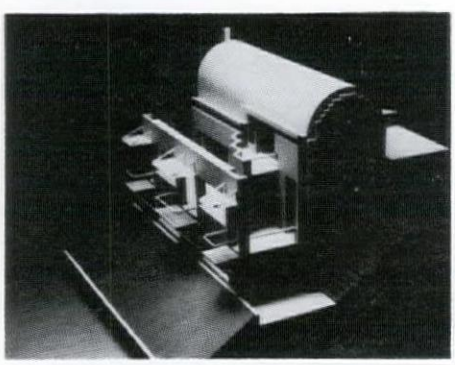
プラスターとガラスブロック．

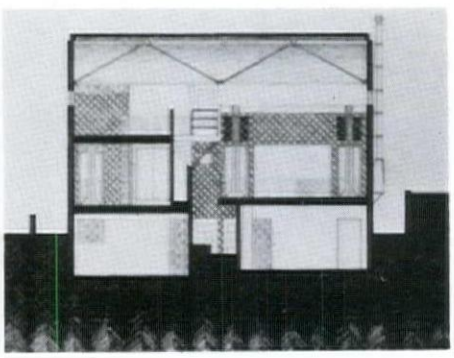
ヴォールト屋根を支える苅込み生垣(トピラリー)．

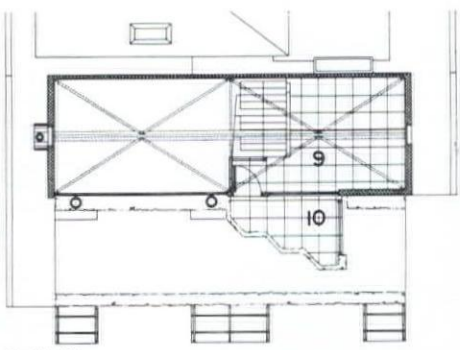
たっぷり植樹された生垣(ヘッジウォール)の壁．

トピラリーが水平の連続性を断ち切り，彼方の太平洋を眺める門を形成している．　ヘッジウォールの外側の金属製展望台は空間的に限定されていない，もうひとつのデッキを形成して丘の上に張り出している．

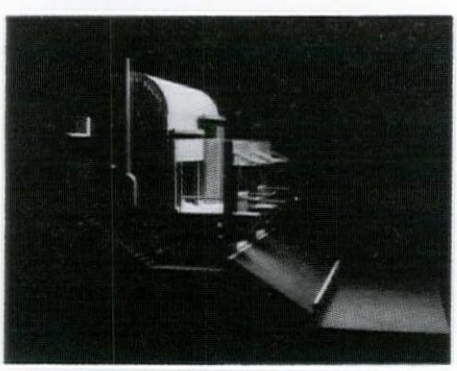
1　既存居間　existing living room
2　既存台所　existing kitchen
3　既存朝食室　existing breakfast nook
4　食堂　dining room
5　寝室　bedroom
6　浴室　bathroom
7　パティオ　patio
8　展望台　viewing porch
9　屋根裏部屋　loft
10　デッキ　deck
11　玄関　entrance
12　倉庫／機械室　storage／mechanical
13　ワークショップ　work shop
14　車庫　carport

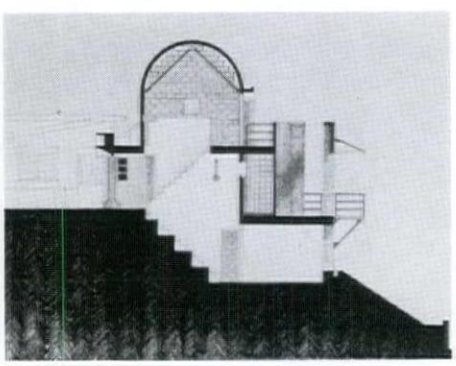


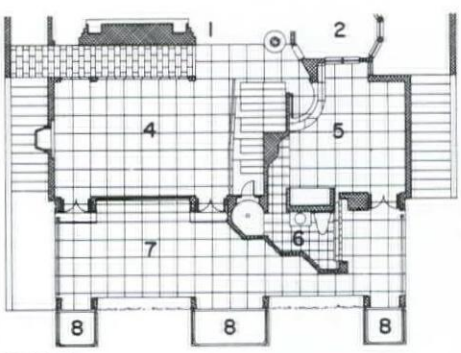




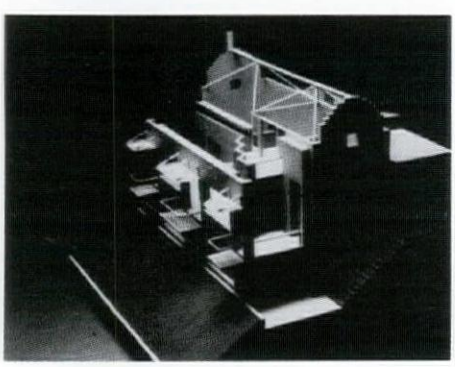
PLAN 03

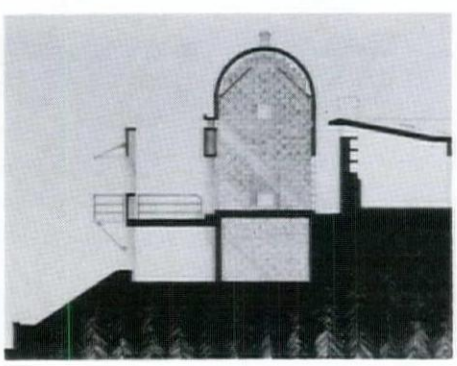


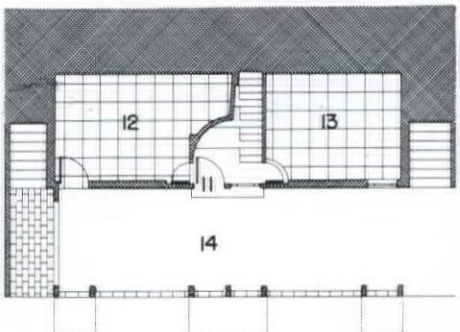




PLAN 02

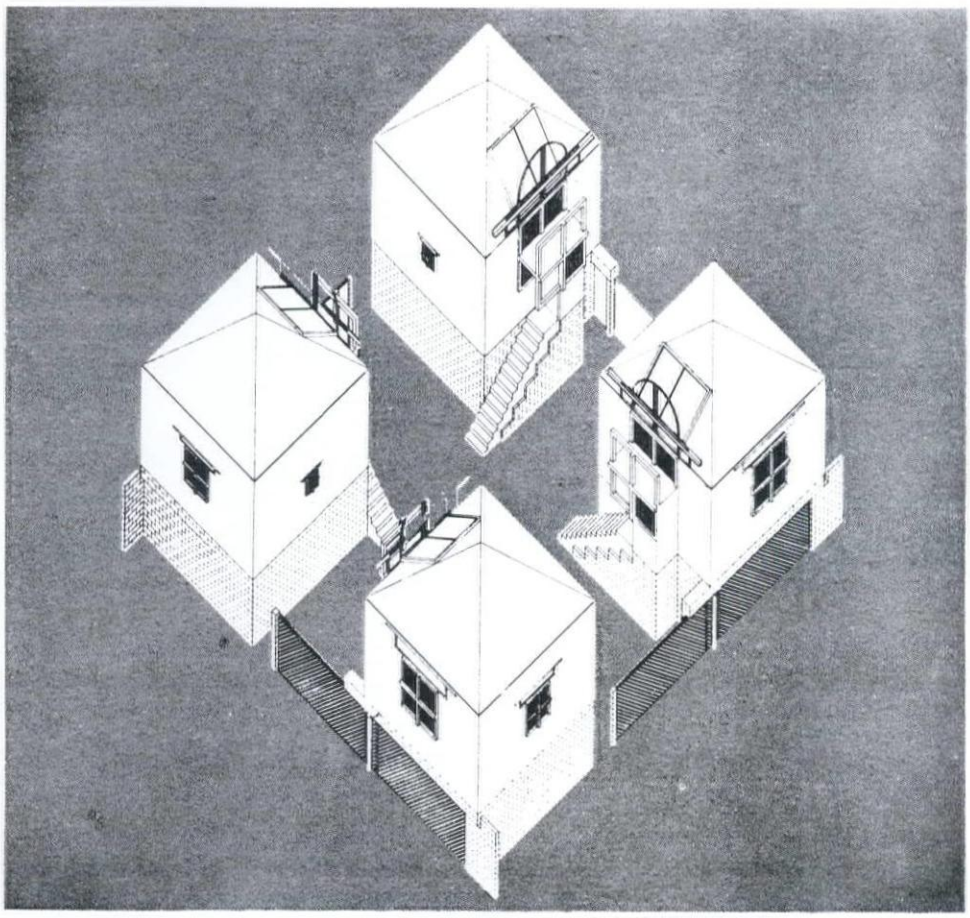




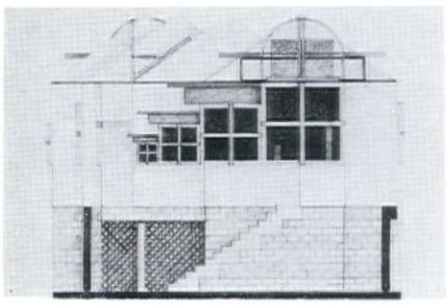


PLAN 01

2-4-6-8 House, *Venice, Ca. 1980*





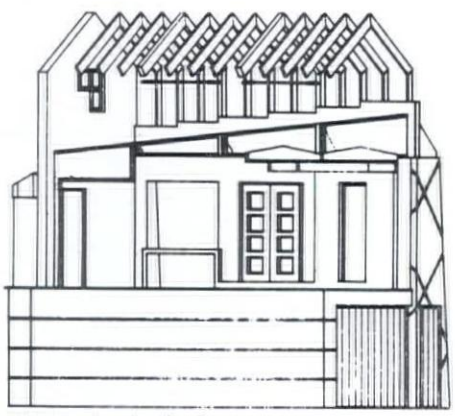


この〈おもちゃ箱をひっくり返したような〉建物は，1920年代に建てられた海辺のバンガローハウスの，プライヴァシーが守られ，思索ができ，同時に多目的な使用が可能なスタジオの増築で，施主自身の手で工事された．

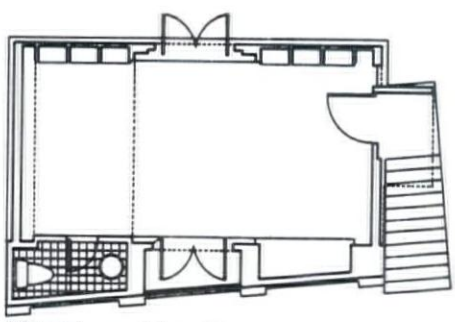
半年間にわたる施主の奮闘の経験は，この箱の内部に納められているさまざまなオブジェによって戯画的に表現されている．　それは，この特殊なタイプの難問にどう取り組むかという設計者の立場を表明している．その解決策は，建設のプロセスとその記録，形式言語によるデザイン行為というふたつの大きな分野をあつかっている．　設計の目的は，施主の価値基準を反映した建物をシンプルに，そして直截的に推進してゆくということであった．　隠遁所という面を強調するため，このスタジオは既存の住民の背後に，離れとして建てるということが考えられた．　建物は，車が2台収容できる車庫の上に台所と浴室を備えたワンルーム形式で，コンクリートブロック造の基壇，バルーンフレーム構造アスファルトシングル張りの主階，金属波板葺きの屋根を持つ．　平面と立面は内部指向的な形態を持ち，窓は空間の求心性を強調していると同時に外部環境から異化された相貌を放っている．

Sedlak House, *Venice, Ca.*

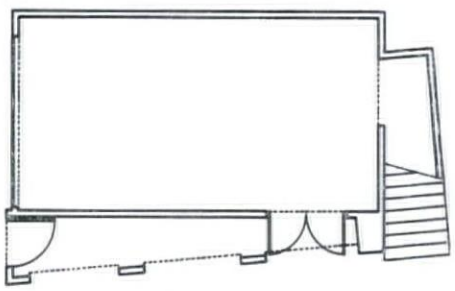
この車庫の上の住宅は図書室/スタジオ/隠遁所でもある．　斜線格子の入ったプラスターの基壇が横羽目板張りの中層部を侵し，屋根の金属板葺きが壁に垂れ下がるなど，互いに他の領域の要素を借用し合った錯綜した形態は近隣に強いインパクトを与えている．



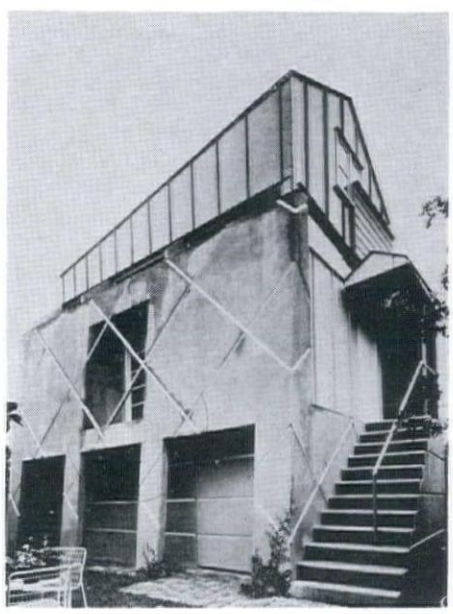
立断面図　elevation／section



2階平面図　second floor plan



1階平面図　first floor plan



Fisher / Roberts



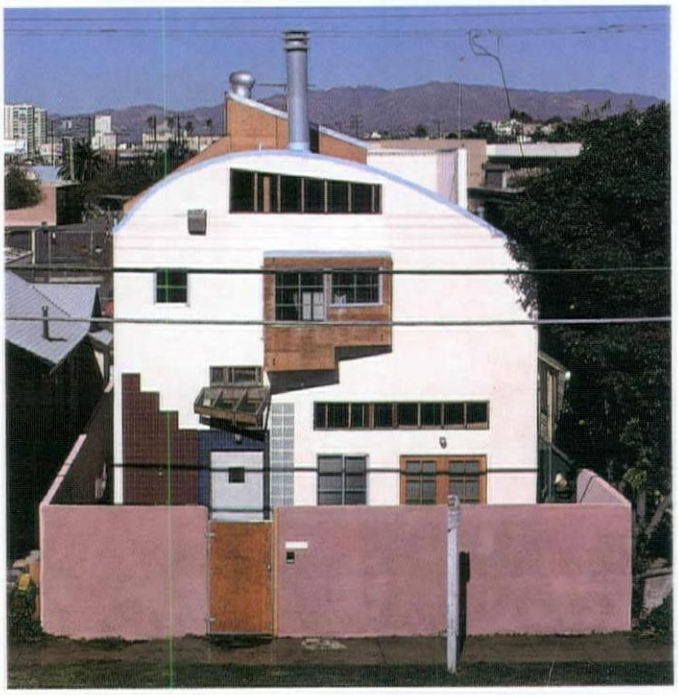
Frederick Fisher

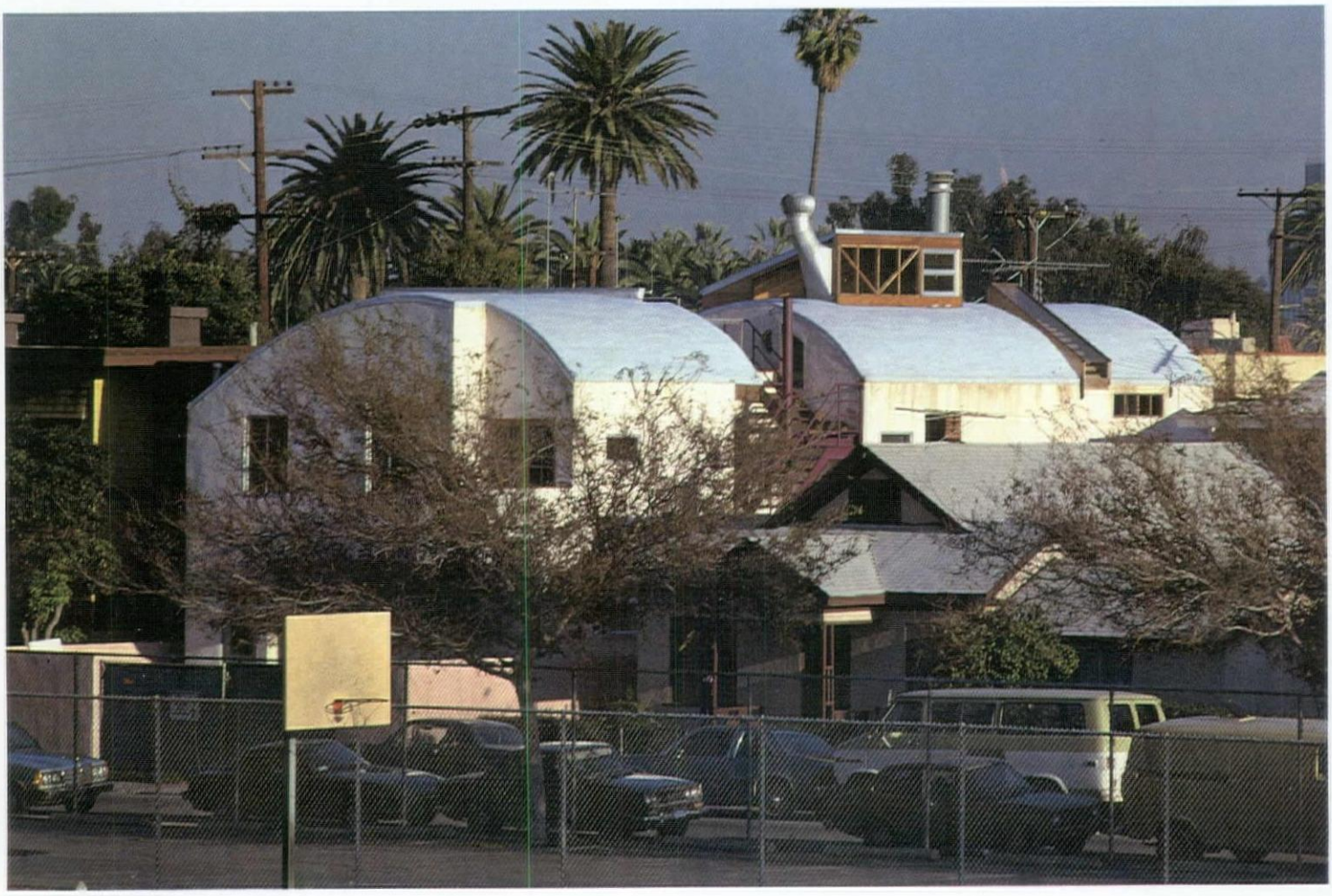
1971年オハイオ州のオバーリン大でBA，1975年にUCLAでMAを取得．Urban Innovations Group，Albert C. Martin and Associates，Frank O. Gehry and Associatesを経て，サンタモニカにFisher／Roberts事務所を開く．

Thane Roberts

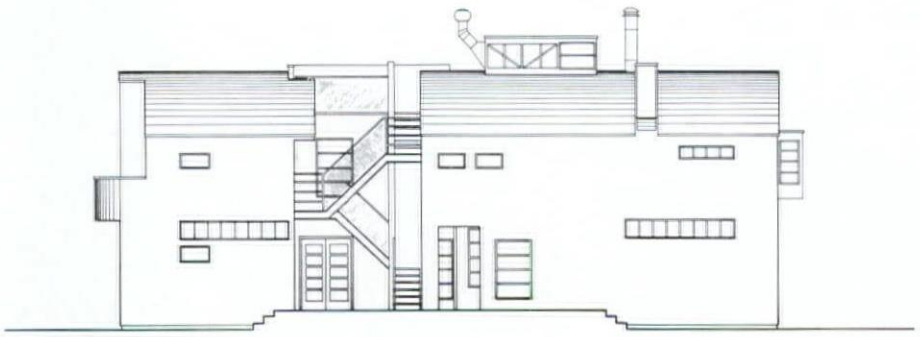
ロスアンゼルスのマリブ・ビーチに育つ．海洋学と生物学に特別の興味を抱いていた．フランスで3年を過した後，ロスアンゼルスに戻り，UCLAで建築を学ぶ．卒業後Fisher／Roberts事務所を開設する．ソーラーエナジーに関心を持つ．

Caplin House *Venice, Los Angeles, Ca.*



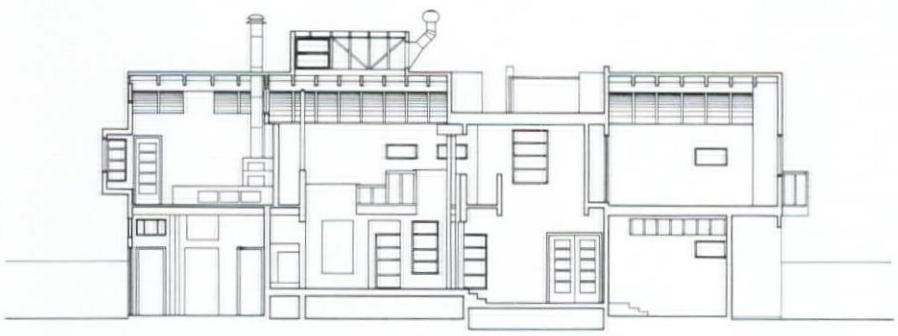



ANDY
WARHOL

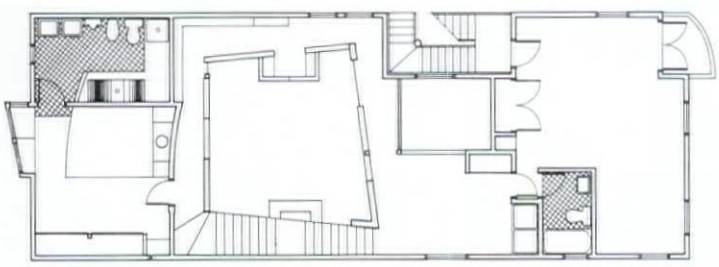




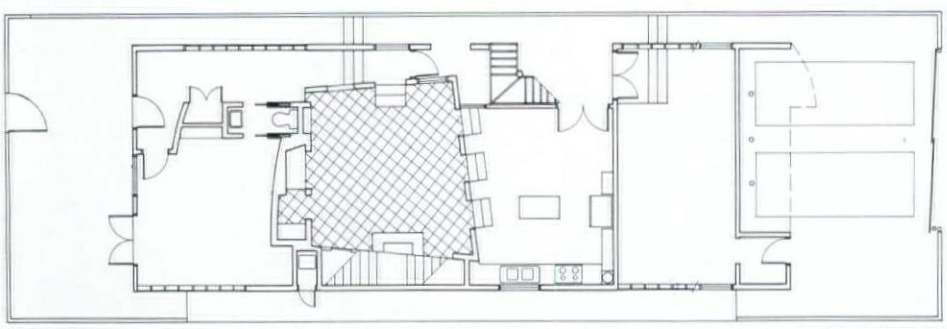
立面図　elevation



断面図　section

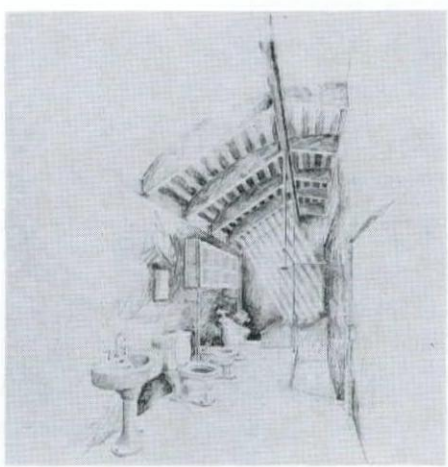


2階平面図　second floor plan

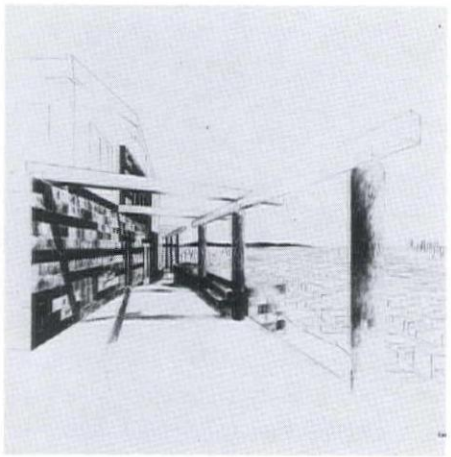


1階平面図　first floor plan

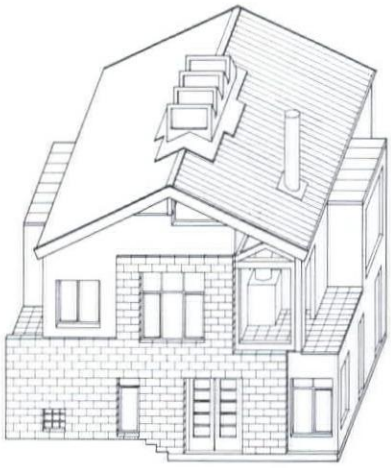
高密度の，社会的にも建築的にもハイブリッドな近隣の中の約8.1m×27.4mの分譲地に計画された，内向的で孤立的な住宅．　多岐にわたる個人的，文脈的，そして自然な連想作用をもたらすよう，船体（ハル）内部のアトリウムというシンプルなイメージが強調された．　クライアントの幼年期のボートでの記憶を取り入れ，すぐそばの太平洋へ向かって，一隻の船体（ハル）が，砕け散る波の方向に向かう姿を呈している．住宅の持つ規則性をくつがえし，さらにそれに接続する部屋を引き立たせるアトリウムに，プランの焦点が定められた．　このアトリウムは，内部空間でもあり，また外部のコートでもあるというような曖昧な空間になった．　床のタイルは，屋根瓦と共に，敷地の街路グリッドとの関係において，基本となる方位を表示している．　居間，台所，食堂といったアトリウムにつながっている公的エリアが，入口側のスタジオと奥の方の完全に隔離された音楽室とを分離している．　アトリウムからは二方向の階段が，一方は奥の書斎と客間に，もう一方は入口側にある主寝室とその浴室につながっている．　両側をつないでいるギャラリーには図書室が組み込まれている．　主寝室（浴室のついた寝室）では，念入りにしつらえられた浴室に大きな面積がさかれた．　クライアントの「入浴好き」に対する関心は，屋上のサンデッキに置かれた浴槽によってさらにはっきりとあらわされている．



Jorgensen Residence *Hollywood, Ca. 1981*



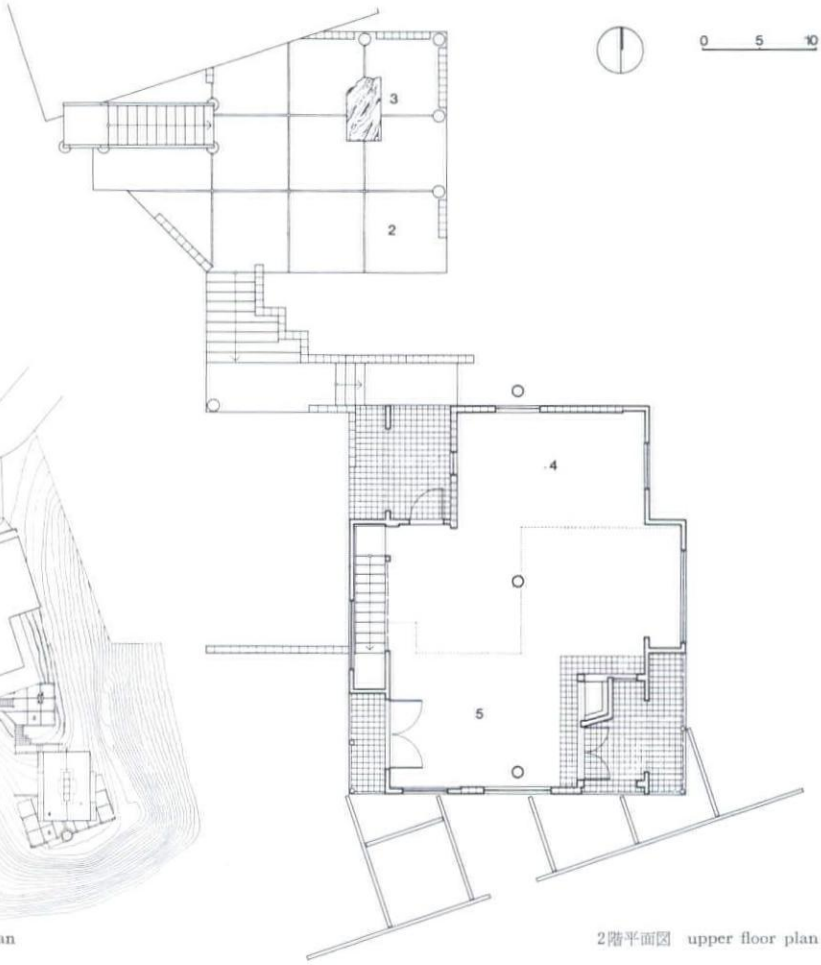




不安定な敷地の上に，堅固な隠退住居を建てることが目的だった．　敷地は，ロスアンゼルス盆地に向かって劇的な光景を提供している狭く切り立った尾根の突端に位置している．　軽い木材とスタッコ仕上げのこの地区の住宅は，壊滅的な火事によく見舞われる．

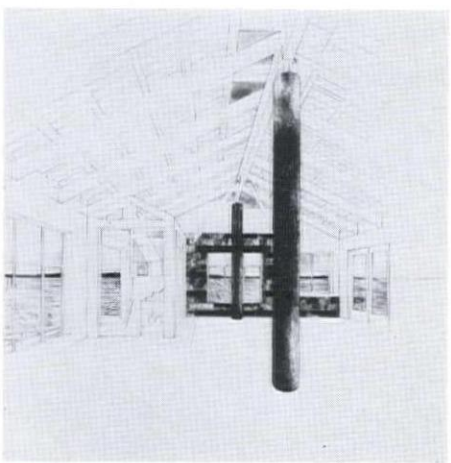
私的な仕事や生活のための環境は，既存の住居(1950年前後）の応接室や客室などから分離される必要があった．　そこでこの住宅は，大規模な石造のテラスや壁，柱の上に建つシンプルなパビリオンとして計画された．　この石造の複合体は，地面に切り込むように建てられていたり，眼下の都市に合わせて方向づけられていたり，その重量感などによって，不安定な敷地と際立ったコントラストを見せている．　2階は仕事部屋とくつろぎの場を兼ねたワンルーム，1階は寝室と浴室である．

この住宅は，居住ということに関するふたつのテーマを，控え目な方法によって表現したエッセーとして受け取っていただきたい．　つまり，ひとつは自然の気まぐれに対する耐久性，もうひとつはパビリオンの，土地と都市に対する図と地の関係である．

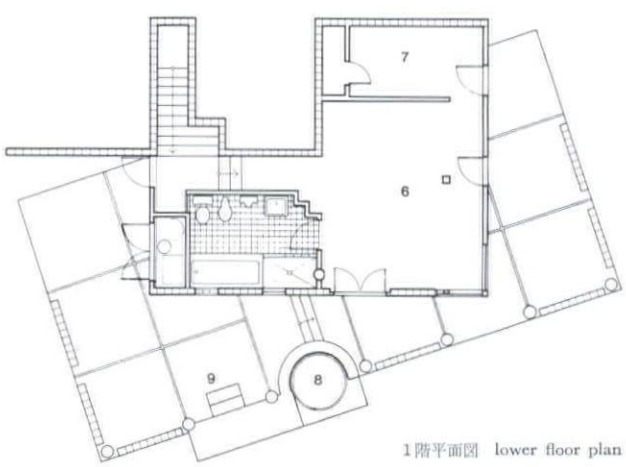


配置図　site plan

2階平面図　upper floor plan

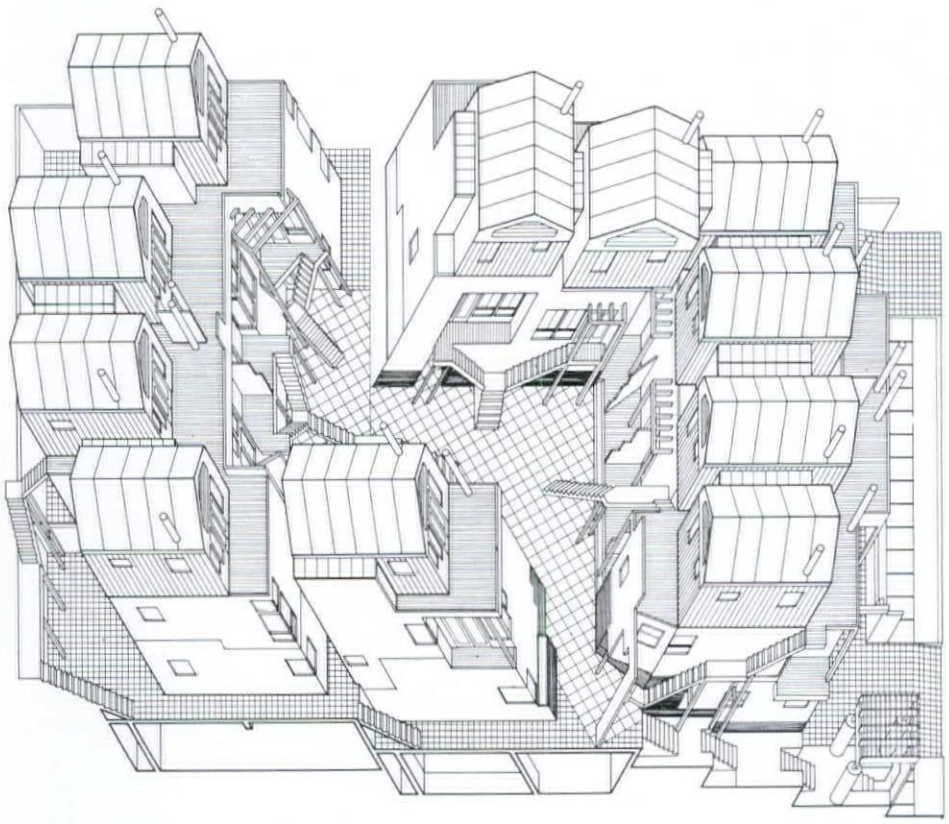


1 既存住宅　existent house
2 パティオ　upper patio
3 テーブル　table
4 仕事部屋　office area
5 休息室　seating area
6 寝室　bedroom
7 収納　closet
8 プール　jacuzzi
9 パティオ　lower patio



1階平面図　lower floor plan

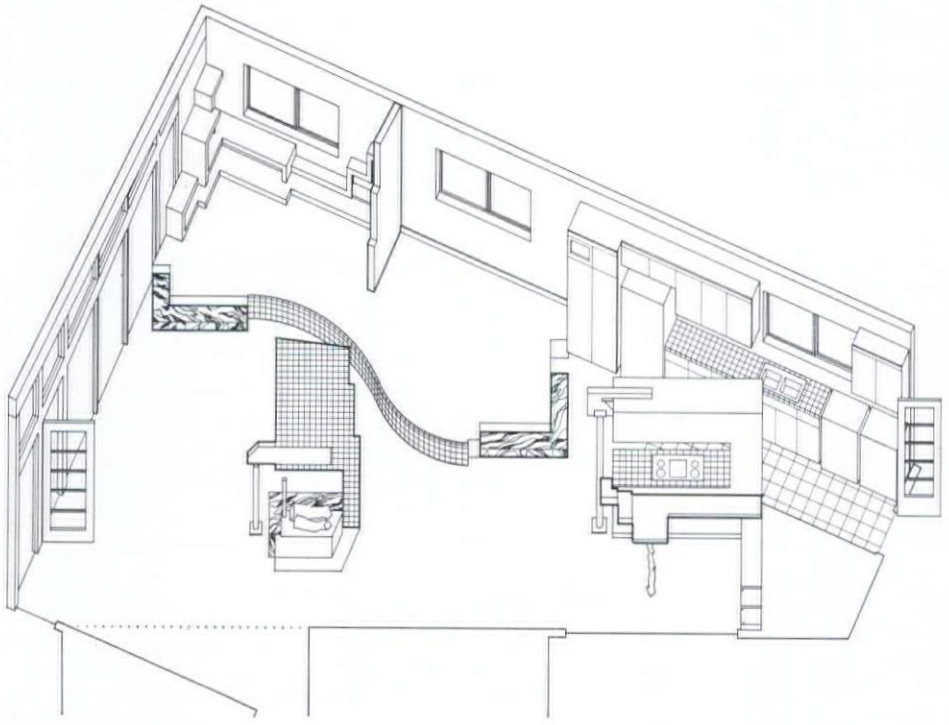
Ocean Park Townhouse Condominiums



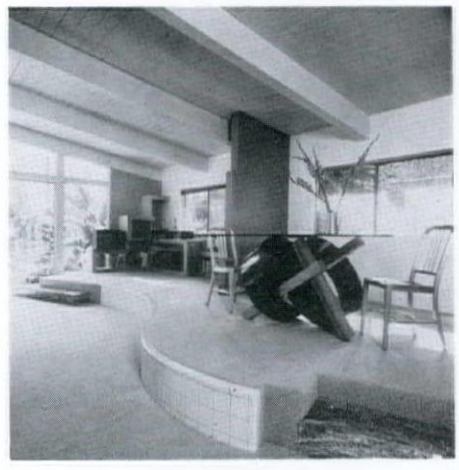


海への眺望がひらけた丘の上の約1000m²の敷地に，11の住戸と駐車場を作る計画．　3層の駐車場の構造が，不規則な足もとを支持していて，各戸から駐車場への直接のアクセスを確保している．　各住戸は，平面上，および断面上で，段をなして計画され，最大限の眺望が得られるよう工夫してある．　余白の部分が中庭（コートヤード）を構成し，それが遠望と近望とのバランスを生み出している．　外からの入口は，すべての住戸がこの中庭からとられている．　下部の2層（それぞれ寝室とリビング・エリアに充てられている）のマッシブな表現とは対比的に3層めは，主寝室を内包する〈家〉として表現されている．　ルーフ・デッキは，主寝室から個々にアクセスが可能である．　この〈家〉は，大きさ，形態，材料といった点で，姿を消しつつあるこの地のバンガローを思わせる．　地元のヴォキャブラリーである木の階段やポーチも，中庭にとりこまれている．

Jan Horn Residence　*Beverly Glen, Ca, 1980*







ベバリーグレンに1950年代に建てられた住宅の主棟は，限られた眺望を持つ5つの小さな暗い部屋に分割されていた．　オーナーは独身者で，特別な要求を持たず，しかも全く新しい環境を望んだ．　この仕事は，設計が展開する以前に開始された．　完全な三角形をしたエリアが，仕切りをとり払われてひとつの部屋に作り変えられた．　一連の彫刻的要素――机，食器棚，大理石のステップ，タイル貼りの基壇の端部，タイル貼りの暖炉，本棚――によって，多目的な機能をもった領域が明らかにされる．　各領域に設置されたそれぞれの要素が，その領域の機能を暗示している．　この住宅の外形は，こういった要素を包み込む中立的な容器にとどまっている．

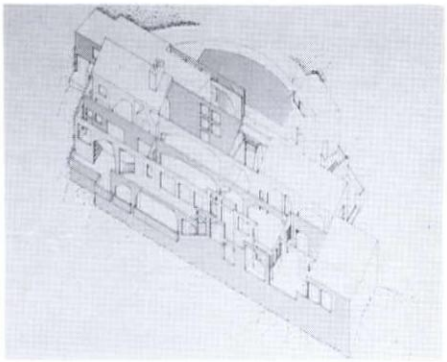
photos = Tim Street-Porter

Ronald Filson



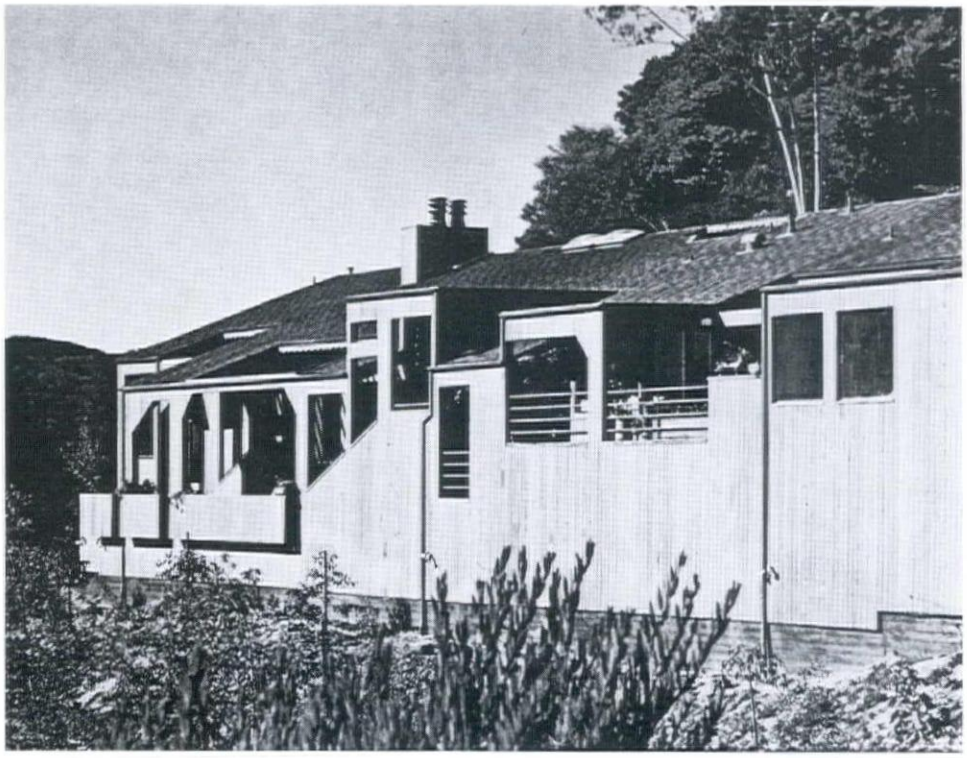
ロナルド・フィルソン：1946年，オハイオ州に生まれる．
イェール大学でBAを取得．　当時のディーンはC. ムーア．
卒業後，アルジェリアに渡り，実地の設計活動にたずさわる．
帰国後ロスアンゼルスに移り，ムーアと連係するUrban Innovations Groupに参加する．　そこでは，ムーアとともにイタリア広場を始めとして，数多くの作品を設計している．
教育活動としては，UCLAで長らく教えていたが，現在は，ルイジアナ州ニューオリンズにあるTulane大学建築学科の教授となっている．

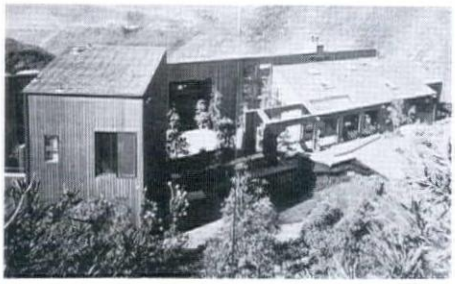
The Shelton House　*Bel Air, Ca. 1980*



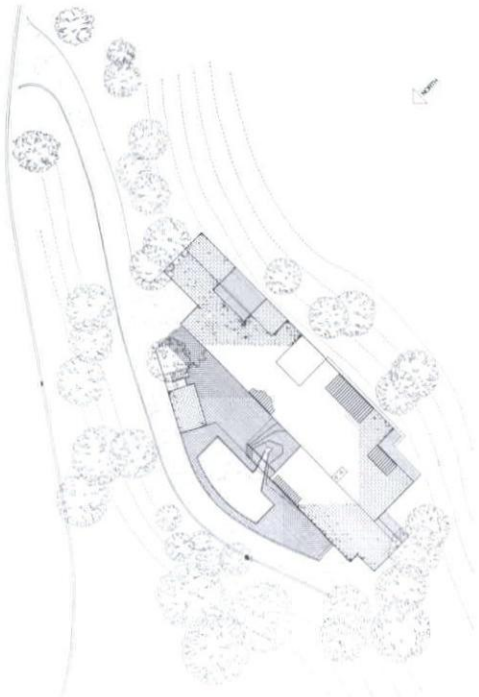
これは経済学と心理学の，ともに専門家同士の夫妻のための住宅で，サンタ・モニカ山脈のすばらしい峡谷のひとつを見遙かす台地に立つ．　デザイン担当：ロン・フィルソン，アーバン・イノヴェイションズ・グループ．

This is a house designed for a professional couple, economist and psychologist, on a shelf of land overlooking one of the magnificent canyons of the Santa Monica mountains. Design credit should read: Ron Filson, Urban Innovations Group.

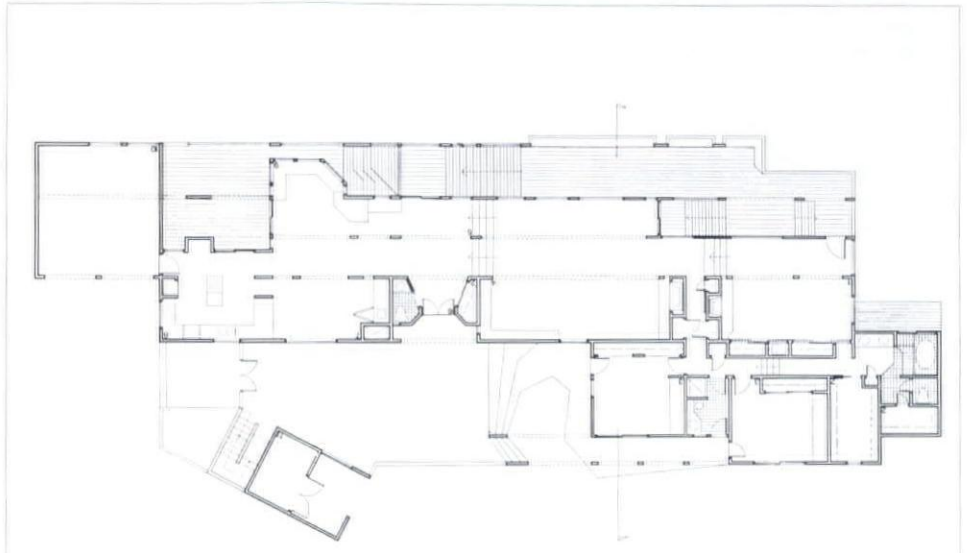








配置図　site plan



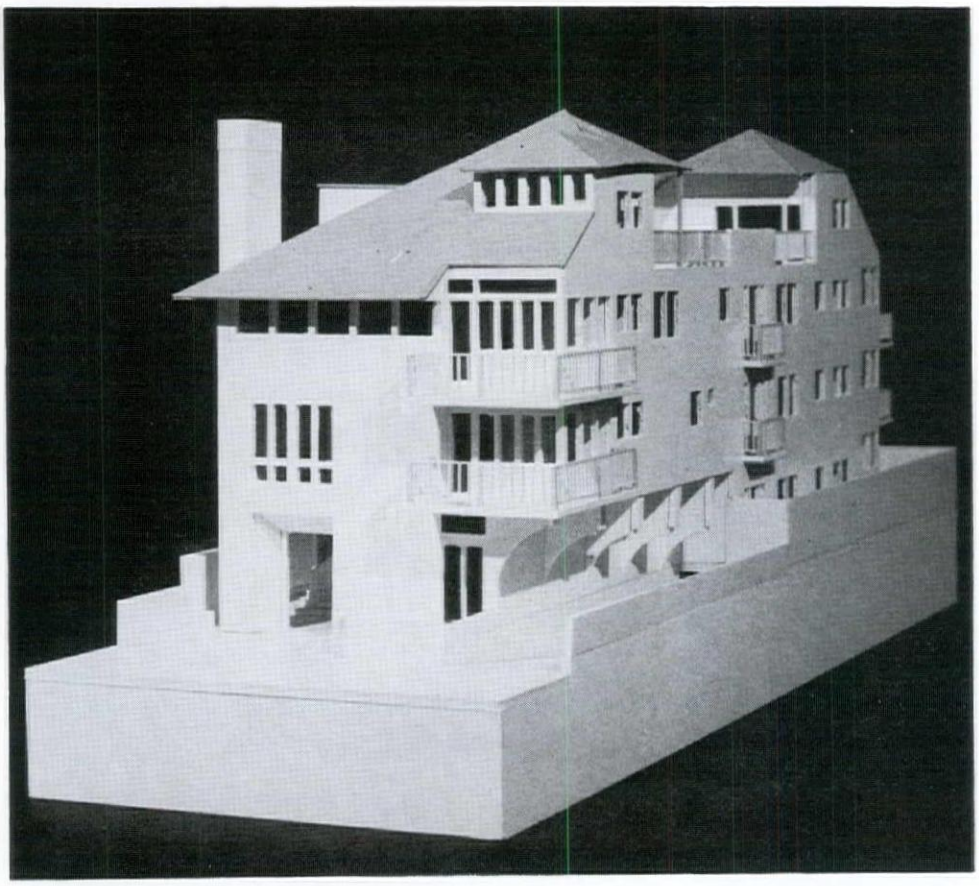
平面図　plan

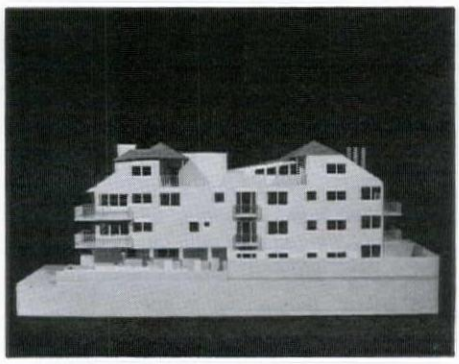
Barton Phelps

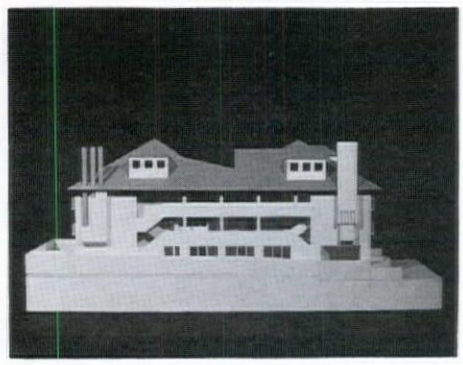


バートン・フェルプス：1946年，ニューヨークに生まれる．ウィリアムズ・カレッジでBA，イェール大学でMAを取得．Colin St. John Wilson, Gruen Associates, Frank O. Gehryを経て，1976年，Urban Innovations Groupに参加，現在に至っている．　1978年よりAppleton／Phelps事務所を主宰．UCLAとライス大学で教鞭をとる．　経歴から知られるように，ロスアンゼルスの若手建築家の元締的存在のフランク・ゲーリーのところに3年間在籍の後，チャールズ・ムーアと連係しているUIGに移り，現在，建築ディレクターをつとめている．　その作風はゲーリーとムーアの双方の影響が感じられる．

Keith Avenue Condominiums　*Hollywood, Ca. 1980*

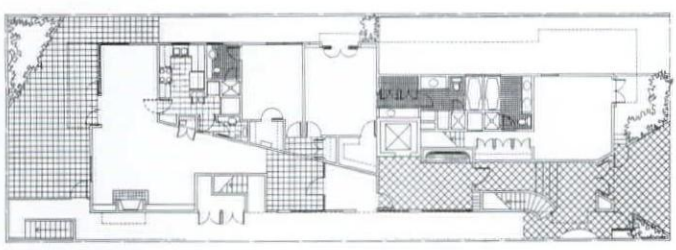




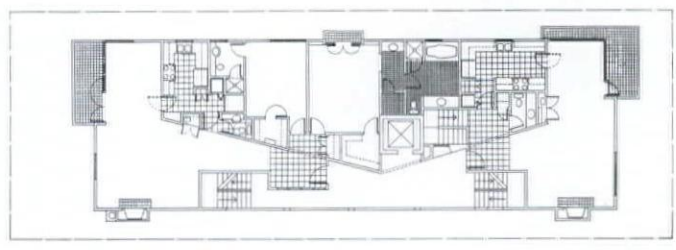


約12.2m²の間口を持った敷地に立つこの約1,200m²の5戸のコンドミニアムに，ディヴェロッパーから課せられた要求は，建築可能な面積をすべて囲いこむこと，であった．　両側の敷地の開発計画によって，結局のところ，通りからの正面のみが見えることになろう．　外観において各戸の独立性を強調するというよりも，正面が，この5人のオーナーたちに分け持たれた〈家〉の象徴として見たてられている．　通りからの導入部は，小さな囲われた前庭を通してで，片側に泉がある．　すべての住戸には，建物の側に沿って走る開放的なポーチから入ることができる．　斜めの壁が，住戸の連なりに沿って走っていて，寝室，浴室，台所を，リビング／ダイニングの領域から分けており，ポーチの角で終わっている．　寄棟屋根は，近所の大邸宅にこの建物を似せており，木造の融通性を開拓していて，また19世紀的構成を示している．

This 13,000 sq.ft., 5-unit condominium replaces a small house on a 40 foot wide lot. Requirements imposed by the developer call for the building to enclose the entire buildable area. Projected development on either side will result in only the front being visible from the street. Rather than emphasize individual units from the outside, the front is seen as the shared symbol of "house" for its five owners. Entry from the street is provided through a small covered court with a fountain at one side. All units are entered from open porches running along the side of the building. Diagonal walls, running along the length of the units, separate bedrooms, baths, and kitchens from living/dining areas and end in corner porches.



1階平面図　ground floor plan



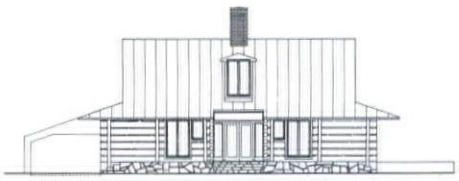
2階平面図　second floor plan

The Thompson Residence *Cedar Bluff, Va. 1979*

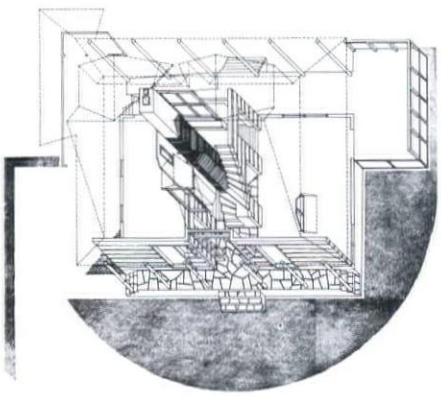
60才代はあちらこちらを旅行して廻った施主は，彼女の一族が4世代にわたって住んでいた辺鄙で美しいアパラチア山脈の谷間に強い愛着をいまだに持っている．ひとりぼっちで質素に暮らしている彼女は，時々，大勢の親戚や友人たちを家に招いてもてなす．　4人の子供を育て上げた大きな住宅を去る計画をしている彼女の，新しいより小さな家に対する要求は単純ではあるが矛盾がないわけでもない．

最近の冬の寒さは厳しいため，彼女は広い住宅の暖房費を憂慮しているが，広いリビング／ダイニングと客用の予備寝室をあきらめてはいない．　また彼女は〈カントリーハウス〉を要求している　この言葉は，この地方の開拓者が住む丸太小屋の農場を彼女にイメージさせるものである．　同時に，広々とした部屋や，むしろ英国のカントリーハウス風ともいえる，周囲に点在する19世紀初期の農家のファサードに対する彼女の趣味も相変らずである．

地方的特色のある親近性とフレキシブルな使用能力を備えたこの老女のための住宅は，夏は居間に冬は物置きに使用する渡り廊下で分けられたふたつの丸太壁の長方形の部屋の上に切妻屋根をかけた，〈犬小屋〉風のキャビンである．

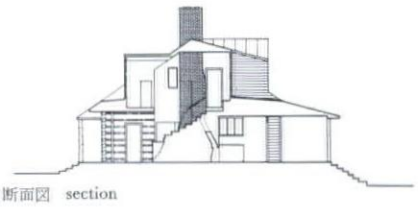


立面図　elevation





立面図　elevation



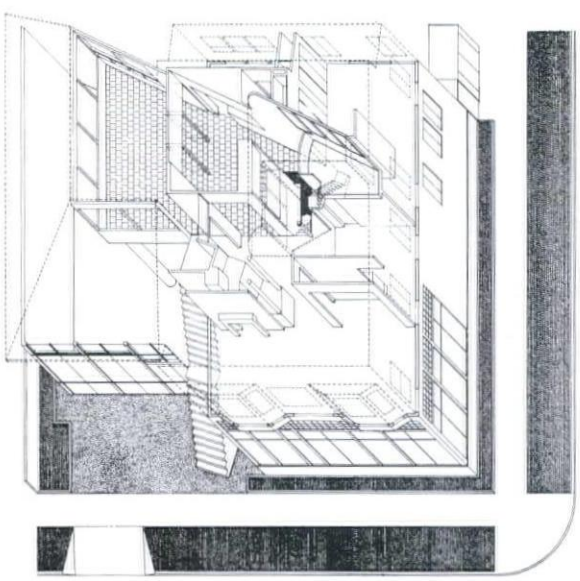
断面図　section

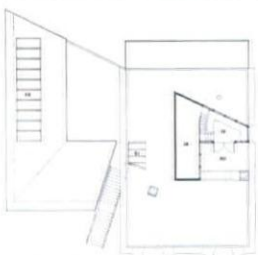
The Arizona Building *Los Angeles County, Ca. 1979*

われわれの施主は，ロサンゼルスのアーティストとして知られているが，80年の風雪に耐えた角（かど）の食料雑貨店を，自分の住居と仕事場に転用する可能性に興味をそそられていた．　ふたつの大きなスタジオ・スペース，コレクションのためのギャラリー，客用の部屋，そしてかれら自身のための大きな住まい，が要求事項だった．

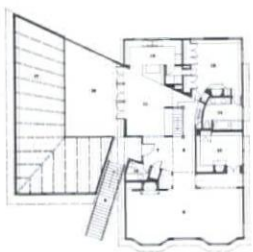
われわれは施主に勇気づけれ，古い建物を〈見出さるべきオブジェ〉として扱い，目だった大きな（あるいは小さな）特徴，たとえば店から立ち上る中央階段であるとか，店頭のスリガラスについた 7 up のサインといったようなものすら，そのままにとっておくことにした．

新たなウィングは，かって駐車場であった庭に建てられ，ふたつのスタジオの内，大きい方を収容している．その納屋風の形態は，今世紀の変わり目に建った商店と，みごとな対位法をなしている．　まっすぐな階段は，石貼りで，ふたつの建物の間にはさまれている．それには一気に2階の主たる居住空間および戸外室に達している．　結果的に，この建物はここらあたりの住宅地にあってささやかなランドマークであり続け，またロサンゼルスのほとんどの地域で失われつつある，かつての典型的な近隣のつながりを彷彿とさせることになった．

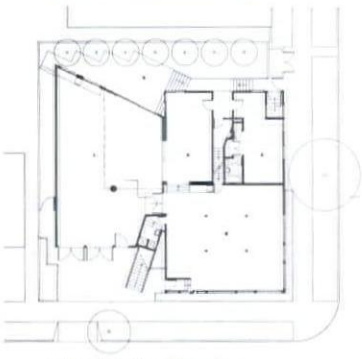




3階平面図　third floor plan



2階平面図　second floor plan

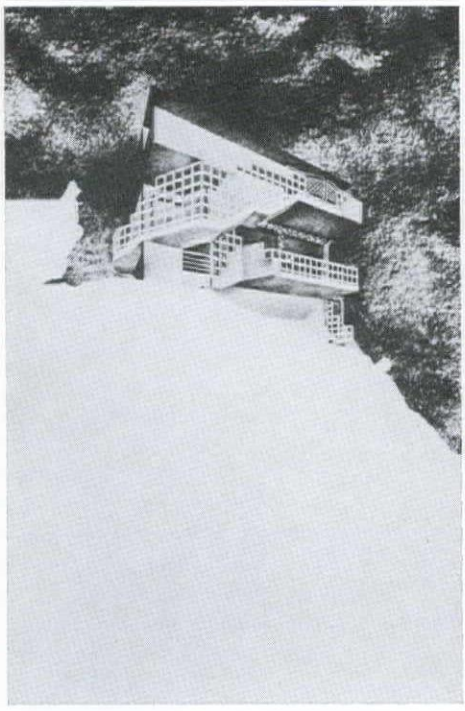


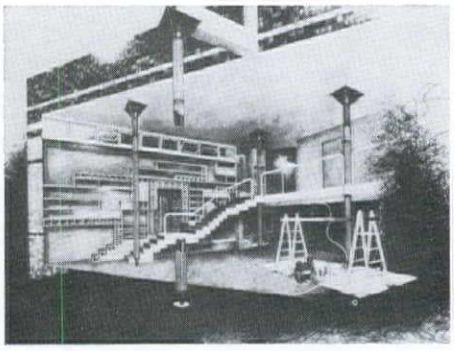
1階平面図　first floor plan

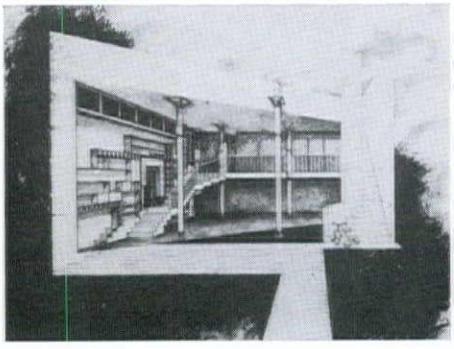
Coy Howard

コイ・ハワード：1943年に生まれる．
テキサスからカリフォルニアに来て，1971年 UCLA を卒業．UCLA では Tim Vreeland の周辺に集まった優秀な若手グループの1人であった．　卒業後，大学に6年間とどまったが，1977年事務所を開設．　当初はデザイナーを称し，グラフィックを始め，家具デザイン，工業デザインなどを広く手がけた．建築については，幾つかの小規模な改築，増築があるのみで，作品と言えるようなものはないが，モノクロームの迫力に満ちたドローイングが評判高く，各所の展覧会に招待されている．また，ポスターのデザインにおいても秀でていて，ニューヨーク近代美術館やルーブルを始めとして，幾つかの美術館に作品が収集されている．









「私は，平面，断面，立面を描く場合のクールなドローイングと，パースペクティブを描く場合のホットなドローイングの間を揺れ動く．　私にとって重要なアイディアは，建築の時間的，感覚的な性質を考慮に入れるような技術の領域を外れたところには成り立ち難いものである．　デザインの過程におけるドローイングは，最終的なドローイングとは異なり，いろいろな技術や実現の方法についての可能性を示すのに都合が良いばかりでなく，固有の質を有する．　だから，建物をデザインすることは私にとって重要な問題を探求する良い機会なのだが，ドローイングを描くことはまた違った側面で良い機会だと言えるのだ．」

左（left）Hauser Residence, Pacific Palisades, California. Drawing by Coy Howard and Sherwood Roper.
右上（right above）Boudov Residence, Palos Verdes, California. Drawing by C. Howard and S. Roper. Perspective of Living room.
右下（right below）Boudov Residence Perspective from orchard.

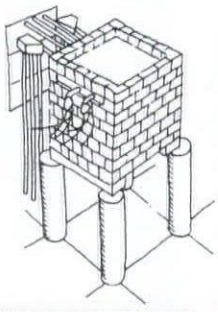
Studio Works

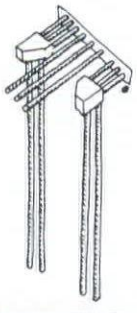
Craig Hodgetts（右）と Robert Mangurian（左）の2人で，Studio Works を名のっている．　Hodgetts は1937年オハイオ州に生まれる．　最初は自動車のデザインを学んだが，後オバーリン大で美術を専攻．　それから劇作を学び，UC バークレーで建築を修得．　1967年にはイェール大で MA を得る．1968年 Mangurian とともに事務所を開く．　2人とも東海岸の出身の故に，よく東からの逃亡者と称されているが，その彼らの作品がとりわけ西海岸的，さらには LA 的なのは皮肉なことである．　彼ら，ことに Hodgetts の方は映画に興味を持ち，実際，映画のセットのデザインを数多くこなしてきている建築のデザインや解説の仕方にも，その影響が見てとれるであろう．

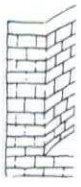


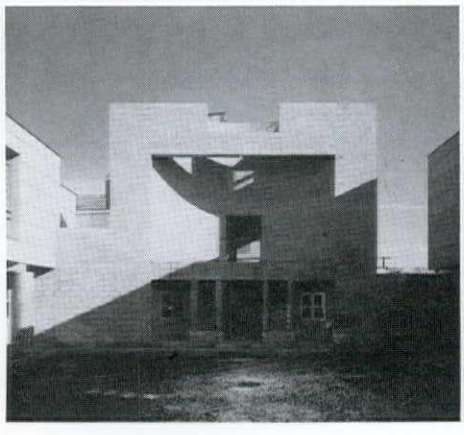


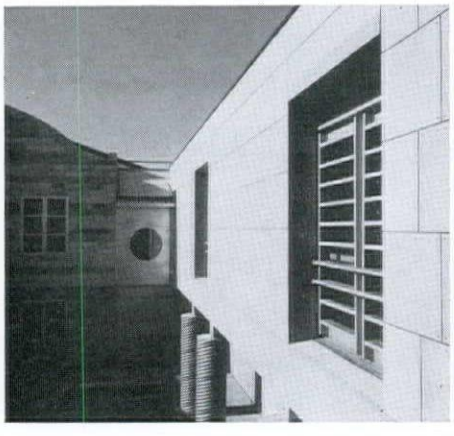




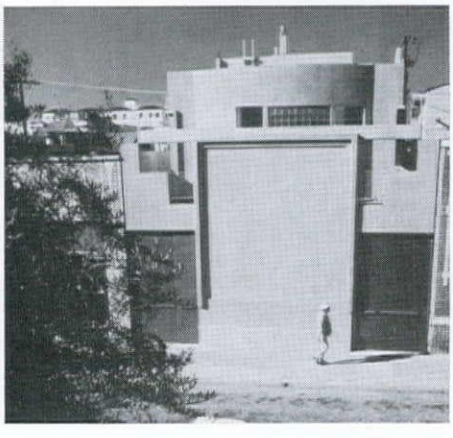








左（left）：South Side Settlement, Columbus, Ohio, 1980. 周辺地区は郊外住宅地であり，この建物の外側も，それに合わせてスケールを小さくし，全体がひとつのマスとして見えるのでなく，幾つもの小さなマスの寄り集まりとして見えるよう考慮されている．　建物の各部分には歴史的な，あるいはヴァナキュラーな形態が自由に引用され人びとの記憶に訴える．
下（below）：Gagosian Studio, Venice, Ca.

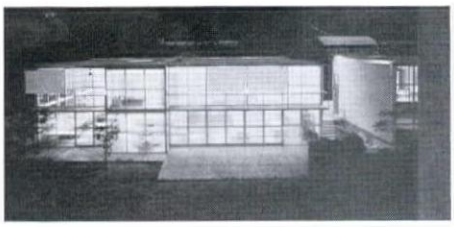


Peter de Brettville

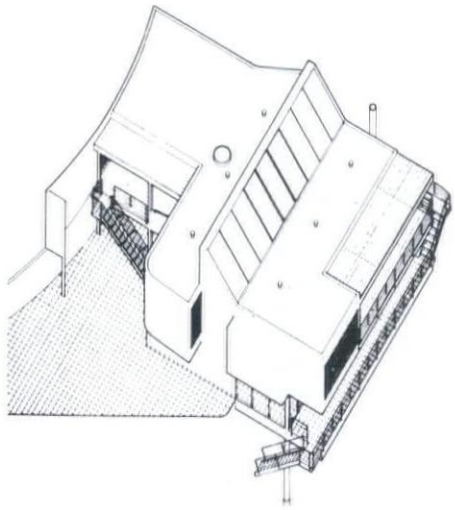


ピーター・ドブレットビル：1941年サンフランシスコ生まれ．イェール大学で，BA, MA を得，卒業後イタリアに渡り，1年間ジャンカルロ・デ・カルロの下で働く．　帰国後，幾つかの事務所を経て1974年に独立する．　現在，USC で教鞭をとる．実質的なデビュー作は自邸でもある Willow Glen Houses で，それが彼の評価を決定的に高め，また今でも彼のデザインした多くの建築（主として住宅）の中でも，飛び抜けて秀れたものである．　チャールズ・イームズやクレイグ・エルウッドに代表されるカリフォルニア・ハイテク・モダンの流れの正当な嫡子と目されるが，最近の作風はやや折衷的になってきている．　それは，以下の彼の言葉にも現われているように思われる．

「モダニズムは60年代の建築教育の主流だった．　それは形態の抽象性，独自性を重んじたので，結果として，建築の感情的ないしは象徴的な内容とか，ある種の様式とかが無視されてしまった．　その当時，歴史的な様式を学ぶように勧めた教師は，ほんのわずかしかいなかったが，今では皆が皆，過去――モダニズム以前――に目を向けている．　けれども，単にモダニズムを放棄して，狂ったように折衷主義とか浅薄な歴史主義に突き進むのではなく，参照の枠組を拡げるような方向に進みたいと思う．　ミニマリズムや純粋なフォルマリズムを排し，もっと楽しく，馴染みのあるものを作りたい．」







左 (left)　Willow Glen Houses, Los Angeles, Ca. 1976.

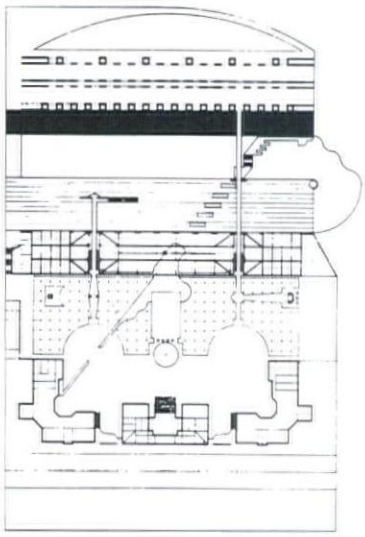
右 (right)　L. A. House, Ca. 1978.

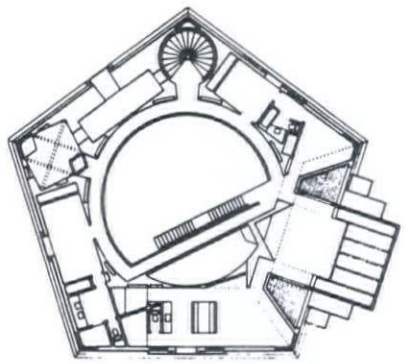
Frank Israel



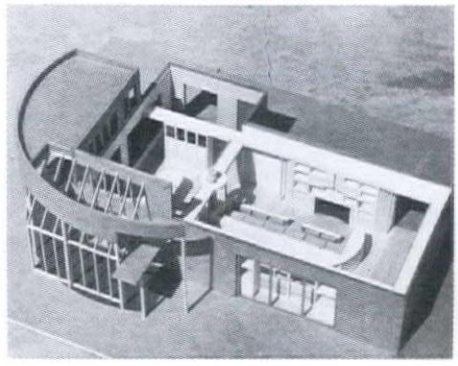
Franklin David Israel：1945年ニューヨーク市に生まれる．ペンシルヴァニア大学で BA，イェールを経てコロンビア大学で MA を取得．　ローマ大賞を得て2年間ローマに遊学する．1977年より UCLA で教鞭をとり現在に至る．　これまでは，建築の分野よりも，むしろ映画のアート・ディレクターとして活躍してきている．　例えば R. ヴァディムの〈Night Games〉とか，G. ローデンベリーの〈Star Trek〉などに関わっている．また PA 誌を始め，多くの雑誌にロスアンゼルスの最も前衛的なシーン（音楽・映画・ファッション・インテリアなど）の紹介記事を載せている．

左 (left)：Drawings for the Henry James Cenotaph, Rome and Paris.　「私は建築とは一体どんなものなのかという問いかけを望んでいるのだが，かって一度もそうされたことはない．　私にとっては建築とは自伝であり，ひとつの事象が次のものをよびさますようなものである．　私は，自分の旅日記を映し出すような建物を，自分の真の感情を現わすようなものを作りたい．　私はたまたまヘンリー・ジェームズに出会った．　彼は時と場所との綿密な創造者であり，ひとつ所に滞留はしないがそこを愛しむ人である．　彼は私に多くの解決の糸口を与えてくれた．」









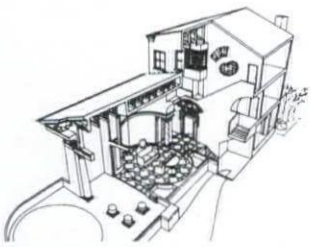
右下 (right below) Ranch Regency. Brentwood, California.　1979.

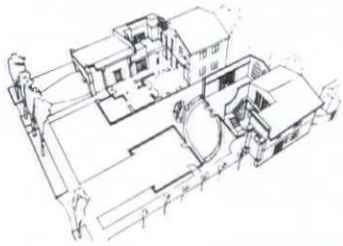
右上 (right above)：Clark House, Hollywood Hills. Ca. 1982.

Thomas Gordon Smith

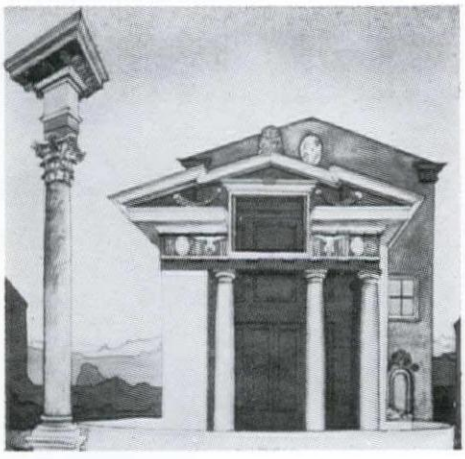


トーマス・ゴードン・スミス：1948年カリフォルニアに生まれる．　カリフォルニア大学バークレー校で絵画と彫刻を学び，さらに建築の MA を得る．　1979年ローマ大賞を得てローマに遊学．　彼が突如として脚光を浴びたのは，チャールズ・ジェンクスが《ポスト・モダニズムの建築言語》において，彼の称揚する〈ラディカルな折衷主義〉を成就している人として，スイスのライヒリンとともにスミスの名を挙げたからである．以来，ヴェニス・ビエンナーレを始め各種の展覧会に次々に出品している．　実現した作品は極めて小規模な２つの住宅のみであるが，そのいずれにおいても，古典的要素を唐突なほど自由に用い，断片の集積が原色に近い色彩とあいまって，不可思議なムードを呈している．











左(left)：Matthews Street House, Berkeley, Ca. 1978.　古くからの住宅街の一画にある小さな家．　正面は多彩色の神殿のようであり，左手前に柱頭をいただく独立柱が立つ．　小さな家ながら，ある種の威厳と堂々とした様がもたらされている．

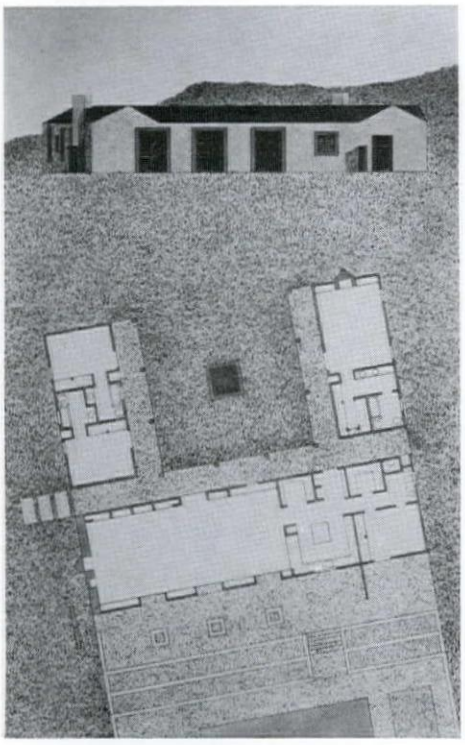
中 (middle)：Tuscan House and Laurentian House, Livermore, Ca. 1979.　隣り合う２軒の家．　古典的な要素が図像的な連想作用を導くべく，自在に用いられている．

右 (right)：Jefferson Street House, Berkeley, Ca. 1976.　セルリオ風の窓を有するバルコニー．ジェンクスの書に掲載されたもの．

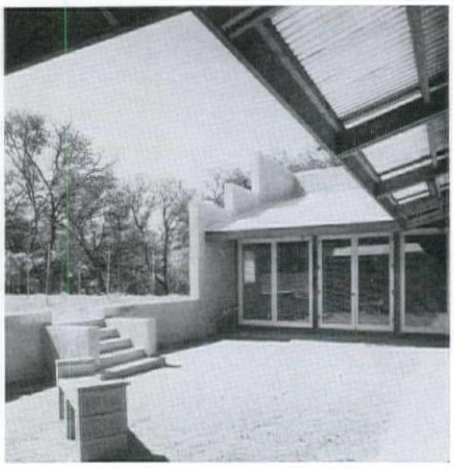
Batey／Mack

Andrew Batey：1944年カリフォルニアに生まれる．　歴史を学んだ後，ケンブリッジ大学．　イエス大学で BA, MA を得る．　フォスター・アソシエイツで働いてから帰国し，1978年に Mack とともに事務所を開く．

Mark Mack：1949年にオーストリアのユーデンブルクに生まれる．　ウィーンの芸術アカデミーに学んだ後，ハンス・ホライン，エミリオ・アンバーツの下で働き，UC バークレーで教える．　1978年以来 Batey とともに事務所を開く．











「私たちを鼓舞するものは，ラスベガスよりはポンペイの遺跡，シンケルやアスプルンドの古典主義，ロースやバラガンの原型的な厳正さである．」

左 (left)：Leonard House, John's Creek, Ca. 1977.　パートナーを組む以前の Batey の作．

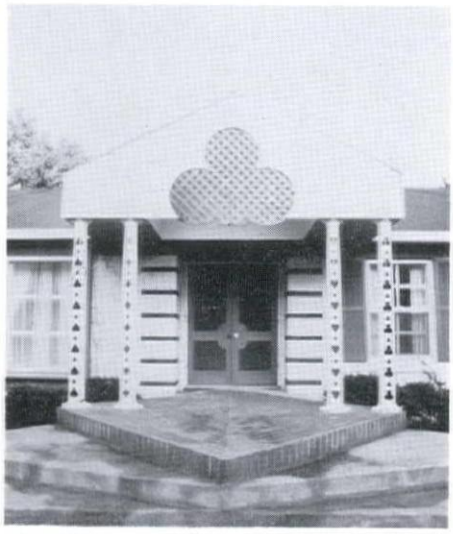
中 (middle)：Kirlin House, Napa, Ca. 1980.　ブドウ畑の只中にある家．　外周壁はコンクリートブロックにプラスター塗り．　アドベの壁のごとくマッシヴで開口が少ない．　一方，内側は骨組が露わで開放的である．

右 (right)：Anti-Villa, Napa, Ca. 1978.　人里離れた地に建つ半地下式の隠れ家．

Ace Design



Sam Dyer：1951年ボストンに生まれる．
クラーク大学でBA，UCバークレーでMAを取得後，フリーとなり，1979年からAce Designに参加．
David Weingarten：1952年カリフォルニアに生まれる．
UCバークレーでMA．　1977年Ace Designを創立．
新建築コンペ1979年度1席に入賞している．
Lucia Howard：1951年オクラホマに生まれる．
UCバークレーでMA．1977年Ace Designを創立．
3人ともUCバークレーで教えている．



カードの家

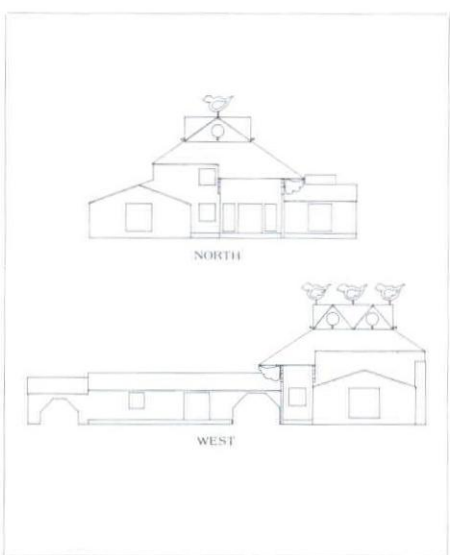
■エース・デザインの主題

ルシア・ハワード

今世紀のほとんどすべてにわたって，建築デザインの形態的な部分は，きわめて抽象的な問題だと考えられてきた．　デザイナーたちは，建物を，ある効果を作り出し，またプログラムを環境に調和させるために組み合わされた抽象形態と考えてきた．　私たちはそれに反して，抽象的ではなしに，形態的内容そのものを扱っていこうと努めてきた．　私たちは現実の世界の文化的コノテーションを追求し，開拓することこそが重要なのだと思っている．〈エース・デザイン〉という名称にしてもそうだが，私たちは自らの作品が，より多くの連想をひきおこすことを望んでいるのだ．私たちにとっては，建物とは生き方，あるいは生き方のアイディアの表現である．

私たちは，建物の生命を環境に結びつけようとしているが，その際，歴史は好ましい源泉となる．　時というレンズを通して社会的コンテクストが焦点を結び，仮想される生活についてのストーリーの基盤を形成するのである．

仮想されたシナリオは現実的なそれと同じほどに重要である．　例えば，秘密の場所とか大きな入口などは，現実の使われ方よりも，仮想上の使われ方に関して，心理上の重要性をもっていると言える．　そして，建物全体にわたるシナリオの集積が，生き方そのものなのである．　建築家がデザインしたのではない一般の建築が強い説得力を有することが多いのは，それらが大胆に生き方，あるいは生き方のアイディアを表現しているからであろう．　住宅とは城であり，農場であり，おとぎ話の山小屋であり，ジョージアン・タウン・ハウスであり，スペインの伝道所であり……．



鳥の家

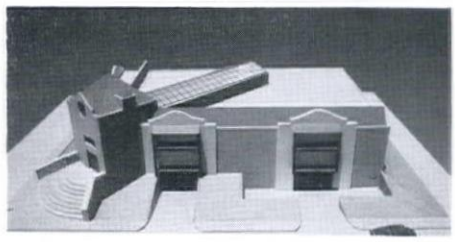


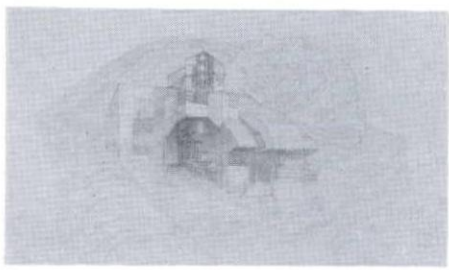
エース・デザインのシンボル

カリフォルニア州は今や，茶色に塗られた米杉を用いたデザインで覆い尽されてしまいそうだ．　それは大衆の受け入れる好みの共通分母だというのだ．しかし私たちはそれに反して，もっと確実なアイデンティティーを持った主題を追求したい．　建物は決して周囲に溶け込んだり，背景を形造ったりすべきものではなく，景観を従僕とした主人公としてあるべきなのだ．

小さな建物を作るときには，私たちはしばしば単純な主題を象徴的に用いる．〈鳥の家〉と〈カードの家〉がそれに当る．　前者はウズラの沢山いる敷地に住む愛鳥家夫妻のための風見鶏を冠した鳥小屋風の増築であり，後者はブリッジ狂の家族が住む家の増築で，破風のところにクラブが，造園のモチーフとしてハート，ダイヤ，スペードが用いられている．

エル・ランチョ・リオ・ビルは，隣接する2つの建物を引用源としている．　そのひとつはカーメル伝道所――スペイン風バロックともメキシコ風とも言える絵画的様式――であり，もうひとつはラーキン・ハウス――木造の深いベランダをもったグリーク・リヴァイヴァル風様式――である．　私たちの試みた2つの様式の合体は成功した．





上：フォンテンブローの家　下：シアター・ハウス

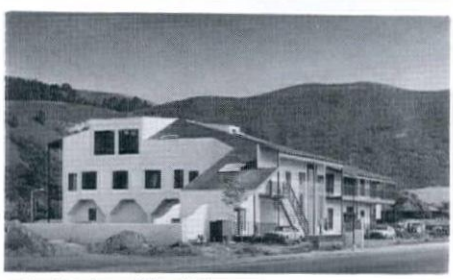
シアター・ハウスは，若く活動的な夫婦のための住宅である．　敷地は丘の上にあり，丘の切れ目から下方にオークランドの街の中心が見える．　そのような信じられないような光景をバックとした劇場のような住宅を，私たちは作ろうとした．　住宅の各部分はすべて劇場の各機能と対応している．

私たちは，クライアントの価値観をとらえ，また想像力の肥沃な源となるような主題を追求していきたい．　なぜなら，建築というものは，かつては人びとが自分たちの存在の全局面を刻んで表現した類のものであり，生活の豊かな媒体となりうるものだったからである．

●Lucia Howard／Ace Design

（この文はLucia Howard《The Shock of Recognition: the subjects of Ace Design の抄訳である．）





エル・ランチョ・リオ・ビル

カリフォルニア・ドゥリーミン'　California Dreamin' *by Kiyoshi Takeyama*

竹山 聖

今，カリフォルニアを熱い息吹きが駆け抜ける

2年程前，ドムスが〈ザ・ヤング・アーキテクト・オブ・カリフォルニア〉と題して，カリフォルニアの若手建築家の動向を特集した．(Domus March 1980)　表紙にはかれらのリーダーとも目されるフランク・ゲーリーが満面に笑みを浮かべていた．　この時紹介された建築家を順に記せば，クレイグ・ホジェット／ロバート・モンゴリアン（スタジオ・ワークス），トム・メイン／マイケル・ロトンディ（モルフォシス），エリック・オーエン・モス／ジェイムズ・スタフォード，フレドリック・フィッシャー／セイン・ロバーツ，コイ・ハワード，そして御大フランク・ゲーリーである．　1929年生まれのゲーリーを別格として，ほとんどが40年代（現在30代だ）生まれのかれらに，〈クィック・シルヴァーズ〉①なるアダ名が奉られた．

別に確たるグループを標榜しているわけでもなく，必ずしも同じ志向を有するわけでもないが，実際，かれらの間には，同じ香をはらむ風が吹き抜けているようである．　なにがしかの友情と共感とを絆として．　たとえば今はモスと袂を分ったスタフォードが，かつてメインとともにモルフォシスを起した経歴を持つように，皆，等しくカリフォルニアの風を呼吸している仲間なのだ．

こうした交流に一役買ったのが，実はトーマス・ヴリーランドだった．　65年にルイス・カーンばりのペンシルヴァニア大学治療学研究実験棟を建てたかれは，60年代末に活動の場を東海岸から西へと移し，UCLA で有能な建築家を育てることになる．　ホジェットもハワードもそうしたひとりであって，少し世代は上るが，ニールソン（ウィズアウト・ユーをヒットさせたシンガー・ソング・ライター）邸を設計したユージン・カバーもそうだ．　ヴリーランドはそこへゲーリーを招いて，ここにクィック・シルヴァーズの芽生えが準備された．

カリフォルニアといえば輝く太陽と青い空．青い海にサーフボード．　吹き渡る風まで輝いている．　風土が必ずしも建築を決定するわけではないが，意識に落ちる風の香と土の匂いはなにほどか表現に映し出されるもので，カリフォルニアの若い連中の仕事を眺めているとなおさらその感が強い．　一口に言って，建築を心から楽しんでいる．　モダニズムからの距離を測るものでもなく，歴史に権威を見るでもない．形姿の純粋を追うでもなく，ましてや美を極めるでもない．　そうした肩に力の入った姿勢から最も遠いのがかれらであって，〈深刻さ〉ほどかれらに無縁の言辞はない．

建築が文化的事象のひとつであるとする観点からすれば，そこには住まうということに対するなにがしかの思想の表明が期待されることになる．　それを勿体つけてくだくだしく語りつぐ理論の整合に，わけても重きを置いてきたのがこれまでの指導的立場にある建築家のスタイルであった．　その実，理論で説明のつかぬことに関して，すなわち言葉で語りきれぬことに関しては，いきおい表現も弱腰となる．

「我々は語ることができるより多くのことを知ることができる」②と述べたのはマイケル・ポランニーであったが，建築の実作に携わる者なら誰しも実感しているはずのこの思いを，臆することなく，積極的に展開してきたのが，いまやカリフォルニア・ニューウェーブのゴッド・ファーザーともいうべきチャールズ・ムーア．イェール大学にあってかれの同僚であり，おそらくは思想的な影響を相互に及ぼし合ったであろうロバート・ヴェンチューリが，自らの理論に却ってがんじがらめとなってしまい，どこか自由闊達さを欠くきらいのある昨今の状況に対して，ムーアの自由闊達ぶりは，老いて（というと失礼か？）なお盛んといった感がある．かれは言う，「理性の家には詐欺師がおり，〈合理的〉の反対は〈非合理〉でなくて〈実際的〉ではないか」③．

カリフォルニアの若手の作品の自由闊達さの背後には，確かにムーアという精神的支柱の存在を感じさせるなにかがある．　ヴリーランドと同じく'25年に生まれたムーアが'75年以降，UCLA に本拠を置いていること．　かれと密接に関りを持つアーバン・イノヴェーションズ・グループの代表格であったロナルド・フィルソンやバートン・フェルプスは無論のこと，かつてそこに属したフィッシャーも，いわば直接の弟子筋にあたる．　カリフォルニアにおけるムーアの広汎な活動を通じて，その思想的影響は測り知れぬものがあろう．　なにより，建築における〈深刻さ〉を払拭した功績は，ひとえにかれに帰されてよい．

カリフォルニアの若手は，心からカジュアルである．　ヴェンチューリの若ぶりには，どこかしら無理したカジュアルっぽさがつきまとう．　やはりかれは東部エスタブリッシュメント出のエリートで，イタリア留学で古典への造詣も深く，本当はビシッとスーツの似合う〈深刻な〉紳士（ジェントルマン）なのだ．　ムーアはその点，ミシガン，フロリダ，カリフォルニアという田舎育ちのカジュアル派，根っからの幼児性を残しているようで，そこらがカリフォルニア・ニューウェーブの元祖たる由縁である．

ひとつ例を挙げてみよう．　ムーアの導入した〈斜めの壁〉というヴォキャブラリーである．　おそらくムーア自身はカーンに学んだものであろうし，ヴェンチューリも自分の〈斜めの壁〉をカーンを引き合いに出して語っている．ただカーンやヴェンチューリに比しても，ムー

アのそれはいかにも〈深刻さ〉に欠ける．　この〈斜め〉というものの形態的意味を，先も述べたとおり，論理的に追求するというのでなく，実作を通して，直観的に活用していることがきわだって目につく点である．　こうした態度がそのまま若手にひき継がれる．　もっとも，〈斜め〉という限り，何かに対しての〈斜め〉であるはずで，その何かとは全体を統べる目に見えぬ秩序といってもいい．　目には見えぬから，全体にバラけた印象が支配的ともなるのだが，それが，ある規律なり拘束として働いている．そこからの逸脱，違犯としての〈斜め〉が，あるいは平面に現れ，あるいは立面に出現して，各作品の第一印象を決定している．　ゲーリーがムーアの〈斜めの壁〉を，〈斜めの空間〉というふうに，ひとつ次元を高めて用い出し，その空間の歪みの面白さへの道標をつけたところが，後に続く連中ときた日には，そうした手法をさらに組み合わせ，平面，立面，断面それぞれが勝手な方向を向いて，軸のずれ，壁のずれ，光のずれ，場所のずれ，動きのずれ，あまたのずれの組み合わせを楽しみつつ，空間の詩を歌う有様，もはやこだわるべき理念とて無用のごとくである．

このこだわるべき（とこれまで考えられてきた）理念を，美学ないし美意識と呼ぶなら，かれらの作品を貫くものはかつてのそうした美学ないし美意識ではもはやない．　オーダー，シンメトリー，プロポーションといった古典的美学に準拠した規範は遙か遠くに投げ捨てられ，まるで気楽に，見たまま，感じたままを，勝手気ままに組み合わせて楽しんでいる．　かつて建築が備うべき質であったはずの，美であるとか力強さであるとかいったものとはまるで無縁の，いわば楽しさとか愉快さといったものが，そこにある．　すなわち美意識というより楽意識．　拠って立つ基盤がまるで異なるのである．

かつてゲーリーは，ロブ・クリエがUCLAで講演した後を受けて次の様に述べた．　「ヒストリシズムやコンテクスチュアリズムなんて，歴史も伝統もコンテクストも持たぬ都市にあっては空虚な言葉だ」④．　カリフォルニアの若き建築家たちの目は，したがって選びとるものにこそ注がれる．　ヴァナキュラーなもの，朽ち果てた壁，燃え残りの柱，自然の形姿，気に入りの椅子，好みの色，ハイテック，ローテック，アールデコ，スパニッシュと様式は問わず，ただグッとくる感覚を頼りに材料，形態を選ぶ．選ばれたものの内にかれらの美意識はあって，その組み合せにかれらなりのコンテクスト（そう呼べるなら）もある．　要素は組み合わされることによってある関係を張るから，いや逆に言えば，関係という組み合せの妙の下で初めて要素は輝きを放つのだから，組み合せこそが心をくだくべき今ひとつの関心事である．　ただそのとき拠って立つ美学がまったく古典的でない．　いわば新しい．　その新しさが何を示唆しているかは，さらなる展開を待たねばなるまいが，さしあたってのコンテクストを持たぬ都市における，ありうべきコンテクストを待ち受ける試みではある．　こうした建築がカリフォルニアという地方から生まれてきたのも蓋し当然といえよう．

クィック・シルヴァーズと称された連中は主としてロスアンゼルスを中心とする地域を活動の場としているが，サンフランシスコのあたりにも興味を引く若手はいる．　たとえばリチャード・ファーノウ，トーマス・ゴードン・スミス，ベイティ／マック，ぐっと若手でエース・デザイン（まだ20代だ）．　ついでに言えばスティーヴン・ホールもバークレイの出身だ．かれらにとりわけ顕著であるのは歴史への参照であるが，たとえばその道のパイオニアのひとり，マイケル・グレイヴスともやはり一味違っている．　「歴史の解釈に関して，カリフォルニアをヨーロッパやアメリカの他の地域から区別している性格の一つは，カリフォルニアにおける深刻さの欠落であろう．　歴史の見方についてのカリフォルニアの伝統は子供の世界のようであり，〈童話〉をつくるようなものである」⑤．（傍点筆者）

親しい友人で，「山があるから登るように，女がいるからくどくのだ」との名言を吐いた傑物がいるのだが，カリフォルニアにとって歴史的様式とは，コンテクストへの配慮であるとか，人々の記憶の喚起であるとか，人間性への回帰であるとか，テクノロジーへのアンチ・テーゼであるとか，そういった理由をつけて引用されるものなどではなく，ただそこにあるから，そしてそれが魅力的だから，飛びついていくものなのだ．　素敵な女の子にアタックするのに理屈はいらない．　心に響くものさえあればいい．その意味で歴史的様式もテクノロジーも同一レベルにあるから，ふとしたはずみで折衷風にもなればハイテック風にもなる．　ピーター・ド・ブレットヴィルのようなイームズの末裔が脈々と息衝く土地柄である．　テクノロジーへの反発をお題目にしてモダニズムを排撃するほどの気負いもなさそうだ．　そのあたり，倫理的な（言い換えりゃあ深刻な）建築家には，節操のない，と非難の的をさらしているみたいなものだが，そう物事，しゃちこ張って考えるのも疲れる話．　なによりそんなこだわりから抜け出て，ただ建築を楽しんでいる連中に，くだくだしく意味づけをしたところでステーキをハシで食ってるみたいなものじゃあないか．

かういう発明になにかの意味をバタのやうに塗りつけて考へてみてもつまらない．　意味をさがしたがるやつは，うまいものさがしの，美食家のバカだよ．　へたに考へこむひまに，大口あいてカレーライスでも食ったはうが身のためだといふのは，いつの世の中でも有益な忠告だらう．　——石川淳《今はむかし》

いままでめざしつづけてきた女の子は美人だったけれど，カリフォルニアの女の子はきっと茶目っ気たっぷりで気さくな娘．　少々アンヨは太いかも知れないけれど健康的．　カリフォルニアンはそんな女の子の良さをわかってる連中なんだ．

イースト・コーストの娘はイカしてる
ファッションだって御機嫌さ
南部（サウス）の女の子の歩き方，しゃべり方，
うん，ノックダウンだね
中西部（ミドル・ウエスト）のやさしい田舎娘，
ハートにグッときちゃうのさ
北部（ノース）のかわいい女の子，
君をうっとり暖めてくれる

素敵な女の子がみんな，
カリフォルニア・ガールならね……

——ビーチ・ボーイズ《カリフォルニア・ガールズ》
（村上春樹《風の歌を聴け》より）

●たけやま・きよし／建築家，設計組織アモルフ

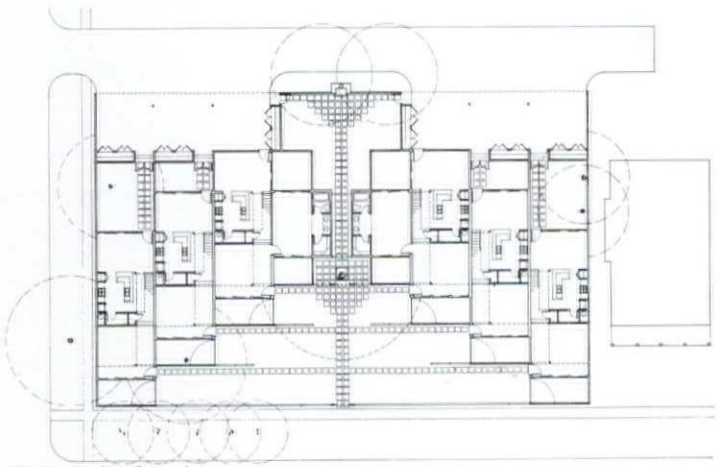
① 水銀，移り気，気粉れ
② マイケル・ポランニー《暗黙知の次元》
③ チャールズ・ムーア〈建築私記〉 a+u 7805臨増
④ Domus 604, March, 1980
⑤ ディヴィッド・ゲバード〈チャールズ・ムーアと西海岸〉 a+u 7805臨増

Taft Architects

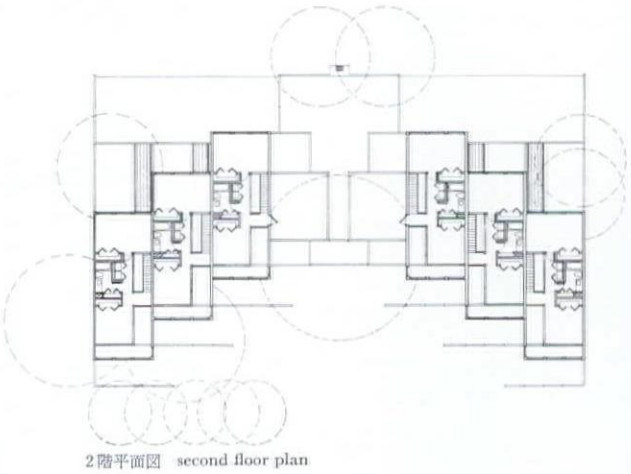
タフト・アーキテクツ：1972年に John Casbarian, Danny Samuels, Robert Timme によって創設される.
John Casbarian：1946年エジプトのアレクサンドリア生まれ. 1971年カリフォルニア・インスティチュート・オブ・アーツで美術修士号を，1972年ライス大学で BAを取得. グルーエン事務所でシーザー・ペリと，ワークス・ウエストでクレイグ・ホジェットと共に働く. 現在，ライス大学助教授.
Danny Samuels：1947年テネシー州メンフィスに生まれる. 1971年ライス大学でBA を取得. ケヴィン・ローチ事務所やパリのアトリエ・ジュリアンで働く. 写真家としても有名で，作品がヒューストン美術館に永久収蔵されている.
Robert Timme：テキサス州ヒューストンに生まれる. ライス大学で MA を取得する. ニューヨークでピーター・アイゼンマンに学び，I. M. ペイ，CRS の P. ケノンの元で働く. 現在，ヒューストン大学助教授.

Grove Court Townhouses, *Houston, Tex. 1978*

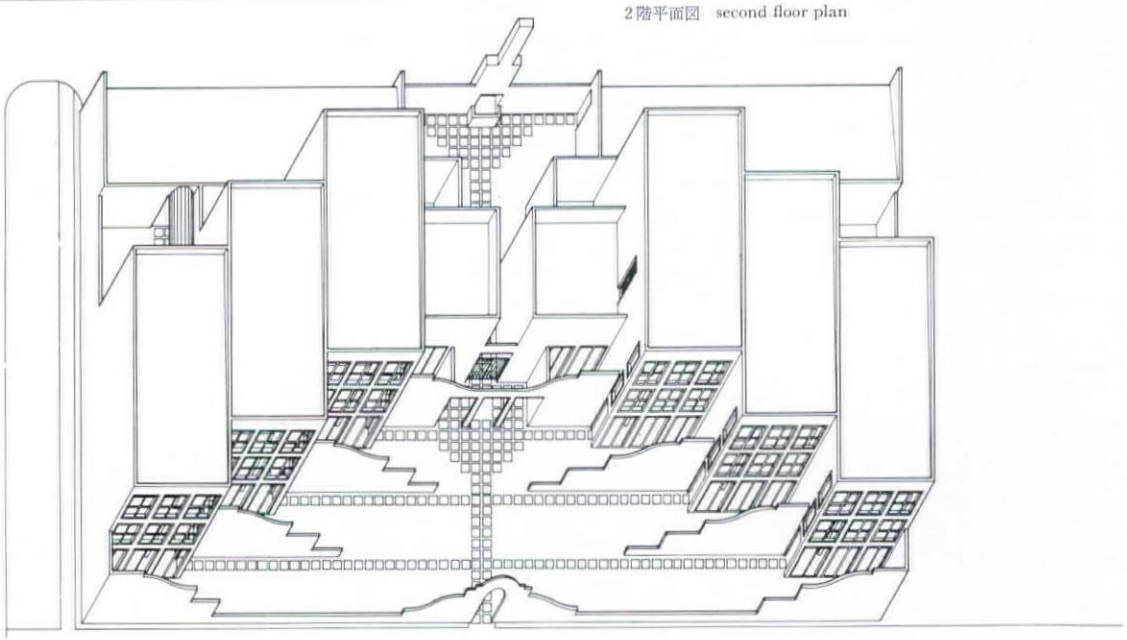
敷地はヒューストンの中心地の中でも再開発が始まったばかりの古い地域にある3つの区画よりなっている. 施主の要求は4つの二寝室型とふたつの三寝室型のタウンハウスをつくるというものであったが，次にあげる特別な要求が課せられた.
個々のユニットの性格を保ちつつ共用的イメージを創り出すこと. ユニットのデザインはあくまで単純で経済的であること. 敷地内の木は総て生かすこと. ユニット群はふたつの翼にグループ分けされ各々を公共の前庭をつくるためにステップバックさせたが，それにより個々のユニットを分節化し木々を守ることになる. 因みにこうした構成法はヒューストンの1920，30年代のアパートメントを思いおこさせる.
公の領域からユニット自体にまで入り込む，平行に置かれた壁の扱いは次のような空間利用を視覚化している.
一目瞭然な公共の前庭，ユニットの入口，開閉により公と個を融合することのできる木製のゲート，そしてユニット自身の個の空間. また裏側には公共空間の集束するところとしてパーティー用のパティオを設けた. 約5.5mの巾のユニットは両端が庭空間と並行して南北に置かれ，南側すなわち正面側の壁は3段仕切りのグリッド窓を冬の省エネ用に設け，しかも夏期は太陽光の直射を避けるように設計されている.



1階平面図 first floor plan



2階平面図 second floor plan



The site consists of three lots in an old inner-city neighborhood of Houston that is just beginning to experience redevelopment. The client's program called for four two-bedroom and two three-bedroom townhouses designed for urban dwellers. The units were arranged into two oppositehand groupings, stepping back to create a public "front yard," articulate the individual units, and avoid the trees. This arrangement is evocative of Houston garden apartments of the 20's and 30's. A system of parallel wall planes that extend from the public domain outside into the units themselves establishes a gradient of space usage: The identifiable public "front yard," door stoops for the units, private courtyard spaces with wooden gates that can be opened or closed to the public space, and finally, the interior public/private realms of the units themselves. A communal "outdoor room" in the back focuses on a barbecue patio.











YWCA *Houston, Tex.*

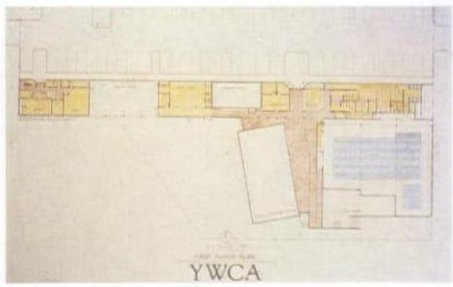
敷地は，テキサス州ヒューストンの中心に近い幹線道路の交わる場所にあり，ヒューストン緑地システムの一部で近隣保養区域のひとつであるスポーツ公園を見下ろす位置にある．　幹線道路沿いには 2〜6 階建の商業や軽工業用建造物が多い．

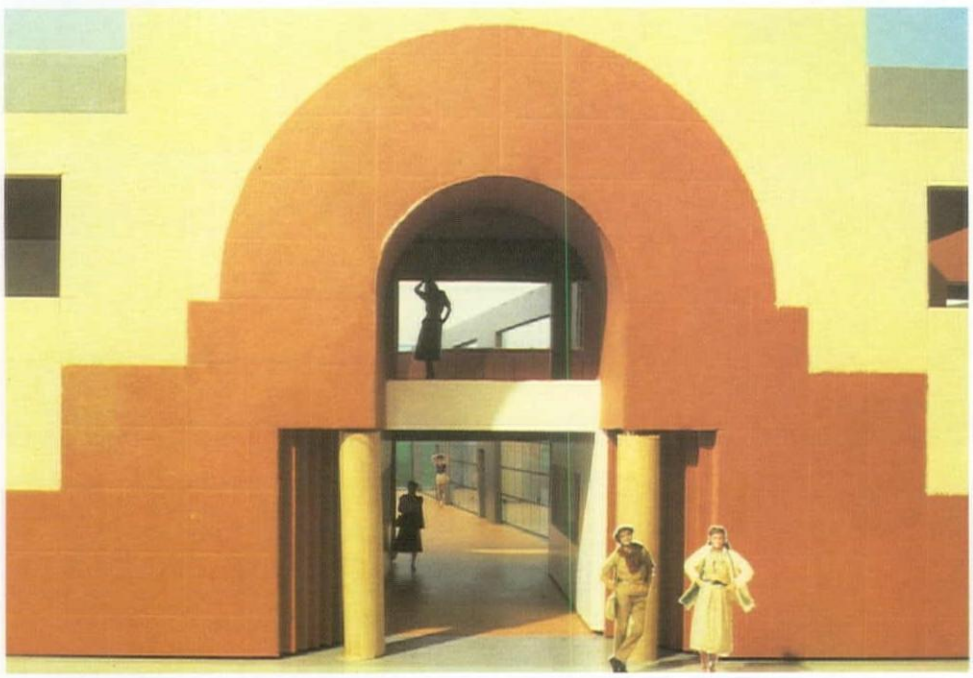
プログラムは，プール，多目的室，デイケアそして管理部門からなる 2,300 m² の YWCA 施設をダウンタウンに建てるというものである．　管理部門は，ヒューストンのすべての YWCA 活動を扱うので，全 YWCA システムの一部でありながら，別個の施設としての性質もあわせもつ．

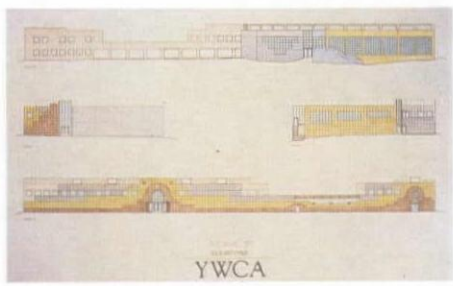
まず，管理関係の事務室，教室，ロッカーなどは約 100 m の長さの〈サポート建築〉として作られ，多目的室およびプールのふたつのパビリオンがサポート部分の公園側におかれた．

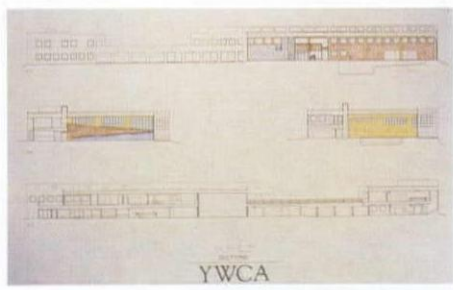
両パビリオンとサポート部間の空間は YWCA 活動あるいは公園の一部となり広場的性格をもつ．　この広場は斜路によりアクセントづけられ，ここから公園，プールそして多目的室での活動を望めるギャラリーであり身障者の 2 階へのアクセスにもなる．

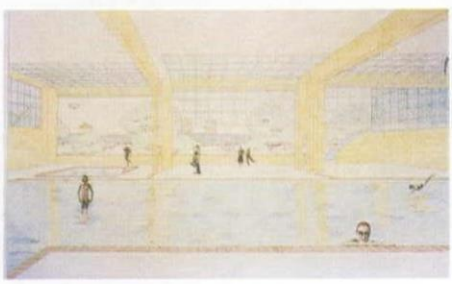


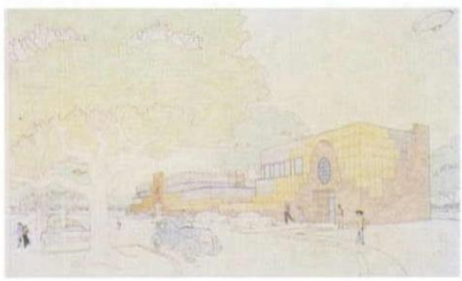


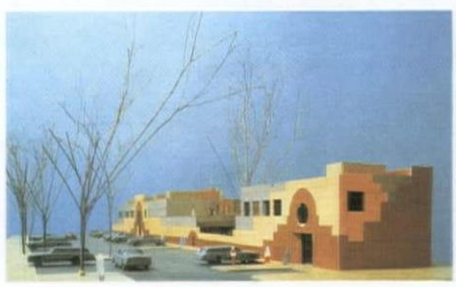












Located at the intersection of two major arteries, near inner city Houston, Texas. The site overlooks Spotts Park, a neighborhood recreational area which is part of Houston's green beltway system. The buildings along both arteries are two to six story commercial and light industrial structures. To provide a new 26,000 square foot Downtown YWCA facility consisting of pool, multi purpose, day care, and support and office spaces. To provide offices for the metropolitan administration for all Houston area YWCA's. This facility needed to be a part of the total complex but identifiable as a separate support entity.

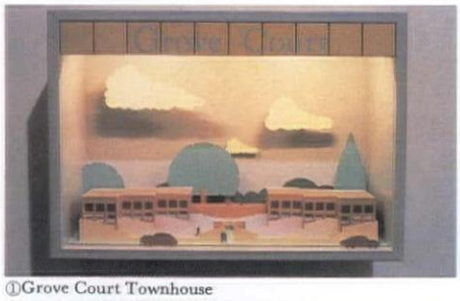
The design establishes a 350 foot long support building which houses all administrative, classroom and locker functions. Two pavillions, one a multi-purpose room, and the other a pool complex, are situated on the park side of the support building. The space between the two pavillions and the support building becomes an indoor plaza and circulation area for the activities of the YWCA and Park.

This space is punctuated by a ramp which provides handicap access to the second level in addition to serving as a viewing gallery for the surrounding activities of the pool, park, and multi purpose space.

This project will be low in budget employing inexpensive and durable materials. Although the concept is simple, a richness of colour, texture, and scale compatible with the activities of the YWCA will be found in the spaces and masses of the architecture.

Exhibition

①〜⑧までは，1980年にイェール大学で開かれたYoung Architects展の出品作である．　沼辺氏の文中にもあるように，この展覧会の出品を契機として，タフトの仕事がローカルな現象からグローバルなものへとなった．　立体変形透視図とでも呼べるこれらの作品は，紙芝居のようなほのぼのとした雰囲気と奇妙な形態感覚とを合わせ持っている．

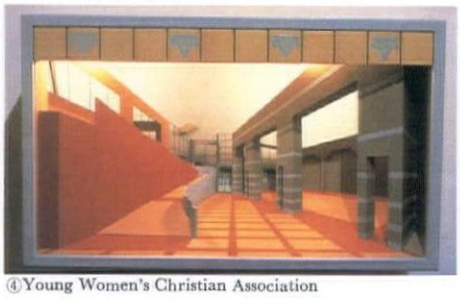


①Grove Court Townhouse

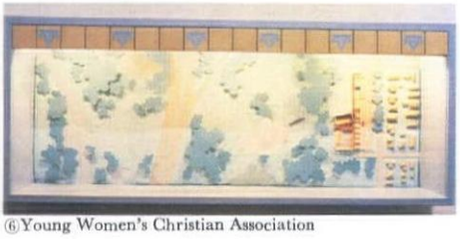

②Municipal Control Building Addition



③Hendley Building

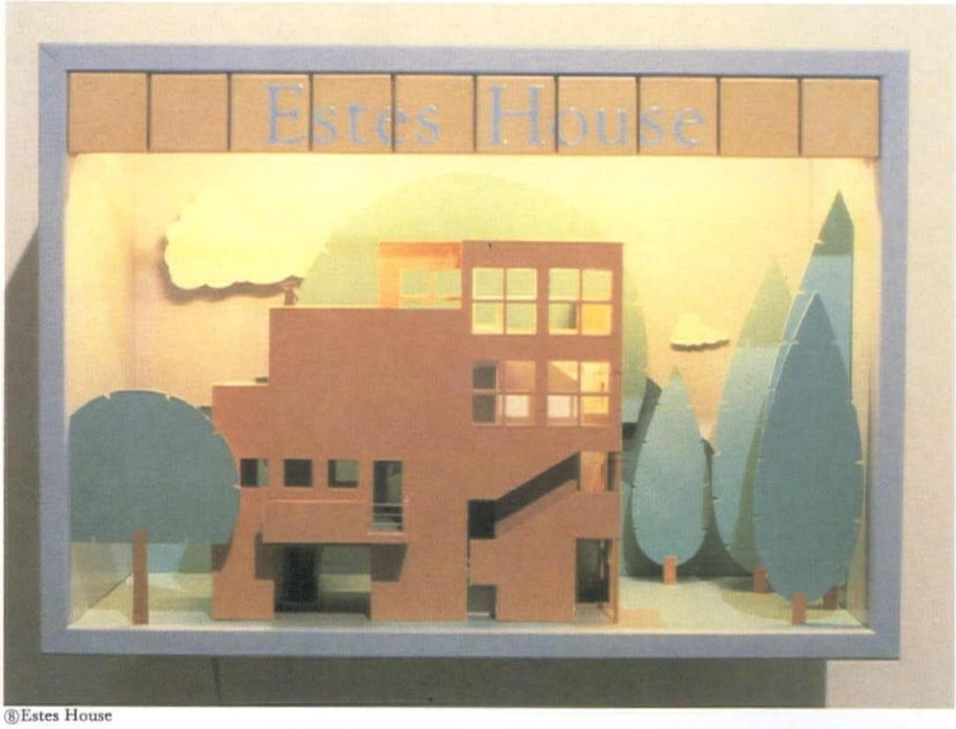

④Young Women's Christian Association


⑤Young Women's Christian Association

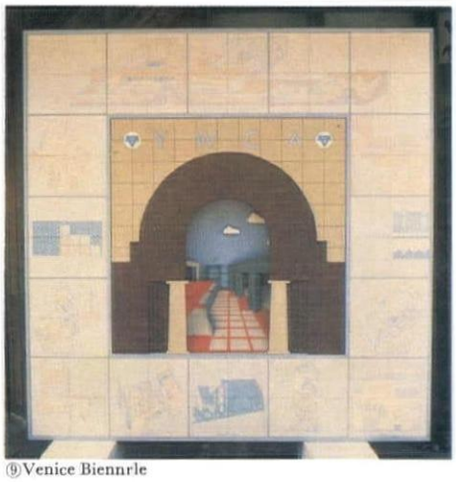

⑥Young Women's Christian Association



⑦Rockefeller's



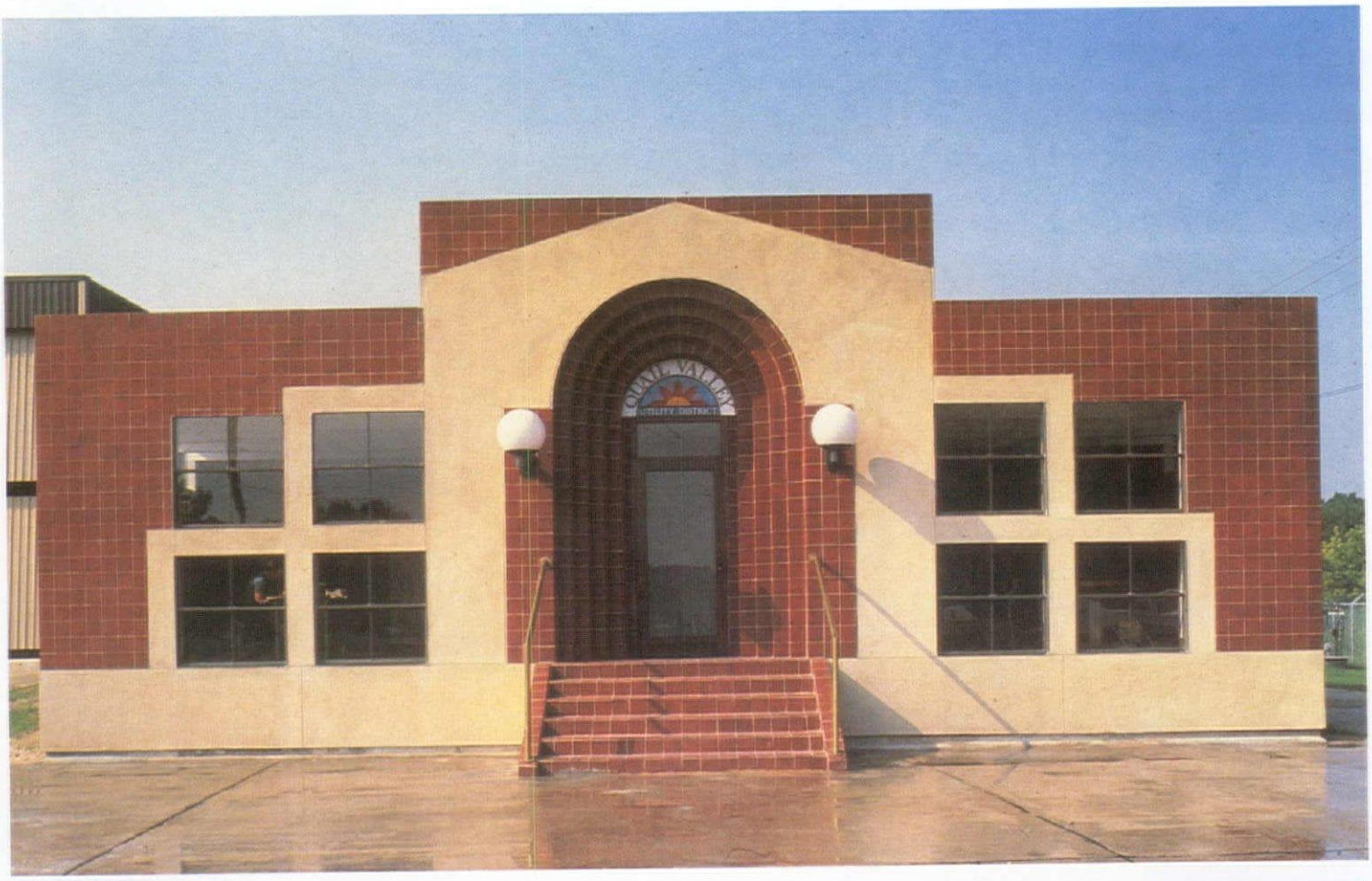
⑧Estes House


⑨Venice Biennrle



⑩Venice Biennale

Quail Valley Control Building *Missouri City, Tex. 1978*



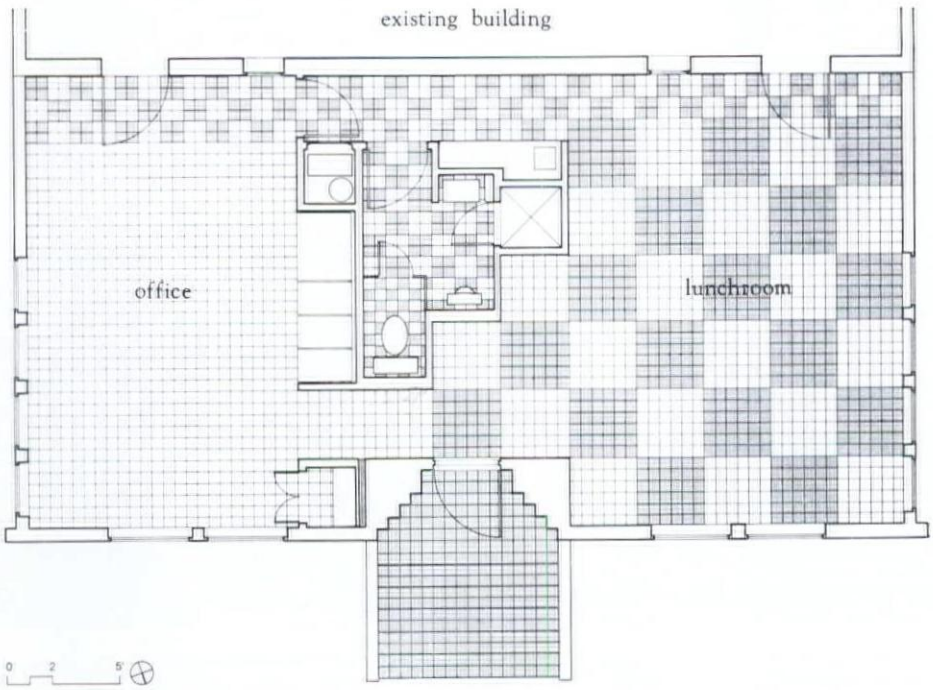




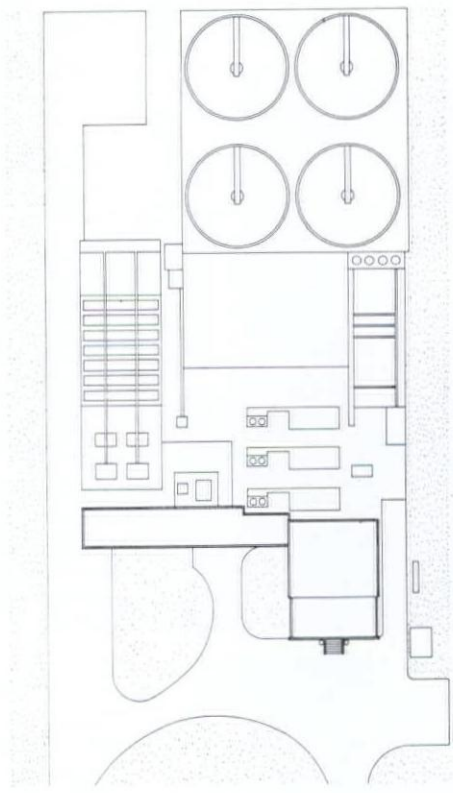


クウェイル・ヴァレーの清掃プラントは合衆国南西部では最初にして最大の完全な酸素処理能力をもつ施設である．　公益事業地区委員会はプラントが完成した年に設立されたが次のような条件の管理施設が必要とされた．　1日24時間使用可能な約93m²の事務室と食堂をもつこと，施設に来る訪問者が〈入口〉の感覚を持てること，施設のより良いイメージを創ること．これに関しては，「金属とコンクリートでできた見苦しい建物がコミュニティーのゴルフ場の真ん中にはそびえてほしくない．」という近隣の住民の声に対する答でもある．　また，建物の内外装材は耐久性に富み洗浄可能なものが望まれた．

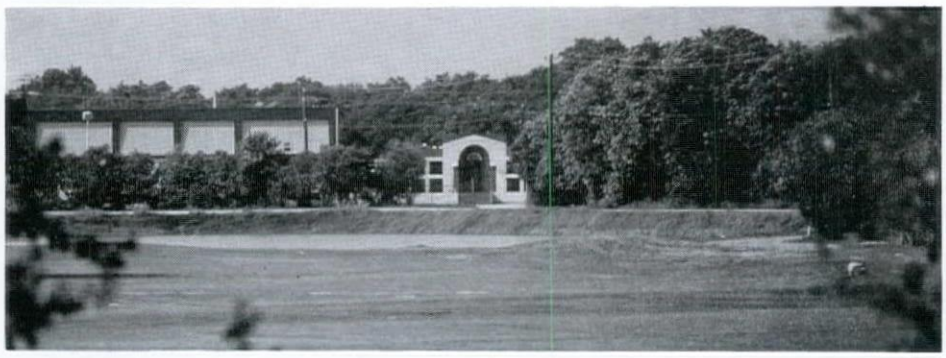
建設費を低く保ち，建物の見かけの大きさを増すため，このコントロール・ビルディングは既存の機械と試験用の建物に増築という形で建てられることになった．中央部のサービス・コアは既存の建物とエントランス・ファサードの間の空間を構成する．　サービス・コアの階段と直線をなす屋根トラスの格子天井で造られる一連の層状空間の仲介でコア部分とファサードは対話をはじめる．　アメリカの1800年代の終りから1900年代初期にかけてよく建てられたネオクラシック調の公益事業ビルに似せた設計のタイルとスタッコの建物は2種類のスケール感を私たちに与える．　タイルとスタッコの色は，これら昔の建造物の石と煉瓦を想わせると同時に施設の他の建物の金属的外観との対比をみせる．



平面図　plan



配置図　site plan





The Quail Valley Waste Treatment plant is one of the first and largest totally oxygenated facilities in the southwest. The Utility District Board found upon completion of the plant in 1978 that a control building was needed in order to provide approximately 1000 sq. ft. of office and lunchroom space to be used 24 hours a day. Create a sense of entry for visitors to the facility. Present a a better image of the facility. This was a responses to community complaints that the metal and concrete structures located in the center of the community golf course were unsightly.

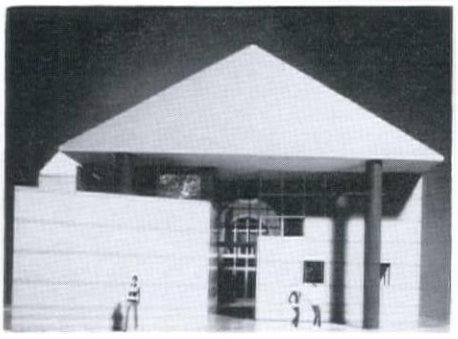
In order to increase the apparent mass of the structure while diminishing construction cost, the new building was designed as an addition to an existing concrete machine and testing building. A central service core organizes space between the existing building and the entrance facade. The tile and stucco building imparts two differing readings of the scale while visually referring to the neoclassical utility buildings of the late 1800's and early 1900's across America. The colors of the tile and stucco, while reminiscent of the stone and brick of these earlier structures, were selected to give heightened awareness of the colors used in the adjoining metalic buildings of the complex.

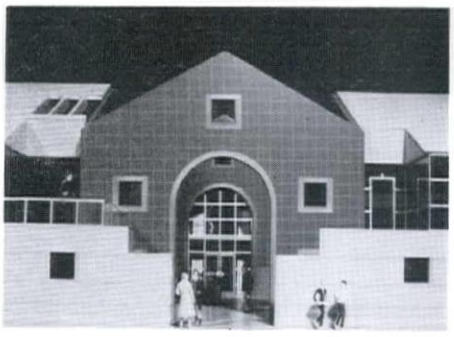
Catholic Student Center, *Houston, Tex. 1980*

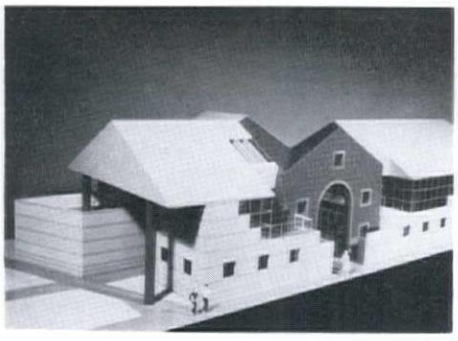
これはライス大学およびテキサス医療センターのためのカソリック学生センター計画案である．　タフトは，プログラム上，実際に人々に使用される空間と，空間自体の性質との交錯によって場所という感覚が生じると考える．　そして，その空間内の〈秩序〉がタフトの主な興味であった．　新鮮で実際的な数々の形態スタディの後，外部の〈部屋〉をつくるアイデアが生じた．　最終的に，この外部の部屋を場所の焦点とし，その周囲にプログラム上の機能が配置されることになった．　それら諸機能とは，学生ラウンジであり，台所，教室，図書館，管理事務室，そして多目的チャペル，来賓用ホールなどである．　さらに計画は練られ，この外部の部屋は他の部分がポシェ（空間の主な性格を明確にするために〈地〉の部分を塗りつぶす手法）されたポジティヴな空間として性格づけられている．センターの基本イメージはチャペル部分と来賓ホールの突起部分を抑えている外部の部屋空間の緑のタイル壁であった．　屋根や壁といった外装はライス大学周辺の住宅や教会といったコンテクストに調和させたもので協調的外皮と強い個性とを兼ねそなえている．



The design solution for the 9,000 s.f. Catholic Student Center for Rice University and the Texas Medical Center in Houston, currently in the contract document phase, continues investigations by Taft Architects in the possibilities of the clarity of formal order as a frame of reference. We feel that through the imposition of relationships upon the activity of a program, and character upon space, that a sense of place is created. It is the order of place that we are most interested in. The opportunity arose here, through the exploration of several alternative responsive formal structures to evolve a new but appropriate program element—an outdoor 'room'. The resulting diagram, then, emphasizes this as the dominant place, around which the specific program elements are organized. These being student lounge, kitchen, classroom and library; administrative offices; and a multipurpose chapel/fellowship hall.

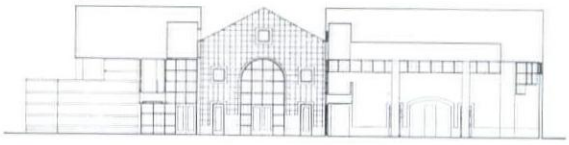




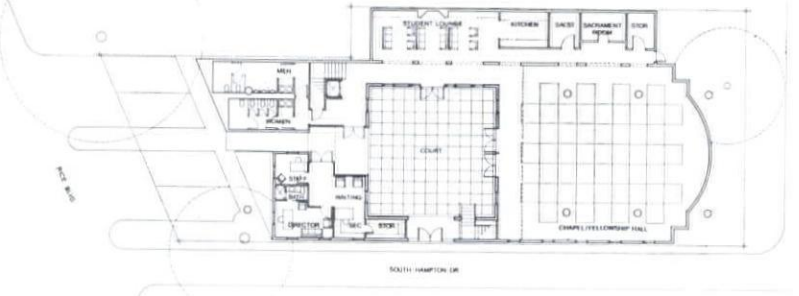




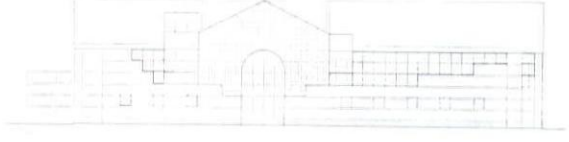
2階平面図　second floor plan



断面図　section



1階平面図　first floor plan 1：600



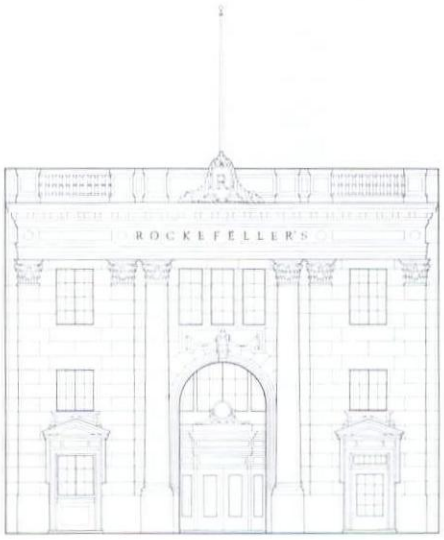
立面図　elevation

Rockfeller's Night Club *Houston, Tex. 1978*

計画のプログラムは，1925年に建てられたネオ・クラシックの銀行を350席のナイトクラブ風ライブ・ハウスに再利用することであった．　この建物は1968年に政府のオフィスに用途を変更されたが，続く火災で，その豪華な内部空間は朽ちはてたままにされていた．　主な建築的課題は250人分の空間しかないところに，いかにさらに100人分の空間を与えるか，いかに古い建物に現代の設備システムを導入するか，またいかに現行の法規にそわせるかといったことで，しかもそれらをオリジナルのデザインを妥協させることなしに解決することを考えた．

再利用のアイデアは古いものを尊重し，復旧させるとともに，新しいものとの共生をはかることである．

新しく設置された中2階（これが追加の100人分のスペースである）は古い部分の柱，窓そして壁といった構成物から注意深く離されて吊られている．　建物正面と中2階を結ぶ通路は屋内動線を環状にしており，それが非常時には脱出路となる．　ステージを上部より望ませるピアノ型の客席部分は，あたかも古い柱と柱の間から絞り出されたかのようにデザインされた．

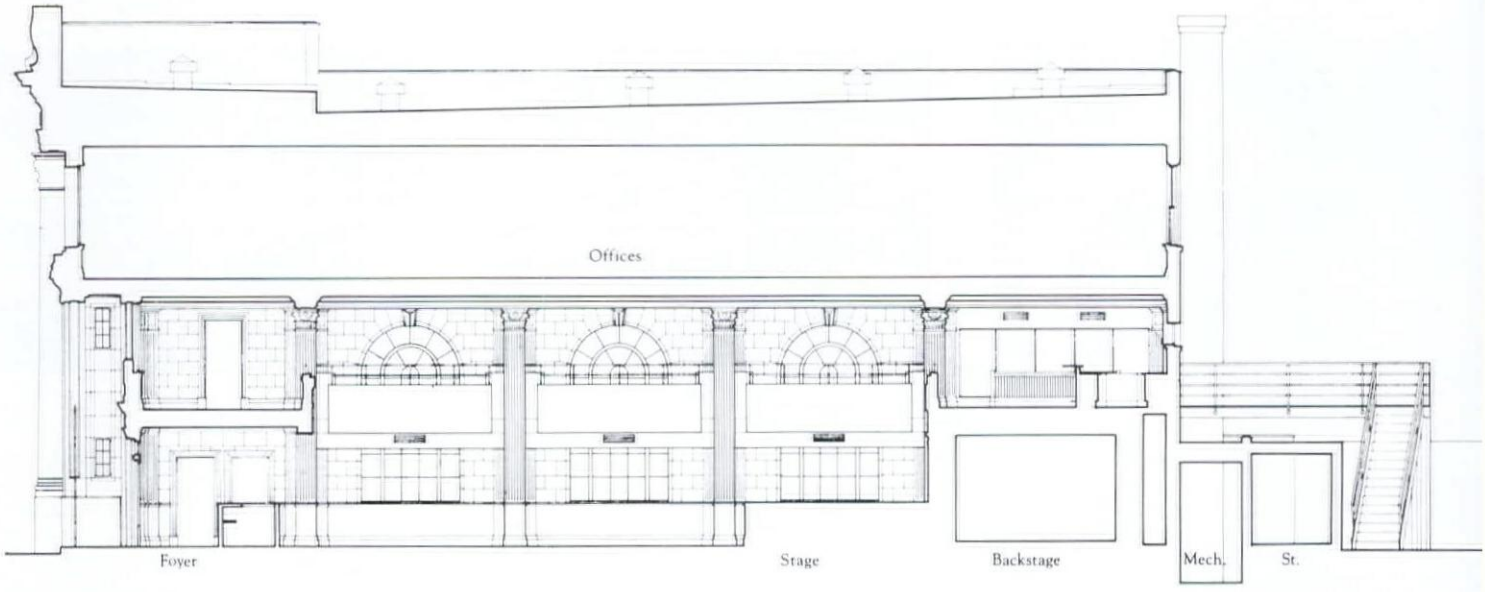


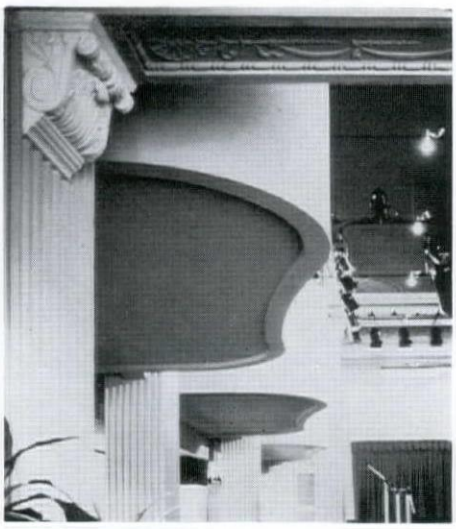
The program called for adaptive reuse of a 1925 neo-classic bank building as a 350 seat nightclub—intended as an elegant setting for live entertainment.

The major architectural problem was, how to provide space for an additional 100 seats, how to introduce new mechanical, electrical and plumbing systems, and how to comply with city building and health codes, without compromising the character of the original design.

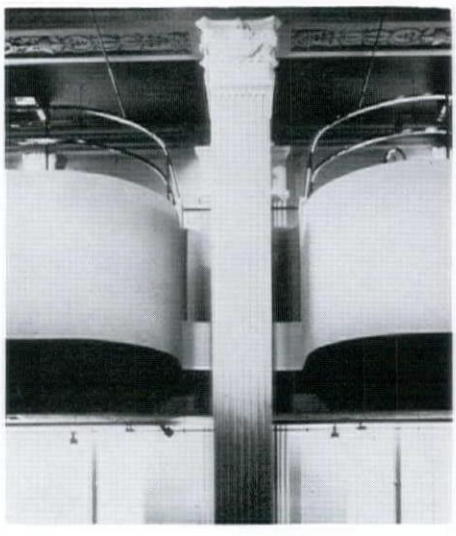
The concept for reuse was to respect and restore the old, while frankly acknowledging the coexistance of the new.

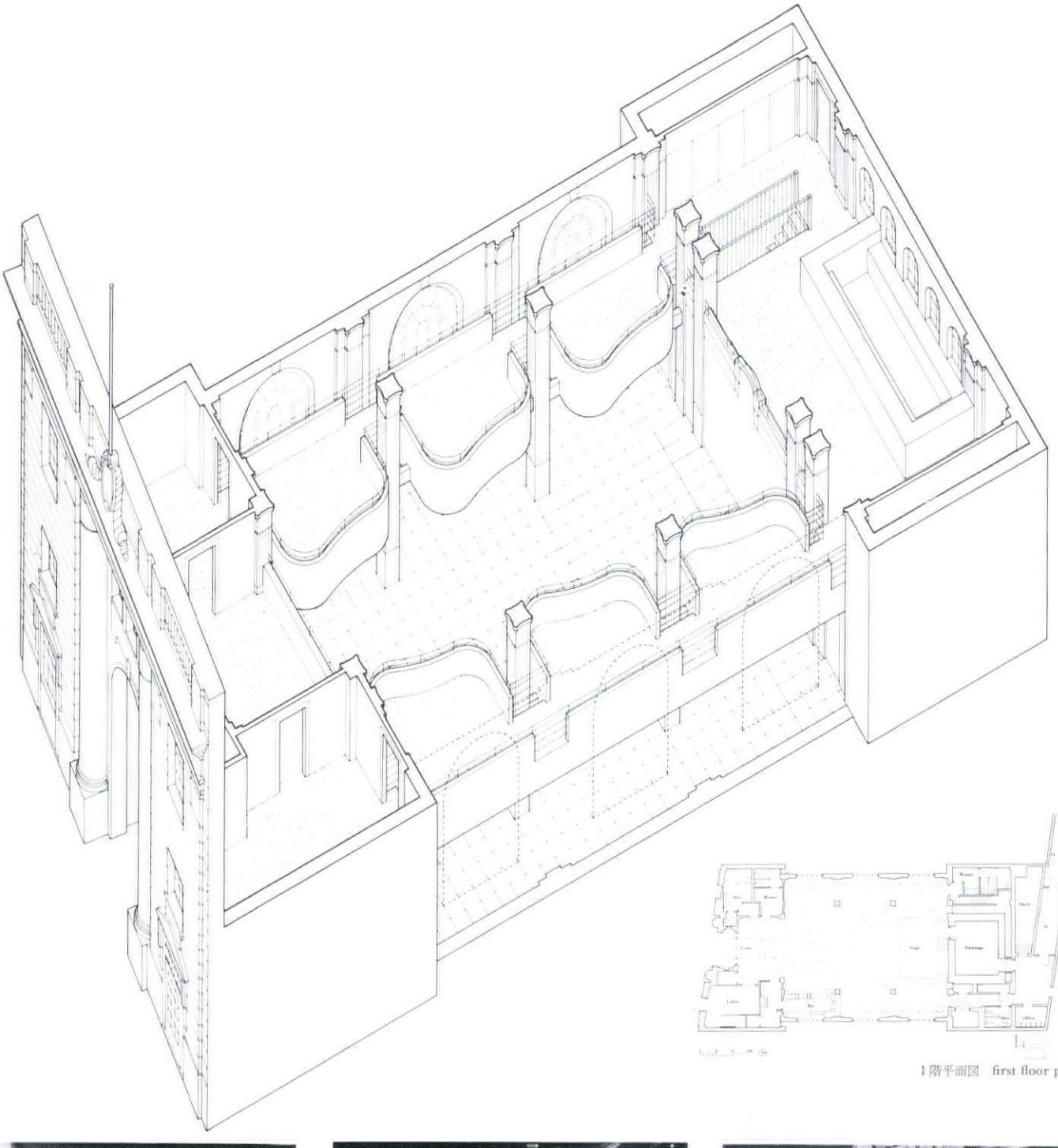
New mezzanines are suspended within the older structural matrix, carefully keeping away from the original columns, windows, and walls. Cantilevered seating areas, piano shaped boxes, squeeze out between the columns to provide views to the stage.



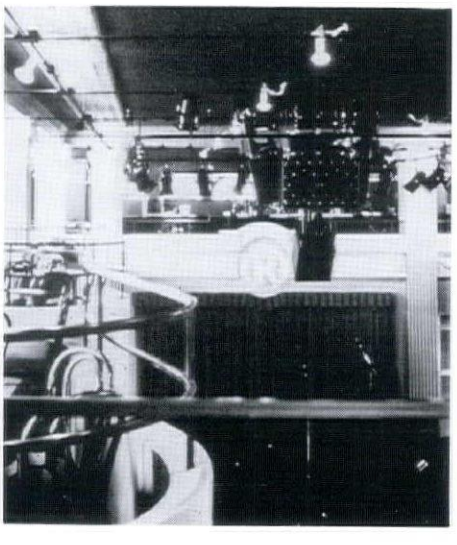


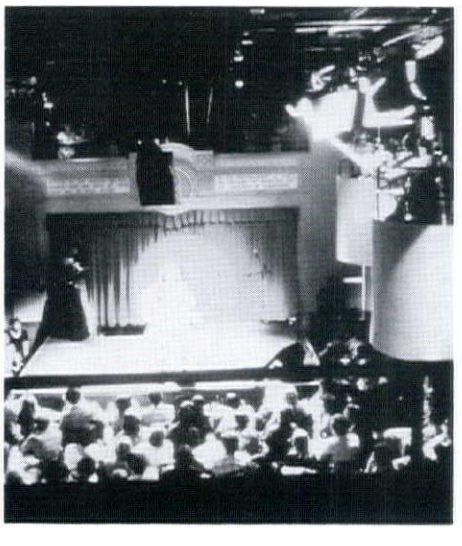


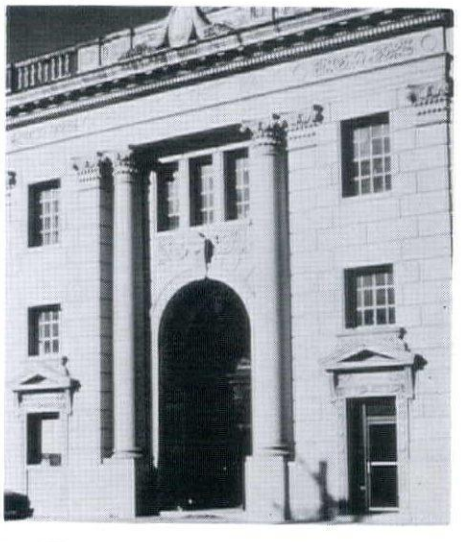




1階平面図　first floor plan







タフト・アーキテクツ——テキサスの中のもうひとつのスケール　Another Scale of Texas *by Kunio Numabe*

沼辺国夫

タフトとは通りの名称である

タフト・アーキテクツはヒューストンにあるアトリエ的建築事務所では最も実力のあるファームである．　私が1978年９月から1980年５月まで留学していたライス大学の卒業生は近年，毎年１人から２人は入所し，また有能な人間が独立していく．　私と同期では，アシスタント・アーキテクトに名を連らねているジェフ・エイブリルとカービー・ミアーズがそうである．

私が帰国する時期は，ちょうどエール大学での展覧会①やら，PA 賞に入選②したりで，タフトの評価はヒューストンから一挙に全米へと拡がった．

この事務所の名前の由来は，単にオフィスがタフト・ストリートに面して立つ古い店舗長屋にあったからだが，現在はベデンという通りに引越してしまっている．　通りの名称をそのまま事務所の名前に借用してしまうということには，彼らの設計に対する姿勢が反映されている．　それは設計者の人格の消滅ということであり，また地域に埋没するということでもある．

テキサスのコンテクスト

ヒューストンという町は現在アメリカで五番目の大都市である③．　その理由は豊富な石油資源をバック・グラウンドにしたテキサスの経済力であり，ヒューストンのスカイラインは一カ月も離れていると全く違ってしまう程である．

多くの企業が本社を北部よりヒューストンに移し，それに合わせて毎月500人もの人口流入が起きている．　まさにブーム・シティーである．

次々と建てられる高層ビルの設計には，P・ジョンソンやペイなど，近代建築の立役者達が60年代並の活躍をみせている．

北からの移住者には，ヒューストンは歴史が浅く，発展があるのみの都市に思えるが，根っからのヒューストニアンであるタフトのパートナーの１人，ボブ・ティミにはどのように思えるのだろうか？

タフトのデザインには，邁進するヒューストンの裏にある南西部の心優しさ，古き良きヒューストンの生活に対する思い入れが現われているように，私には思われる．　一例を挙げるなら，次々とあらわれるポスト・モダニズムのボキャブラリーにそろそろ辟易してきた私たちには，例えばグローブ・コート・ハウスの門④のような手口は「またか」とも思えるが，丁度，ダニエル・ソロモンのハンバーガー屋⑤がカリフォルニアの空に良く似合うのと同じように，厚手の壁とラフなスタッコ仕上げがテキサスのコンテクストには不自然ではないのである．　ちょうどアラモの砦はテキサスにしかあり得ないのと同様に．

ミースの影

一方でヒューストンの建築には，こうした地域的コンテクストとは離れたところで形成された独特の背景がある．　ライス大学の名物教授，アンディー・トッドをして今だにその影響下におく人物はミース・ファン・デル・ローエなのである．　アンディーはミースがヒューストンのミュージアム・オブ・ファイン・アートを手掛けた時のパートナーであった．　ライス大学のキャンパス⑥から徒歩で15分の不整形の敷地に建つ扇形の美術館⑦は，ライスのアンディーの一派，即ち構造的機能に重きを置く思想の象徴であり，その質実剛健を誇る近代建築の考え方とタフトの作品のもつ柔かさとは対照的であり，実際両者は互いを苦手としているようである．

私のかつてのルームメートはアンディーが大好きで，タフトの作品となると徹底的にけなしていたものである．　アンディとタフトという全く対比的な人びとが隣り合って共存しているのもまた，ヒューストン的現象ではある．

建物の再生利用

アメリカでは現在，いわゆるリノベーション（修復）とかアディション（増築）の仕事が実に多い．　経済事情によるものもあれば，既存の環境を保全するという観点によるものもあり，その他，理由はさまざまである．　それらのデザインに際しての理論的土台としては，IAUS（ニューヨーク建築・都市研究所）を舞台として提唱されている「建築の言語学的アナロジー」や，シカゴのS・コーエン等によるコンテクスチュアリズムなどがある。

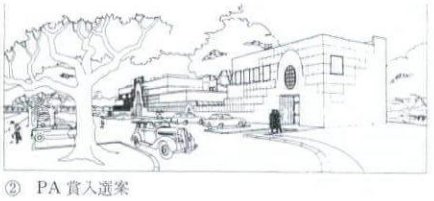
しかし，実際に行われているデザインを見ると，全く安易な懐古趣味に終始してしまったり，「新旧の建物の奇妙なバランスが魅力的である」式の責任転嫁であったりして，見るべきものは数少ないと言わざるを得ない．



① エール大学での展覧会



⑤ ダニエル・ソロモンのハンバーガー屋



② PA 賞入選案



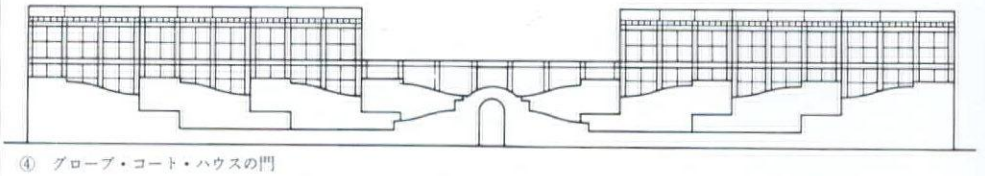
⑥ ライス大学キャンパス風景



③ ヒューストンのスカイライン



⑦ ミースのヒューストン美術館



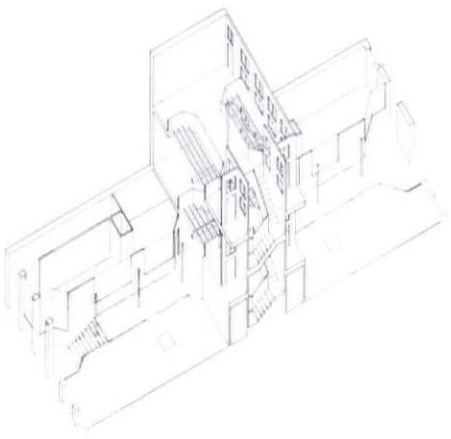
④ グローブ・コート・ハウスの門

そんな中で，タフトの行なってきている沢山の修復，改築の仕事はいずれも興味深く注目に値するものばかりである．　特にローゼンバーグ・ビルディング[8]の場合は，新旧の取り合いが巧妙かつ素直にできていて，彼らの力量を感じさせる．　動線や設備システムは非常に明快であり，平面はシンプルでありながらも，空間は実に豊かで，人の目を飽きさせることがない．スカイライトからの光が階段室や廊下を伝わって室内に射し込み，あたかも日本で言うところの路地のような空間が，平面的にではなく垂直的に出現しているのである[9]．　アメリカには趣きのある路地空間は多くはないけれども，ニューオリンズとかこのビルの建っているガルベストンという港町にはそれがあり，タフトはそれを建物の中に見事に再現したのである．

タフトは幸運にもこの計画のデザイン的側面の一切を任された結果，ストランド通りは，タフトのデザイン・ポリシーを一望できる所となったのである．　前出のローゼンバーグ・ビルもここにあるし，小さいところでは道案内板までデザインしている[10]．

ガルベストンはさびれた暗い町だった．かつて栄えたこの港町も人口の大半をヒューストンに吸い取られてしまい，ストランド通りは壊滅に近い状況だったのである．　町の人びとは観光化に生きのびる道を求め，タフトにデザインを依頼したのだった．　いかにも陰気な建物群に対して，彼らは陽気なデザインで立ち向かい，古いコンテクストを逆手にとって新しい筋書きを作り出すことに成功したのである．

今ではタフトの改築した建物に隣接する建物も徐々に活性化され始め，町は洒落たリゾート地として甦えりのきざしを見せてきている．



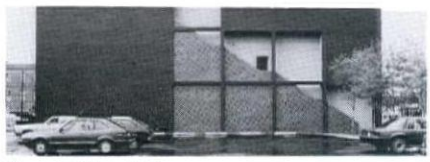
⑧　ローゼンバーグ・ビル



⑩道案内板



⑨　ローゼンバーグ・ビル



⑪　ヘンドリー・ビル

ガルベストンの再開発

ヒューストンの南50マイル，NASAの基地を越えてしばらく行ったところに，メキシコ湾に臨むガルベストン島がある．　その島のダウンタウンの最も古い商業地区の中心をストランド通りが走っているが，近年，ダウンタウンの活性化のために，通りの両側にたっている古い建物の保存・再利用を中心とした再開発計画が進められている．

タフトの設計ポリシー

アメリカの建築教育にあっては，設計行為を純粋な創造行為とは考えずに，「問題解決」のプロセスとしてとらえるのが一般的であるように思う．　ヒューストンのアメリカ最大の個人事務所 CRS のアソシエイツである，ウィリアム・ピーニャという人の書いた《Problem Solving》という本が多くの大学で新入生用のテキストとして使われているのも，その現われである．

タフト・アーキテクツのデザインを見ると例えばガルベストンのヘンドリー・ビル[11]の薄っぺらな階段のように，一見した限りでは遊びのように思えるところが多いが，彼らにとってはそのような「空間の遊び」でさえも，与えられた課題に対する数多くの答案の中のひとつであり，元となるアイデアおよび，そこから導き出されるプロセスの結果なのである．

アイデアから答案まで，その考え方に従い首尾一貫した設計が行なわれた時，その答案に沿って建物が機能し始めるのである．　即ち，「パーティ」と「バブル・ダイヤグラム」が集約されるわけである．（一旦，機能とは全く分離して作られる「形態自体のアイデア図」――彼らは空間の形状の心理学的自律性を重んずるのでこうした考え方が生まれるのだが――をアメリカでは，もとのフランス語から離れてPARTIS，パーティと呼んでいる．　この形態アイデア図は，バブル・ダイヤグラムと呼ばれる実用アイデア図と互いに働き合って建物を形造っていくのである．）

彼らの，そうした設計方針を彼ら自身がまとめた文章があるので，それを最後にしるすことにする．

「私たちの第一の関心は，関係性を作り出し，性質を伝えうるような秩序を探求するところにある．　場所の感覚が生ずるのは，活動に対しては関係性という要素が，空間に対しては性格という要素が課されるからである．」

「さまざまな秩序を明らかにし，形態の論理とともにその本質的な空間の性格または感覚を理解するために，デザインのパーティは構成され，探求される．　初期段階の形態のシステムの相互作用が，やがて混成的なパーティとなり，それから多様な要求を巧く満たすようなデザインに至るのである．」

「こうした発展段階を通じて，基本的かつ抽象的だった形態秩序は，初期の明快さを失うことなしに，個別の設計条件の変更と改良とを加えられていく．　つまりそれこそが，概念的プロセスから現実のものへと移行していく建築設計の基本なのである．」

●ぬまべ・くにお／1978―80年ライス大学留学，現在大林組

Lonnecker／Papademetriou





トーマス・M・ロネッカー：1949年，カンザスに生まれる．
ライス大学で建築・美術を学ぶ

ピーター・C・パパデメトリオ：1943年に生まれる．
1965年　プリンストン大BA，1968年イェール大MA 取得．
《PA》誌顧問，《テキサス・アーキテクト》誌寄稿
ライス大学建築科助教授

ピーター・パパのこと

ピーター・パパデメトリオ（片仮名で最も近い読み方がこれである．）の講義はライスに在学中全てを受けたが，今回，彼からの資料を見るまで，彼がこれ程多くの作品を手掛けていることを知らなかった．　その上，それらが，〈シリーズもの〉として造られているというのは，恐らくライスの現在の学生達も知らないであろう．

日本では，彼がPA 誌のヒューストン担当であるのを一部の方々は御存知かもしれないが，これからも判るように，彼の大学での専門はもっぱら近代・現代建築史であり，意匠を担当するのは学部での段階にすぎないようである．

ピーターはもともとタフト・アーキテクツの一員であり（というよりは黒幕である），数年前に一同が別のグループ名の下に日本の雑誌に紹介されたこともあるが，現在は情報の交換程度のつき合いである．

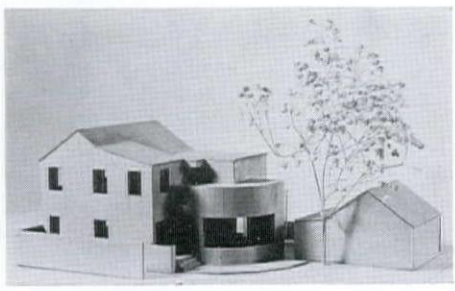
理論面では，やはりアイゼンマンやコーリン・ロウなどに大きく影響をうけており，結果としては，シカゴ・セブンのあくの強さが取り除かれたような趣きがある．

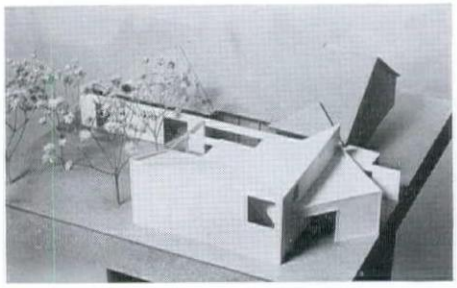
ここに紹介する一連の作品は，デイビス，ウォーカー，ブラウン邸が実現，あるいは建築中で，残りは全てプロジェクトである．

ひとつひとつの作品は比較的静かな印象を与えるが，ひとつのシリーズとして見ると，そこに首尾一貫した設計態度があらわれてくる．　というのも，「私たちの興味は建築のアイデアであり，それが環境にどのような秩序をもたらすのかということである．」というピーターの言葉が示すように，建築と環境との相互作用の連鎖として考えているからである．

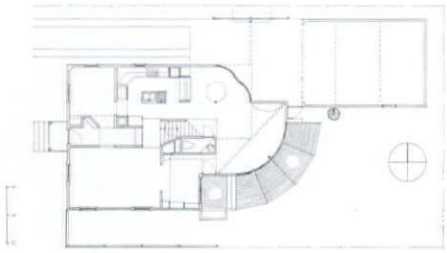
ウォルター・ネッチのフィールド・ダイアグラムと見まがうような彼の平面ダイアグラムはネッチのそれのようなシステムをあらわしているのではなくタフトについての文章中で私が説明したパーティの概念なのである．　パーティとバブル・ダイアグラムから出発するこれらの作品は，派生して様々な調査および個々のテーマというものをもっていて，敷地計画からディテールまで，全てのスケールを通じての連続性を保っている．

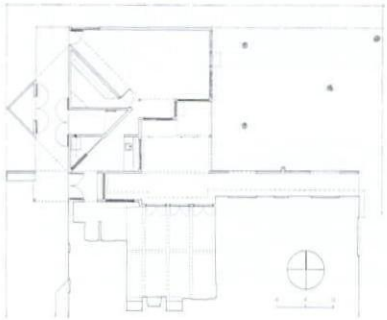
彼らのこうした設計態度を彼ら自身が分類すると以下のごとくになる．



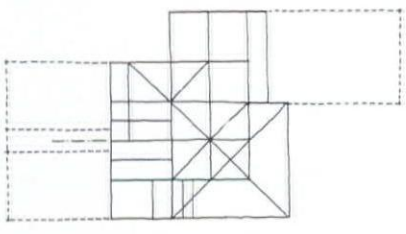


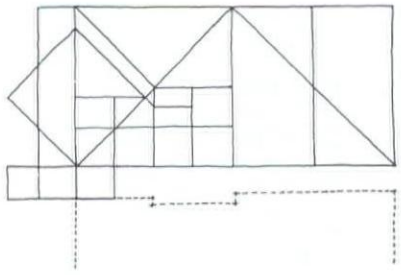


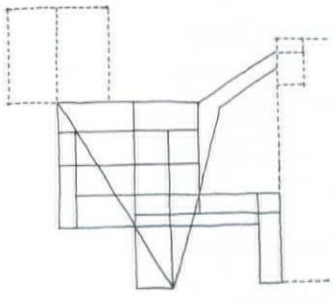












Hebert House　　Wheeler House　　Walker House

●コンテクスト

外部環境というのは敷地を含んでデザイン・フォーミラの基本である。　先ず始めに道具立てとして建物のいわば〈足跡〉に焦点を置くことで，コンテクストの中の敷地の性格が全体的なアイデアの中にとりこまれ，外部条件の結果は即座に建築形態に力を及ぼす．

●プラン

平面計画は，デザインの核である。　プランは建物自体の要求を敷地に適合させるという実用的な道具であると同時に，様々な関係性を明解な秩序にもっていくという意味において内的要求の結果であるといえる．平面構成と，その構造化された明快さは細かい要素の特殊化を乗り越えた総合的環境を把握するための基盤となる。　また，空間はプランの中での位置づけの結果により利用価値が拡げられ，各々が他の空間と，いかに関連すべきかという考えも付加されることになる．

●幾何形態

環境に秩序を与えるという点から，デザインの個々の断片をつなげる手段として，幾何形態の様々な性格が規則性の感覚を私たちに与えてくれる。　全体的秩序をおさえるには基本的な幾何単位が役立つが，幾何形態には他にも役割がある。　それは，3次元的作業におけるプロポーションのシステム化をはかり，屋根形態による規律であり，諸要素の調整，そして部分的対称も司どるのである．

●断面

3次元操作は平面の秩序を拡張し，空間相互のつながりが断面形の発展により形成されていく。　断面はプランの単純な動きを更に豊かなものにする．

●空間秩序

デザインにおける用途による広さは多様な配慮から割り出されているので，空間のつながりの知覚範囲を拡げると同時に周辺状況や空間の変移点（敷居などの）が空間の境界そのものを定義づける手段となる。　従って私たちは織りなされた空間の明解さを，意図的なグリッド構成で規制する。　人がグリッドを空間構造として読みとる時，秩序内部の例外と突発的な事象は，このグリッドの枠に参照されて初めて理解される．

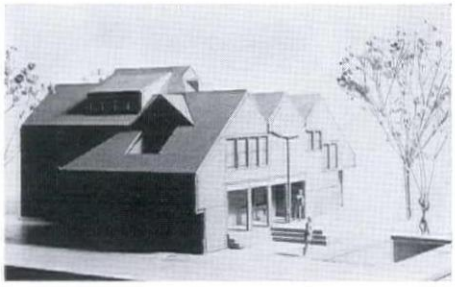
●要素同志の対話

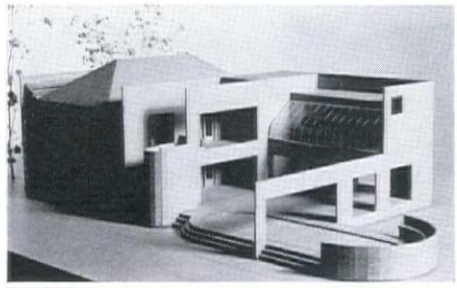
目に見える要素間の関係性，それらの形態的特徴，また連続性の中で並置されたもの等の意図された空間要素同志の対話がデザイン主旨を建物に織り込む手段となるのである。　これら幾何形態により秩序づけられた関係性からスケール感があらわれてくる．

●スタイルとイメージ

個々の作品は，それ自体のボキャブラリーを持っていて，しばしば，それらは諸条件により〈与えられた〉ものから生じる。　イメージの巾は背景から主役へと広いが，空間をより深く理解するための基本として素人でも直ちにわかるようなイメージのあることに私たちは着目している。　初めの平面操作から拡がる一連のコントロールされた形態性というものが，私たちの作品に浸みわたっていて，結果としてデザイン要素同志の適応がなされているのである．

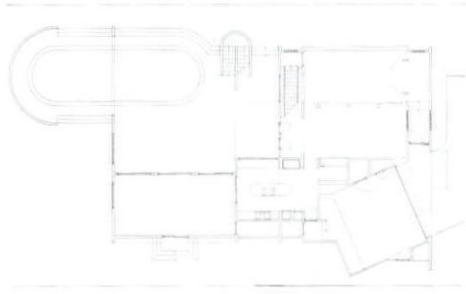
現在，工事下のものも含め，彼らの作品で実現化されたのは3作で，3年の歳月をかけて完成されたデイビス邸は AIA のヒューストン支部の賞を受けている．はじめに戻るが，一連の過程として彼らの仕事をみる時，基本的な設計思想の全てが，この小さな建物に結晶しているのを見ることができる。　●沼辺国夫

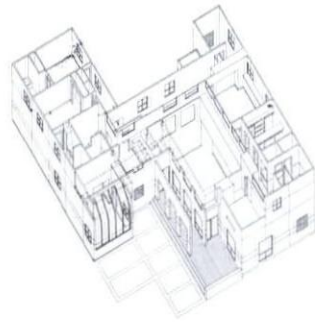


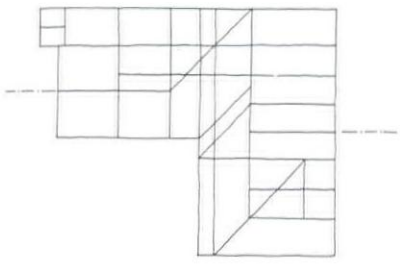


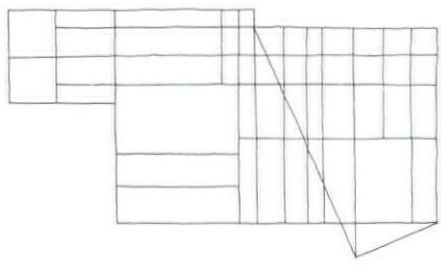


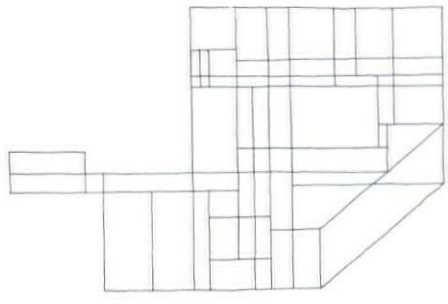












Scardino House

Brown House

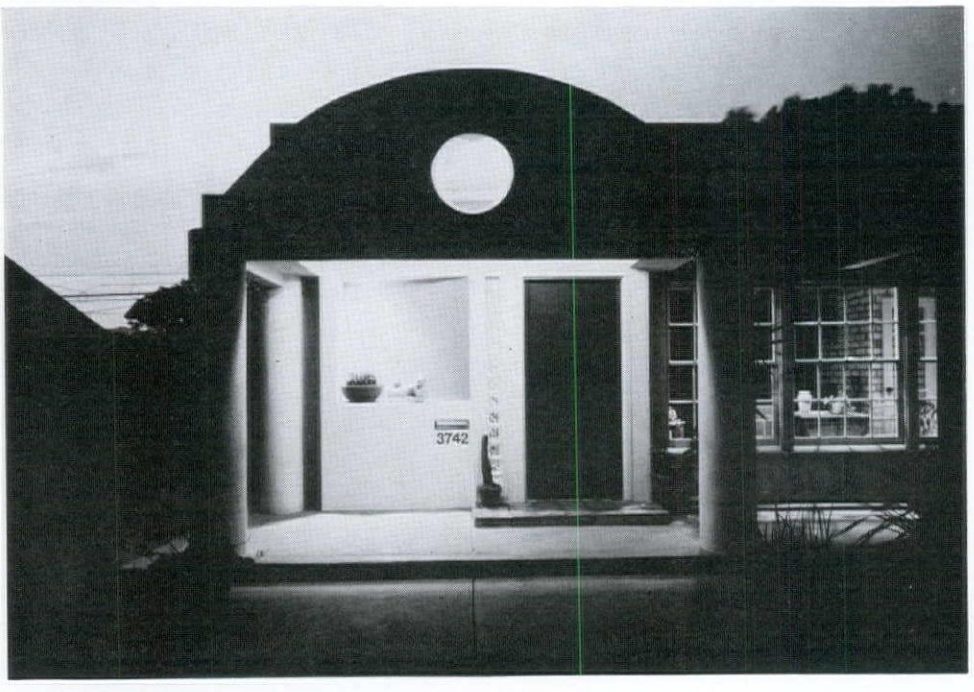
Strauss House

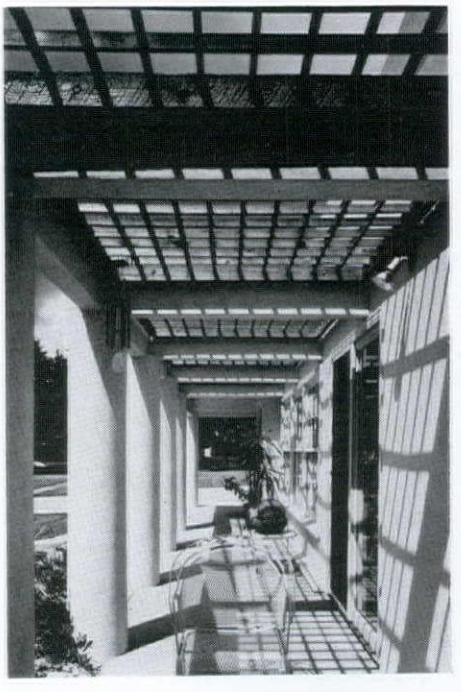
Davis House　*Houston, Tex.*

これは彼等が設計したものの中では最も小規模なもので，建物の断片ともいうべきものであるが，彼等が遭遇したあらゆる問題を含んでいるといえる．　与えられた条件は視覚的混沌ともいえる小さな〈ランチ・スタイル〉の住宅で，リビング・ルームの三連窓と弱々しい切妻屋根というファサードを持ち，両サイドには，はなはだ不自然なエントランスとプロポーションの悪いスクリーン・ポーチが付けられていた．

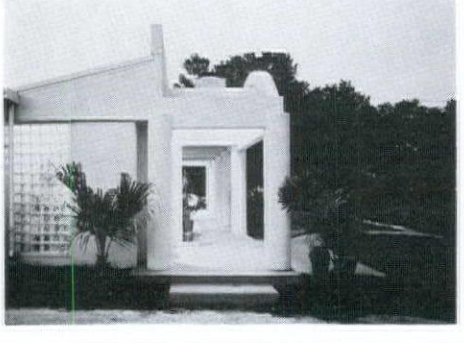
敷地は異なるグリッド・システムからなるふたつの道路の交差点にあり，その交差点上にグリッドの違いの結果生じた小公園を眺めることができる．　施主は歩行者と車の両方から見易いエントリー形式を望み，居間を可能な限り広くとり前庭を社交用空間として活用し，建物の視覚的イメージを良くすることを要求した．また居間の前面には，いかなる室内空間も造ってはいけないというのが条件であった．

そこで彼らは外部空間と内部空間，各要素が層状に置かれた空間をつくることで家の前面全体を活性化することを解決案とした．　規則的な幾何形態が旧ファサードに重ねておかれ，グリッドに分割された空間の流れが，このゾーンを密にし，新旧空間を連続体にする．基本となる幾何形態による規則性に対してエントランスの形態的バリエーションはテクスチャー，光そして色などでフロント空間を豊かなものにしている．　付け加えるなら，外部空間を社交空間として利用する考え方は特にテキサス，即ち南西アメリカのコンテクストに適したものといえる．

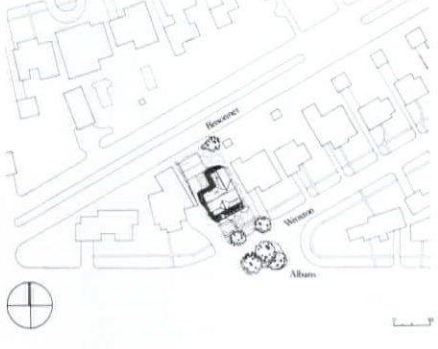




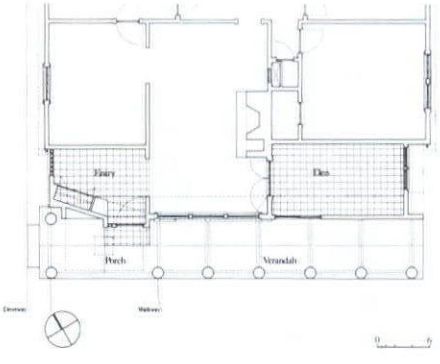




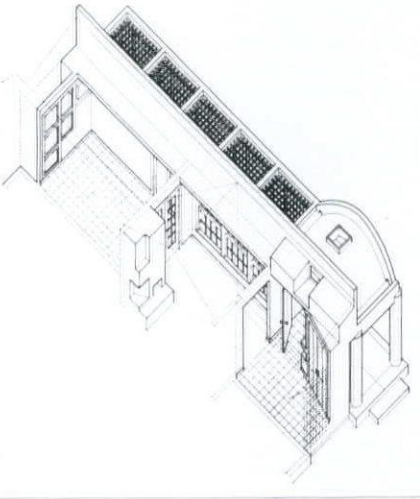




配置図　site plan



平面図　plan



Friday Architects

フライデイ・アーキテクツ：1970年に Donald Matzkin と David Slovic の二人によって創設されたフライデイ・アキーテクツの作品は，数々のコンペで，一躍，広く認められるようになった．　それらの作品の展覧会がクーパー・ヒューイット美術館やペンシルヴァニア美術アカデミーで開催されている．

パートナーは Frank Mallas（1966年クーパー・ユニオン大学卒業），Donald Matzkin（1963年コーネル大学卒業），David Slovic（1966年ペンシルヴァニア大学修士）である．



Temple University, Student Activities Center *Philadelphia, Penn. 1979–81*

現場は，1969年に建てられたスチューデント・アクティビティ・センターのメイン・フロアにある面積約1700m² の空間である．　計画は，既存の厨房の改装および修復と，事務室やラウンジを含む新しい学生用アクティビティ・ルームにカフェテリアをつくること，またレクリエーション用のゲーム室，シネマ・オーデトリアムとミーティング・ルーム，さらにのびのびとした学生生活のための面積 75m² の〈たまり場〉的な屋外バビリオンを新設することなどが含まれる．
今回，再改修のために行なった設計とは，センターの目的を高らかに明示し補強するものである．　すなわち，恒常的な学生の存在を認識させ，また学生たちの精神（スピリット）を表現できるようにすることである．　スチューデント・アクティビティ・センターはその要（かなめ）的な位置と用途によって，大学生活に一種の伝統をもたらし，また大学そのものの新しい感覚を与える役を負っている．　そのため，プロジェクト全体を通して，大学の正式な封印に使われるギリシア神殿の図案といったかしこまったものからキャンパス生活の日常的なイメージに至るまでの，大学のいろいろなシンボルをあちこちでとり入れている．
新しく奥まって設けられたポーチのスタッコ壁は，石に似せて仕上げられており，そこから円形のロビーへと通じている．　そして，古典的な柱のある広場（フォーラム）に出るが，ここは主要なサーキュレーション路が交差するところでもある．　入口広場，交差点，円形ロビーといった主要なサーキュレーション・エリアはこのセンターを代表する空間で，キャンパス独特のアイデンティティをかもし出している．　中央の交差点には，床に大学の〈盾〉のモザイク画がはめこまれており，一方シネマ館のロビーには，折上げのある天井が，劇場入口庇のように見える．　陶製のタイルの腰板は，装飾のためであると同時に安価な壁材を保護するためでもある．　これには大学の歴史を飾り板や盾などに刻んではめ込んであり，学生たちと大学の歴史とのつながりをより深める働きをしている．



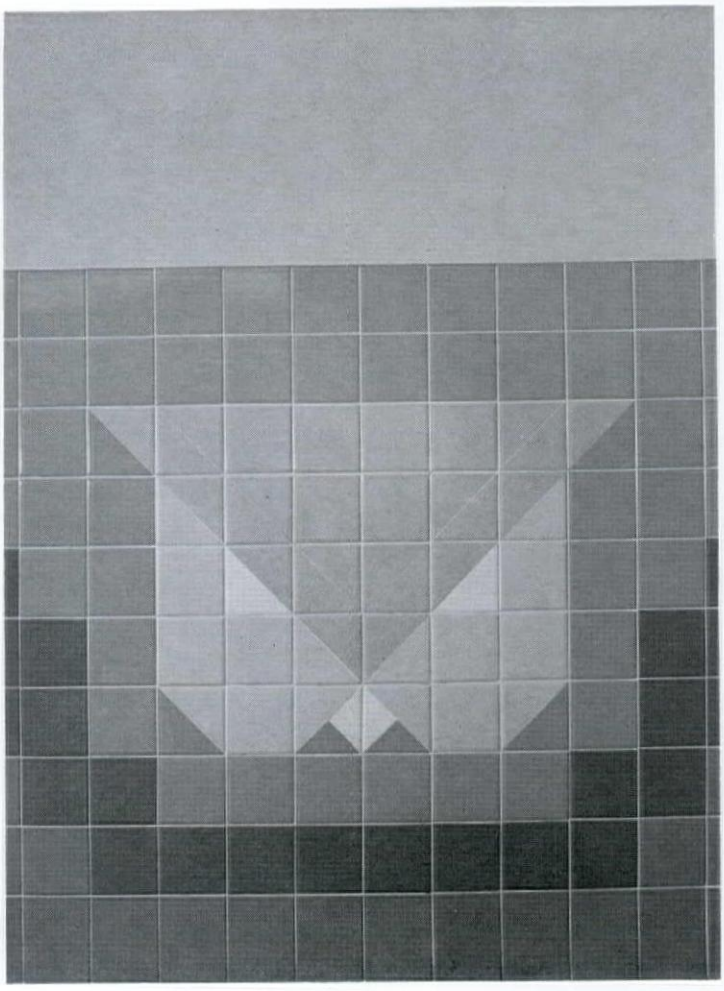
photo=Robert Harris

Our design for the reconversion meaningfully reveals, and reinforces the purpose of the Center: to establish a strong identity for student life; to create a recognition of the continuous student presence and to allow the expression of student spirit. By its important location and by its use, the Student Activities Center has the role to enhance a sense of Tradition for university life and to indicate a new sense of the university itself. Throughout the entire project, we employ the symbols of the University from the formal representations of a Greek Temple used in the official university seal to the familiar images of campus life.

A new recessed porch with its stucco walls made to have a stone-like appearance directs entrance into a circular lobby where a classically columned forum receives the students and intersects the major circulation paths. The new plan provides a generous spine as the permanent connector to the activities spaces and allows flexible programming of the constantly changing student uses. The circulation spine is a sequence of articulated areas, each with a cove-lit ceiling vaults accompanied by seating niches, information tackboards, and small informal lounges. These major circulation areas, entrance forum, the crossing and the circular lobby are permanent special features of the Center creating an identity unique to the Campus.




THE OWL
THE OWL OF THE NIGHT
BECOMES THE EAGLE OF THE DAY
Dr. Russell H. Conwell,
1892
Inspired by Dr. Conwell's comment
in a class lecture, a student returned the following
day with a banner bearing the inscription and a
drawing of an owl. From that point on, the owl
has been an emblem linking Temple with evening
instruction and wisdom.





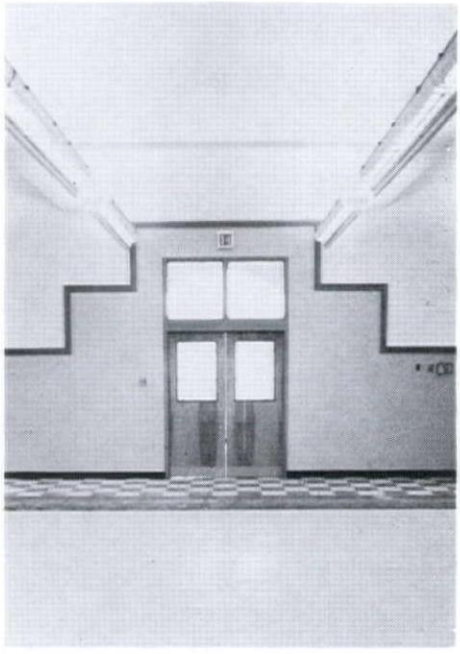


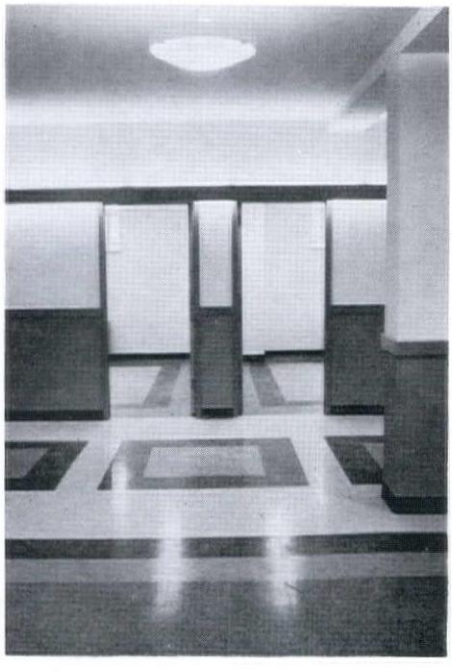
Photos = Robert Harris

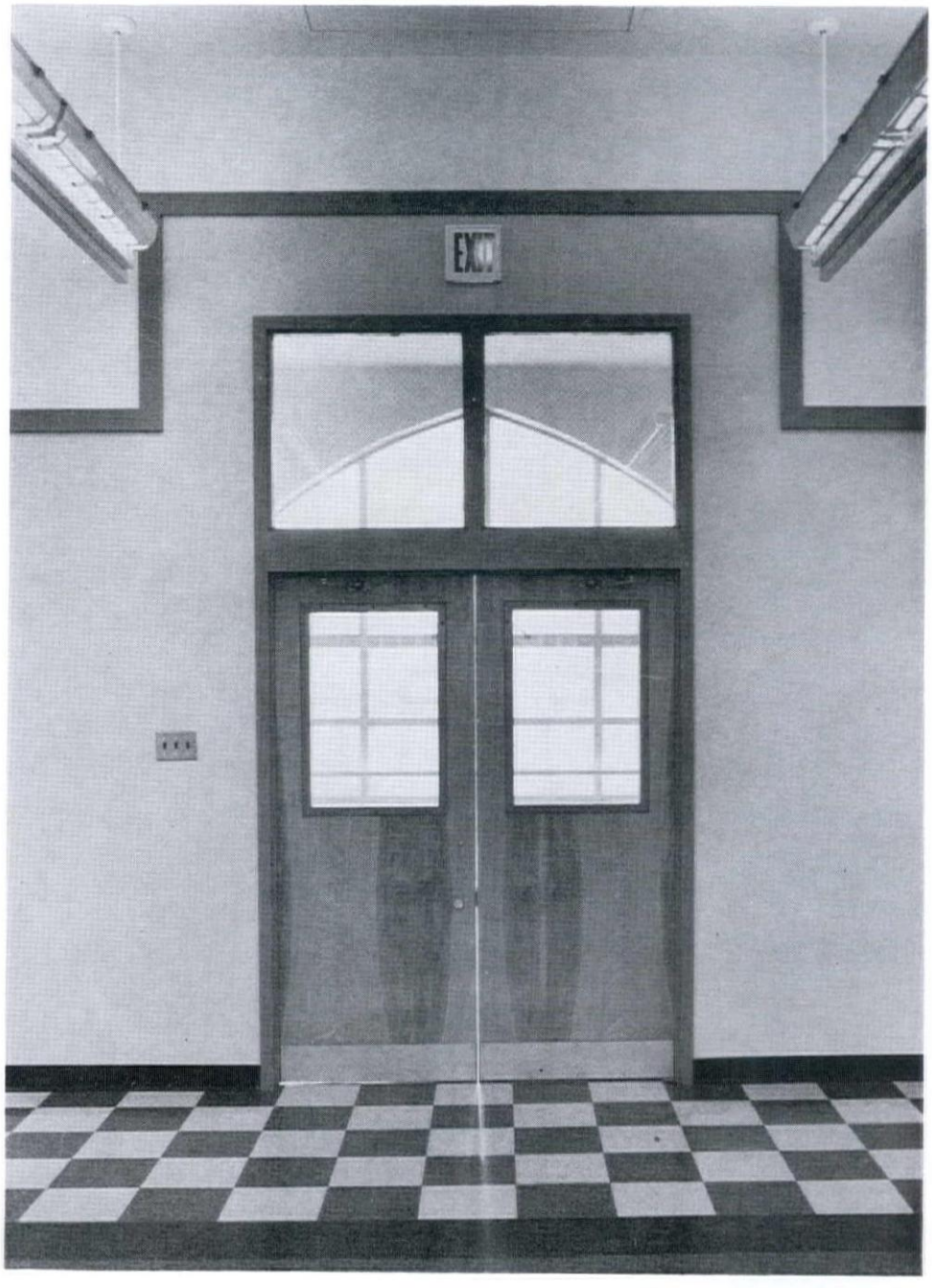
Grays Ferry Community Center, *Philadelphia, Penn. 1976-1980*



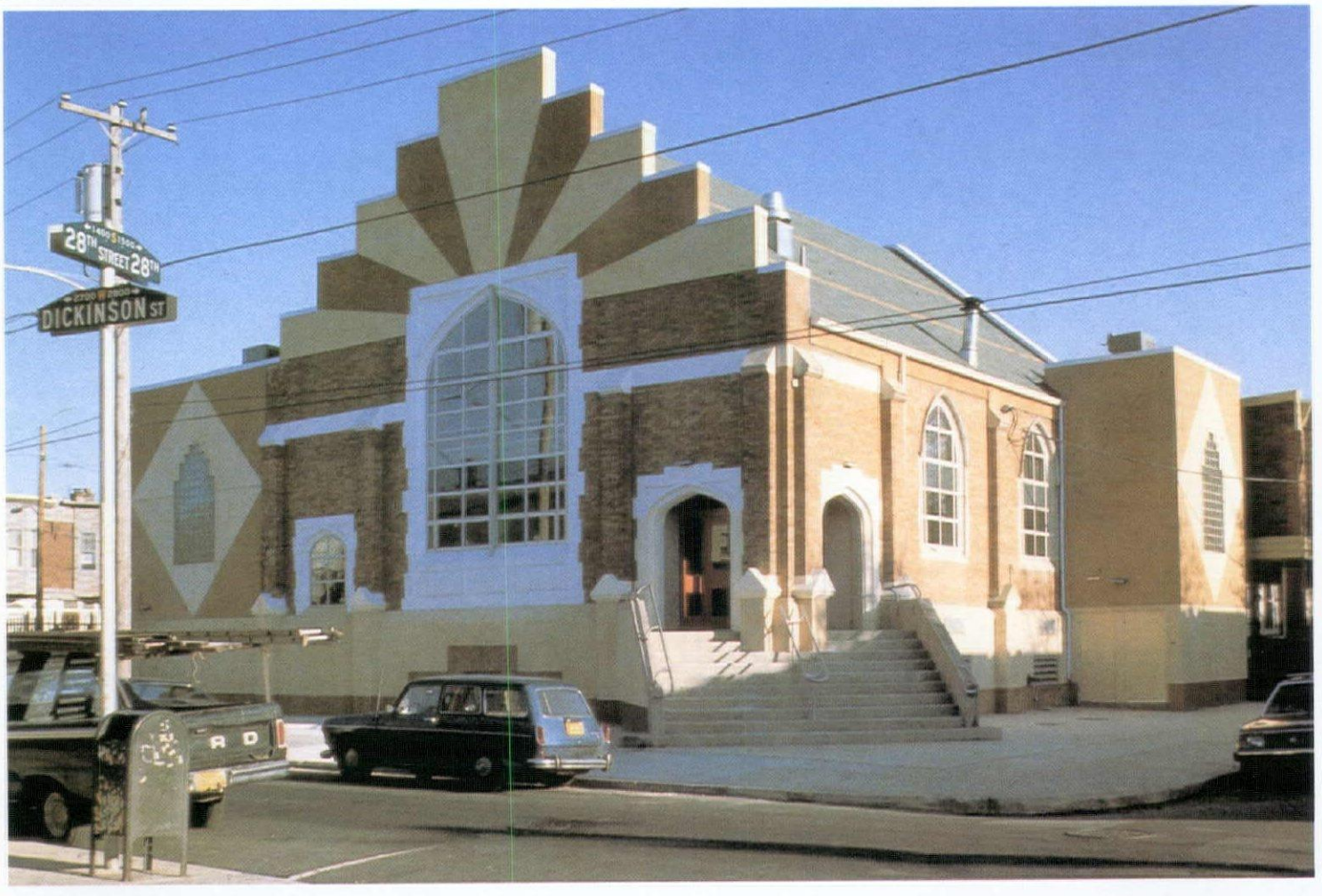
アイルランド系の住民地区に建つコミュニティ・センター。　この地区からの住民の流出を防ぐために計画された。　この建物は，元はカソリック教会として1950年代に建てられ，その後一度は保育施設として利用されたが，ここ5年ほどは空家のままだった。
センターへの改修に際して，私たちは既存の構造体には手を加えず，また既存の要素もできる限りそのままにして，それに新しい形を付け足し，ブリコラージュするという方法をとった。
外壁は，既存のテラコッタやレンガはそのまま保存しながらも，ブロック積みの上に2色のスタッコを塗り分ける仕上げとした。　入口の位置も昔のままとしたが，デザインしなおした。　正面上部外壁の放射状の模様と，左方の大きなダイヤ型のパターン――中にガラスブロックの窓のある――が，建物全体を活気づけ，またモニュメンタルなものにする上で重要なものとなっている。
建物の内外にわたって記憶に残りやすいイメージを作り出すことによって，この建物がコミュニティの中心であるということを強調しようと試みた。　この建物が実際に使われた段階になって，新たに生ずる記憶が昔のイメージと重なり合い，そして固有の意味をもたらすことを願う。



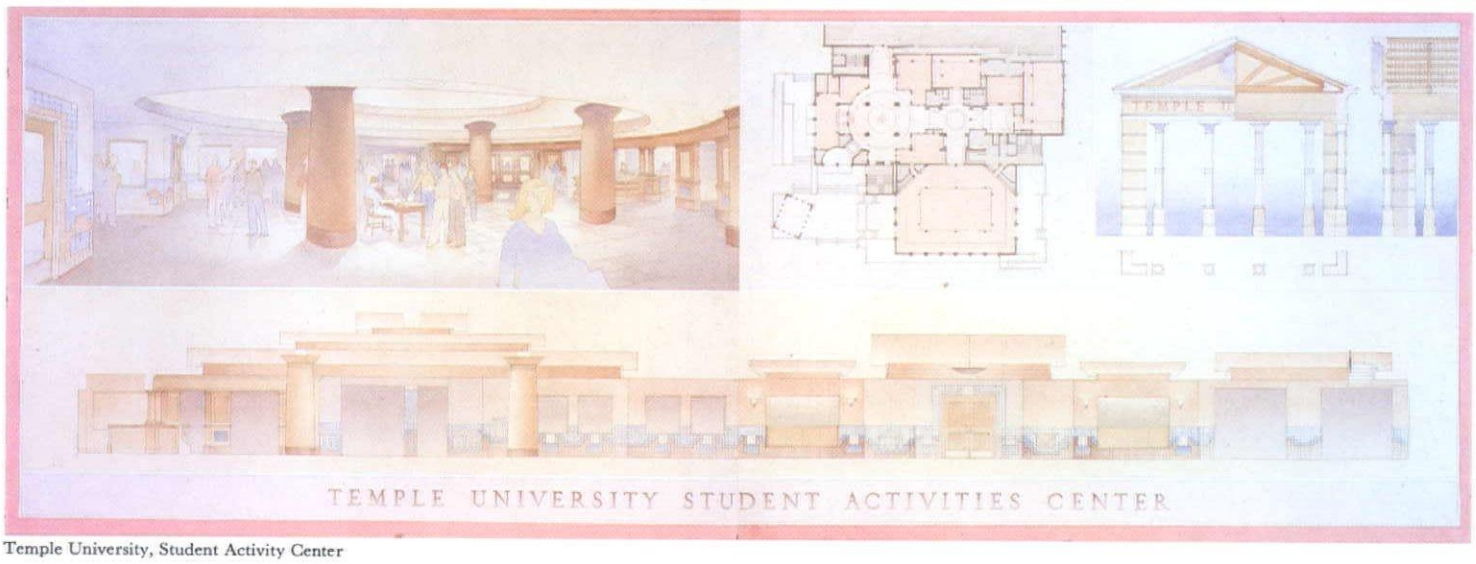




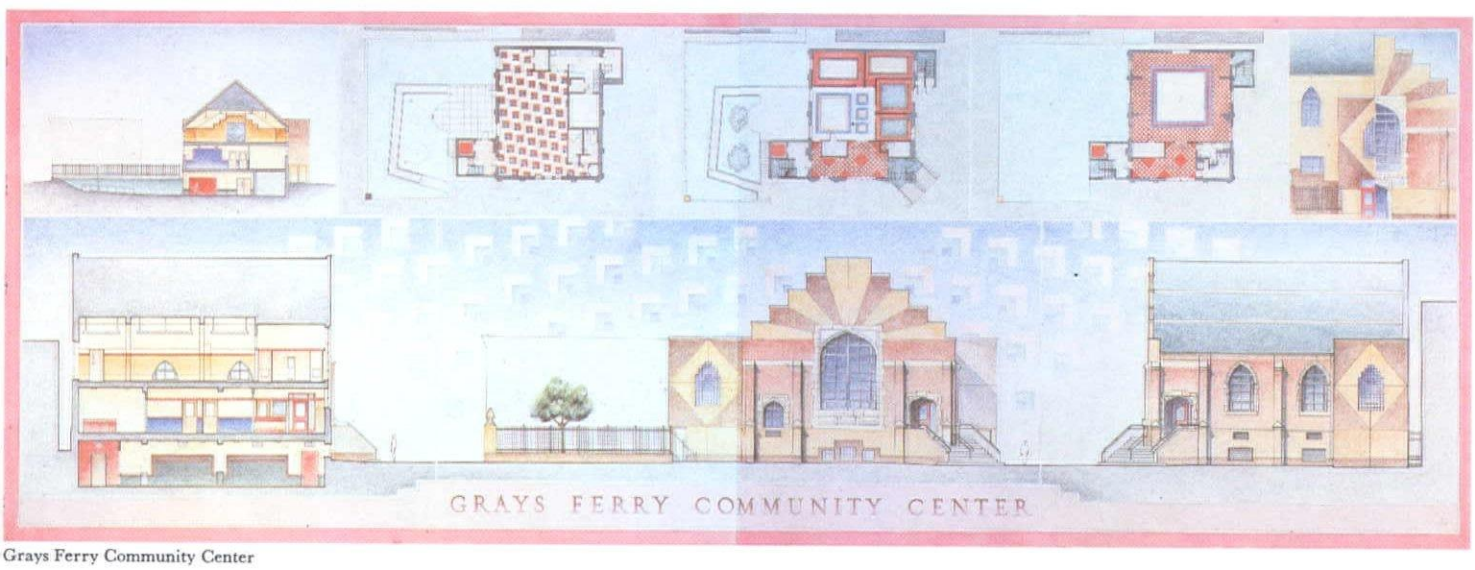
The Grays Ferry community is an Irish Catholic family neighborhood. Working class, with low and moderate income groups, including a wide mixture of ages and a large elderly population. After developing the urban renewal plan for the area, Friday Architects / Planners were asked to respond to the need for a community center. A building for this center was donated to the Community Council by the Catholic Archidiocese. Formerly a Protestant church renovated in the 1950s into a pre-school facility, this building had been empty for five years. Publically funded through a city agency for community sponsored projects, this center, built with a minimal budget, became a secular place for the members of the neighborhood to relate socially, meet and communicate. In the process of rehabilitating and converting the building, old structures were kept, integrated, adapted and charged with new forms and meanings. The new construction keeps the facade and structure of the old building, which was in an advanced state of disrepair, while developing a new bricolage of forms and a new utilization of the space.


28TH STREET 28TH
DICKINSON ST

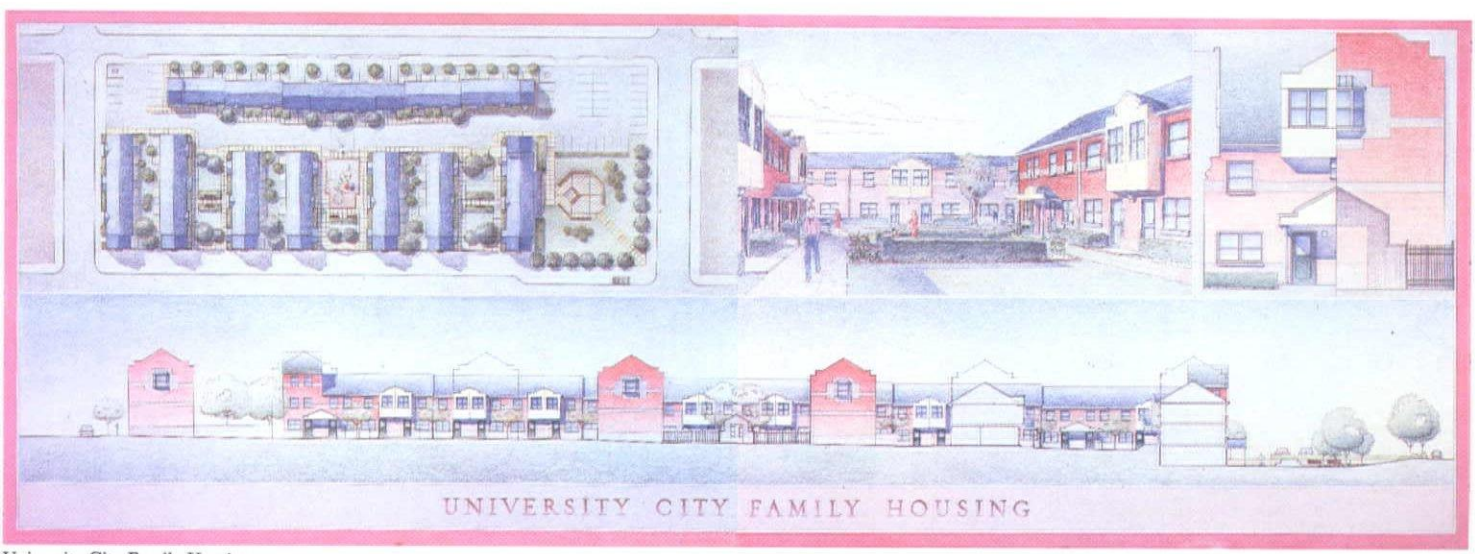




Temple University, Student Activity Center



Grays Ferry Community Center



University City Family Housing

“異化”の流れの中で——Fly Friday!

Fly Friday! *by Noriyuki Yasuyama*

安山宣之

何故“Friday”なのか．　私は，その名付けられた詳しい事情を知らない．　だが，“Friday”という名は，まず，ロビンソン・クルーソーに登場する，忠実な彼の下僕を思い出させる．また，“Friday”はキリストの受難の日でもあるから，“Good Friday”とか，“13日の金曜日”とかいわれて，単に曜日の記号としての呼称を超えて，いわくありげに響く名称でもある．さらに，現在のアメリカ人にとっての“Friday”がある．　それは給料日と週末の休暇が重なった，仕事の受難から解放される日であり，心の浮き立つ，Weekend Life の始まる日である．

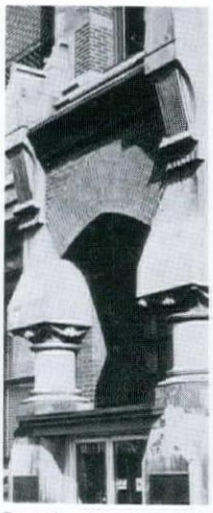
David Slovic が，彼と彼のパートナーの活動の場を“Friday”と名付けた時，そこにどれ程の意味合いを塗り込めたのか，私は尋ねそびれてしまったが，“Friday”という，余りにポップな，そして建築家の事務所としては，余り耳なれない名称を冠したその行為自体の内に，既に，“異化”を表現の手段とする彼等の建築に対する姿勢の一端を感じ取る事が出来るともいえよう．　そして彼等はいずれも AIA のメンバーではないのか，あるいはその意味を無視しているのか，肩書に AIA の文字は見られない．

彼等の事務所は，開設されてほぼ10年になると聞くが，その作品数は，例えば同世代の日本の建築家の事務所に比べ，決して多いとはいえない．　これだけの数で，良く事務所を維持して来たものと危惧されるが，パートナーのほとんどがフィラデルフィアを中心とした大学で教鞭を取りつつ制作活動をしていると聞けば，納得がいこう．　日本と比べ大変オープンな大学のポジションは，若手建築家の登竜門のひとつであり，大学に席をおき，コンペで鍛えながら，チャンスを待つという形は彼等も含めて，デビューに備える若手建築家共通の姿である．教えながら，コンペで鍛えながら，小品にその欲求不満をぶつけながら，一歩一歩各自のデザイン論，手法を固めていく，その点に，アメリカ建築界の多様さ，層の厚さの，ひとつの理由があるように思える．

数少いとはいえ，作風としての Friday は一言でいえば大変，フィラデルフィアらしい．古くは，H. H. Richardson が，ボストンらしく，F. Furness が，フィラデルフィアらしいように，また，C. Moore が，カリフォルニアらしく，R. Venturi が，フィラデルフィアらしいように，さらには，F. L. Wright が，シカゴらしく，L. Kahn が，フィラデルフィアらしいように，そのように，Friday もフィラデルフィアらしい．　「建築家は都市を創り，都市は建築家を育てる」といわれるように，都市に流れる文化の血は，ストックされた建築の内に最も端的に現れるとも考えられるが，フィラデルフィアではことに，それが顕著にうかがえるように見える．　シカゴ・スクールといい，フィラデルフィア・スクールといい，そう呼ばれるには，それなりの系譜を備えていなければならない．　R. Stern が指摘するように，L. Kahn の急逝によって，いまや，フィラデルフィア・スクールは霧散してしまったとはいえ，Friday の作品は，フィラデルフィア・スクールを育てたその同じ土壌の上に成り立っていると思われる．　では，その土壌とは何か．

フィラデルフィアは，ボストンと並ぶアメリカの古都であり，ウィリアム・ペンの都市計画に基づくコロニーに発し，独立戦争時には，ベンジャミン・フランクリンを中心とした〈志士〉の活躍の場であり，一時はアメリカの首都であったというあたりまでは，良く知られている．　だが政治の中心をワシントンに，貿易をニューヨークに譲ってからは，西海岸のロスアンゼルスや，工業化時代のシカゴの発展，また，近年のサンベルトのヒューストンの急成長に比べれば，ほとんど話題になるべき急展開はなく，いわば，「過去の栄光のみに支えられて，他都市の発展を横目で眺めて来た町」といって良いかも知れない．　人口200万とはいえ数年前，ヒューストンにその人口規模で追い抜かれて第5位の地位に甘んずるフィラデルフィアは，斜陽の町に共通な，活気に乏しい，どこかシニカルな視線と共に，過去への強いノスタルジーを感じさせる町である．　映画《ハイ・ソサイエティ》の舞台であることを，また，グレース・ケリーの出身地でもあることを誇り，また，同時に，オーマンディのフィラデルフィア交響楽団，マルセル・デュシャンの最大のコレクションを有するフィラデルフィア美術館を誇る市民感情は，知的であると共に，貴族的で線が細く映る．　建築の流れもまた，それらと呼応するかの如く，例えば，ロシア・フォルマリストが“異化”と呼んだ手法を生れながらにして身につけているような作家が目立つ．

独立によって政治的には自立したとはいえ，初期アメリカ建築界の動勢はその母体，イギリスとフランスの直接の影響下にあり，文化の周縁地域に共通の強い中心指向性を示している．グリーク・リヴァイヴァルから，ゴシック・リヴァイヴァル，第二帝政様式，クイーンアン様式等々，中央から周縁への，様式の伝播の速さは，戦後の日本が欧米の文化，流行を受け入れる速さと変らぬ程に精力的である．





①センテニアル・ナショナル銀行／F. Furness　②ウイリアム・ペンの像

フィラデルフィアの建築家の第一世代は，グリーク・リヴァイヴァルの T. Walter, W. Strikland に代表される．　なかでも，T. Walter はワシントンの国会議事堂のドームの設計者の一人であり，また，ニューヨークの R. M. Hunt 等と共に，AIA 創設者のメンバーでもあり，このあたりまではフィラデルフィア栄光の時代といって良かろう．　南北戦争が終って，R. M. Hunt のもとからフィラデルフィアに帰って来た F. Furness は，ラスキン，ヴィオレ・ル・デュックの影響下に，ゴシック・スタイル，とりわけ，ヴィクトリアン・ゴシック様式をとり入れながら，特徴あるファネス・スタイルをつくり上げる．　L. Sullivan も一時

その事務所に席をおいたことのあるF. Furnessは同じころ，ボストンを中心に活躍した，H. H. Richardsonと双璧といわれるが，ロマネスク風でおおらかなH. H. Richardsonに比べ，部分が誇張された〈異様〉さが目つ作品がF. Furnessには多い．　F. Furnessはフィラデルフィア・エリアに数多くの作品を残し，その街並に独特な味わいを添えるに貢献しているが，それは，中世回帰の当時のアメリカの風潮を反映した結果ともいえ，ほぼ同時代の作家，ボー（フィラデルフィアにも居を構えた事がある）また，ホーソン等の作品の内に，その時代の趣向を感じ取る事が出来よう．　ちなみに，M. I. T. から出版されている《ARCHITECTURE IN PHILADELPHIA》には，F. Furnessのものが34作品ありピックアップされた建築の中で最多となっているが，これからもF. Furnessがフィラデルフィアに与えた影響の大きさが推し計られよう。[1]　そして，Fridayは特にその表層のデザインにおいて，数多くをF. Furnessより学んでいるものと思われる．



③P.S.F.S.／G.Howe



④オールドバイン・コミュニティセンターのタイル／Friday Architects

南北戦争から世紀末までの東海岸の諸都市は，ノスタルジーを伴ったロマンチシズムに支えられた諸様式の並存混在となる．　その中のひとつ，第二帝政様式のフィラデルフィアの市庁舎は同じ様式のボストンの旧市庁舎に比し，顕著な特色を持つ．　それは市庁舎の塔の頭上に頂く，巨大なウィリアム・ペンの像に起因する。[2]　現在でもフィラデルフィア最高の高さを維持しているこの巨像は，その“異化”されたスケールの故に市のシンボルである．　類似の特徴は，1930年代の超高層のひとつ，G. Howeの手になる《P. S. F. S.》にも見られる。[3]　エンパイヤ・ステートビルと前後して完成した，アール・モダーンを基調とするこの建築はR. Venturiが，《複合と対立》の中で触れている如く，同じく屋上に載せられた異様に巨大な《P. S. F. S.》という看板によって，その様式を超えている．

フィラデルフィアの第三のピークを築いたL. Kahnは，このG. Howeのもとから出ている（ついでながらG. HoweはF. Furnessの弟子である）．　L. Kahnの作品については改めてここで述べるまでもあるまいが〈モダニズム以後〉のロマンチシズムの先駆けともいわれる，L. Kahnの中世回帰指向，アーチやピラミッド等の古代形態指向は，フィラデルフィアの知識階級に共通な指向性に発しているように見える．　そして，例えばデビュー作の《リチャーズ・メディカル・センター》の〈デフォルメ〉されたサーヴィスタワーのデザイン，また，アーチや円等の〈異様〉なスケールによる建築化の手法などもL. Kahnにおける私のいうフィラデルフィアらしさではないだろうか．

L. Kahnから学んで登場したトリックスター R. Venturiの“異化”の手法は，同じく彼のデビュー作《ギルドハウス》――それは，ボーの《スプリングガーデンの家》に隣接しているのだが――に，要約されるように，彼の著作・論評に意識的にとり上げられていて著名である．　その著作は，〈モダニズム以後〉の教本として，大きな影響力を持っているが，彼の発想自体，ニューヨークではなく，シカゴではなく，ロスアンゼルスでもなく，フィラデルフィアである．

このような土壌を背景としたFridayについて，R. Sternは〈Ventullet（ヴェンチュレット）〉と皮肉な呼称を与えているものの，R. Stern自身をも含めて〈ヴェンチュレット〉は多い．　ここに掲載されたTaftを含め，アメリカ若手建築家で，色々な意味において――影響されるにせよ否定するにせよ――R. Venturiと交差しない作家は少い．　R. Sternが〈Venturi〉を〈Moore〉で割った〈サビ〉の抜けたヴェンチュレットであるのに対し，Fridayは〈Venturiを父に，Furnessを母〉とした正統な，ヴェンチュリアンである．　ヴェンチュリアンであって，FridayのVenturiと異る点は，双方の表層に対する考え方ではなかろうか．　例えば，Fridayのデビュー作，《オールド・バイン・コミュニュティセンター》[4]のタイルと，Venturiのニューヨーク州立大学のタイルを比較して見れば分りやすい．　Venturiの外壁タイルは，建物のひとつの立面を他の3面から区分するため，“異化”するための手段であるのに対し，Fridayのタイルは，その図形にイコノグラフィカルな意味を与えてその表層を意味伝達の媒体としようとする．　Fridayはまた，全体のフォルムに余り関心を示さない．　全体像よりは部分の形態に，また表層に，そしてそれらの持つシンボル性，意味性に，しいてはその意味性の成立する社会的コンテクストに強い関心を示す．　コミュニティセンターの仕事が彼等のメジャーワークである事も，そのような傾向を強める理由のひとつだろう．　今春，ニューヨークのアーキテクチュラル・リーグ主催の《新しき響き》と題する講演会で，Taftと共に，招聘された旨が，《スカイライン》の記事にあるが，それによるとFraidayは彼等の作品を提示することで，〈フォルマリスト批判〉を行なった模様だ．詳しくは紹介されていないが，司会者R. Oliverの批判的記事，そしてそれに対するFridayの反論と，めずらしく建築界の論争を伝えていて面白いが，Fridayらしい議論と見受けた．

ここに紹介されたFridayの近作からも推し計られるように，彼等は形態の，また表層の意味論的操作を今後もより彼等のデザインの主力としていくようだし，また，エアブラシによる図面表現の手法も加えて，ますます多弁になることだろう．　そしてまた，その作風はこの近作から見る限り正統なヴェンチュリアンであることを誇示しているようでもある．　だが，おそらく彼等にとっての今後の最大の課題は，正に，その点にある．　ちょうど，L. Sullivan抜きにF. L. Wrightが語られ，L. Kahn抜きにR. Venturiが語られるように，R. Venturi無しで，Fridayが語られるその転期を如何にしてつかむか，それが問題だと思われる．　それはまた，“Friday”が彼等のロビンソン・クルーソーと訣別して，“Friday”であることをやめ，自らの目的地に，自らの航海を旅立つ事なのだろうし，その意味では次作の展開が期待される最も有望な若手作家のひとつである．

Fly, Friday!, Good-Bye “Friday”

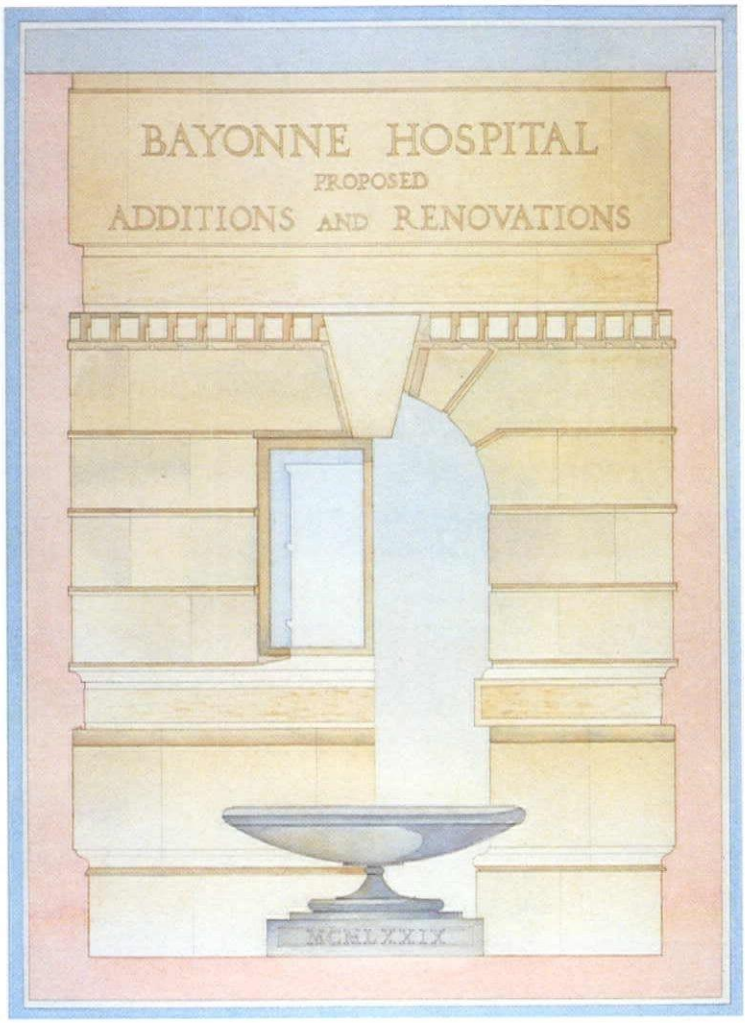
●やすやま・のりゆき／建築家

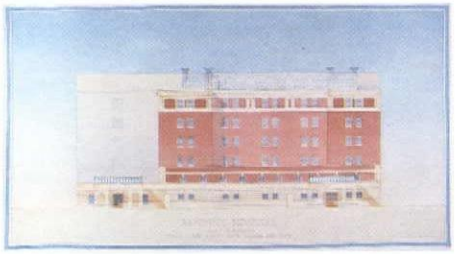
John Blatteau

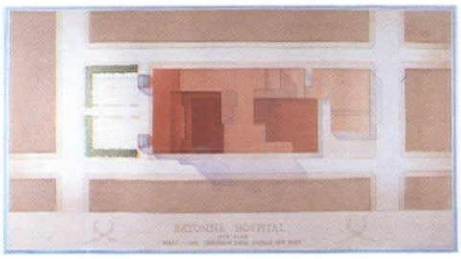


ジョン・ブラトー：1943年フィラデルフィアに生まれる．
1971年ペンシルヴァニア大で MA を取得． 1976年から同校で，また1978年からドレクセル大学で教える． 現在はフィラデルフィアの設計事務所 Ewing Cole Cherry Parsky に在籍．
ここに紹介する作品は，いずれも同事務所での仕事である．

Bayonne Hospital Additions and Alterations *Bayonne, New Jersey 1979*

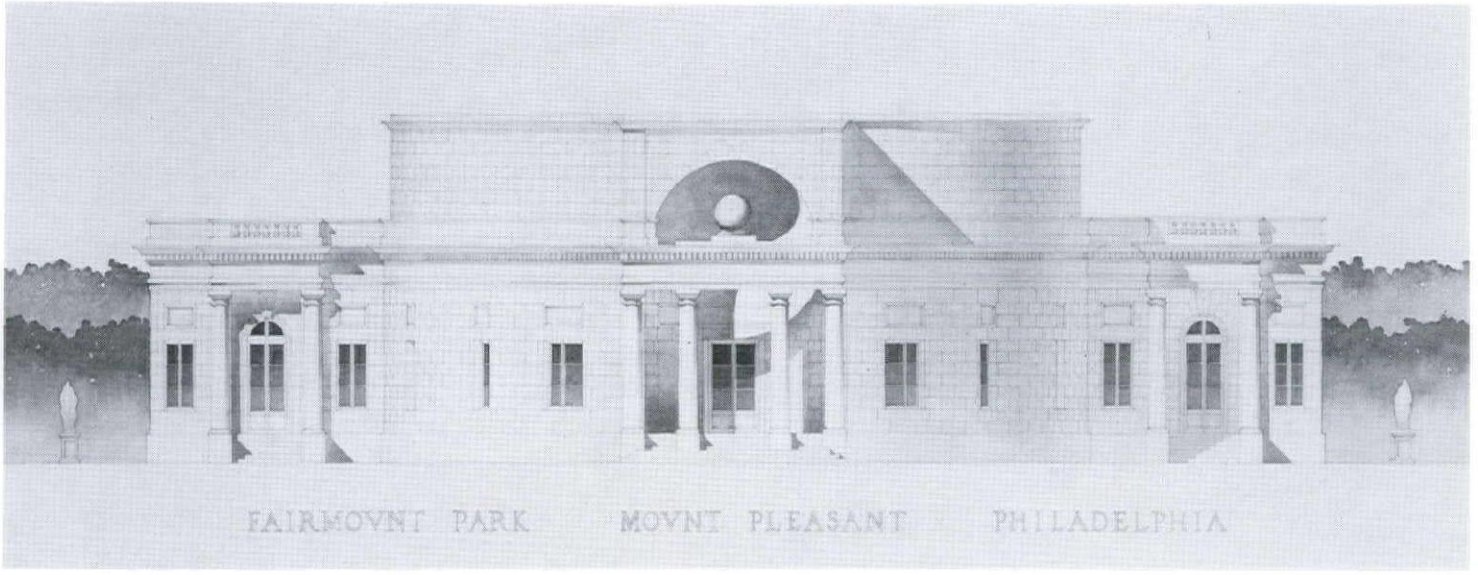








Mount Pleasant *Philadelphia, Penn. 1976*



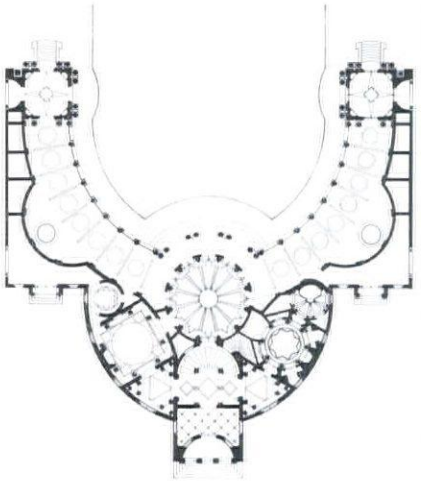
●Bayonne 病院の増改築案 ←

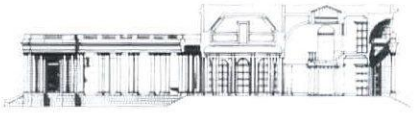
この計画は，複雑で技術的な建物のプログラムの中に，スタイルについての問題提起をしている．　既存の2つの病院のプラント（建物及び設備）を結びつけアイデンティティを強調するために，古典様式が用いられている．　公共建物に共通の伝統的なエレメントを用いることにより，コミュニティにおいては病院もひとつの市民の公共施設であるということを再認識することができる．　1階では，石造り歯飾り，かなめ石を用いて，歩行者の建築体験の効果を高めている．　空を背景にしたとき，屋上階のコーニスと粗面仕上げの機械室のペントハウス，建物の構成を完璧にしている．Bayonne 病院が提示しているのは，設計の伝統的アプローチは，今日でもひとつの合理的な建築的解答であるということである．　同時に選択の自由を与えれば伝統的建築に対して施主も暖く応じるということも示している．

●Bayonne Hospita ←

In its design, Bayonne Hospital raises the critical issue of style within the framework of a complicarted and technically demanding program. The design ties together the physical plant of the existing hospital and reestablishes its physical identity in Bayonne. The classical style is used to reinforce this sense of identity. By using elements traditionally common to public buildings, we reaffirm the civic aspect of the hospital in the community.

The resolution of the building at the base, with the use of rustication, dentils and keystones, enhances the pedestrian's experience of the building. Against the sky, the attic story cornice and rusticated mechanical penthouse complete the composition of the building.





●マウント・プレザント

マウント・プレザントはフェアモント公園内の増築計画である．　建物は，フランスのネオクラシカル・スタイルで，公園の中にふさわしい公邸の姿を具体化している．　それは，〈理想的な部屋〉の集合体であると同時に，理想的な〈部屋の集合体〉でもある．　建物は全体として，主に解放的な庭のファサードによって，私的な部分と公的な部分とのコントラストを明快に打ちだしている．

ディテールにおいても建物の構成同様に普遍的な質を保っている．　建築的要素が伝統的に用いられているのだ．

柱，壁，窓，そしてパラペットには独創的な解釈や変形を施さなかった．　それらは本来のあるべき姿で，つまり，伝統的な建築的要素が文字どうりに，そして正確に使われたのである．

●Mount Pleasant

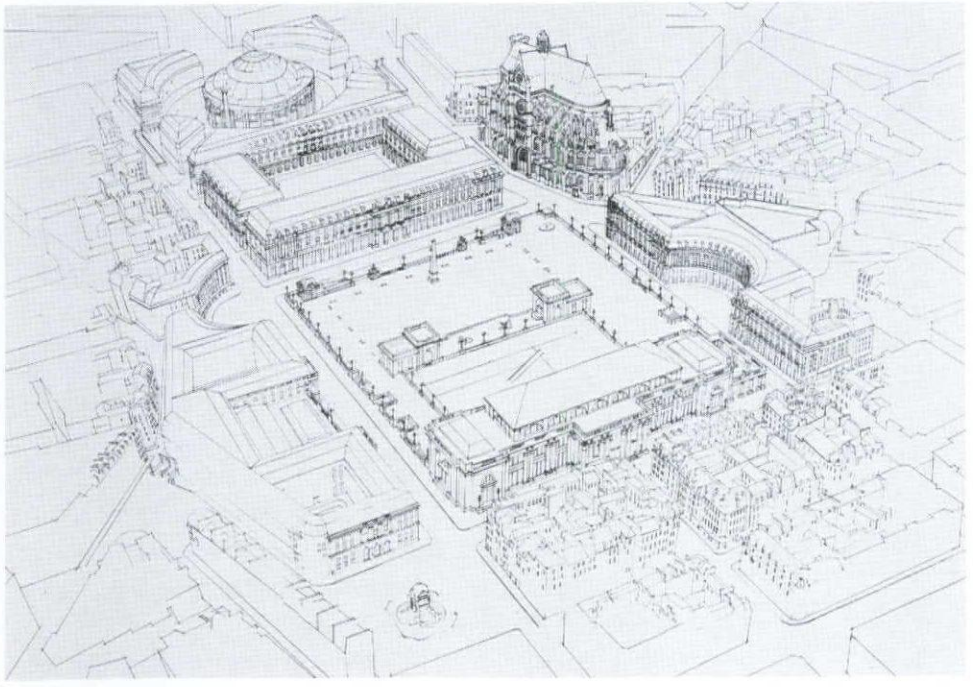
Mount Pleasant is to be a permanent addition to Fairmount Park. The house is French Neoclassical in style, a style that embodies the spirit of a public residence in the park. It is at once a collection of ideal rooms and a collection of rooms organized into an ideal whole. The house as a whole, with its totally open garden facade and its relatively solid entrance facade, simply states its contrasting private and public needs.

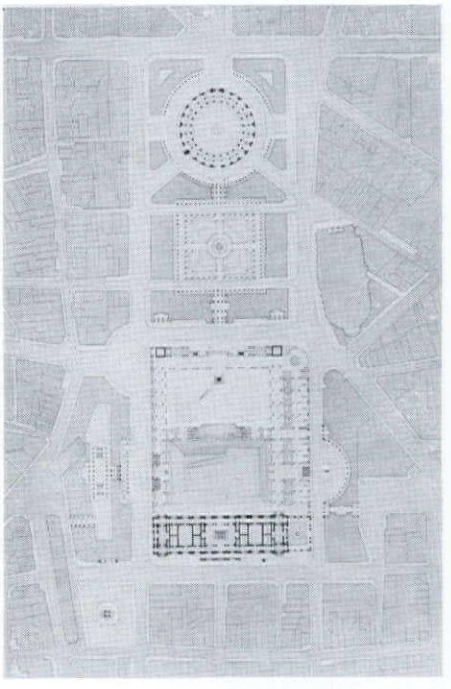
Finally, in detail, as well as in composition, the house has a universal quality. It uses architectural elements traditionally. The columns, walls, windows, and parapets, have undergone no process of creative interpretation or transformation. They are what they appear to be, traditional architectural elements used literally and correctly.

International Consultation for Les Halles *Paris 1979*

レアールの計画は，広い公共用地を設け，パリの街路の風格を保つことにある．17，8世紀に於けるパリの広場——Voges 広場，Royale 広場，Vendome 広場——がモデルとなっている．
中心的に組織された枢軸は，Bourse と宮殿を結ぶ東西方向にレアールの主軸が形成される．オベリスクはこの主軸の中心に位置するが，同時に，Rue Pont Neuf の終結点でもある．建物はいわゆる典型的なパリ風の型を踏襲している．

The major organizing axis is formed East-West between the Bourse and the Palais. The Obelisk, centered on this axis, also terminates the Rue Pont Neuf. The buildings are based on typical Parisian building types. They define the public open space, and with the exception of the Palais, are meant to be part of the fabric of the City. The Palais with its massive entrance pavillions and engaged columns is ani mportant public building with a monumental characler scaled to its location.

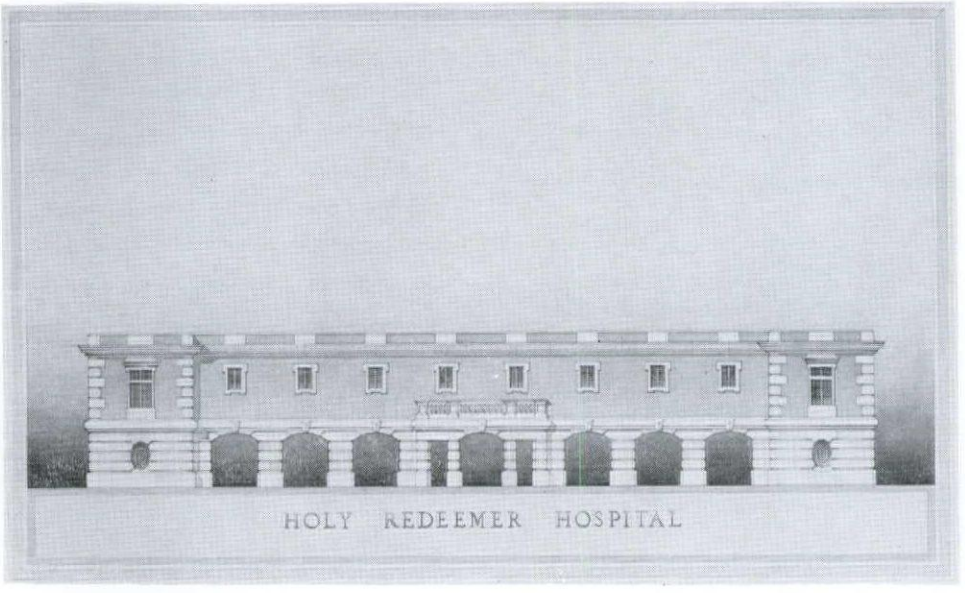


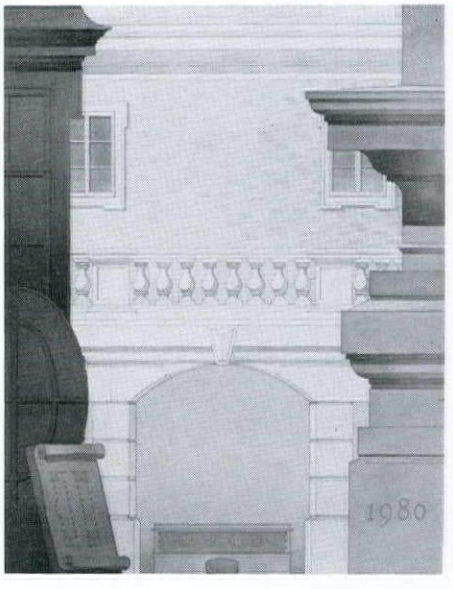


Addition to the Holy Redeemer Hospital *Meadowbrook, Penn. 1981*

この増築は，24 のベッド数の ICU／CCU と救急部門の新設である．この建物は現在，病院へのシンボリックな入口となっており，また敷地が中央高速道路に近い場所であるため，病院に新しいイメージを与えている．粗石仕上げの1階は，第一段階では覆われた車道として機能するが，将来は病院の管理部門が入ることになっている．その時は，アーチ状の開口にガラスが嵌め込まれ，メインエントランスは，建物の正面に移る予定である．

This project consists of the addition of a new twenty-four bed ICU/CCU and a new Emergency Department. This building now becomes the symbolic entrance to the hospital and, by its location at the main highway, imparts to the hospital a new image. The architectural solution calls for a rusticated ground floor of stone and a second floor of brick and stone. The rusticated ground floor will function in this phase of the project as a covered drive, while in the future this floor may well be reclaimed for administrative functions.





Allan Greenberg



アラン・グリーンバーグ：1938年南アフリカのヨハネスブルクに生まれる．　1965年イェール大学でMA．　現在はアメリカの市民権を得ている．　今までに，デンマークでウッツォン，ヘルシンキでレヴェルのところで働いた経験を持つ．1967年に自分の事務所を開設して現在に至る．

Classical Americaなる組織が，1968年に組織されて以来，今日まで活動を続けているという．　会員数600余名．　先に紹介したジョン・プラトーやここに紹介するグリーンバーグもその会員として名を連ねていると聞くと，何やら古典主義秘密結社のように感じられるが，実際にはもっとオープンなものではあるらしい．　組織は様式の建築の描き方や細部の装飾を教えたり，古典芸術についての本を出版したり，会合や講義を開いている．　同じく会員である建築家Henry Hope Reedいわく，「古典的であるか否かは，比例とかプランとか材料によるのでなく，装飾によって決定されるのだ．」　彼らの「古典的」であることに対する認識はこの言葉に集約されている．　事実，グリーンバーグは，材料やスケールやプランなどにはさほど頓着せず，部分の装飾的形態は古典の全きコピーを行なっているのだ．　部分的なレプリカを総合することにデザインが終始している．　歴史的に見れば，こうしたやり方は珍らしいとは言えないが，モダニズムの終息がささやかれる世紀末のこの時期に急に浮上してくる様（少ないながらも幾つかの実作が目につき始めている）には，無関心ではいられない．　Classical America．　それは，平穏な社会への導きであるのか，または文化の脈動の停止を暗示するものなのか．

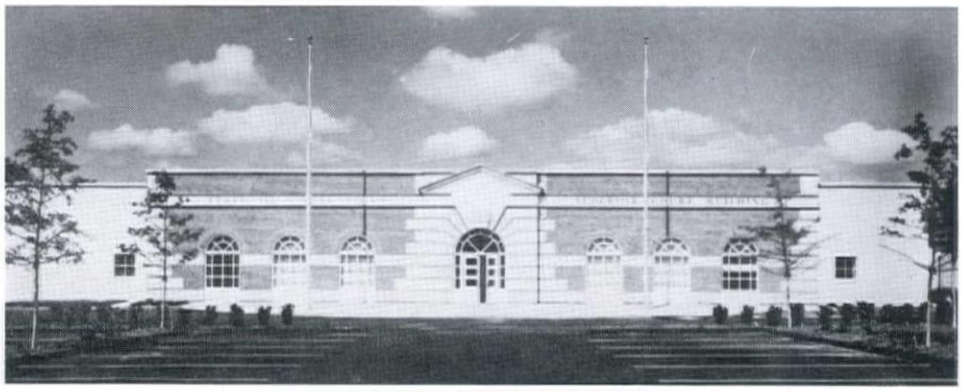
上(above)：Courthouse, Manchester, Ct. 1980. 1962年に建てられたスーパーマーケットを地方裁判所として改装したもの．　構造体はそのままにして，壁なども極力いじらないようにし，正面と内装に予算を振りむけた．

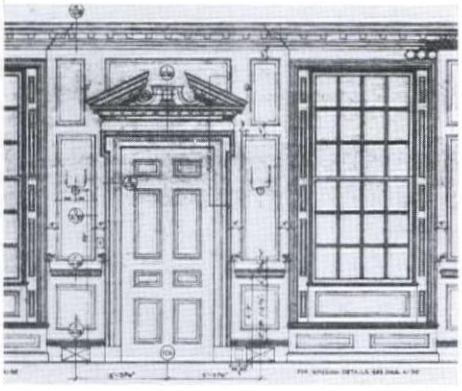
中（middle）：Connecticut Farmhouse．ジョージ・ワシントンの建てたマウント・ヴァーノンをもとにしたもの．　現状のものよりはむしろワシントンが建てようとしたが，そうはできなかった原案に似せている．　インテリアは正式のアメリカン・ジョージアン・スタイル．

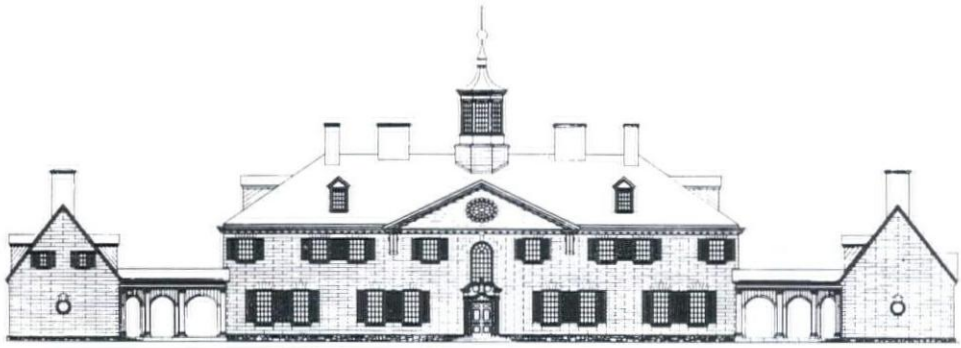
下左（below left）：Building for Best Products, 1979．　ニューヨーク近代美術館で開かれた〈ベスト社のための建物の競作展〉に出品したもの．

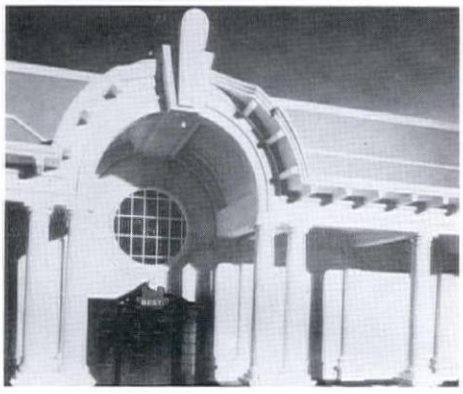
下右（below right）：Wooster Square Housing, New Haven, Connecticut, 1966．　これは彼のごく初期の計画案で，古典のコピーに入る以前の段階を示すもの．　赤いレンガと白いスレートのチェッカー模様．

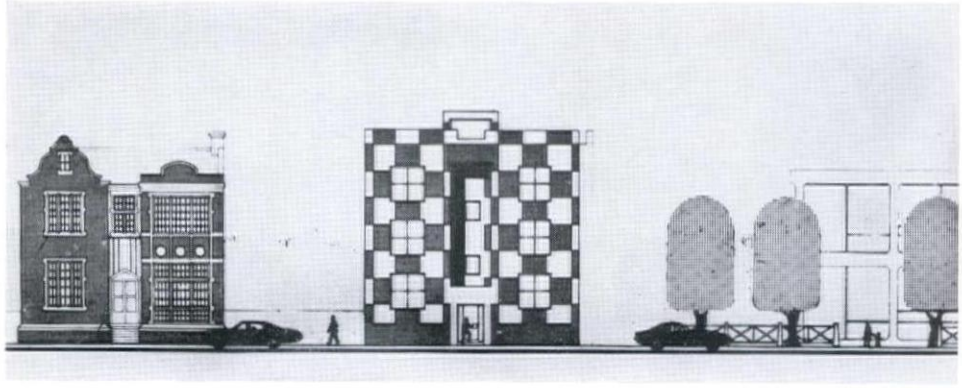








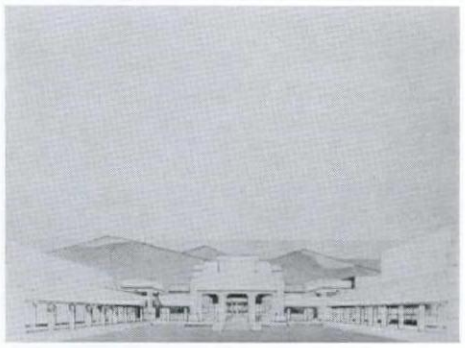


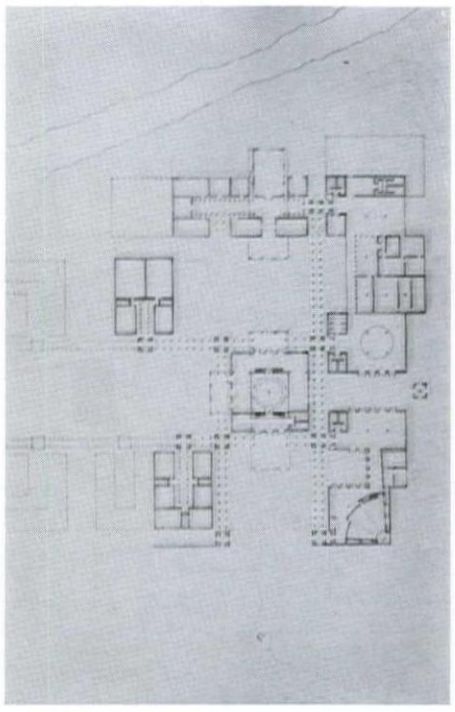


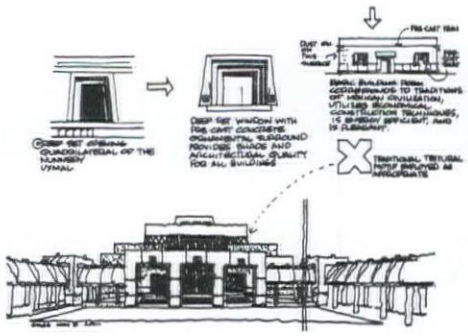
Booth / Hansen

Laurence Booth：1936年にシカゴに生まれる．　スタンフォード大学，MIT で学んだ後，1965 年 James L. Nagle とパートナーを組み，1979年まで続く．　その間，住宅を始めとして幾多の作品を設計した．　作風はミースの伝統に従いながら新しい生命を与えるといったものであった．　1980年，パートナーシップを解消し，Booth / Hansen, Nagle / Hartray の2組の事務所に発展的に分散し，ともにシカゴで活躍している．ここでは，前者の今年度の PA 賞入選作品を紹介する．　メキシコに建てられるためもあってか，これまでの作風とは全く違っている点に注目が集まっているからである．







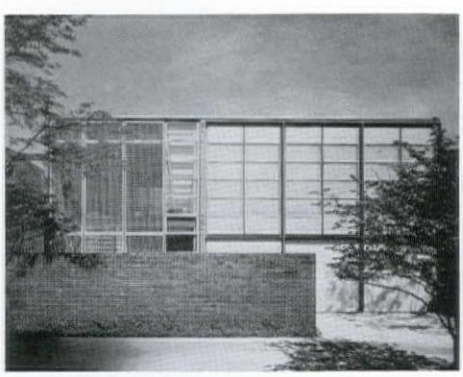


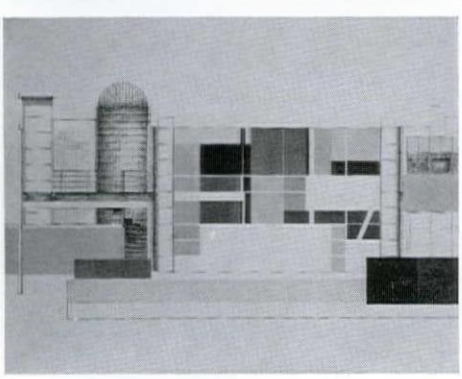
HYL International Training Center, Monterry, Mexico.

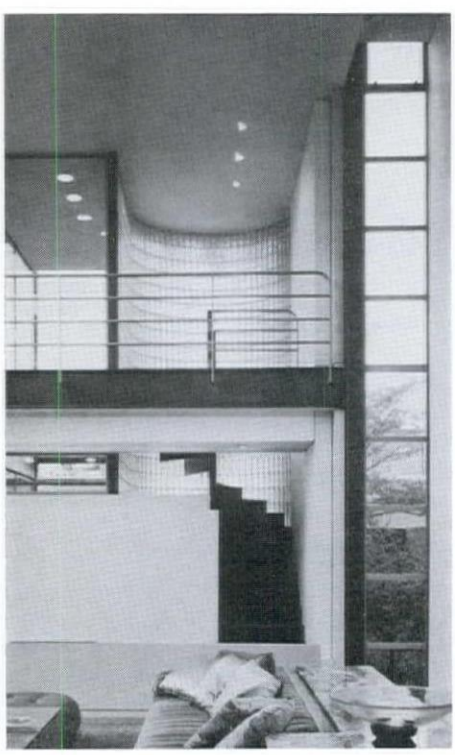
鉄鋼業の会社のトレーニングセンター．　各国からの訓練生の受け入れ施設である．　建物は中庭を巡って平面的にひろがっており，ガラスファイバー製の屋根を有する廊下が各棟をつないでいる．　中央に事務部門を含む主屋があり，その奥に実験棟，左側に講義室が伸びている．　全体として，2～3倍の拡張が容易に行なえるように考慮されている．　形態的には，マヤの寺院に発想を得ている．

Krueck / Olsen

Ronald Krueck & Keith Olsen．彼らは2人とも IIT で建築を学び，シカゴの事務所につとめた後独立した．　Krueck の方はアーチストの事務所に長くいた経験をもつ．　ここに紹介する作品は，彼らにとっての処女作である．　ミースに基づきつつも，そこから大胆な飛躍を見せている点が注目される．







House in Chicago 1981.

シカゴにある個人住宅．　ここで彼らが目ざしているのは，ミース風の純粋な語句を用いながら，全体としては，もっと多様で込み入った空間を作ろうというものだ．　ミースの建築においては，マスにせよ形，ヒエラルキーにせよ，部分の「勝手な発言」は許されなかった．　全体もまた部分と同様に純粋で統一のとれたものでなければならなかったのだ．　Krueck / Olsen は逆に，整理された骨格の中での部分の発言を積極的に押し進めている．　それはことに材料の使い方，色の塗り方によって強調されている．　「たったひとつの真実」など追い求め難い今の時代に，もしミースが生きながらえていたとしたら，彼もこのような方向に進んだのかもしれない．　左下の図は，吹抜の空間に提案した色彩パネルのコラージュの一案である．

Hammond / Beeby / Babka

ジェームス・ライト・ハモンド：
1939—40年　サーリネン事務所勤務
1942年　MIT　BA 取得
1946—61年　SOM に勤務
1961年　ローシュとともに組織の前身の事務所を設立する．

トーマス・ホール・ビービィ：
1964年　コーネル大学で BA，65年エール大学で MA
1965—71年　C. F. マーフィ事務所勤務
1971年　J. ハモンドとともに事務所を設立

ベルナルド・F・バブカ：
1957年　IIT　BA 取得
1957—61年　ペース事務所勤務
1961—67年　C. F. マーフィ事務所勤務
1977年　ハモンド，ビービィとともに現在の組織をつくる．

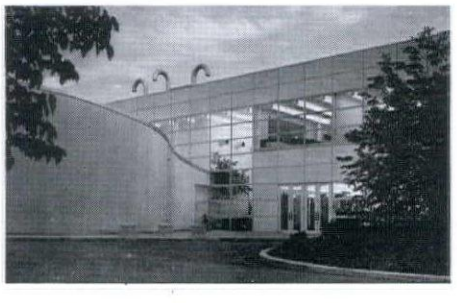
Champaign Public Library　*Champaign, Ill. 1977*

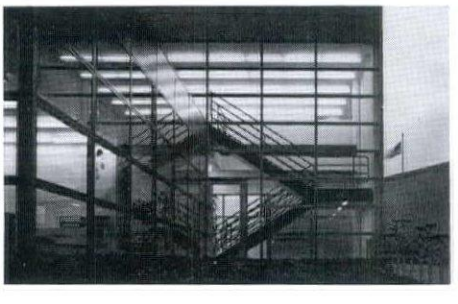
外観は，集会室と垂直方向のサーキュレーションを含む不定形の立体が大きく目立っている．　西側短辺のエレベーションは，それに面して建つ周辺住宅のスケールにあうよう考慮されている．　全体の高さは，中段や屋根つきの庭を設けることで，実際よりもぐっと低く感じられる．　一方，子供たちのサービス・スペースのある大きなガラス張りの空間や，飾りのあるアセンブリー・ホール，そしてメインの駐車場などは，東側の商店街に向かってひらけている．　プレハブの金属パネルの色は，白からグレーまでいろいろと変化しており，集会室や階段室関係をおおうコルゲート鋼板は，銀色のアルミニウム仕上げになっている．　また柱や階段などは鮮やかな色彩になっている．

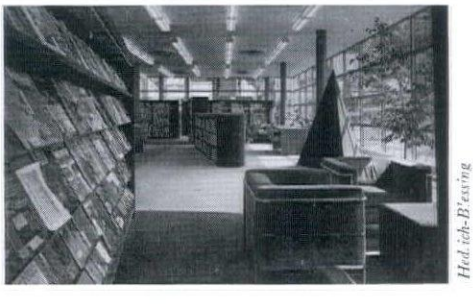
There is external display of atypical volumes including the meeting room and vertical circulation. The shorter west elevation is compatible with the residential scale of its facing street. A berm and sheltered garden area minimize building height. Large glass areas displaying children's services, the figured assembly hall and major parking areas open to the eastern commercial street. Color of prefabricated metal panels varies from white to gray; corrugated metal surfaces of meeting room and stair elements are silver aluminum finish.



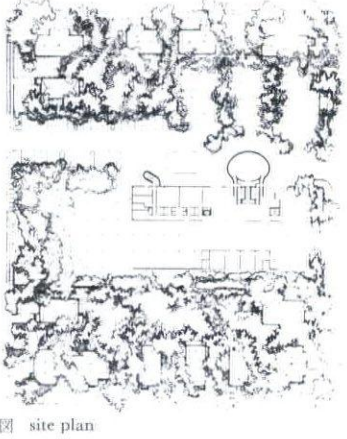
photo = Jim Hedrich, Hedrich-Blessing



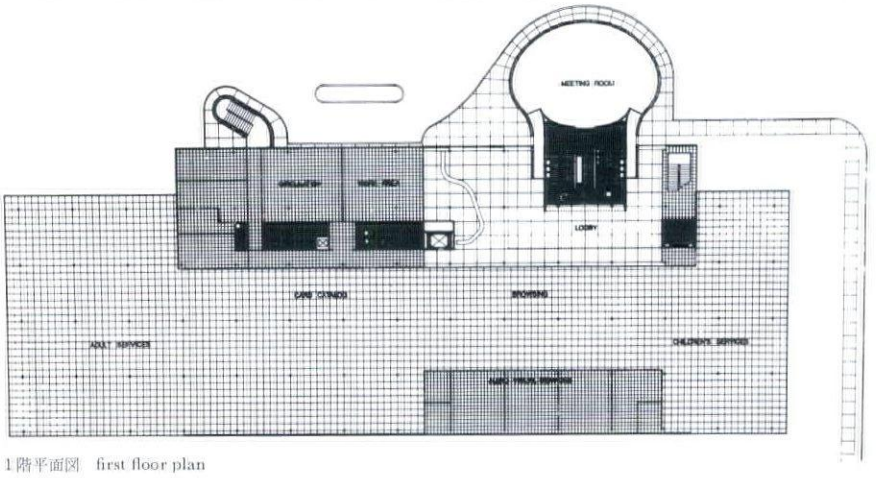




Hedrich-Blessing



配置図　site plan



1階平面図　first floor plan

Tri-State Center I　*Northbrook, Illinois 1979*

これは，幹線有料道路が大きくカーブする地点に位置する投機的なオフィスビルである．　道は空港や市街地および快適な郊外地へと直接通じており，立地条件は非常に良い．　ネオ・クラシックなイメージによって，ありふれた建物がひときわ目立つものとなっているが，このことは競争の激しい市場においては特に重要なことである．　建設の経費節減とエネルギー節約のために，全5階建の建物の東西面は窓割りとパネル・ジョイントのパターンを強調したプレキャスト・コンクリート・パネルを用い，ガラス部分は30%以下におさえてある．　南北の面は鏡面ガラス（反射ガラス）を用い，荷重を支えないベアリングウォール的性格を表わすために凹凸がつけられている．　全体は，中空のプレキャスト・パネルによってかけわたされた4つのプレキャスト・コンクリートの耐力壁によって構成されている．　東と西の両面には，約3m×6mのパネルごとに窓がふたつ設けられている．　屋上にはいろいろなボリューム・コントロールを備えたパッケージ型暖房と空調施設がすえてある．　建物へのアプローチは，池を配したランドスケープから車寄せをぬけて，5階建ての建物を貫くように通っている．　車の通りぬけ部分には中央に噴水が配され，2層吹抜けになったアトリウムを通して，屋根の開口部から光がふりそそいでいる．　広い野外駐車場には，横にひろがるように刈り込まれたしだれ柳が整然と植えられている．　荷解きなどのサービス用スペースは，鮮かに彩色されたカーブしたコンクリート壁で目かくしされている．　ロビーには，模様のついた着色テラゾー材を用いている．　外壁のコンクリートは光沢のある白に塗られ，窓枠部分には影の模様がつけられている．

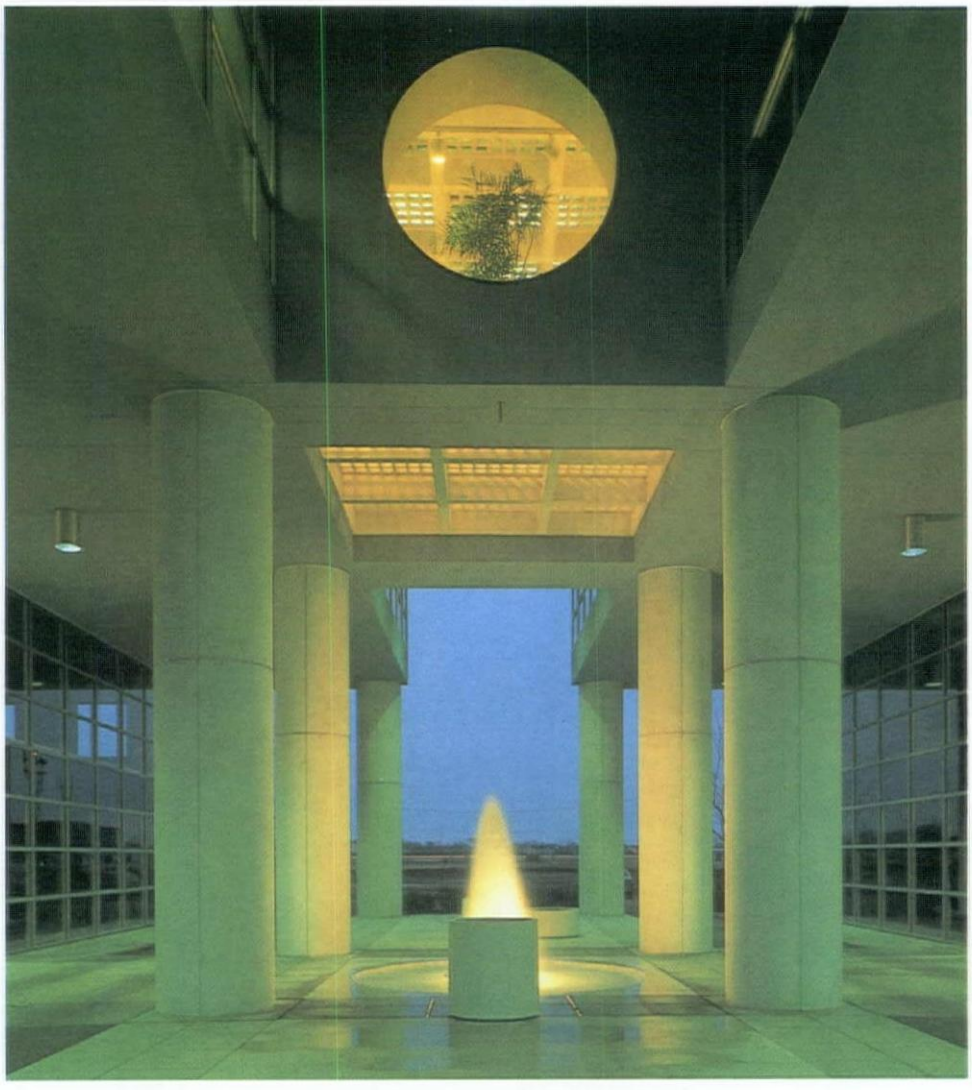


photo = H.N. Kaplan



photo = Hedrich Blessing

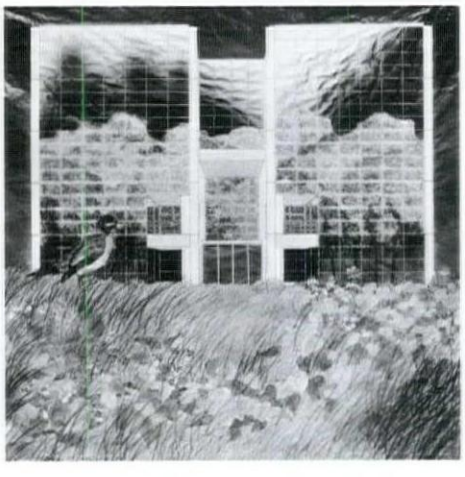
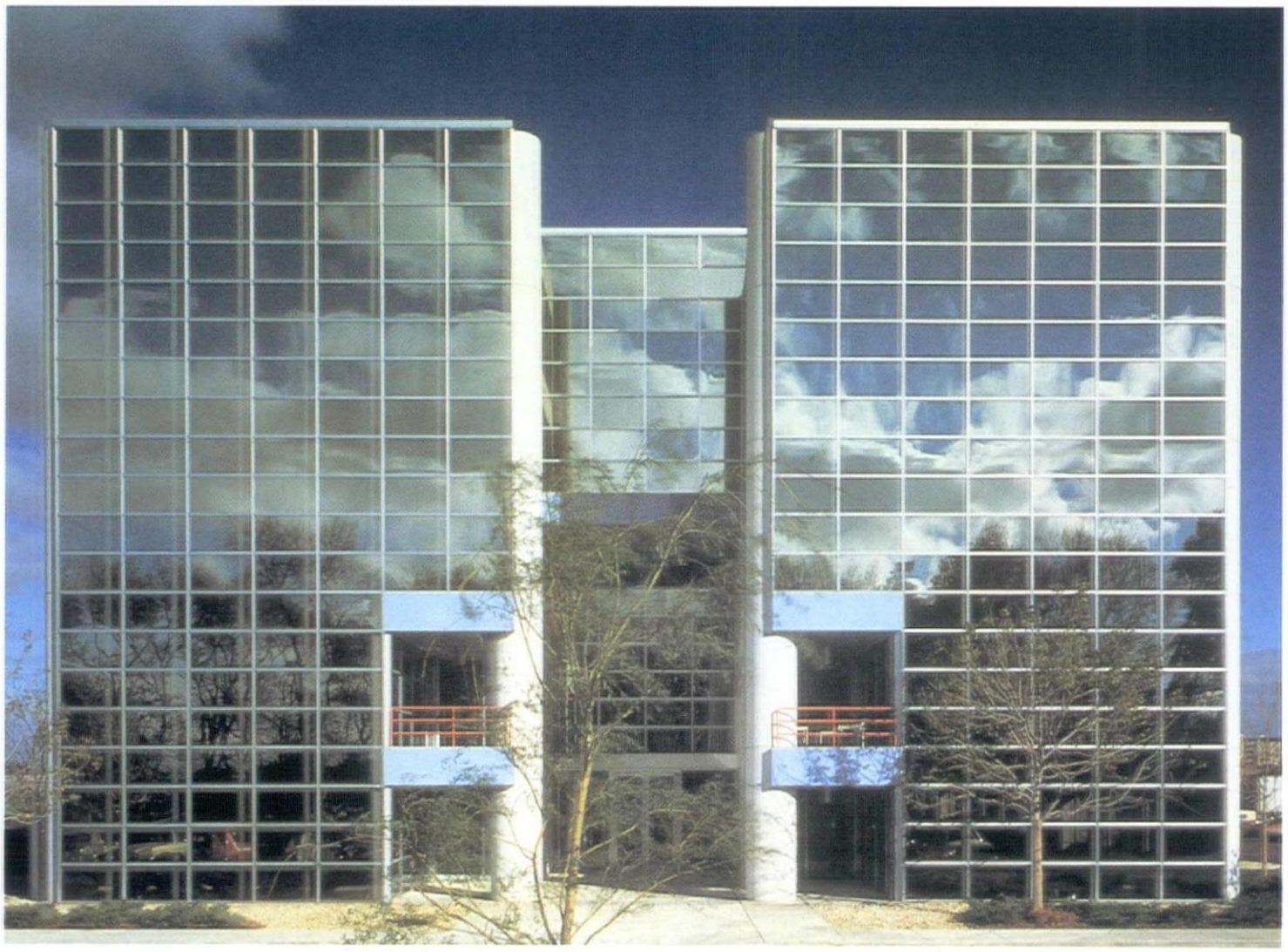




photo = Hedrich Blessing

A speculative office building to be situated at a strategic curve in a major tollway which gives ready access to airport, city and desirable suburbs. Neo-classical imagery provides easy recognition with familiar building form so important in competitive marketing. For economy of construction and energy consumption, the east and west walls of the five story building are precast concrete panels detailed to emphasize patterns of fenestration and panel joints and with less than 30% glass area. North and south walls are glazed mirrors (reflective glass) cut away and recessed to express their non-load bearing characteristic. Four precast concrete bearing walls spanned by hollow core precast planks form the structure. Two windows occur in each ten by twenty foot panel of the east and west faces. Packaged heating and air conditioning equipment is mounted on the roof in vertical sections of the building with variable volume control. Approach to the building complex passes through reflecting ponds and landscaping and then penetrates the five story building through porte-cocheres lighted by an aperture in the roof which brings light through a two story atrium to the drivethrough area with a fountain at its center. Major open parking is interspersed with weeping willow trees planted in orchard pattern and clipped for horizontal growth. Curved brightly painted concrete walls shield service loading areas.





photo=H.N. Kaplan

アメリカ建築の新しい波と古い伝統 New waves & old tradition in American architecture *by A. Katagi* 片木篤

私がプリンストン大学に在学した1980年から2年間は，いわゆるポスト・モダニズムがアメリカ全土で多元的に発展した時期ではないだろうか．　ニューヨークの新しい摩天楼ラッシュ．ジョンソンの AT&T ビルの上にチッペンダール様式のペディメントの鉄骨が組み上がり，その隣にバーンズやスタビンスののっぺりとした皮膜を持つオフィスビルの工事が進められていた．　ペリが MOMA に増築した高層アパートにモンドリアン風のガラス被膜が取りつけられる一方で，マンハッタン南端にあたるバッテリーパークの再開発計画も始められていた．　一方シカゴではヘルムート・ヨーンが現代の high-technology を駆使しながらも30年代のアールデコの影響を受けたファサードをデザインし，西部ではゲーリーの諸作品が注目をあびつつあった．　若い建築家の中では，PA 誌が毎年1月に発表するデザイン賞や大学での教鞭や講演でその実力を認められつつある人達の姿があった．PA 誌常連のアーキテクトニカが マイアミでその魅力的なドローイングを建物として実現しつつあった．　いわゆるアルゼンチン・マフィアと呼ばれる人達の中では，マシャード／シルベッティは各々がロードアイランド・スクール・オブ・デザインとハーバードで教えつつ共同で事務所を持ち，PA や Lotus にその作品が掲載されるようになり，ガンデルゾナス／アグレストも IAUS を根城としながらも東部の諸大学に招かれ講演・展覧会・教鞭等幅広い活動を行なっている．　現在コロンビア大学で教えているピーターソンはパリのレ・アールの競技設計で優秀案，1981年の PA 誌デザイン賞都市計画部門で1等を取ると共に彼の建築理論を《Harvard Architectural Review》に発表している．　フレッド・コッターはグロピウス以来モダニズムの伝統の根強いハーバード大学に新しい風を送りつつあるし，シカゴではコーエン／ビービー派が勢いを増しつつある．　こうしたアカデミズム内部での新しい波は，彼ら若手建築家の成長と彼らに教えられた生徒達の実務への浸透と共に，アメリカ建築界の実務の様相を変えていくであろう．　アメリカの建築の多元的な新しい動きを総括するのは不可能であるが，もし一人その指導者を選ぶとすれば，マイケル・グレイブスをおいて他にはいないであろう．　今，アメリカの若手建築家の個々の作品を紹介するにあたり，グレイブスの建築のスタイルの変遷の軌跡，及びその影響力から始めることにする．

＊

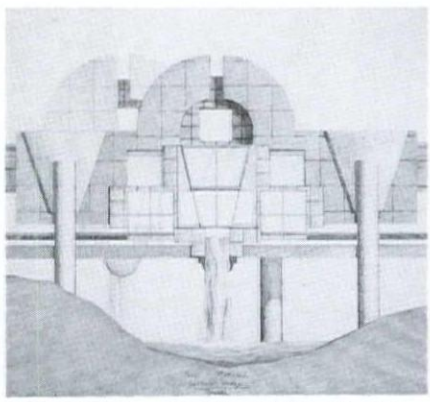
マイケル・グレイブス．　1934年生．　ハーバード大学で修士号を取った後にローマ大賞を得てローマに2年間遊学．　1962年からプリンストン大学で教え始め現在に至る．　グレイブスの名が建築界に知られるようになるのは言うまでもなく1972年の《Five Architects》出版の際であり，マイヤー，グワスミイ，アイゼンマン，ヘイダックと共に〈ホワイト〉派の一員として認められる．　グレイブスは初期の〈ネオ・コルビュジエ〉から徐々に己れのスタイルを変え始め，1970年後半にかけて彼の絵画，建築には古典主義建築のヴォキャブラリーが現われ始める．　1980年オレゴン州ポートランドの市役所ビルの競技設計①に，エリクソン，ジョゴラを押えて勝ち，審査員のフィリップ・ジョンソンの後押しがあったとはいえ，多少の変更があっただけで実施にうつされ，今年夏に完成予定である．　この建物はアメリカ建築家協会のポートランド支部が抗議の声明文を出すなどポートランドの地方紙をにぎわしたばかりでなく，ポスト・モダニズム寄りの論客，ニューヨーク・タイムズ紙のゴールドバーガーが，グレイブスとポートランドビルを1980年の建築家，建築作品としてとりあげ，グレイブスの名を建築界ばかりでなく一般の人々の間に浸透させるきっかけとなったものだ．　この建物が完成すれば，ジョンソンのAT&Tビルと並び，いわゆるポスト・モダニズムのアメリカの最初のモニュメントとなることに間違いはない．　そうした中で，グレイブスはニューヨークのホイットニー美術館の増築の設計を依頼され，現在そのデザインに従事していると聞く．　1979年に刊行された《Architecteval Monograph, Michael Graves》には1967年から78年のファルゴ・モアヘッド・ブリッジ計画案②まで29個の作品が収録されているが，それ以降3年の間にそれ以上の数の計画案・実施作品が生まれ，その作品集が近々刊行される予定である．　こうしたグレイブスの爆発的人気は一時的なものなのであろうか？　彼の新しいスタイルは今年1月号の PA デザイン賞を見れば明らかなように（グレイブスは審査員の1人）幅広い模倣，追随を生み出している．我々は彼の新しいスタイルを初期の住宅にまでさかのぼって望めると共に，それをアメリカの建築史，文化のコンテクストの上に位置付けていかなければならない．

＊

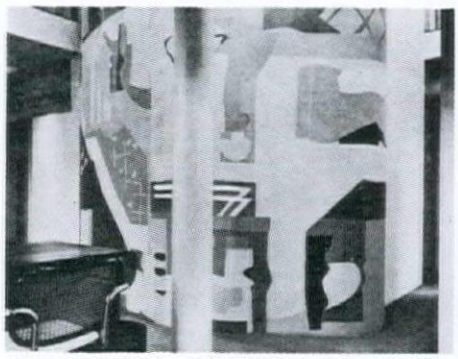
毎年プリンストン大学でのグレイブスのスタジオでは，アスプルンド設計のヴィラの増築という短期課題が出される．　その出題意図を彼



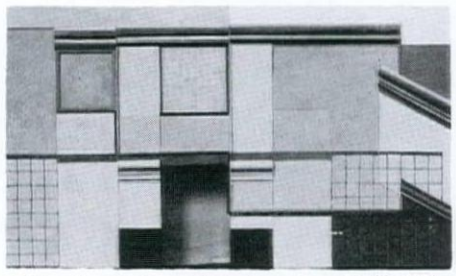
①ポートランド・ビル，オレゴン州，1980



②ファルゴ・モアヘッド・ブリッジ計画案，1977—78



③ガンウィン投資会社，プリンストン，ニュージャージー州，1972



④壁画，ウェイジマン・ハウス，ニュージャージー州，1974

は次の様に述べている.

「既存のヴィラに対するゲスト・ハウスの増築は，建物の知覚される要素，即ち壁表面とそれが描く空間に学生達の関心をうながす為に出題された.　(中略) プランはコンセプチュアルな道具，2次元のダイアグラム或いは表示方法にすぎず，3次元の空間にある知覚的要素を表現する能力には限界がある.[*1]」

グレイブスの建築の知覚的要素に対する関心の深さは彼の初期住宅から明らかである.

今，グレイブスの初期住宅とアイゼンマンのそれとを比較して見よう.　アイゼンマンの課題は常に建築の概念的なレベルにあり，その内でも建築要素の関係性の追求という点で統辞論的であるといえる.[*2]　それに対してグレイブスの作品は，暗示とメタファーの建築言語に向かい，その意味で知覚的，意味論的であると言えよう.　両者の出発点の違いは早くもガンデルゾナスが述べていることでもあり詳論[*3]は避けるが，この意味論的な包括性がグレイブスの後の直接的な歴史参照となっていく点に注目したい.

つまり，グレイブスの初期作品に見られるメタファーは，キュビズムの高度に抽象化され原型にまで還元された形態のコラージュによるものであるため[③]，それは余りに個人的なものとなり，伝達不可能になる危険性があったし，逆に意味が明らかな場合は，それが近代建築で既に定着してしまったものになる傾向があった.　建築を人間の知覚のレベルで見る時，建築のモチーフは人体のイメージのメタファーとしてとらえられるし，更にそれはルネサンスの建築原理を待つまでもなく古典建築の要素へと定着していくのは当然のことではなかろうか.　初期の機能的・自然発生的なメタファーは，伝統的なヴォキャブラリーの借用による，より純粋に建築的なメタファーへと変わっていく.　グレイブスの作品を年代順に見ていくと，1970年代後半から，コラムにキャピタルとベースがつき，開口部にアーキトレーブ，ペディメントがつき，壁表面が装飾化されていく過程が見てとれる.　このような伝統的な建築要素は構造体でないので自由に変形され，歴史的なコノテーションを残したままブリコラージュされるが，見る人の記憶・連想によって要素のオリジナルな意味は作品全体の読み取りの内から理解されるはずである[④].

今，グレイブスがよく用いる要素変形の例としてキーストーンを挙げておく.　別名キーストーンハウスと呼ばれるプロチェク邸[⑤]のエントランスでは2本のコラムが伝統的なフラットアーチを支持しているが，ここではキーストーンに当たる部分が切りとられ，キーストーンがネガとして暗示されている.　更には後景にあるパビリオンにその失われたキーストーンが見出されるという仕掛けである.　このようなエントランスを指示・強調し，かつ支持・被支持の関係性を暗示するキーストーンは，ポートランドのビルで大規模にデザインされている[①].　伝統的な建築要素の借用・変形は19世紀の折衷主義，30年代のアール・デコの流れをくむものであり，更にマシャード／シルベッティの唱える〈変形〉概念へと続いている[*4].

＊

前述した引用から引き出されるグレイブスの考え方は，壁表面が空間を支配するという点である.　グレイブスの初期住宅では，コルビュジエのドミノ住宅にのっとり，グリッドの構造体と非構造体の自由な壁面がより洗練された形で3次元的に展開されていた.　スナイダーマン邸[⑥]は，ヘイダックの基準面とヴォリュームの極端な実験がより複雑な形で操作されている.

この作品に見られるグレイブスのフレーム，ソリッド／ヴォイドの操作は，〈ホワイト〉の1人マイヤーによってより大きな規模で実施される[⑦]一方，ヴォリュームの凹凸に陰影を与える色彩計画はグワスミイの最近の作品にも影響を及ぼしている様に思われる[⑧].

ところが逆にグレイブスの最近の作品では壁が空間を支配するという考えに基づき，壁が段々厚くなり，個々の空間は明確に区分けされ，〈図〉となり〈地〉となる部分は poché として残されている.　つまり〈図〉となる空間はソリッドなマスからけずり取られた格好になっている.　ここにおいて近代建築が達成した連続空間は否定され，古典主義建築の空間構成にまでさかのぼっている.

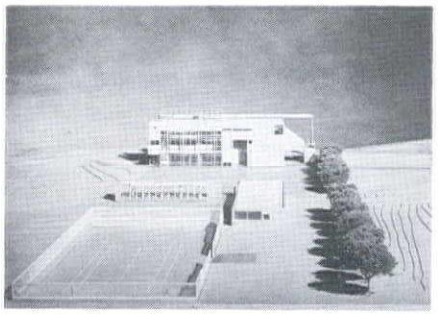
ロウはその《新古典主義》という論文の中で，近代建築と古典主義建築の空間の質[*5]の差を近代建築—〈遠心性〉，古典主義建築—〈求心性〉と要約している.　近代建築ではドミノ住宅に見られる様に，柱グリッドと水平スラブによって空間が限定されている.　つまり2枚のスラブによってはさまれたサンドイッチ状の水平拡散する空間が近代建築のめざした空間の原型である.　ミースのクラウンホール[⑨]はいかに古典主義の原理にのっとった立面をもとうと，上述の近代建築の空間を追求した典型であると言えよう.　このプランでは，間仕切り，コアは〈図〉として，空間は残余の〈地〉として表わされる.　グレイブスのロスアンゼルスのスナーショールームのプランでは全く逆の〈図〉と〈地〉の関係が読み取れよう[⑩].　ロウがコルビュジエのガルシェの家で指摘した層状に重ねられた空間，或いはヴェンチューリがアアルトの作品に見いだしたネガとしての poché[*6] は，ここでは平らになり，壁の表面となって空間を支



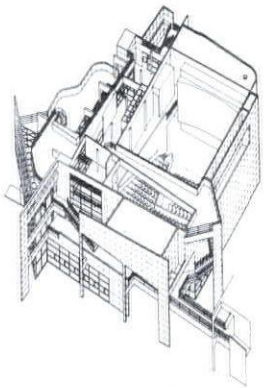
⑤プロチェク邸，ワレン，ニュージャージー州，1977



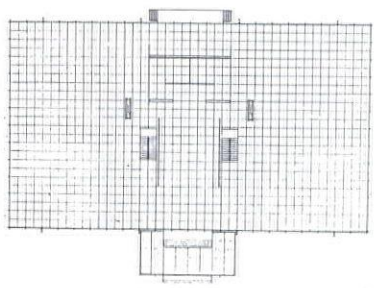
⑥スナイダーマン邸，フォート・ウェイン，インディアナ州，1979



⑧グワスミイ／シーゲル，住宅，1982



⑦リチャード・マイヤー，アセニウム，ニューハーモニー，1980



⑨ミース・ファン・デル・ローエ，クラウンホール，IIT，シカゴ，イリノイ州

配し，個々の空間の性格付け（characterization）を助けている．　ここで展開される個々に性格付けされた異なる空間のシークエンスは，連続空間，自由な平面という近代建築の理念を否定するものであり，45°に振られた軸構成はラッチェンスやボザールの諸作品をうかがわせるものである[11][12]．　こうした空間の質の違いは，図面の表現方法にまで及ぶ．　グレイブスのポートランドビルのプラン[13]の壁につけられた陰影と poché は個々の空間の分節の読解を助けるものであるし，サーキュレーションの明示はボザールで教えられた〈モザイク〉の手法の援用であろう．

空間の性格付けは平面ばかりでなく，断面にも現われる．　個々の空間はそれ自身アイデンティティを持つものであるから，それぞれ異なる天井の断面をもつことになる．　グレイブスの自邸であるウェアハウスの断面がソーンの自邸のそれに似てくるのは偶然ではない[14][15]．　或いは個々の内部ヴォリュームの分節が外部マスの分節として表現される時もある．　サン・ファン・カピスタリーノ図書館[16]において主なサーキュレーションはクレアストーリーで，主な閲覧室はトップライトで外部に表現され，その他の小さな空間はパビリオンとして建物躯体に付着している．

人間の3次元空間の経験は常にパースペクティブという図面の表現形式を取る．　グレイブスの初期の住宅はアクソノメトリックで表現されていた．　アクソノメトリックは建築要素の関係性を示すコンセプチュアルな図面であり，アイゼンマンやドースブルグの設計意図を示すには最良の表現方法であるが，それは人の眼にうつる姿ではない．　グレイブスの作品集からアクソノメトリックが消え，簡単なスケッチや色をつかった断面図，立面図が増えてくるのは，彼の新しい空間の扱い方から見れば当然の帰結だと言えよう．

＊

このような〈図〉としての空間の再発見は，都市計画のスケールにおいても考えられることであり，ピーターソンによって実践され，また理論化されている[*7]．

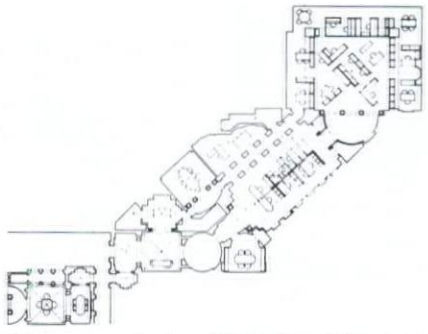
近代建築では建物は周囲の敷地に対して常に〈図〉であるように設計されている．　例えばコルビュジエのサボワ邸は建物の周囲からの切り離しによって，その純粋形態が強調されているし，同じく輝ける都市の摩天楼は〈図〉となり，緑は〈地〉を埋めるものでしかない．

グレイブスの自然に対する態度は，自然に相対する理性の産物としての建築と自然のメタファーとしての建築という考えが弁証法的な両義性を生み出している．　クルックス邸[17]では，建物―〈図〉，敷地―〈地〉という関係が逆転している．　ここでは，生垣はそれ自身とってみるとバランスを欠いて寄せ集められた断片にしか過ぎないが，建物の一連にある壁と相まって限定された外部空間を作り出し，〈建物―庭園〉の総体の構成において新たな方向性をつくり出している．　グレイブスは本来バランスしないものを総体としてバランスをとることで，スタティックな構成に運動を与えている．　こうして自然は建築化され，建築は自然化される．いわゆるガーデン・ストラクチャーと呼ばれるもの，グロット，パビリオン，滝等はこの〈自然―建築〉の中間領域でデザインされ，連想効果を高め，かつ構成に劇的なヴィスタとカジュアリティを与えている[*8]．

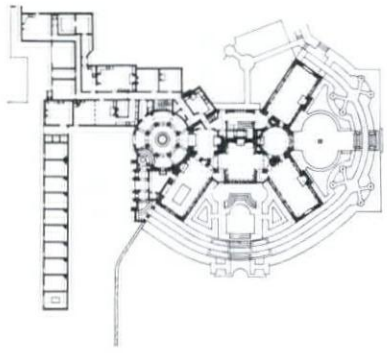
空間を支配する壁表面でまず人に知覚されるのは色であろう．　グレイブスにとって，材料の真の表現は問題ではなくて色のメタファーが最大の関心事となる．　彼によると青色は水や空，茶色は地，緑色は植生といった風に，色は自然の初源的な姿への連想を喚起するものである．　逆に3原色は最も抽象度の高い色であり，モンドリアンが原色と白・黒しか使わなかったのは，色の連想作用を避けるためであったと考えられる．　特に緑色は常に植生と結びつけられるが故に，モンドリアン，ドースブルグはこれを排除したと彼は言う．　ポートランドの下部の緑はビルの背後にある公園の緑の延長として塗られ，スナー・ショールームのいくつかの天井に塗られた青は空を暗示する意図をもっている．　更にグレイブスの作品の壁面に描かれた壁画は，個々の空間のシークエンス上のアイ・ストップ　の役割を果すと共に，人の空間体験をより複雑で豊かなものとしている[18]．

最近の壁画は初期のコラージュの手法を踏襲しつつも，ポンペイの住宅に見られる様に知覚の枠組を形成している．

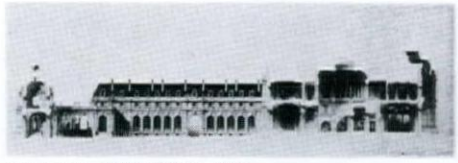
アラン・コフーンは，そのグレイブスの作品批評をアメリカの伝統，近代建築の伝統，古典伝統の3つの文脈の上で行なっている[*9]．　コフーンによると，社会的な道具としての近代建築を否定し，階級にではなく個人とコミュニケートする建築をめざす〈個人的〉な作家であるグレイブスが成功し得るのは，アメリカには〈趣味人〉としてのクライアントがいるためだとしている．　更に，〈文化〉に対するノスタルジアはアメリカ固有のものであり，リチャードソンやマッキムによってもたらされたアメリカン・ボザールの伝統がグレイブスの作品に見られることを指摘している．　アメリカ住宅のバル



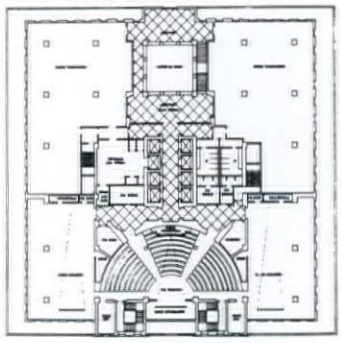
⑩スナー・ショールーム，ロスアンゼルス，カリフォルニア州



⑪エドウィン・ラッチェンス，パビヨンホール，ライセスター，1903



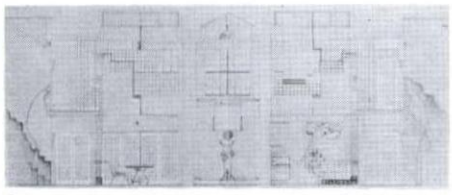
⑫バスカル，銀行家の住宅，1866



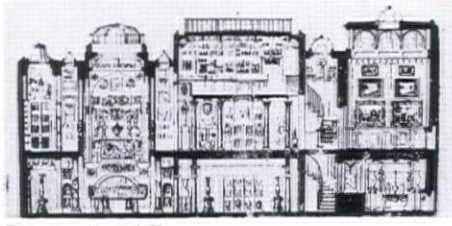
⑬ポートランド・ビル，ポートランド，オレゴン州

ーン構造は構造としては非常にアド・ホックであり，グレイブスが構造を純粋にイデアとして取り扱うことを可能にしており，その意味でシングル様式とグレイブスの作品は近似していると言う．　これに対してアイゼンマンは，コフーンがアメリカのコンテクスト内でグレイブスを語ることはモダニズムのイデオロギーの問題を見失うことであるとして，コフーンの批評態度を非難している[*10]．　私はコフーンと同じく，グレイブスの作品はアメリカの文脈の上で語られてこそ評価されるべきもので考えている．

アメリカはジェファーソン以来，常にヨーロッパ建築の影響をまともにかぶり，その移入，変形につとめてきている．　それが発展・昇華↙



⑭ウェアハウス，プリンストン，ニュージャージー州



⑮ジョン・ソーン自邸

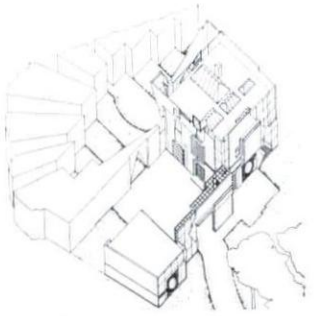


⑯サン・ファン・カピスタリーノ図書館，カリフォルニア州，1981

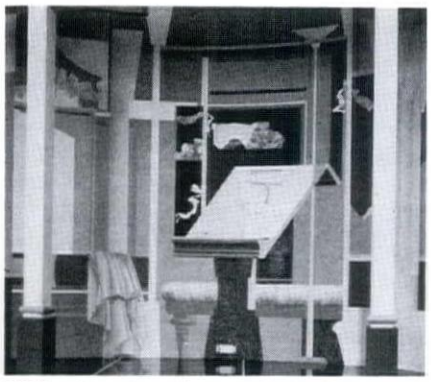
ならなかったのか[*12]――が発せられているのではなかろうか．

＊

グレイブスを中心としたアメリカの建築の新しい動きは，例えばロッシやクリエのようなヨーロッパのラショナリスト達の持つ，政治的，社会的意味合いをもつものではない．　それは，ポスト・モダニズムの多元論の中で，アメリカの歴史・文化の中で語られるべきものである．アジテイターとしてのチャールズ・ジェンクスの役割は，歴史家としての彼が位置付けたモダニズム内の多元論がモダニズムの衰退に伴ない，より顕著になるであろうことを予想し，この多岐にわたる建築思潮を，ポスト・モダニズムと



⑰クルックス邸，フォートウェイン，インディアナ州，1976



⑱壁画，スナー・ショールーム，ニューヨーク，ニューヨーク州

したものが，アメリカン・ボザールの伝統ではないだろうか．　グレイブスの最近の作品に見られる空間の質，軸構成による空間のシークエンス，伝統的建築要素の消費変形は，アメリカン・ボザールの建築の性格でもある．　ガデによって総括されたフランス・ボザールの建築原理は，建築規模の肥大，機能の複雑さというアメリカの実情に合うような変化を受けた[*11]．　インターナショナル・スタイルもまたアメリカではそれがヨーロッパで誕生した時のイデオロギーは見失われ，純粋な芸術として扱われたのではないだろうか．　そこから，トム・ウルフの疑問――ヨーロッパの労働者のための住宅が何故アメリカの中産階級の住宅のモデルにならねば

いう一語にまとめたことにある．　ポスト・モダニズムという用語は単にモダニズムに対する時間的な遅れを指示するのみであり，そのあいまいさがかえって多くの異なる建築思潮を包摂するという利点があった．　逆にポスト・モダニズムの中のいくつかの流れを明確にしようとする時，その用語のあいまいさが障害となりつつあるというのが今の実情であろう．　ジェンクスの〈レッテル貼り〉はAD誌で彼が編集にたずさわった“Post Modern Classicism”から“Free Style Classicism”へと変遷している．

“Classic”という語は，ジェンクス自身述べている様に[*13]　[1]一般的には一流の作品に　[2]より限定的にはギリシャ・ローマの作品に適応されるべき話であって，いずれの場合もある究極の規範への完成をめざす場合に使用可能な語である．　また，広くロマネスク，ゴシックにも取材してその建築要素を参照する場合をも“Classicism”の用語にくみいれるのは，余りに拡大解釈にすぎるのではなかろうか．　ともすれば，我々はポスト・モダニズムが一つの普遍的な建築運動と錯覚しがちである．　が，我々が注目すべきは，その中の多岐に渡る思潮の一つ一つの個別性，差異性ではなかろうか．　ここでは，グレイブスの作品だけからアメリカ建築の新しい動きを普遍性の括弧に入れて総括・結論づける愚は避けようと思う．　今は，アメリカの若い建築家達の個々の作品に眼を転ずる時であろう．

●かたぎ・あつし／建築家，1980―82年プリンストン大学留学

＊1　M. Graves “The Swedish Connection”, *Journal of Architectural Education*, September 1975

＊2　P. Eisenman “Notes on Conceptual Architecture, towards definition” 邦訳〈コンセプチュアル・アーキテクチュアについてのノート〉八束はじめ編《建築の文脈・都市の文脈》彰国社　1979

＊3　Mario Gandelsonas　邦訳〈セマンティックな次元，M. グレイブスの作品分析〉〈シンタクティックな次元，P. アイゼンマンの作品分析〉，a+u 1972年9月号 pp. 51–64

＊4　Machad / Silvetti, *Lotus* 21

＊5　C. Rowe “Neo-Classicism I,II” *Mathematics in the Ideal Villas*, MIT press, 1976

＊6　R. Venturi “*Complexity and Contradiction in Architecture*”, MOMA, New York 1966

＊7　Steven Peterson, *Harvard Architectural Review* 1.

＊8　Peter Carl “Freud and Russell at the wherehouse” *Architectural Monograph, Michael Graves*, London 1979

＊9　Alan Colquhoun “From Bricolage to myth, or how to put Humpty-Dumpty together again” *Oppositions 12*, MIT Press, 1978

＊10　P. Eisenman “The Graves of Modernism” *Oppositions* 12, MIT Press 1978

＊11　David van Zantan “Le systeme des Beaux-Arts” *AD, the Beaux-Art*, Nov.-Dec. 1978

＊12　Tom Wolfe “*From Bauhaus to Our House*”, New York 1981

＊13　C. Jencks “Free-Style Classicism” *AD52, Free Style Classicism*, Jan.-Feb. 1982

Voorsanger / Mills

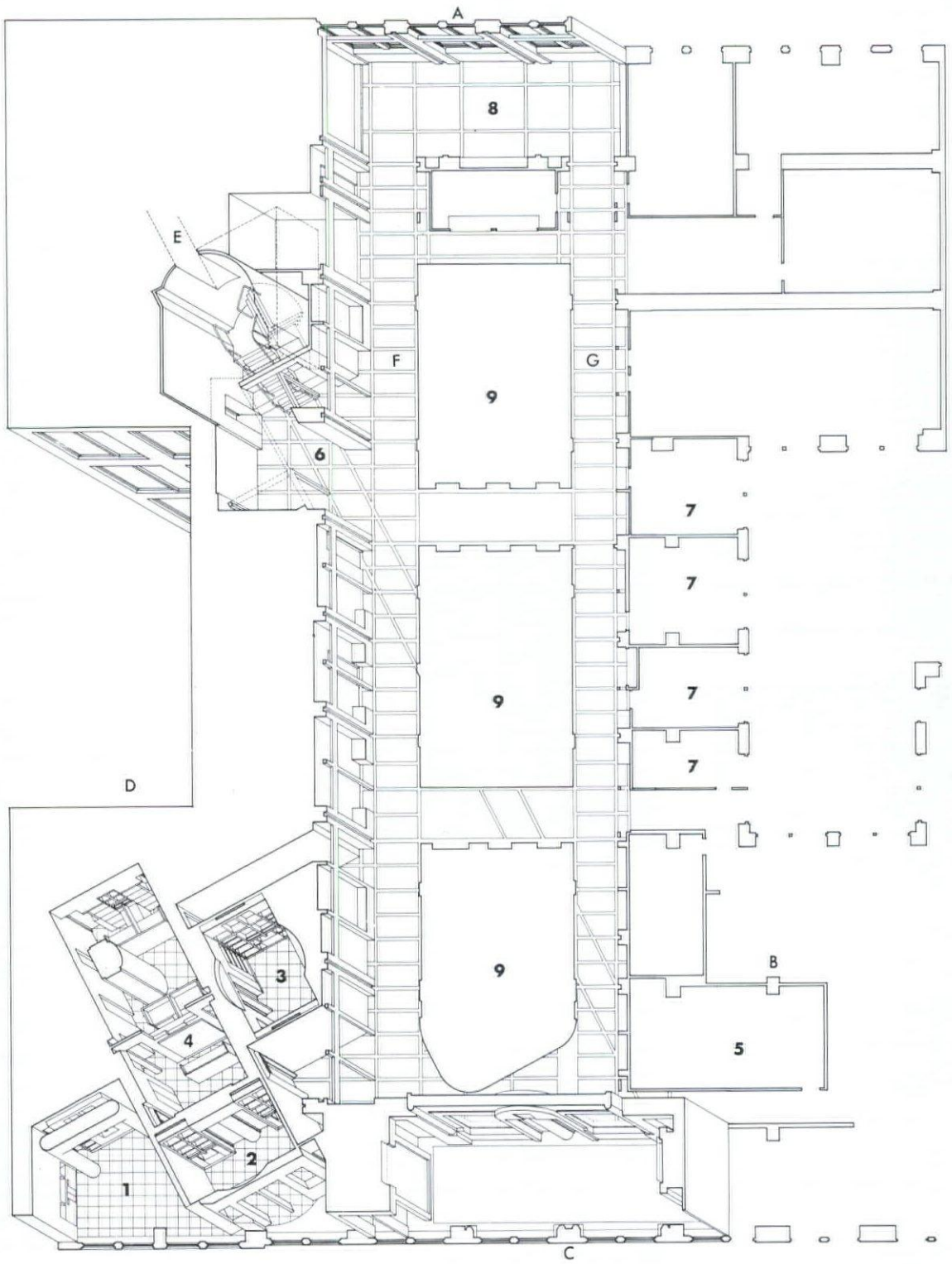




Bartholomew Voorsanger：1937年ミシガン生まれ.
1960年　プリンストン大学B. A., 61年　エコール・デ・ボザール留学, 64年　ハーバード大学でM. A. を取得.
1964—67年　カナダのヴィンセント・ボンテ事務所に勤務.
1968—78年　I・M・ペイ事務所に勤務.

Edward I. Mills：1942年カリフォルニア生まれ.
1966年　ノース・カリフォルニア州立大学B. A.
1977年　ハーバード大学M. A.
1969—70年　リチャード・カプラン事務所, 71—77年　I・M・ペイ事務所, 78年　デービス・ブロディ事務所勤務.

New York University,　Midtown Center　*New York, N. Y. 1980*



A　Central Park
B　Gramercy Park
C　Washington Sq. Park
D　Greenwhich Village
E　Broadway
F　6th Avenue
G　5th Avenue

1　役員室　executive office
2　会議室　conference room
3　図書室　library
4　応接室　reception room
5　教室　class rooms
6　通路　corridor
7　倉庫, 他　storage etc.

8　談話室　lounge
9　設備コア　core

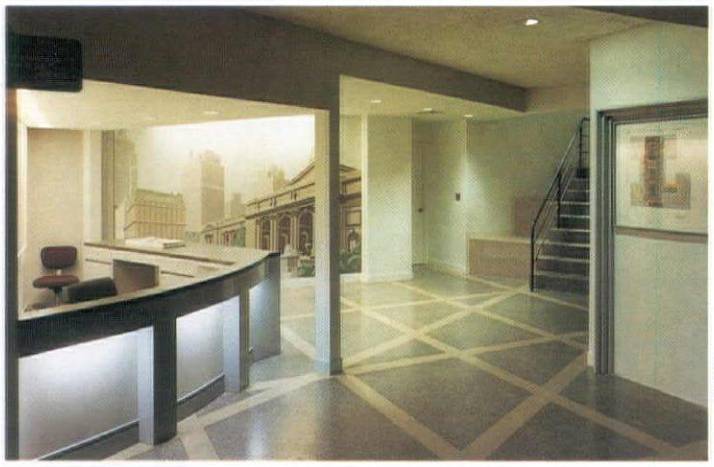


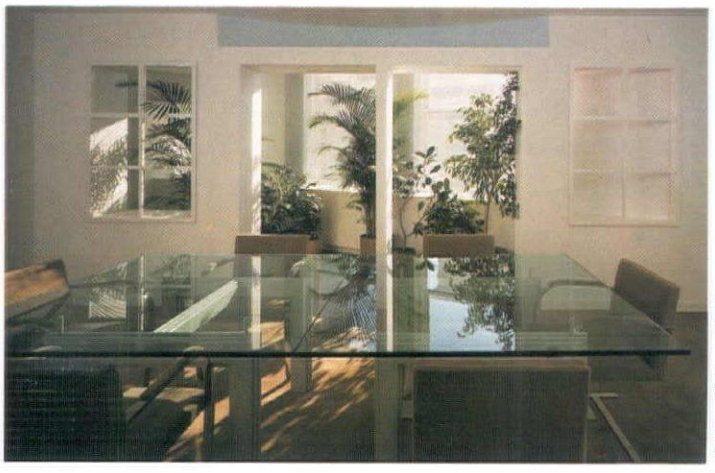
photo = ESTO







photo = ESTO



photos = Nathaniel Lieberman

1,100人の学生および45人の教職員を収容する2層分の成人教育施設であり，1日平均5,000人以上の学生の使用が予想されている．　建物は成人にふさわしく，快適で魅力あるものとしなければならないが，一般のキャンパスにおけるような大学の雰囲気とはしないこと，建設後60年経たオフィス・ビルの基準階を改造し教室とする可能性を実現すること等が条件として提示された．

この計画ではふたつの試みがなされている．　すなわち大学の独自性とキャンパスの感覚をそなえることと，4000m² 以上もの面積の中で，エレベーターに乗ってやって来る学生をすばやく教室に導くことである．通常使われる大通路や高いホールといった伝統的な意味での位置や方向を示す特別な装置はここでは有効ではない．　私たちが採用した装置は総ての人にとって親しい視覚的イメージ——都市の地図である．　地図は方向を示し，サーキュレーションの助けとなり，都市の中の大学という隠喩によって施主であるニューヨーク大学とつながる．　最終的に生まれたデザインにおいては施設の総ての相に〈アレゴリー〉がゆきわたっている．　地図にともなう建築的要素——内部の街路に沿って並ぶアーケード，会議室や公共部分に関連した公園，東と西に塗りわけられた色彩，舗床の模様と素材——の総てはこの都市のアナロジーを強調する．



The facility is a renovated office building, with two floors converted to classroom use. There were two design challenges: providing University identity and a sense of campus, and, rapidly directing students arriving in elevators to classrooms spread out over an acre of floor area. The normal spacial devices of major openings and high vestibules, which are traditional means of locating and finding direction, were not available. The one device we chose is the visual image familiar to all——the map of the city. This map became the armature for direction and circulation. It provided a metaphor that linked NYU with the sense of an urban campus. The resultant design is an "allegory" which permeates all aspects of the Midtown Facility.

The architectural elements which follow the arcades lining the internal streets, the relating of parks to conference rooms and public areas, the colors for the east and west sides, the paving patterns and materials are all designed to enhance this analogue of the city.

University of Pennsylvania, Political Science Offices *Philadelphia, Penn. 1980*

1964年につくられた教室棟の1層分を政治学部の教職員室と会議施設に改造する計画であり，約1,100m²の中に27の教授研究室と3つの秘書室付の学部長室，さらに助手の研究室が設けられる．　政治学部の本来の機能が政策と政体に関する研究であることから，政治制度の歴史がこの建物の建築的解決策の手がかりとなった．

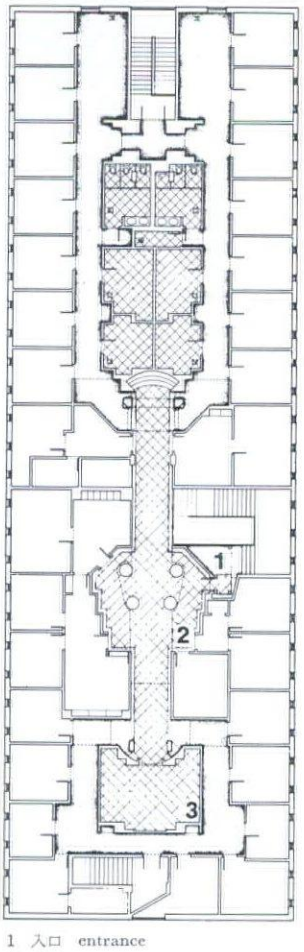
廊下の北端は民主政治の発祥の地，ギリシャのアナロジーである．　湾曲した階段は柱廊となり，そこから近代アメリカの思想家ベンジャミン・フランクリンがあたかも2000年前プラトンやソクラテスがそうしたように彼の政治信念を語りかけているように見える．

青，緑，灰色といった寒色は北の方角とギリシャをとりまく地中海の色を感じさせる．

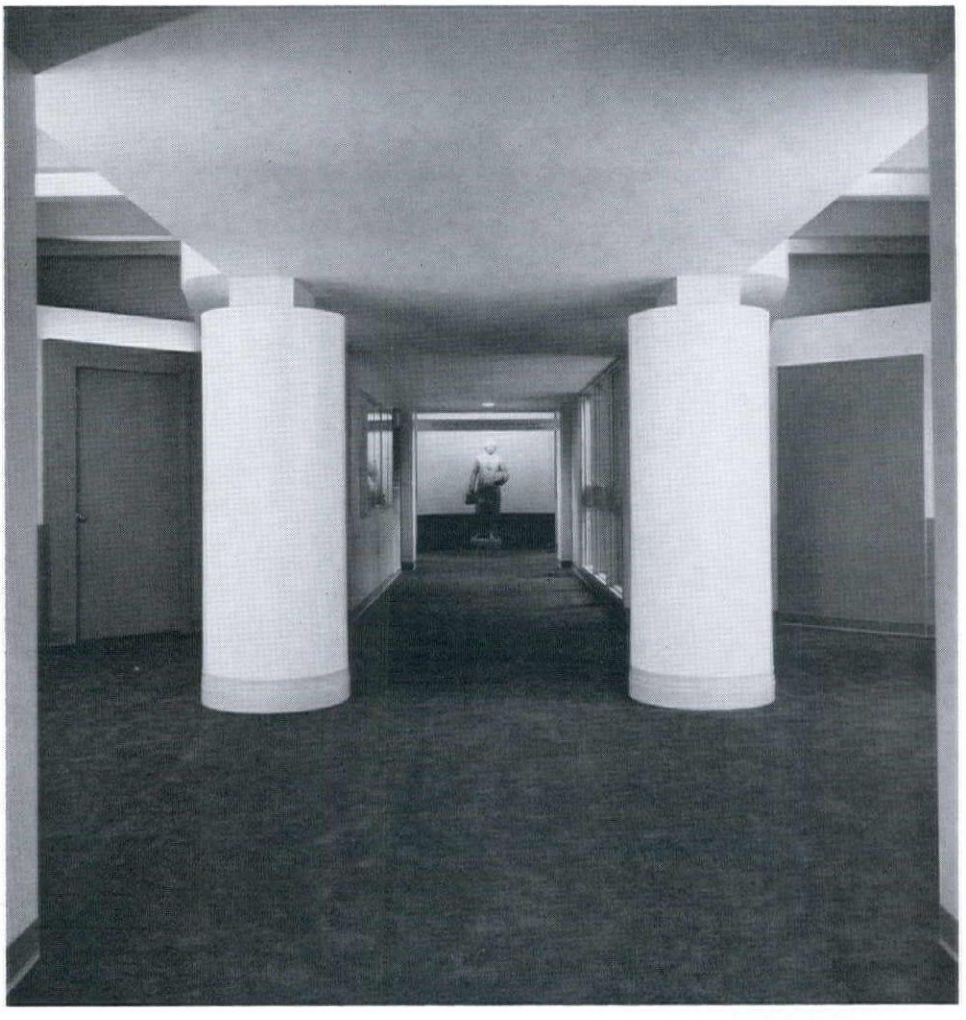
廊下の南の区域は茶色，オレンジ，黄土色等の暖色が使われ，南の方角をあらわすとともに，ローマおよびいわゆるローマの光を暗示している．　この区域は主として会合のための区域であり，ローマの共和制を支配した元老院の議場のアナロジーとして会議室がおかれる．

北と南，寒色と暖色，開放性と閉鎖性の対話は，下院と上院，民主党と共和党，自由党と保守党等における対話のアナロジーである．

これらの対立はすべて中央の集会のための空間，フォーラムあるいはアゴラで出会い，色彩のみならず垂直方向の高さも交錯する．　周縁部の天井高に対し，通路部分は低くおさえられている．　4本の太い柱は機能における実際的重要性とこの空間が公に利用されるものであることを示すとともに，空間に方向性を与える．



1　入口　entrance
2　通路　corridor
3　会議室　conference room



A general definition of Political Science as given by the Chairman of the Department, Dr. Henry Wells, is "the study of the government and politics at international, national and local levels". Since the study of politics and government is the primary function of the Political Science Department, the architectural concept used history of our political and governmental systems as a key starting point. Basically, politics is the competition between different interest groups for power, this dialogue between different interest groups, beliefs, forms of government and parties became the central architectural idea.

The Northern end of circulation becomes an analogue for the birthplace of Democracy, Greece. A curved platform with a set of curved stairs becomes a portico from which a statue of our modern philosopher, Ben Franklin, seems to speak his political beliefs much like the great philosophers Plato and Socrates did 2,000 years before. Cold colors usch as blues, greens and greys denote both colors sympathetic with the direction, North, and with the Mediterannean Sea surrounding Greece.

The Southern circulation areas are marked with warm colors; browns, oranges, ochres to denote the direction South and to suggest the warm colors of Rome and the so-called Romen light. The main functional space of this area is a large meeting area, the conference room, analogous of the Roman Senate chamber, the major ruling body of the Roman Republic.

This syncretic dialogue between North-South, cold colors - warms colors; open space - enclosed space; are analogous to the dialogues between these opposites; Congress - Senate; Republican Party - Democratic Party; Conservative - Liberal, etc.

Abbey / Dripps

Bruce James Abbey：1943年ヴァーモント州に生まれる．
コーネル大学で BA，プリンストン大学で MA を取得する．
プリンストン時代，マイケル・グレイヴスの教えを受ける．
1971年から Geddes Brecher Qualls Cunningham に 4 年在籍．　その後ヴァージニア大学で教鞭をとり現在に至る．

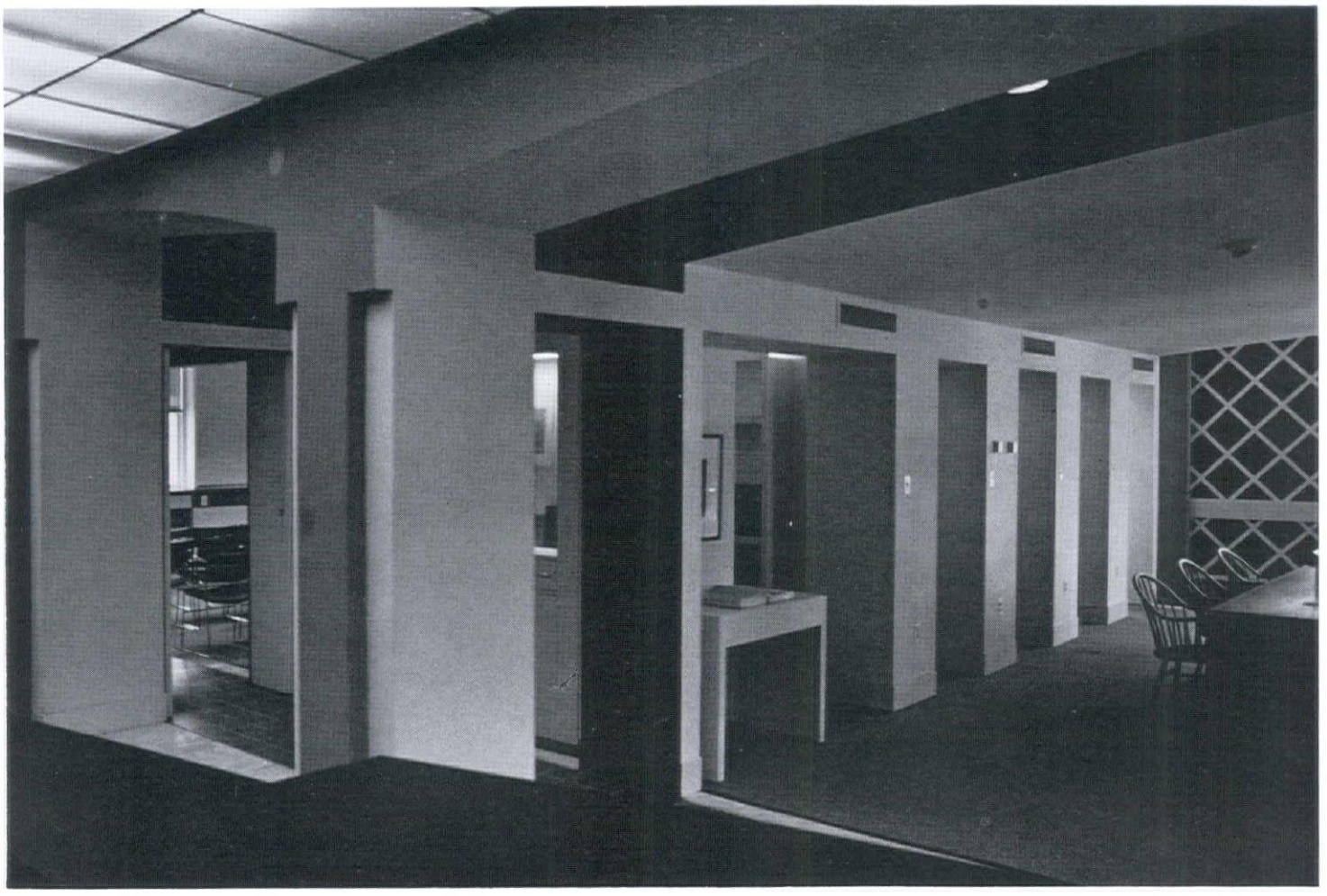
Robert Dunning Dripps Ⅲ：1942年フィラデルフィア生まれ．
プリンストン大学で BA，ペンシルヴァニア大学で MA を取得．
卒業後，David Crane 事務所を経て南アメリカに 2 年間渡行．
帰国して1970年よりヴァージニア大学で教鞭をとり，1976年から Bruce Abbey とともに Abbey／Dripps を開設する．

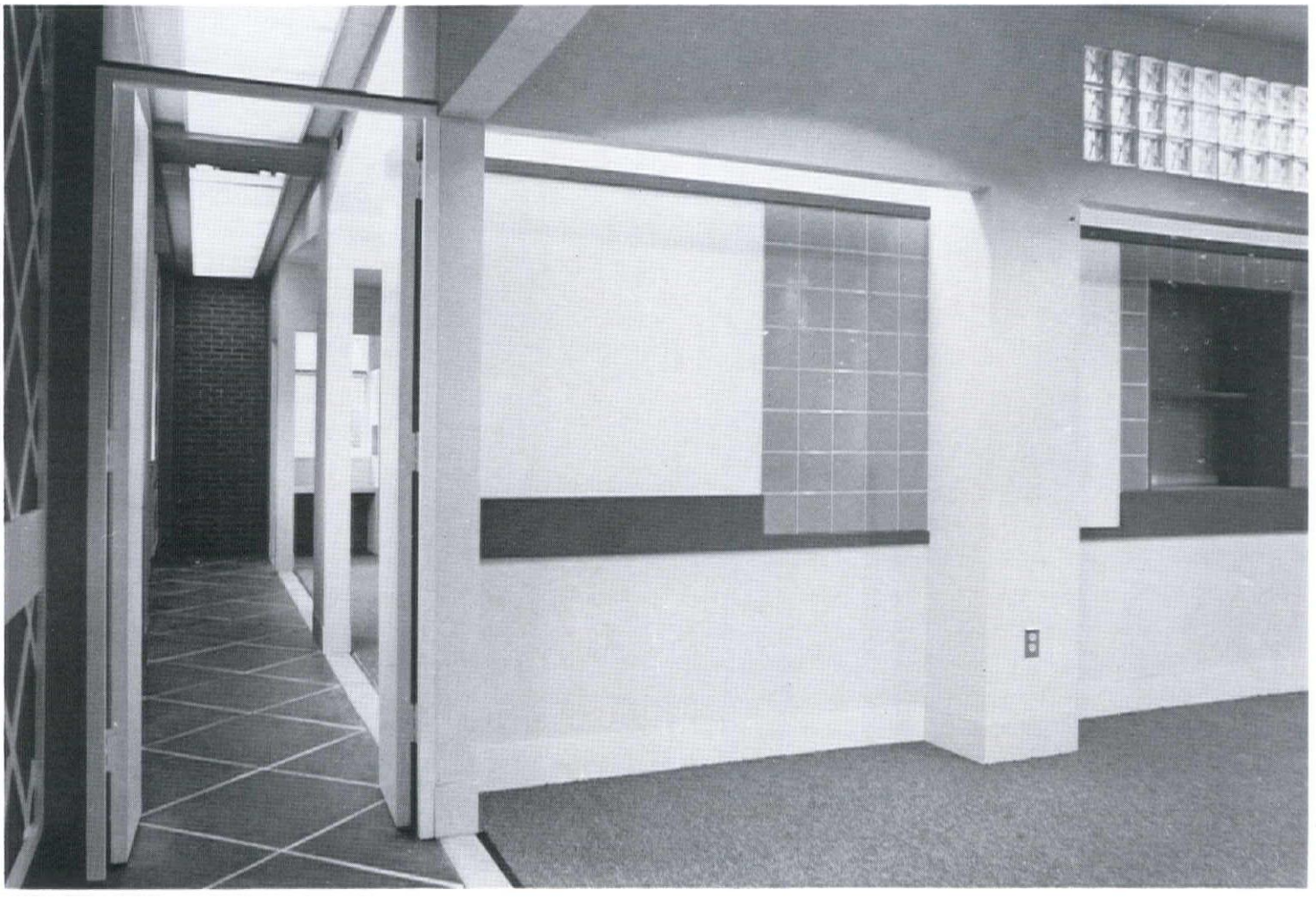




Library of Anaesthesiology, Hospital of the University of Pennsylvania *Philadelphia, Penn. 1980*





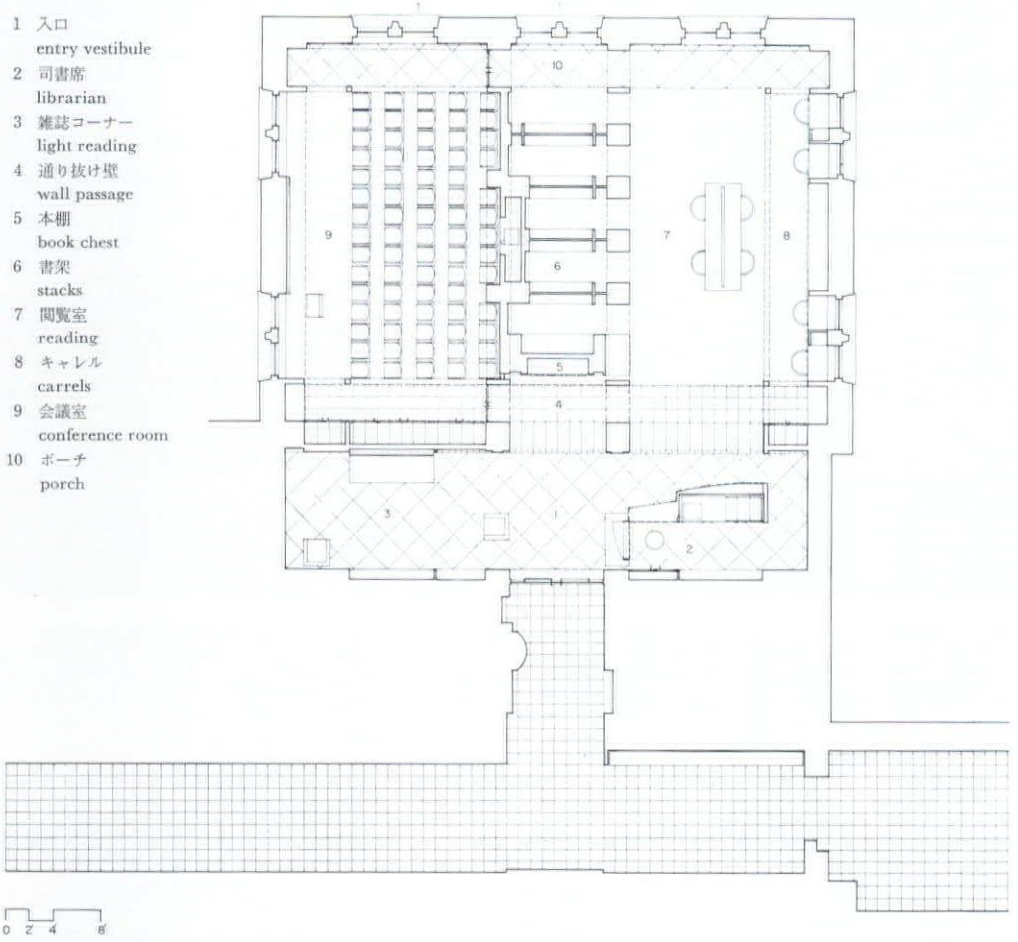


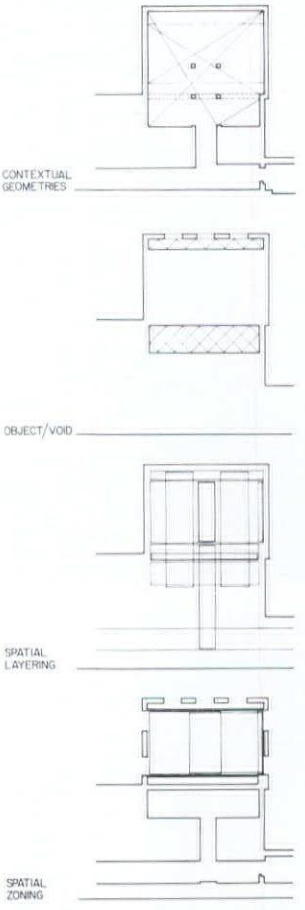
ペンシルバニア大学附属病院の麻酔学専用の図書室で，専門書用の書架と読書室，会議室および関連の諸施設が含まれている．　ペン大附属病院のダルス・パビリオンの5階の一角にある．

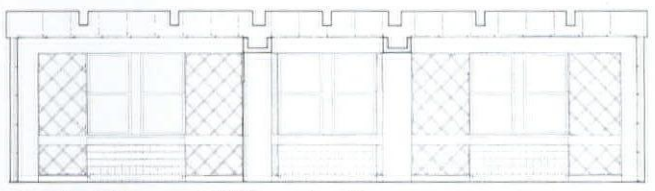
図書室は，ふたつの調査の結果として計画された．ひとつは，コンテクスチュアルな分析で，病院の5階のウィング部分を，図書室を内蔵するシェルとしてとらえ，既存の4本の柱で中央ゾーンを形づくるものである．　もうひとつの調査は，公共施設としての図書室の歴史に焦点をしぼり，書物を保存するための場，読書のための場，そして学生たちが集まる場といった，図書室の本質的なエレメントを示したのである．　これらのエレメントは，プログラム上の要求とも一致している．

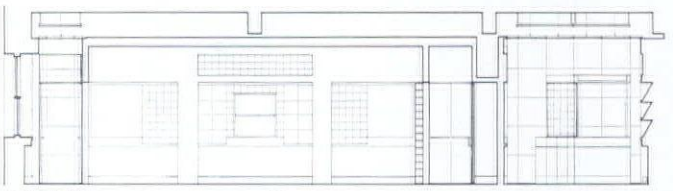
これらの調査による分析を総合した結果，〈コートヤード〉式の入口と〈バックポーチ〉のある分割形式の構成が採用された．　書物，読書室，そして，会議室という3つのメイン・エレメントは，体系的にも図書室の最も重要な部分を含んでおり，病院のその他の部分からは〈コートヤード〉で分離されている．　ラブルーストのコートヤードの前庭のように，このコートヤードは病院の喧噪からの分離や，勉学の心がまえを整えるための媒体となる．　同様に，〈バックポーチ〉あるいは〈バルコニー〉はどちらも図書室を外界から守ると同時に外への働きかけを象徴している．　このことは，勉学そのものの性質を反映させたものである．このプロジェクトがもつ意義は，既存の空間のコンテクストを，特殊な文化的負荷を負った基礎的な条件としてうけ入れようというデザイン・プロセスの可能性を追求した点にある．

1 入口 entry vestibule
2 司書席 librarian
3 雑誌コーナー light reading
4 通り抜け壁 wall passage
5 本棚 book chest
6 書架 stacks
7 閲覧室 reading
8 キャレル carrels
9 会議室 conference room
10 ポーチ porch






バックポーチ（バルコニー）展開図　porch wall


会議室展開図　conference room wall

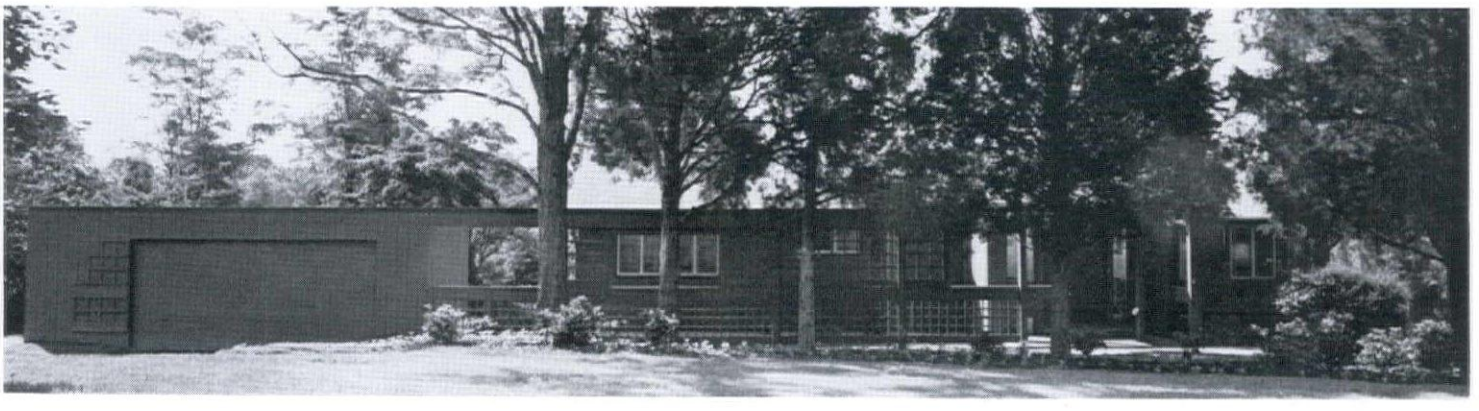
A Library of Anaesthesiology for the Hospital of the University of Pennsylvania consisting of a small specialized collection of books, a reading room, a conference room and related service facilities. The library is the result of two sets of explorations. One, a contextual analysis, concerns the fi fth floor wing of the hospital as a shell within which the library is to be placed the four existing columns marking a central zone in the space. A second investigation focused on the history of library as an institution reveals the essential elements of a library : a place for book storage, an area for reading, and a place for assembly. These elements coincide with the programmatic requirements of the Library of Anaesthesiology. These explorations, considered together, produced a tri-partite formal organization which includes a "courtyard" entry and "back porch."

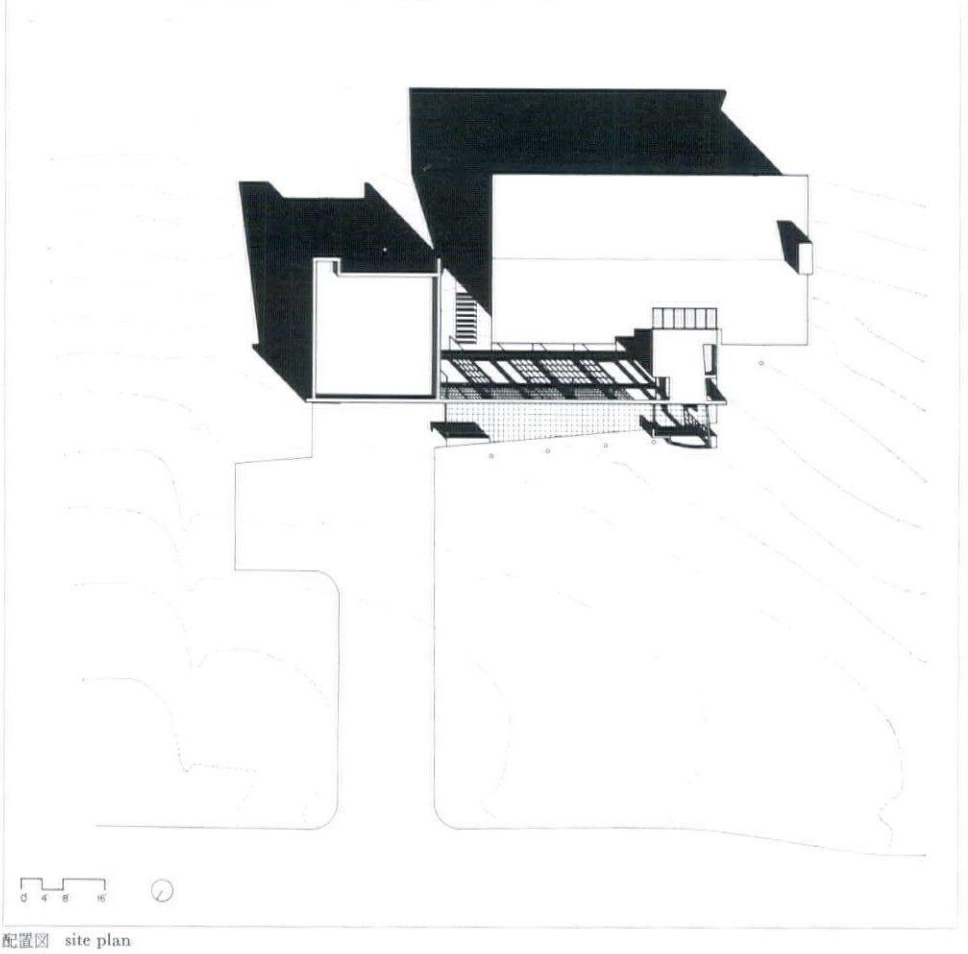
The three main elements, books, reading room and assembly room, comprise the most hierarchically significant parts of the library, and they are detached from the rest of the hospital by a "courtyard." Like Labrouste's courtyard vestibule, this courtyard becomes a vehicle for separation from the chaos of the hospital and for preparation for study. Likewise, the "back porch," or "balcony," both protects the library from the world outside and symbolically extends it into that world, a reflection of the nature of study itself.

Hahn Residence *Ivy, Va.*

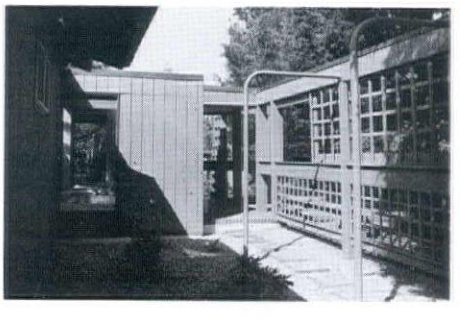
これは，ごくふつうの郊外住宅におけるガレージの増築と，玄関前庭を前面に拡張する計画である．　しかしながら，予想外のいろいろな問題が派生して，合衆国の地方住宅においては滅多に試みられることのない課題を探求する機会に恵まれた．　それは，自動車をランドスケープの中に包含させること，そのために起こる自動車と住宅とのスケールの問題，家人や来客たちのための道路→ガレージ→玄関ドアという進入のシーケンスの設定のしかた，そして特定な利用を前提とした外部空間の空間的定義のしかた等である．　こういった課題に対して，我々は公のフォーマルな通路と，私的なインフォーマルな通路のふたつを設定した．
これらは互いに対応しながらも，それぞれ独自のランドスケープを形成している．　また，ガレージと住宅とを結ぶ壁の両側に位置することによって，それぞれの性格が表明されている．　この壁は同時に柵，格子，あるいはファサードとしての役もかねている．　この壁に区切られた形で，屋外の〈部屋〉が，プライベートの部分に組み込まれて設けられている．

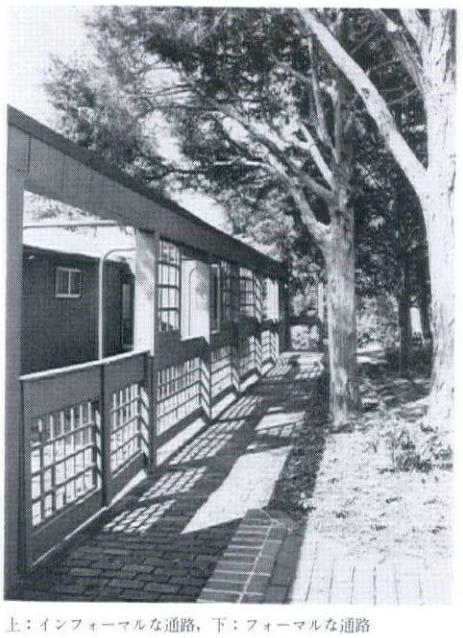
The program called for the addition of a garage and the extension of a vestibule to the front of an ordinary suburban house. However, the unstated problems presented an opportunity to explore issues rarely attempted in suburban tract housing in the United States. Among these issues is the inclusion of the automobile in the landscape and the resultant problems of scale between automobile and house, the defenition of the entry sequences from driveway to garage to front door by owner and guests, and the spatial, definition of exterior space for specific use. The solution involves the establishment of a public formal path and a private informal path, each responding to and creating its own local landscape. The paths are explicated by their location on either side of a wall connecting the garage to the house. This wall simultaneously acts as a fence, a trellis, and a facade. Existing within its private realm, bounded by this wall, is an outdoor "room" that allows for the implicit extension cf the house into its newly formed landscape.





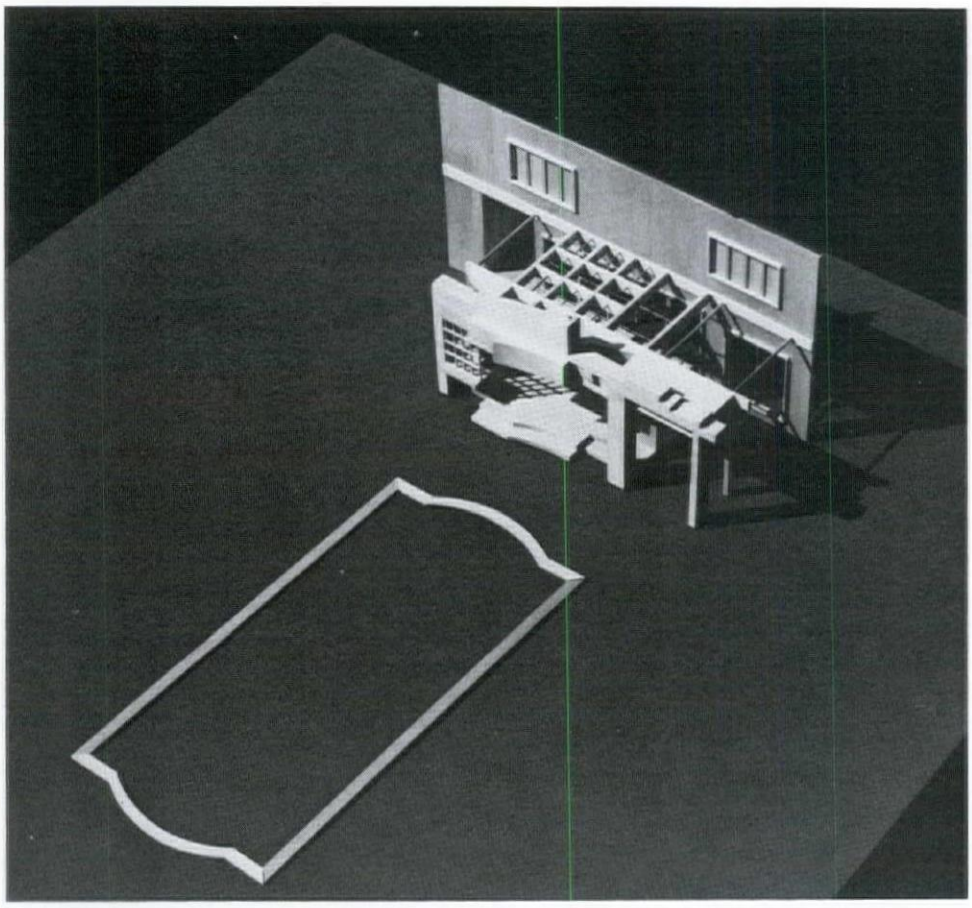
配置図　site plan





上：インフォーマルな通路，下：フォーマルな通路

A Sun Screen for Outdoor Dining, A House in Bryn Mawr. *Pa.*



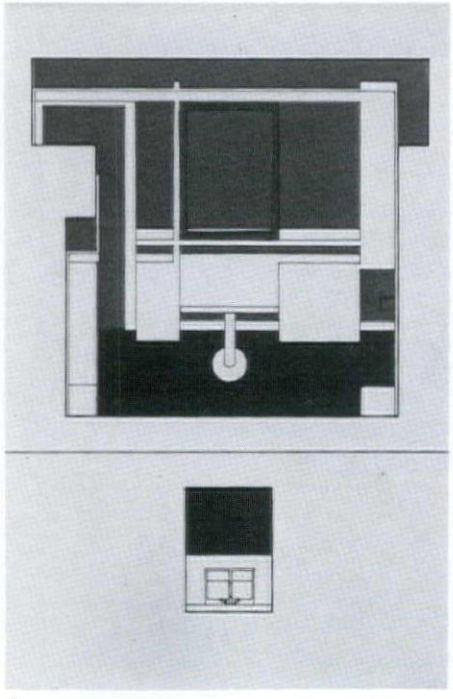


これは，いろいろな様式がミックスした住宅の裏に，屋外で食事をするための場を設ける計画である．　この住宅には現在，ガーデン・ウォールで区切られたプールやテラスなど，それ自体では完全であるがお互いに相いれないランドスケープの要素がいくつかある．我々はここに，断片的な壁と，それを住宅に結びつけるためのパーゴラを設けた．　壁は，ダイニング・エリアの日よけでもあるパーゴラを通して，住宅を外へと拡張させる．　この壁は不完全なものではあるが，住宅とランドスケープの相反するふたつの軸をうまく協和させている．　その結果，この場所をより大きなコンテクストの中でのひとつの手法として存在せしめるオーダーの断片が得られた．

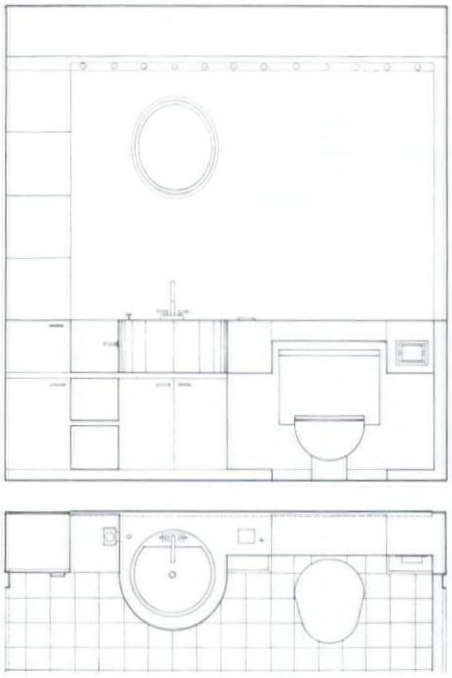
Five Projects

●台所の改修　①
●浴室の改修：便器，手洗い，収納，照明，鏡を組み込んだ壁面の再構成で，改修費は500ドル，ブルース・アビイ自身の手で施工された．　②，③
●書庫　④，⑤，⑩
●壁画　213cm×610cm　⑥，⑦，⑪
●壁画　213cm×274cm　⑧，⑨，⑫

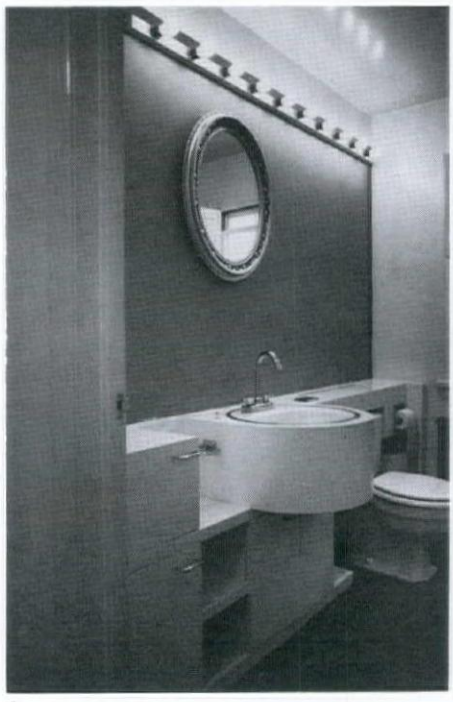
●Kitchen Renovation　①
●Bathroom Renovation　②，③
To reorganize wall to integrate toilet, sink, storage, light, mirror.　Cost: $500,
●Library／Storage　④，⑤，⑩
●Mural　7′×20′　⑥，⑦，⑪
●Mural　7′×9′　⑧，⑨，⑫



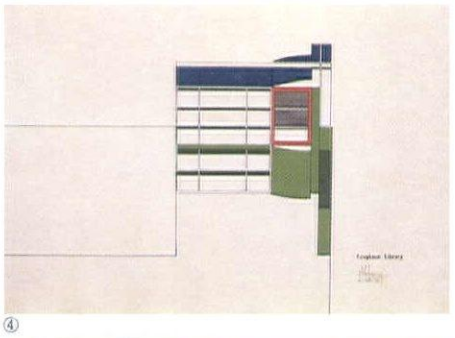
①

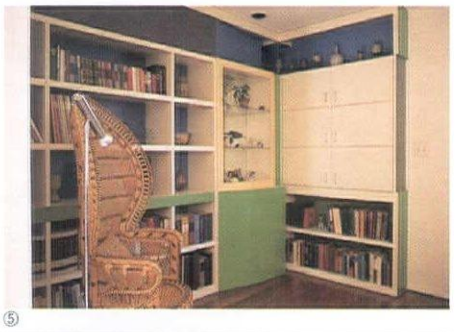


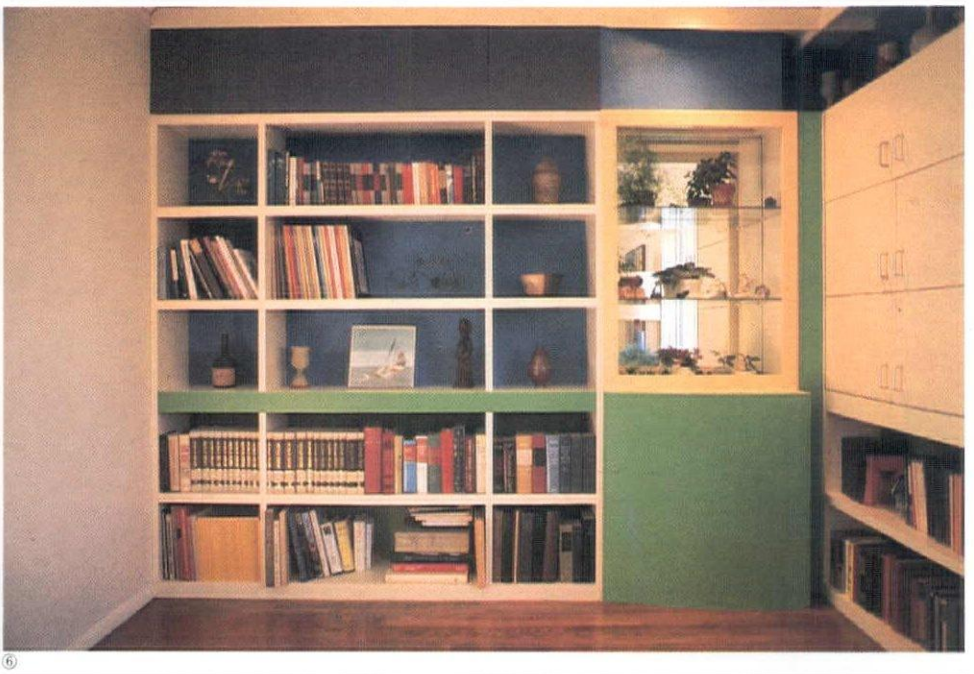
②

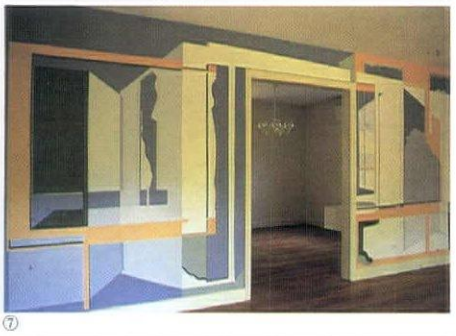


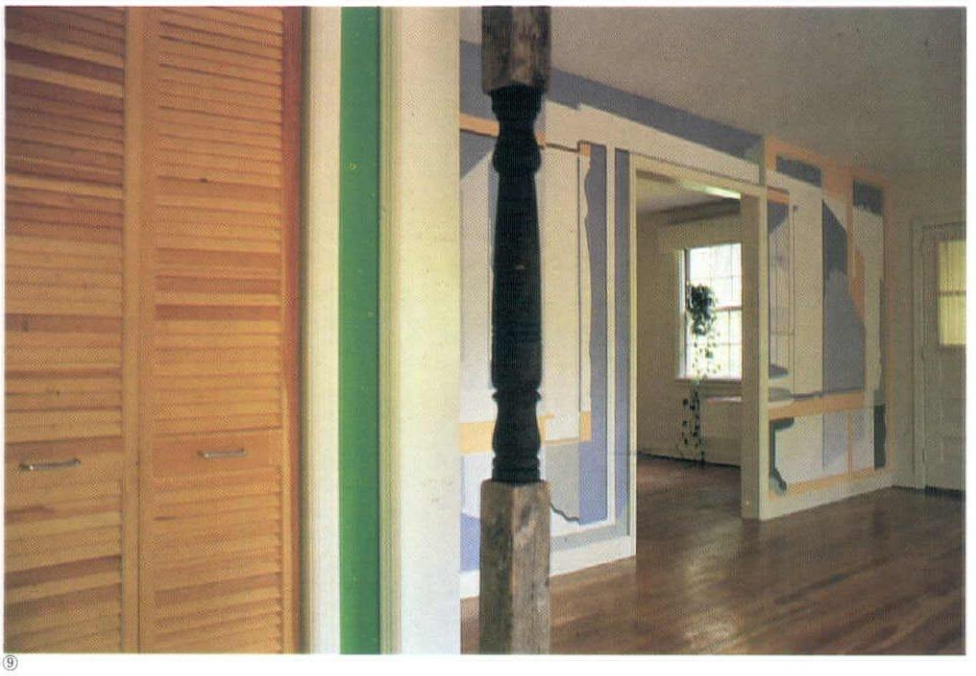
③


④

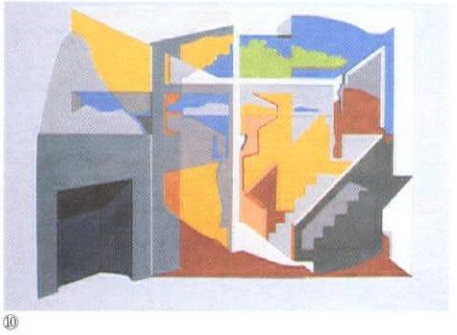

⑤

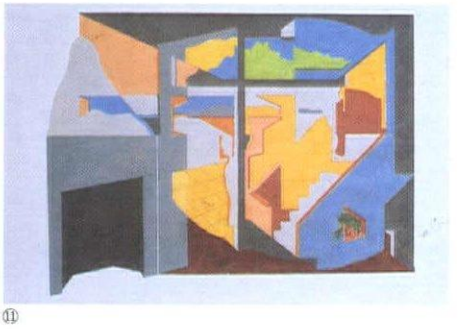

⑥


⑦


⑨


⑧


⑩


⑪

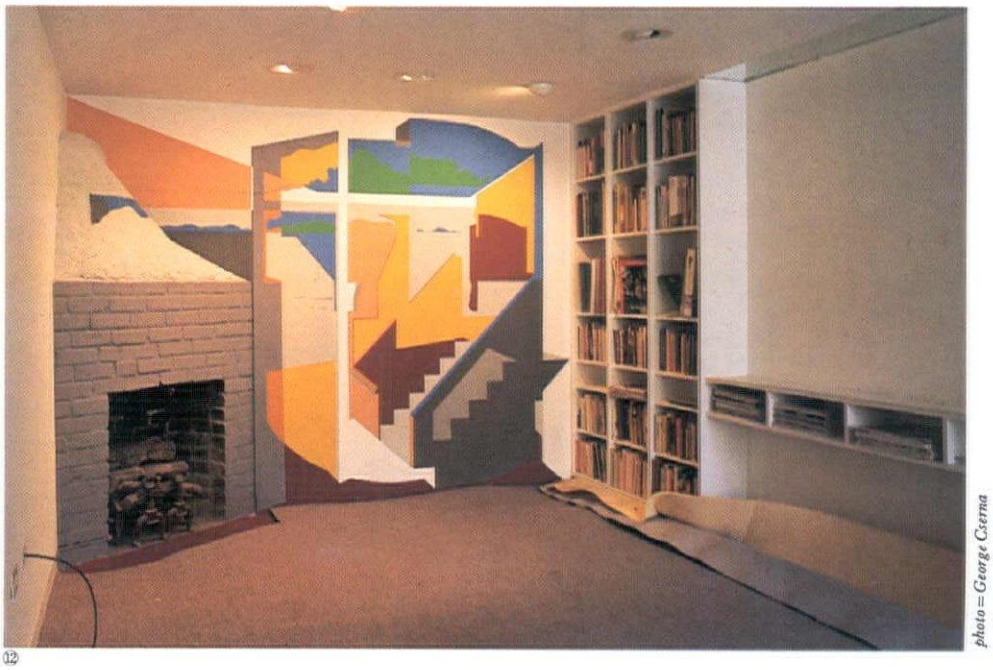

⑫

photo = George Cserna

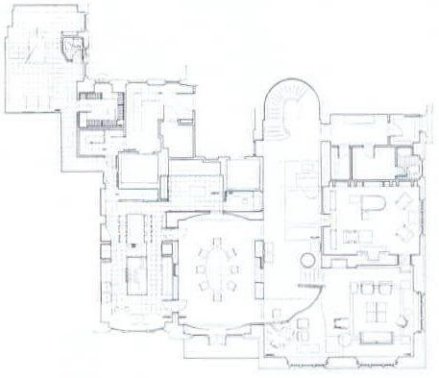
Rubin / Smith-Miller

Michael Rubin:
1965年 Pratt 大美術科卒後，68年カルフォルニア大卒 M.A.
卒業後2年間 L・カーン事務所に勤めた後，J・G・Merz 事務所等を経て，1977年に Smith-Miller と現在の組織を結成する．

Henry Smith-Miller:
1964年 プリンストン大卒業後，エール大，ペン大に学ぶ．
在学中からマイケル・グレイブスの元に出入りしていた．
卒業後イタリアに渡り，Astra Zarina 事務所で働く．
帰国後1970年より独立し，事務所を構える．

An Urban Villa *New York, N. Y.*

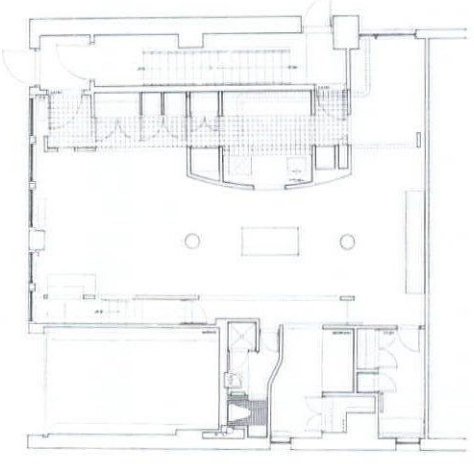
このプロジェクトは，34部屋あった，2層式のアパートの改築で，都市住宅の典型的な状況を示している．戦前の大きなアパートはうす暗く，内部は多くの部屋に分割されているが，施主達はそのようなライフスタイルをもはや望んではいない． この計画ではオープンプランの概念と，部屋もしくは閉ざされた空間のコンセプトとの対比に大きな関心が払われた． 加えて建物の外皮の保存が明快にうちだされ，あらたに2階の主寝室とバルコニーが既存の空間に挿入されたかのようにみえる． 通路の概念と形而上学的でメタフォリカルな空間の推移は居間と食堂，ギャラリーの接続部にみられる． 新しい階段，曲線を描くプラットホーム，仕切壁そして吹き抜け空間がひとつの立体的な室内庭園を織りなしている．



This project, the renovation of what was formerly a thirty-four room duplex apartment, represents an increasingly typical urban residential condition. In this project, issues such as the idea of the open plan versus the concept of room, or enclosed and defined space, are of prime concern. In addition, the preservation of the exterior shell, or actual building perimeter, is made manifest and the new second storey master suite and balcony is seen as an insertion in an existing space. A new stair, curved platform, screen wall and double-height interior space combine to provide a vertical interior garden.

Wobido Home *New York, N. Y.*

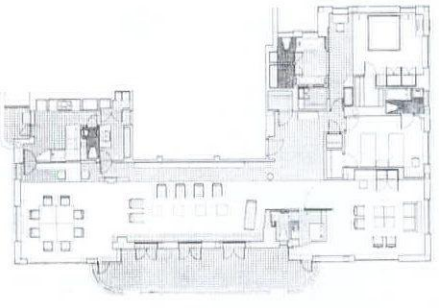
この計画はニューヨークのウェストビレッジにある既存の倉庫を改装したもので最近多く見うけるタイプである． 施主は「邸宅並みの規模で住宅を造る」という目標を持っていた． そこで我々はこの規模の空間と部屋の構成に対して，家の中に街を造るような手法をとり2本の円柱のある居間―食事スペースを中心部とした． この部分は2つの装飾された壁で仕切られ，その壁の背後に2層になった部屋が隠されている．これらの部屋には中心部の部屋を眺めることのできる窓があり，中心部が建物の中心にあるというよりむしろ2つの建物の間にあるという効果を決定的なものにしている．



The clients articulated the goal : "to create a dwelling with residential scale". In setting about to do this, the same notion of creating an infra-structure was used to create a house within a house. The size of the existing space and the program of rooms led us to create a kind of domestic cityscape whose center is the living-dining areas, containing two existing columns. This area is defined by two walls, whose locations mask the differentiated and double-height rooms beyond. These secondary areas have windows completing the effect of it as a center between buildings rather than as a center of the building.

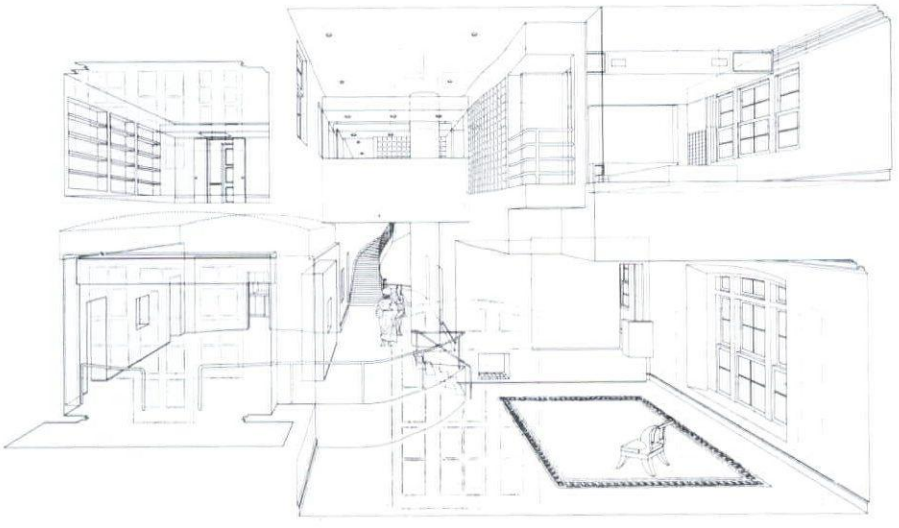
5th Avenue Residence *New York, N. Y.*

このプロジェクトはアパートの19階にニューヨーク5番街のリニアな体験を持ち込むべく計画された．既存の3階屋をひとつにすることで西に開かれた約27mの長さの空間が生まれた． 船のデッキさながらにセントラルパークへ面するテラスはリビングエリアよりやや長く，北のダイニングルームと南の書斎を結びつけている． ここからのながめは山の手から下町へと街の隅々までひろがる． キッチンは書斎と同様，すりガラスの戸で閉じることができる． だがひとたび全開にすればダイニングルーム，さらにはリビングエリアとまで一体になる．



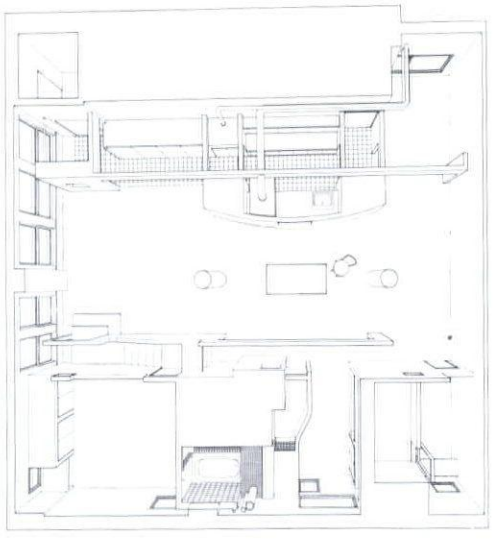
This project attempts to translate the linear experience of Fifth Avenue in New York City to a nineteenth floor penthouse apartment. To achieve this, one space is created from three existing rooms, making an 88 ft. long space with views north and south, but mainly west. Broadside to Central Park, a terrace slightly longer than the living area connects the dining room on the north with the library on the south. Its vistas run uptown and downtown to the ends of the city.

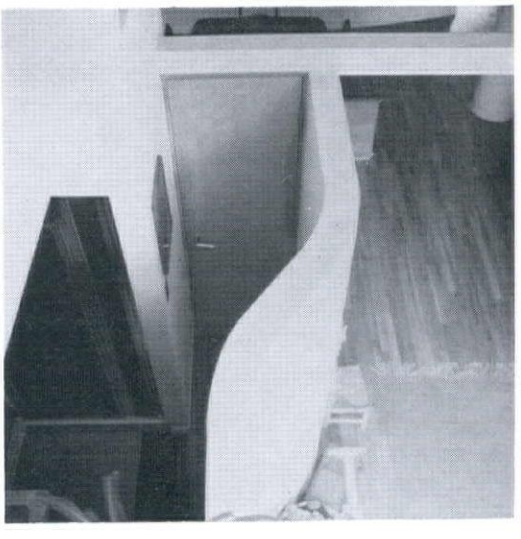






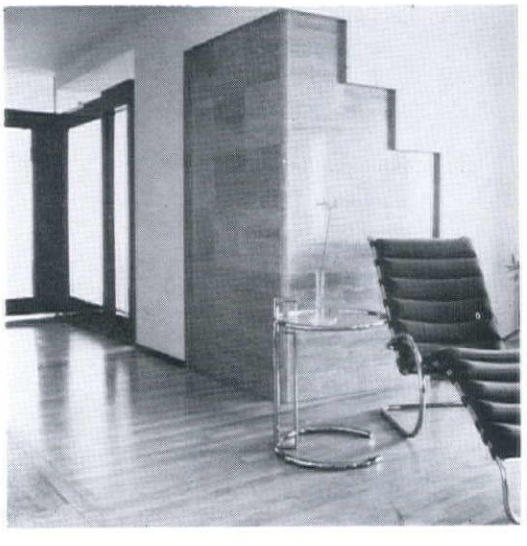
photo=Norman Mcgrath





photo=Micheal Rubin





photo=Billy Cunningham

Giuseppe Zambonini



ジュゼッペ・ザンボニーニ：1942年イタリアのViterboに生まれる．　ヴェニス，フィレンツェで建築を学んだ後，1971年に渡米する．　1977年よりニューヨークにて The Open Atelier of Design を主宰する．　そこは建築設計事務所であるとともに，建築デザインの学校でもある．　生徒の中には職人もいて，ここに紹介する作品の大部分（配線，配管を除く）は，彼らの手によって作られたものである．　アトリエの中には実験工房もあり，木工作業が行なわれている．

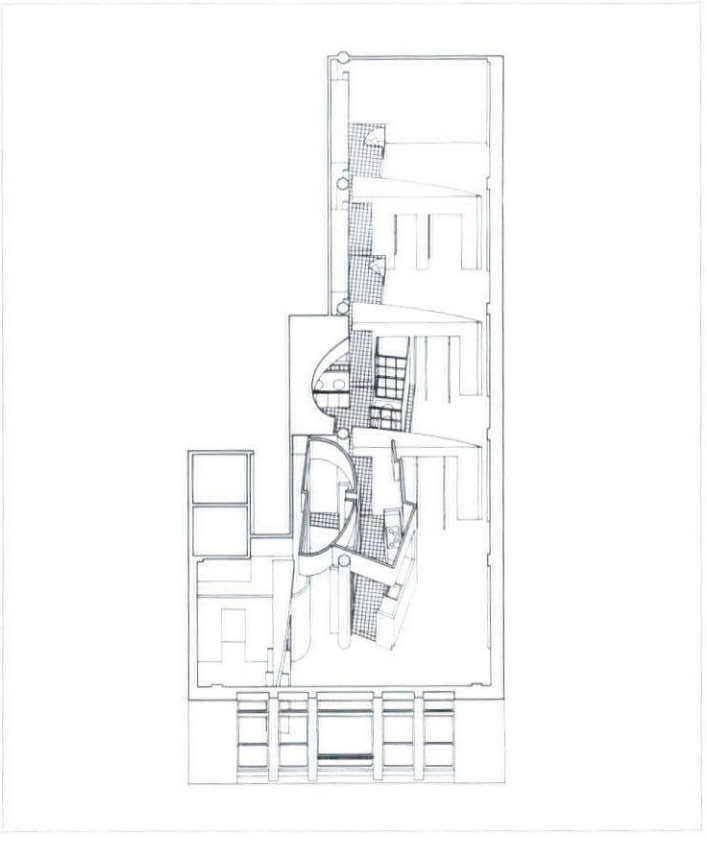
Loft No.2　*Greenwich Village, New York 1981*

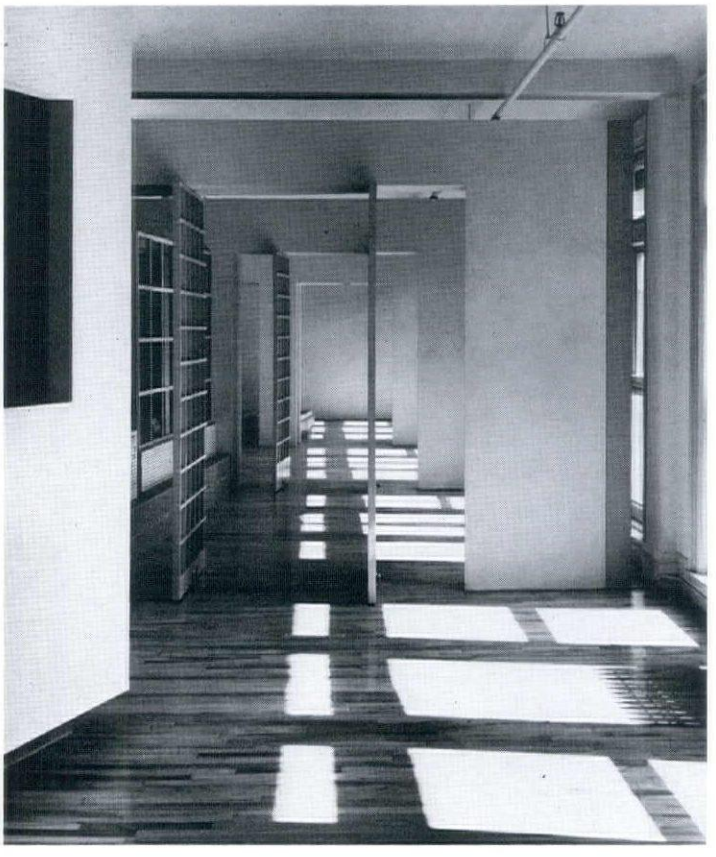


この住宅は印刷工場だったロフトの8階部分，約200 m^2 を改築したものである．　建物は1920年代に建てられたコンクリート造．　施主はテレビのプロダクションをしている若いカップルで必要に応じてプライベートな空間が確保できるオープンスペースを望んだ．各部屋は，一種のパーティションで仕切られる．　このパーティションによって，外からの自然光を調節しながら自由に部屋の奥行きを変えることができ，またひとつの〈囲み〉をつくりだすこともできるのである．この住宅のサービス部門は建物のコア側に集められ，台所，バスルーム，化粧室の順に床レベルが上がっていきレベル差によってそれぞれの領域を分けている．

Conversion to residential use of a 2,100 sq. ft. loft originally used as a printing plant. The clients desired an open space which could provide increasing degrees of privacy when necessary.　Rooms are created using a type of partition which increases its width in plan as it moves from the natural light, becoming an enclosure in itself.



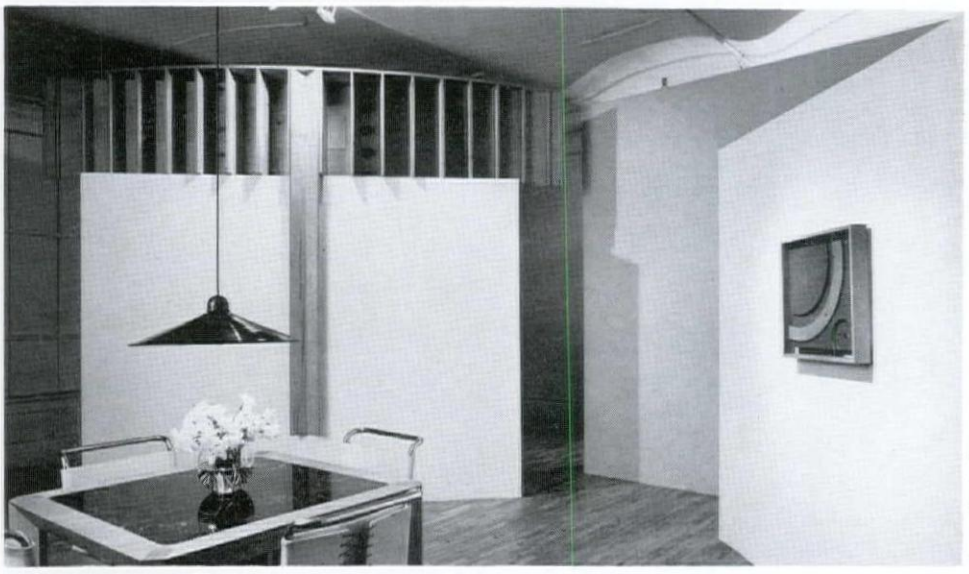




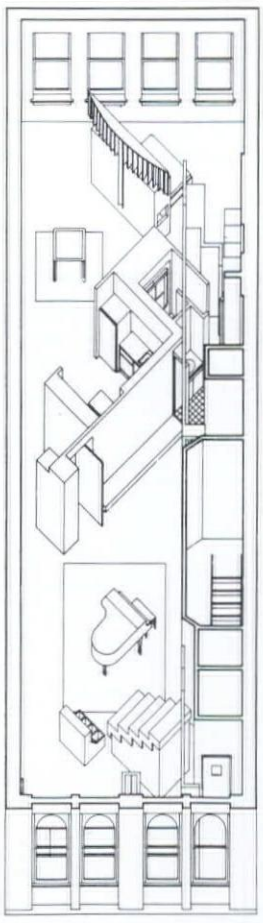
Loft #1 *Manhattan, N.Y. 1980*

この住宅は，もとは軽工業の倉庫だったロフトの8階部分約 200m² を改築したものである．　施主である独身の若い作曲家は，音楽の仕事部屋とリビングスペースを空間の流れを遮らないで分けることを望んだ．ひとつの縦に走る壁が空間全体の背骨の役割を持ち，パーティションはすべてこの壁によって支えられている．　また，これらのパーティションは，鉄とコンクリートでできたスカラップ型に波打っている天井からも，レンガ組みの壁からも自由になっている．

Conversion to residential use of a 2,000 sq. ft. loft. To create a music workshop and living quarters for a young composer who lives alone. The two areas are to be separated without interupting the flow of space. A longitudinal wall acts as a spine and holds other partitions. No partition meets the scallopped steel and concrete ceiling or connect to the brick walls.



photo=George Cserna

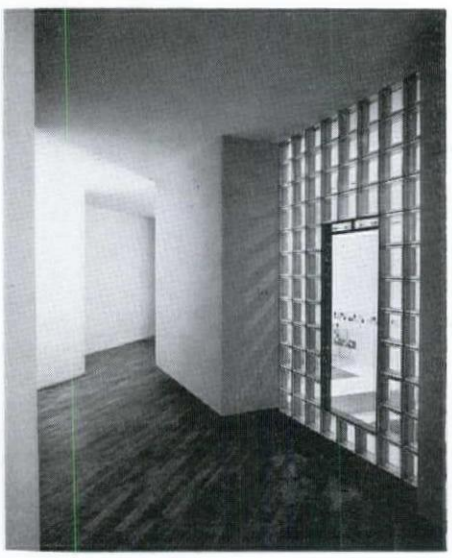


Loft #3 *Manhattan, N.Y. 1980*

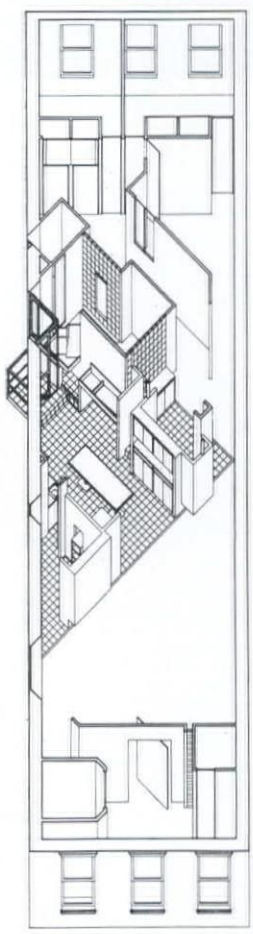
この住宅はハドソン川の近くに位置するレンガ造りの倉庫約 200m² を改築したものである．　建物は1860年に建てられたもので，輸入香辛料の倉庫であった．　このロフトは最初，ザンボニーニ夫妻が住むために設計された．　台所，浴室，洗濯室が三角形のエリアに納められ，外からの光を十分に受けるように部屋に対して45度の角度に振られている．　この空間の焦点は台所と浴室をつなぐ噴水である．　この噴水は外からの雨水を受け，一晩かかってバスタブを一杯にする．夏はこれで水浴びをするのである．

Conversion to residential use of a 2,000 sq. ft. loft in a brick building built in 1860. The loft was initially the residence of Giuseppe Zambonini and his wife. The focus of the space is a fountain which hinges kitchen and bathroom. The fountain can receive rain water which is decanted, aereated and dropped overnight into the bathtub to provide summer baths in "rested" water.





photo=George Cserna



Mark Cigolle

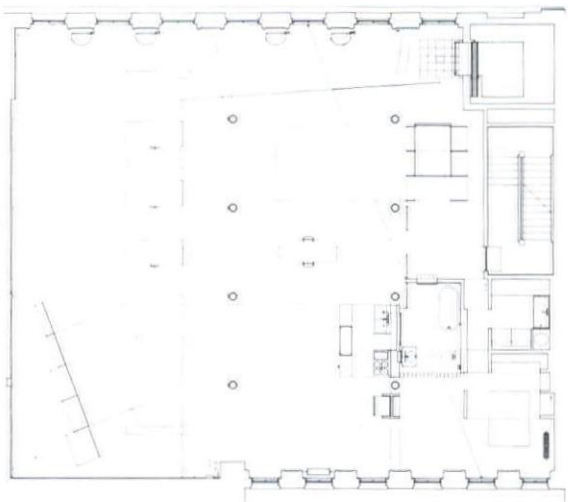


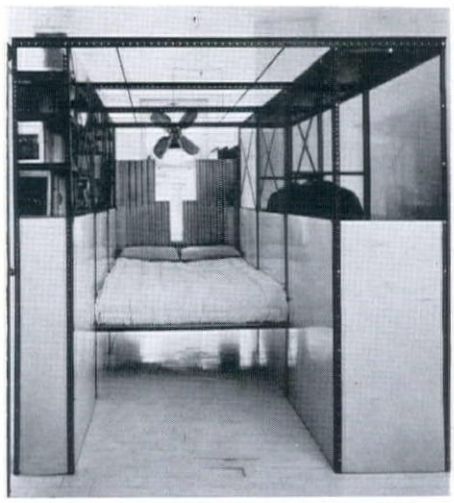
マーク・シゴレ：1949に生まれる．
1971年　プリンストン大BA修得後，ハーバード大大学院に学ぶ．　73年プリンストン大 MA 修得．
マイケル・グレイブス，ユニプラン事務所，I・M・ペイ，リチャード・マイヤーのもとでの勤務経験を経て，1977年に独立．
独立後は，ケンタッキー大，ロードアイランド造形学校，ヴァージニア大などで教える．

The Mercer Street Loft　*New York, N.Y.*

ソーホーにある1884年に建てられた6階建の倉庫の改築である．約300 m² の中に住居部分と仕事場を含むこの計画は，オープンプランのインテリアと，古典的な平面の痕跡とを並置している．　働く場と住まいのイメージとの対比が本計画を際立たせている．

Built in 1884, this Soho loft building is a six story masonry structure. The design, which provides living and studio space within a 3500 square foot loft, juxtaposes the open plan interior with a trace of the classical plan of the enfilade. In addition to this juxtaposition of compositional ideas, the narrative of the project is established by contrasting images of the industrial loft as a work place with those of domestic life.







Livesey / Rosenstein

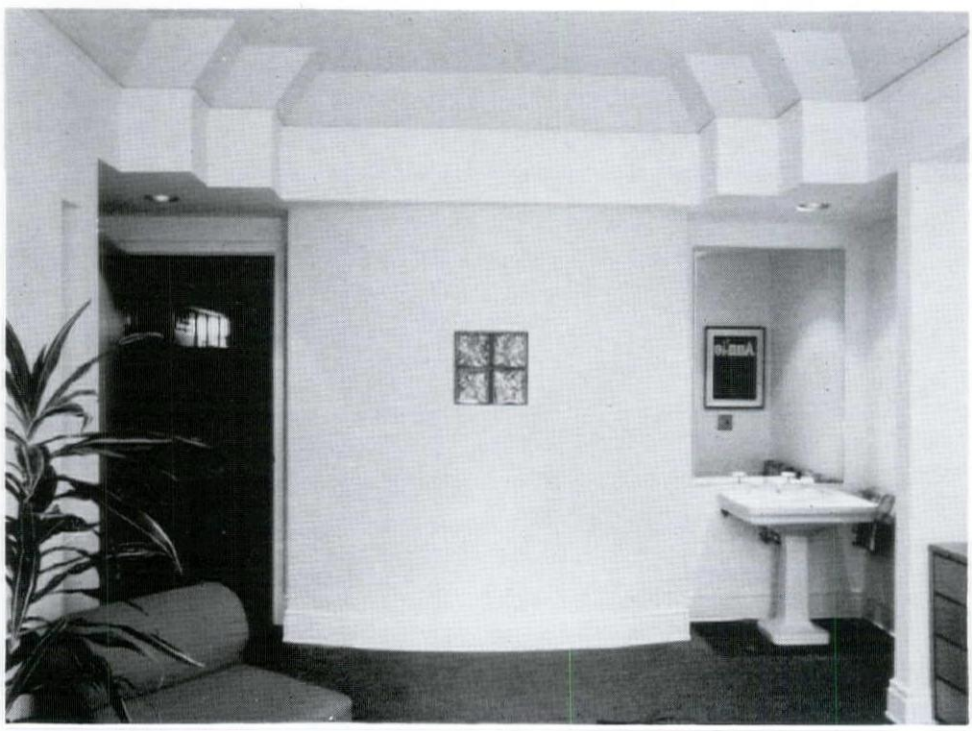




Robert S. Livesey：1947年に生まれる．
1967年　プリンストン大B.A.，72年ハーヴァード大M.A. 修了．
ジェームズ・スターリング，I・M・ペイ事務所勤務等を経て，
1978年　Rosenstein と現在の組織を設立．
ペン大などで客員製図審査官を勤める．

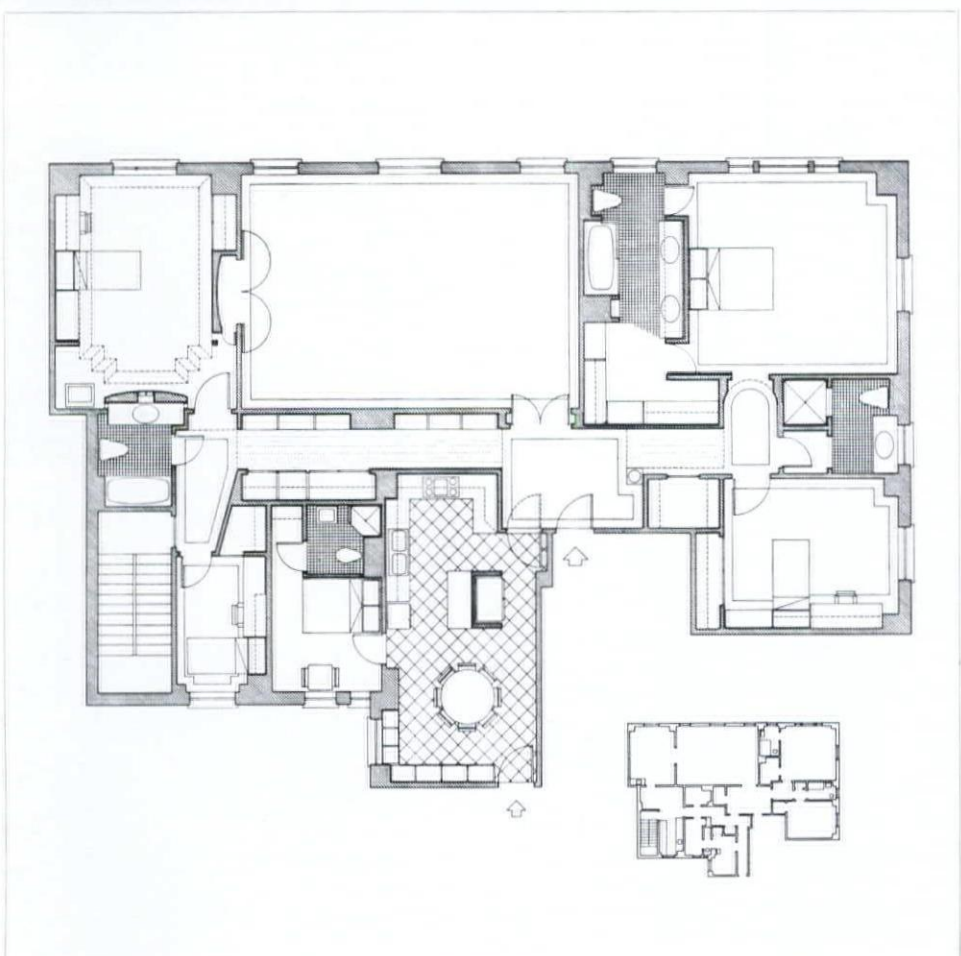
Mark Rosenstein：1945年に生まれる．
1963年　Horace Mann 校卒，68年　Bard 大 B.A.，72年
ハーヴァード大 M.A. 修了．
スイスの Dolf Schnebli 事務所，B・B・Belle，M・Woll，
A. Kouzmanoff 各事務所での勤務を経て，現在の組織を設立．

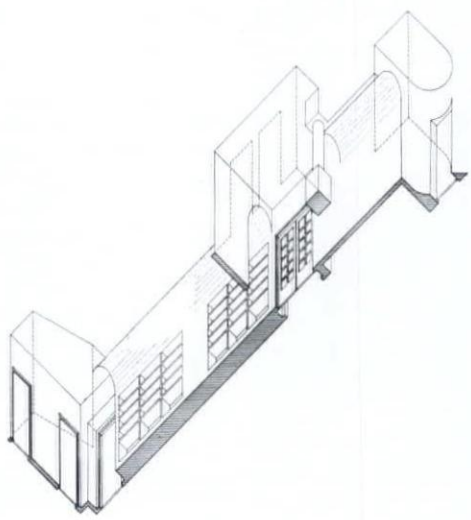
Strouse Apartment　*New York, N.Y.*



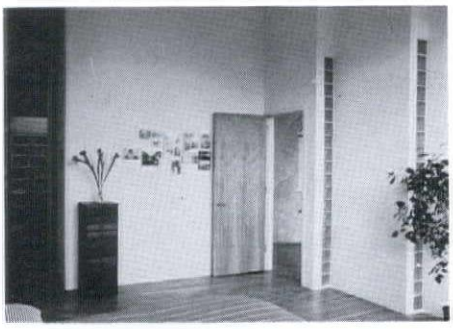
与えられた課題は約230m²のアパートを両親と4人の子供，そしてひとりのメイドのために改築することであった．　その解決法としてパラディオのヴィラ風の中央の横をかこんでパブリックスペースを配し，寝室は両端のやや小さい〈サービス棟〉に納めるという方法がとられた．　これには，改築前の主な部屋のおもかげが残すシンメトリルな配置を強調する意図もあった．　居間の壁画は内部にある窓の機能を持つと同時に施主であるストラウス氏の職業柄を偲ばせる．

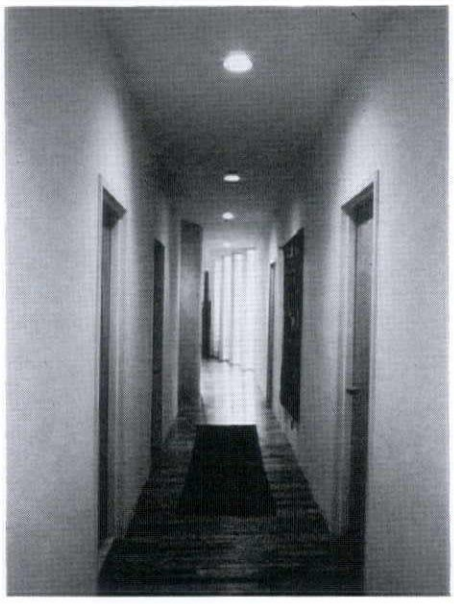
The problem was to renovate a 2,500 square foot apartment to accomodate two adults, four children, and maid. The solution, based on a Palladian villa type, was to place the public spaces in the middle around a major pavilion and to accomodate the bedrooms off two smaller "service" pavilions at the extremities. There was a secondary concern to enhance the symmetrical relationships that were suggested in the former major rooms. The mural functions as an interior window and makes reference to Mr. Strouse's occupation.

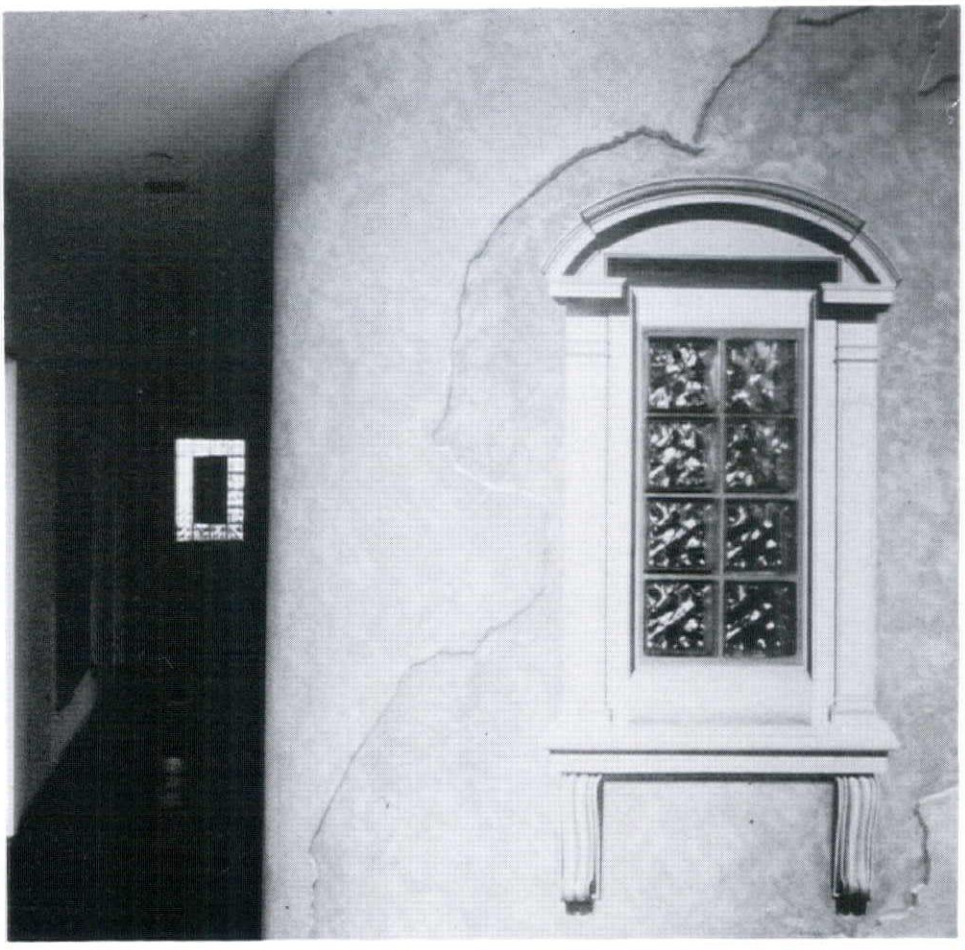


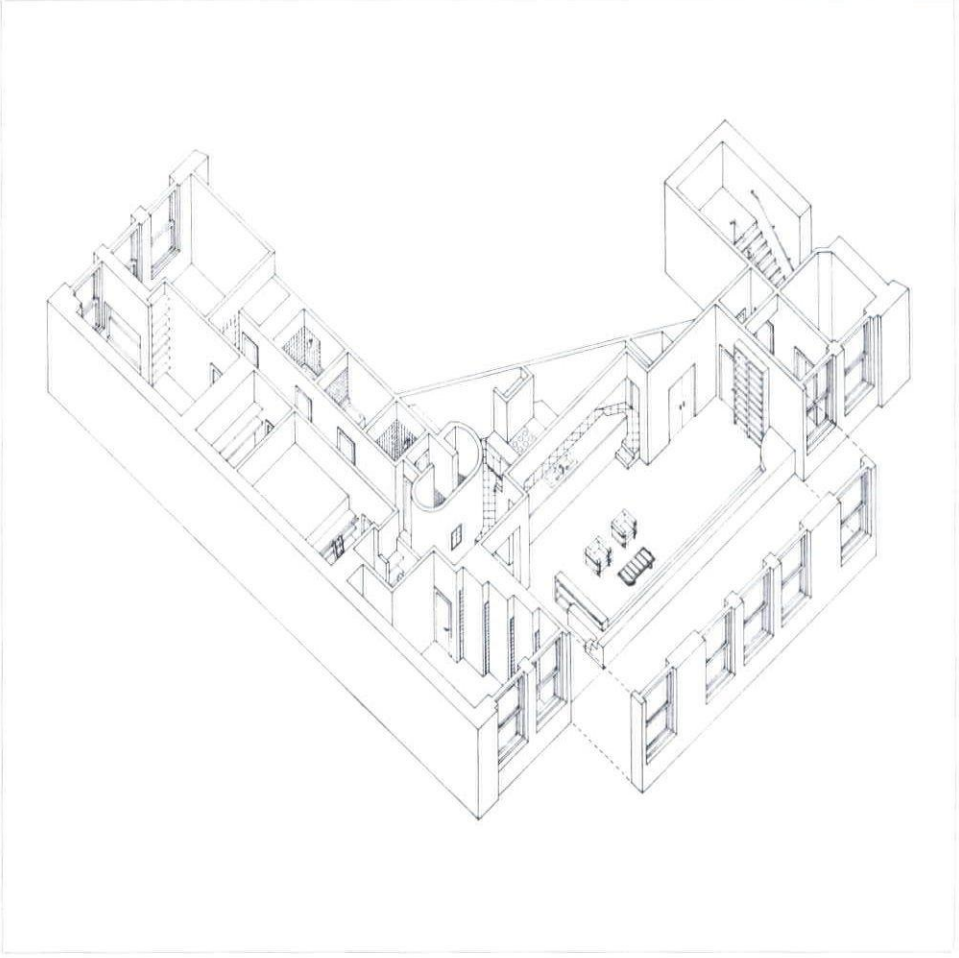


Kusnetz / Iano Loft *New York, N.Y.*









既存の壁と既存の斜めにふられた壁とを生かしつつ，T字型の居間，食事室を新たに配した．　この部屋はT字型のウィングに囲まれた斜めの壁と整合し，1-3-1というピッチで並んでいる窓のリズムを強調している．　この斜めの壁は構造体であると同時に空間のサーキュレーションをよくし，コアをつくりだす役目を持っている．　つまり，このロフトに住む二人の幼い子供達にかくれんぼと鬼ごっこのためのルートを提供したのである．　夫婦の浴室の窓に用いられているガラスブロックは，内部空間に光をとり入れ，同時にひとつの〈高貴な建築の要素〉を思わせながらサービスコアを遮閉するのである．

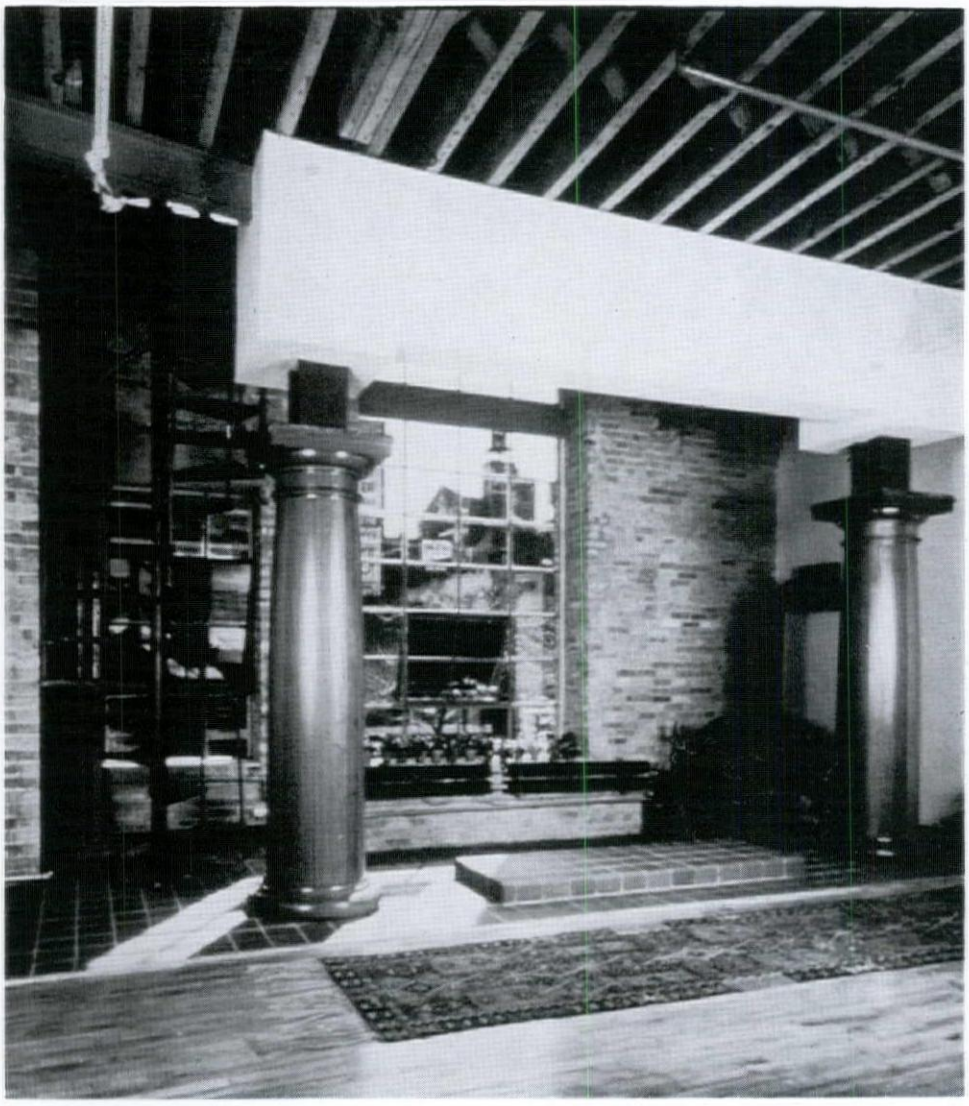
In an attempt to resolve the diagonal relationship of the existing internal wall with the regularity of the front and back window walls, the "T" shaped living dining room gives a specific character to that space. It accomodates the diagonal wall within the wing of the "T" and emphasizes the one-three-one rhythm of the window wall. Overlaid on this primary structuring device are two secondary notions of circulation and core. Because the loft is for a family with young children, there are established routes for endless games of hide and seek or tag.

Kenneth　Schroeder



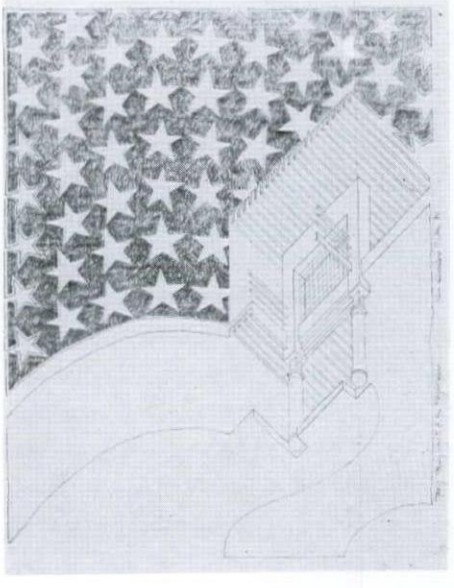
Kenneth A. Schroeder:
1967年イリノイ大 B.A. 71年トロント大 M.A. 修了.
イリノイ大学で助教授を勤めるかたわら，雑誌，展示会に積極的に作品を発表.
シカゴ芸術協会，グラハム芸術財団，ウォーカー芸術センター，フランキン・ギャラリーなどで作品を展示.
《Chicago Architects》展，《遅ればせのシカゴ・トリビューン・コンペ》展出品.

Mergenthaler Lofts　*Chicago.*





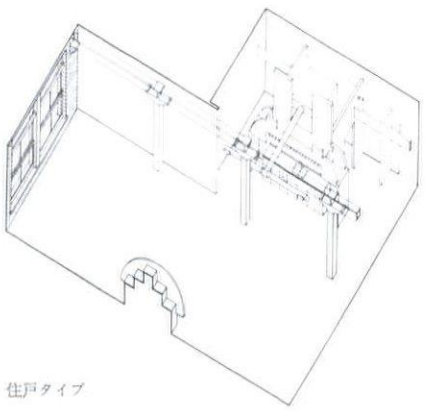


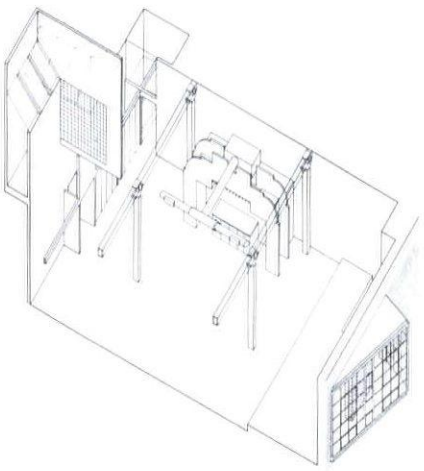


これは，21 軒の ロフト式共同住宅（コンドミニアム）への改築で，敷地はシカゴの下町南部にある印刷工場地帯である．　各ユニットはオープンはロフト形式となっており，台所と浴室のコアが，巨大家具のひとつとしていろいろに配置されている．　ユニットのプランは，既存の建物のもつ多様性を活かしてそれぞれ個性あるものになっている．　メゾネット式のユニットは，以前階段室であったところを利用してつくられており，既存の鉄柱は特大のドリス式木製柱でおおわれている．

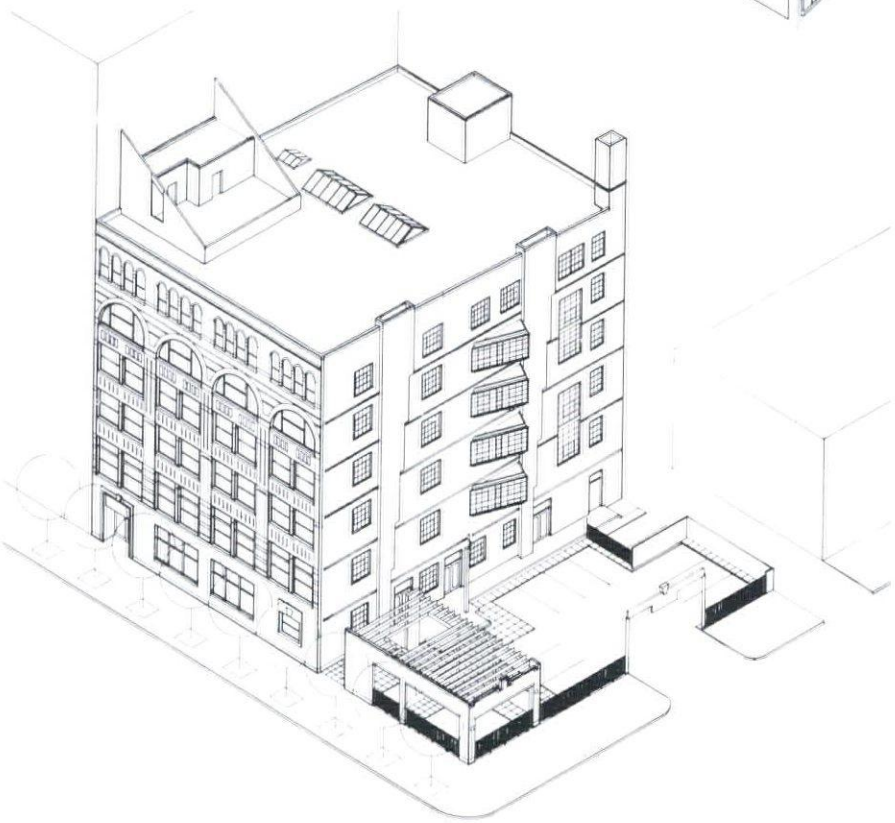
建物外観の性格は，新しく張出し窓と入口をつけ加えただけで，あとはそのまま保たれている．　また，Americana や Toms Grill の看板が，都市の中における「庭園の残骸」として再利用されている．

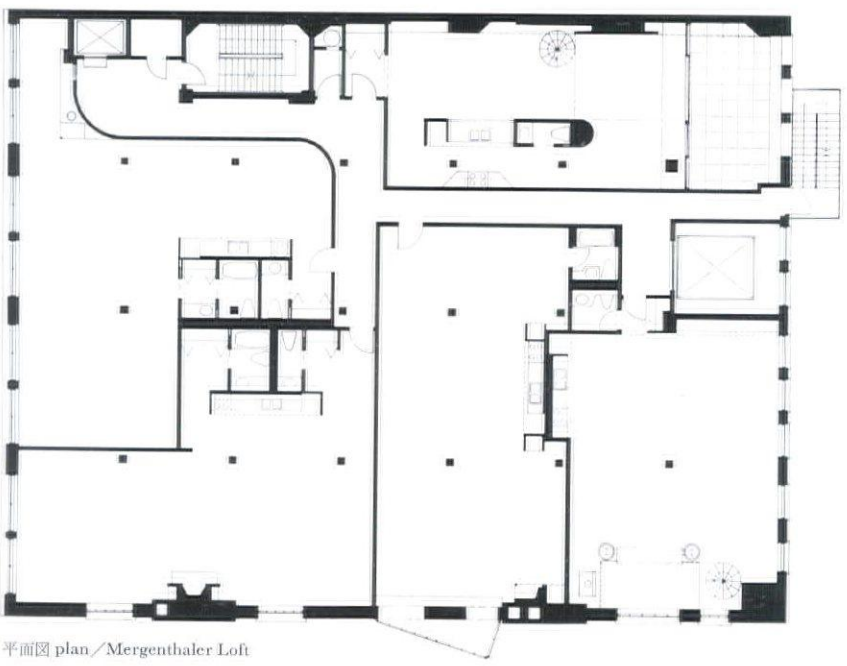
A 21 unit loft condominium conversion in an area of industrial printing lofts south of the loop. Each unit is designed as an open loft plan in which various kitchen and bath cores are placed within, as large scale furniture. Unit plans are individualized within the diversity of the existing building. The duplex units are formed from a former stairwell in which the existing steel columns are wrapped with oversize Doric wood columns. The exterior character of the building is retained with the exception of new bay windows and entry. A slice of Americana, Toms Grill, has been recycled as an urban "garden ruin".





住戸タイプ





平面図 plan／Mergenthaler Loft

4 Little Houses of the Prairie

Chicago

シカゴにおける4軒の住宅プロジェクトのシリーズで，基本の形をもとにいろいとと変化をつけたものである．

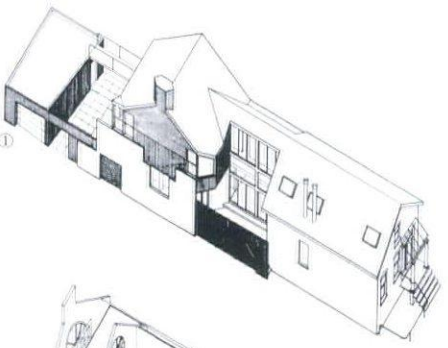
①既存家屋の後に〈コーチ・ハウス〉風建物を増設．

②，③2軒のヴィクトリア風の連続住宅の改築

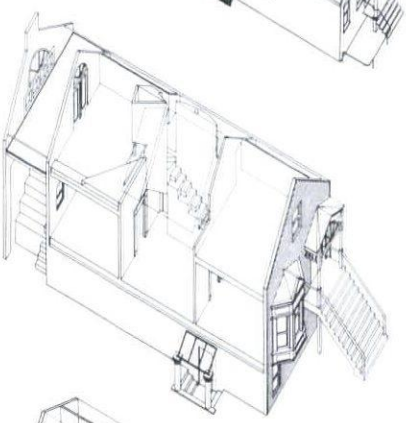
④シカゴ風コテージの拡張．　道側にレンガ壁を付加．

A series of four residential projects in Chicago which deal with a variety of alteration types.

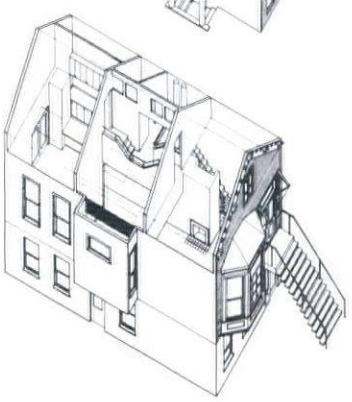
①

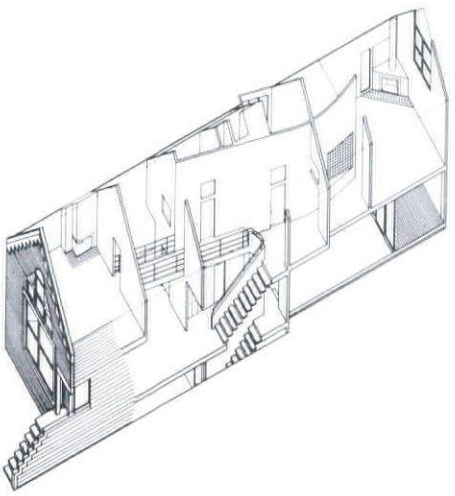


②



③





④

Sartogo／Schwarting

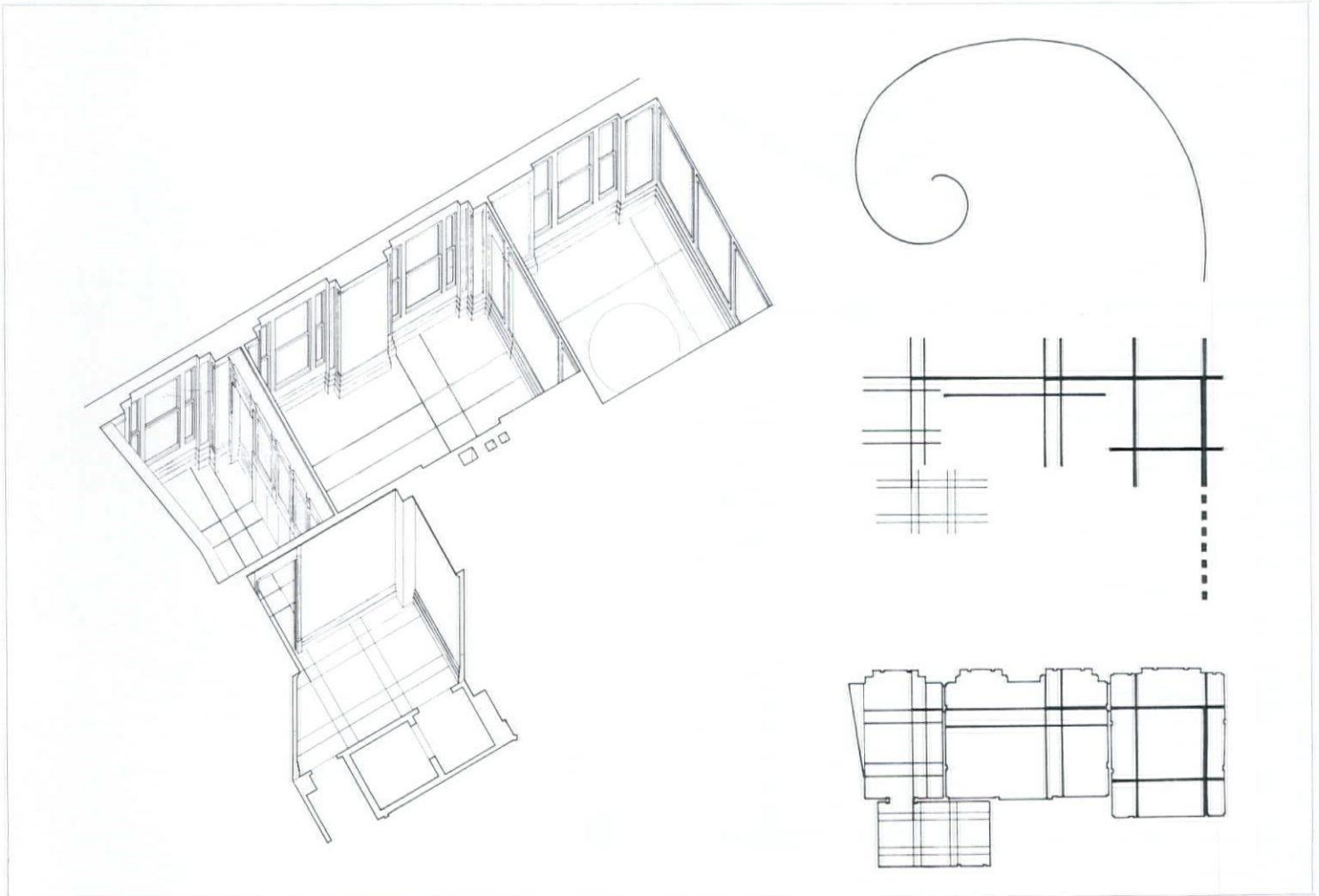
Piero Sartogo：1960年よりイタリアにて建築デザイン活動を始めて今日に至る．　また雑誌《カサベラ》の編集をやっていたこともある．　ローマ大学の教授である他，アメリカ各地の大学でも教えている．

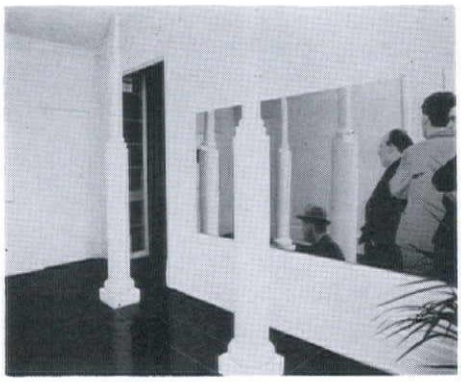
Jon Michael Schwarting：1943年オハイオ州に生まれる．コーネル大学で建築を学ぶ．　ローマ大賞を得てローマに遊学．リチャード・マイヤーのところで働いた後に独立．　1978年にPiero Sartogo とともに Design Collaborzative を設立する．

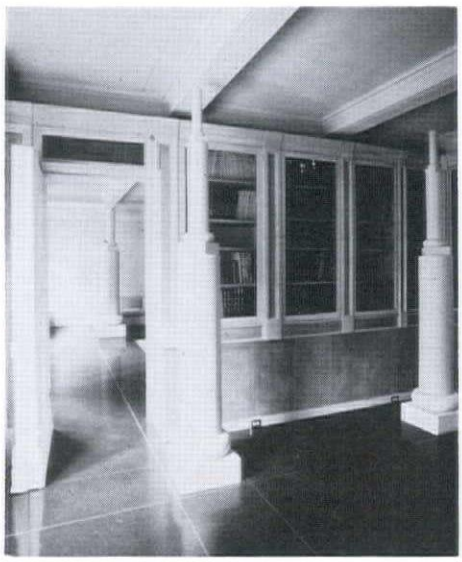
Apartment in Manhattan *New York 1978*

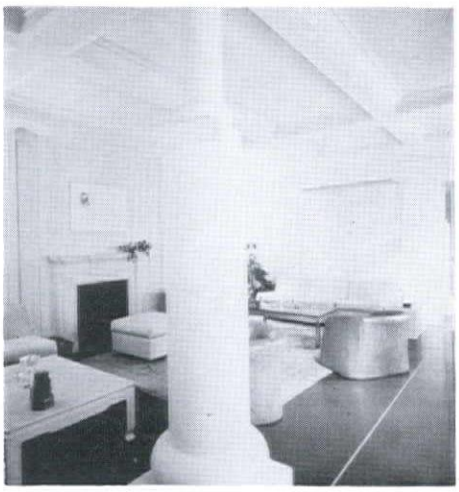
このアパートのもともとの構成には，何の特別なアイデンティティも，連続性もなかった．　そこで，私たちは改装にあたって，こうした現状の姿にそれとは矛盾するような新しい連続性を持ち込むことによって，新たなアイデンティティを創出しようとした．
連続性はふたつの要素によってかたち作られている．ひとつは床に刻み込んだアルミニウム製のグリッド目地である．　目地の巾とグリッドの大きさとは，空間を移行するにつれて変化する．　もうひとつの要素は，そのグリッドの上にたつ柱である．　1本の柱は，最初は，上方に行くに従い次第に小さくなっていく小型の柱を4つ積み重ねたものであるが，次には3段重ね，2段重ね，最後には1本の単純な柱にと移って行く．この変化は入口の間から始まって，食堂に終る．　つまり，入口の間には，小さな4段重ねの4本の柱と狭いグリッド目地があり，次第に柱は大きく，グリッドも広くなるのである．　それはラセン状に成長して，概念的には室内を飛び出して，床のグリッドはマンハッタンのグリッド状の街路にまで広がり，柱はスカイスクレーバーに同一化するものと考えられている．
このようにして，アパートは実際には大幅な改修をすることなく，新たなアイデンティティを有した空間へと変えられた．　概念上の連続性は非常に強いものであり，現実とぶつかって失われてしまうこともない．扉は閉じた時に壁と同化し，その姿を消してしよう．空間は物理的には不連続になるのだ．　けれど，私たちの設定した床のグリッドと柱のシステムが心の中で部屋を再統合し，連続的な空間を暗示する．　そして，私たち建築家が現状の構造の上に別の構造を重ね合わせるように，このアパートの持主は，現実の空間に，自分たちの家具や生活の構造を重ね合わせるのである．

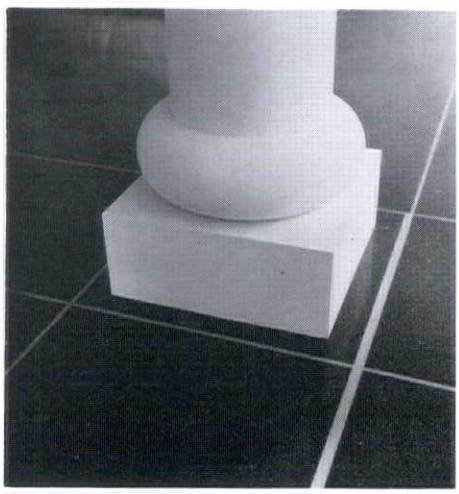
The original organization of this apartment had no sequential order an no specific identity. The new identity is created by exposing the inherent contradiction (rather than synthesis) of the existing disorganization and the new 'sequence'. The sequence has two basic elements. One is an aluminum tartan grid in a terrazzo floor, and a similar grid on the ceiling, which progressively changes in size of grid, and dimension of aluminum strip as one moves through the spaces. The second is a series of columns which similarly varies in size, shape and number as the sequence progresses. The visual sequential differentiation of columns reinforces the conceptual spiral which by implicatcn extends beyond the apartment and begins to identify with the visible grid of the city outside the windows. The columns appearance has the capability of changing identity from an iconic historical notion of support, anthropomorphic and natural proportion etc., to city skyscrapers.













Ralph Lerner

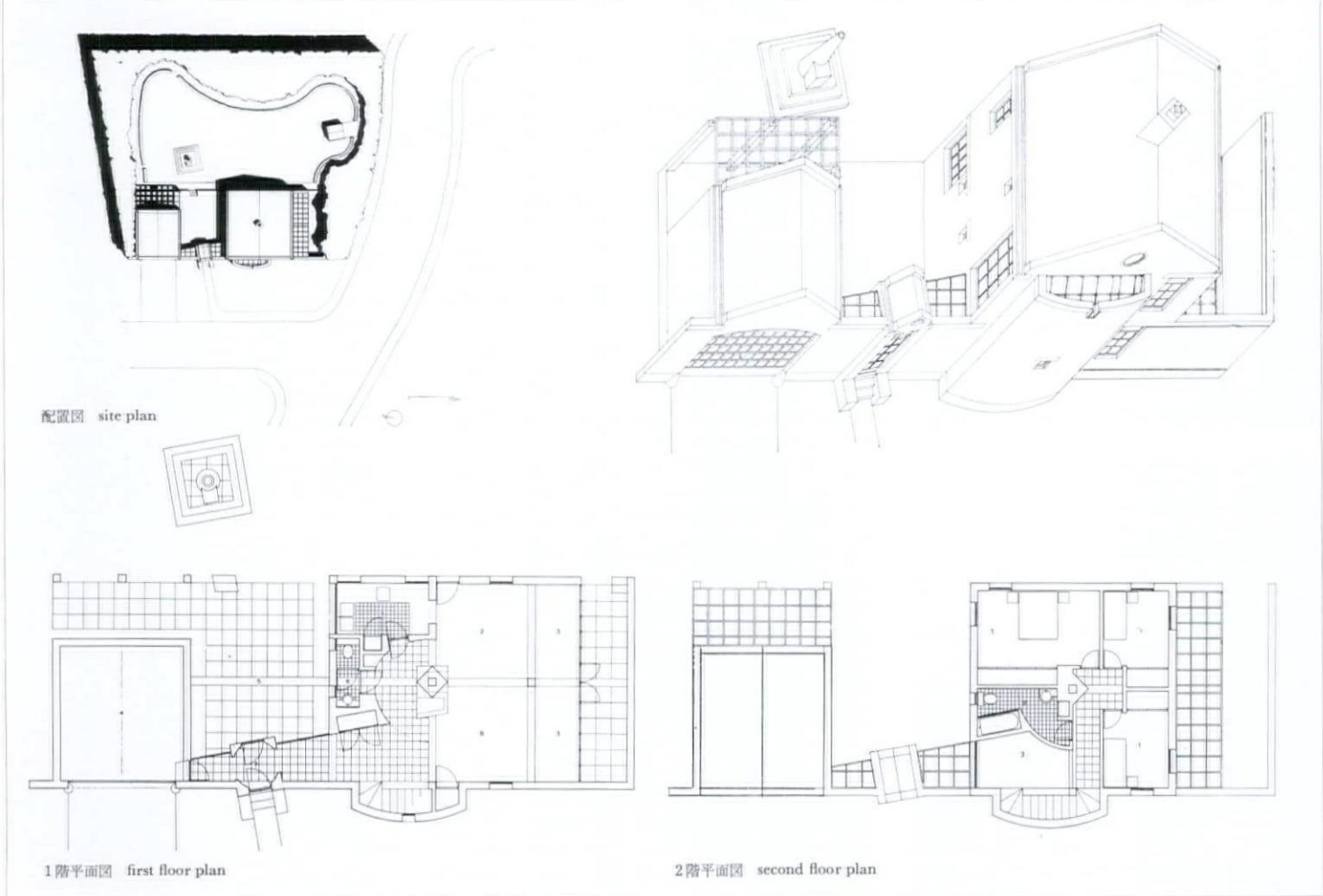


ラルフ・レルナー：1949年ニューヨークに生まれる．
クーパー・ユニオンでBA，ハーバード大学でMAを修める．
リチャード・マイヤー，ウルリッヒ・フランツェン，ルービン／スミス－ミラーなどの事務所で働いた経験を持つ．　1975年よりヴァージニア大学で教えている．

House for the Eighties, *1980*

80年代のための住宅試案．　80年代の住宅は，もしエネルギー危機がないならば，資源節約などの考慮のないテクノロジカルなものになるだろうが，その方向が，無理となれば，自然にエロジカルな住宅となるだろう．　だからと言って広い田園の中に住宅を配するという理想的な光景を考えるのも現実的ではない．
私たちは先ず省エネルギーを提案する．　分厚いレンガ壁，断熱材をはった屋根，小さな窓，太陽熱コレクター，固形燃料利用の暖炉などなど．　また80年代の住宅とは，伝統的かつ実際的な価値を備えていなくてはならないと思う．　堅固な壁，家全体がそれを中心に展開していくような暖炉，家と車庫の間を通り抜ける通路，住宅と庭との統合，南面する温室，庭園を囲う壁，などなど．　すなわち〈英国風住宅〉こそ〈80年代の住宅〉にふさわしいのだ．　私たちがここで参考としたのは，いわゆる門番小屋である．　というのも門番小屋は，街路とのつながりを非常に適切に表現しているし，また，公と私の空間の古典的な媒介者だからである．
庭はとても狭いので，木や生垣や小道で囲われた玉突き台のようになめらかな芝生とした．　この庭にはふたつの重要なオブジェが置かれている．　第一はバーベキュー台で，これは室内の暖炉同様，屋外空間の中心となる．　第二は，休息と庭の小道に沿っての瞑想を象徴するものとして考えられた露台である．
庭と家との関係を端的に示しているのは，入口のあずまやの部分であろう．　それは，室内と屋外の両空間への前庭となっている．　入口の正面は少しはすになっているが，それは扉をあけた時，より強調される．
建物自体は，伝統的なイギリス住宅，イギリス人家庭，そして家族のための城といったものをイメージしている．

The House for the Eighties should have traditional and substantive values : solid walls, a central fireplace around which the house revolves, a through passage between house and garage suggesting length, integration of the house and garden, a south facing conservatory, a garden wall, an enclosure of trees, in other words the English house ought to be the House for the eighties.　One reference is the gate house which implies several ideas not to be found in the archetypal suburban house. The suburban house built along a road is designed as if the road does not exist with all of the unfortunate juxtapositions such an attitude entails.　The gate house, on the contrary, directly addresses its adjacency to the road.　It is a classic mediator between public and private space, suggesting bigness with economy.　(This project with Richard Reid, Architect)



配置図　site plan

1階平面図　first floor plan

2階平面図　second floor plan

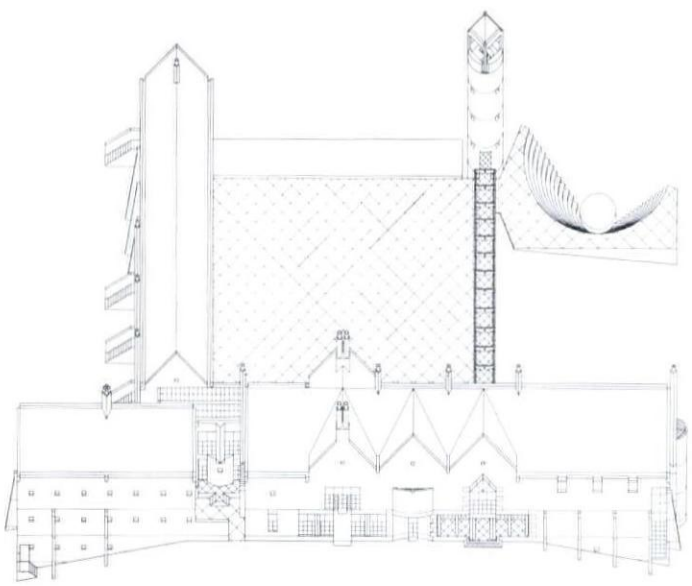
Artist and Writers Housing, *Rye, England　1980*

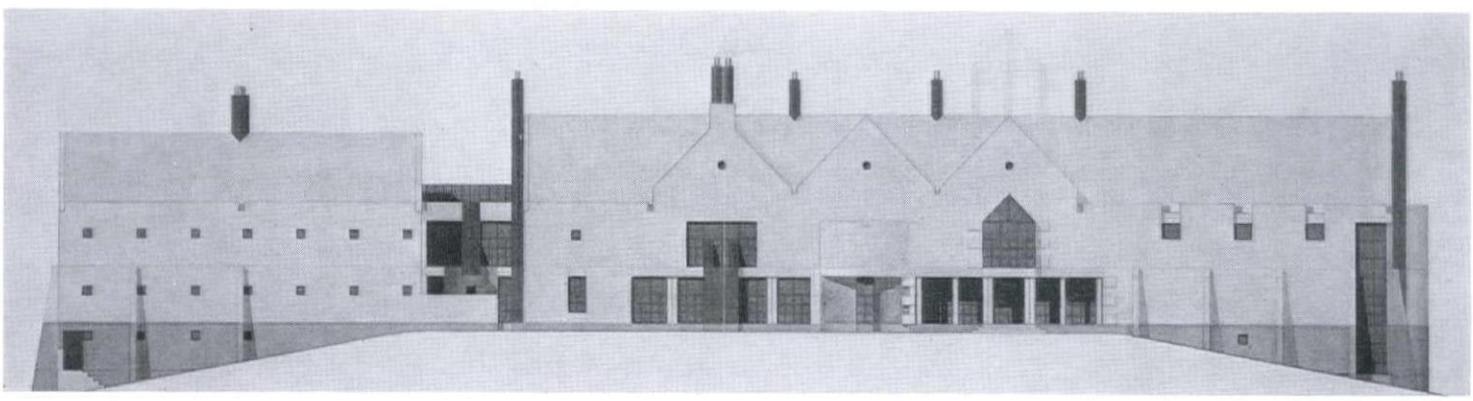


イギリスのライ地区の形式的な構造についての調査を終了後，イギリスの海岸沿いのこの一風変わった町における新しいハウジング・タイプの設計に着手した．私たちはこれを，ライ地区におけるネオ・バナキュラー式再建に対する批判として，また近代的な住宅計画のための一貫した建築的ボキャブラリーを保つ試みとして提案したい．　私たちはここで，すでに町の構成要素のひとつとして十分なじんでいる，いろいろな〈パーツ〉を出発点とした．　そして，ふつうの街並みに見られるいろいろなエレメントや関係性のつけ足しや除去を行なった．　この敷地は，湿地をこえてイギリス海峡に向かうすばらしい眺めに恵まれていることから，建物のオリエンテーションは西向きになっている．（This project with Richard Reid）

Villa Vasone　*1981*

アルゼンチンに〈英国式〉住宅を建てたいという施主のための大住宅の計画．　この住宅は荘重であることもに可愛らしくもしたかった．　そこで私たちが参照したのはエドウィン・ラッチェンスである．　なかでも1899年のホームワース邸から強い影響を受けた．また他の多くの人，多くの作品からもインスピレーションを受けた．　例えばノーマン・ショー，ラスキン，クローバリーホールの塔，ローマ時代のヴィラ，ヴォアジー，フィリップ・ウェッブ，等々である．　その結果，大きな中庭をもった雄大な平面，折衷的でありながらあくまで〈英国〉的な形態，を得ることができた．（This project with Richard Reid）





Duany/Plater-Zyberk



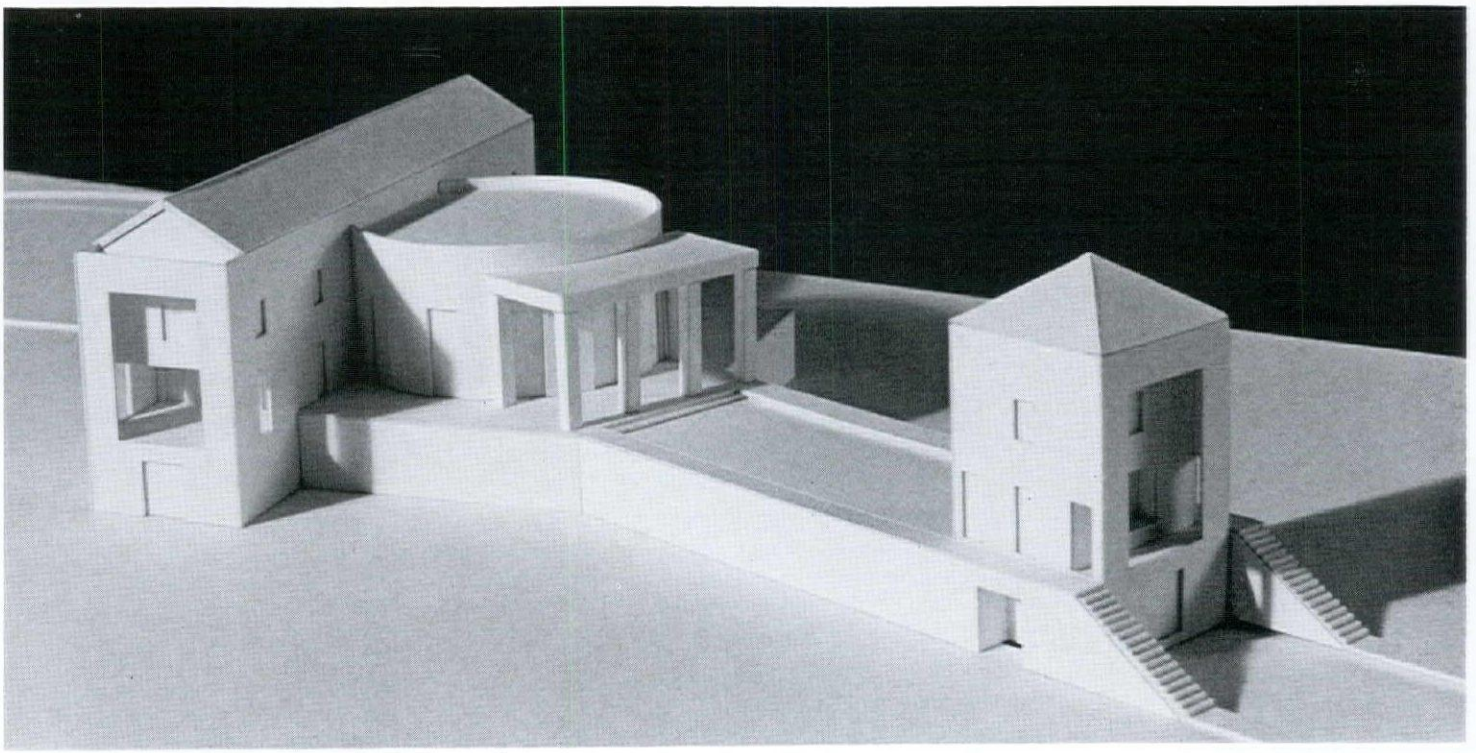
アンドレ・デュアニー：1949年生まれ．　1971年プリンストン大学を卒業，1974年イェール大学で修士号を取得する．　1974年から1979年までマイアミ大学の助教授を務める．　1976年アーキテクトニカの創設に加わり，以後，1980年までパートナーを務める．

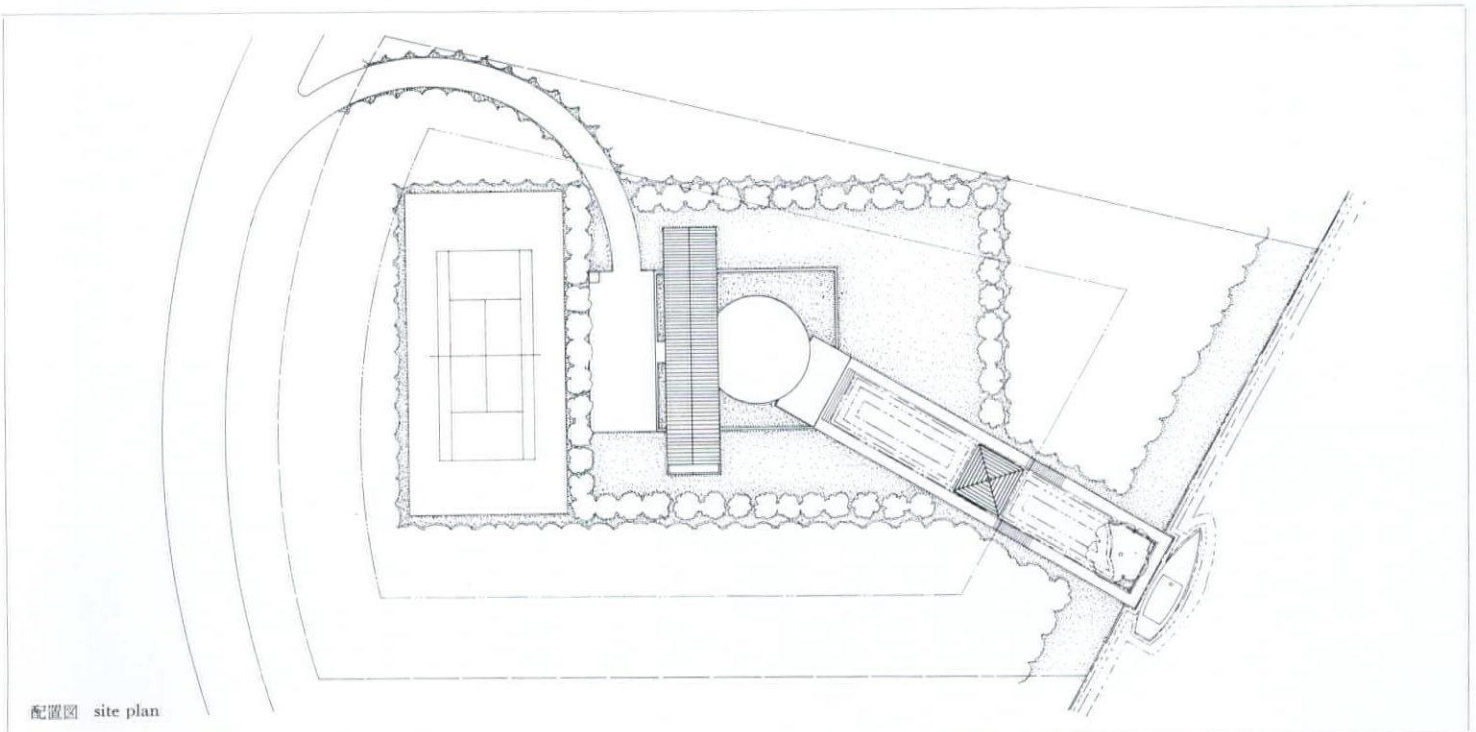
エリザベス・プラッター＝ジバーク：1950年生まれ．　1972年プリンストン大学を卒業，1974年イェール大学で修士号を取得する．　1979年から1981年までマイアミ大学の助教授を務める．1976年アーキテクトニカの創設に加わり，以後，1980年までパートナーを務める．

House for Mr. Richard O'Connell, *Coral Gables, Fla.*

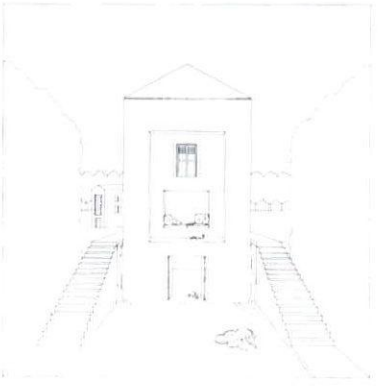
この住宅は，いろいろな建築様式を屈折した軸に沿って配置したものである．　それぞれの建築様式は，お互いの並置がかなり強烈な印象を与えるにもかかわらずエレメントとしての本来の姿をそのまま保っている．こういった構成のしかたは，細長くかつボリュームをもたせるという古典主義の伝統をくんだものである．

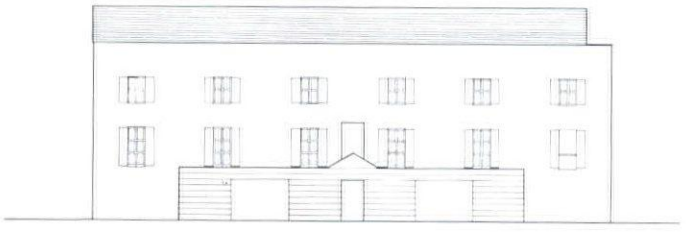
This house is conceived as a series of architectural types collected along an inflected axis. Each of the architectural types maintains its elemental integrity despite the intensity of their juxtaposition. This compositional strategy participates in the tradition of stripped volumetric classicism.



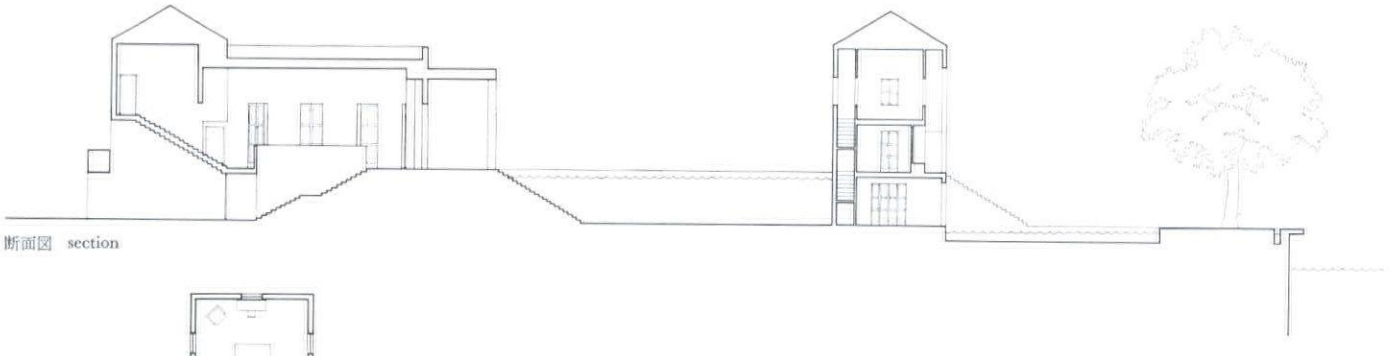


配置図　site plan

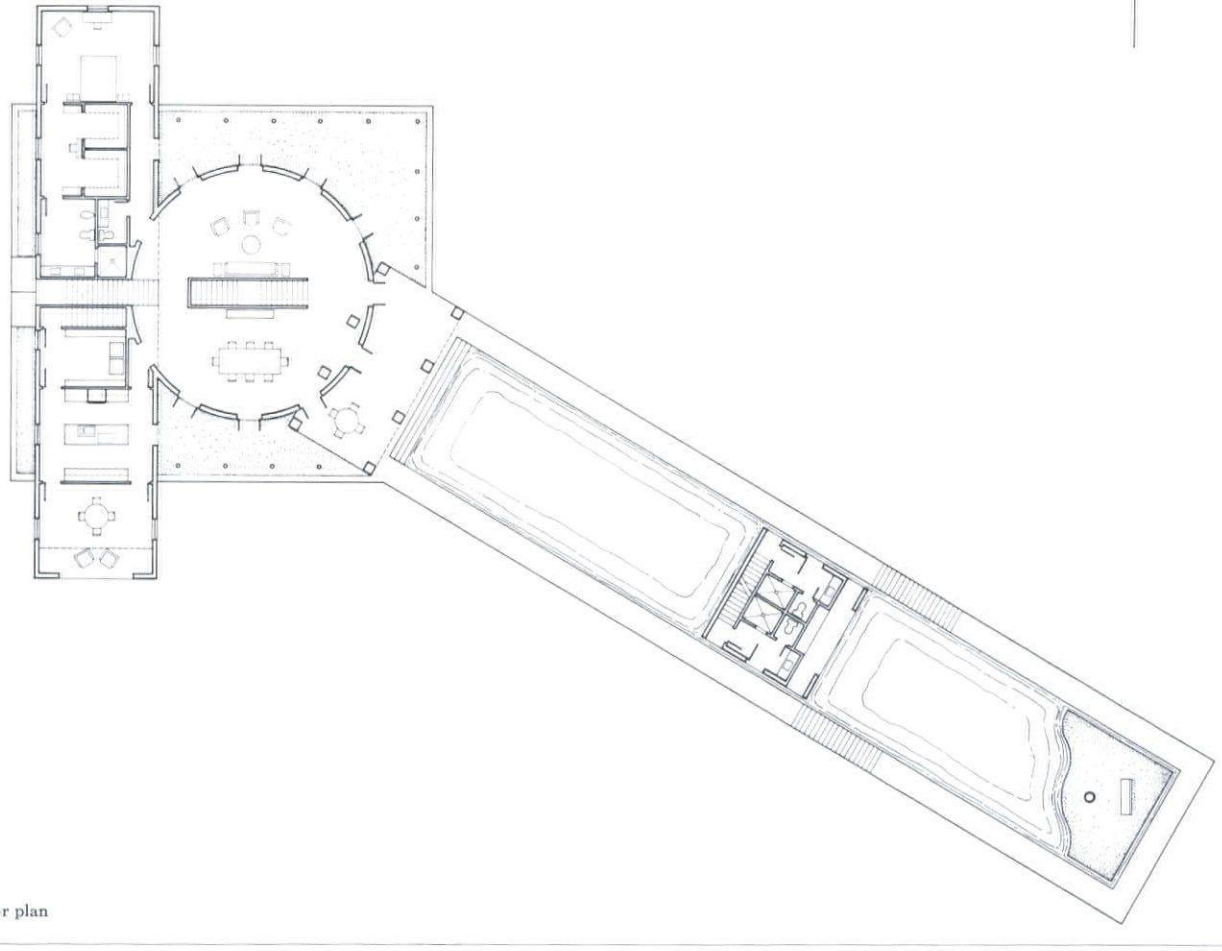




正面立面図　front elevation



断面図　section



1階平面図　first floor plan

Randall Korman

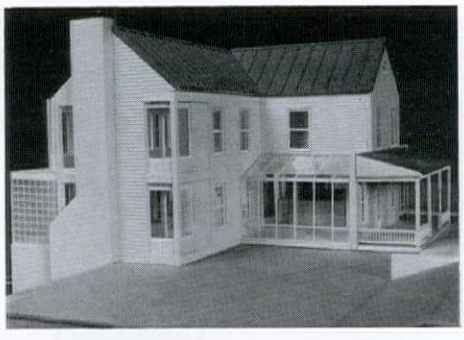


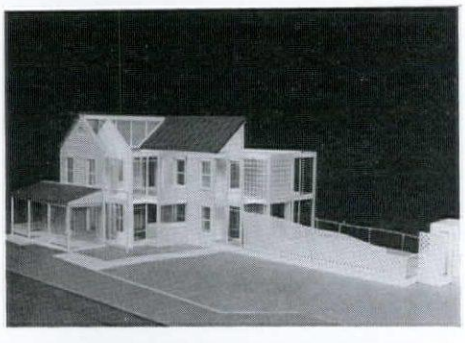
ランダル・コルマン：1944年ニューヨーク生まれ．
クーパー・ユニオン，IAUS，ハーバード大学で建築を学ぶ．
ピッツバーグのカーネギー・メロン大学で教えたことがある．
現在はシラキュース大学で教鞭をとる．

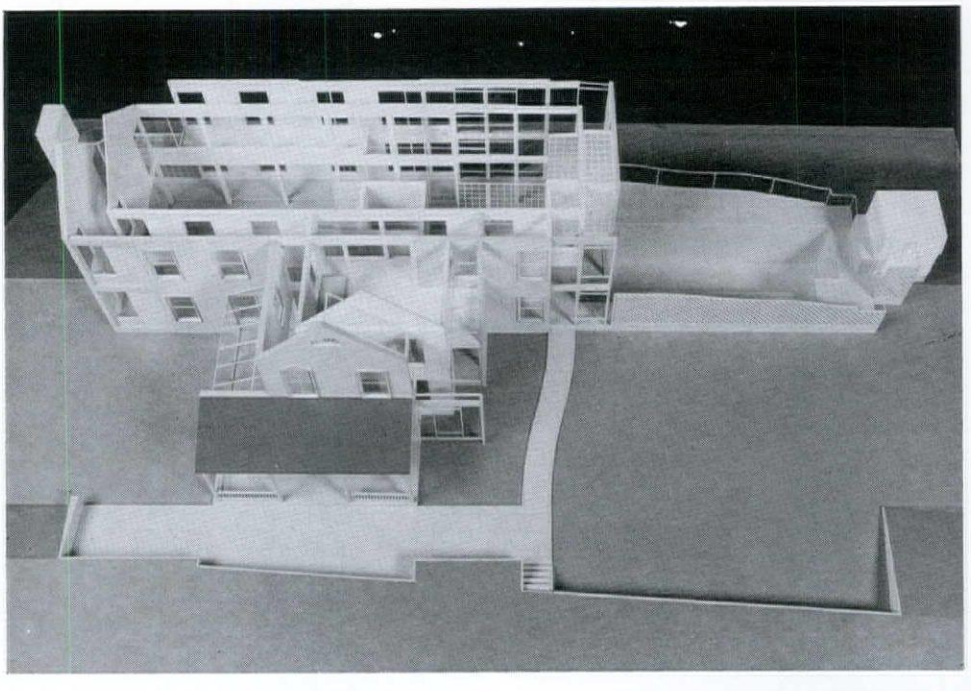
Voneckartsburg House *Penn. 1978*

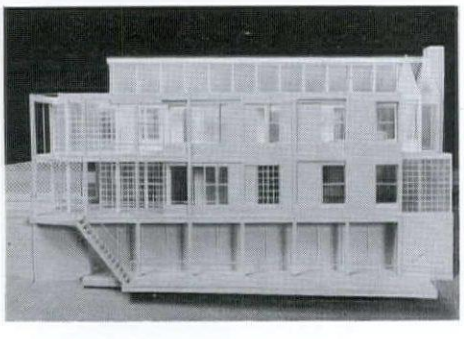
これは4人家族のためのセカンド・ハウスである．
敷地はペンシルバニア西部の比較的樹木の多い6エーカーの土地である．
施主は心理学者で，彼は近代的な生活というものに対して，ダイナミックかつ弁証法的な一種独特な考え方を抱いている．　従って私はこのプロジェクトにおいて，一見対比的なふたつの建築的様式を並置した環境を提案した．　ひとつは，センスティックな意味を強く有した馴染みやすいもので，もうひとつはセマンティックな意味を持たない異質な空間である．　そしてこれらふたつの建物の間に，第3の概念的かつ物理的に中立的な建物を，形態的な意味でもまた象徴的なレベルにおいても，両極端にあるふたつの空間に必要な知覚的つながりをもたせ，両者を調停するよう働くものとして設けた．
設計はまず，窓，床板，柱といったもので表わされる幾何学的な関係性を有する中立的な構造を考案することからスタートした．　これはグリッドにのった3次元のマトリクスで表現され，他の構造は常にこれを参照することになる．　こうすることによって，構造は，明確な位置付けをされたエッジや面によってその本質的な表現を与えられた，囲い込まれたシェルとして読みとれる．　浴室のコア，あるいはつくりつけの家具といった2次的なシステムは，この第1の囲われた空間の間におかれた付帯的なものとして扱われている．その結果として得られたものは，入れ子状に配された3つの概念的に独立した住宅である．　それぞれの住宅の空間的な機能的要求を満たす上では相互に依存しながらも，物理的になお分離している．

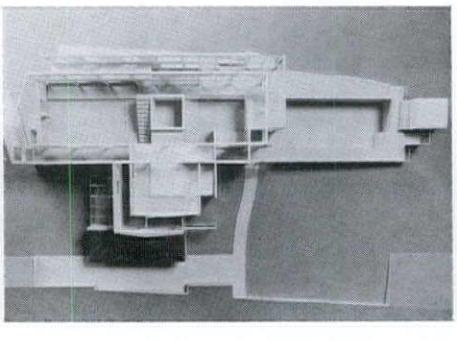
The process began by the proposition of the neutral structure which contains a specific set of geometric and proportional relationships expressed through such devices as windows, floor thicknesses and a regular structural bay. This was then placed within a grided, three-dimensional matrix and became the primary referential and mediating context to which the other structures relate. In this way each structure can be read separately as an enclosing shell with its primary expression given by a set of clearly defined edges and surfaces. A secondary system of elements such as closets, bathroom cores, and built-in furniture appears as a set of notational devices in the spaces between the primary enclosures. The result is actually three conceptually separate houses nested in a diagonal relationship, one to another, each physically discrete in suppcrt cf the formal objectives of the whole, while remaining inter-dependent in satisfying the space functional requirements of the house.

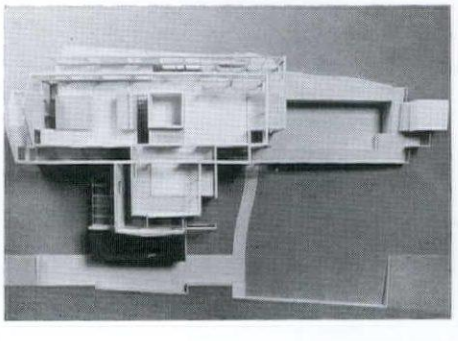


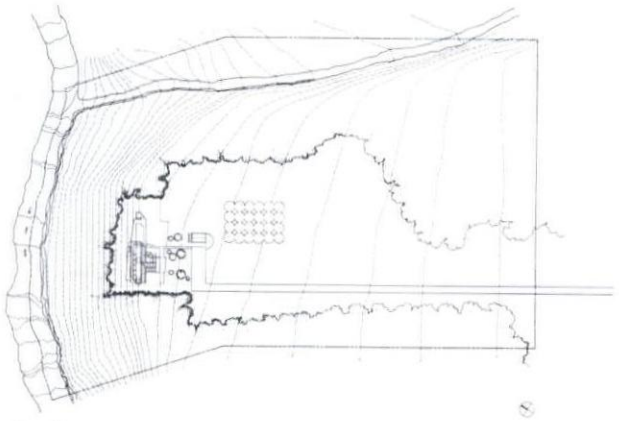




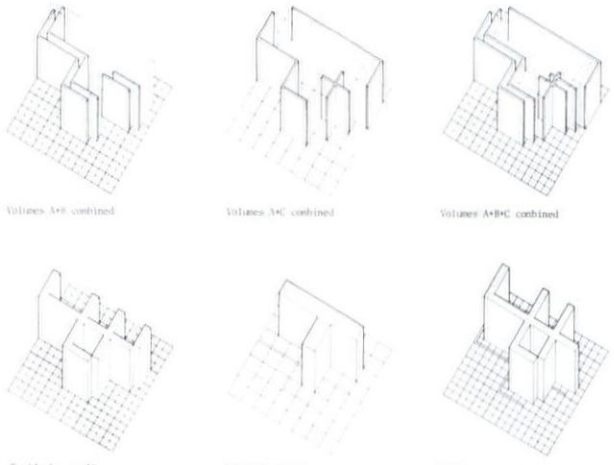


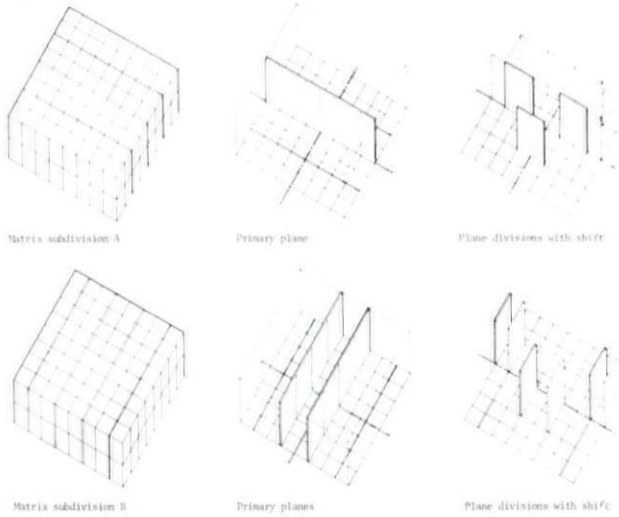


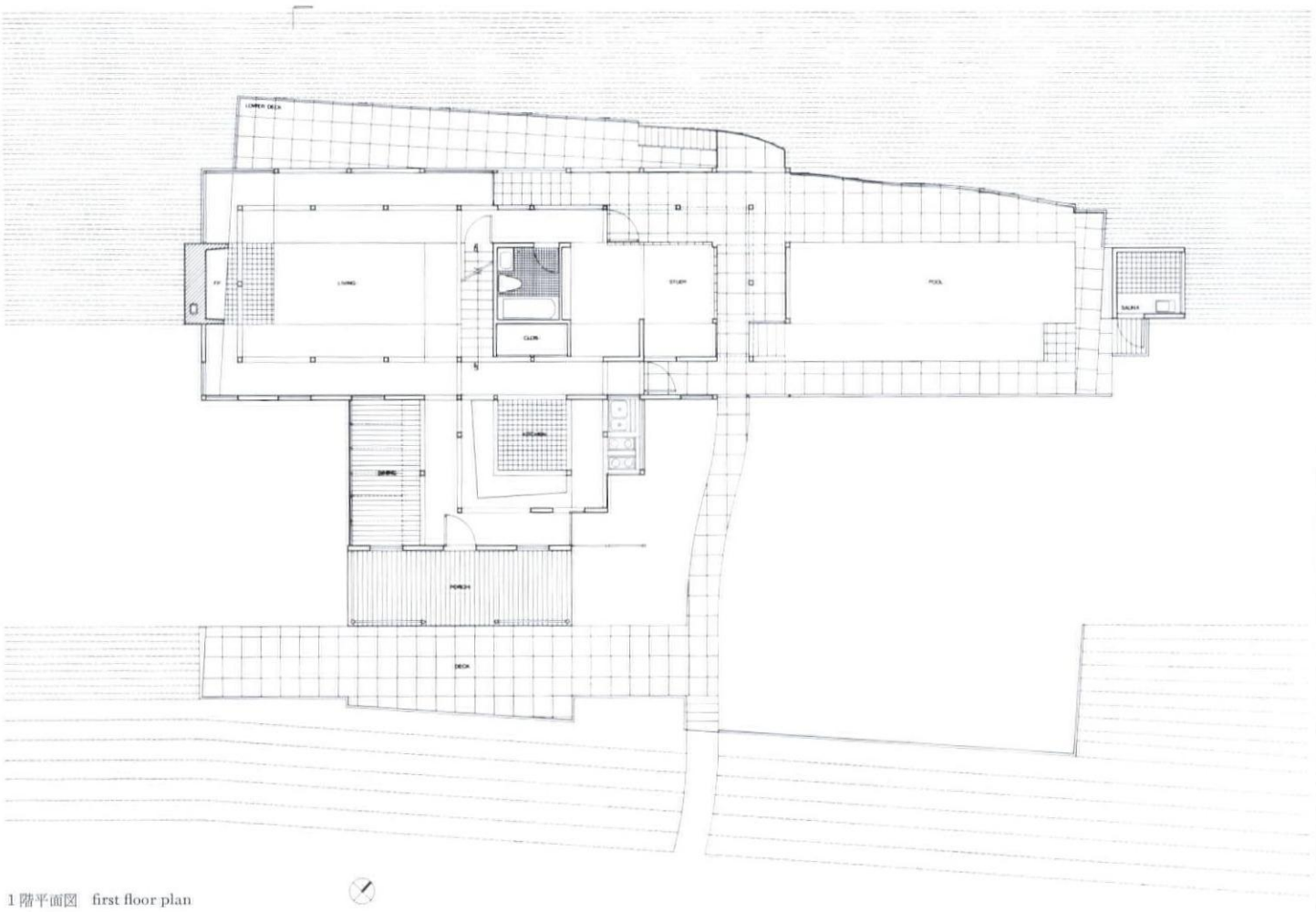




配置図　site plan







1階平面図　first floor plan

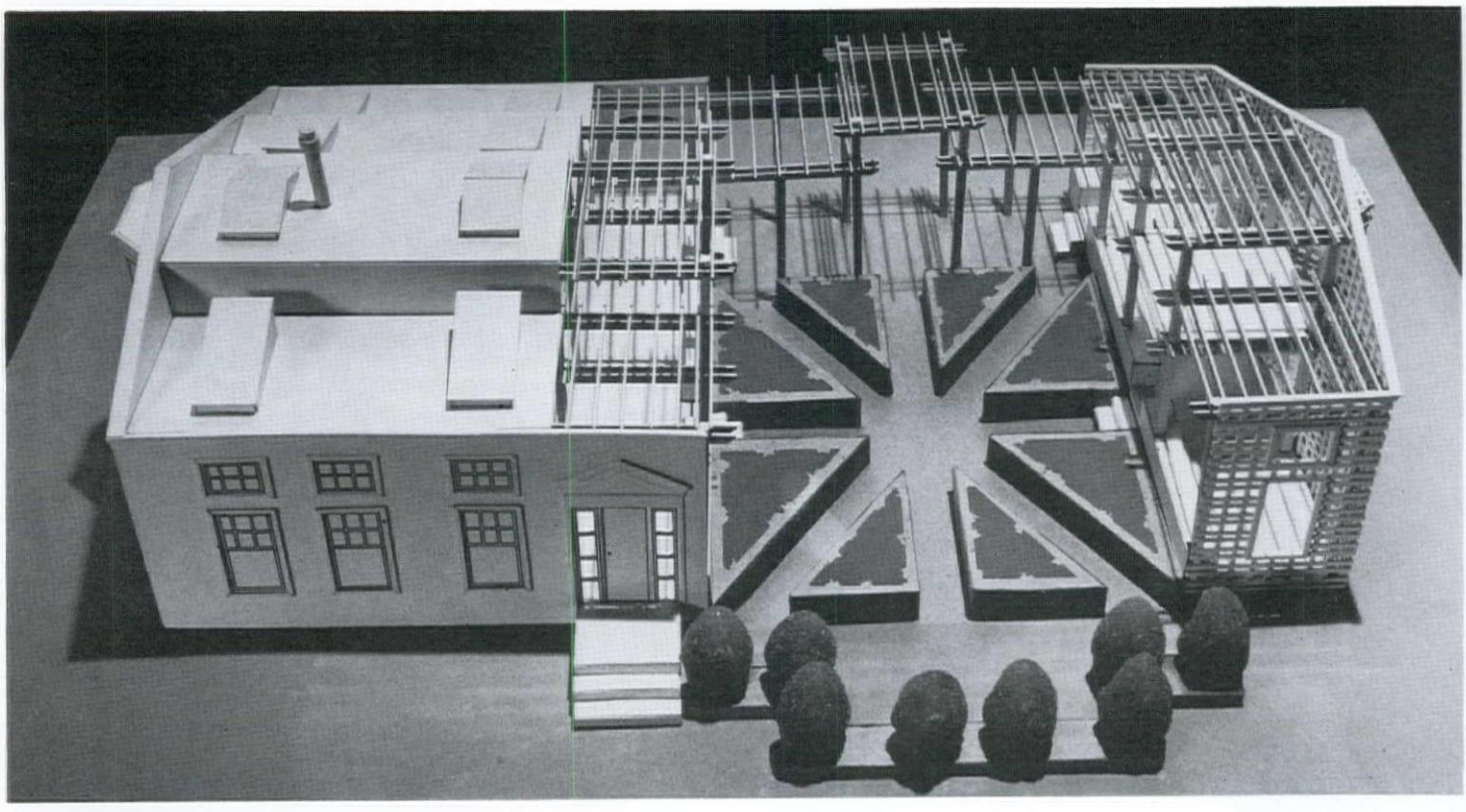
Peter Wilson



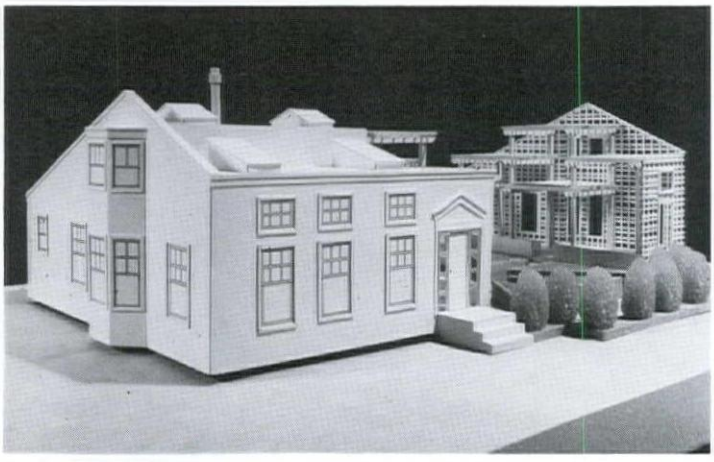
ピーター・ウィルソン：1941年ニュージーランドに生まれる．
UCAL で BA, UC バークレーで MA を得る．　その後1970年より7年間 Hardy Holzman Pfeiffer 事務所にて働く．
1977年独立して自らの事務所をニューヨークに構える．

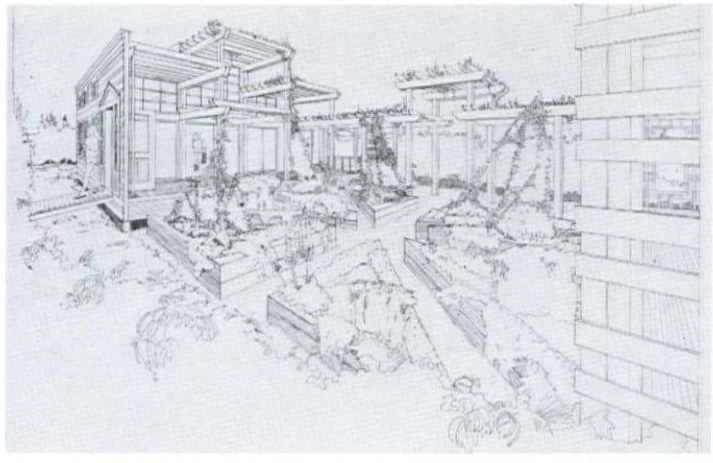
Peitzke House

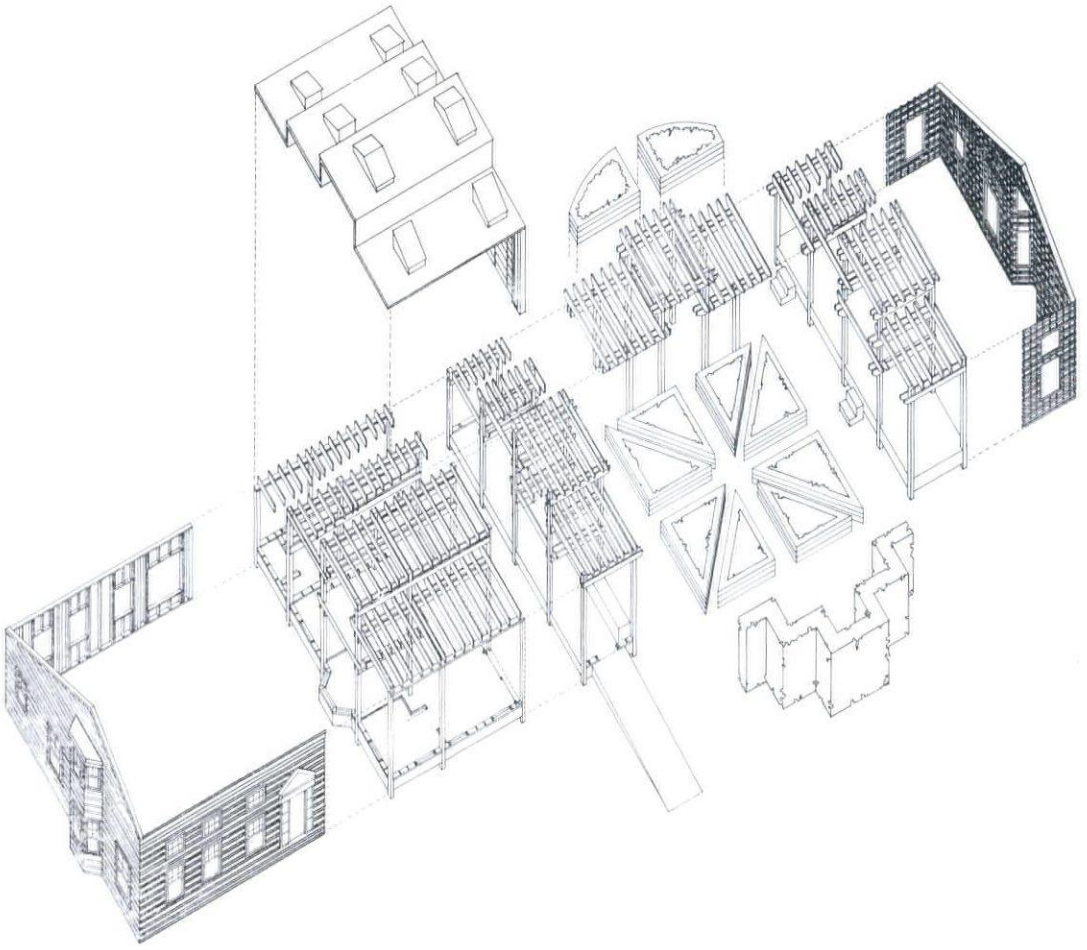
敷地は，ファイア・アイランドの分譲地の角にあたる長辺30m，短辺18mの一区画．　平坦な砂地であり，特定の眺望も景観上の目だった特徴もない．
夫婦二人のための庭園付別荘であり，極めて小規模な予算の中で建てることが望まれた．　夏季に様々な来客を収容でき，さらにそれ以外の季節には作家の仕事場としても使用される．
この建物は〈よき隣人〉として目に映るよう，建物の外の敷地は移植された海岸植物の自然な配置のままにおかれる．　さらに周囲の壁の伝統的な形，非対称な頂点をもつ側面，まちまちな間隔の柿板と木ずり，6分割された窓や張出窓など，外観はみたところ月並みなものである．
住宅と庭園の複合は人々を包む多様な空間と変化のある景観を生む．　住宅とパビリオンの前につけられたふたつのパーゴラには藤やクレマチス，つるばらなどがまつわり，眩しい光をやわらげるとともに庭園の景観を切りとるだろう．　パビリオンは戸外での睡眠，食事，憩いを包む場所であるから，人々はたびたび庭園を通ることが見込まれる．
住宅区域における5.5mの高さ制限の中でふたつの上部デッキが設けられる．　パビリオン中央部のオーブン・デッキからは日没の光景が，住宅の張出窓の中に高く位置する書斎から北東の景観が得られるであろう．
この住宅の計画は2組の矛盾を調停し，ひとつにまとめ上げている．　ひとつは，細分された敷地に適するよう縮小された庭園建築という野心的計画であり，もうひとつは2つの異なる建築型式，すなわち，支配的な軸線と対称性をもったイタリア風のアトリウム付庭園住宅と非対称なアメリカ東海岸の海岸住宅の型式の統合なのである．



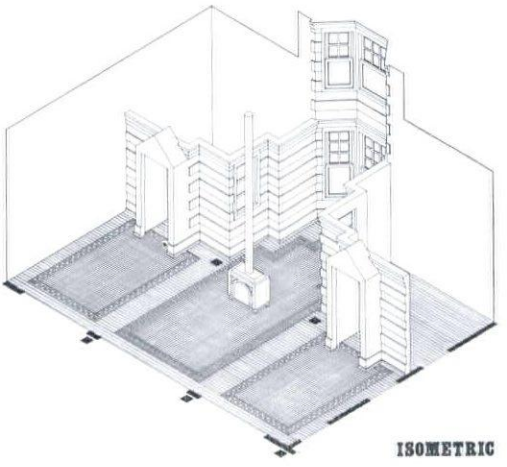
photos = Jane Corbett





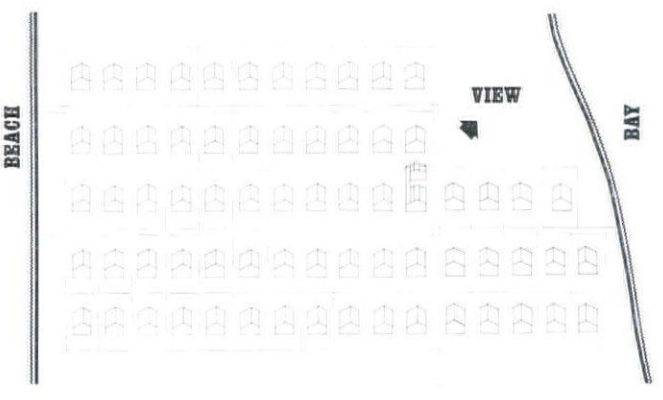






ISOMETRIC





PLOT PLAN N

Lido Beach House *Long Island, New York*

ニューヨーク市から離れること50マイル，ロング・アイランド，リド海岸の住宅地域の中にある，長辺36.5m，短辺24mの道路にはさまれた土地である．平坦な砂地だが隣接して高さ7.5mの砂丘があり，1階レベルからの海岸の眺望を妨げている．　近くの建物は伝統的なデザインによる控えめな郊外住宅である．

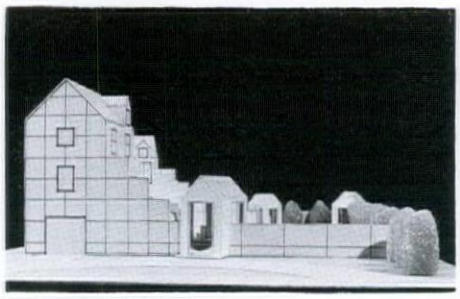
このデザインは，建物の集合，すなわち様々なスケールと機能をもつ切妻屋根の建物の寄せ集めによってひとつの住居をつくっている．　主屋，客用家屋，ふたつの門番小屋，物置小屋といった個々の建物はいずれも細く，背の高い垂直的な形をしている．

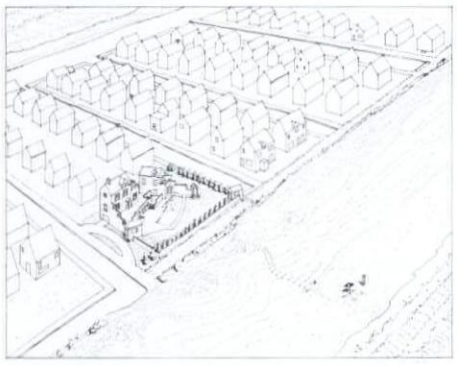
主屋は寝室のある2階レベルから海の眺望を確保するために許されうる最大限の高さに建てられている．

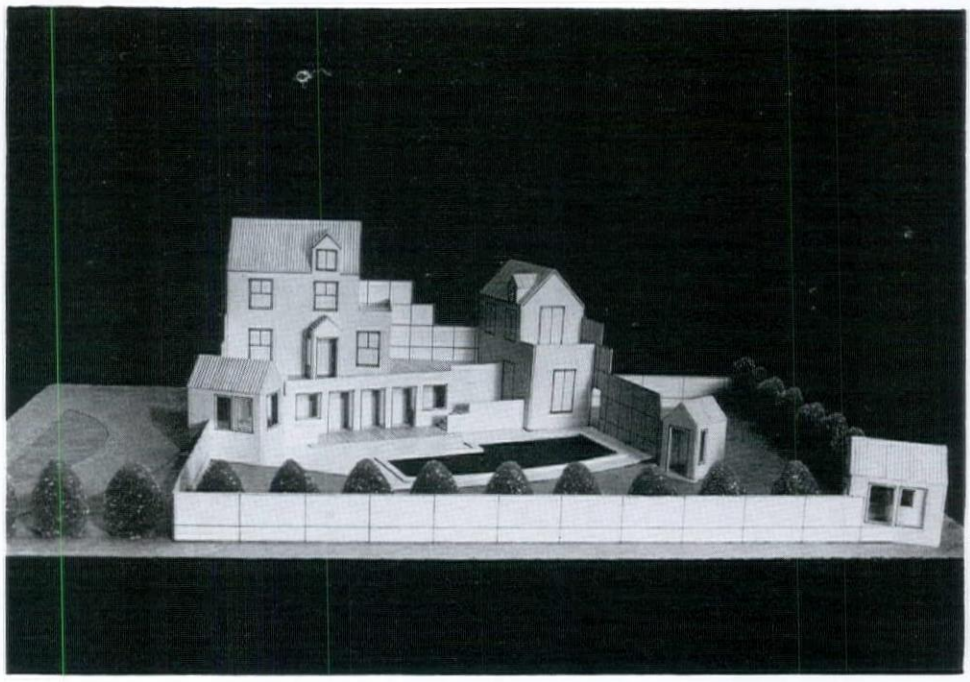
この眺望を得る必要から生じた背の高い外形が客用家屋など小さな建物の外形にも使われた．

単純で容易に建てられる要素からなっていることは地域の建物との調和を意味し，これらの要素はデッキや敷地を囲う壁によって結びつけられる．

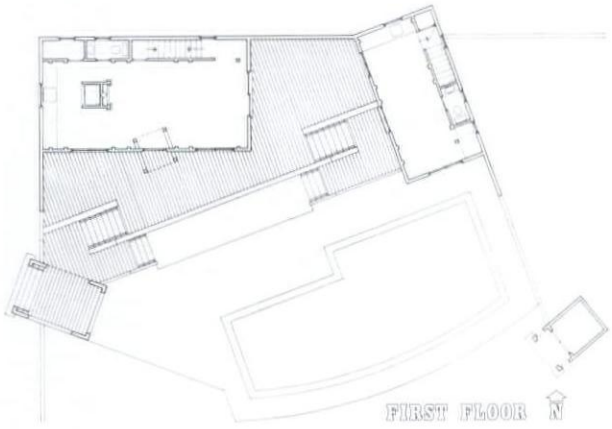
それぞれの建物の内部は単一の空間であり，1階ごとにひとつの部屋をもつ．　住宅全体はそうした大きな単一の空間の連なりを形づくる．　外部空間の形成および内部と外部の関係がデザインにおける第一の関心であり，個々の建物はあたかも外部の〈居間〉の周りに組織された個室となる．

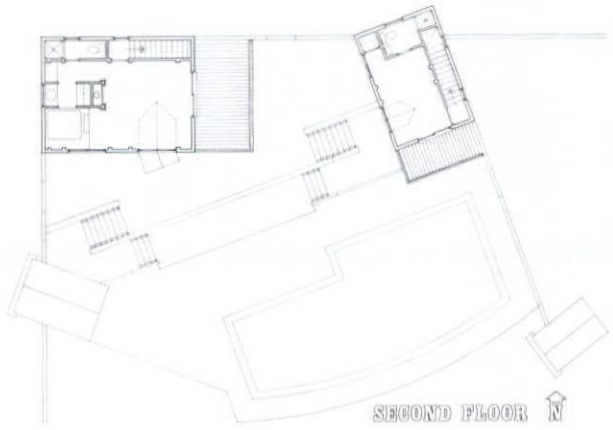


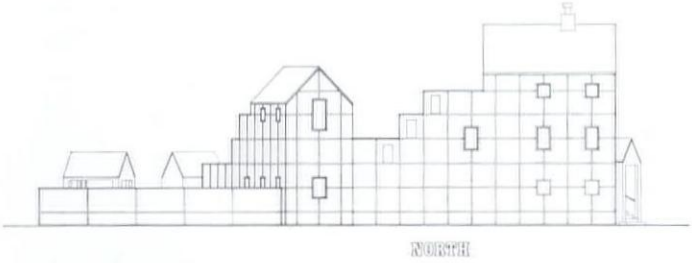


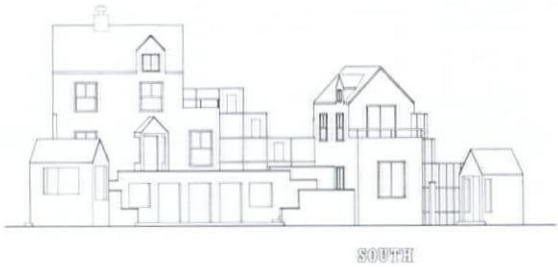


photos = Jane Corbett









Martin / Jones



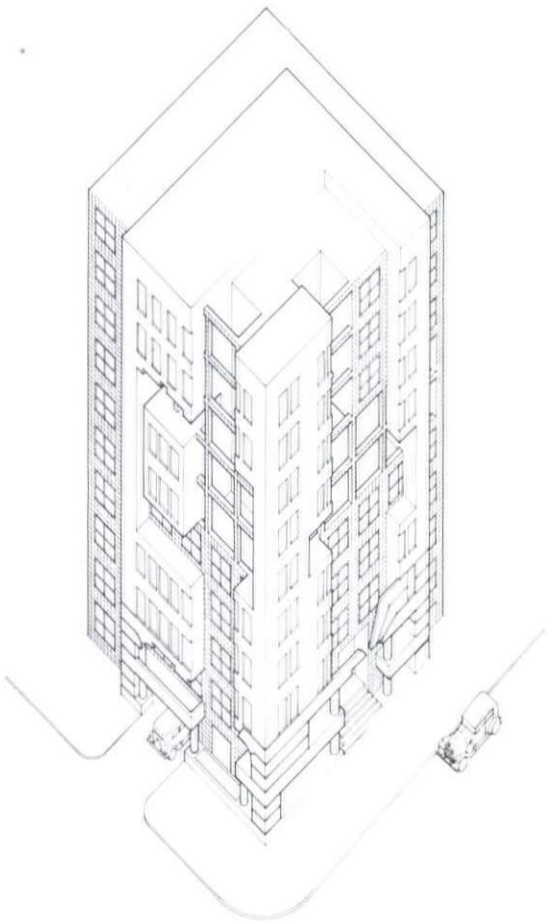


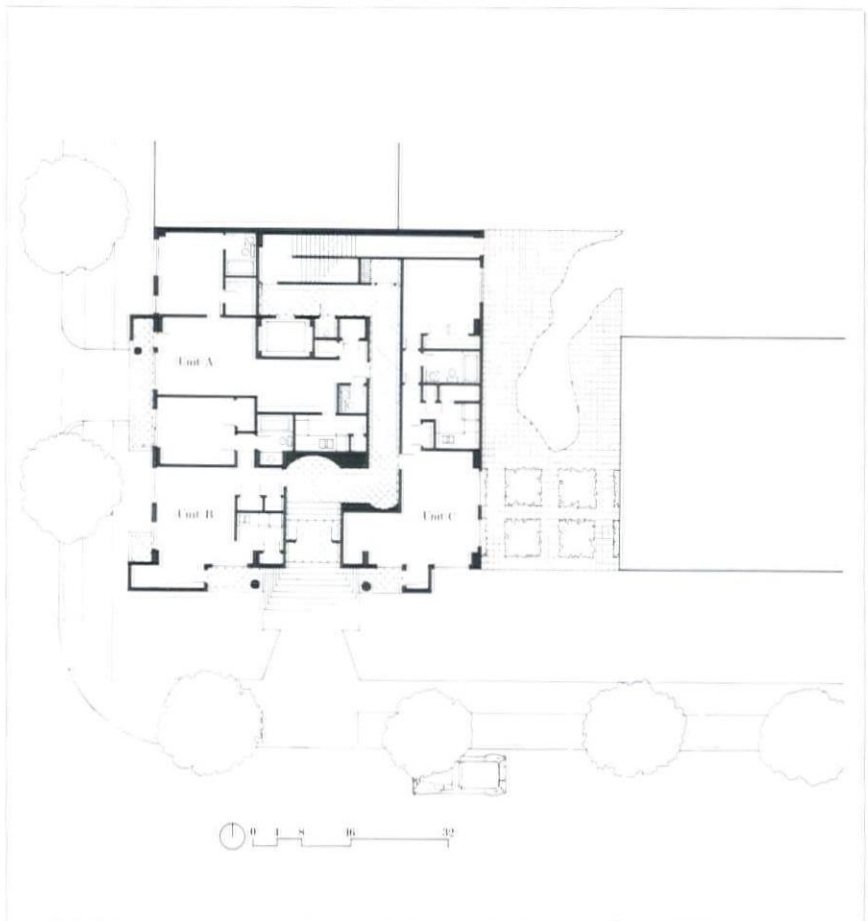
I. Guyman Martin：プリンストン大学で建築・都市計画を学ぶ．　ハートマン・コックスにつとめた後に独立．
David T. Jones：プリンストン大学，ケンブリッジ大学で建築を学ぶ．　ハートマン・コックス，アーサー・コットン・ムーアの事務所を経て独立．　Martinとパートナーシップを組む．

Barclay House Condominium　*Washington, D. C.*

敷地：狭い角地で，両側には9階建てのアパートが接し，似たような建物が建ち並んでいる．　ローカル・ゾーニング規制では，建物の両側に張り出しを設けることはできるが，それを連結させることはできない．張り出し部は，シンプルなグリッド割りをされたレンガ造の建物の前に建つ形式的なファサードとしておかれている．　この形式的なファサードは，それにこめられたニューヨークのネオ・クラシカルなアパート建築への引喩や，オーバースケールな入口部分のモチーフなどと相まって，この建物のコンドミニアムとしての地位を表わしている．　その一方で，後方のシンプルなグリッド割りをほどこされたレンガ造の建物によって，近隣とのつながりが保たれている．　これらのふたつの要素は，外側ファサードがえぐり取られたような形でつながっており，レンガのファサードを通して裏側が延長されてバルコニーとなっている．
構造・材料：コンクリート・フレーム構造で，12インチ角のレンガとスタッコの壁，およびアルミニウム製の窓枠を使用．







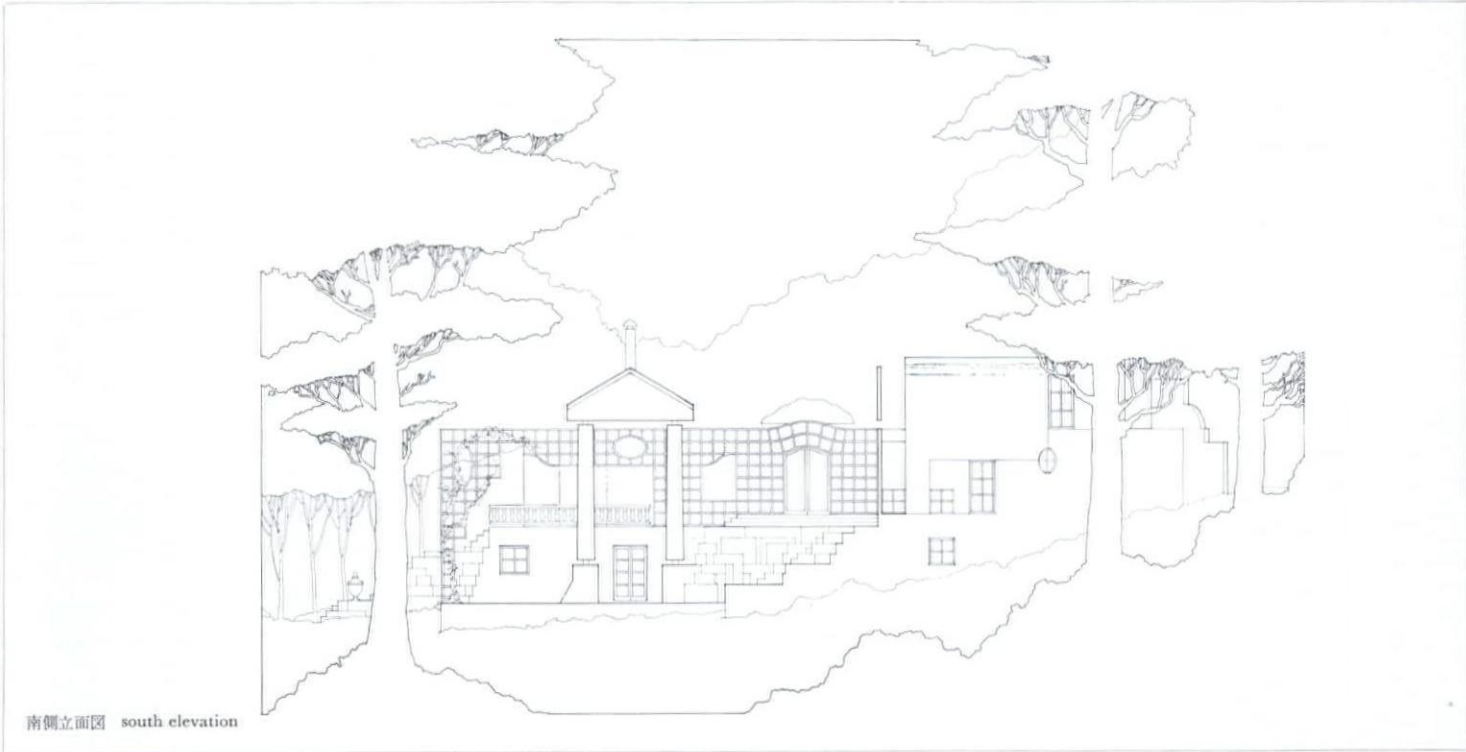
Sigal Residence *Washington, D. C.*

敷地：敷地はポトマック川を見おろす急斜面にある狭い不定形な土地で，敷地上方の細長くなった一端からアクセス路が通じている．

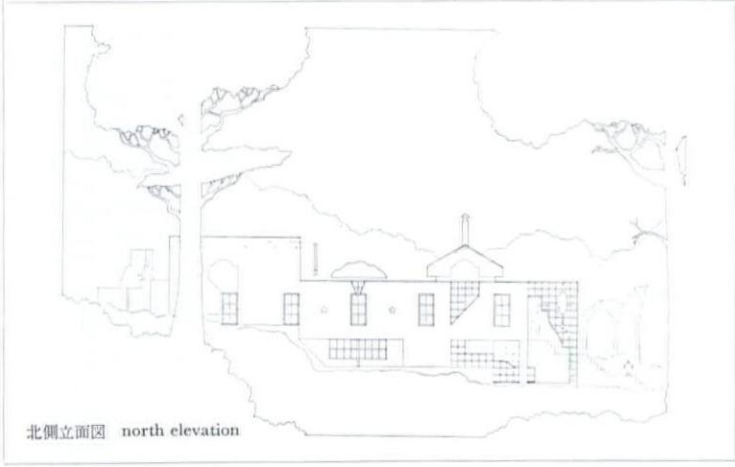
住宅は敷地の細長い入口側にL形に配置されており，各室はテラス状になった庭園に面し，川を見おろすようになっている． 住宅と庭園は，一連の主従の軸によって構成され，関係づけられている． この軸の関係は立面にもとり入れられて，レンガの基部に乗り，一連の格子スクリーンによって連結されたネオ・クラシックなパビリオンとして表わされている． リビングルームの上に大きくかかった破風は，ファミリールーム前の漂ようような格子破風に繰り返され，さらに下の川沿いのモールにあるネオ・クラシックなモニュメントを反映している． レンガ造の基部は庭園まで延長され，ある所では人工的な崖を形づくり，また別の所では形式的な柱礎を表わすなど，人工的なオブジェと自然のランドスケープとの間の分裂を表わしている． こういった並置は，整然とした室内ドームとダイニングルーム上の不定形な雲形，あるいは上部テラスのかしこまった噴水と，そこからプールへ流れおちる自然の滝といった所に繰り返して表現されている．

構造・材料：木枠構造および組積造． リビングスペースを通じて，レンガの床とレンガ壁，スタッコ，木製格子，ウレタンフォーム製のドーム等．

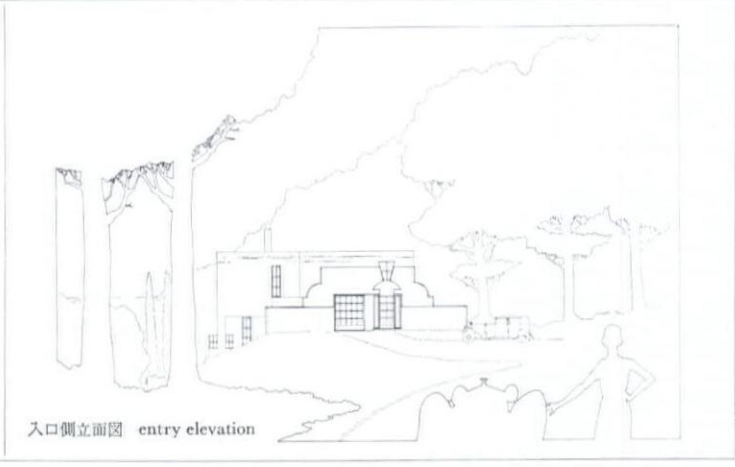
この住宅は，フォーマルなものと，オープンでインフォーマルなプランという相反するものへの施主の希望をうまく解決した点で，十分評価されるべきである．



南側立面図 south elevation



北側立面図 north elevation

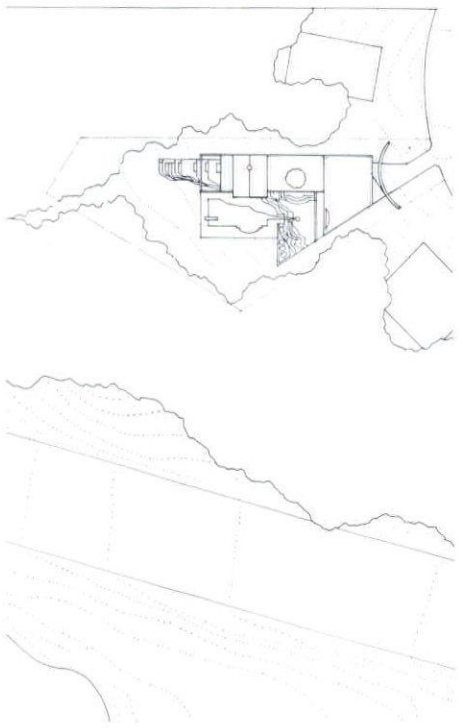


入口側立面図 entry elevation

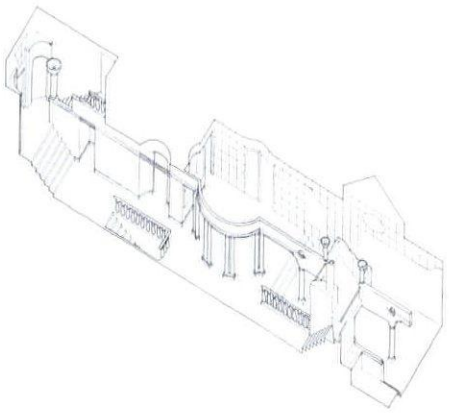
Permanent residence for a family of four.

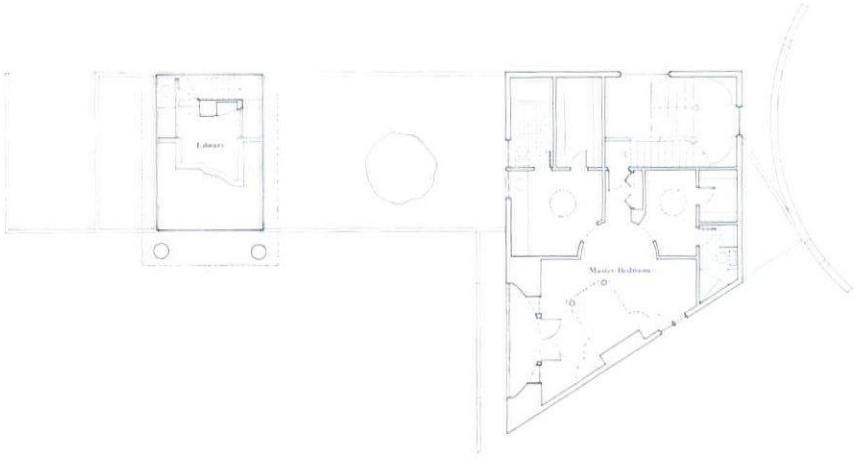
Small, irregularly-shaped lot on a steep hillside overlooking the potmac River. Access is at the high, narrow end of the site.

The house is placed at the narrow entrance end of the site and arranged as an "L" plan with rooms opening onto a terraced garden with views out over the river. The house and garden are organized and related by a series of major and minor axes. These axial relationships are developed in elevation as a set of neo-classic pavilions resting on a brick base and linked by a continuous trellis screen. The dominant pediment over the living room is echoed by the floating trellis pediment in front of the family room and in turn echoes the neo-classic monuments of the mall downriver. The brick base extends into the garden forming an artificial cliff in some places and formal plinth in others, reflecting the dichotomy between man-made object and the natural landscape. This juxtaposition is repeated in the relationships of the regular inner dome to the irregular cloud form over the dining room and the formal fountain on the upper terrace to its natural cascade down to the pool.

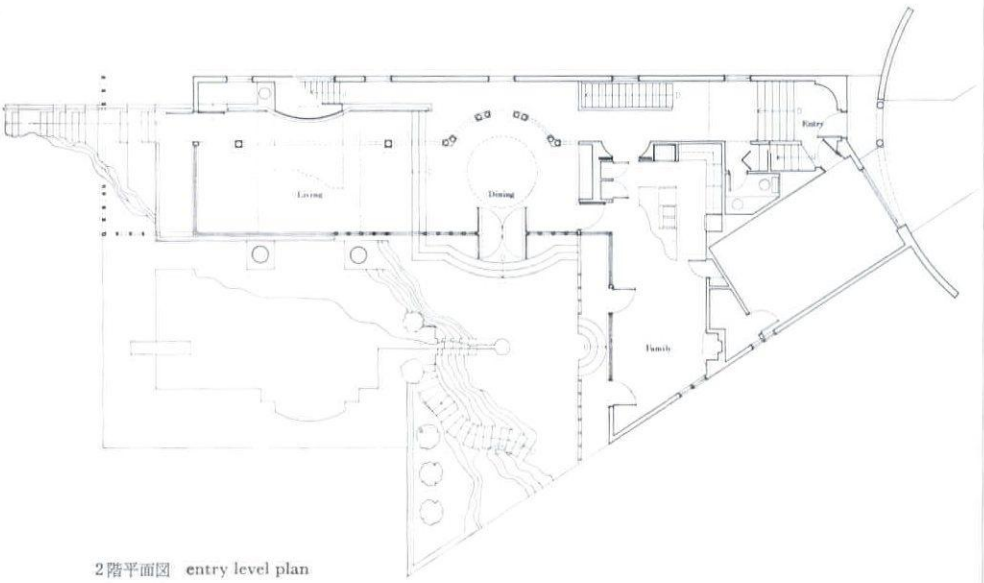


配置図　site plan

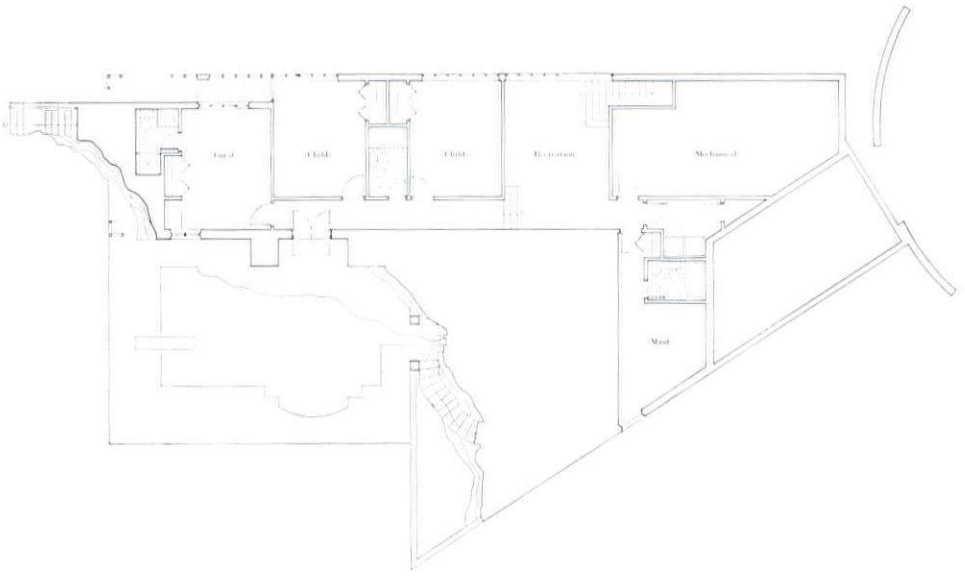




3階平面図　upper level plan



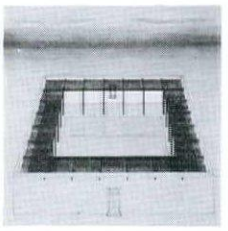
2階平面図　entry level plan



1階平面図　pool level plan

Lauretta Vinciarelli

ローレッタ・ヴィンシアレッリ：ローマ大学で建築と都市計画を学ぶ．　現在はコロンビア大学で教えるとともに，テキサスとニューヨークで設計活動をしている．





The Seven Courtyards

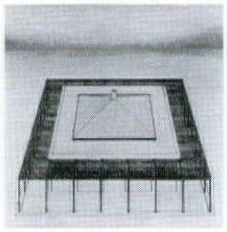
中庭に関する私たちの研究の一部である，これらのドローイングは，プロジェクトとしてすでに完成したものもあれば，まだ提案の域を越えないものもある．

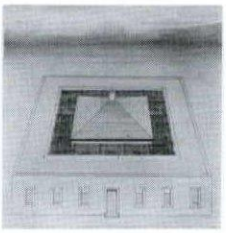
この一連の計画は，テキサス南西部の気温が高く乾燥した，人口の少ない場所を舞台としている．　目的は，この地方の独特のランドスケープにに由来する建築形態をデザインし，実際に生態学的にその土地に適合するかどうかを調べることにあった．

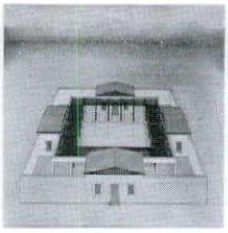
私にはこのテキサス南西部の砂漠は秩序を持った清澄な地に見える．　そこでは絶えることのない青空と厳粛ともいえる季節の変化が現代の我々の良心の基盤をおびやかすような欲望をおこさせるのである．　ここは奥深い深秘が我々のもつ疑念を鎮めてくれる土地であり，それは驚くべきことに，時がたつにつれ理にかなったことのように思えてくるのである．　ここは自然の中に積極的に参加するような感情をひきおこすような土地柄ではない．　砂漠の自然は建築の言説を深いレベルでとらえ，尽きることのない絵画的修辞をもって述べることを要求してくるのである．

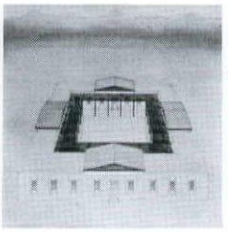
私には，パーゴラや，囲い壁などの要素で構成された中庭の形態は，本来そに求められれる表現を超えて，周囲の環境との関係を確立する可能性を持っていると思われる．　この中庭の形態は，自然の秩序と平衡を保つと同時に自然を建築形態の中にとり込んでしまうような，秩序と基準の基本的な核をヒューマンなスケールで実現する．　水，空，そしてつる草は建築の要素となる．　つまり，それらは，ほんのちょっとした操作で自然の世界から建築の世界へと移しかえられるのである．　パーゴラで枠どられた空が天井になり，方形の池や水路を流れる水は床の舗装となり，そしてパーゴラの上に規則正しく配されたつる草が屋根となるのである．

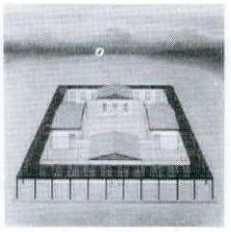
この合理的な秩序と自然の要素を持った建築こそ，人間的なものと，自然なものとの出会いの場を提供してくれるのである．

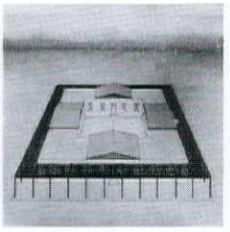












Richard Oliver

リチャード・オリバー(右)：1942年カリフォルニアに生まれる．カリフォルニア大学バークレー校を経て，1967年ペンシルヴァニア大学でMAを得る．　その後，教師として活動しながら，建築評論を手がける．　近年クーパー・ヒューイット美術館の学芸員として，建築のドローイング展などを組織している．

現在はその職を辞し Henry Meltzer (左)と一緒に事務所を開設．　デザイン面においては，カリフォルニア時代のC. ムーアから受けた影響が非常に大きいといえる．　「私たちは一般解ではなくて常に特殊解を求める．　場所の特性や人々の要求を第一に考えるのだ．　私たちが考慮に入れるのは空間の中を動く人びとの記憶であり，眼の働きであり，また表面の色彩，肌面，材料，スケールであり，光の戯れである．



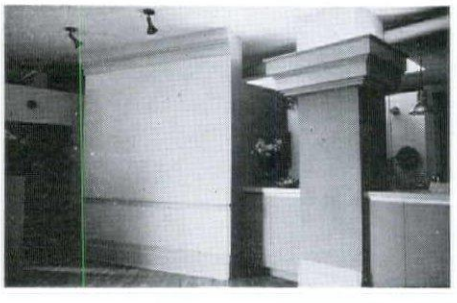


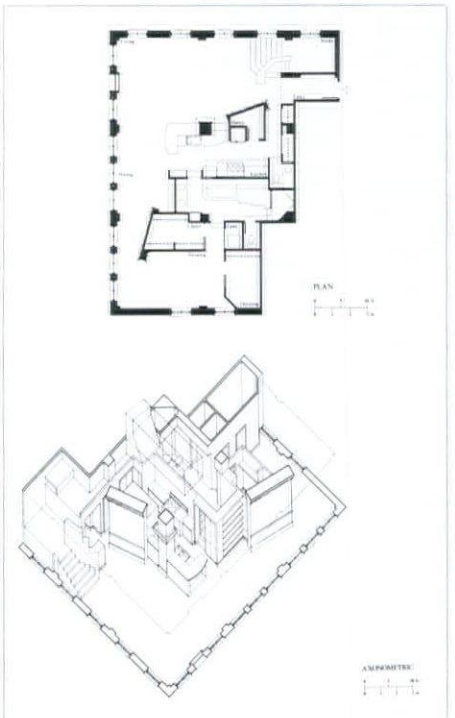
Pittman Loft Renovation　*New York, N. Y.*

この作品では，それぞれ伝統的古典的なくり形のついた2枚の大きな斜めの壁が，メインとなる空間に個性を与え，同時にロフト全体の公私の境界を形づくっている．　入口上部の小さな書斎と寝室用のアルコーブは来客用に利用される．　またこれによって，ハリウッドの映画のセットを想起させるようなドラマチックな階段を設けることが可能となった．

ロフト全体のスペースはそれほど大きいものではない．そのため全般的なアプローチのしかたとして，ひとつの大きな中心スペースを設けるよりは，新しいエレメントのひとつひとつに彫刻的な存在感を持たせ，一連の層状の空間をつくり出すよう全体を構成するという方向がとられた．　この層状になった空間の性質を強調するために，色彩計画において，白，クリーム，グレー，黄，ピンクといった色を含む柔らかなグレー調を帯びたパステル風の色合いが採択された．　これは，このアパートを，キュービストの絵画がそのまま大きくなって実現したような印象を与えたいという意図によるものである．





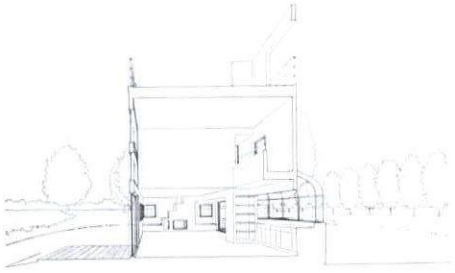


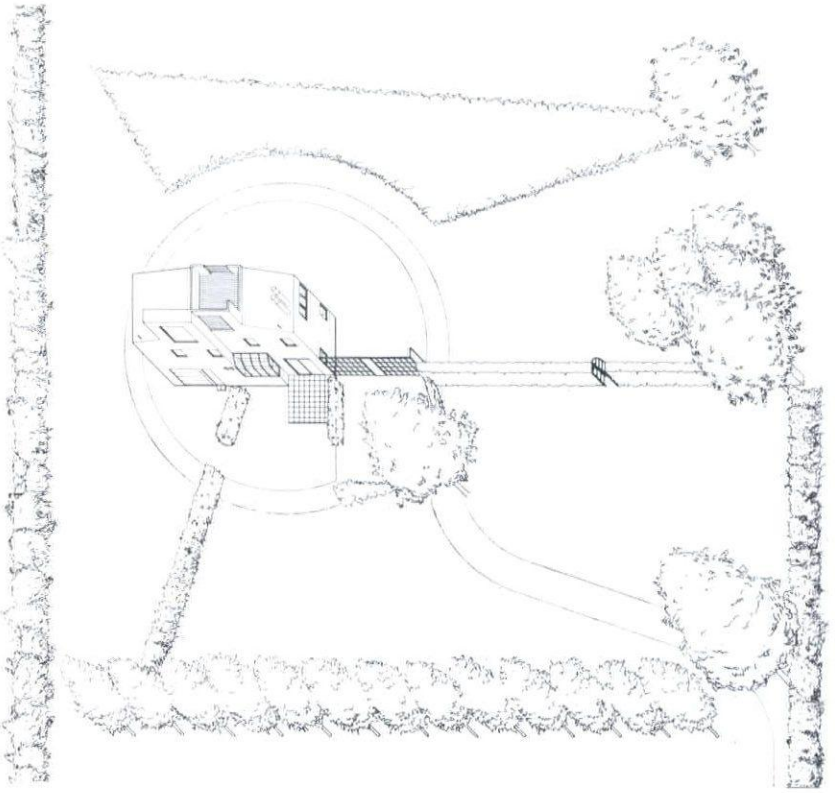
Peter Hoppner

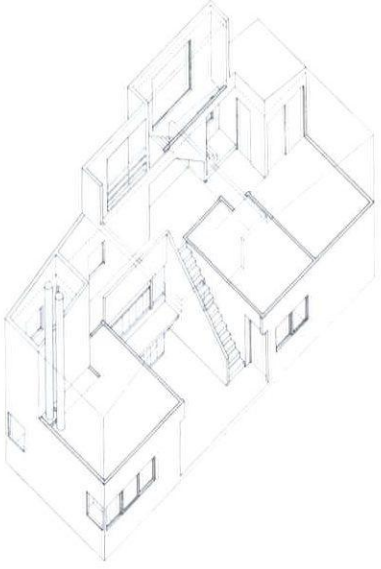
ピーター・ホプナー：1937年生まれ．
いわゆる〈草の根派〉の住宅作家の１人だった．　しばらくケンタッキー大学で教えていたが，今はニューヨークに移る．

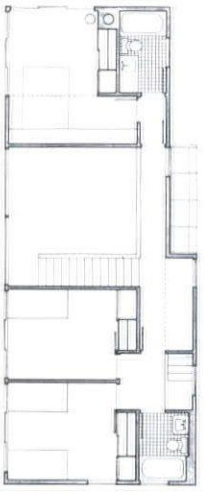
The Sullivan House　*Sagaponack, N. Y.*

敷地は，かってジャガイモ畑であった平坦な土地である．　建物はごく小さなものだが，より荘大な場の感覚を見る者に引きおこそうと試みた．　それは，モニュメンタリティを得ようとする控え目な身ぶりによってなされる．　対称な正面，２，３階の大きな開口部など，建物全体にわたって堂々たる尺度が暗示されている．　庭園側では，より私的な場としての性格に応じて，高さを押え，中心をずらしたりしている．
このように，対称性は絶えず生じ，くつがえされる．入口側の立面は割としっかりした対称性を示しているが，正面入口ではなく，斜めにアプローチする．　この立面の中央部では形態のずれが生じているが，そこに近づくことはできない．　垣根と樹木，建物と格子の組み合せは対称を形づくるが，中心軸上に入口はない．　ここでは対称性のもつ形式上の価値は感じられるけれども，実際には実行に移されてはいない．　なぜならば，現実の生活は非形式的（くつろいだ）なものだからである．











Kelbaugh / Lee





Douglas Stewart Kelbaugh: 1945年生まれ.
プリンストン大学で建築を修める. 卒業後ニュージャージー州トレントン市建築局に勤務する. 1979年より現在の組織を結成. 一貫してパッシブ・ソーラーの研究を続け, 多くの適用例を生んでいる. その大部分は住宅だが, ここには比較的大規模な例を紹介する.

Sang Jun Lee: 1946年に生まれる.
ペンシルヴァニア大学でMAを得る. トレントン市建築局などに勤務した後, 1979年より現在のパートナーシップを組む.

Milford Reservation Environmental Center

この建物は, 教育・環境形成・リクレーションのための施設であり, 共同寝室, 食堂, 工作室, ラウンジ, その他の補助空間よりなる.

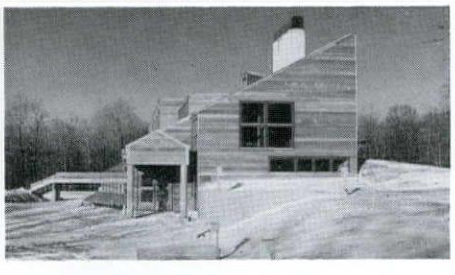
建物は, 7種のパッシブ・ソーラーによる暖冷房技術を使用している. 自然対流式蓄熱壁やウォーター・ウォール, 太陽熱の直接熱取得, 付設温室, 温水予備加熱装置などを使用した結果, 温水の加熱が必要なのは寒い曇りの日のみである. 夜間の通気孔と接地効果により夏季の空気調整の必要はなく, 風車は自家発電をする. 14の堆肥トイレは, 水の消費と腐敗処理システムの使用を従来の40%におさえている.

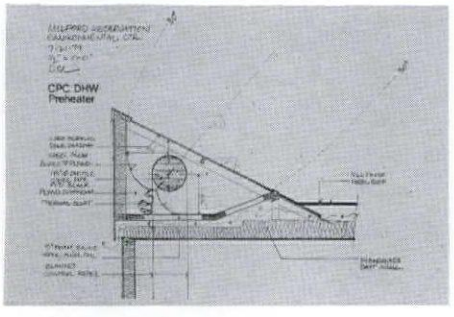
内部の構造, 床, 壁間仕切などは太陽熱エネルギーを蓄えるためコンクリートとなっているにもかかわらず, 外観はこの地方の木造の農家のイメージを喚起するよう意図されている. 屋根窓, 下見板張り, 片流れの屋根といった要素は田舎風のものだが, 細部は緊密で都会的である. このデザインは地域に固有の建設材料を新しい組み合わせで結びつけると同時に, ありふれた建築的ヴォキャブラリーは混ぜあわされ, 歪められている. またそれはこの敷地と気候に特有なものではあるが, 地域における新しい省エネルギー建築の創造の試みでもある. あらかじめ定められた建築的コンセプトに添えられたというのではなく, むしろエネルギーや環境に対する関心からこの計画は出発しており, ここではデザインにおける柔順さが認識に価するものとなっている. なぜならこの建物はそれと目だったり, 奇抜で陳腐なものとなることなく高いエネルギー効率を獲得しているからである. それは最も包括的で洗練された現代のパッシブ・ソーラーハウスである一方, 新しい建築像の探究なのである.

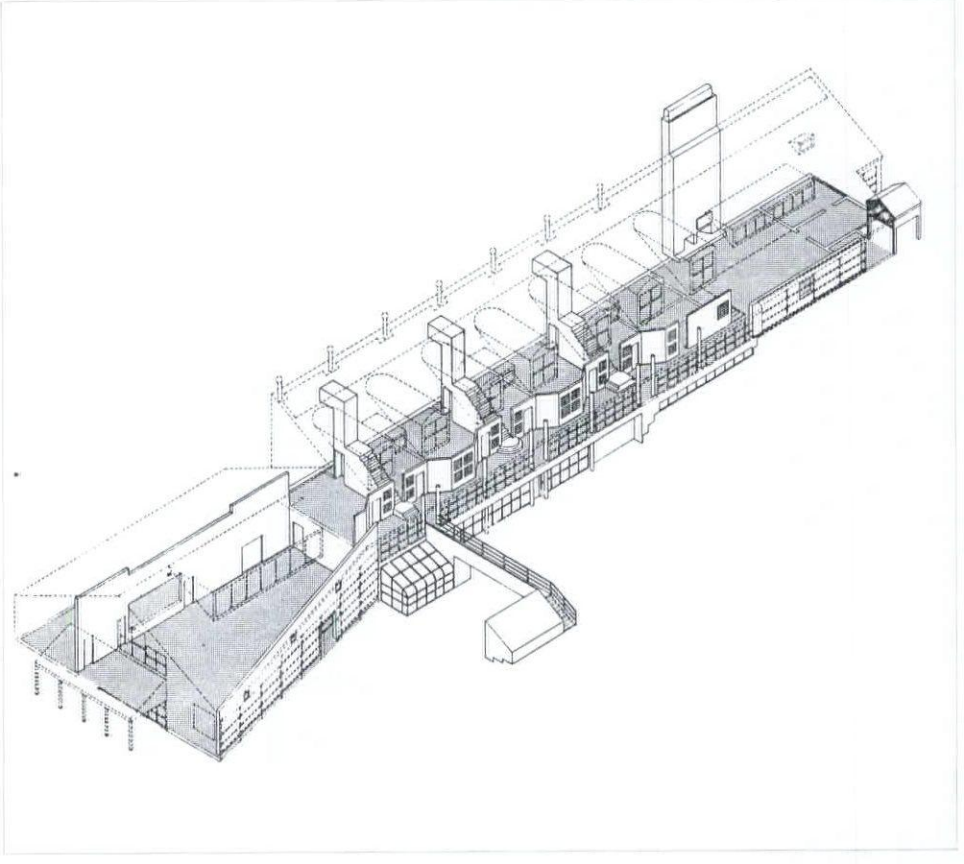


photos = Robert Perron









Tod Williams



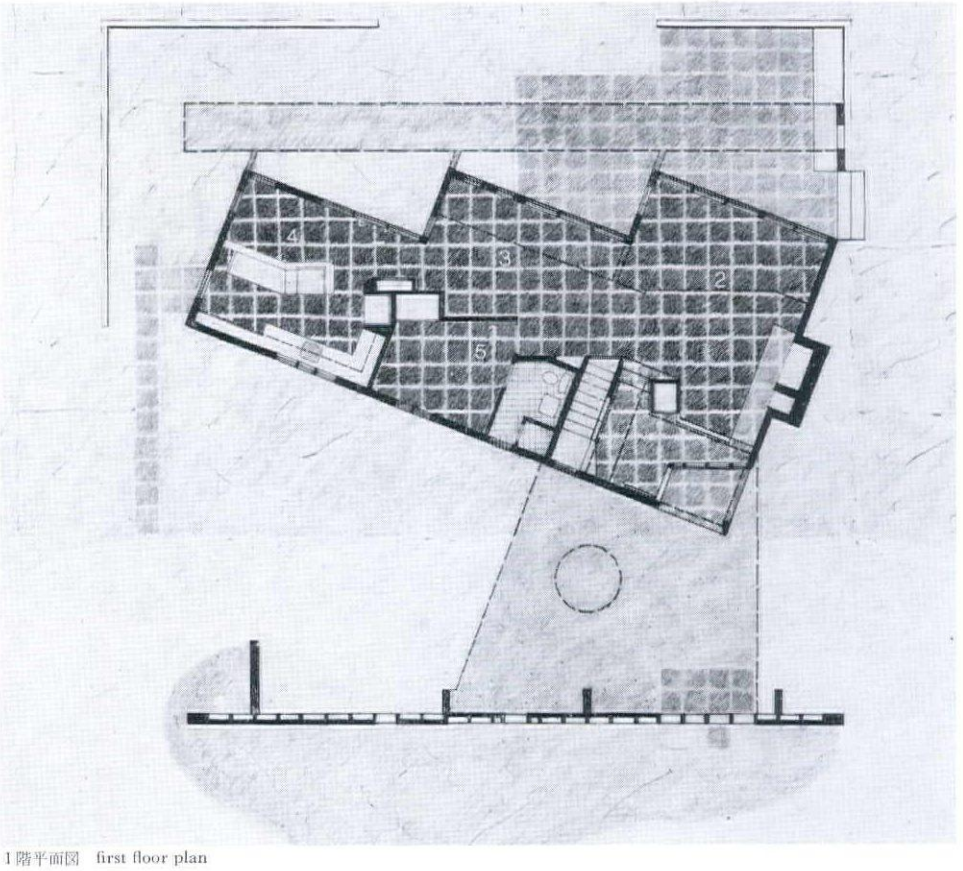
トッド・ウィリアムズ：1943年生まれ．
プリンストン大学，ケンブリッジ大学で建築を学ぶ．　リチャード・マイヤーの事務所で6年間働く．　ニューヨークのクーパー・ユニオンで教えている．

Tarlo House　*Sagaponack, N. Y.*

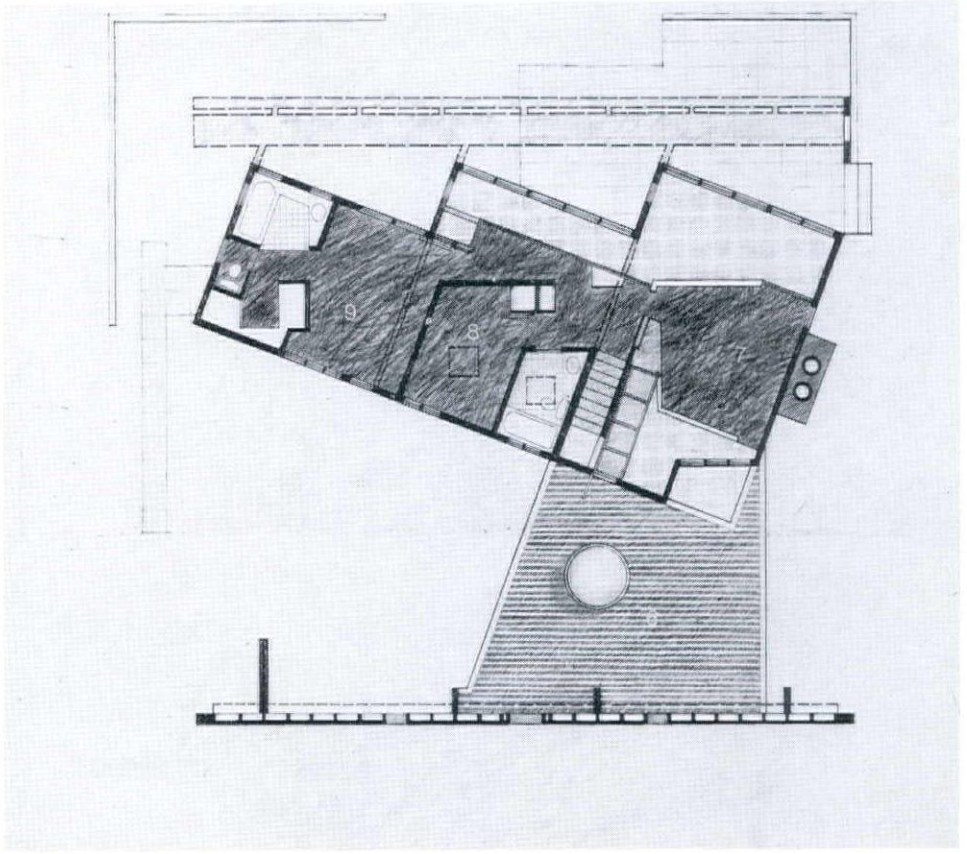
敷地は，ロングアイランド東部の海岸から300mの距離にある原野である．　土地は平坦で樹木がない．家は週末に利用される．　要求されたことは，複数の施主達の家族構成（2人～5人）に答えることであった．　施主達は建設費と維持費を軽減するために，極端に，コンパクトな構造を要求した．　こういった要求や海と野原の眺望を考えあわせて2階建の計画案に決定した．　3，4室の寝室，3つの浴室，台所，リビング／ダイニングそして玄関という内容である．
スーパーエンクロージャー，つまり外側の家は2つの互いに独立したエレメント，つまり，壁とブリイズソレイユによって構成される．　これらの2つのエレメントは道路の直交したグリッドと海岸線に対して平行に並んでいる．　独立して建っている壁は道路に背を向け冬の風を防いでいる．　ブリイズソレイユは冬は太陽の光を通し，石の床と家を暖め，夏はその影を落す．　一方，本当のエンクロージャー，家の中にある家は，南北を軸にして振られている．　その結果，スーパーエンクロージャーとエンクロージャーの軸の間に錯綜し，連結した空間の弁証法が生ずる．　それぞれのエレメントはあたかも相反するものを含んでいるかのようである．　つまり，直接／間接，開／閉，内／外，自由／制御，醜／美，というように．

The House is for weekend use. The super-enclosure, the outside house, is defined by two detached elements, the *wall* and the *brise-soleil*. These two elements are in alignment with the dominant orthogonal grid of the roads and shore. The free standing wall is closed against both the road and the winter wind. The brise-soleil permits the sun to warm the stone floor and the house in the winter, and shades them in the summer. The enclosure proper, the house within the house, is rotated into the true north/south axis. This generates a complex and continuing spatial dialectic between the two axes; as though each contained elements of the other—direct/indirect, open/shut, in/out, free/controlled, ugly/beautiful.

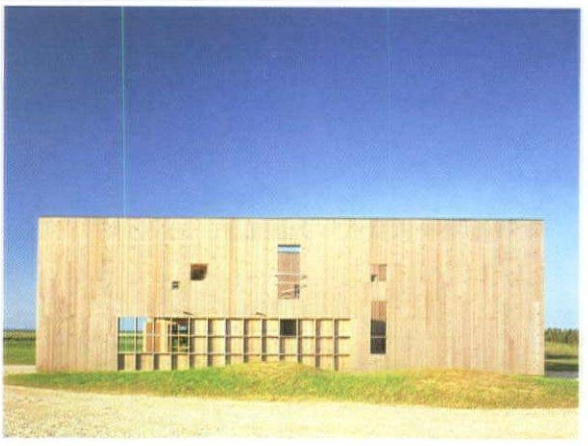
1　車寄せ　porte cochere
2　居間　living
3　食堂　dining
4　台所　kitchen
5　寝室　bedroom
6　デッキ　deck
7　書斎　study
8　寝室　bedroom
9　主寝室　master bedroom



1階平面図　first floor plan

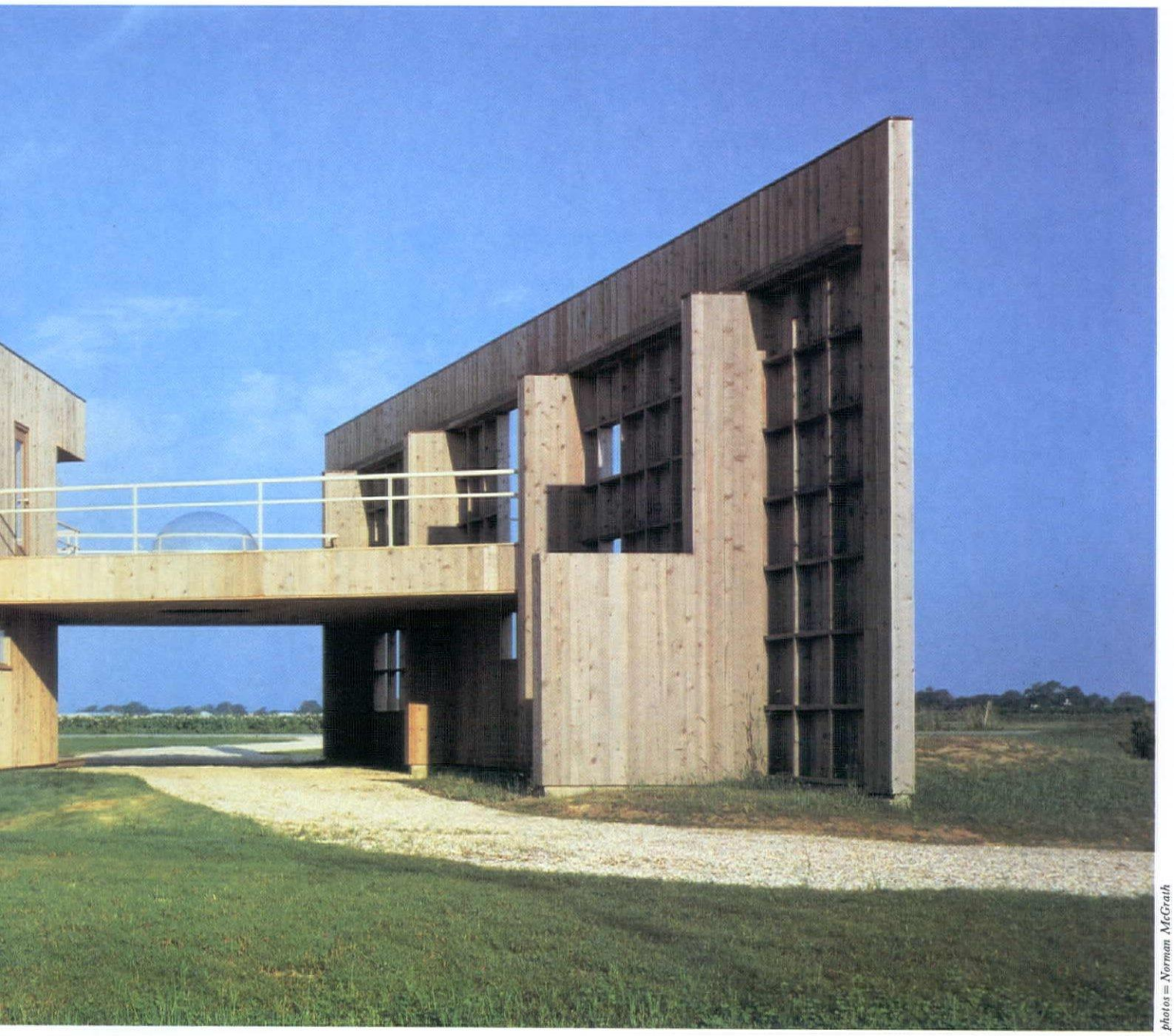


2階平面図　second floor plan



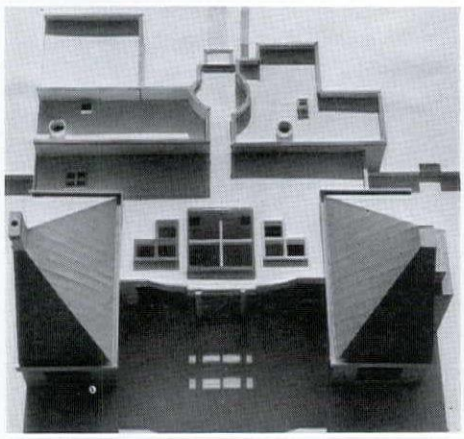


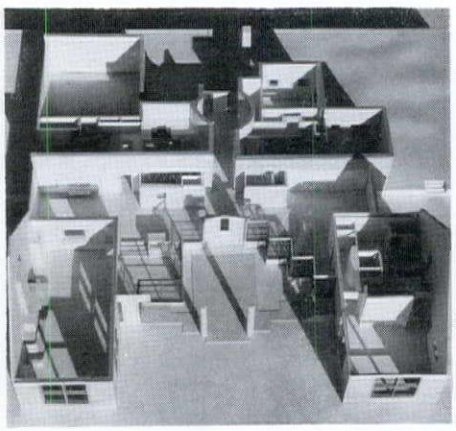




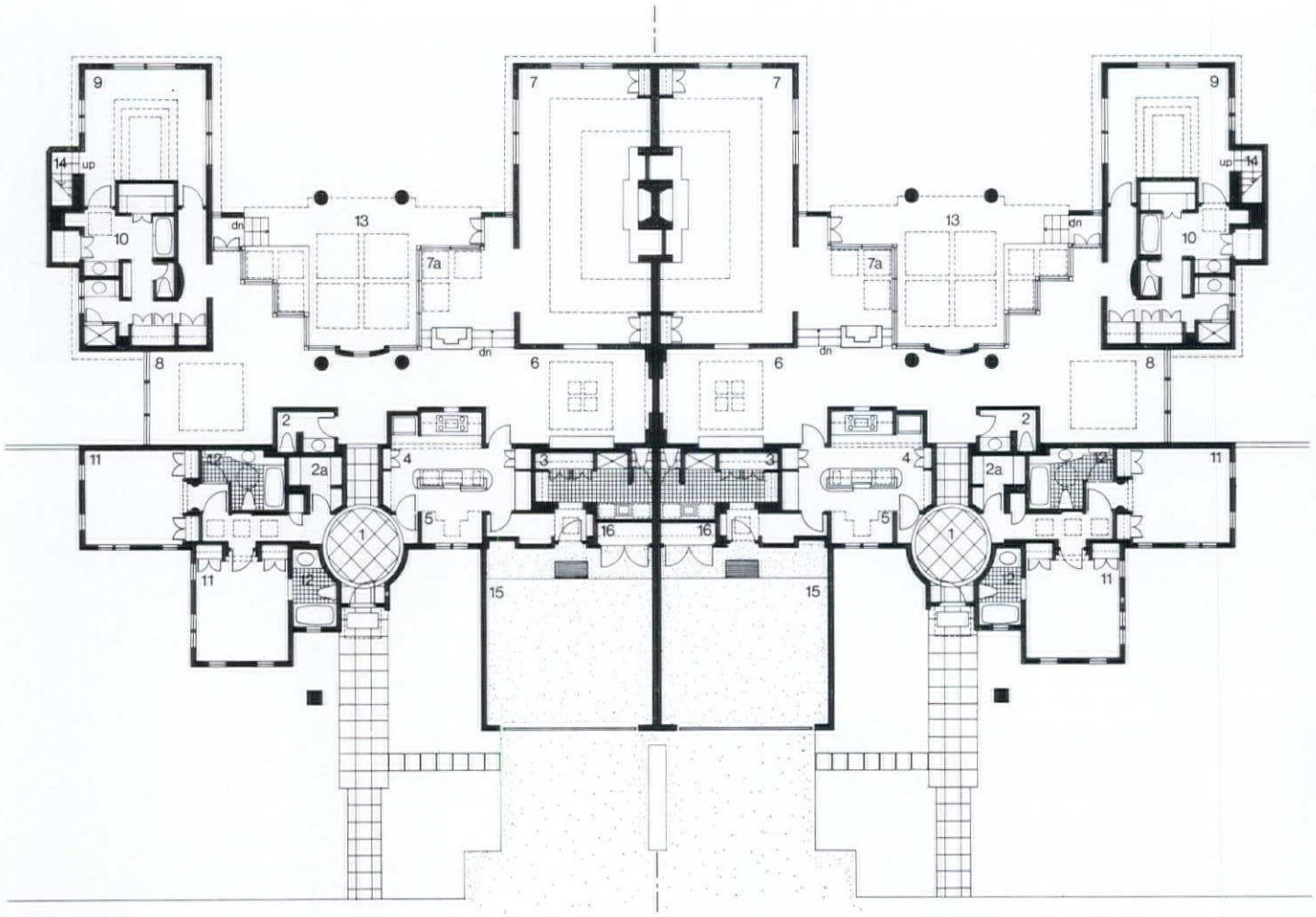
photos = Norman McGrath

Michigan House





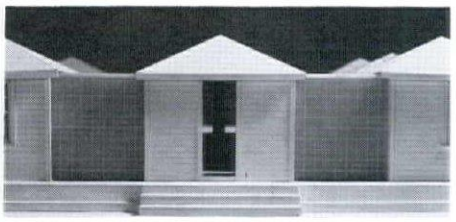




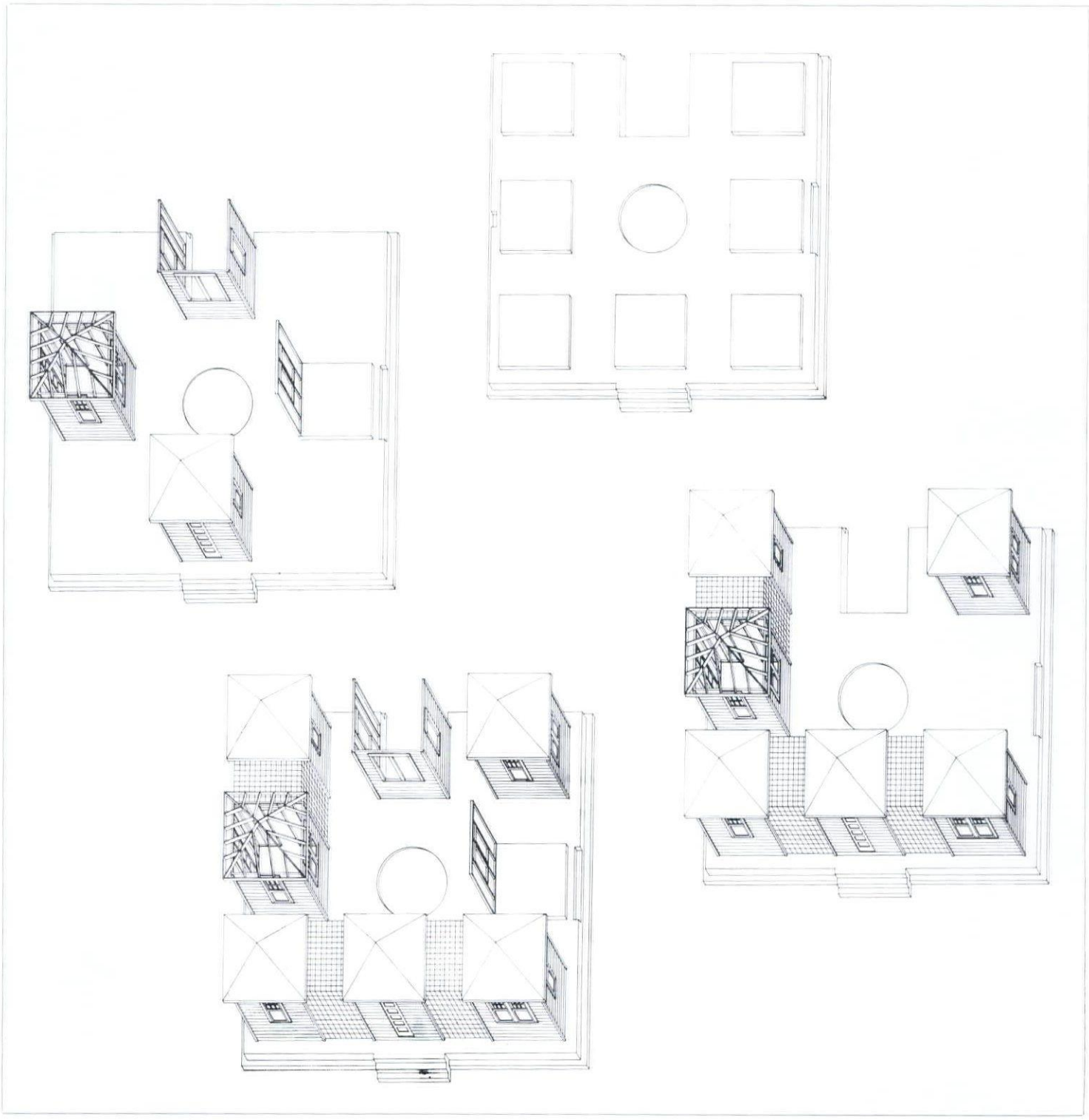
平面図 plan
1 玄関 entry
2 洗面所 powder room
2a 収納 coat closet
3 洗濯室 laundry / utility
4 台所 kitchen
5 朝食室 breakfast
6 食堂 dining
7 居間 living room
7a サンルーム wet bar / solariulm
8 書庫／書斎 library / study
9 主寝室 master bedroom
10 主浴室 master bath / dressing
11 寝室 bedroom
12 浴室 bathroom
13 テラス terrace
14 物置 storage
15 車庫 two car garage
16 機械室 mechanical

House in Wingdale

1978年の春，私たちはニューヨークのウイングデールで100戸余りの素朴な家に遭遇した．　それは子供の落書きに現われてくるような家だった．　家はキャンプであり，バンガローであることに気がつかされたのだ．　そこで私たちはその家の9戸を購入した．
中心軸上の家は，元々は骨組のままの状態だったが，それを出入口として用いることにした．　この住宅では，人は中へ入りなおすためには一度外へ出ないとならないのだ．　また四隅の家は，スタジオ，寝室，居間，食堂としてそれぞれ使われる．　中央の空間は，住人がたたずむ場であるとともに雨水の集まる場所でもある．



この住宅には強い二元性がある．　ひとつは単純性である．　形にしても四角形の上に三角がのるという極めて単純なものだ．　もうひとつは，形態の豊かで力強い象徴性である．　形が抽象的なほど，家庭，子供，教育，保護といったものの象徴としての家のイメージが浮び上ってくる．　この二元性ははっきりとつかみがたい．　両方に焦点をあてることは難しいのだ．
私たちの計画は，この二元性をつかめないまでも，それに少しでも触れようとするものである．　問題は二元性のどちらか一方でなく，両方同時に触れることにあるのだ．　というわけで私たちは新しいと同時に古く，単純でありながら難解で，田舎風でありながら都会的，不完全で完全な，優しくて力強い，謙遜でありつつも見栄張りな場所をつくることに関心があったのである．



Kliment / Halsband

Robert Michael Kliment：1933年プラハに生まれる．
イェール大学でBA，続いてMAを得，その後イタリアに留学．
ミッチェル／ジョゴラ事務所で働いた後，1972年独立する．
1978年から現在の Kliment／Halsband となる．
イェール，ライス，コロンビアなど各大学の講師を務める．

Frances Halsband：1943年ニューヨークに生まれる．
スワースモア大学で BA，コロンビア大学で MA を得る．
Kliment と同様にミッチェル／ジョゴラを経て，1972年より事務所を開いて今日に至る．

Young Women's Christian Association　*Kingston, N. Y.*

既存のふたつの建物の改築ならびに増築の計画である．そのうちのひとつは1880年代の木造，もうひとつは，1860年代のレンガ造の建物である．
新しく建てられた多目的室は 75～125 人を収容することができる．　そして同時に既存の部分は，幼児看護室，遊戯室，10代の児童のためのセンター，成人向けの工作室，教室，カウンセラー室，会議室，食堂，映写室などの施設に作り変えられた．　スポーツ用の施設は作られていない．







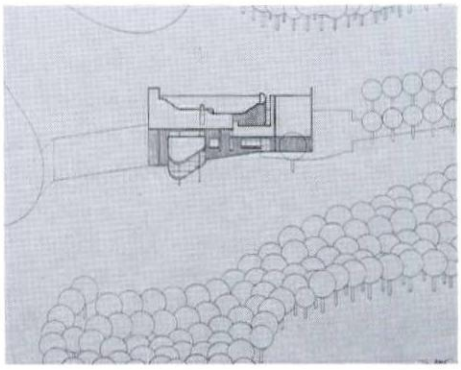
Timothy Wood

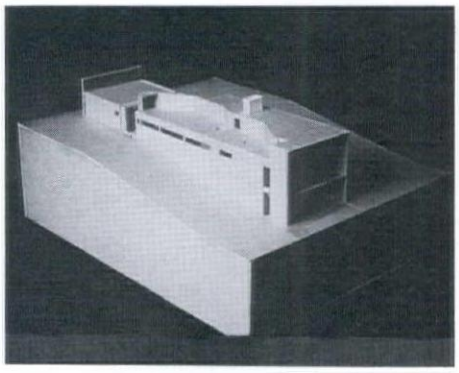
ティモシー・ウッド：1943年ニューヨークに生まれる．コーネル大学で，BA，AAスクールを出て，プリンストンで学ぶ．　プリンストンではマイケル・グレイヴスにつく．　続いてガスミー／シーゲルの事務所で働き，ピーター・グラックの事務所を経て，独立する．　コロンビア大学で教鞭をとる．

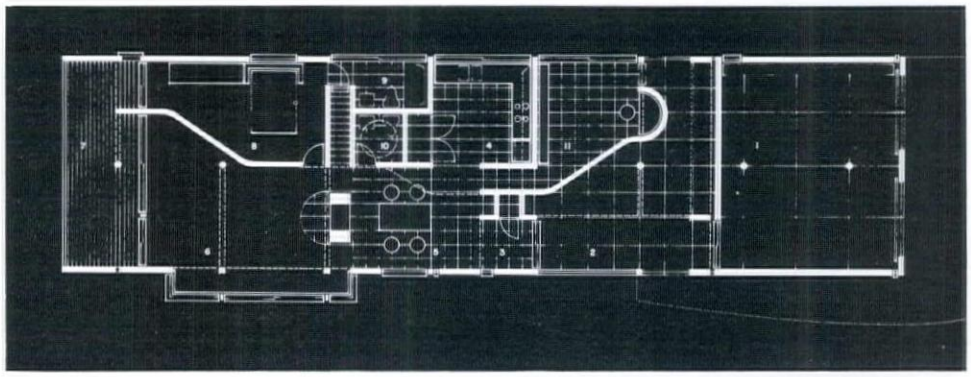
●House B

1972年，仕事を終えた老夫婦が１年を通じて住むためメイン州の海岸に計画された．　敷地はかなり広く，大西洋の入江に向って西にゆるやかに傾斜している．施主の要求は住宅とガレージを同じ階に，訪れてくる息子夫婦や孫のための予備室を別の階に設けることであった．　建物全体は，低い天井高と北向きの小さな窓をもつ個室群からなる空間と高い天井高と南向きの大きな窓をもつ連続的な空間のふたつの領域に分けられ，南面には（壁に）おおわれたポーチ（大きく，曲線の用いられたものが最終案）が突き出す．

House "B" was designed in 1972 for a retired couple for year-round use on the coast of Maine. The length of the house is split into a lower, cellular-space zone with smaller windows towards the north, and a higher, continuous-space zone with larger windows toward the south.



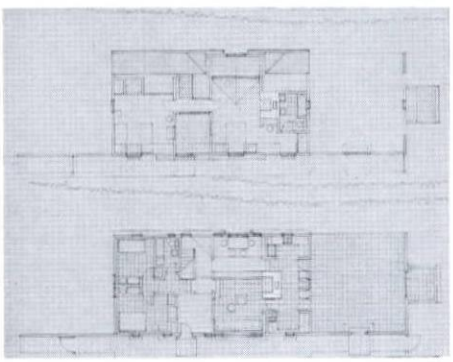


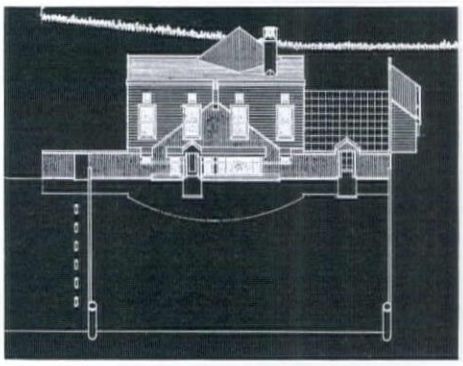


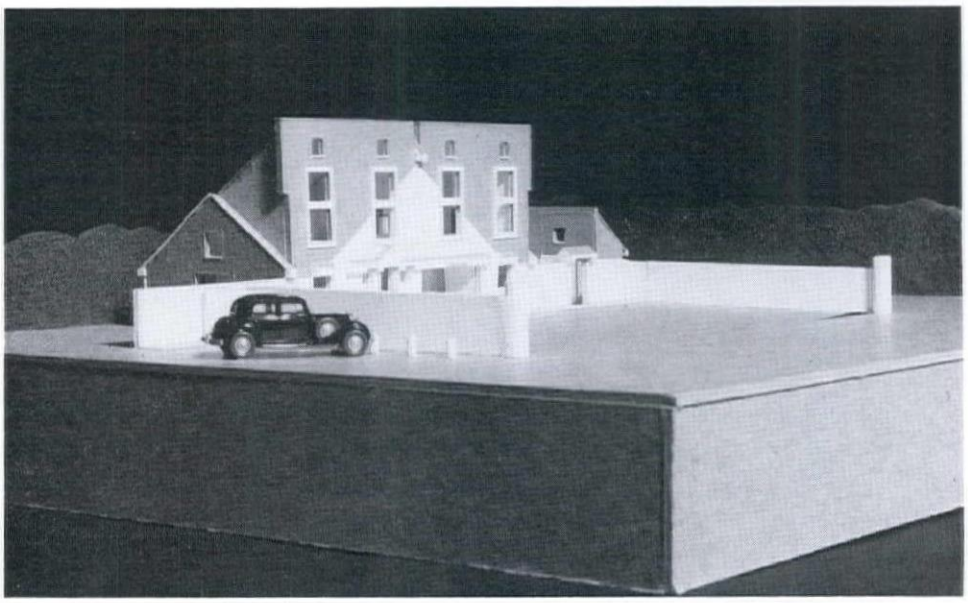
●House D

1978年，ロング・アイランドにおける夫婦２人のための小さな切妻屋根の海岸小屋の修復・改造計画である．　施主の要求はふたつの寝室ともうひとつの浴室，さらに完備された厨房の増築であった．　予算はこの場合，極めて低く，方策としては既存の建物に増築する分をできる限り少なくし，現在あるものの大部分を新しくつくる部分と同様形の上に生かすことであった．厨房を南端に加えることにより平面は１：２の比率となり，２階により多くの空間を得るため切妻屋根は片流れに変えられた．　さらに西の入口側立面は大きく，より格式のあるものとなり，これもまた１：２の比率に整えられた．　庭園側の壁と物置小屋の配置は敷地の中でさまざまに使われる一連の外部の〈部屋〉を生むよう計画されている．

House "D" was designed in 1978 as a renovation or conversion of a small gable-roofed beach cottage for a couple on Long Island. The building was converted into a double square in plan by the addition of the kitchen to the south end and the gable roof was converted into a shed roof providing more space upstairs and enlarging the west entrance elevation converting it into a more formal facade.







Stuart Cohen

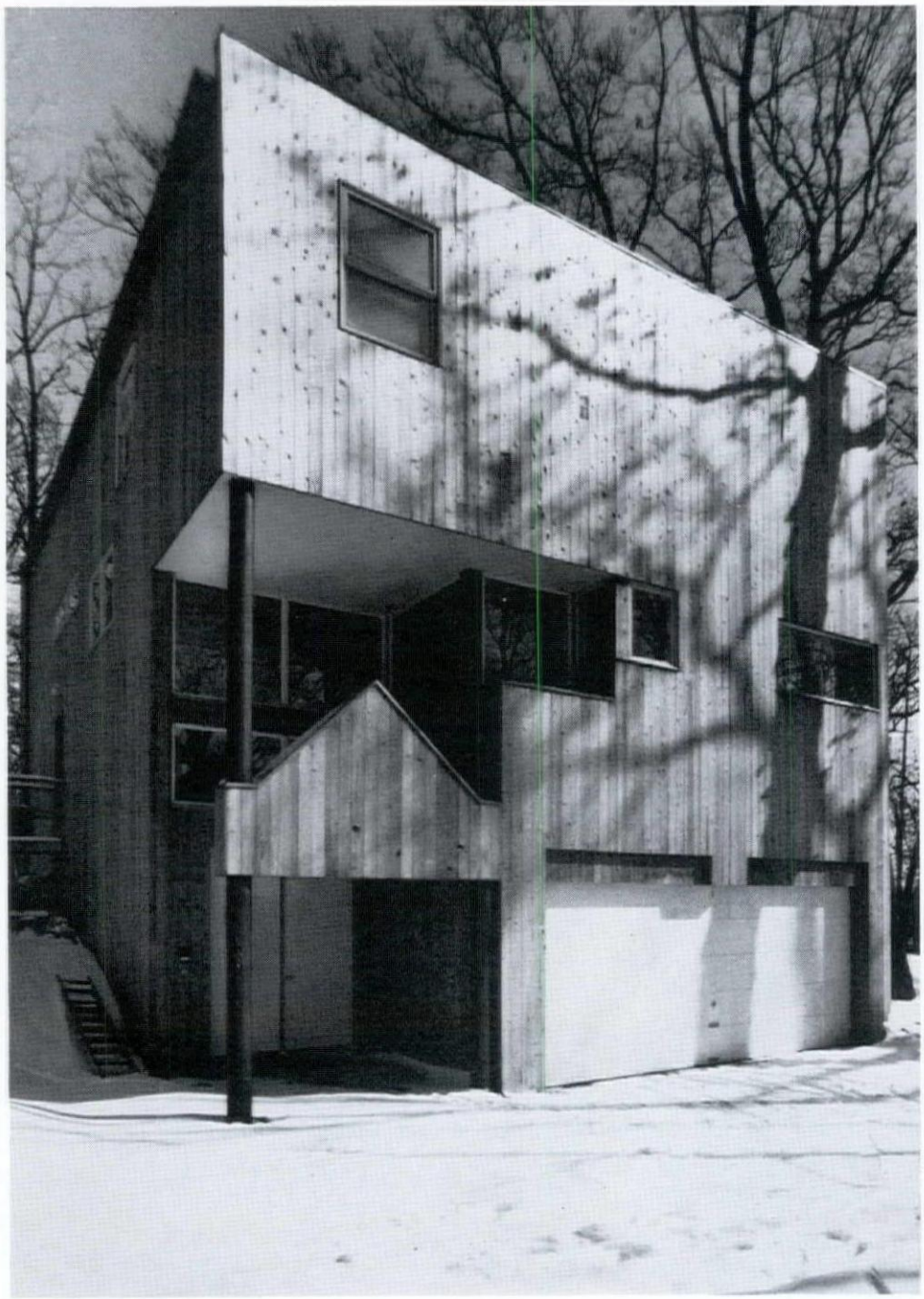


スチュアート・コーエン：1942年シカゴに生まれる．コーネル大学でBA，MAを得る．　コーリン・ロウの指導を受けた．　卒業後，リチャード・マイヤー，フィリップ・ジョンソンのところで働く．　現在はシカゴに戻り，イリノイ大学シカゴ校で教鞭をとっている．　1976年〈シカゴ・アーキテクツ〉展を開き，同名の書も出版した他，いくつかの展覧会を組織し，また評論活動も行なっている．　1980年のベニス・ビエンナーレにも出展している．

Mackenbach House *Bloomingdale, Ill. 1979*

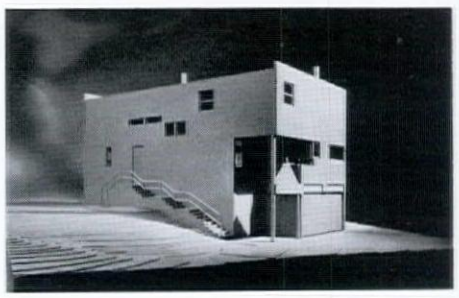
マッケンバック邸は，小高い丘にはめこまれた大きな3階建ての〈箱〉である．　この〈箱〉の中の唯一のアーティキュレーションは，入口ホールにおけるヴォイドであるが，これはまた〈ゲート・ポスト〉（柱）や破風型によって象徴的に示されている．　住宅の中心は，2層吹抜けになった楕円形のダイニングルームである．　グンナー・アスプルンドのスネルマン邸におけるパーラーのように，これはシンプルな〈箱〉の中に落としこまれた楕円形の空間である．　しかし断面や2階のオープンプランにおいては，この象徴的な空間は，近代建築の「フリープラン」によって定義づけられた連続空間との好対照を見せている．

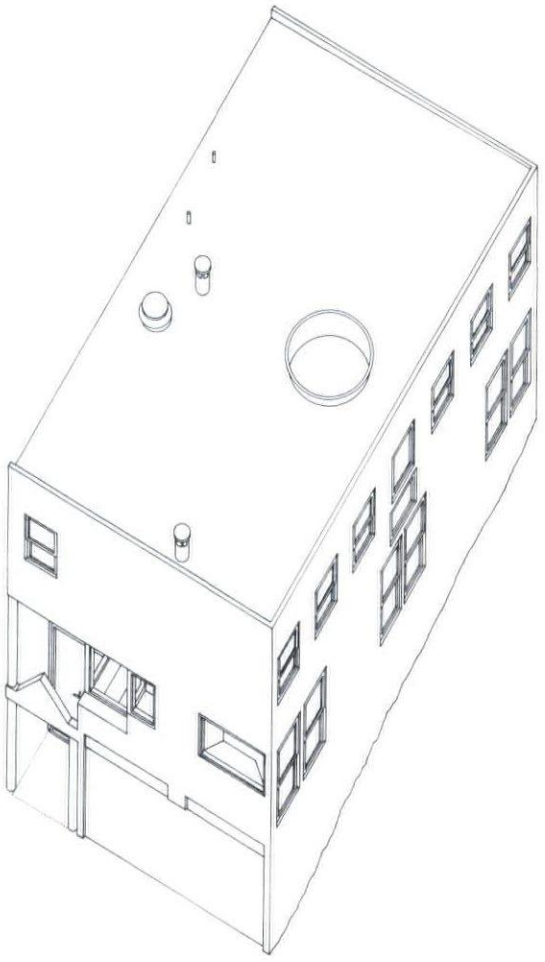
The Mackenbach house is a big, three-story box built into a low hill. The only articulation in the box is the void of entry wall which is also marked symbolically by "gate posts" (columns) and a pediment form. The center of the house is a two-story high oval dining room. Like the parlor in Gunnar Asplund's Snellman Villa, it is an oval space "dropped" into a simple box; however, the section and the open second floor plan play this *figural* space off against its antithesis—the continuous space identified with the "free plan" of modern architecture.

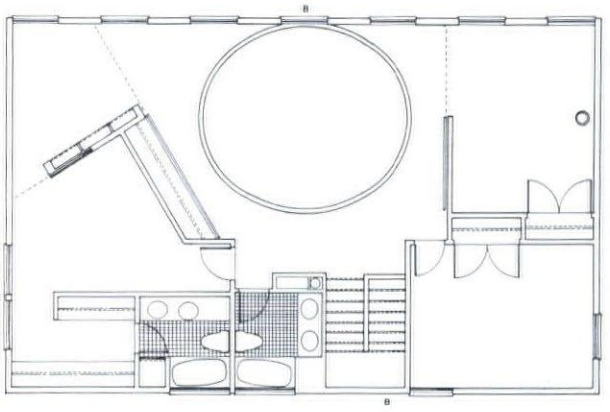




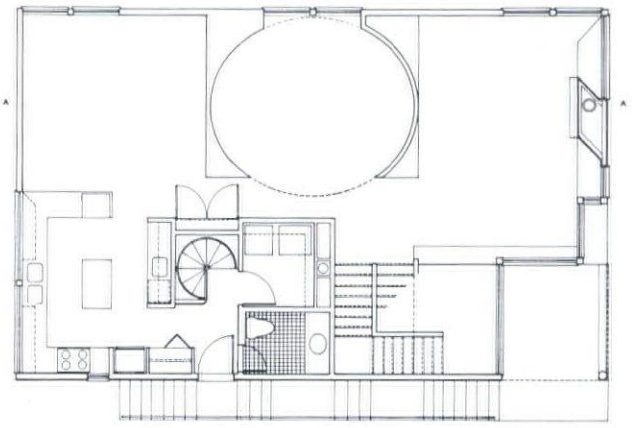




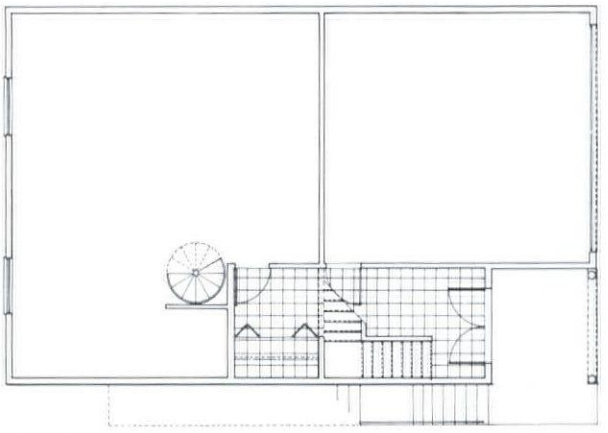




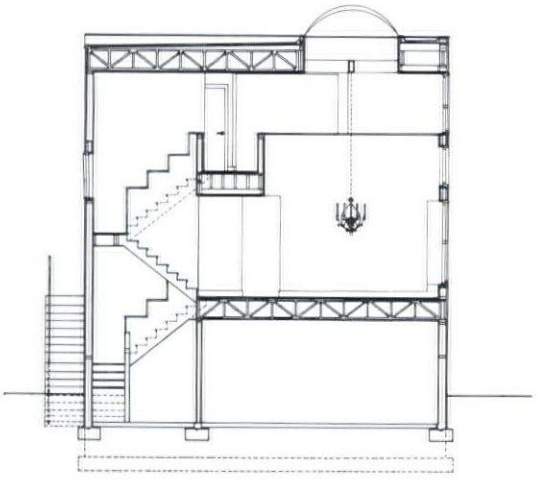
2階平面図　second floor plan



1階平面図　first floor plan



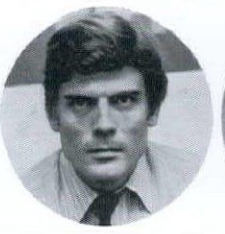
地階平面図　ground floor plan





断面図　section

Koetter / Kim




Fred Koetter：1938年モンタナ州に生まれる．　オレゴン大学でBA，コーネル大学でMAを修める．　そこではコーリン・ロウの指導を受け，共著《コラージュ・シティ》も出版している．　1966—77年にはWells／Koetter／Dennisのパートナー，1978年より自分の事務所を持つ．

Susie Sung-Hea Kim：1948年韓国に生まれる．
コーネル大学，ハーバード大学で建築と都市計画を学ぶ．　コーネルでは同じくコーリン・ロウの指導を受ける．　TACなどを経て，現在はFred Koetter and Associatesのパートナーである．

●私たちの近作について

私たちは，小さな住宅の仕事と都市的なスケールの仕事の双方を一緒に手がけてきた．　それは，建築や都市に対する私たちの現在の態度を反映している．　私たちは，基本的には建築と都市とは関連性を有していると考えており，重要なレベルでの話として言えば，〈建築デザイン〉と〈都市デザイン〉とは，殆んど違いがなく，結局は建築の分野に集約されると考えているからだ．　最近は，建築という営為を〈環境デザイン〉とか〈システムズ・デザイン〉とかいって，みせかけだけの区別が無謀にもなされている．　しかし，我々の見解では，そうした区分けこそが，建築の最も重要な関心事をひどく混乱・歪曲させている元凶だと思われる．　こうした不幸な状況に気がついたこと，及び，過去数十年間，建築そのものが固有の伝統・大原則といったものから，大きく外れてしまったという認識がますます強まってきたため，私たちなりの建築の関心事を伝えたいという欲求をもつに至った．

簡単に言ってしまえば，我々は〈一般の建築〉——それは，理念化して言えば比較的時間というものによって拘束されるものではなく，恐らく〈型〉という概念と関連しているものと思われるが——を代表すると同時に，ここで見られるように環境の特性というものに応答できる建築／都市を位置付けるのを目論んでいる．都市は，その生活・習慣・形態のいずれの意味でも，経時的連続体として存在するし，また，そのようなものとして認識されるべきと思われる．　私たちはさらに，都市の公共領域は，その性格・意味・形態的特徴からいっても，建築と社会を結ぶ基本的コミュニケーション手段として考えてもいる．　(F. K.)

●ボストン計画について

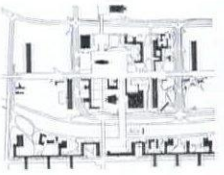
ボストン計画は市内から典型的な地区を選びだし，その地区の個性を保全しながらどのようにして都市組織をより緻密で強固なものに高められるかのケース・スタディである．　とはいえこのスタディの目的は，歴史都市ボストンの由緒ある街並の再編成にとどまらない．　それぞれの地区は，同時にアメリカの都市が現在かかえている重要な問題を代表しているからだ．

〈チャイナ・タウン〉(pp.118—9)は都市の中の都市，インナー・シティの問題と直結する．　高密度かつエスニックな（この場合は中華街）近隣住区をどのようにして大規模な再開発から守りつつひとつの自立する都市組織に育てていくか．　ここで彼らが行なったのは，各建物の実測調査によるタイポロジーの抽出である．　即ちこの地区にふさわしいタイプの建物でこわれた都市組織を補修し埋め戻していく作業である．その作業の過程を通じて公共の外部空間をつくりあげ，それによって地区に固有のアイデンティティを与え都市組織を強化していくこと，に要約される．

〈ストロウ・テラス〉(p.120)では都市とハイウェイの関係が考察の対象になる．　チャールズ川の両岸に高速自動車道路を走らせようという計画は，バック・ベイとチャールズ川を分断してしまうとして多くの反対を受けた．　コッター／キムは，この高速道路（ストロウ・ドライヴ）上にハウジングを設けてバック・ベイの都市構造を補完しつつ，チャールズ川岸への大階段によって一度は失なわれたバック・ベイ住民の川への接触を再び可能にしようと一石二鳥を狙っている．ここでも都市の公共空間を強化しようという彼らの意図は明らかだろう．

〈プルデンシャル・センター〉(p.121)では，アメリカ中で，50年代60年代に行なわれた都市再開発の典型的な悪例をいかに改善するかが課題である．　ここでもあくまで既存のものを尊重しつつ，フリースタンディング・オブジェクトよる近代建築のユートピアを連続的な都市組織へと変換することが試みられている．　実際，現在のプルデンシャル・センターはボストンの中の異質な〈島〉のようなもので都市組織はそこで分断されている．　コッターたちは，この都市内の障害物に新たな組織を重ねあわせ，ふたつの住宅地区を結びつける機能をもつものに再生しようと試みている．　最後に比較として，コルビュジエの都市計画案（左）とパルマの街（右）を見ていただきたい．

都市組織とは何か，そして近代建築による都市が何を喪ったのかは，そこに明瞭に示されているように思われる．　(渡辺真理)




These buildings and projects are typical of our current activities which, by a combination of intention and circumstance, have evolved into a practice which combines small-scaleresidential commissions with large-scale urbanistic projects. This combination seems appropriate to our present attitudes which assume the presence of a fundamental relationship between architecture and the city . . . and, on an important level of generalization, make little distinction between "building design" and "urban design"—both categories assumed to fall within the province of architecture. Indeed, it is the arbitrary fracturing and partitioning of architectural activities in recent times, producing such spurious distinctions as "environmental design", "systems design", "urban design" and so forth, which, in our view, has tended to greatly confuse and compromise the basic interests of architecture. An awareness of this unfortunate condition, together with an increasing realization that architecture itself has, in the past several decades, strayed significantly from its own traditions and principles, combine to further inform our architectural concerns.

In simple terms, we would seek to identify an architecture/urbanism which might operate as an agent of "architecture in general" (idealized, relatively unbound by time, perhaps related to the notion of' type') and simultaniously be responsive to the specifics of circumstance as found.

While the small house projects are straightforward enough as actual construction ventures, the urbanaistic proposals remain, of necessity and intention, idealized relative to the details of implimentation. These projects are, as such, not intended as literal plans for specific development, but rather as indications of urbanistic opportunity posited as alternative strategies to present modes of city development.

It is assumed that the city, in its life, its customs and its morphology exists as a continuum across time and must be recognized as such. It is further assumed that the urban public realm, in its disposition, its meaning and its physical characteristics exists as a primary means of communication between architecture and society.

(koetter/kim)

The Boston Plan *Boston, Mass.*



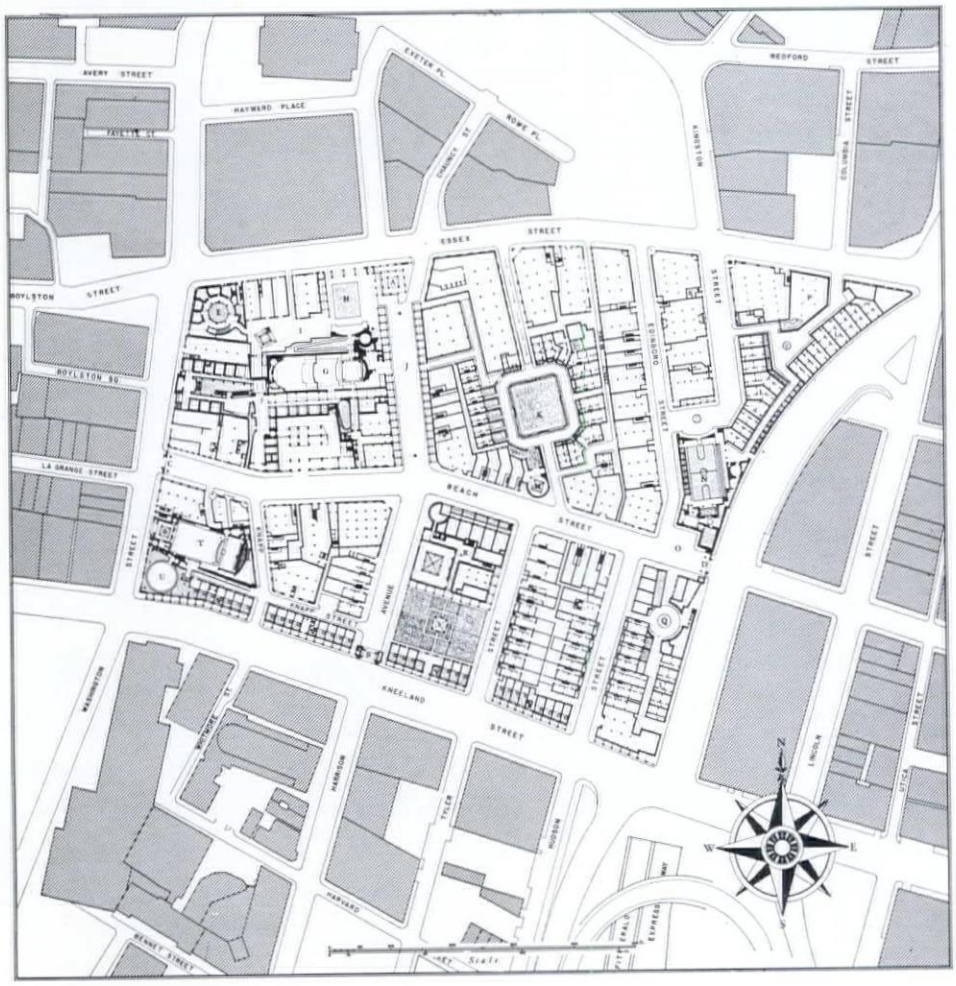
1 Chinatown 2 Storrow Terrace 3 Prudential Center

●Chinatown



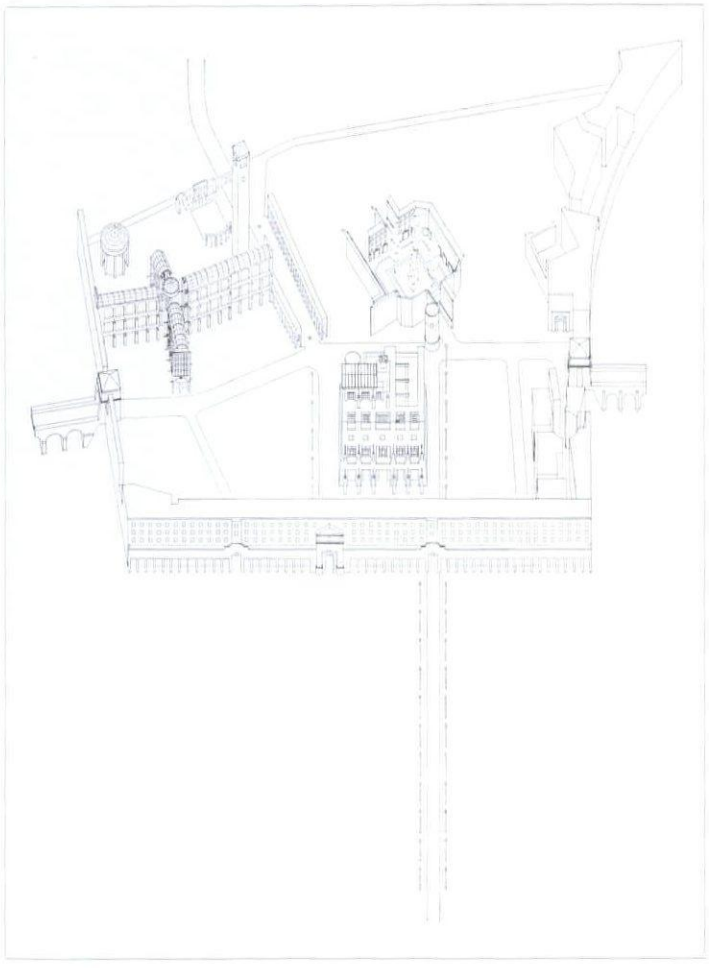
Exsiting Plan

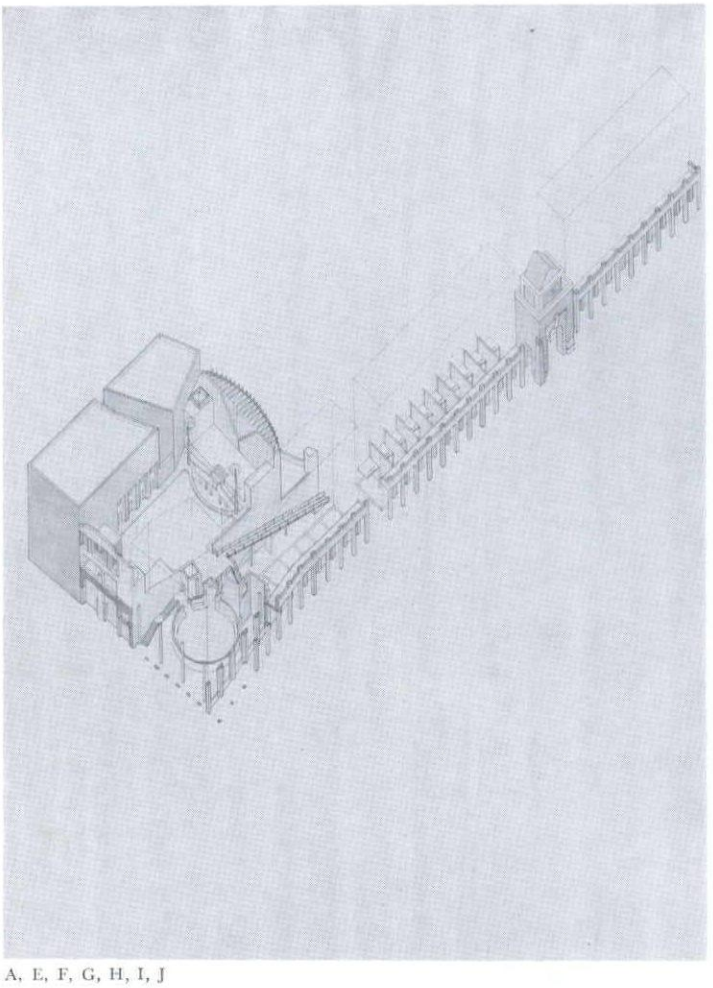
1 Liberty Tree Building
2 Essex St. MBTA Station
3 Pilgrim Theatre
4 Parking Garage
5 Center Theatre
6 Shawmut Bank
7 Light Commercial & Residential
8 New England Telephone Co.
9 Light Industrial
10 Expressway Exit
11 Expressway Ventilation
12 Chinese Economic Development Corp.



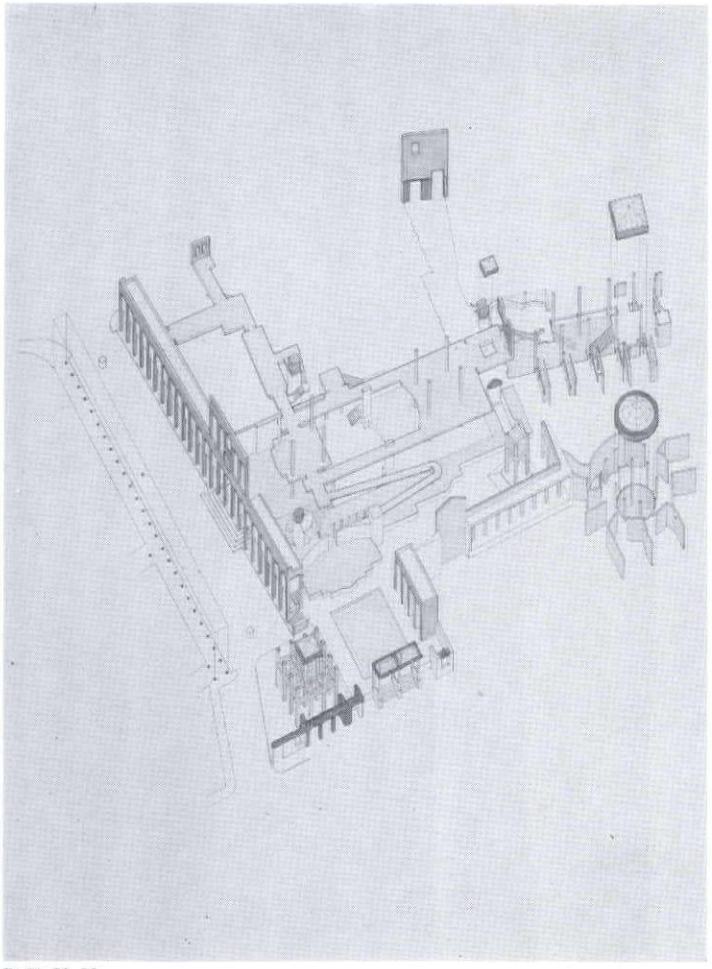
Proposed Plan

A North Gate
B South Gate
C West Gate
D East Gate
E Essex St. Station
F Inner-Block Galleria
G Pilgrim Theatre/Multi-Use Hall
H Stage & Court
I Garden
J Piazza
K Residential Square
L Housing
M Community Activities
N Youth Center
O Entry Court
P Parking Garage
Q Service Court
R Cultural Art Center
S Garden
T Open Roof Terrace
U Exhibit Balcony/Lounge

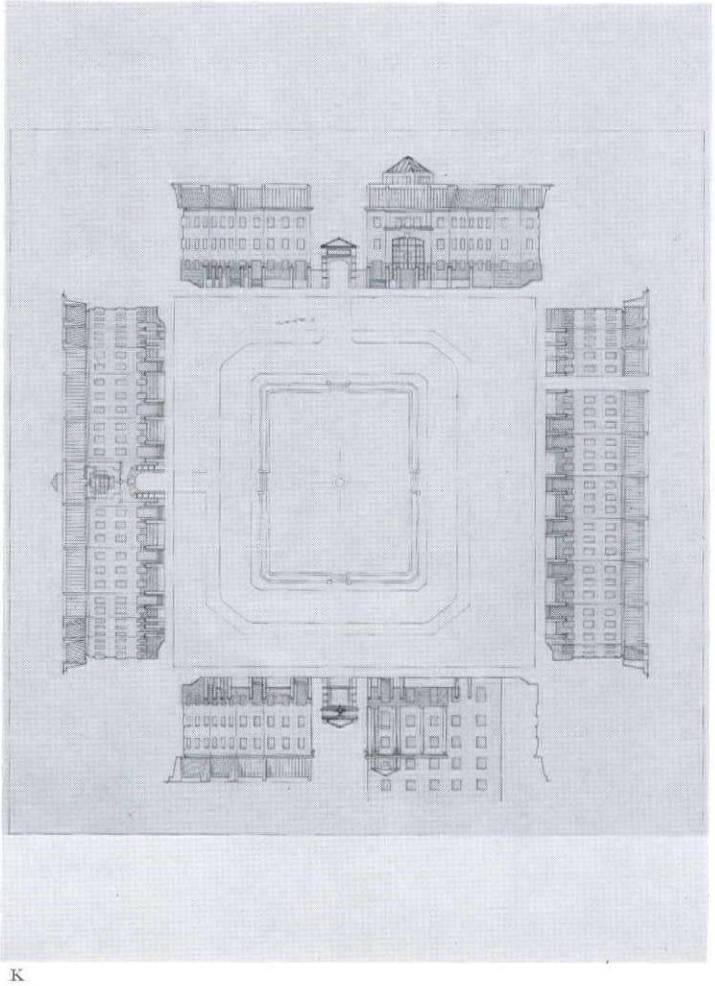




A, E, F, G, H, I, J

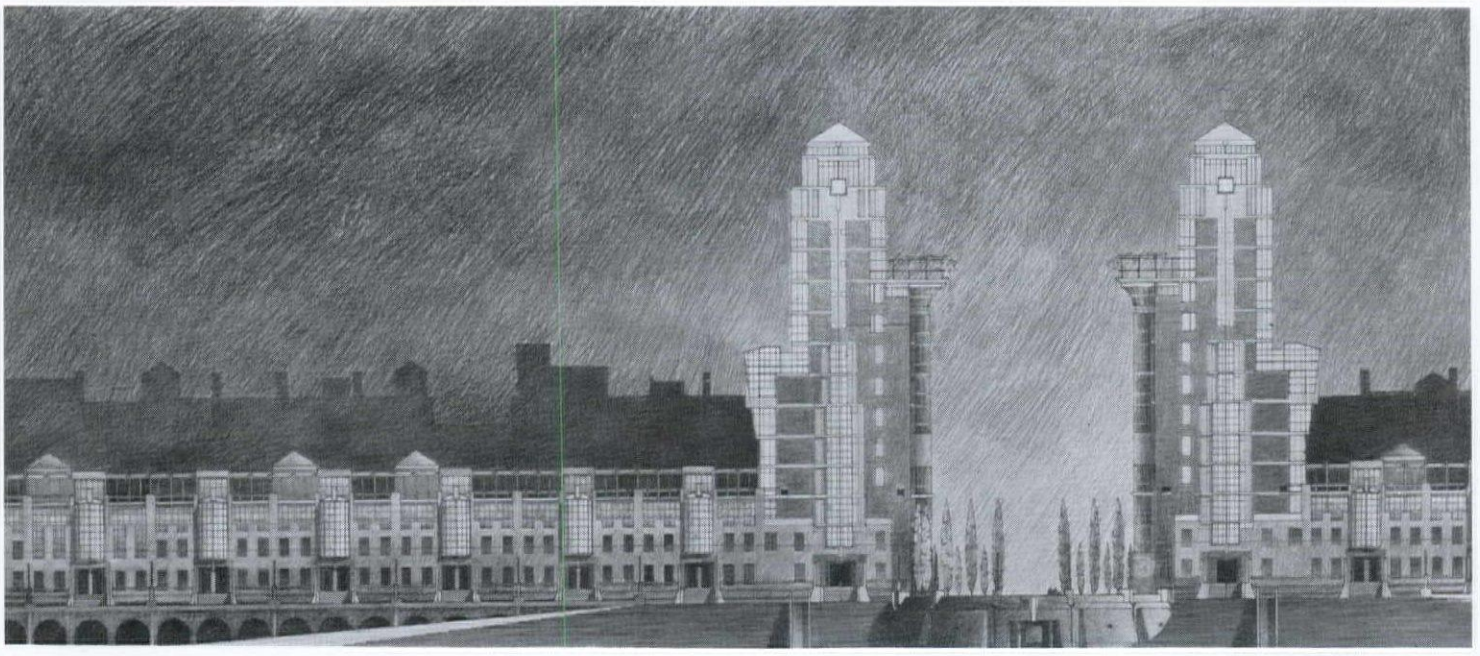


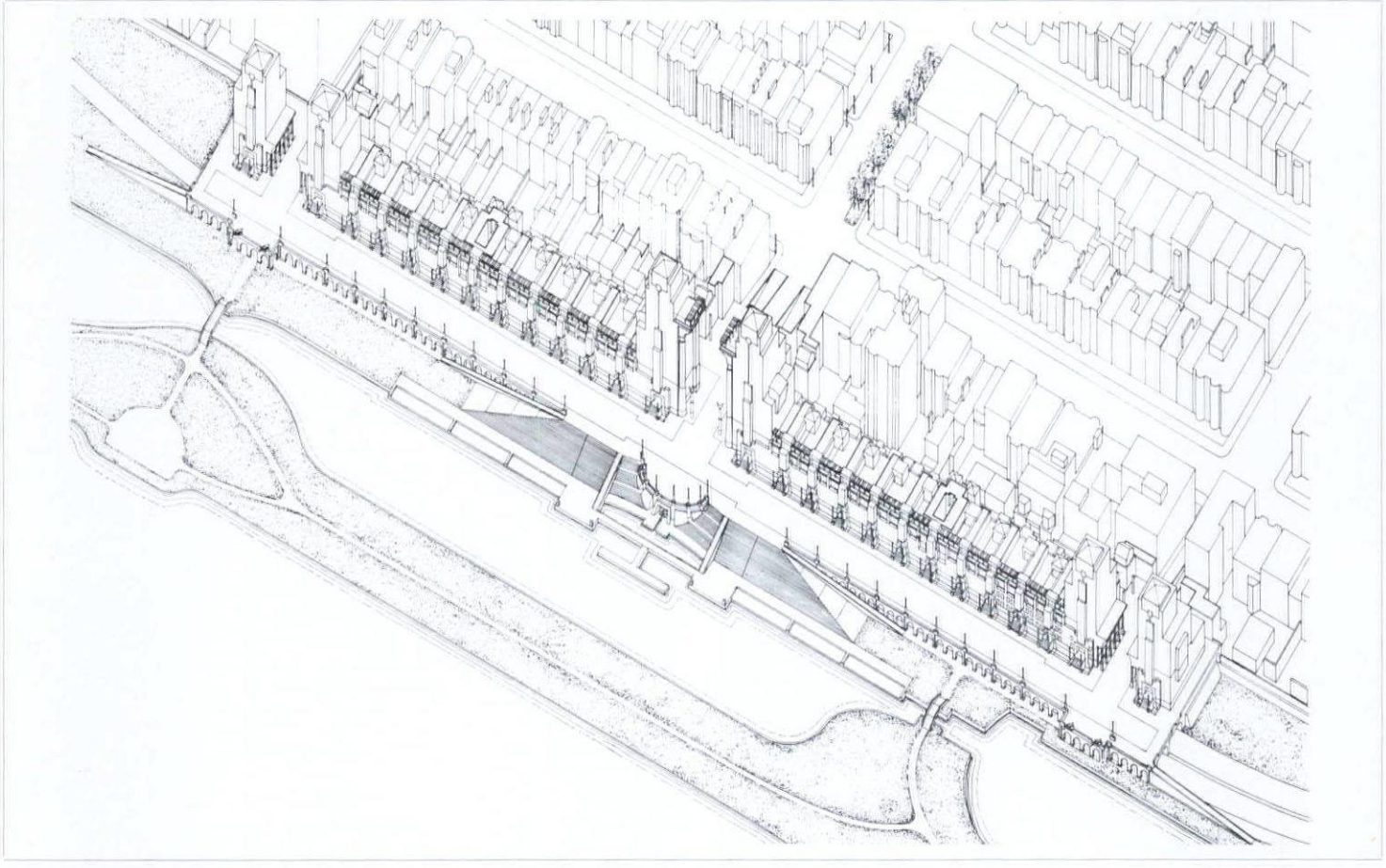
B, T, U, V



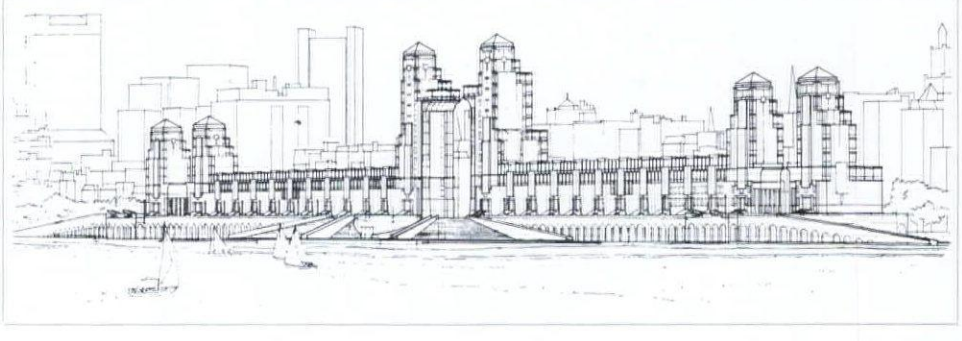
K

●Storrow Terrace





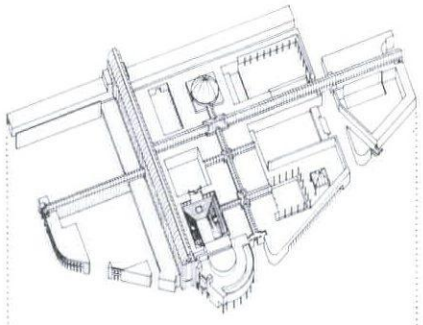


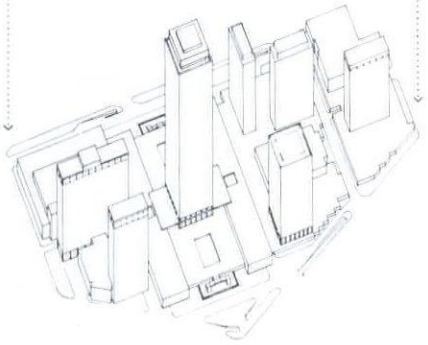


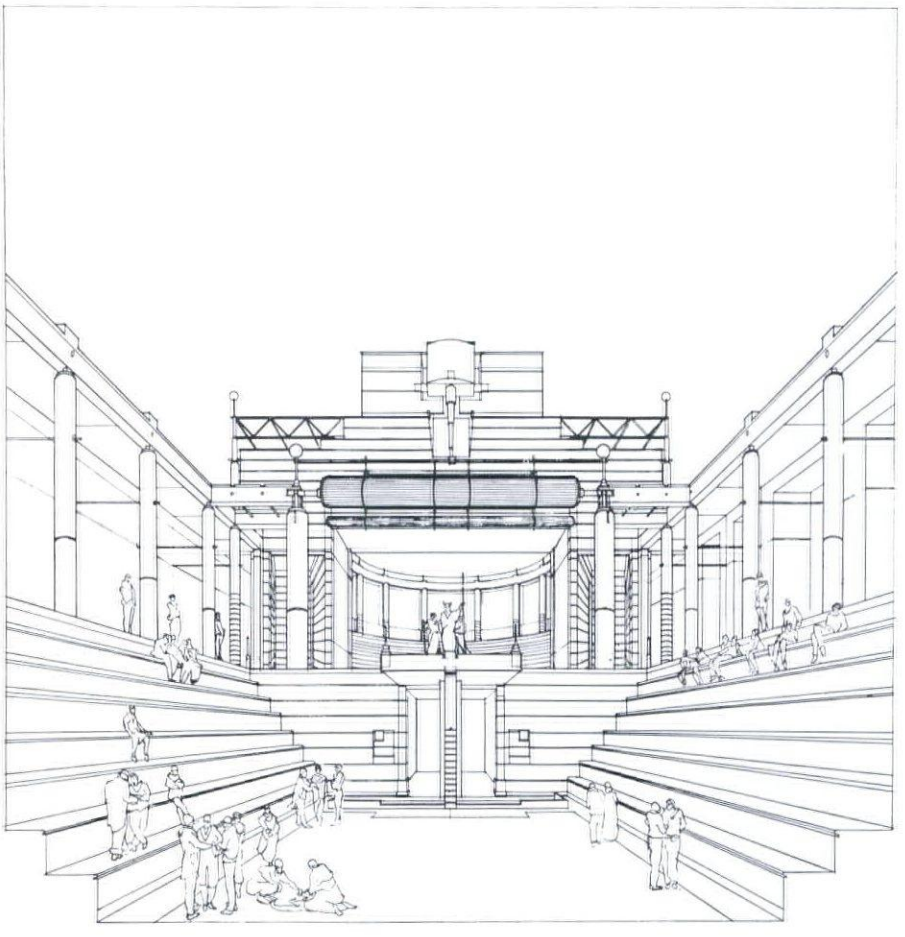
●Prudential Center Area









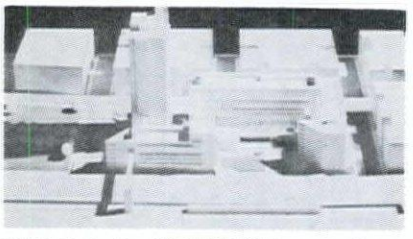


コゥター／キム：都市の文脈の解読 Kotter／Kim: Reading the Urban Contexts *by Makoto Watanabe* 渡辺真理

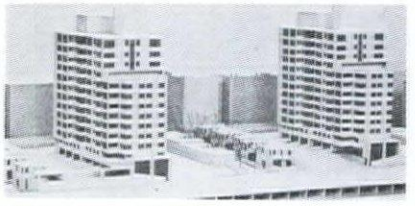
ロバート・ヴェンチューリが，ウェルズ／コゥター／デニスによるブライトン・ビーチ集合住宅のコンペティション1等案[①]をヴェンチューリ自身の応募案[②]と比較して批判したことが，皮肉なことにコゥターの名を世に知られるようにした．　たしかに，ヴェンチューリ案は50年代，60年代のごくありふれた，平凡な集合住宅をデザイン・モチーフにしていて，〈醜悪で陳腐（アグリー・アンド・オーディナリー）な〉建築のマニフェストにふさわしいものだった．しかしそれはコゥターたちの案のもっている意味を少しも失なわせるものではない．

両者の違いは，建築のコンテキストの読みとり方の違いに過ぎない，とスチュアート・コーエンは言う[❶]．　つまりヴェンチューリは50年代60年代のアメリカ文化に特徴的な現象に着目しそれを表現することを意図したのに対し，コゥターたちの狙いは既存の都市組織を分析しそれに新しい意味をつけ加えることにあった．これを，コーエンは〈カルチュラル・コンテクスチュアリズム〉と〈フィジカル・コンテクスチュアリズム〉という2つのコンテクスチュアリズムということばを用いて説明しているが，それは建築をとりまく文脈（コンテキスト）から，〈文化という文脈〉と〈都市という文脈〉をとりあげる作業といってもいいだろう．　つまり，ヴェンチューリが〈文化の文脈〉に着目したのに対し，コゥターたちは〈都市の文脈〉の解読と再合成を試みたことになる．　そして，もっと長い時間のスパンで考えるならば，〈都市の文脈〉は〈文化の文脈〉をもその中に併せもつことになる——のではないか．

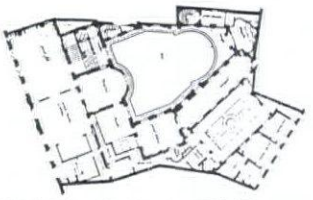
コゥターのような〈都市の文脈〉に関心をもつ建築家の多くは，60年代末から70年代初期にコーネル大学に（教師だったか生徒だったかの差はあるが）何らかの形で関係している．コゥターのパートナーだった，ウェルズやデニスはもちろん（デニスは現在ハーバードの助教授で，彼の《パリの邸宅図面集》は未だ出版されていないがハーバードの学生の製図板の脇には必ずゼロックス・コピーがあるという[❷]），プリンストンで教えるアラン・チマコフ，スティーヴ・ピーターソン（レ・アレの競技設計入選案が記憶に新しい），もっと大家としてはウァーナー・セリグマン，と例をあげ始めたらきりがない．　ちなみに，コゥターの現在の公私とものパートナーであるスージィ・キムもコーネル卒業生である．　これらの秀れた建築家を輩出したコーネル・スクールの震源地は，いうまでもなくコーリン・ロウ教授である．　コゥターは，マイケル・デニスやスティーヴ・ピーターソンと自分がどう違うかではなくて，同じ言語で話し合える友人がいるということの方が重要に思える，と言っている．　ロウの下での〈コーネル・スクール〉の特色はふたつあった．　ひとつは，アーバン・デザインに重点がおかれたこと（Figure Ground の黒白に塗りわけられた地図を武器として）．　もうひとつは，建築をひとつの連続性（コンティニュイティ）（原初以来現代までとぎれることなく続いているもの）として考えたこと．トラディショナルな建築と近代建築という対立ではなくて，どのようにしたら連続性を保つことができるのか，が問われる．　それに必要なのは，もちろん革命ではなくて，歴史を意識する一種のバランス感覚である．　近代建築は総てなのではなく，ひとつの体系でありもうひとつの語彙のセットだった．　「ぼくたちが，もっとも関心をもっていたのは18世紀にポジティヴな空間だった部屋と広場をどのようにして20世紀に実現するかということだった．」とコゥターはいう．　「大切なのは内部空間（部屋）と外部空間（広場）をつくりあげることで，どんなヴォキャブラリィを用いているかではない．ぼくのデザインを歴史主義と呼ぶ人がいるが，歴史主義なのはデザインではない．　都市組織——都市の文脈の歴史性がトラディショナルな語彙を必要とするのだ．」



①ブライトン・ビーチ集合住宅1等案，コゥター他



②同上，ベンチューリ応募案



③パリのホテル・ド・ボーベーの平面図

都市の文脈への関心は，それが〈図—地〉の図面として表現されることを通じてタイポロジーへの関心と結びつく．　前に述べたマイケル・デニスの図面集は，部屋のタイポロジー研究に他ならない[③]し，タイポロジーに基いてそれぞれの外部空間に該当する都市空間のタイプをちりばめていく作業の成果が，コゥター／キムの《ボストン・プラン》の〈図—地〉の図面には示されている．

コゥター／キムは1978年にパートナー・シップを結成し，数多くのアーバン・デザインのプロジェクトを手がけている．　建築の分野ではイタリアのシチリア島の別荘計画と自らのオフィスの改装案で，2度 P. A. 賞を得ているが小住宅の設計以上の仕事に恵まれていなかった．現在，ケンブリッジで工事中の Hasting Tapley 保険会社ビルの来春の完成が待たれるゆえんである．

コゥターは今年6月までハーバード大学デザイン学部大学院（GSD）の教授だったが，「設計の仕事に専念するため」休職中．　描きかけの図面からでも学生の意図を即座にみぬいて，そのためにはここをこうしなければいけないと的確にアドヴァイスしてくれるので学生にとってはカミサマのようなクリティック（設計指導教官）だったから，今頃ハーバード大学のGSDの学生たちは戦々兢々としているにちがいない．ゴ愁傷サマ．　キムは GSD のアーバン・デザイン科を卒業していてハーバードではおなじみのクリティックのひとり．　GSD の女子学生たちには教授も男子学生も虫ケラくらいにしか思っていない（ように見える）アグレッシブなツワモノが揃っていたが，キムの講評のキビシサには女の子たちのアグレッシブネスがいかにもヒヨッコに見えた．　男のボクなどコワくて近寄ることさえ考えなかった．　従って本当はどんな人柄なのか知らない．　アシカラズ．

❶Opposition vol. 2 MIT Press

❷Skyline 8204

●わたなべ・まこと／磯崎アトリエ

Schwartz / Silver





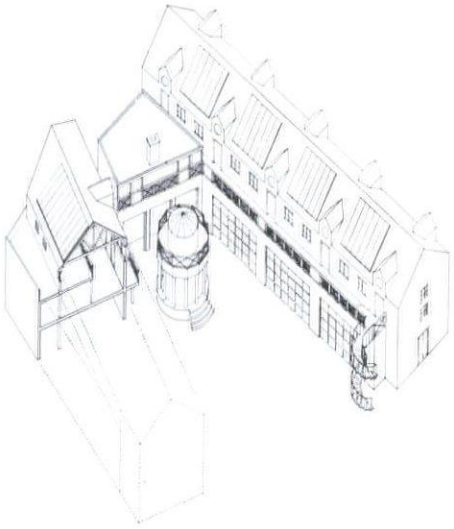
Warren Schwartz：1943年生まれ．
コーネル大学，ハーバード大学で建築を学ぶ．　幾つかの事務所を経て1979年 Schwartz／Silver を設立．　ロードアイランド・スクール・オブ・デザインで教えている．

Robert Silver：1946年生まれ．
ニューヨーク市大学，ケンブリッジ大学，ハーバード大学で建築を学ぶ．　幾つかの事務所を経て Schwartz／Silver を設立．

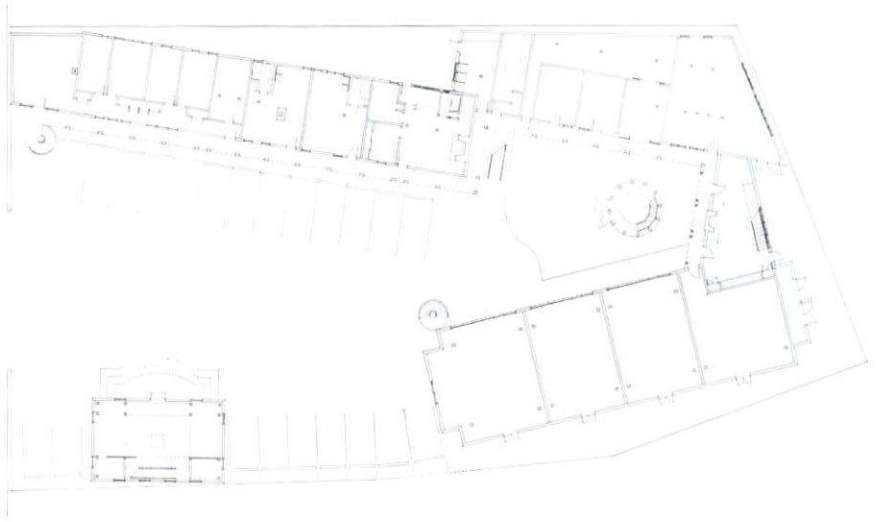
Fine Arts Work Center *Provincetown, Mass.*

ファイン・アーツ・ワーク・センターはプロビンスタウンにある歴史的な芸術家達のスタジオの増改築の仕事を５つの設計事務所に依頼した．　シュワルツ・アンド・シルバーはそのうちのひとつであった．　スタジオは1914年に建てられたもので，遮音が悪く暖房も不十分で快適に過すための必要最低限の条件を満たしているにすぎなかった．　彼らの提示した解答はこういった問題を解決するだけでなく，必要なスタジオのスペースを増築し，既存の建物に一貫した全体性をもたせることであった．　増築された新しい棟とロフトは２階の歩廊で接続され，ひとつの中庭を形づくる．そのまん中に位置する見晴らし台はちょっとしたコンサートや，詩の朗読の場を提供する．

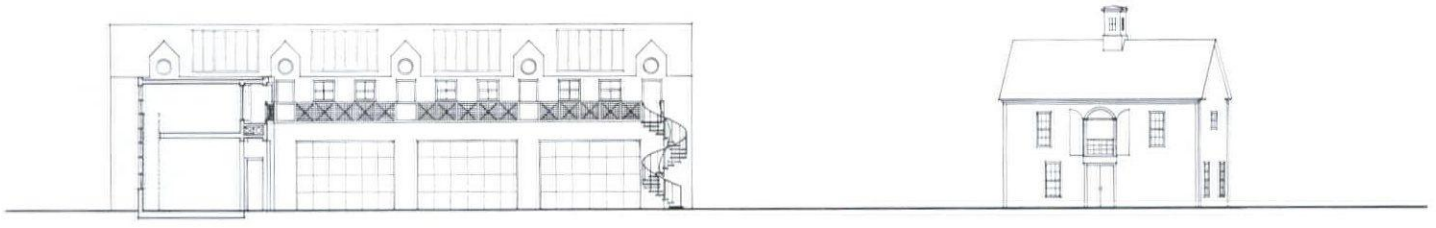
Schwartz/Silver was one of five firms commissioned by the Fine Arts Work Center to design renovations and additions to their historic artists studios in Provincetown. The studios, built in 1914, were barely insulated, inadequately heated and had only the most primitive amenities. The solution not only solves these problems, but adds needed studio space and rationalizes the existing buildings into a coherent whole. Connected by second floor walk ways, a new building and new loft spaces are added to form a courtyard. At its center is a gazebo used for small concerts and poetry readings.

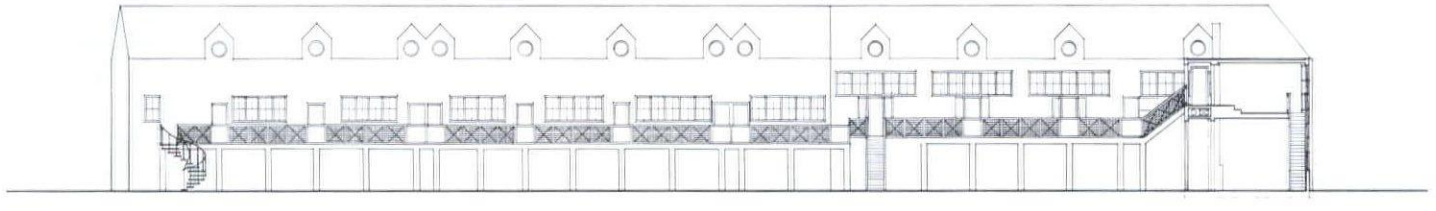


アイソメ図　isometric



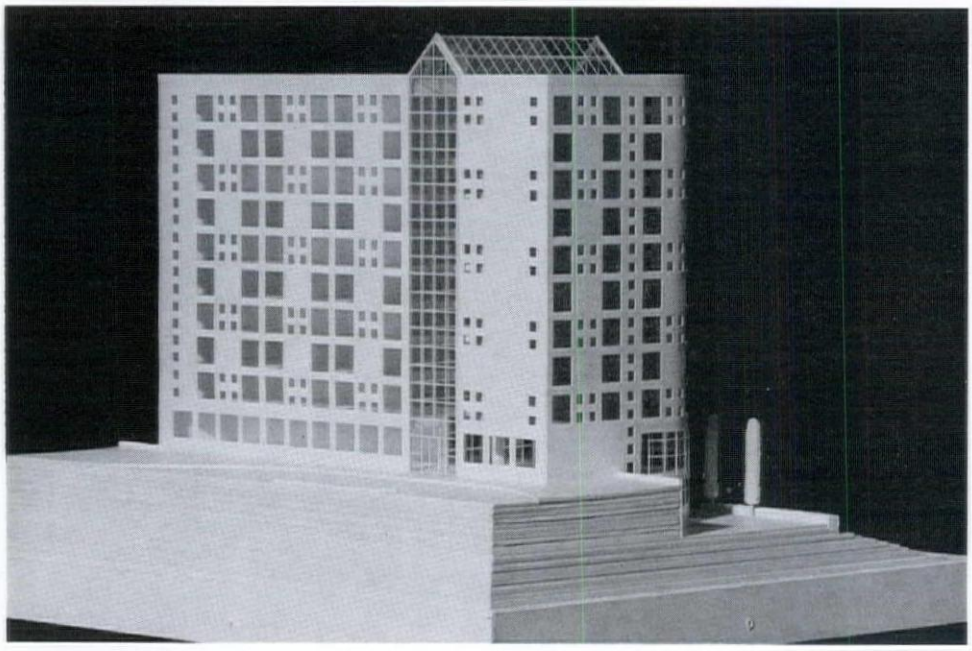
平面図　plan

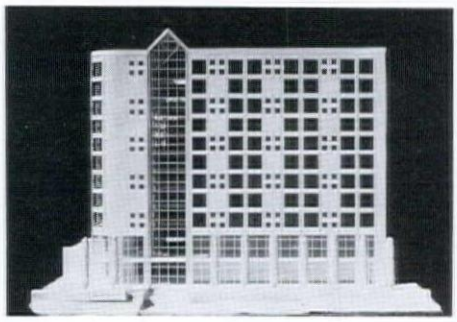




断面図　section

Cross Keys Inn *Columbia, Mass.*



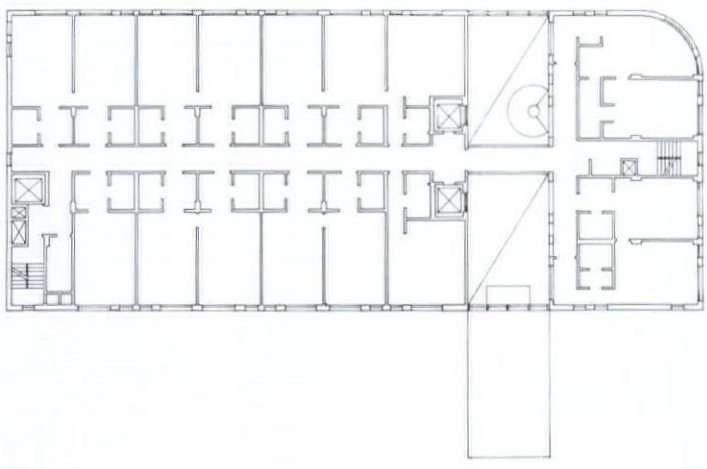


クロス・キーズ・インはコロンビアのニュータウンにあるホテルで，湖に面し，客室は150室，宴会室は現在建設中である．　効率のよい中廊下式のプランを採用することにより，中央広場を創りだしている．　中央広場の上を横ぎるブリッジからは湖のすばらしい景色を一望することができ，かたや湖畔をドライブする車の中からは，灯りのついた中央広場がまるでガラスでできたオベリスクのように映るのである．

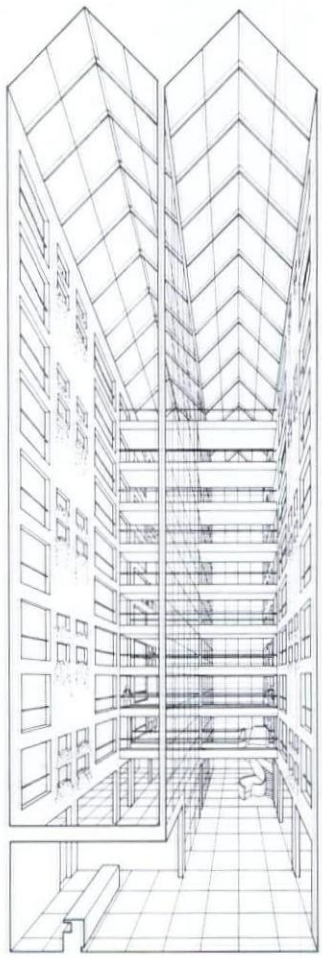
The Cross Keys Inn is a 150 room lakefront hotel and banquet facility now under construction in the new town of Columbia. The efficient double loaded corridor plan is divided to create an atrium. Bridges which cross the atrium have magnificent views of the lake, while from the opposite shore, drivers see the atrium lit like a glassy obelisk.



断面図　section



平面図　plan



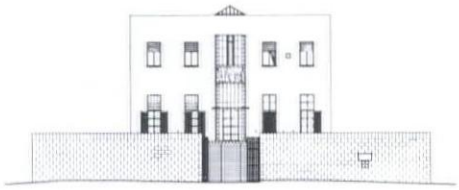
Machado / Silvetti

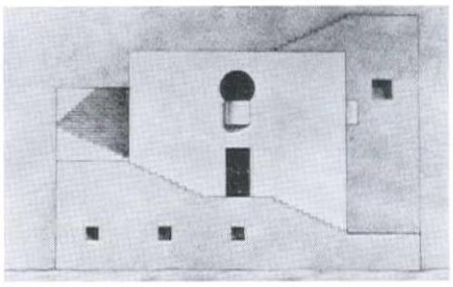
Rodolfo Machado：ブエノスアイレスに生まれる．　ブエノスアイレス大学を卒業後，パリで学び，さらにカリフォルニアに渡ってバークレーの環境デザインカレッジで学ぶ．　サンフランシスコとピッツバーグで事務所を持った後，ロード・アイランド・スクール・オブ・デザインで教鞭をとる．

Jorge Silvetti：1942年アルゼンチンに生まれる．　ブエノスアイレス大学を卒業後渡米，UCLA で MA を得る．　UCLA，カーネギー・メロン大学で教えた後，ハーバード大学で教鞭をとっている．

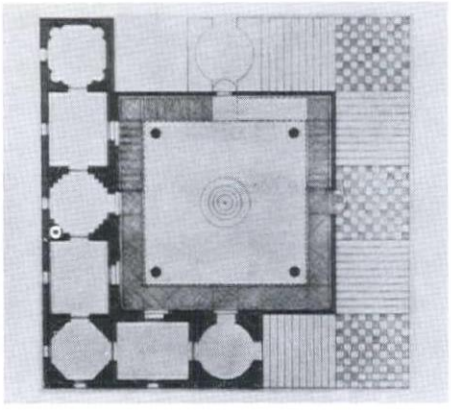


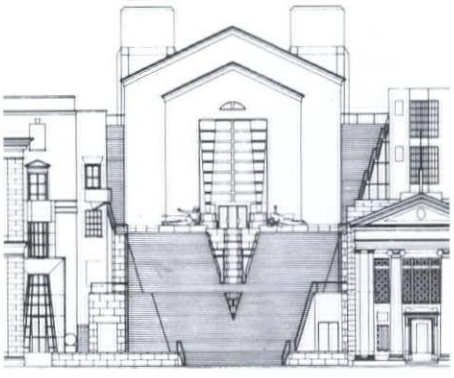












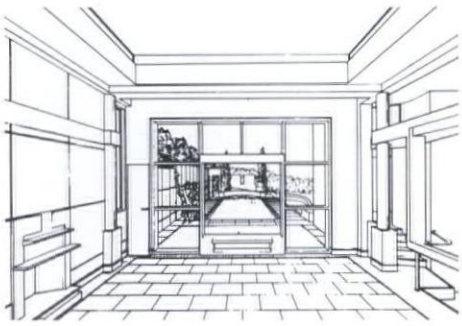
上 (above)：County House by R. Machado, 1977.　パドヴァ近郊の16世紀に建てられたヴィラ・モンテッキアに深く感動して作ったプロジェクト．

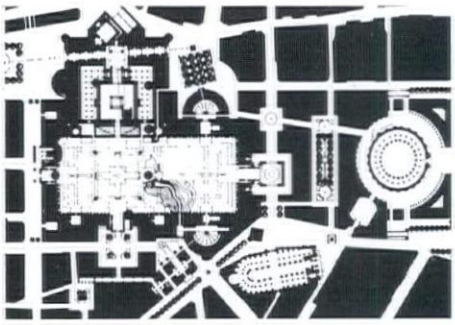
中 (middle)：A House on the Island of Djerba, Tunisia, 1977, by J. Silvetti.　立方体と階段とをテーマにした作品．

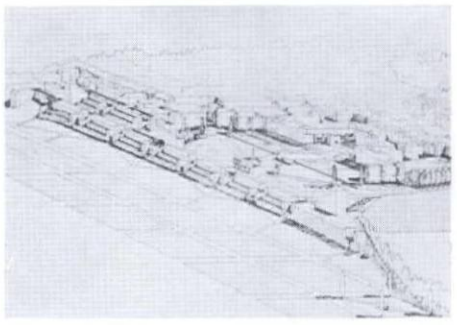
右 (right)：The Steps of Providence, Rhode Island, 1978.　1980年度の PA 賞を獲得した作品．ロード・アイランド・スクール・オブ・デザインのキャンパスの改造計画．　互いに分断されている幾つもの棟を，階段を用いて関係づけようとしたもの．　階段の修辞的操作のヴァリエーション．

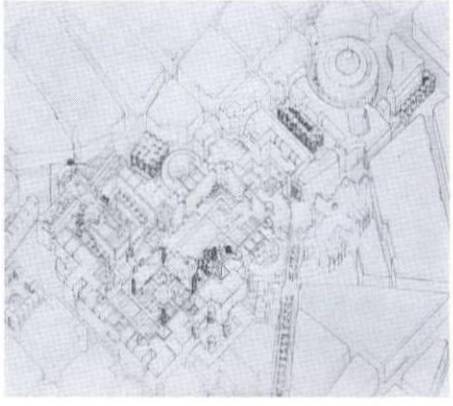
Steven K. Peterson

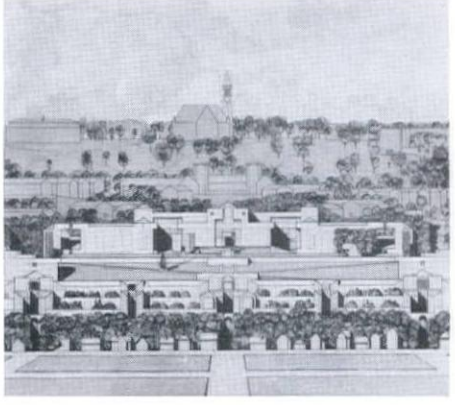
スチーヴン・ピーターソン：1940年生まれ．
コーネル大学で建築を学ぶ．
コロンビア大学で教えた後，プリンストンに移り，Alan Chimacoff とパートナーシップを組むが，現在は解消している．











上 (above)：Kornaza House, Montauk, N. Y.　A. Chimacoff との共作．　遠くに至る眺めがテーマ．

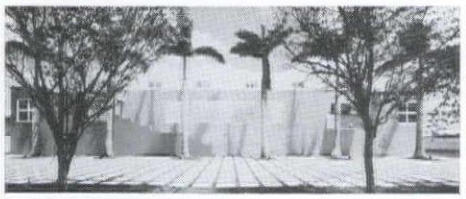
中 (middle)：A Proposal for Les Halles, Paris.　レ・アール地区再開発コンペ応募案．　秘密めいた庭園を内包した複雑な壁，通路，小室，階段，門……．

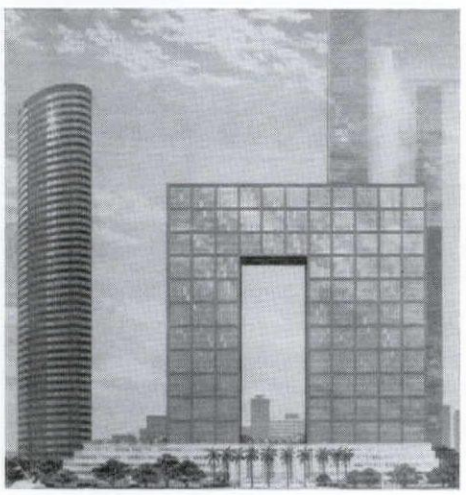
右 (right)：University Avenue Development, Ithaca, N. Y..　1981年度 PA 賞アーバン・デザイン部門の1席．　丘の上にあるコーネル大学のキャンパスと関連して，丘の中腹のところに，宿舎，オーディ，講義室などを配置する計画．　既存の図書館の塔を中心とし，テラスを多用した巧妙なプランニング．

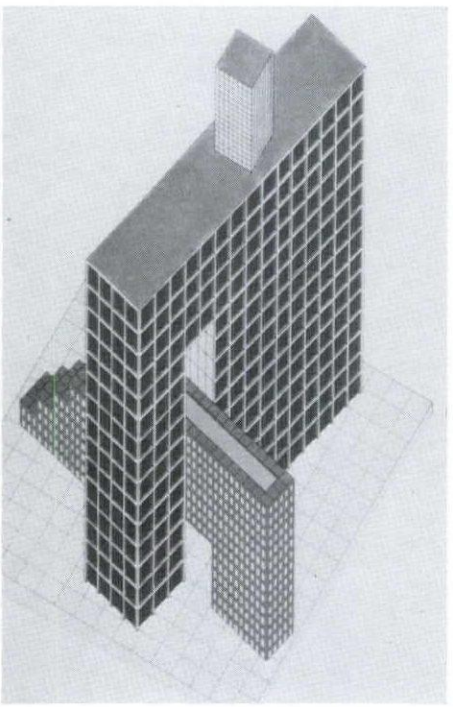
Arquitectonica

アーキテクトニカ：1976年に，Hervin Romney（1941年生まれ．　イェール大学環境デザイン科卒），Andres Duaney（前出．p.94参照），Bernardo Fort-Brescia（1951年生まれ．ハーバード大学建築科卒）の3人によって設立される，　他にLaurenda Spear（1950年生まれ．　コロンビア大学卒）とElizabeth Plater Zyberk（前出．p. 94参照）の2人が参加．現在 Duany と Zyberk は組織を離れた．

ブーム・タウンであるマイアミに拠を置き，大規模なプロジェクトを続々と発表しており，そのうちの一部が完成し始めている．　おそらくはマイアミ以外の町では考えられないような単純な立体の組み合せ．　それは大雑把の一歩手前でかろうじて踏みとどまっているかのようだ．







左上 (left above)：Spear House, Miami, Fl. 1977．デビュー作品．　サーモン・ピンクの重なり合う面．

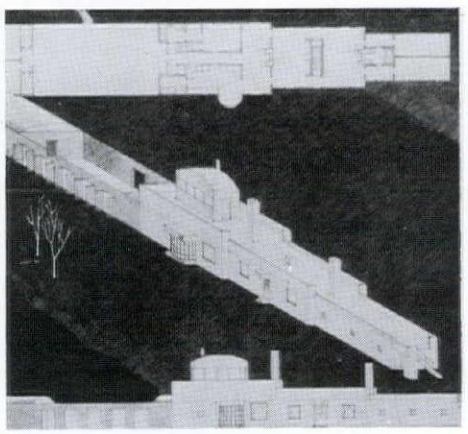
左下 (left below)：The Helmsley Center, Miami Fl. 1981．　ホテル，事務所，商店などを含んだ巨大な建物．

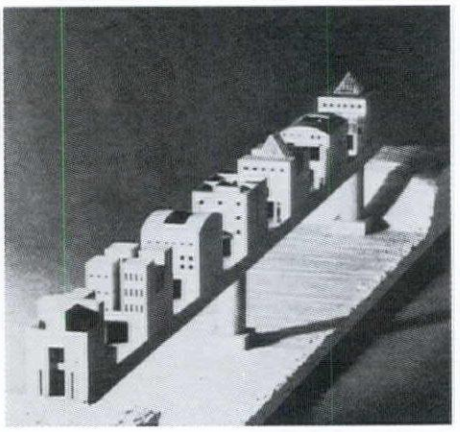
右 (right)：Brickell Biscayne Corporation Condominium, Miami, Fl. 1978.

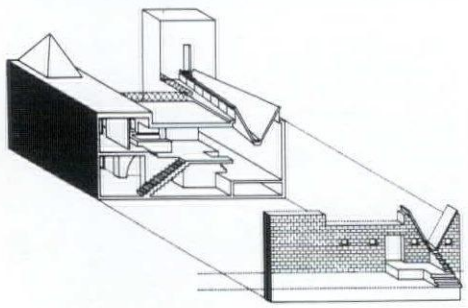
Steven Holl

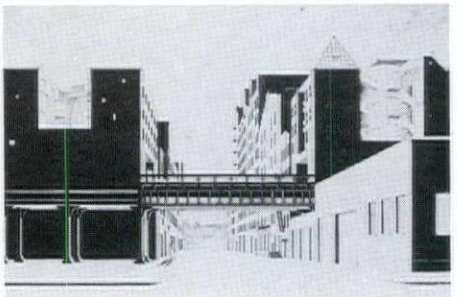
スティーヴン・ホル：1971年ワシントン大学を卒業．　AAスクールで学ぶ．　1975年より独立して事務所を開設．











左上 (left above)：Telescope House, Maryland, 1978．文字通り，折り込み式望遠鏡の形をした老夫婦のための住宅．

左下 (left below)：Metz House, Staten Island, N. Y.

右 (right)：Bridge of Houses, New York, 1981．ニューヨークの市街地の再開発計画．　橋という近代的な巨大構造物の上に，都市的な住居棟を並置するという折衷的計画．

Gerald Allen



ジェラルド・アレン：1942年生まれ．
ケンブリッジ大学で美術，イェール大学で哲学，さらに建築を学ぶ．　P.ジョンソンの事務所を経て，1973—79年AR誌の編集部，1981年より自らの事務所を持つ．　AR誌上での評論は定評があった．　またイェール時代の恩師チャールズ・ムーアとの共著に《The Place of Houses》，《Dimensions: space, shape & scale in architecture》がある．

A Fountain Project *Central Park, N.Y.*



photo = Timothy Hursley



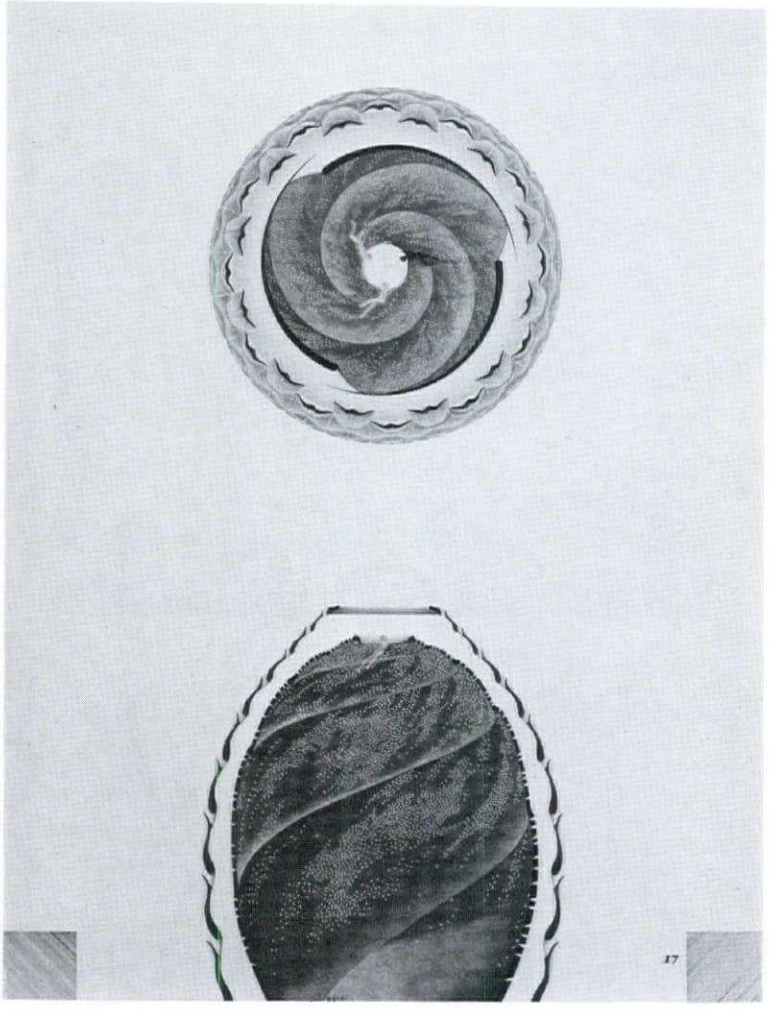
Roger C. Ferri



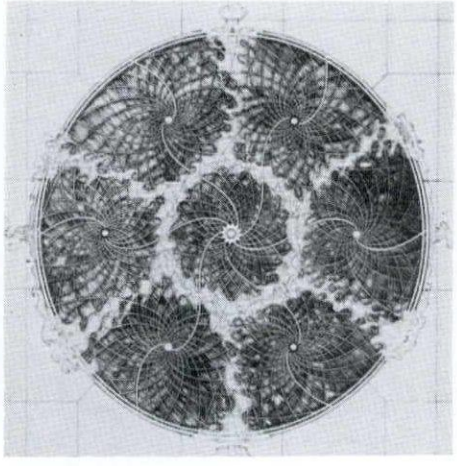
ロジャー・フェリ：1949年ニューヨークに生まれる．
プラット・インスティテュートを卒業．
現在はニューヨークに事務所を持つ．
フォートワースのタンディー・センター・ホテルのインテリアなど幾つかの実作がある．

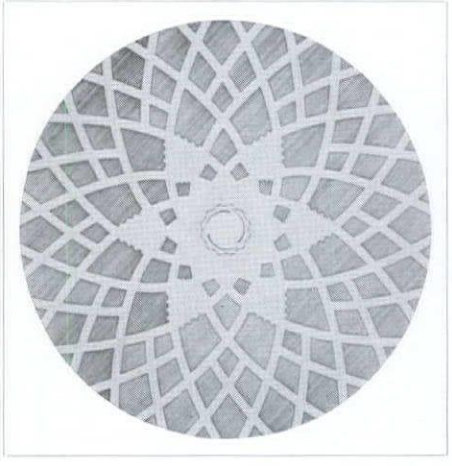
ここに紹介するのは，ニューヨーク近代美術館の援助を得てなされた計画案である．

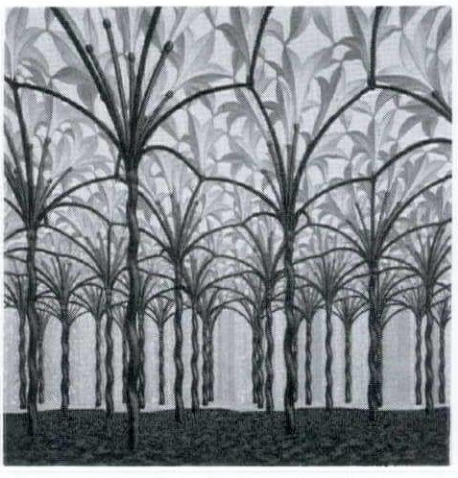
Pedestrian City *1979*



ポスト・石油時代の都市をモデルとして提案した〈歩行者の町〉である．　それは戦後の開発政策に対するアンチ・テーゼでもある．　つまり，農地を次々につぶして，既存の環境との連けいを考えることなしに，ゴルフ場やら住宅地に変えてしまうというやり方に対して，私たちは都市と田園との統合を図ったのである．町は農園のまん中に存在する半径2マイルの円形都市として考えられている（左下図）．　道路，サービス配管などの基幹は周囲をめぐっている．　道はゆるやかに曲って交差する．　地上の道はもちろん歩行者専用．　中心部（下中）には公共建築が配され，そのまた中心の広場にはモニュメンタルなドームが据えられている（上）．　そのドームの周辺の6ケ所には林のような公共空間がある（右下）．

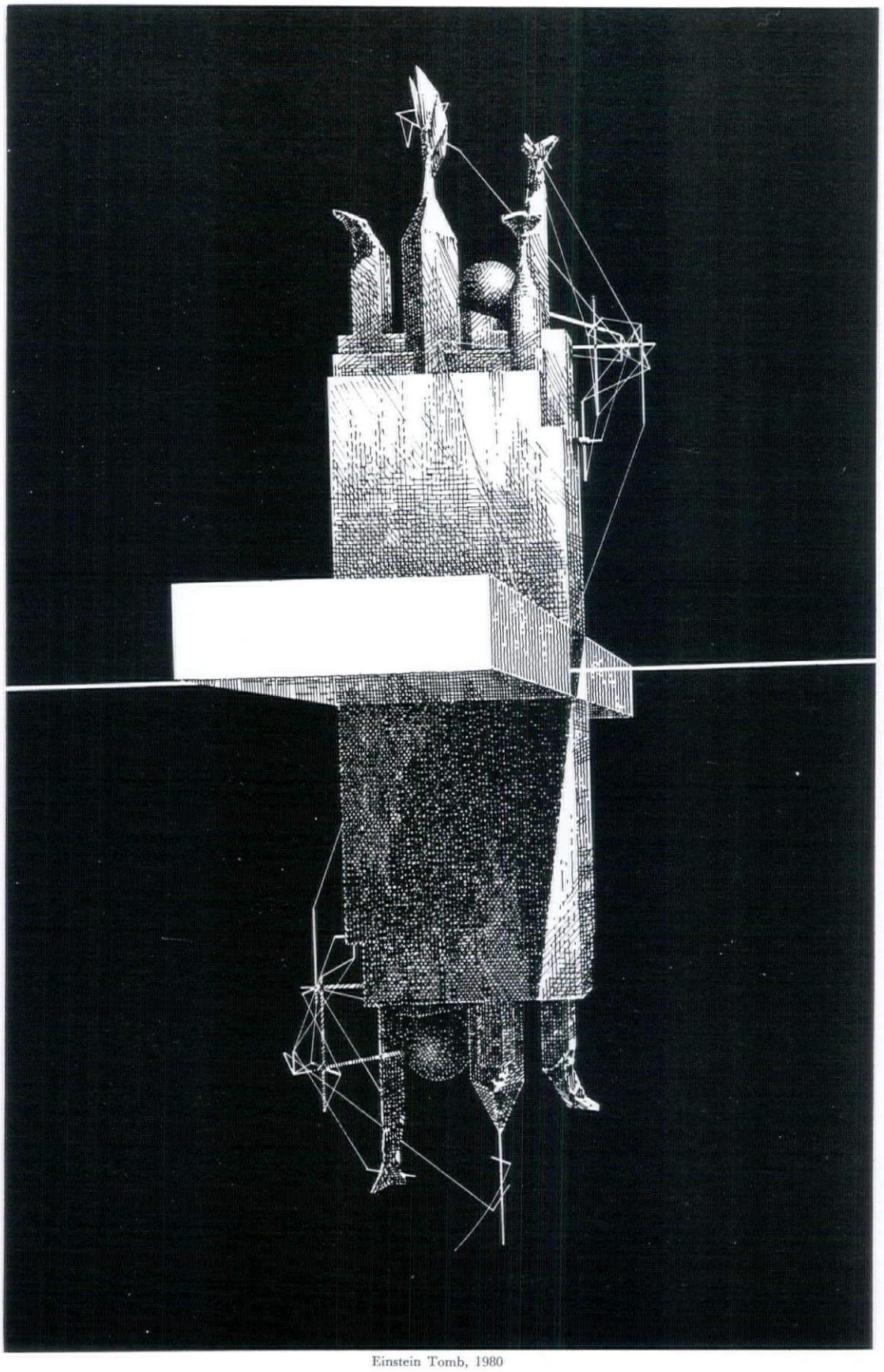




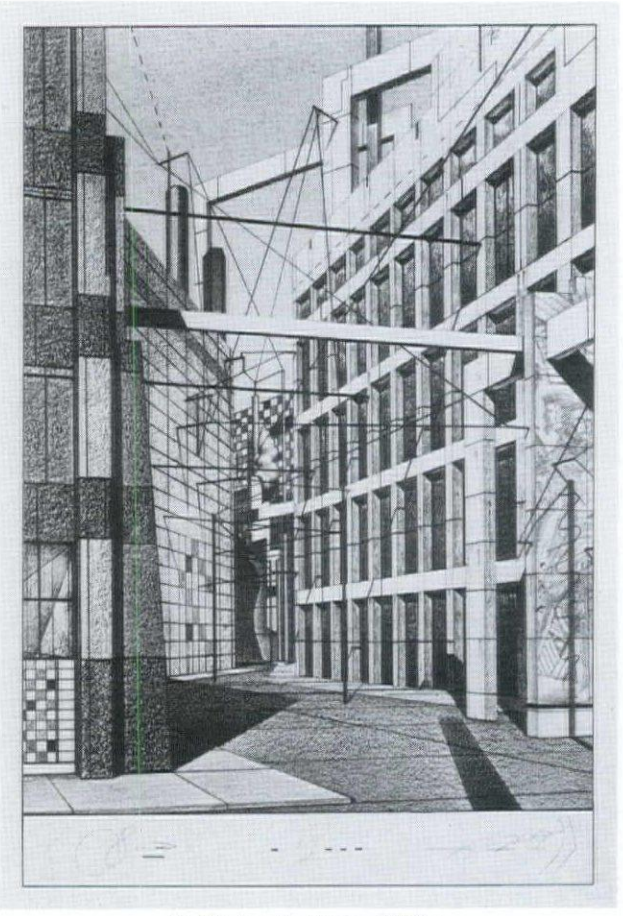


Lebbeus Woods

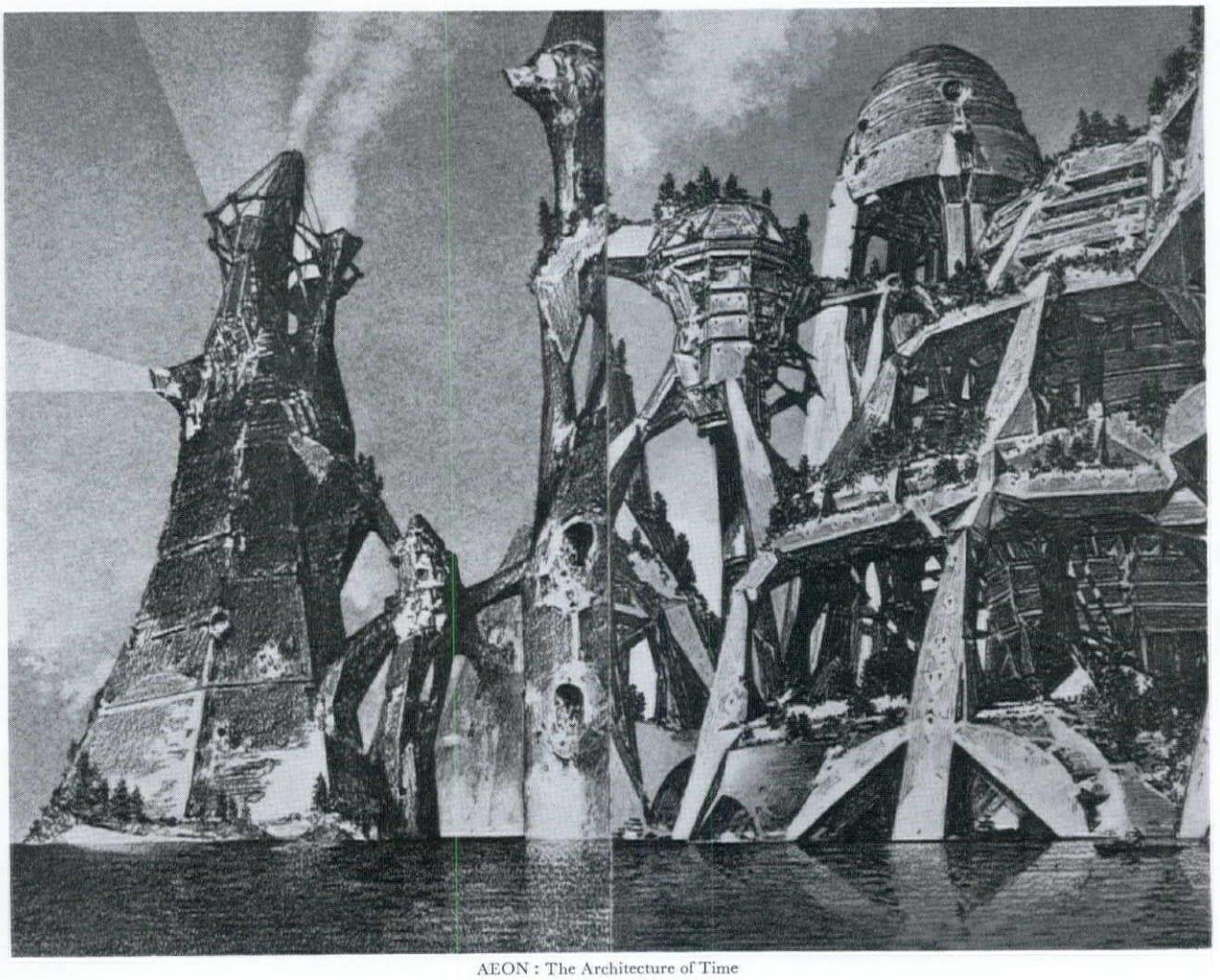
1940年ミシガン生まれ.
パードゥ大学でエンジニアリングを，イリノイ大学で建築を修める.
サーリネン・アソシエイツ，ローチ・アンド・ディンケルー・アソシエイツに一時勤務，またIDSのデザイン・ディレクターも勤めた.
1976年以来，ニューヨークに在住し，ドローイングの実践を職業的に深める一方，執筆活動やプロジェクト等でデザインの研究を続けている.



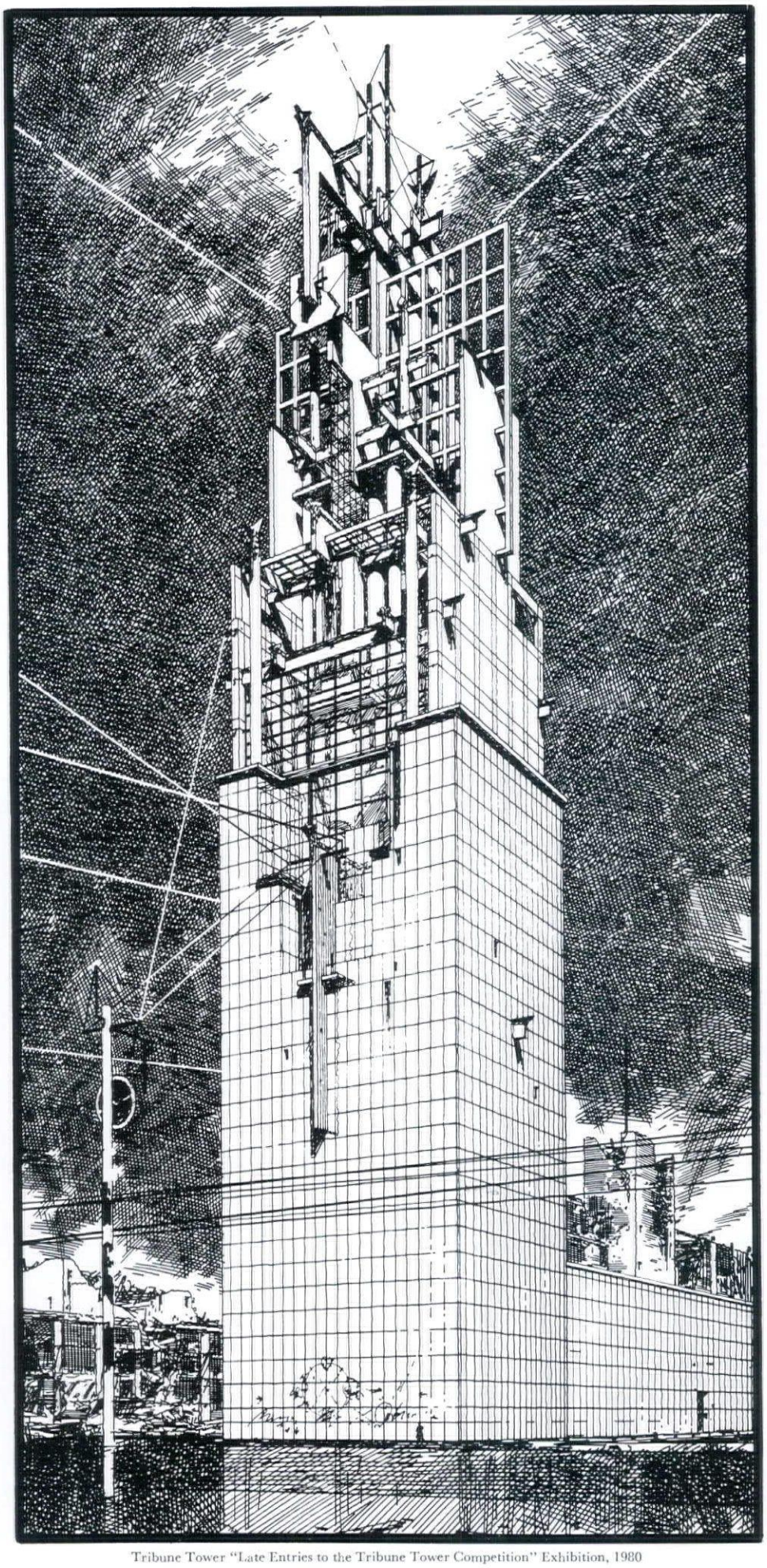
Einstein Tomb, 1980



Architecture—Sculpture—Painting



AEON : The Architecture of Time

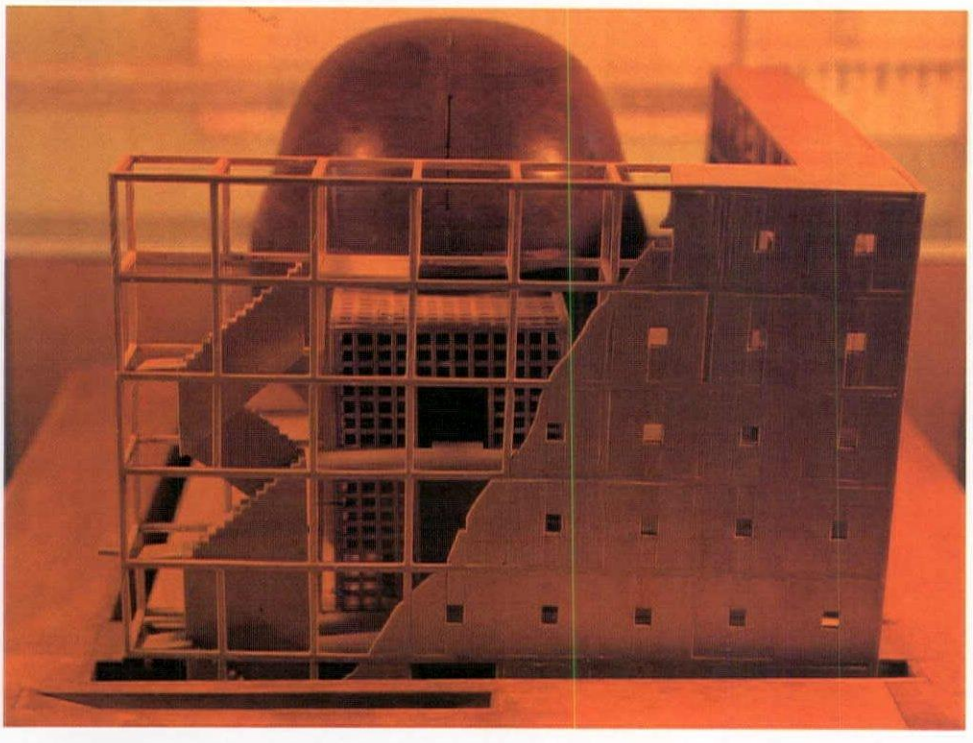


Tribune Tower "Late Entries to the Tribune Tower Competition" Exhibition, 1980

Giuliano Fiorenzoli



ジュリアーノ・フィオレンツォーリ：1943年イタリアのフィレンツェに生まれる．　フィレンツェ大学とMITで建築を修業．都市研究を目的とするグループ〈メトロポリス〉の一員であり，プラット・インスティテュートで教鞭をとってもいる．　R. アブラハム，A. ゲラーとともにナイアガラ瀑布のレインボー・センター・プラザのコンペで1等に入選している．　アブラハムについては本誌1977年3月号を参照．　フィオレンツォーリのドローイングはケネス・フランプトンが〈沈黙の建築〉と呼称したアブラハムのドローイングと極めて近似している．

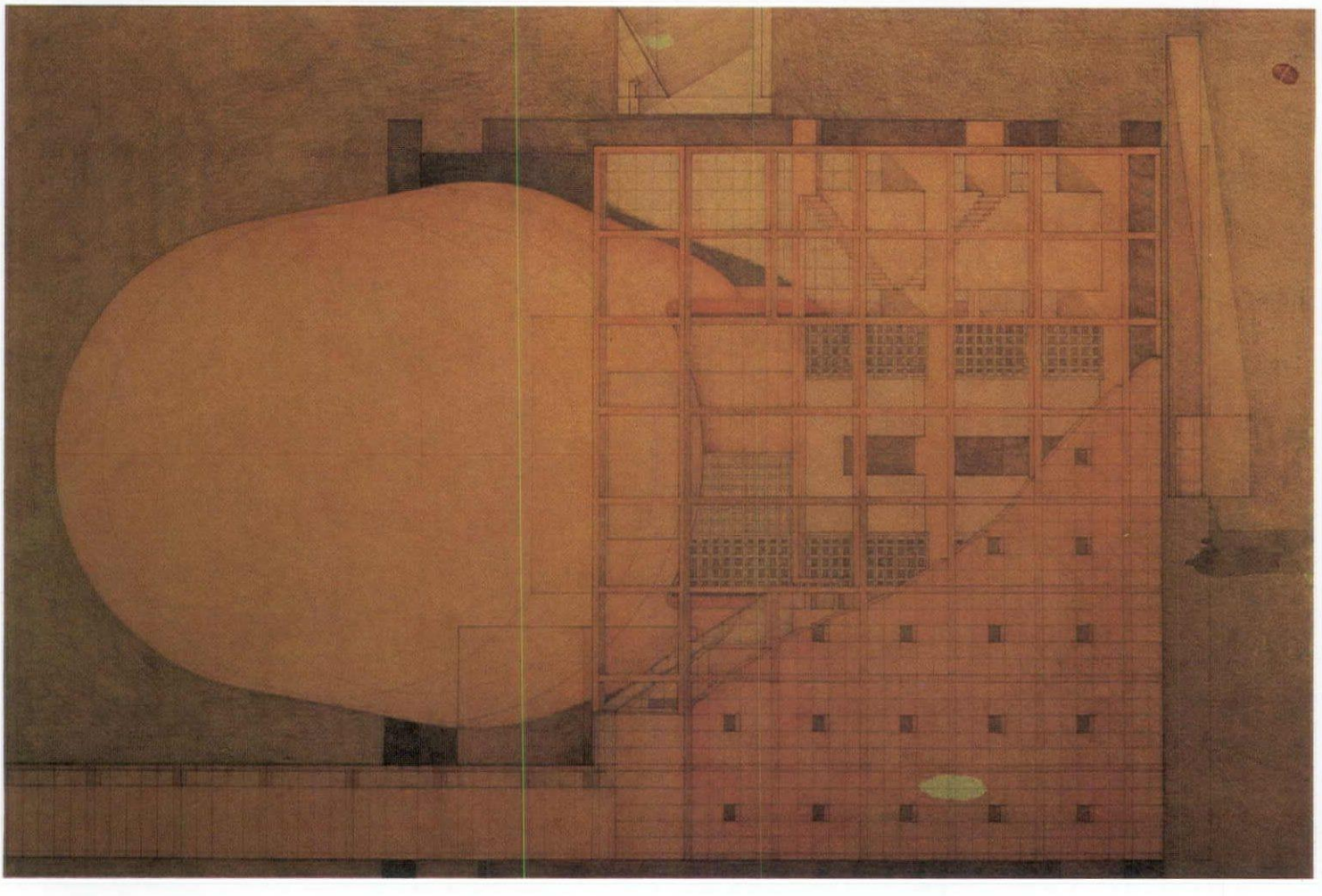


●〈家は人間的である〉のドローイング，ニューヨーク（下）

●〈家は人間的である〉の模型の組立部品（上）

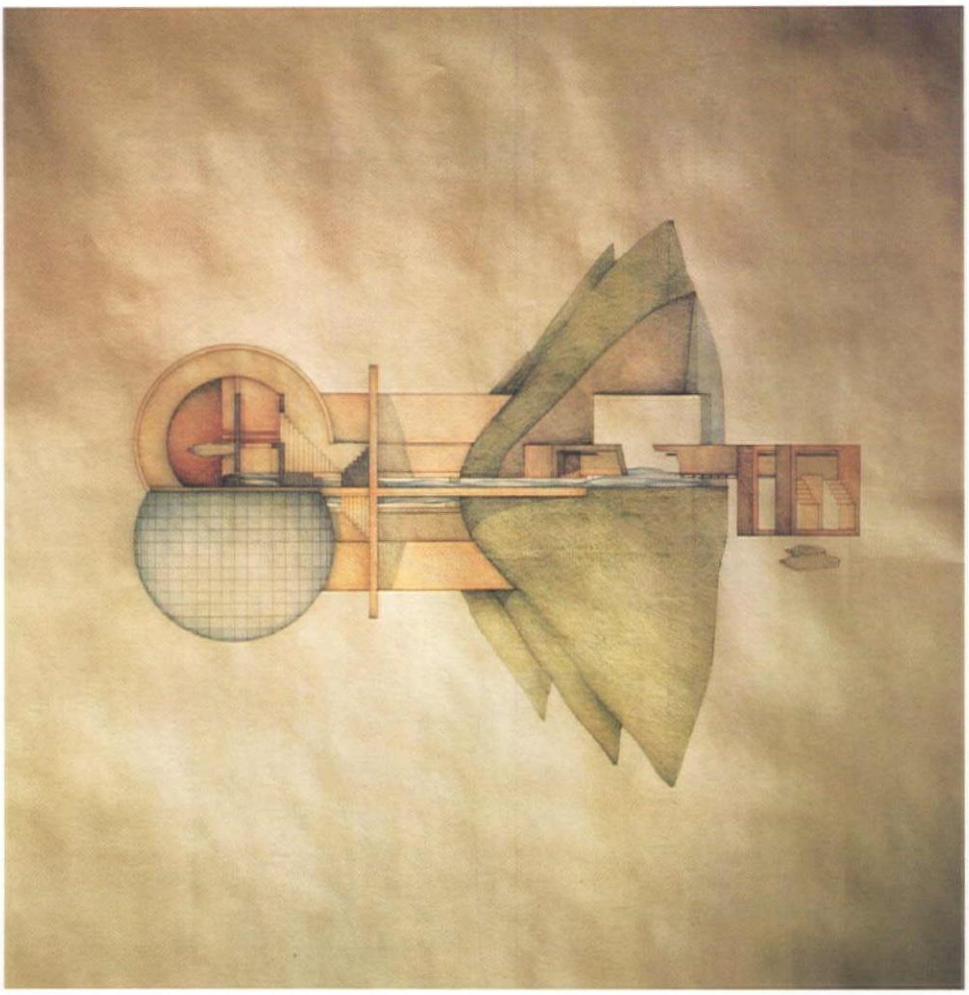
ドローイングも模型もニューヨークのIAUSの〈家のイメージ〉展，1977年に出品されたもの．　これらが示すメタファーは，仮設的な建築構造体と人間の頭の形をした象徴的なヴォリュームを結びつけている．あらゆる部屋は構造体（廊下の系（セリー））が〈頭〉の部分と交わるところにしつらえられる．　部分の明確なシンボリズムをもつ形態は互換性をもっている．

Drawing of the 'House is human'.
Different combinations of the parts of the model made for the 'House is human'.
Both, the drawing and the model were presented in 1977 in a show 'the Image of the house' at the Institute of Architecture and Urban Studies in N.Y.



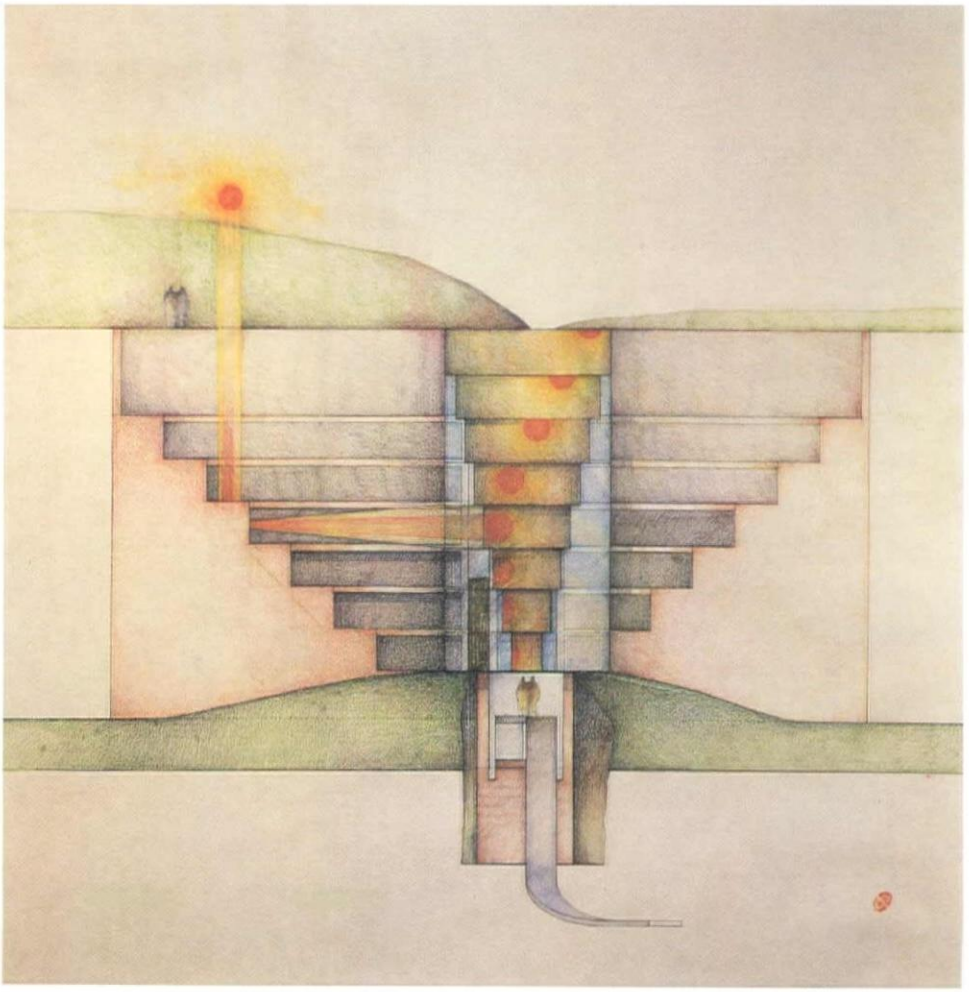
● 〈入口のない家〉の正面（色鉛筆）
このプロジェクトは，プロジェクト自体のうちに建築の入口が見出せないという事実を基本にしている（第1の入口は他家の入口の鏡面反射であり，第2の入口は地中に隠され，第3の入口は建物の裏側にあり，見えない）．　究極的に唯一現実の入口とは，〈ドローイングの中へ〉のそれである．

Front view of the 'House with no entrances'. Colored pencil, on papier.
The metaphor this time is based on the fact that no architectural entrances are visible in the project itself (one is the mirror reflection of the entrance of an other house, the second is hidden in the ground, the third is in the back of the building and therefore hidden by it. Ultimately the only real entrance is that one 'into the drawing' because of the perspective.



● 〈日没の家〉（色鉛筆，1976年，ニューヨーク）
これはシリーズもののドローイングプロジェクトのひとつで，建築における光，時間，空間の概念の探求を表現している．　あらかじめ想定された時＝日没時において，これらすべての概念を総合する試みである．我々は〈日没〉というイヴェントの観察者となる．

'House at Sunset', colored pencil drawing. 1976, N.Y.
This drawing-project is one of a series of others and represents an investigation on the notion of light, time, and space in Architecture. My emotional state of mind has suggested a possible synthesis of all these concept in the representation of two landscapes at a given imagined point in time: the sunset. We are the spectators of such an event. This work wents clearly not to suggest a building to be built, but instead an attitude towards Architecture as part of the needed work that any architect should express in preparation to a project to be built.



イメージパラダイムの回転ドア

The Revolving Door of Image Paradigm *by Yutaka Hikosaka*

彦坂 裕

イメージの監禁

イメージの主体というものは，それがプリズナーになることを何時も夢見ているのではないだろうか．

イメージの開示する奥行きがなく底なしの空間が，限りなく伸延していくと同時にまた限りなく監禁されているという感覚，それはおそらく誰しもが経験することがらだろう．　だが，それでは何によって監禁されるというのか．科学哲学によって？ヘルメスの呪縛によって？それとも内的なイメージの市場力学によって？あるいはそうではなく，むしろ自動詞的に「監禁される」のだろうか．

1980年の奥付けをもつ小さな冊子（《Pamphlet Architecture》の第6号と記されている）には，美しいがすこぶるオブセッショナルな幾葉かの図版プロジェクト，スケッチ，詩的なマニフェスト風なテクストが収められている．　芸術それ自体のセレブレーションとして自らのドローイングを位置付けるレベウス・ウッズは，同時にそれを「総合」の第一言語，存在方式として措定する．「全体性という神話」を希求し，ある種の確執をもちながら際限なく反復されるディスクール．　ここで投企されたオジェブは《アインシュタインの墓標》[①]と名指されていた．

ウッズによって語られる対象の，おそらくはその多様性にもかかわらず，単明な原理にもとづく作品の縮図がここに見受けられる．　いささか未来派風の身振り（むしろオットー・ワグナー派に見られる土木スケールの建造物といった方がいい）と空間があたかもエネルギーによってワープしたようなセッティング，宇宙に浮かぶメドゥーサの筏のような全貌，そこから窺い知れるように彼のコスモロジーは果てしなく〈タイム・オデッセイ〉的なのだ．

「ニュートンやデカルトは〈時間〉をエネルギーと物質の諸関係の中立的な産物として，本質的にそれから独立したものとして考えた……（中略）……アインシュタインは新しい〈時間〉を運動と物質性のメカニックに相互依存的なものと考える」

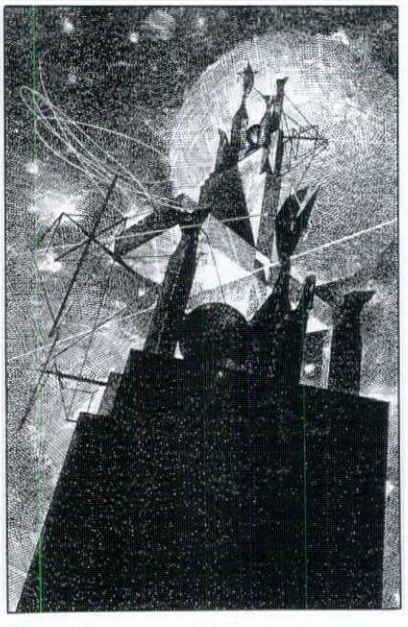
回転子を持つ円環

理神ニュートンの墓標を制作したエティンヌ・ルイ・ブーレーにあっては，地形のフォルムが完璧性の体系，あるいはむしろ地球のメタファーですらあったのだが，ウッズの墓標における地形性（もしくは円の航跡）は，自在の回転性と配置の力学という文脈に関与的である．　ここにおいてアインシュタインの宇宙のフォルムは，先祖帰りというべきか，最古のシンボルコスモスにつながっていく．　たとえばマンダラの円環を想起してもいい[②]．

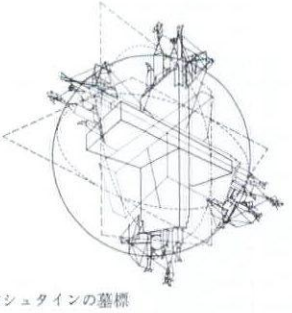
確かに，全体性の観念も時間の形而上学も回転子をもつ円環で遭遇する．　それは科学の発生期に描かれる世界の構図と明らかに二重映しにはならないだろうか．　宇宙の因果関係，それはジョセリン・ゴドウィンによればむしろG・カミーロの「記憶劇場」と酷似したパターンをもつというのだが，そこでは発散性，相応性，循環性の合一が垣間見られる[③]．　とくに循環性の原理は「永劫回帰の神話」であり，それは時間が直線的ではなく，無限から無限へと定まりなく進み，極小から極大の世界まで車輪の入れ子構造のシステムであるという観念に他ならないことを意味するのである．　このシステムに時計のメカニズムがどれほど影を落としているか知る術もないが，進化のこの円環が回転運動という決定的なまでに人工的なモデルで語られたことは興味深い．　ヒューマンスケール（あるいはマクロコスモス＝宇宙のミニチュアとしてのミクロコスモス＝人間）におとした場合，循環性は昼と夜，季節のめぐり，世界の歴史期の変転……ということになっていくわけだ．

AEON：時間の建築

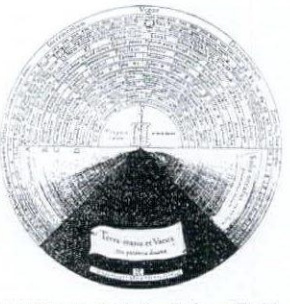
「時間の建築：AEON（注：地質学的な長い時間，もしくは永遠を示す）」が語り，かつ語られる脈絡も，この場においてである[④]．　ウッズの意図はきわめて明解なものだ．　我々の時代はそれ自体，断片かつ解体であり，その創造物たるや，かつてないほど明確に定義されるが決して十全に連続的に流れず，不完全，不連続，非統合の不安に悩まされている．　曰く，「総合の時代」ではなく「分析の時代」であって，それは個人と社会の関係にまで及ぶということである．　来たるべき文明と新しい人間性は，ウッズによれば無秩序から隔絶したものであり，哲学ならびに科学にもとづいて規則付けられたユニヴァーサルな総合として措定される．　英雄的なポーズで太古の世界と現代を短絡させること，そこに「約束の地」を見出そうとするのだ．　AEONの4つの都市――予期されるように要素界の原物質，すなわち土，火，空気，水で彩られているそれも，やはり「時間のサイクルの中でのみ全体的な形態」を獲得することになる．　それぞれは夜明，昼，黄昏，夜，も



① アインシュタインの墓標　L・ウッズ



② アインシュタインの墓標



③ 宇宙の因果関係（J. Godwin《Robert Fludd》より）

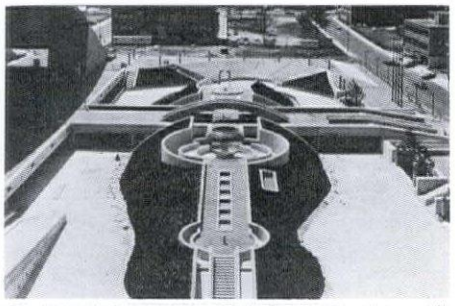
しくは春，夏，秋，冬といったサイクルに対応すると同じくそこから導かれる意味（可能性，成長，熟成，衰微）にも対応しているといえようか．　世界の秩序立った進化はこのサイクルの動きに沿って営まれると考えてよいだろう．壮大な叙事詩はかくして織り上げられていく．

実際のところ，都市の断面図とは幾重にも堆積した建造物の地層そのものであり，廃墟の下により古い廃墟がたたみ込まれている．　考古学的手続は都市のすでに瓦解した秩序を顕現化させると同時に，都市そのものを進化のプロセスで把えるヴェクトルを内包している．　ウッズの所与のセッティングに対するこのようなのぞみ方を指摘するのは友人でもあるジュリアーノ・フィオレンツォーリだが，のみならず彼はウッズによって産み出された都市建築が複雑な外貌を呈するにもかかわらず，オリジンの定かでない新たにうちたてられたランドスケープの上でくり広げられていることも記述している．（«EXPRESS» 紙号外，1982，vol. I）建物はおそらく時間の厚みの観測者であって，実際に場所のコンテクストに応答させられているわけではない．「新しく，高度に都市的な建造物は，精神を通して視覚的にイマジナリーな旅を演出する[5]」．旅とは差異＝遅延作用，端的にいえば〈他〉なる場の空間化・時間化である．　現実から要素界へ，あるいはより上位のエーテル界や最高天界，それとも多次元の世界への飛行なのだろうか．

アースワークを主として伴うフオレンツォーリの空間がエレメンタルな建築部品を操作することによって――それはアブラハムらと共働したナイアガラ瀑布のレインボープラザの設計にも垣間見れる[6]――，ウッズの接木的なコンポジションは空間プロパーの規定性に関してあまり興味が寄せられていない．　メタフォリカルではない，ということもできる．　メカニックも技術もここでは擬装されながら，人工的に〈敷地〉なり〈場所〉なりにランディングさせられている．　擬似セットのような，だからいつでもそこを離陸し，惑星間を彷徨することができるのだ．　SF 的な雰囲気をもつ風景の由来でもあるだろう．　文化的な固有性を等閑に付してすらしまうのだ．　その意味ではウッズのイメージはジェネラルサイエンスにもとづいているといえるだろう．



④ AEON: 時間の建築　L・ウッズ



⑥ ナイアガラ・レインボープラザ，J・フィオレンツォーリ他



⑤ ドローイング　L・ウッズ

イメージの進化めぐり

近年のこうしたドローイング・プロジェクトは個別的なヴィジョン，個別的な「約束の地」に彩られている．　共有しうる上位の規範が，曖昧化・空虚化されているとすれば，過去の断片化された規範の残骸が亡霊のようにオブセッショナルな影を落とすということは十分ありうることだ．　それを秩序のよりどころとなす者も当然いるだろう．

問題はいつでもヴィジョンを成立させる手続きや場が意識化されているか否かということだ．　そのプロセスにさまざまなソフィスティケーションを埋め込むことも可能だ．　だが，イメージがスピーディーに生産，流通，消費される時代においては，そのようなソフィスティケーション自体も単なるエンターテイメントと位置付けられてしまう場合が多いのも事実であろう．　興味深いのは，たとえばウッズのイマジネーションがルネサンスの錬金術師たちの描いた抽象世界と相似するように，さまざまな場合に立ち現れるイメージの枠組もしくはパラダイムといったものが通時的にも共時的にも交番劇を演じているのではないか，ということである．これはイメージの開く空間が何かしら監禁されたような領域を横行する感じがあるというのと関連的なことである．　詩的想像力が有限だというのではない．　そうではなく，イメージの進化めぐりというのもあり得るだろうということだ．　イメージに固有な先在的規範は，おそらく，回転ドアにも似て，無窮動的に代わるがわる立ち現れるメカニックをもつ透明性――不可視だが厳然とした障壁――ではないだろうか．ウッズの律とする古代法典やマンダラ，相対性理論といったもののシェマが回転ドアの平面に似ているということなのではない．　むしろ，イメージに慣習というものがあるとすればそのようなものではないかと思われるのである．

回転ドアの中ではぐれたイメージ

こうしたドローイングに要請される今日的機能は，それ自体が社会の権力分配の構図や文化的なアクチュアリテに，いかなる距離や位置を占め現実に効果するか，ということもあるが，エスタブリッシュされたイメージパラダイムにどう揺さぶりをかけるかということもあるだろう．それでもなおイメージの主体というものは，それがプリズナーになることを夢見ているはずだ．パラダイムに登録されている限りにおいて，自らのイメージはアイデンティティをもつ．　プリズナーになることでイメージの自由と身元が保証されるからである．　とするなら己れのイメージの出自をロゴス化すること，しかし，それを見きわめるには〈他〉のパラダイムを提出することでしかありえないだろう．　つまり，回転ドアの中ではぐれてしまうことにほかならないように思われる．　そうした地平においては，我々はイメージについて語ることはできても，イメージを語ることは本来できないはずだ．そしてそのようなイメージこそ，実は世界をシフトする力をもつのではないだろうか．　これらのドローイングに期待したいことは，今後そのことのように思われる．

●ひこさか・ゆたか／建築家

アメリカの若い建築家たちは今...

竹山実×石井和紘

司会＝編集部：伊藤公文



竹山実



石井和紘

アメリカの縮図としてのカリフォルニア

編集　今回の特集にあたって，アメリカの若手の建築家，年齢的には相当のばらつきはあるものの，おおよその基準としてはリチャード・マイヤーとかマイケル・グレイヴスらの後に続く人たちの作品を集めたのですが，それらを見渡しますと，まさに多様と対立というか，様々な輝きをもった星が自由気ままに大空に散在している感じで，特別な中心というものもないようですし，小集団のようなものも見かけ上は存在しないかのように，現象としては多彩です．　また，作品としてはプロジェクトの段階にとどまっているものが非常に多く，たとえ実現していても規模は極めて小さいためもあってか，それらが単なる雑草の生い繁りなのか，それとも将来性のある貴重なつぼみなのか判然としがたい気もします．　そこで今日は，アメリカで建築を学ばれ，またアメリカの学生たちに教えるという経験をお持ちのお二人に，ここに集められた作品を中心として，今日のアメリカの建築界の様相を全般的に話していただきたいと思います。

先ずカリフォルニアから話を始めるのはどうでしょうか．カリフォルニアは，今のアメリカ全体を見た時，建築の作風という点では，地域的な特性が最も明瞭に感じられる地域だと思いますが．　ことにロスアンゼルスの人びと――エリック・モス，フレッド・フィッシャー，モルフォシス，コイ・ハワード，スタジオ・ワークスなど――の作品にそれを感じますが．

竹山　確かにカリフォルニアというか西海岸は，アメリカ全体をのぞく拡大鏡になるような気がします．　さらに同じカリフォルニアの中でも北と南，サンフランシスコとロスアンゼルスでは全く対照的だと思う．　ここに集められた若手建築家の中でサンフランシスコに属する人としてはたとえばエース・デザインとトーマス・ゴードン・スミスがいる．　彼らは不思議と地元では殆んど知られていないと思いますが，彼らにしてもそのことを余り気にしていない．　つまり彼らの志向しているところは，地域に属してはいないように思うのです．　一方，ロスアンゼルスの場合は，広い意味でヴァナキュラーな側面が強く押し出されている．チャールズ・ムーアやフランク・ゲーリーや，その後に続く人たちにしても皆そんな感じです．　前者をシンクロニカルな水平思考とすると，後者は地域に根差した垂直思考とでも言えましょうか．　この対比，およびそれらの交差は，アメリカを考える時，常に重要だと思いますが，その極端な例がカリフォルニアには見られる．

石井　ロスアンゼルスについては，ロン・フィルソン，コイ・ハワード，そしてスタジオ・ワークスのモンゴリアンとホジェット，その他何人かは，ぼくがUCLA（カリフォルニア大学ロスアンゼルス校）で教え始めた頃，ぼくよりちょっと年上で，少し名前が

知れ始めるようになっていました．　そして彼らは今日必ずムーアかゲーリーと思考の上で関っていると言えると思います．　とりわけゲーリーは最近強烈な影響力を持っていて，今では彼のしていることが一番ロスアンゼルス的で，他の場所との違いも彼に因をなす部分が多いと思います．　カナダ生まれの彼がトラックの運転手かなんかをしながら流れついたのがロスアンゼルス．その辺りの経歴にしてからがロスアンゼルス的と言えましょうが，彼の建てるものはバラックであって，それが気候風土に合うんですね．　大体，ノイトラの健康住宅にしてもシンドラーのロベル・ビーチ・ハウスにしても，その類のものだった訳です．　シンドラーのロベル・ビーチ・ハウスが，てっきりRC造だと思って行ってみるとぺらっとした木造でペンキ塗りだったりする訳ですね．

言ってみれば，東部の人たちが古典なり様式的なところを対象としてやっているのに比べて，ロスアンゼルスの方はずっと日常的な，生活そのものを対象としてやってきている．　そしてそれは，安っぽさとか貧しさとかを透かしてみえる日常性だと思います．　そう呼んでしまうのは多少行き過ぎかもしれませんが，そもそもアメリカの土着性というのは開拓時代をつうじて貧しさの中にあったのも一面の真実ですから，その意味でも，彼らのしていることは最後のフロンティアのあった西海岸で，よりアメリカ的であると言えるのだと思います．　ヴェンチューリが《母の家》で，イタリアの古典建築のモチーフを用いたようにエスタブリッシュメントへ向ったのとは全く対比的に，ロスアンゼルスの連中は社会的にいうとプロレタリアというか，そういうレベルにまで下りていったところで，やけにリアルな取り組みをしているのではないかと思うんです．

竹山　サンフランシスコにウィリアム・カーシュという人がいて，経歴にしても作風にしてもゲーリーと似ている．　両人とも流浪人だし，カーシュは徹底して残材だけを用いてアドホックに家を作る．　つまりはバラックです．

にもかかわらず，ロスアンゼルスのゲーリーが派をなすのに，サンフランシスコのカーシュはそうはならない．　トム・スミスにしてもそうだし，逆のぼってみると，バーナード・メイベックにしたって一人で孤高を楽しむというか，ともかく徒党を組むことをしない．　ぼくは，かねがね〈ロスアンゼルス・シルバー〉に対抗して〈サンフランシスコ・ゴールド〉なんていうのをでっち上げたら――，とけしかけるのだけれども，なかなかそんな具合になりそうにもない．

つまり，アメリカには東と西という区別の他に北と南という差異の軸もあって，それがカリフォルニアの中に凝縮して現われていると言える．

もっとも，共通点ということでは，こういう見方をすることもできると思う．　今年のベニス・ビエンナーレのテーマのひとつは，フィンランドとイタリアを取り上げて〈モダン・トラディション〉と称するのだそうですが，ヨーロッパの中ではこのふたつの国がポスト・モダニズムの動きと一番遠い地点にいて，モダニズムを排斥するに当らないような社会化を成し遂げた国であるということだと思うんです．　そこで，フィンランド（スカンジナビア）をサンフランシスコ，イタリアをロスアンゼルスにそれぞれ状況を平行移動して考えてみることも可能ではないか．　双方とも意外にポスト・モダニズムの動きから縁遠い文化の社会的制度みたいなものが共通しているのではないかと考えるんですが．

地域の特性

編集　カリフォルニアに話が集中しましたけれども，カリフォルニア以外の地域においては，次第に地域性といいますか，場所の特性といったものが希薄になりつつあるように思えるのですが．

竹山　そうでもないと思います．　ここに集められた作品を見ると，あらためて場所や地域のポテンシャルに思い至ります．　シカゴはディープ・サウスといわれる程に最近では相当に不景気だといいますが，それが作品にも反映してますし，対照的にヒューストンやフロリダの人たちの作品を見ると活気に満ちている．

石井　アメリカの場合には，学校を卒業してから仕事の場所を選ぶセンスというか，どこの町でやるのかという勘のようなものが要りますね．　アーキテクトニカの連中なんてぼくはイェールで同級生だったけれども，学生の時には目だたなかったですからね．優秀な連中がニューヨークでしばらく修行するとか，ムーアのところに入るとか言っているのに，失礼ながら彼らはそんなレベルの高い学生ではなくて，ともかくマイアミに行くんだと言っていた．　一旗あげるには辺境の地へ，というのでしょうか．　しかしマイアミに行ってからの華々しさは大変なものですよね．　反対に，学生の時には彼らよりずっと優秀だった人でも，今だにニューヘヴンに残っていたり，ニューヨークなんかに行ってしまうと，機会もなくて，そうは行かないようです．

竹山　そういう，場所を選ぶ自由というのは，日本では乏しいといって言いでしょうね．　ぼくがアメリカにいた頃はアメリカは楕円だと，つまり中心が東と西の2つにあると言われていた時代でしたが，最近はもっともっと多焦点化していますから，今後は建築にたずさわる人の場所の移動もさらに激しくなっていくと思います．

石井　ニューヨークにいる人たちは，少なくとも今までは，ニューヨークは他の町とは違うんだ，世界の中心なんだ，そこが座標軸の中心なんだと思ってきたのでしょうが，その中心に場所を構

えるアイゼンマンやヘジュクが殆ど仕事がないのに，流れ者のシーザー・ペリがニューヨークのどまん中に超高層を建ててしまうというような事態が現にありますからね．

遅れてくる人たちの腰の強さ

編集　先ほど石井さんから，ロスアンゼルスの若手は，ムーアかゲーリーのどちらかと殆ど必ず関わりを持っているというような話がありましたが，そのような人づての影響，感化について少し話していただけますか．

竹山　アメリカの建築家の育つ背景を考える時には，僕の経験から何と言っても，学校の存在，ことにそこのディーン(学科主任)やプロフェッサーの影響力が圧倒的に大きいように思う．　そのときに学校で誰がどんな風に教えたか，そのようなしつけが社会的に伝播する力が非常に強い．　僕のときは，ハーバードにセルトがいたし，ペン大には，カーン，エールにはルドルフ，IIT にはミース――といったぐあいに皆んな絶大な影響力をもっていました．

石井　最近だとプリンストン大学のグレイヴスなど，その代表でしょうね．　あそこを経由してきた人たちの図面は独特の調子があって，すぐにそれと判ります．　イェール大学のシーザー・ペリなども，次第に影響を強めているようです．　ただ一般的には，外でバリバリ仕事をしながら，大学では学生を指導するというタイプの人は，余り多くはなくなってきている．　あの一連の学校でのゴタゴタの後は，大物は大学から身を退いてしまった傾向があると思います．　だから大学は若い名もない連中にまかされるようになってきています．　この号で取り上げている人たちの過半が，大学で教鞭を取っていて，それである程度生計をたてているかたわら，自分のスタジオを持っているという形が多いと思う．けれども，実際問題としては，設計の仕事は大変に少ないようです．　仕事をする人間としての評価は大学で突っ張った建築方法を指導していく以上，仲々身につかない訳ですかが，大学人という立場を考えればそれもやむを得ないと思います．　それが辛いところで世間は彼等にたよっていかないのです．　アメリカの場合，住宅にしても日本ほど若い人に気軽に依頼することは少ないようですしね．

竹山　確かに，僕が学生だった頃に比べると，大学のディーンの影響は弱まってきているとは思いますが，それでも日本とは比べものにならない．　徒弟的な建築家教育の歴史的なパターンが，まだアメリカには根強く残っているように思います．　だから今度集めた作品を現象的にデザイン・ボキャブラリーというレベルから見ると，幾つかのルーツがはっきりと見分けられますが，同じようなことを日本でしようとすると，一見，全く脈絡のない断片の集りに帰してしまう．　強いて捜すと，つい最近の建築雑誌の情報などが唯一のデザイン・ソースだったりする．(笑)

石井　日本の場合は確としてあるエンジニアリングのファクターが，アメリカの建築教育には欠落している訳ですから，そういうところでは，やっぱりスタイルの伝承ということが必然的に重要視されていくのだと思います．

ぼくと同年代か，やや上くらいの年代の人たちの，日本とアメリカでの状況を考えた時，一番気になるのは，日本の人たちの方がほぼ5年位は立ち上がりのスピードが早いということですね．アメリカの人たちの方が遅れてやってきている．　しかし，もし彼らがエネルギーを持続して，いつの日かメインストリームに乗っかってくることがあるとすると，遅れてきた分だけ，腰をきちっと決めて力強いだろうなという気はする．　そうすると，今の日本がおもしろいのとは全く違う状況で，むしろ個々の動きより全体のエネルギーの総和というものが安定しておもしろいことになるのではないかと思います．　アメリカは大きな河の流れのように時間がたっていく国で，過去のものがどんなに素晴しかったとしても，現在は現在であるという感慨があります．　それだけ個々のムーブメントが徹底的に追及され切って次のムーブメントに移っていくのですね．　だから気安く過去の方法が復活することはないし，また，今のものも確実にのりこえられていく．

竹山　彼らの方が立ち上がりが遅いということはありますね．ぼくも学校を出てから20年以上たっている訳ですが，これまでの仕事を，日本の同年代の連中と比べると随分と少ないといって驚かれるのに，アメリカの同年代と比べると羨望の目で見られる位，数が多いのが通常ですから．

ただ石井さんも言われたように，立ち上りが遅いということは，根を生やすために時間を使うという風にも解釈できる訳だから，そこから芽が伸びて，結束を固めたりすることになれば，かなり腰の強い大きな流れにはなりうるでしょうね．

編集　確かに，大学で教えながら，それも決して設計活動の片手間にというのではなく，かなり身を入れてやっていて，その一方で新しい仲間とジョイントしてデザインもし研究もするというようなスタイルをとっている人が多いですね．　必ずしも彼らの本意ではないのでしょうが．　彼らの間では横の連帯感も生まれているようで，互いに図って自分たちの作品の展覧会などを組織していますね．

マイケル・グレイヴスの転身

編集　ところでデザインの傾向という点に話を進めますと，比較的にオーソドックスなモダニズムの路線を真っすぐに歩んでいるという人は非常に数少ないように見受けられますが．

石井　作品の傾向を見ると，ここにあげられた人たちはムーアとかスターンとかヴェンチューリとか，あの辺の人たちの建築の言語の流れの内側にとどまっていて，そこから極端に飛び離れたものは少ないように思います．　こういう状況になった主要な原因は，個人的な感じで言いますと，何といってもマイケル・グレイヴスの転身にあると思います．　彼が当初やっていた方法では，第一に，建物の大きさに限界がある．　住宅程度の規模を乗りこえられない．　第二に耐久性がない．　プリンストンの周辺にグレイブスが建てた幾つかの住宅を実際に見てみると，その荒れ方はかなりのもので，あんな風な，そもそも室内の造作としてあったものが屋根がとれて家になってしまったようなものには，とても10年，20年という耐久性はない．　この辺りの見きわめを，グレイヴスはホワイト派の人の中では一番早く考えて，素早い転身を図ったのではないかと思う．　現在作っているものを見ますと，一方では非常に論理的でありながら，あらわれ方としてはクラシカル，時としてヴァナキュラーであったりして，それまでホワイトだとかグレイだとか対立錯綜していた諸々のものが，現実性を梃子にして老獪に混合され取り入れられている．　大きさの限界も打ち破られて，ポートランドのビルを始め，かなりの大きさのものでも，単純でデカイというか，それなりの収まり方をする程度の暴れ方になってきている．　とにかくグレイブスの転身は興味深いものでした．

竹山　それはアメリカの建築家の姿勢の展型的なパターンのひとつという見方も可能だと思いますが．　例えば昔のエーロ・サーリネンとか，長老としてはフィリップ・ジョンソンなども，そのような歩みをしています．　グレイヴスの場合にしてもこれから先，いろいろな風に変って行くのだと想像されます．

石井　かなりの振幅をもって揺れて行くでしょうね．　だけども，今の時点で，彼が深い読みでもって，それまで抱えていた矛盾・対立を止揚したことは確かなことだと思います．　それだけに，彼の影響力が強まっているのだと．

編集　最近プリンストンから帰られた片木さんも指摘されていますが（pp. 66—69），グレイヴスの影響は，ことにドローイングに関しては大変なもののようです．　それにしても，グレイヴスに連なる人のみならず，表現の技法は皆，巧けていますね．

表現のテクニックとイマジネーション

石井　表現のテクニックという点から見ると，最近は建築が非常に達者になってきていますね．　ポスト・モダニズムの中でいろんな人がやってきているヴォキャブラリーを万遍なく消化しているといっても良い．　建築言語の字引きというか，その幅がかなり広がってきている．　それともうひとつ言えることは，都市と建築家とのかかわり合いというものに対しての無力感が全体に広がっていて，そこが建築内部の自立性を強めている．　その辺りは日本も同様だと思いますが．　建築家がいろいろ議論をして，提案して，都市に働きかけて行くというよりも，それと逆向きの志向が彼らの中にある．　要するに都市というものを毒である，自分たちの環境作りにマイナス要因としてしか働かないと見なして，それに対してさらに毒をかけていく．　毒をもって毒を制すという訳です．　そんな風に建築を設計しているように思えます．また意欲的な人ほどそうした傾向が強いように思われます．

竹山　そうした表現のテクニックとイマジネーションに関連して思い当ることがあります．　ぼくはここ何年かの間に，アメリカ，カナダ，東南アジアの大学で，短期間の課題設計をやっているんですが，その時なるべく似たような課題を与えます．　比較ができますから．　最近では〈インフィル〉というか，町並みの一部が欠けていて，そこに単体の建物を設計するというような課題を出している．　その単体の表現性と，周辺の状況やサブ・カルチュアの関わりをみとどけるのが狙いのひとつです．　その場合，結果的に見ると日本の学生の場合が一番バラエティに富んだ提案がでてきます．　既成のアーバン・コンテクストとの連続性を実体的にとらえないですませるかろ，どんなことだってできる．結果としては，毒をもって毒を制する異化作用がはんらんする．ところが，アメリカの学生——といってもぼくの場合はカリフォルニア大学バークレー校——は，相当いろんなことをやっていても，かなり自己制御した結果が生まれます．　例えば建物のエッジを周りにそろえたり，開口部を隣りのものにそろえたり，その他，何らかのところで周囲のコンテクストとの連続性を実体化させる．　表現的に毒をもって毒を制するやり方は確かにあるにせよ，この場合，毒の製法が同じ種類のものだということでしょうね．　ただ個々の表現の手法についてみると，国の差はほとんどなくて全く驚く程よく似ています．

石井　表現にしても，この世代はどこか均一化の方向に収斂しているんじゃないか．　つまり，自分，あるいは建物，あるいは施主の置かれている個別性というものにたち返ってみようという迫力に若干欠けると思います．　個別性を掘り下げて，独断と偏見にかぎりなく近いところまでおりて行こうとしないで，それはある程度にして，力んだってどうにもならんよというのが共通した態度のように思えます．　ぼくは，それではちょっと寂しいと思いますけど．　環境に対して悲観的ならば，それだけ一層自分自身の個性にこだわって欲しいと思う．　アーキテクトニカがフロリダに行って成功しているのもフロリダに生き得た積極性，楽観性があったわけで，つまりはその辺に起因しているのだと思います．

竹山　それはありますね．　ヨーロッパから見れば日本とアメリカは経済構造において似ている訳ですから，その中での建築家の志向性のパターンも似てくるのではないでしょうか．

オランダの ARAU なんていうグループはクライアントのプログラムそのものの吟味からはじめて，ときにはそれを変えてしまうことから展開していく．　アクション・アーキテクチュアです．　そんな具合に，社会的なニーズの問題に基本的なところで建築家が立ち向かうという，そこまでイマジネーションの展開があると，本当の個性というのが社会化できるような気がする．

アメリカと日本にしても，建築を社会の接点にまで突き戻して考えると，結果的には同じようなことをやっているように見えても，表に現れないイマジネーションのレベルでは随分違うことに行きつくのではないかと思うんですが．

石井　アメリカの人たちは，ある主張がでてくるのに時間がかかるけれども，一生それで突っ走るという面もある．　ルドルフにしたって今だに同じ調子でやり続けている．　だから今の若い人たちも，現在もっている特質をそのまま一生持ち続けるだろう．すると，彼らの間に見られるかなり明白な共通性が，いつの日か公然とした勢力になることも十分に考えられる．　かつてインターナショナル・スタイルやバウハウスがアメリカの中で根づいて行ったように．

竹山　そうなるかもしれませんが，ここに集った作品で見ると，個性の表現ということでは迫力に欠けるように思えて仕方がない．そんな中でアーキテクトニカの場合は，キューバの血が脈々と流れていて際立った個性をもっている．　クライアントもキューバの人が多いようですね．　キューバからの亡命者の中にはお金持ちが多いらしいしね．

編集　アーキテクトニカの仕事は質の面でもスケールの面でも，全く異色ですね．　細かなスケールなど全く消し去られてしまっていて，その単純な幾何的立体が町のコンテクストとは無関係にボンと放り置かれている．　それに最近のヘルムズレー・ホテルの仕事など，まれに見る規模の大きさですね．

石井　シーザー・ペリも，あんなに沢山の仕事が最近増えたのも，イェールのディーンになった，というプラスの他に，最近アルゼンチンの銀行から大量にアメリカにドルが流失してしまって，仕事の面でもアルゼンチン・マネーの恩恵をこうむっているようですね．　今度のフォークランド紛争などでは，どのようなジョークを連発し気まずさに耐えていたのか，そばにいて見ていたかった気もします．

竹山　つまり，建築家に仕事を頼むクライアントが多様なんですね．　個々の建築家は割合に表現の個性という点では似ているのだけれども，彼らを育てる側の方が多様な方向性をもって働きかけるという構造があるのではないか．

石井　考えてみれば，これまでアメリカの文化を活気あるものに保ってきた人たちは，何らかの意味でインベージョンを受けた人か，インベーダーであったかのどちらかだと思いますが，どちらでもないネイティブ・アメリカンである若い世代の人たちが，どうやって変化に富んだ活気ある文化を，建築を作っていくかは，興味深いところですね．　しかしまだ必ずしも展望が開けているとは思いません．

竹山　また，時間の流れというファクターは見過ごせませんね．彼らの作品がモディストに見えたとしても，日本の若手との絡みでそう見えるのであって，例えば，1930年代の映画に出てくるアメリカの都市の描写と現代のそれとは，殆ど変わらない訳です．しかも風俗的な一切のサインは基本的には変化していない．　ズボンの太さがちょっと違うとか，走っている車のテールの高さがやや高いとか，そういう表層の違いしかない．　ところが1930年代の日本の映画なんか見ていると，現代との町並みの変化には驚かされます．　この通りの時間の流れ，出来事の変化の速度は，日本を基準にして見てはいけないと思う．

歴史的言語の消費の落着き先は？

石井　アメリカは物すごい多民族社会のわけだけれど，建築界で主要な発言をしている人にはジューイッシュが多かった．　他の分野でもそうだと思いますが．　学生の中でも優秀な人はジューイッシュが多いように思う．　ホワイトの５人が抽象的形態を好いたのもその辺に関係しているようです．

けれども，現在モダニズムを乗りこえようとして，いろんな人が新しい建築言語として定着させようとしているものの中には，圧倒的にイタリアに根をもつものが多い．　チャールズ・ムーアのイタリア広場なんかは文字通りそうなんですけれど．　この現象は極めてはっきりとしていて，ブリティッシュもなければジャーマンもないし，あってよさそうなチャイニーズもなければ，もちろんジャパニーズもない．　アメリカ全体が，インターナショナル・スタイルを，モダニズムを乗りこえようとする時に，そしてその際，歴史性が言及される時に，すべての耳目がローマを向いてしまっているという事実．　それがこの一連の動きだったし，またこの世代に極まったように思います．　だから，この次の世代からは，このイタリア・オン・パレードはかなり疎ましいものに見えるに違いないと，ぼくは思います．　反発を買うほど，著しく偏向している．

竹山　ヨーロッパの中ではイタリアは最もポスト・モダニズムと縁遠いところにあるようですがね．　しかし，ポスト・モダニズムの建築言語は，その語彙の大半がイタリアに由来しているのは

確かですね.

石井　不思議なほどです.　この連中をまとめてポスト・モダンでなく，アメリカにおけるイタリア派と呼んだってさしつかえないんじゃないですか.（笑）

竹山　去年の春，香港大学で学生と話す機会があったのですが，彼にしてみるとパラディオあたりがモダニスト（？）なんですね.中国の人は５千年の歴史をもっている訳ですから.

ポスト・モダニズムの場合は，クラシシズムの原点として目下のところイタリアに行き着くのだけれども，彼らにとっては新しい現象なんですね，パラディオなんていうのは.　だから，今取り上げられているようなイタリアのいろいろなボキャブラリーというのは，決してクラシシズムの表象としてではなくて，何かしら一風違った〈味わい〉のゆえに取り上げられているのかもしれない.

石井　そうですね.　先ずモダニズムというものに対して一矢を報いようと思った時，歴史の〈味わい〉が一番高かったのが，たまたまイタリアンだったということかもしれないですから，これから先またひと揺れあることは考えられます.　誰も彼もがイタリアンで済むわけないですから.

またポスト・モダニズムに対する批判として，それは歴史言語の消費だと，つまりそれはこれまで作られてきたものの消費に過ぎず，何も新しいものは作ってはいないという批判があります.しかし歴史を振り返って見ようとすれば，どうしたって消費するという面が必ずでてこざるを得ないとも思うんですね.　創意工夫をこらしたって，歴史言語は使っていくのですから.

ともかく，ここに載っているような人たちがイタリアの建築言語の消費を拡大して行って，その後はどうなるのか見当もつきませんが，例えばスカンジナビアに行くとか，エジプトに飛んじゃうとか，中国に行くとかという風にして，そういう形で揺れ動いていくのか，それともやっぱりイタリア系の言語というのが，好き嫌いは別にして，どうしても否定できない影を落としたまま続いて行って定着してしまうのか，次の消費の対象を求めないで，今の状態をベースとした定常状態が作られるのか.　その辺りは興味がありますね.

竹山　その点，アメリカにはギーディオンに代表される歴史の解釈法というのが今なお，根強くあります.　歴史の事実の二重性というか，彼が良く使う言語に，トランジトリィ・ファクツ（過渡的事実）と，もうひとつコンスティテュエント・ファクツ（構成的事実）というのがあって，それに照らし合わせると，最近のクラシシズムというのは全部ふるいにかけられて，過渡的症状にすぎなくなってしまう.

けれども最近の現象として言葉が複合化してさらに別の意味に変換するということがある.　言葉はそれぞれ単独としてあるけれども，それらがくっつき合って新しい言葉が生まれるわけです.　そういう現象が発生しつつある.　そうすると，ギーディオン的な歴史の事実の拾い方というのは，そろそろ，それ自体修正しなくてはならないのではないかと思う.

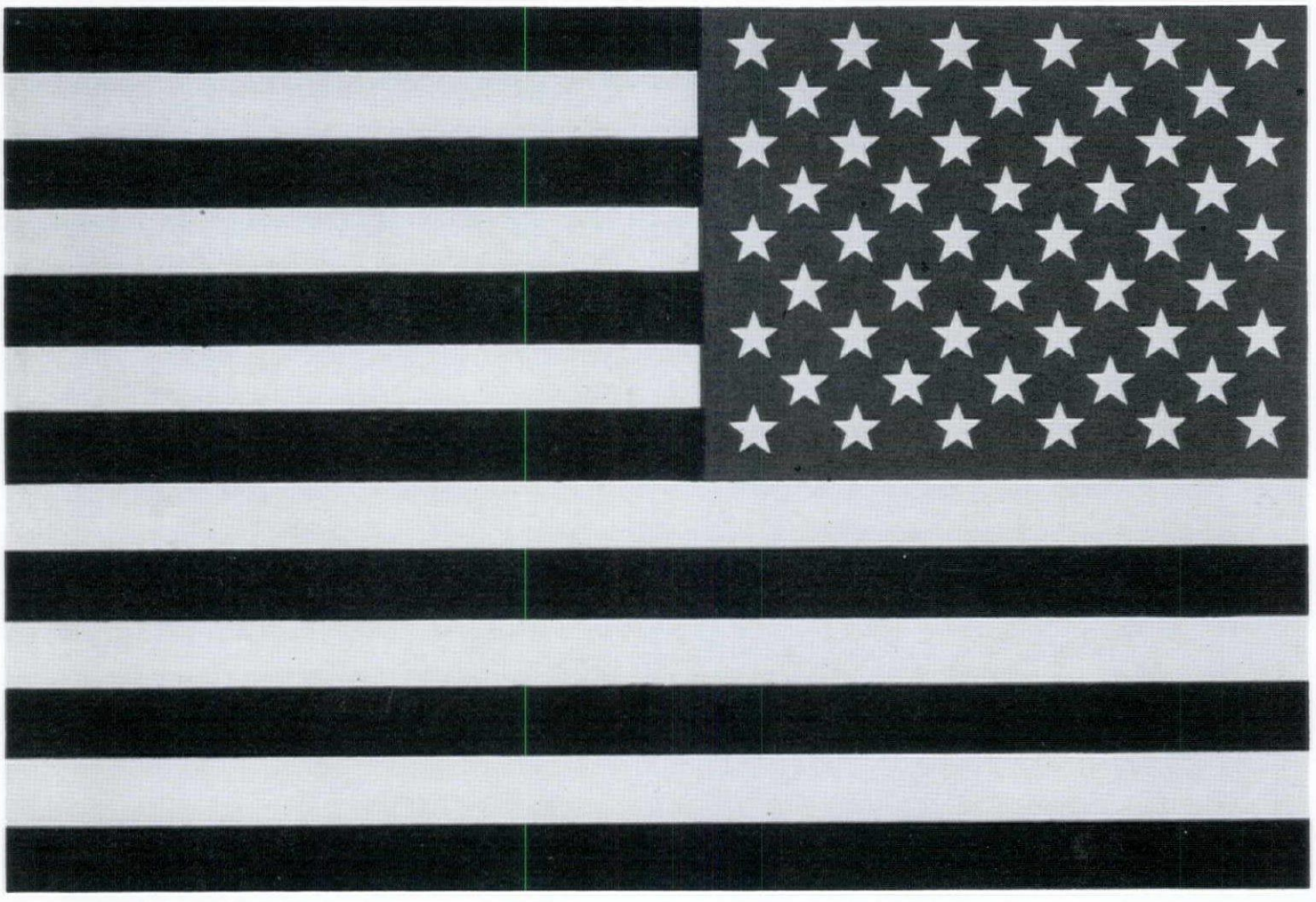
日本の場合は，そういう複合言語が現象として非常に豊富な訳です.　したがって，日本の現代建築が海外の目におもしろくうつるというのは，客観的にみて，文化を解続するクライテリアを建築現象を通して検証するのに有効なのではないか，ということに起因しているのではないでしょうか――.

編集　それに，日本は建てられた環境（ビルト・エンバイラメント）の変化のサイクルが驚異的に短かいということも手伝っているかもしれませんね.　建築現象の一種の実験用フラスコではないかなと.　その中で揺さぶられている間に収拾がつかなくなりかねませんし，その意味でもアメリカの若手の建築家たちの腰の強さとか表現の固有性など，参考になるところはずい分あると思います.

今日はどうもありがとうございました.

（1982年６月23日，文責＝編集部）

★
★　★
★



翻訳協力＝上口泰位，浜野次郎，尾崎澄子，竹山聖，柴田恒秀

過去・現在・未来——歴史の中で考える

早川和男

この数年来，外国人による日本の住宅や生活環境についての発言がふえている．　3年前，欧州共同体（EC）は「日本人はウサギ小屋同然の住宅に住む働き中毒」と称して物議をかもしたものだが，この種の論評はあとを絶たない．　最近の例では，訪日したケネス・E・ボールディング．　これからの日本は，「量的な豊かさの追求に代えて，生活の質の向上をめざすべきだろう．新しい生活様式，コミュニティの形成，暮らし易い都市づくりなど．」講演ということもあってかおだやかな口調であるが，内容は日本経済と日本人の批判である．　次いでニューヨーク・タイムズの社説．　「日本は外国にものを輸出することよりも国民の生活環境をよくすることに力を入れたらどうか．　とくに住宅はひどすぎる」．

日本の住宅水準の低さは昔から知られていることだが，ここに来て改めてそれがとりざたされるのは，輸出攻勢はなはだしい日本へのヤッカミから来ている，と考えている日本人も少なくない．　だが，彼らから見れば，「経済大国」になった日本人が，なぜそんな小さな家に住み貧しい住環境に甘んじているのか不思議でならないのである．　実際のところ多くの日本人は，外国からのこういう批判に接して，その意味がのみこめず，キョトンとしているのが実情ではなかろうか．　現に日本政府は，日本の住宅はすでに欧米水準に達したといってはばからないし，労働組合は賃上げには熱心であるが，その賃金がローンで吸上げられたり，遠距離通勤でふうふういいながらさして広くもない家に住むことに多くの疑念を抱いていないのである．　だからわが国では住宅問題は政治的課題にならないし，国民的要求課題にもなっていかないのであるが，それがまた外国人には不思議なのである．「日本の住宅が低い水準にあることはみんな知っている．　問題は，そういう貧しい家に住みながらどうしてそれを変えようとする強力な運動が日本にはないのか」という質問を何人かのアメリカ，西ドイツ，イギリス人などからうけた．　しかし，日本人自身，住宅や生活環境を貧しいと考えているかどうかあやしい．　人間として生きられないほどに貧しいと考えているのでなければ，それを変えようとする運動の起こる筈もない．

日本人の住意識の低さをしばしば歴史的な事情によって説明される．　鴨長明は，起きて半畳，寝て1畳あればよく，方丈をもって足りるといい，兼好法師は，明日をも知れぬ戦乱の世の中でこの世を仮りの宿りとみる，いずれも仏教的な諦観の世界に身を置く，住居思想をのこした．　これらの考え方はいまもわれわれの血の中に流れており，それが健康な住要求を眼ざまさせないでいることは確かだ．　また，現在の政府は，住宅は個人の責任という政治的宣伝のもとで持家政策を展開しているので，住宅の取得や改善ができなくても自分に甲斐性がないからと思いこまされ，社会的な要求に結びついていかない．　そういうこともある．それらは皆，当っていることである．　しかし，私は，現代日本人の意識に潜む根本的な価値意識転換なしに，日本の住居や生活環境をよくしていくことはできないのではないか，と近頃つくづ

く思う．

日本人はよく働く．　それで経済成長はめざましく，自他ともに「経済大国」を誇るようになった．　だがいったい何のために経済を成長させるのかについて深く考えることなく，日本人は走っているように思われる．　高度成長期には，物をつくることが発展とみなされた．　海を埋めたて山を切崩し，橋や道路や港やビルや工場がつくられた．　自然が壊され，歴史文化遺産が消えていった．　そして今では，工場でつくりだされた商品が世界に送りこまれ，他国の市場を圧迫し，貿易摩擦をひき起している．

われわれは何のために働くのか．　働くことをつうじて自己の能力を発展させる，創造する，そこに生きがいを感じる，ということもある．　同時に，働くことによって，われわれの生活をより豊かにし，人間らしい暮らしのできる社会をつくっていくことが基本である．　その中で大きな位置を占めるのが住居をはじめとする生活環境である．　ゆったりとした住居や美しい自然や街並みは，人間らしい暮らしをするために不可欠であり，それは一種の基本的人権と言ってよいものである．　それだけではない．「ほっとする」「心が洗われる思い」「生きかえったようになる」「感動を覚える」といった印象を，われわれは美しい住まいや街や自然環境からうけることがしばしばあるが，このような文化的で豊かな生活空間こそは，芸術とならんで人間が生きていくための原動力となるものである．　生命の安全，身心の健康，人間の尊厳，心の安息，精神の高揚といった人権の尊重と人間らしさを保障しうる生活空間をつくることは，労働過程，生活過程における人間の主体性などと並び，未来に向かって確立せねばならぬ人間社会の本質的に重要な課題である．

人間労働や経済は，そうした生活環境づくりに終局的に役立っていかねばならぬものである．　それが人間の生きる価値と証し人間性を保障していく．　人間は自然の中の存在であるから，自然を離れては存在しない．　だから身近かな周辺から自然がなくなると，そういう意識も消え，人間は何でもできるものと思いこむようになる．　いわば神を恐れぬ傲慢な態度をとるようになる．　われわれの間にはすでにそうした兆しが見えている．

また人間は，先人が築きあげてきた富と生活文化の蓄積の中で生きている．　文化は継承されながら発展し，生活を豊かにしていく．　だから，過去の遺産をこわせば，現代の生活は壊され暮らしにくく貧しくなる．　それはちょうど，河の上流の森を切り払うと下流で氾濫が起こるように，上流の森は下流のために保護しなければならぬようなものである．　従ってまた，過去を無くすことは，現代の生活を貧しくするだけでなく，それを伝えるべき未来を貧しくすることにもなる．

文化の空間的・時間的継目の破壊は現代生活のあらゆる面で見られる．　核家族化，団らんの喪失などは家庭内でのコミュニケーションをなくし，人間の生き方や生活の知恵の継承を困難にしている．　育児ノイローゼ，食文化の貧困化，住様式の断絶，ふるさと喪失などなど．　歴史的文化遺産の継承のないところに，現代日本人の精神の崩壊がさまざまの形で生じているように思われる．

高度成長期の日本は，金を儲けることを経済の発展と考え，目先の利潤のために自然や歴史的文化遺産を喰いつぶしてきた．そして今日なお，そのような認識，価値観から抜け出せないでいるように思う．　たとえば大阪の旧砲兵士廠をいとも簡単にとり壊し何ら反省のない大阪市の行政．　しかもそのあとにホールと文化公園をつくるというのだからその文化への認識を嚙ってしまう．　一見，文化行政のように見えて，そこにある価値観は，高度成長のそれと全く同一である．

経済の終局の目的を生活環境を豊かにすることに置くならば，既存の文化遺産や自然はそれを支えるものとして重要な存在になる．　自然や文化を破壊して金に換えるのでなく，地域社会のそれを保全し豊かにしていくことにこそが，真の経済発展の基礎とならねばならない．　長期的にそれは経済の発展を支えるものとなっていく．

諸外国が日本経済や生活文化のあり方に疑問を抱くのは，そうした経済に対する認識の違いが大きく作用している．　例えば西ドイツは，経済成長率は４％でよいという．　その成果は，長い耐用年限をもつ住宅をつくり街を美しくしていく．　古い街並みを遺し修復していく，自然を豊かにする，という方向に向ける．日本と同じように戦禍をうけた都市と国土の再生の原理をそこに置き，生活環境と人びとの暮らしを豊かにしようとしてきた．現在の日本人は，そうした点を見ず，西ドイツ病，イギリス病などと蔑んでいるが，未来を展望した場合，日本の進路は誤っているのでないか．　われわれは真に生活の質の豊かさに結びつく経済や文化について考えてみなければならない．

未来をデザインするとは，過去をいかにうけつぎ，現代をいかに創造するかということにあると思う．　現在のように，過去を亡ぼし，未来にのこしえぬ不良建築の大群をつくって，豊かな未来を想像し創造することはできない．　われわれの日々の営みを歴史の流れの中で考えていくことこそ，未来をデザインする出発点であると思うがどうだろうか．

●はやかわ・かずお／神戸大学教授，環境施設計画

■流政之の《北追岬》

奥尻島の新しいモニュメント

小川 熙



photo=M. Nagare

海にむかってたつ彫刻は
人間のためにのみ　つくるものでなく
海にも　また　これをみつめる
権利をもっているものなのである
——流 政之



函館から西北に向って約40分，日本短距離航空の19人乗りのプロペラ機は，日本海の孤島，奥尻島に着く．　島の南端の空港から右へ，東海岸を北上すれば，島の中心地である奥尻町とフェリーの着く奥尻港がある．　一方西海岸に沿って進むと，猛烈な波濤と風の中に，〈無縁島〉〈ホヤ石〉〈モッ立岩〉〈カブト岩〉といった素朴な名をもつ奇岩が次々と現れて眼を楽しませてくれるが，それから道は灌木と野草におおわれた台地を登るかたちになり，そこで突如，流政之の彫刻が現れる．

その辺の地形は複雑で，小さな起伏が幾重にも連なってのびており，その先にはただ広い海面を望むのみである．　海はもちろん青いのだが，いくらか寂しげに見える．　風は一きわ強い．　右手を見下すと西海岸唯一の聚落である神威脇漁港と海岸に接した温泉の共同浴場が見える．　流政之の彫刻が立っているのはその岬の台地の一番高い所である．

彫刻は白御影石による三本の柱からなっている．　一本が高さ4.77m，他の二本はそれよりやや低い．　柱身はブロックの原形をそのまま活用した四角柱で，それぞれの面に幾段かの鏨ぎ目や凹凸をつくり，それが光を受けたときに，計量化されない日本的なリズムを生み出す．光の方向と強さに応じて陰影の表情が刻々と変ることが，この彫刻の生命なのである．　磨き上げない粗い肌は見るものに親近感を与え，思わず近づいて触れたい気を起させる．　それは流政之の他の彫刻でも同じことだ．

この彫刻がユニークなのは，三本の柱身の上に，同じ白御影のいずれも球体を四半分に割った，いわば食卓のレモンのような形の頭部がのせられていることである．　彎曲した凸面を下側にして一つの接点で柱身に接しており，一見ころがり落ちそうに思えるが，実は柱身の芯となるところに太い金属パイプが通っていて，それで串刺しになっているのである．　この技術的解決は作者が最も苦心したところであろう．そして最上部に当る二つの切断面は滑らかに磨かれ，三つともすべて同じ仰角で西の海側の天空に向けられている．　見方によってはレーダーのようにも見えるし，三人の親子が天を仰いでいる姿にも思える．

西の空を向いているといったけれど，その方位は測量によって正確に定められたのではない．　昨秋，この彫刻が現場に設置される作業にわたしは立ち会ったのだが，スタッフの人たちが半球体の頭部を据えつけ終ったあと，最後に流政之が全体を眺め，わずかに回転させて角度を修正したのである．　つまり，かれにとってはあるべき方位はたった一つしかなく，大空を渡る鳥たちがまちがいなく目的地を目ざして行くように，流政之は本能的な感性でその方位を定めたのであろう．　それは目に見えぬ気韻に対応する方位なのである．

神威脇の聚落に下りてふと岬の突端を振り返ると，緑の台地の上に白く光るこの彫刻が見え，わたしはギリシアの遺跡のようだと思った．デルフォイでもよい，セジェスタでもよい……草原の中で太陽と風を受け，自然と感応しながら黙然と立ちつくす大理石のモニュメントを思い出したのである．　ギリシアの神殿は一つの共同体全体の祈りのシンボルであり，だからモニュメントと呼ぶことができるのである．　たしかにこの奥尻の彫刻はモニュメントの名にふさわしい．　それは第二次大戦のあと，国後島から引き揚げて奥尻に辿りついた280人の人々の想いを記念するために，島民のねがいによってつくられた彫刻だからである．　島民が流政之に直接働きかけたのがきっかけとなり，北海道庁の援助も含めた公費による環境整備計画の一環として実現したものである．　だからこのモニュメントを核として，周辺の自然環境に多少の手が加えられ，広大な〈ナガレ・パーク〉がつくられることになっている．

近年環境デザインが重視され，多くの野外彫刻が立てられたが，ほんとうにモニュメントと呼ぶにふさわしい例がいくつあっただろうか．人間を圧殺する巨大なカーテン・ウォールの前にアクセサリーとして置かれたものがすべてであり，企業の側のエクスキュースに過ぎない．市民の心はこもっていないのである．　〈北追岬〉と名づけられたこの彫刻には，島民の心がこめられている．　そして流政之にとっても，かれのランドスケープの仕事のために，これまでにない幸福なロケーションを得たことになろう．

奥尻島の中心部には自衛隊の観測基地があるという．　この彫刻には政治的な意味があると考えてはならない．　しかし沖合を通過するどこかの国の潜水艦が潜望鏡でこの彫刻を発見したとき，この島が軍事基地ではなく，文明の島であることを知るだろう．

●おがわ・ひろし／美術評論家

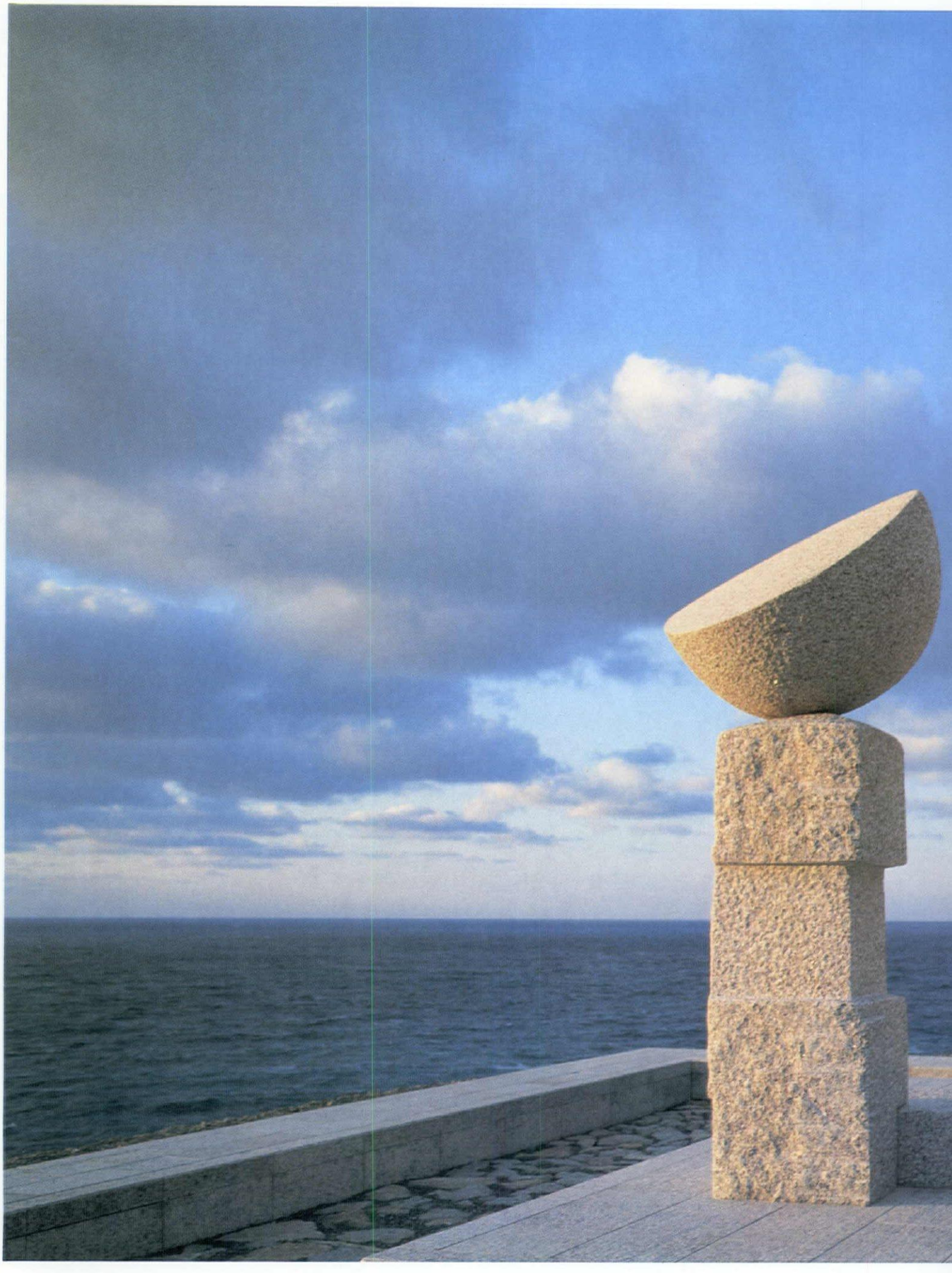




photo = Hokkaido Art-sha

風よなけ
波をたたけ
きみ知るや
北追岬の
かえらざる島の歴史を

石よなけ
雲をたたけ
きみ知るや
北追岬の
風にのこせし石の花

流 政之

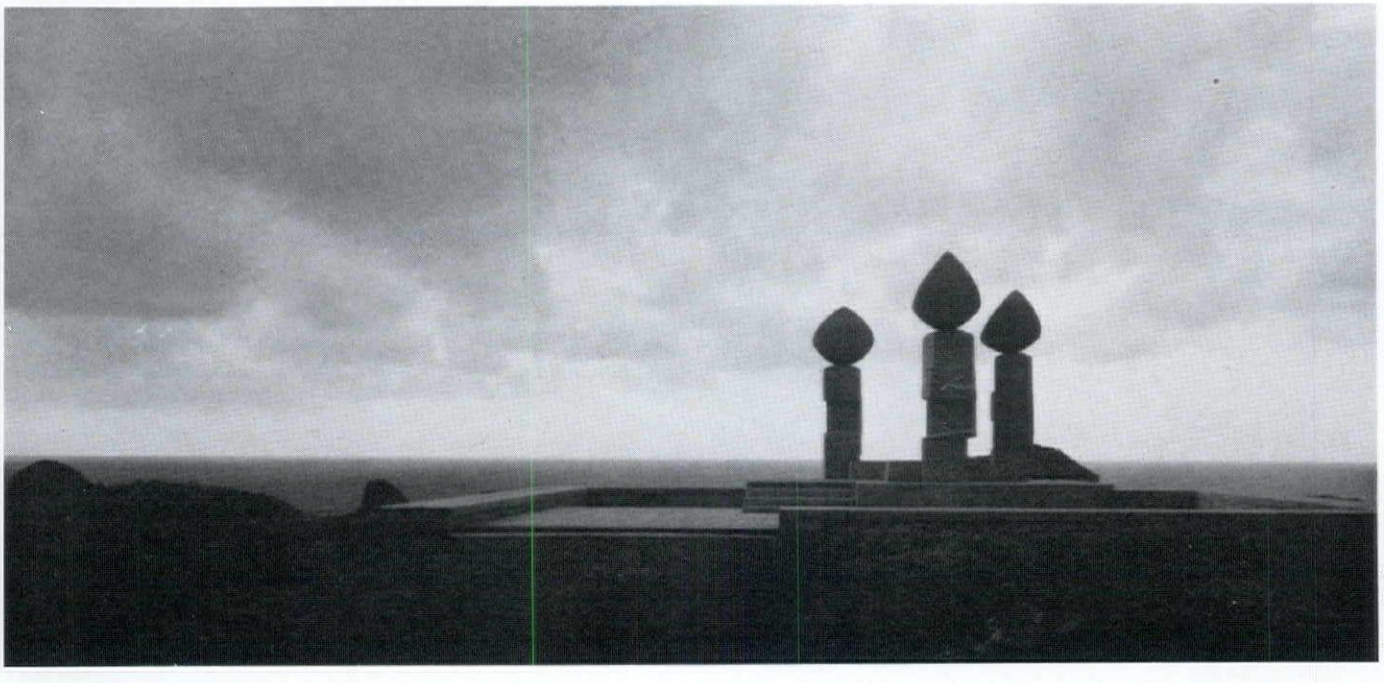
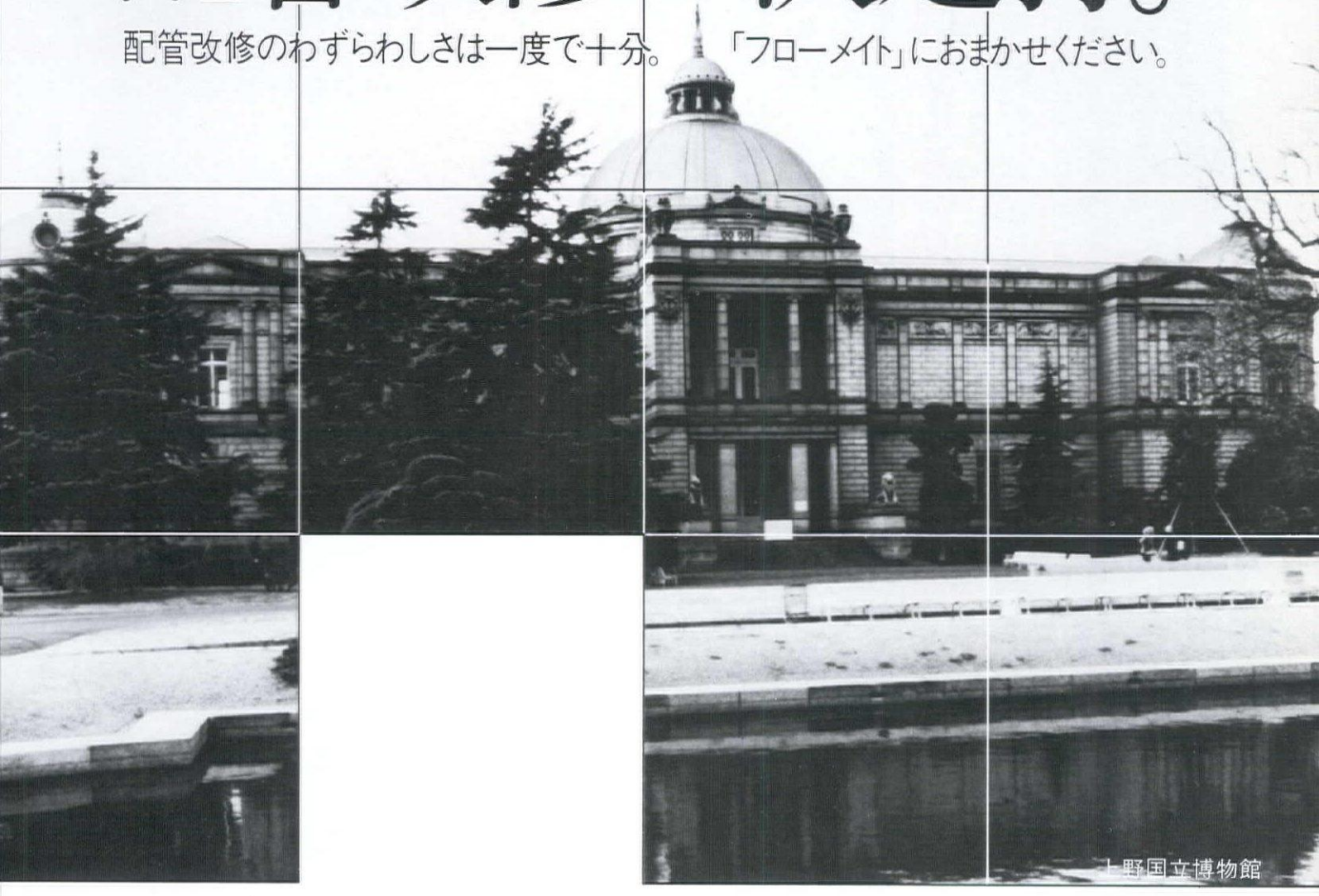


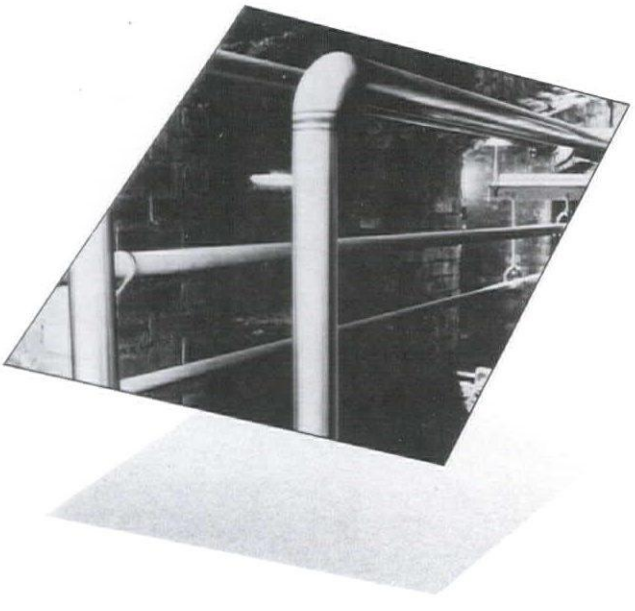
photo: K. Kimura

《北追岬》
彫刻＝流 政之
大きさ＝高さ：4.77，長さ：6.40，幅：4.80m
材料＝白みかげ石
協力＝野田敏雄，太田秀雄，泉 重明，岡崎末広
　　太田文雄，木村清紹，斉藤浩二
竣工＝1982年5月
彫刻広場＝226.20m²
公園面積＝約130.000m²（4万坪）
設置場所＝奥尻島神威脇（カモイワキ）園地―通称：ナガレパーク
建設主＝北海道奥尻郡奥尻町

配管改修の決定打。

配管改修のわずらわしさは一度で十分。「フローメイト」におまかせください。


上野国立博物館



ビルの管理経費の中で改修工事や補修費用が大きなウェイトを占めています。「フローメイト」なら、これらの経費節減に大きく貢献できます。「フローメイト」は接続加工に必要なさまざまな部品工具をすべて取揃えた屋内配管の総合システムです。錆コブの発生がないので、他の管材に比べて細管で済み、付帯経費もごくわずか。改修工事に最適な管材といえます。さらに、寿命は建物と同等かそれ以上。一度「フローメイト」にしたら、メンテナンス経費を驚くほど低減できます。こんどの改修工事の計画には、ぜひ「フローメイト」をご採用ください。

●**最終コストが安くつきます。**在来管に比べて改修コストは多少高くなりますが、長期的に見て取り替え・点検・補修などの材料費や人件費を節減できるのでお得です。

●**省エネルギー型です。**錆こぶの発生がないので、他の鋼管に比べて小径管で済み、熱ロスが少なく、機器へのムダな負担もかかりません。

●**赤水や青水の心配がなく、いつまでも衛生的です。**

日新製鋼

給水・給湯・冷暖房用
月星印ステンレスパイプ配管システム

フローメイト

■お問合せは――●本社〒100東京都千代田区丸の内3丁目4番1号（新国際ビル）☎03(216)5511●大阪支社〒541大阪市東区大川町1番地（日土地淀屋橋ビル）☎06(202)1331●名古屋支社〒450名古屋市中村区名駅3丁目25番9号（堀内ビル）☎052(582)6061●札幌営業所☎011(241)7524●仙台営業所☎0222(22)5835●新潟営業所☎0252(43)3491●富山営業所☎0764(33)8011●岡山営業所☎0862(31)4355●広島営業所☎082(248)4611●高松営業所☎0878(51)9756●福岡営業所☎092(781)1251

資料請求券 SD 8 フローメイト

書評

ギリシア美術褝稿（びじゆつざつかう）

澤柳大五郎＝著

A5判　412頁

美術出版社　4300円

散策者の甘美な嘆き

ギリシア(というのは古代ギリシアのことだが)は特別な世界である．　並の観光客の心づもりで入っていっても，そこで何かを見ることはできない．　そもそも心づもりなどという計らいを捨てなければギリシアへは入っていけない．ギリシアが私たちに要求するものは，まず何よりも少年のように素直な目である．

こういうギリシア世界の特異さは何に基くのか．　著者はそのギリシア論の集大成《ギリシア美術褝稿》の入口に「ギリシアの風景」を置く．　その冒頭を「ヨーロッパ人，特にアルプス以北の人がギリシアに就いて語るとき，先づ第一に云ふのは光と空氣である．　信じられないくらゐの明るさと遠くの木の葉や礫までもはっきりと見せて殆んど距離感を無くしてしまふやうな澄明な空氣が北方のキムメリオリの目を瞠らせるのである」と切り出した著者は，同じ南欧でもイタリアには「レオナルドのいふ色彩乃至空氣遠近法」があるのに「ギリシアにはこの空氣と色彩のペルスペクティヴがない」ことを言ったのち，つぎのように述べる．

……ギリシアの風景を見ればギリシア人の彫刻に優れてゐた理由がうなづかれる．ギリシアの風景は malerisch（彩畫的）ではない，極めて plastisch（彫刻的）である．　山の稜線もその皮膚のレリエフも明確で觸覺的である．　ギリシアでは見るといふことが他の國とは別の意味を示す．ギリシア人が眼に映ずる世界に我々の思ひ及ばぬ高い價値を認めてゐたといふこともギリシアにゐると素直に受取れる．　ギリシアでは眼に見えるもの以上に明晰なものがあらうとは思はれない．　プラトンのイデアが基督教以降の理想といふやうな遠い彼岸のものではなかったといふ説も理窟ではなく實感できる．……

著者はこれにさらに「山容樹姿の嚴しさ」と「風景の特異な性格としての雄大さ」を加え，「かういふ嚴しくて壯大なギリシアの風景の典型はデルフォイであらう」と言う．「今われわれの見る風景は古典時代とあまり變はつてゐないといふ」，「だから今日われわれが歩く道とむかしパウサニアスやストラボンの通った道とは，いやオイディプスが知らずして父ライオスを斃した道もその頃とそんなには變つてゐないのかも知れない．　ただ山河はあって，人とポリスとは亡んだ」とつづける．

著者とギリシアの関係はまことに明確というべきであろう．　著者は「ギリシアの風景」の特異さをまず言い，そこに人が来てポリスを作り，その上に産んだ文化の意味を問おうとする．「人とポリスとは亡」び，残っているのは遺跡であり，遺品である．「アテナイのアクロポリスでも，オリュムピアでもデルフォイでも，またデロスやリンドスでも，わたくしはその遺跡をもとほり歩きながらその盛時の姿を思ひ描かうとした」と著者はいう．　以下はその試行（エセー）の策だということだろう．

そんなわけだから，「ギリシアの風景」に「ギリシア美術に就いて」がつづくのはまことに自然である．　そこで語られるのは簡潔なギリシア美術通史だが，扱う範囲は「幾何學樣式」から「前四世紀」まで，「アレクサンドロス大王（前356—353）の死から始まる所謂ヘレニズム時代」は潔癖に避けられている．　著者にとっての「本来のギリシア美術」とは「幾何學文時代から前四世紀の後期古典期に至る」美術であって，その間の美術だけが著者がそのめぐりを「もとほり歩き」考察を繰返す対象なのである．

「もとほり歩き」とは著者の態度を言いえた表現で，その考察は散策の憧れと愉しさに充ちている．　その散策の記録は四部に分かれ，Ⅰは本質的なギリシア美術論考，Ⅱは外からあるいは現代から見たギリシア美術の意味，Ⅲは

日本の建築［明治大正昭和］
［全10巻］
●企画・編集＝村松貞次郎　●写真＝増田彰久　●造本＝杉浦康平
定価＝各4,800円・菊倍判変型・平均192ページ　●内容見本送呈
建築家と作品の両面から概括した日本近代建築史！
よみがえる明治・大正・昭和の町並みと建築群！
血肉を持った通史を期待——土方定一　美術評論家
写真でみる建築家のエッセンス——渡辺義雄　写真家
歴史的遺産を超えるものとして——村野藤吾　建築家
全巻完結



1 開化のかたち
著者＝越野武
登場する建築家
清水喜助　林 忠恕　安達喜幸　山添喜三郎
清水義八　立石清重　高橋兼吉　堀江佐吉 ほか

2 様式の礎
著者＝小野木重勝
登場する建築家
ジョサイア・コンドル　片山東熊

3 国家のデザイン
著者＝藤森照信
登場する建築家
辰野金吾　葛西万司　片岡 安　長野宇平治

4 議事堂への系譜
著者＝長谷川 堯
登場する建築家
妻木頼黄　武田五一　大熊喜邦　矢橋賢吉

5 商都のデザイン
著者＝坂本勝比古
登場する建築家
山口半六　河合浩蔵　野口孫市　日高 胖
長谷部鋭吉　竹腰健造　宗 兵蔵　設楽貞雄

6 都市の精華
著者＝山口廣
登場する絵築家
渡辺 節　安井武雄
ウィリアム・メレル・ヴォーリズ

7 ブルジョワジーの装飾
著者＝石田潤一郎
登場する建築家
曾禰達蔵　中條精一郎　横河民輔
高松政雄　松井貴太郎

〈7月刊〉 8 様式美の挽歌
著者＝伊藤三千雄＋前野嵓
登場する建築家
伊東忠太　鈴木禎次　岡田信一郎　渡辺 仁
佐藤功一　西村好時　高橋貞太郎 ほか

9 ライトの遺産
著者＝谷川正己
登場する建築家
フランク・ロイド・ライト
遠藤 新　田上義也　岡見健彦　菅原栄蔵

10 日本のモダニズム
著者＝近江栄＋堀 勇良
登場する建築家
遠藤於菟　三橋四郎　後藤慶二
堀口捨己　吉田鉄郎　山口文象　前川国男 ほか

東京都千代田区三崎町2-22-14　三省堂

評者＝
高橋睦郎

比較的気軽に書かれたギリシア美術の旅の記，Ⅳは墓碑を主とするギリシアの死者奉献美術論考で，とくにこの部分はブシォール《或るアッティカの少女の墓》の訳者にふさわしく，目下最大の関心事であるかして，内容の密度も濃い．ここでも，しかし，著者の基本的態度は散策者のそれである．　Ⅳの中で最も古く書かれた「墓邊にて」の末尾に著者は言う．「死を，死者と生者とのつながりを，それにも拘らず及び難い死者の遠離を，このやうに哀しいまでの美しさに高めることの出來たギリシア人とはどんな人間なのか，これら前五，四世紀の墓碑群の語る言葉ならぬ言葉から奈何やうにかしてそのギリシア人の心を讀み解きたいと，未だ肌寒い二月初めの數日を終日墓邊で過してしまったのであった」と．

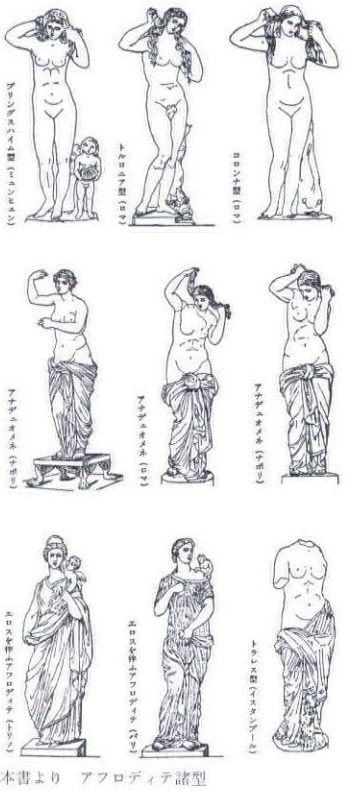
著者の語り口はおよそ書斎派的でない．たとえばⅣの劈頭の「レシングとヘルデルのタナトス論」のようにブッキッシュな比較に終始するものにしても，どこかに散策者の軽やかな歩みが仄見える．　アクロポリスからアゴラへ，ケラメイコスへ足を運ぶ人のように，著者はレッシングの「ラオコオン」第十一章からヘルデルの書簡体十二章へと散策の歩を運ぶ．　その歩運びはプラトーンの対話篇のソークラテース，おそらくは歩きながらディアロゴスを運んだソークラテースを思い出させる．　ただ著者の場合，対話者のどちらもが自分，つまり自問自答だというだけだ．

著者はギリシア美術に関してわが国でも権威者のひとりなのだろうが，ギリシア美術に対するときの素直さは少年を思わせる．　ソークラテースが少年の魂を持ちつづけていたように，著者も少年の魂を持ちつづけているのだろう．ソークラテースはその少年の魂によって知とは何かを問いつづけた．　同様に著者は美とは何かを問いつづけている，といえばいかにも辻褄が合うが，むしろギリシアとは何かを問いつづけている，というほうが精確だろう．

さて，ギリシアとは何か．　私はこの小文のはじめにギリシアは特別の世界だといったが，その特別さは私たちに素直な目をしている特別さだともつけ足した．　それだけいえばギリシアとは何かに対する答は完了かといえば，そんなことはない．　答がまた質問になり，その答がさらに質問になるような，いわば無限の問いとしてギリシアはある．　だから，ギリシアとは何かとは世界とは何か，あるいは存在とは何かという問いと別のものではない．　おそらくギリシアの特別さはほかの土地がその土地の固有名詞性にとどまるのに対して，無限に普通名詞性に進んでいくそういう特別さなのだろう．ギリシアの特別さは特殊から最も遠いのだ．

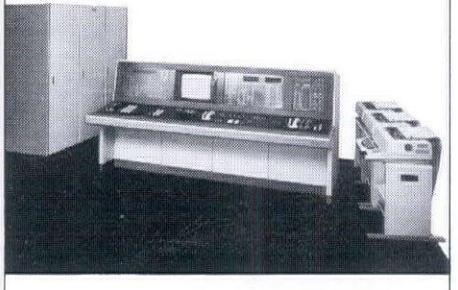
そういう特別さにいったん捉えられた人は，そこから逃れることはできない．　このギリシアの散策者もギリシアの散策をやめることは不可能だろう．　「ギリシアの風景」はそのことを自覚した中の甘美な嘆きの歌でもある．

●たかはし・むつろう／詩人



本書より　アフロディテ諸型

防災のプロ「ノーミ」。
その技術を結集した
ビル管理システムの決定版。



●防災、空調、電力などを集中監視制御。スケジュール運転、日報作成も自動化し、省力化。
●外気取入量制御、熱源機器の台数運転、最適運転制御などにより省エネを実現。
●火災報知、空調、電力などの制御信号を共通の伝送装置で処理でき設備費を低減。
●システム化で、より安全なビル管理を実現。

ノーミのビル管理システム
MIDEX

能美防災
本　社　〒102 東京都千代田区九段南4-7-3
☎(03)265-0211(大代表)



野性の鋭い直感が理想の道を選ぶ。
ロンフォームの快適な歩行感と安全性が、人間のためのよりよい生活空間をつくりだす。

ロンシールの床、ロンフォームは、
実績の足跡を未来につなぐ。
ロンシールのソフト&セーフティ
塩ビシート床材です。

住みやすい空間づくりが私たちの仕事です
ロンシール

東京営業所—東京都千代田区神田松永町13川口ビル　☎03(253)4941㈹／支店—大阪☎06(252)4421㈹／出張所—札幌☎011(531)2602・仙台☎0222(88)8501・新潟☎0252(43)3791・大宮☎0486(45)1511・横浜☎045(662)7370・金沢☎0762(44)5871・名古屋☎052(935)7063・岡山☎(086926)4321・広島☎082(249)3600
高松☎0878(22)4177・福岡☎092(472)5857／事務所—青森☎0177(77)1155・静岡☎0542(51)3712・長野☎0262(28)3715　＊詳しい資料は上記宛ご連絡下さい。

■お知らせ

第2回高村光太郎展

第2回高村光太郎展の受賞者が以下の通り発表された．受賞作品は7月3日（土）～10月31日（日）まで箱根の彫刻の森美術館（緑陰広場）で展示される．

●高村光太郎大賞　外岡秀樹：望郷
●ジャコモ・マンズー特別優秀賞　工藤健：愛の変容
●鹿内信隆特別優秀賞　峯田義郎：風について
●エミリオ・グレコ特別優秀賞
吉田隆：アルバ――山の音
●優秀賞　コルネリス・ジョトマン他10名
●美ケ原高原美術館賞
ウジェーヌ・ドデーニュ他10名
●佳作賞　市村緑郎他5名

UIA 建築学生コンクール要綱

このたび，UIA 建築学生コンクールの要綱が発表された．　テーマは The Architect As An Enabler Of User House Planning And Design で，近年ますます必要性が高まってきたユーザー・コントロールおよびセルフ・ヘルピングの手法による住居計画が要求されている．　応募規則の概要は次の通りである．

・登録は不必要
・1983年7月31日までに応募案を発送すること
・1983年9月15日までに UIA 事務局に応募案が必着すること
・発送先：UIA Secretariat General, 51, rue Raynouard, 75016　PARIS, France
・提出物：応募案を4枚のパネル（各 120cm×80cm）にまとめ，各パネルを撮影した35㍉カラースライド，モノクロ写真紙焼き（13×18cm）およびそのネガフィルム，応募料の小切手または為替のコピー（別送の場合）を提出する．
・説明文は英語または仏語を使用すること．

入賞者は1984年にマニラで開催される UIA 総会に招待され，また，入賞案は UIA の総会およびパリで開催される展覧会で公開され，展覧会カタログに収録される．

詳細の問い合わせ先：日本建築家協会
東京都渋谷区神宮前 2-3-16　Tel. 03-408-7125

鬼瓦展――飛鳥から昭和まで

会期：7月1日（木）～9月25日（土）　10:00～18:00
会場：伊奈東京ショールーム2F　伊奈ギャラリー

故宮博物院展

会期：7月17日（土）～9月27日（月）　木曜休館
会場：西武美術館
入場料：一般900円，大・高生600円，小・中生300円
主催：西武美術館，朝日新聞社

■新刊紹介

フットワーク

足の生態学

鈴木忠志，磯崎新，高橋康也，山口昌男＝著
A4判　180頁
パルコ出版　4300円

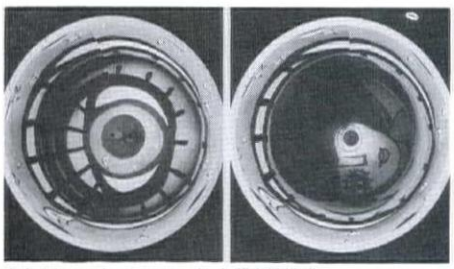
〈すべての演劇的なるものへ〉とサブタイトルされたこの本は，人間の行為の匿された基礎――〈足〉をめぐる初の本格的論集である．　本書は4名の仕掛人，鈴木忠志，磯崎新，高橋康也，山口昌男の座談，各論文と夥しい量の図版を交錯させながら，〈足〉を媒介にして世界を解読し刺激的な文明論的視点の構築を試みている．



新・遊びの博物誌

坂根厳夫＝著
205mm×182mm　276頁
朝日新聞社　2600円

本書は，SD1977年11月号 書評欄で紹介した著者の前作《遊びの博物誌》の続編にあたるもので，朝日新聞に1980年2月10日から81年6月7日まで番外編を含めて70回にわたって連載され，ルービク・キューブの流行に代表される最近の〈知的遊戯の復権〉の隠れた推進力になったともいえる，コラム〈新・遊びの博物誌〉に，若干の新しい資料や関連記事等を付け加えて一冊にまとめられたものである．　前作より写真が豊富になり，さらに連載にないカラー写真が加えられたために，より理解しやすくなっている．


本書より　〈ズームスコープ〉矢萩喜従郎 作

建築・NOTE　鈴木恂

メキシコ・スケッチ

鈴木恂＝著
B5判変型　176頁
丸善　3200円

建築家として歩み始めた若き日の鈴木恂に強い衝撃を与えた，メキシコの風土・都市・建築．建築家鈴木恂の設計の原点ともいうべき，2回にわたるメキシコ旅行のスケッチ，ノートが，短い文をつけて整理し一冊にまとめられて，シリーズ〈建築・NOTE〉の第3回配本としてこのたび丸善より刊行された．



本書より　生と死の面

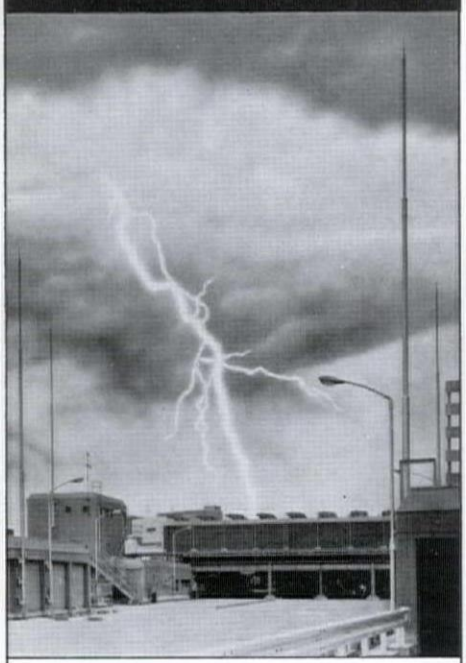

本書より　グアナファト

都市・地域解析の方法

奥平耕造＝著
A4判　296頁
東京大学出版会　6800円

1979年に42才の若さで急逝した，わが国の都市解析研究の先駆者，故奥平耕造氏の主要な論文をまとめた本，《都市・地域解析の方法》が，このたび東京大学出版会より刊行された．

避雷設備
／設計・施工
避雷針器材
／製作・販売



東京避雷針工業株式会社

〒164 東京都中野区弥生町1-55-11
☎03(372)5261(大代表)

書評

叢書　文化の現在　2

身体の宇宙性

市川浩，杉浦康平，多木浩二，別役実，
渡辺守章，磯崎新＝著
A5判　288頁　岩波書店　1900円

内なるものと外なるもの

もうはるか以前のことだが，ある雑誌の編集者が特集の題材を考えあぐねて相談に来られたことがある．　毎月，何かしらテーマを決めて，それをめぐっての論文やエッセイで頁を埋める．いま一般の型の雑誌だが，私はそのとき，人間の身体ということにとことんこだわって見たらどうでしょうと言ったのを覚えている．　バレエにおけるさまざまな動作の宇宙論的な意味を解きあかしたゲルハルト・ツァハリアスの《バレエー形式と象徴》のようなものから，それこそ解剖学的な立場からの身体構造の解きあかしといったものまでを含む，抽象的な議論に走ることを慎重に避けた身体論の特集というのが私のアイディアだったが，この本を読んで，私はすっかり忘れていた，その実現しなかった以前の構想のことを懐しく思い出したのである．

これは岩波が出している叢書《文化の現在》の一冊であり，これまでの各巻と同じく，ひとつのテーマをめぐって複数の筆者が論文ないしエッセイを書いている．　ここでも身体についての議論がなるべく具体的なかたちで展開するよう配慮されており，そのなかには多木浩二や磯崎新の文章のように，家具や建築，都市といったいわば身体の投影とも言うべきものを通して語られる身体論も含まれている．　とりあえず所収の論文のタイトルとその筆者をあげれば，市川浩〈身体・家・都市・宇宙〉，杉浦康平〈眼球のなかのマンダラ〉，多木浩二〈身体の政治学・家具というテキストを読む〉，別所実〈イロニーとしての身体性〉，渡辺守章〈劇場の身体　身体の劇場〉，それに磯崎新の〈身体の虚と実〉の6篇である．　このうち「媒介者」というふしぎな名前を負わされた磯崎の一篇は，この叢書の方針として，本来は収録されたさまざまな独立した文章のあいだに脈絡を付け，読者に全体を総合してのパースペクティヴを提供する役割を担う筈のものだったのではないかと推察されるが，彼は賢明にもこのややこしくどうやったところでうまく行きそうもない作業からさらりと身をかわし，自らの建築の造りかたから話を起して今日の身体をとりまく環境の在りかを叙述し，いわばこれらの論文の書かれたバックグラウンドを説明する形でその責を果している．それゆえこれは磯崎のそれも加えて6篇の身体論をあつめたオムニバス形式の本ということになろう．

〈身体の宇宙性〉と題されたこの本は，つまりは内なるものとしての人間の存在と，それを取りまく外なるものとのかかわりあいの様相をめぐっての論考である．　それゆえこれを論ずるにあたっては，当然さまざまな視点の取りかたが出来るはずで，たとえば杉浦は肉体そのものに眼を向け，そのなかにあらかじめ内在しているともいえる形での外なるものを論じようとする．　またこれとは逆に，多木や磯崎がその内容や語りかたに違いはあるものの，いずれも外なるもののありように仮託して内なるものの様態を語ろうとしているのは先に触れた通りである．　市川の所論は外なるものの認識あるいは把握のしかたを通じて内なるもののありようを知ろうとするもので，いわばこのふたつの世界の橋渡しのメカニズムを探る立場と言えようか．　一方，別役と渡辺の立場は，前者が主にフェルメールの絵のなかに描かれた人物にこだわって，たんなる動作や表情を超えた「たたずまいの描写」という論を展開しているということはあるものの，つまりは後者が蜿々と述べきたっている舞台における演戯者の身体性の問題に帰着すると思われる．　つまりそこでは，舞台という空白の空間のなかで，人間の身体がいかにしてそこに実在しない外なるものを担って見せるかというテーマが語られるのである．

評者＝
横山正

演戯者は劇にあって自らではない別の内なるものになり代るのではなく，自らの肉体の存在を通して虚構の風景を現出させるのであり，このとき，過去のあてぶりのごとき詞章の内容にあわせての演技が新しい光のもとに見直され・主体としての演技者自身が評価されるという当然の演者の地位の復権が行われるのである．

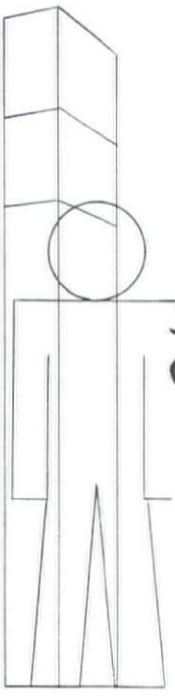
さてこの６篇の文章のなかで，思いがけぬ視角で私たちに新鮮な刺激を与えるのは，杉浦康平の眼と耳についての論考である．　彼は耳はかつて母親の胎内にあったとき，そのミクロの世界のおそろしいまでの音響を聴いている筈だと考える．　眼球もまた同じで，母体内部のおそろしいまでの内圧にある種の原像をすでにその網膜に感じとっている筈である．　人間の感覚器官は，そうした未生の段階での原体験をベースにして，ちょうどホワイトノイズにさまざまな操作を加えると，しだいに一定のパターンが浮び上って来るのにも似たメカニズムで，対象物にピントを合わせていっているのではないかというのが彼の推察である．

私が始めに述べた身体をめぐっての種々の論考をあつめようとしたときに，とりわけ重きを置いてみたいと思ったのも，こうした身体の造られかたそのものから出発する思索であった．そのころ私は１冊の本に夢中だったのだが，それはイギリスで出版されたばかりの人体解剖の写真集であった．　身体のあらゆる部分が原色の写真でほぼ原寸大に撮影されているこの本を求めたのは，レオナルドのノオトを調べる必要からだったが，その目的以上に，この本の内容そのものに私は虜になってしまったのである．骨格や筋肉・神経などの組立てのメカニズムの巧妙もさることながら，まずそうやってあらわにされた肉体の内部自体がとにかく美しいのである．　そこには人間の文化的な営みの様相の問題を，いちどこの原点に立ち戻って考え直してみたいという誘惑に駆られるほどの迫力があった．　そしてこの杉浦の論文はまさにそこを立脚点にしているのである．　対称・非対称の問題，幾何学的な形と有機的な形，前と後といった市川が扱っているような主題も，いちどこの解剖学的な視座に降り立って見ると，また思いがけない視野がひらけるのではないだろうか．しかもそれは，杉浦も示唆するように，今日の科学の切りひらきつつある世界ともまたかかわり合うふしぎな接点となる筈である．

今日の身体論に往々にして見受けられる身体と宇宙が合一し即応していた過去の蜜月時代の叙述は，かえって白々しい感じがある．　ましてやルネサンスの時代がそうであったなどとは言って欲しくない．　むしろこのふたつの存在，内なるものと外なるものとのあいだのずれにこそ人間はその営みを築いて来たのであり，それは多木が提示する記号としての家具の様態にも明らかなところであって，別役が「手応えのない世界への不安を，手応えある肉体の酷使に置き換えて確かめる」のが私にとっての身体性だと述べるのも，またこのあたりにかかわってのことであろう．

このさまざまな傾向の論文をおさめた本を評するには与えられたスペースがあまりに限られているので，個々の論文の内容には立ち入れないが，しかし杉浦以外の論文も同様，それぞれに興味深く，いずれもさらに増幅してそれぞれ優に一冊の本となしうるほどのものである．ただここにあつめられた人々の書かれたものに日常，わりに良く目を通している人間としては，この本は本としてはやや物足りない．　言ってみればいつも通りの論文の集録で，せっかくこの才人６人が一堂に会して同一のテーマを採り上げたゆえの面白味があまり見えて来ないのである．　これはなるほど文化の「現在」を示す本ではあるが，文化の「未来」に向って踏み出そうというつもりの本造りではなさそうだと，この力作に最後にちょっぴり悪口を言わせておいていただく．

●よこやま・ただし／東京大学教養学部



からだのしくみは
「骨格と筋肉」だけでは
ありません。

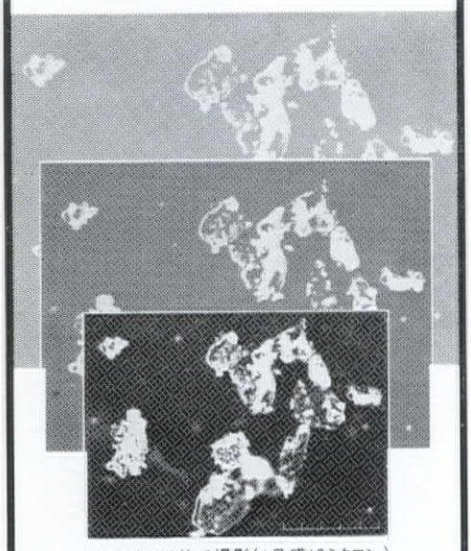
神経もあれば、血管もあり、あらゆるものが総合的に働いてこそ、一個の生体としての機能が発揮できるのではないでしょうか。
ビルや建造物の場合も、これと全く同じことて、鉄骨やセメント、石材、の組合せだけでは、外見上如何に立派でも、それは単なる物体の集合です。やはリ神経や血管と同じく、電気、水道、ガス、空気調和などがその機能を充分発揮できてこそ、素晴しい**居住性**が生れると思います。
しかし……
それだけで終ったのでは、まだ多くの欠かんが残っております。ところがこれ等の機能を更に無駄や損失のないよう活用できたとしたら、もっと素晴しいことではありませんか。
集中管理或は**集中制御**によって……
省力、省エネルギー、省経費をはかることこそ、最も完ぺきな、からだのしくみ、つまリビル全体の機能を**フル**に発揮できるのではないでしょうか。

集中管理装置
NESCA

川崎電気株式会社

本　社　〒999-23 山形県南陽市小岩沢225番地
電話0238(49)2011大代表
営業本部　〒108 東京都港区芝浦３丁目７番４号
電話03(454)5141大代表

ミクロの世界へ。



●チリを400倍で撮影(1目盛10ミクロン)

「たったひとつの塵が命取りになることも…」
産業の高度化に伴い、クリーンルームへの期待が高まっています。新日空は独自の技術と豊富なノウハウを駆使し、ミクロの世界へチャレンジしています。エレクトロニクス、医療、薬品、生化学の最前線のニーズに新日空は高性能のクリーンルームでお応えします。

最先端技術に挑戦する
新日本空調
〒103 東京都中央区日本橋本石町4−2(三井第2別館)
☎(03)279-5671(代表)

書評

建築家山口文象

人と作品
RIA 建築綜合研究所＝編
230ミリ×235ミリ　268頁
相模書房　15,000円

新しい視点から見た山口文象論

本書は4年前に亡くなった建築家山口文象の「人と作品」に関する論説・座談・資料集であり，初の本格的な山口文象論である．

まず本書の冒頭には，山口と親交のあった4人の建築家・芸術家の回想が並ぶ．　続いて，山口の経歴が〈序走の時代〉(1902〜22)，〈離陸の時代〉(1923〜30)，〈飛翔の時代〉(1931〜52)，〈止揚の時代〉(1953〜78)の4期に分けて語られる．

長谷川堯執筆の〈序走の時代〉は山口の出生から建築家を志すに至るまでの時代である．長谷川はここで山口の生れ育った環境を生き生きと描きだしてみせる．　日本近代建築史において山口文象といえば，創宇社を率いて近代建築の啓蒙に努め日本に合理主義建築を導入した建築家，というのが一般的評価であろう．　しかし，長谷川の語る山口文象は単なる「モダニスト山口文象」ではない．　長谷川は山口を「東京の下町中の下町，浅草が生んだ建築家としてとらえなお」し，浅草文化が山口の生活態度や建築に生きつづけていたことを強調する．「平面であろうと立面であろうと，キリッとして，あえていえばいなせな仕上がりを持たなければ気がすまなかった．　逆にいえば山口の建築はそれが身上であった」というくだりは，山口の性格や建築の一面を鋭く言いあてているように思われる．

河東義之執筆の〈離陸の時代〉は，山口文象が建築家を志してからドイツに旅立つまでの時代であり，山口（当時は岡村蚊象）が創宇社の総帥として，また分離派建築会会員として活躍した時代である．河東は，当初芸術運動を標榜して一貫して形態重視であった創宇社が，運動の意義を「建築に於ける社会的認識」に求めて，しだいに「現実性と社会意識」に目を向けてゆく過程を主として描きつつ，山口の足跡を追っている．　またここで河東は，「創宇社が岡村蚊象のすべてであったわけではな」く，「彼にとっては，創宇社はあくまで形態の追求を目指した研究の場であ」った，とする興味ぶかい考え方を提示している．

〈飛翔の時代〉は山口のドイツ留学から戦後のRIA設立までの時代であり，「とにかくやりたいことは，ほぼ30代のうちにやりつくしたという感があるほどに，質的にも量的にも充実した1930年代」を含んでいる．　ここでは佐々木宏が該博な知識をベースに，山口のさまざまな作品をとりあげながら，山口文象論を展開している．

ここで評者が最も注目したいのは，「山口が帰国後にインターナショナル・スタイルの建築デザインを追求していたほぼ同じ時期に，一方で伝統的な和風建築を設計していたこと」に佐々木が光をあてた点にある．　この問題は山口を語る時にこれまで見過ごされてきたが，当時の山口の建築観，特に近代建築に対する考え方を知る上で恰好のテーマと考えられるからである．

インターナショナル・スタイルにあっては，当然ながら，風土や伝統は大きな意味を持たない．　グロピウスは1925年に《国際建築》を著して，技術の進歩と合理主義に立脚する新時代の建築は風土や民族の違いを超えてしだいに国際的に共通なものになる，と説いていた．　山口はそのグロピウスに傾倒してドイツに渡り，グロピウスの下で働いていたのである．　その山口がなぜインターナショナル・スタイルで設計しつつ，一方で伝統的な和風建築を設計していたのか．

佐々木は「山口にとっては，和風デザインはあくまでも，身すぎ世すぎの便法であり，とくに数寄屋風建築は彼のイデオロギー的立場と対立するものであると感じていた」と，作品の完成度の高さは認めつつも，山口の一連の和風建築に好意的な評価は下していない．　「和風

評者＝
藤岡洋保

はきわめて保守反動的なデザインであった．それは今日においても同様である．　伝統的というのは一種の美辞麗句であって，新しい創造とはあまり関係のないものである」とする佐々木が，山口の一連の和風建築を高く評価できないのは当然であろう．　この問題には長谷川堯も注目している．　そして，長谷川は，「意匠の切れ味」という点で「二つの流れを統一的にとらえ」ようとする姿勢をとっている．　評者は長谷川がとっているような包括的なとらえかたに可能性を感ずる．

佐々木自身の論説や本書の年表に触れられているように，山口は和風建築を必ずしも否定的にはとらえていなかった．　山口は若い頃「京都の名茶席を一席残らず，実測して写真をとって回ったことがある」し，「ベルリンに行ったときに，それを120枚ぐらいに整理いたしまして，学校で壁に並べまして，『日本のティ・ハウス』として発表」したこともあった．
また，本書の年表によれば，昭和9年6月の「山口蚊象建築作品個展」では，9点の出品作の中に数寄屋建築（関口邸茶室）が入っている．もしも山口が和風建築を「あくまでも，身すぎ世すぎの便法」と考えていたならば，個展でわざわざそれを発表したりするだろうか．

むしろ，インターナショナル・スタイルと和風建築を同時に追求することに対して，山口は矛盾を感じていなかったようにおもえる．
山口は和風建築をイデオロギーを介してではなく純粋に芸術作品と見ていたのではなかったか（むしろ近代建築に通じる要素を見出していたかもしれない）．　逆に，インターナショナル・スタイルは近代建築の完成型ではなく過渡的な形態，と考えていたのではないだろうか（このことは，本書の年表所載のグロピウスやル・コルビュジエが新建築の表現について悩んでいたという回想，あるいはジードルンクに関する回想から窺える）．　山口にとっては「創作」こそが最高の価値であった．　よりよい建築を「創作」するために，この時期の山口はさまざまな形態を試みていたのではないだろうか．　あるいは，この問題は，佐々木の言うように，単なる「日本回帰」で済まされるのであろうか．
今後の研究が待たれるところである．

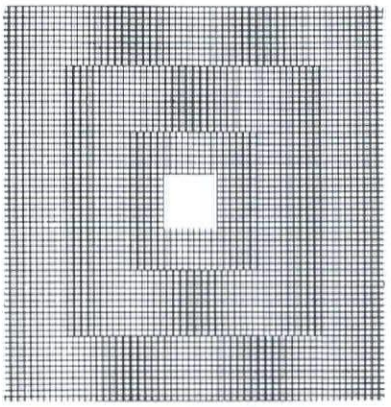
〈止揚の時代〉はRIA設立から山口の死までの時代であり，RIA設立当初のメンバー三輪正弘，植田一豊，近藤正一の座談で構成されている．　仲間同士の座談であるためか，部外者にはやや発言の意味を理解しにくいところもあるが，さすがに山口に親しく接していたために，山口を見る眼には三者三様の鋭さがある．そして，ここでは，建築家山口文象と共に，人間山口文象も浮き彫りにされている．　この三者の座談記録は今後の山口文象研究のための貴重な資料になるだろう．

なお本書には，この他に，山口の代表作品の写真・関連図版・年表・復刻論文があわせ収められている．　ここでは鈴木実作成の年表が注目される．　これまでにも，山口の経歴やエピソードは，ドラマ性に富んでいるために，「山口文象神話」となって建築界に流布していた．しかし，それは主に山口自身によって語られたことをもとに構成されたものであり，その中には山口の記憶ちがいや誇張，意識的・無意識的な虚偽が含まれていた．　この年表は，山口自身の回想の他に山口の周囲の人々の回想や新資料を盛り込んで，従来の山口文象像の修正を図っている．　特に，一見矛盾するような事項も安易な断定を避けて併記してあるのがよい．

このように，本書は長谷川堯・河東義之・佐々木宏によるフレッシュな山口文象論，そして新資料・新事実を掲載した年表・座談記録など，実に盛り沢山の内容を持っている．　そして，数多くの問題提起を行なって今後の山口文象研究を喚起している．　その点に本書の最大の意義がある，と言えよう．

●ふじおか・ひろやす／東京工業大学付属工高教諭，建築史

産業と文化生活に
クリアな空気を供給する——
これが菱和の仕事です



超高層・地域冷暖房・原子力・クリンルームに技術の可能性を追求し、新しい未来をきづくため研究をつづけています

菱和調温工業株式會社
東京都港区南青山2丁目3番6号
〒107 Phone：東京(03)402－7231

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社
●営業種目
空気調和設備/給排水衛生設備/塗装設備
/公害防止関連設備の設計・製作・施工
本社・東京支店　東京都新宿区西新宿2-6-1
新宿住友ビル ☎03-344-1851(大代)
大阪支店 ——— ☎06-448-5871 (代)
名古屋支店 ——— ☎052-211-1535 (代)
九州支店 ——— ☎092-431-2147 (代)

■新刊紹介

シルバー・シリーズ

半過去の建築から

木島安史＝著

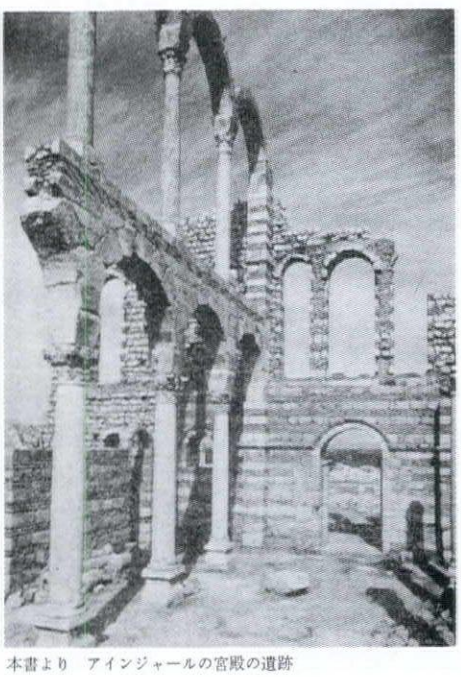
四六判　192頁

鹿島出版会　1500円

今世紀の第1四半世紀に始まり，約50年の時間によってほぼ全貌を見せるに至った近代建築運動に対する反省を背景にして，建築の3つの側面に光が当てられるようになった．　1970年代から顕著になり80年代に入って定着してきた，建築保存の運動と擬似様式建築意匠の復活，それに近年になって新しく加わりつつある，建築を耐久性あるものにしようとする試みである．近代建築の原理ともいうべき，論理の一貫性に対し，価値の多様性を対置し，近代建築をも含めて過去の建築を現在の自分とのかかわりにおいて見直そうとしていることは明らかである．

そうした現在の自分と切り離せない，これまでの建築は〈半過去の建築〉であり，同時に自分たちの作っている現代建築が，必然的に過去を継承しているという意味で〈半過去〉（アンパルフェ imparfait)なのである．

こうした視座から，著者がこれまで雑誌その他に書いた論評を下敷きにしてまとめ直した本書は，4つに大きく分かれ，まず微視的な視点をさぐりつつ建築を見直し，次いで辺境の地にこそトータリティが生れるのではないかと説き，さらに終りなき行為としての建築を眺め，最後に状況としての混在併存を考えている．



本書より　アインジャールの宮殿の遺跡

SD 選書

建築家の発想——私の師匠たち

石井和紘＝著

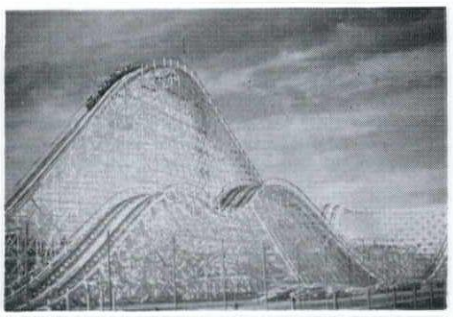
四六判　264頁

鹿島出版会　1500円

本書は，著者が，その建築修業の一端として，70年代から80年代にかけて雑誌に書いた評論26編を収めている．

内外の名の通った建築家40名余が批評の対象として登場してくる．　いずれも著者が修業の過程でふれえた，いわば師匠たちである．しかし著者は，ときに軽口のおしゃべりも交じえながら，この学習をあえて重ねてきた．

この積み重ねをひとつにまとめた本書は，著者の成長の跡を語るとともに，ここ10年の建築の潮流を明らかにするものとなっている．



本書より　スーパー・ローラーコースター〈コロッサス〉

住居——その本質とプラン

アンドレ・ギュトン＝著

佐々木隆文＝訳

B5判　240頁

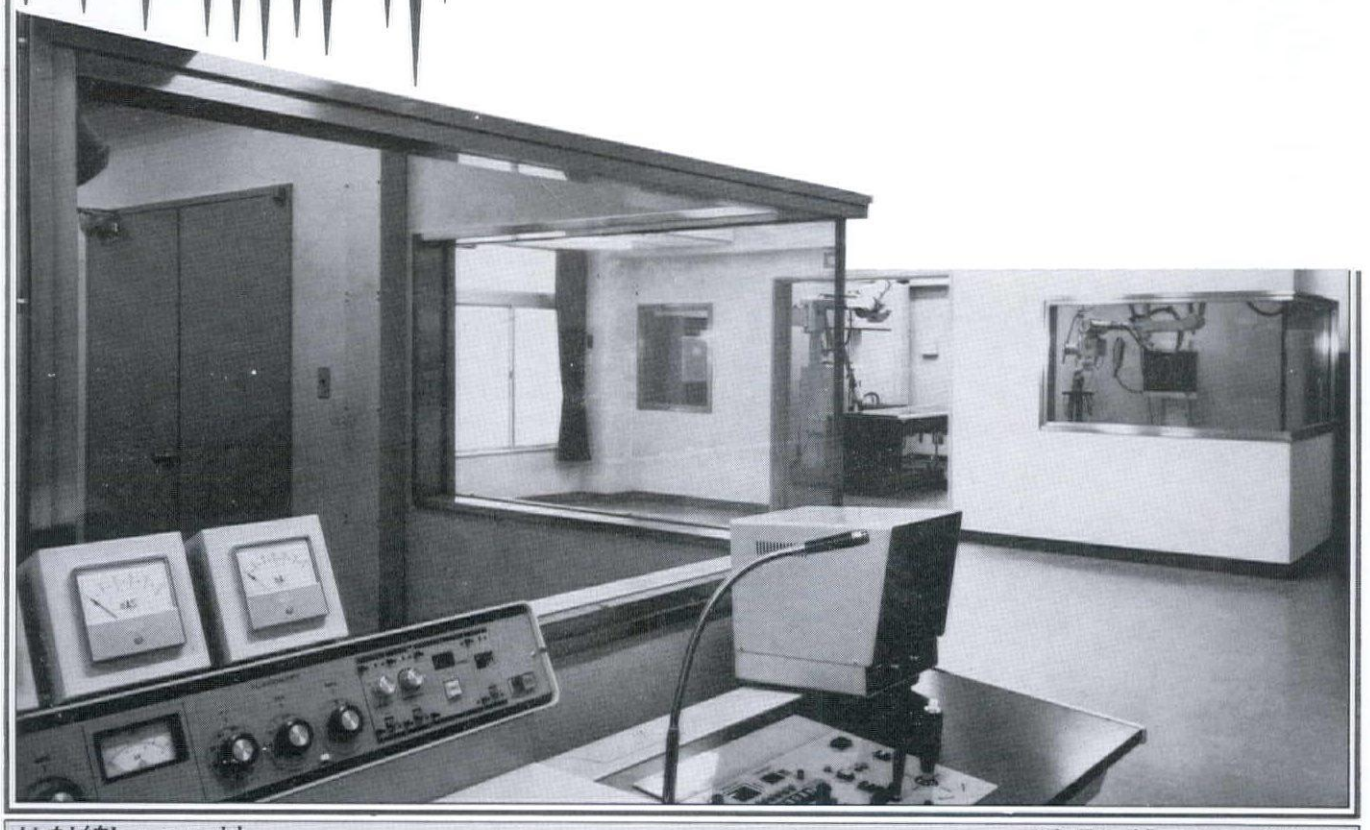
鹿島出版会　5800円

本書は，著者によるエコール・デ・ボザールでの建築計画の講義のうち，住宅を扱った部分(1954年刊）の翻訳である．

講義は1940年代（第二次大戦中から戦後にかけて）のものと見られ，全体を通じ建築を都市の構成要素としてとらえているところに特色がある．　その点，本書も，住宅を都市の中でのその置かれる場所によって分類するなど，都市を基準とした住宅論となっている．

巻末の住宅，集合住宅とその配置計画を示す豊富な図版は，当時の欧米の住宅水準をよく伝えている．

XA 密室感ゼロ。が変えました。



放射線しゃへい材——透明含鉛アクリル樹脂板

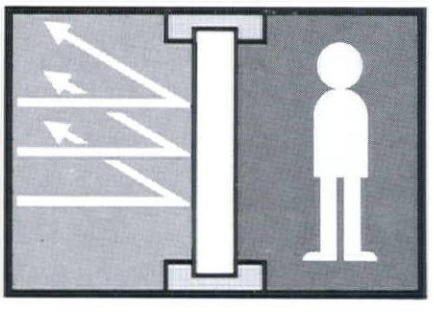
キヨウワグラス-XA®

昭和52年、放射線環境に大きな変化。

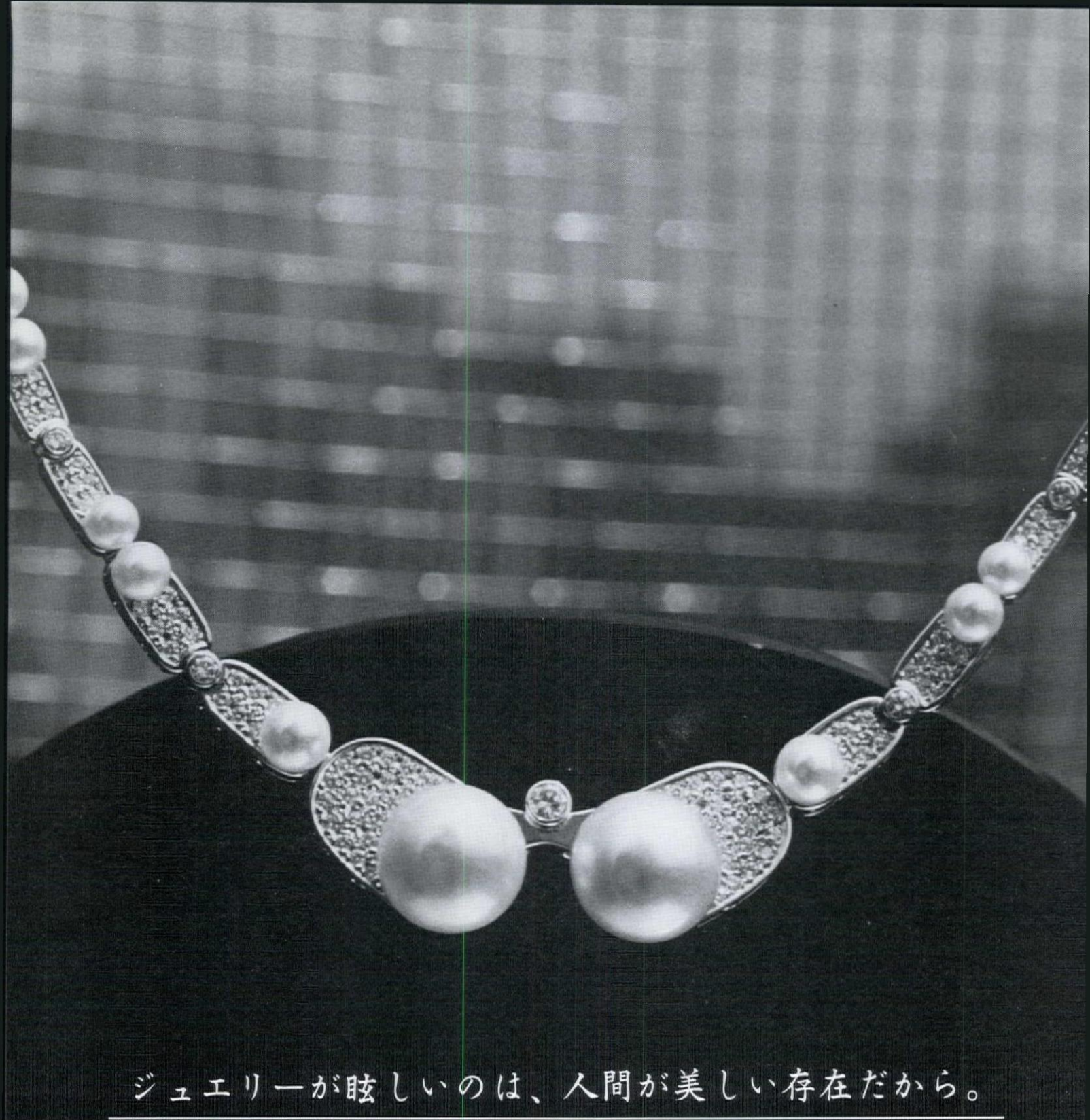
世界15ヵ国の特許をもつキョウワグラス-XA®は、放射線を扱う人々の作業環境を大きく変えました。密室感のない広い視界、安全で明るい空間、日本だけでも5000ヵ所以上と増え続けています。

10万レントゲンにも耐えたすぐれた特性

- すぐれたしゃへい性能のグレードが2種。HグレードとSグレード、0.1mmPbから2.0mmPbまで、用途に応じて選べます。
- 無色と淡いセピア色の2種、すぐれた透明性に加え、耐衝撃性は実証ずみです。
- 切断・切削研磨・孔あけ・曲げ加工・接着が楽にでき、窓の形状は思いのままに設計できます。
- 大きいサイズでも割高にはなりません。
- 帯電性が小さいので汚れ、ホコリがつきにくく、耐溶剤性にもすぐれています。
- X線室・CT室をはじめグローブボックス前面板などその使用範囲も大きく広がっています。



お問合わせ・資料請求は
協和ガス化学工業株式会社
研究開発部XAグループ:〒103 東京都中央区日本橋3-8-2新日本橋ビル☎(03)277-3176・3160



ジュエリーが眩しいのは、人間が美しい存在だから。

MIKIMOTO

●東京＝銀座4丁目 TEL(03)535-4611 帝国ホテル TEL(03)591-5001 ホテルオークラ TEL(03)584-4664
●名古屋＝栄・中日ビル2F TEL(052)261-1808
●京都＝河原町・BALビル4F TEL(075)241-2970
●大阪＝梅田・新阪急ビル1F TEL(06)341-0247
●神戸＝神戸国際会館 TEL(078)221-0062
●ニューヨーク＝608 Fifth Ave., New York City TEL(212)586-7153
●この他全国有名デパート・専門店で取扱っています。●メールオーダーのご用命も承ります。 株式会社 ミキモト ©1982-8

クラフトマンシップ・NOW

発想は語られるのではなく空間に表現される．　そして発想は形を触発するというだけでなく，発想がしっかりと物として定着されることによって初めて建築するというひとつの系が閉じられる——と考えてゆくとき，最近は良い作品が少ないのではないか．

近着の海外雑誌を眺めていると，読み応えという点では企画特集記事が注目される傾向がある．　これは今般のように，具体的建設の少ない状況（英国内を始めとし，諸外国での深刻な事情が報ぜられてからすでに久しい），少ない仕事を建築家相互が獲得しあうなかではとかく保守的な選択に偏る状況の中で，現実が建築家の想像よりはるかに遅れているという認識がほぼ定着して，建築思潮の大勢がイマジナリーな世界へと向かっているという必定のメカニズムであるかも知れない．

しかし，このような状勢に背を向け，今月号では，発想がしっかりと物として定着，あるいは置換されているということに焦点を置き，幾つかの近作を紹介することにしよう．

というのは

1）制約といえば窮屈だが，いうまでもなく建築をものにするためには，ひとつの定まりを感ずることが出来る．　建築は風雨を凌ぎ，寒暖を凌ぎ，それが個人的注文であったとしても，永く使用されるに足る社会的な資産として在る．　アイデアも工夫も，その永い寿命のなかで美しく歳を重ねることが出来る素材を使って発表されることが要請されるのである．

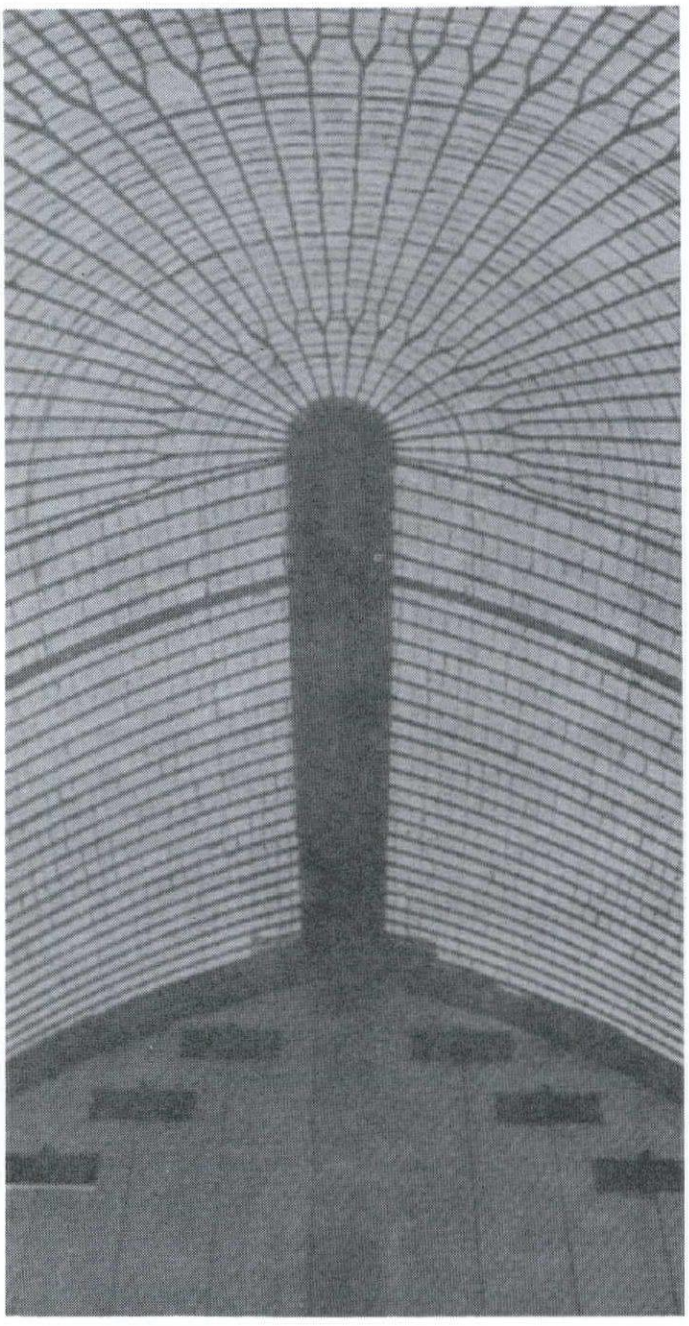
この基本的といえばそれまでのことが，その実，建築の具現に際してのなかなかの関門なのである．

2）イメージから物へとブレークダウンされてくる展開に対し，物を相手に発想し，物のあるべき姿を思い描き，その新たな表現を発表してゆくという展開もある．　このような創作もまた，ドローイングボードの上のイマジネーションとは対極に置かれるべきプロセスであると思う．

このような視点は，現実と常に齟齬を持つというわけではなく，その分だけ現実的な世界と叫ぶことは出来よう．

この世界では，発想ということとつくるということの分断はなく，つくるという行為はすでにイメージの一成分であるとも考えられる．　この周辺に棲む作家達を何と呼べばよいか，いささか類型分類だが，イマジナリー派，オフィス派に対して，愛着を込めて〈現代工芸派〉と仮称しておこう．

彼等のうち幾人かは，今，通常と認識されている工法や建築生産形態に挑戦するアバンギャルドである．　工事受注者，工事区分，職種に固有の精度などは，彼等の発想によって従来の因襲を超え，新たな生産の仕組を必要とされているのだ．　（森島清太）



キュー・ガーデンのパーム・ハウス

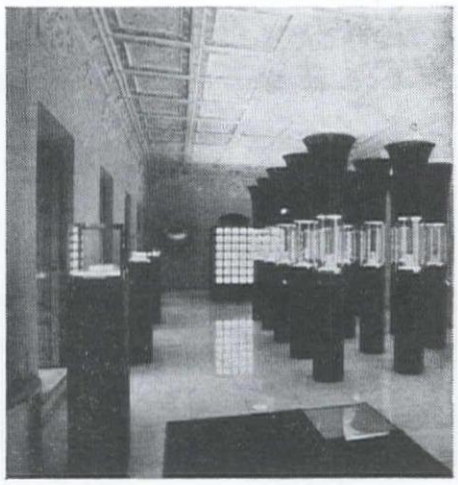
AA : L'Archhitecture d'aujourd'hui
AD : Architectural Design
AR : Architectural Record
ar : The Architectural Review
d : domus
PA : Progressive Architecture
SD : Space Design

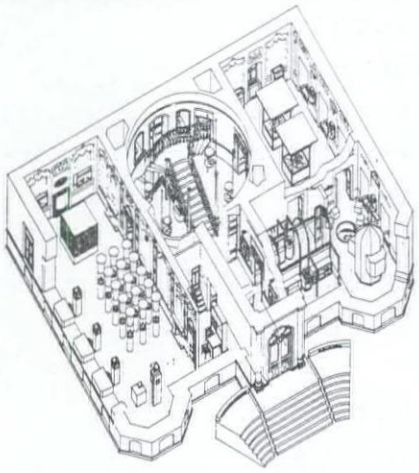
ARCOLUMN＝植野糾，江幡修，大黒慎吾，草ケ谷百合，酒井孝博，富松太基，中村洋一，野出木貴夫，森島清太，安田稔，若松久雄

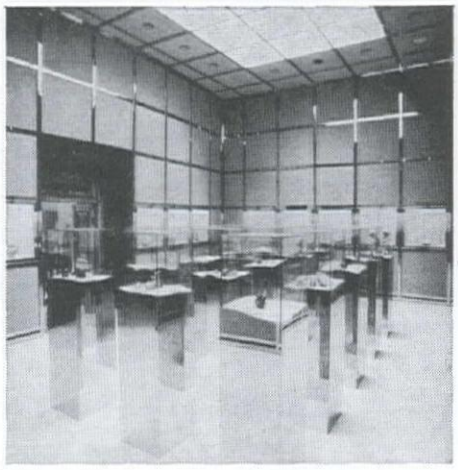
硝子と陶器のための美術館

Museum of Glass and Ceramics
Teheran, Iran
設計：Hans Hollein
〈AR　1981年5月号〉〈AA　1980年12月号〉
〈AD　1980年5/6月号〉





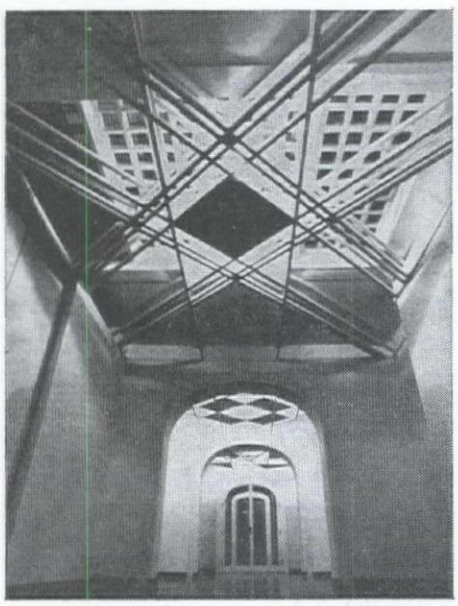


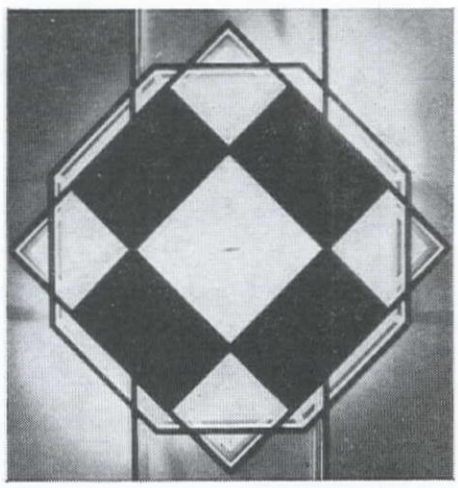


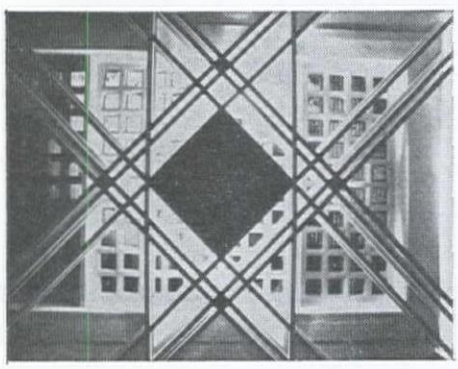
「西欧の職人，東洋の美術品を讃え祝す」と題されたこのプロジェクトで，テヘランにあるカジャール宮殿を，硝子工芸品と陶製美術品のための展示館に仕立て上げたのは，ホラインの技術・工芸熱（テクノクラフト）であるといってもよい．
宮殿という伝統的文化の集約的原型に，現代感覚のテクノクラフト的手法による装置を重奏させることによって新鮮な，新たな調和を創出している．
時代部屋（ピリオアルーム）へのタイムトンネルとして，前室にかけられたメタルフレームのヴォールトや，中央の階段ホールの細いスチールコラムに吊り下げられたニミュチニア歩哨兵などの華麗な振り付けに加えて，ホラインの感性に磨かれたメタルやガラスでつくられた数々のディスプレイケースは現代のクラフトそのものであり，19世紀のロマン調の装飾と不思議なほど，一体となっている．　これらの滑らかな鏡面仕上げのメタルとガラスワークはディスプレイのための器であるだけでなく，照明や展示品のための空調を内蔵している．（YR）

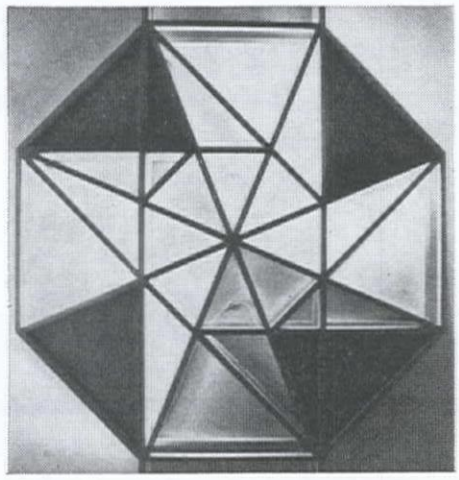
ローマの古美術品店

Magasin d'Antiquités
Rome, Italy
設計：Studio GRAU, Gabriella Colucci
〈AA　1980年9月号〉





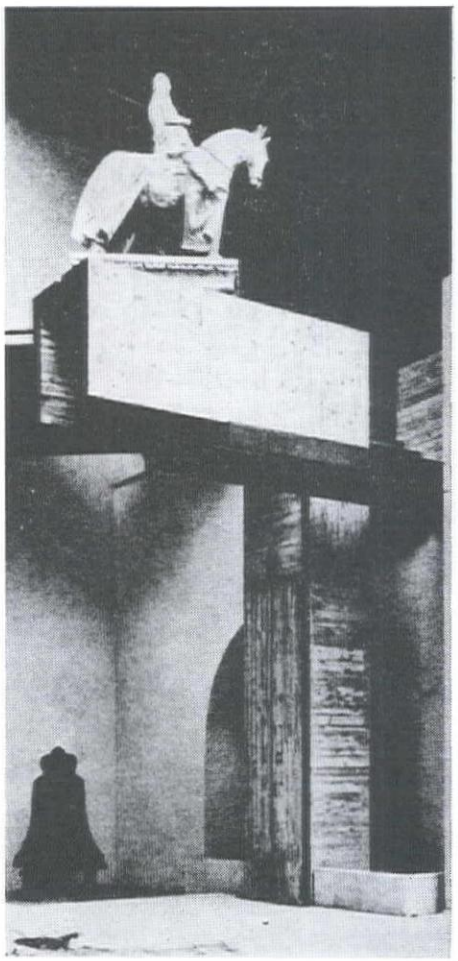


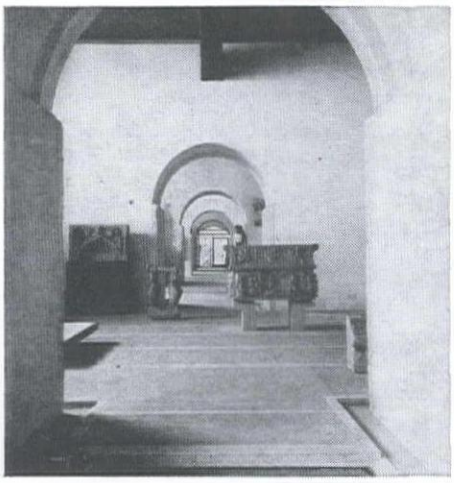


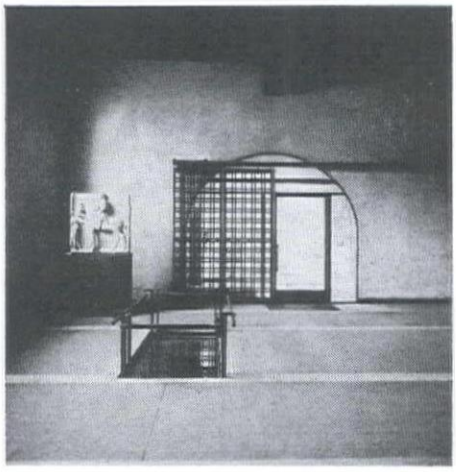
ローマのジュリア通りはティベレ河に沿った歴史的な街並の続く通りで，河と通りの間は特に古い建物で占められている．　また橋によりそれらの家々はファルネーゼの夏の宮殿とつながりその価値を高めてきた．こういう場所にある古美術品店としては，周囲の環境を考慮しないわけにはいかず，河を通して対岸に達する軸を強調することで店のインテリアを特異なものにしている．　3つの部屋が通りに直角に連なり，間仕切はなくてアーチで分節することによりその相関を明確にする．　また天井が装飾的に扱われ，通りと河と周辺の主要な建物を暗示する大きな Frise（縁取り）が巧妙に配されている．　45°の縁と面を重奏する造形は，組込まれた照明器具によって空間に支配的な要素となっている．　その職人芸的な納まりは古えの事物を想起させるに充分である．　日本の明り障子や行灯のほのかな光に浮かぶ繊細な線と面に共通なもの，指物師の技術を越えた普遍的なもの（神秘）を連想させるに足る情感あふれる秀作である．（T）

カステルヴェッキオ美術館の改修

Museo di Castelvecchio
Verona, Italy
設計：Carlo Scarpa
〈PA　1981年5月号〉〈SD　1977年6月号〉



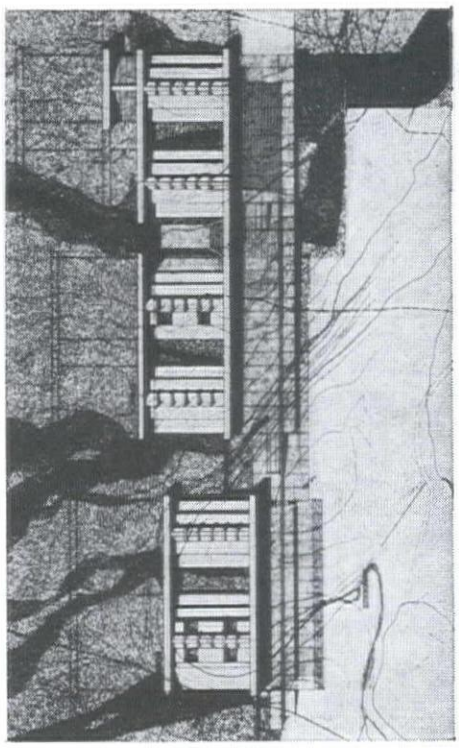


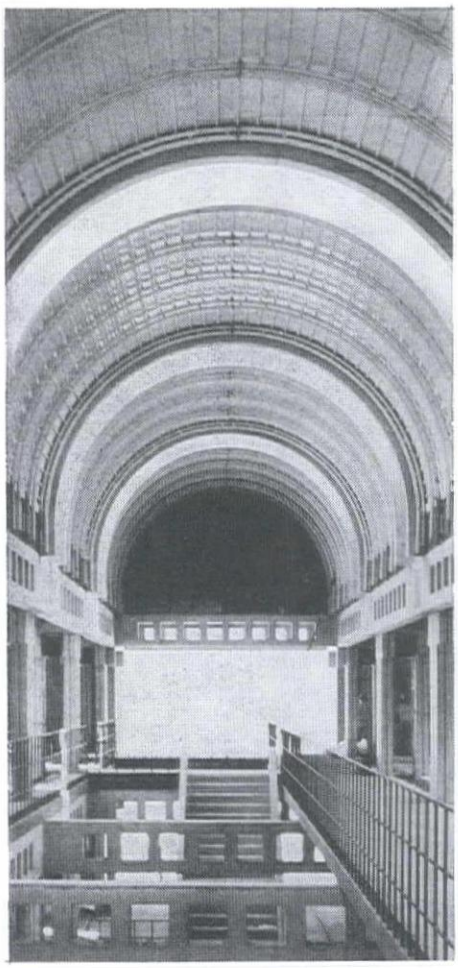


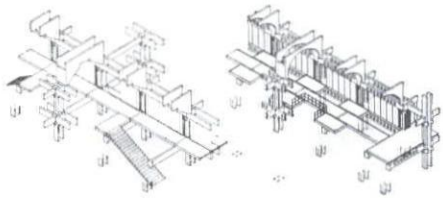
スカルパの作品には改装が多く，古いものが彼の魔術により見事に生命を復活する．　その中でもこの美術館の改築は実に見事なもので，1961年から1963年にかけてなされたクエリーニ・スタンパーリア図書館の1階および中庭の改装と肩を並べる作品である．
スカリゲロ城は廃墟であったが，ヴェローナ市の中世およびネオ・クラシック美術のコレクション収蔵のために1924年に復旧されていた．　しかしハチスコ・マガナトと共同でスカルパが基本設計・実施設計を行なったのは，その後の1958年から1964年の6年間であった．
集約されたディティールに，素材と技術がとぎすまされた鑿（ノミ）で珠玉の感性を写し出していくようである．
棟と棟との間の高いはね出しに置かれた大理石のカングランデの騎馬像はそうした感性の集約でもあり，実にドラマチックである．　改装部分の少なさにも拘らずこれほど建築に魂がこめられるのは，手の技か心の技か？　問いかけてくるような作品である．(H.W)

パレルモ大学科学部棟

Palermo University
Palermo, Italy
設計：Vittorio Gregotti, Gino Pollini
〈D　1981年10月号〉〈SD　1982年4月号〉



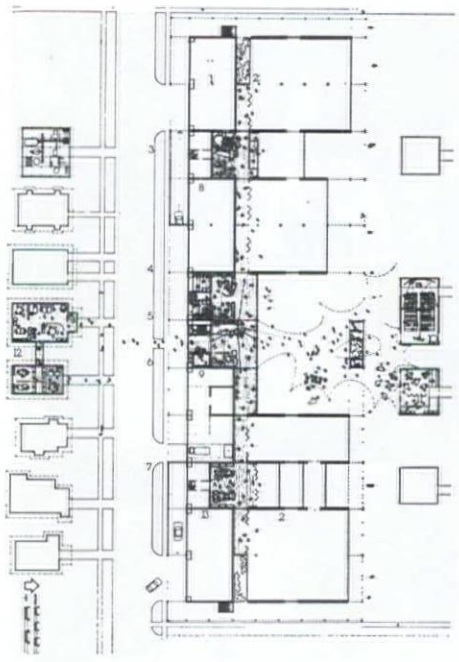


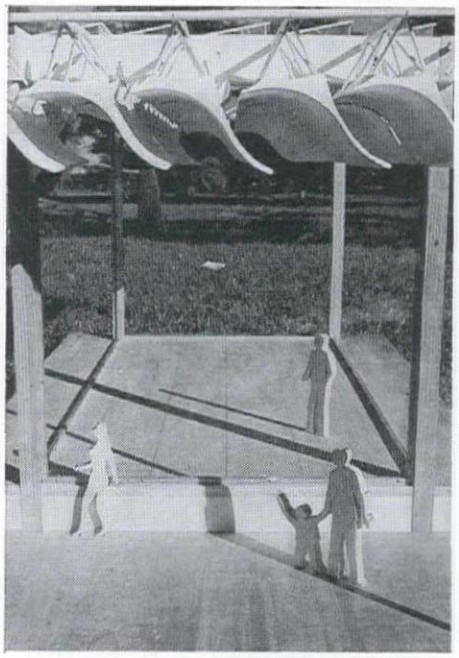


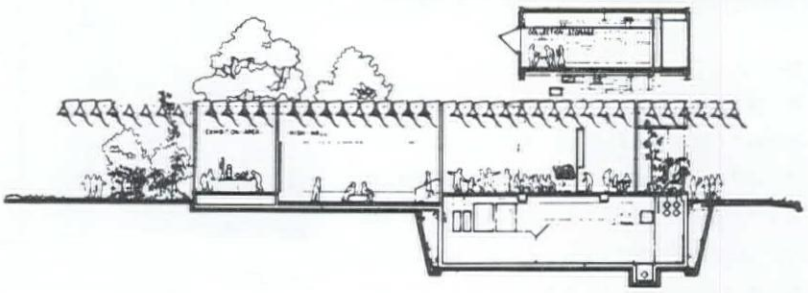
芸術と技術の合一，さらに構造と表現の合一は何によってもたらされるのか．　それらを媒介するのは，建築家の匠（たくみ）の世界であることは確かである．　ここに紹介するグレゴッティの完成間近いパレルモ大学においても，その感を強くする．　構造体となる諸構成材が，すべて標準化，プレファブ化されていることが前提となり，それらがデザインとして表現される．　繊細さを醸し出しているダブル柱は，荷重を受けもちながら，上下階へのダクト，設備スペースとも成りえているのだ．　こういったハードな面を用意周到に押え，その合理的思想は配置計画にも生かされ，敷地の起伏にあわせて3つの広場のレヴェルを設定することにより幾何学的配置から生ずる単調さを和らげている．　階段の上部にはプレストレスのヴォールト天井，また，層間のズレを利用したサイド・ライトの利用など，空間演出も巧（たく）みである．(孝)

メニル美術館

The Menil Collection
Houston, Tex., U.S.A.
設計：Piano & Fitzgerald Architects & Planners
〈AA　1982年2月号〉





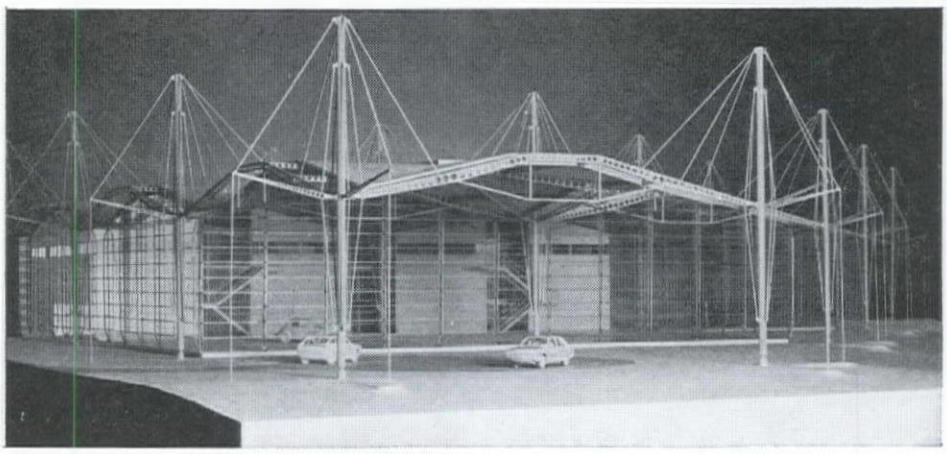


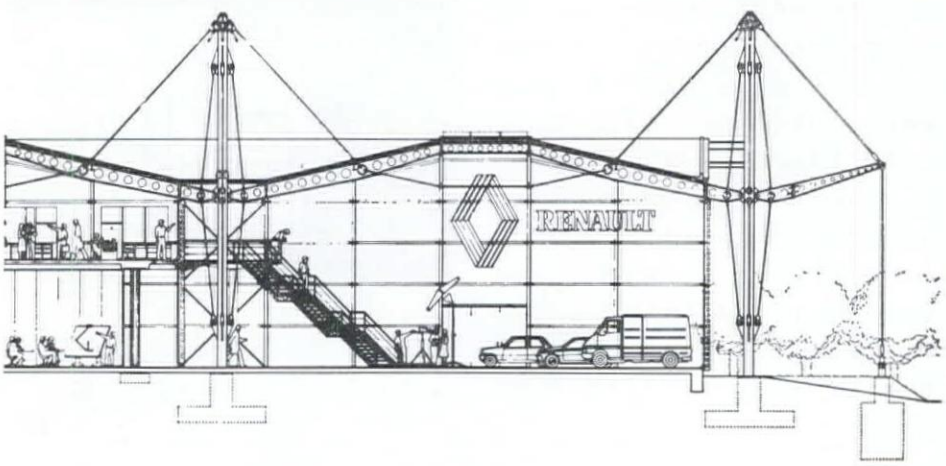
Coupe sur le jardin d'enfants

空間のヒエラルキーにこだわる近代主義者にとって驚くべきことだが，R．ピアノは地域の問題とディテールの問題を技術を介して一挙に解決しようとしている．地域を見つめるといってもコンテクスチュアリスム云云という論争仲間に加わることなく謙虚に専門技術に立ち戻っては現寸模型を造り続け，ディテールに固執するといってもその種の職人気質にありがちなもの暗い殻に閉じ籠ってはいない．　彼のつくる様々な仕掛けのもつ開放感は，ディテールに凝りながら生産プロセスや地域社会へ開いてゆく彼特有の視座によるところが大きい．　W．モリス以来〈工芸〉のもつ社会的インパクトを体現しようとしているかのようだ．
ヒューストンに計画中のこのメニル美術館では，フェロセメントの大型天井ルーバーに彼は凝っている．展示物をより良く見せることを美術館の第一義の機能と捉えてつきつめてゆく時，自然光の調光と人工照明の反射に用いるこの装置が単なる部品を越えて建築全体を支配するコンセプトに至ったといえる．（Q）

アンブレラ構造の配送センター

Renault Parts Distribution Centre
Swindon, England, U.K.
設計：Foster Associates
〈ar　1982年1月号〉〈SD　1982年3月号〉

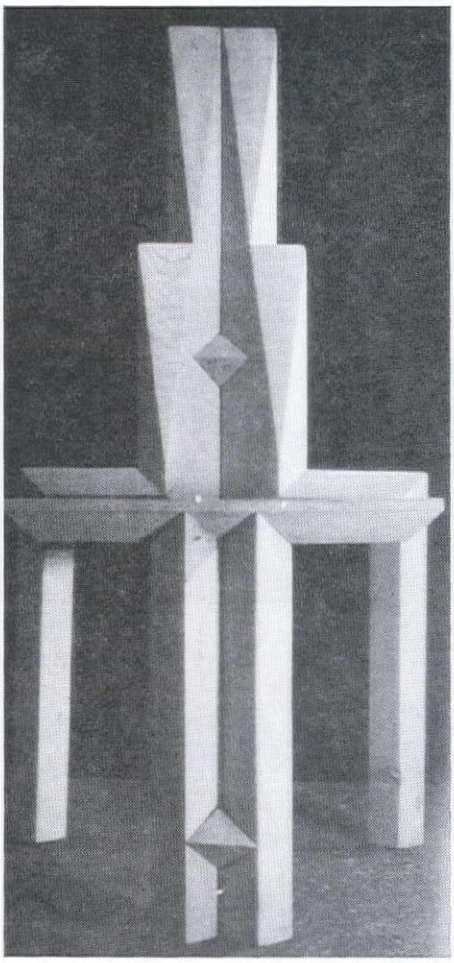




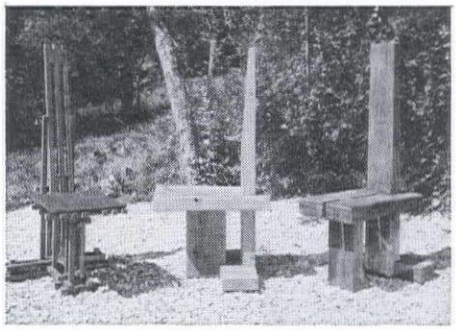
ルノーの地区配送センターは24mグリッドの単位空間が42個集合してできあがっており，その内の36個が矩形の倉庫を占めており，残りの諸施設がその周囲に配されている．　ここで注目すべきはアンブレラ構造の架構のエレメントである．　24mグリッドの独立基礎上に建てられたスチールパイプの柱は，引っ張り材が多用されて，屋根や他の柱を支えあっている．　スチールパイプ等はすべて高品質のペンキ塗りで，屋根は金属板の上に断熱材，防湿材，屋根用シートが重ねられている．　架構やサッシ，外壁やその組み立て方をつねに露出させておこうとするフォスターの姿勢が，テクノロジーを人間の手の技(わざ)が思い浮かぶまでにスケールダウンし，しかもドライなものに仕立てあげているといえるだろう．　フォスターの計画説明図には，何時も人間と建築が同じ細密さで描かれている．　それは，空間・技術といったもの自体が崇める神ではない，人間―社会―建築系のなかでの建設をというフォスターの思想であるように思える．（O）

ドミニク・ザムバッカの家具

設計：Dominique Zimbacca
〈AA　1980年9月号〉





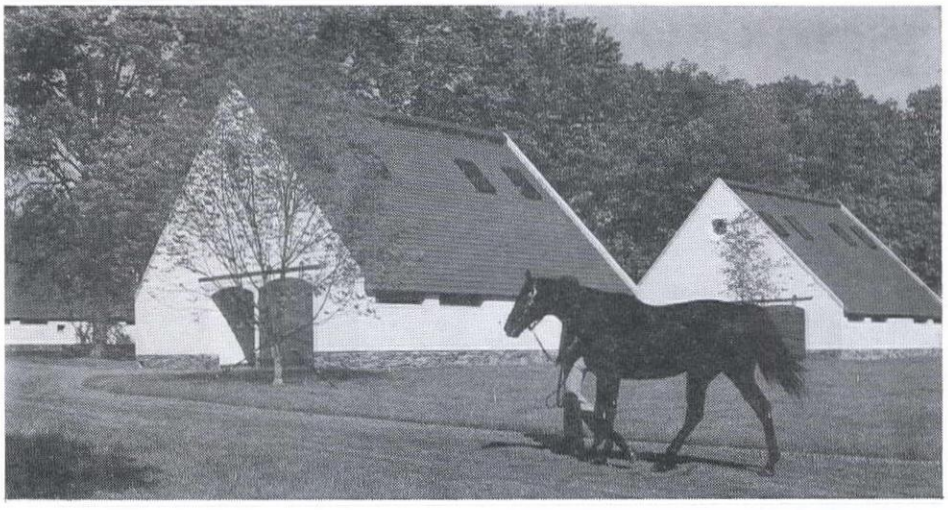


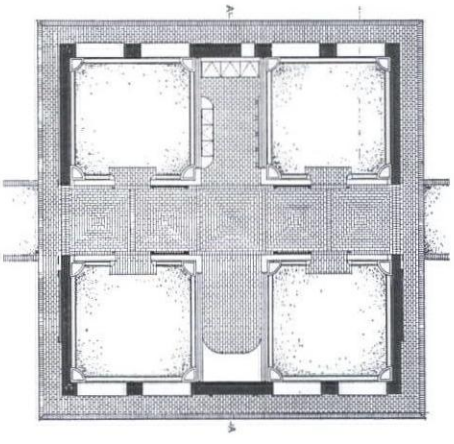


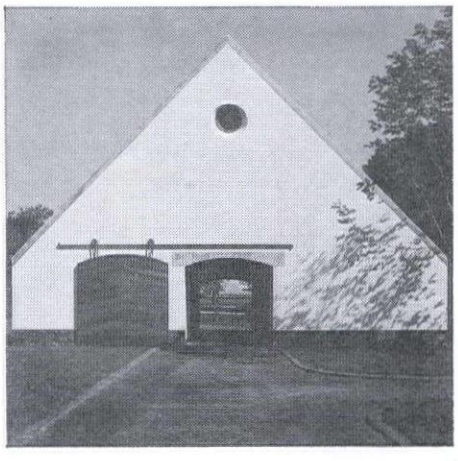
ここに紹介するのは，ドミニク・ザムバッカの一連の家具作品である．　流木かあるいは古い梁材を思わせる簡素な素材を用い，単純な断面に削り出し，力強くあるいは巧妙に組みあげたその構成は，見る者に作り手の強烈な個性を感じさせる．　リートフェルトのように冷たく観念的でなく，ハンス・ウェグナーのようにやさしく現実的でもなく，ザムバッカ独特の世界を切り開いている．　おが屑にまみれ，革の前掛けをし，節くれだった手をした職人を思い浮かべてしまうのは，誤った幻想だろうか．　W. モリスが中世のギルドにあこがれたように，現代の〈小芸術（レッサー・アーツ）〉にアート・ワークマンシップを期待することは許されないのだろうか．モリスが機械生産を基本とする社会組織を否定したのは確かに誤りであった．　しかし「民衆によって民衆のために作られ，作る者と使うものにとってともにそれが楽しみでなければならない」というモリスのロマンあふれる主張は，この現代にも生き続けているはずである．（T.N）

ケンタッキーのサラブレッド厩舎

Horse Barns and Luning Ring, Gainesway Farm
Lexington, Ken., U.S.A.
設計：Teodore M. Ceraldi
〈PA　1981年12月号〉







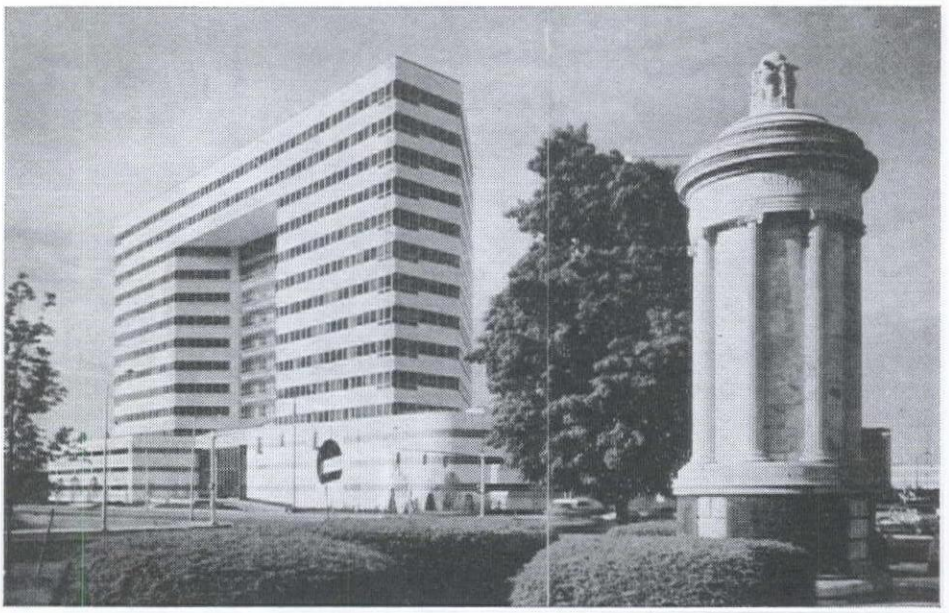
32頭のサラブレッドのための厩舎である．　ケンタッキーの郊外に500エーカーの牧場があり，その一画に8棟の厩舎と木造架構の大きな屋内馬場が配置されている．　屋内馬場を中心に2つのリング状の小道が厩を4棟ずつ繋いで全体を構成している．　パビリオンタイプのこの配置は高価な馬の世話と火災や病気への配慮から決められた．

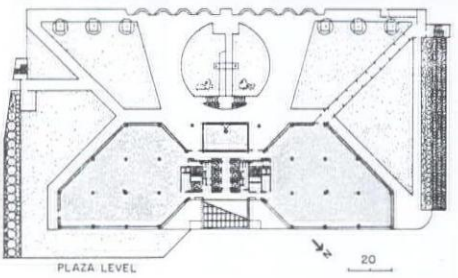
厩舎は4つの個室と洗い場からなるシンプルなプランである．　そして厚い石壁と1インチ厚の粘土製の屋根タイルというプリミティブな素材の組合せが空間を覆うことによって量感と安定した室内温度が保たれ，さらに庇の下のスリット状の窓と急勾配屋根によって馬に影響のない換気ができる仕掛けになっている．

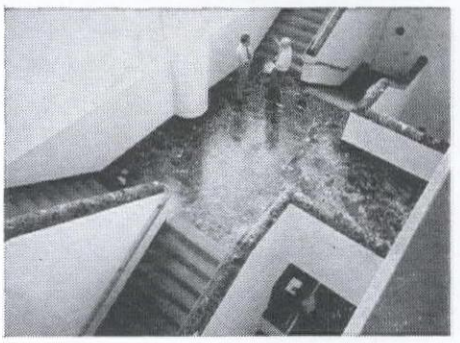
馬を保護するために，衝撃ではずれるフックや内部のはめ板，また手製の鋳鉄扉やデッキ，留金具等のディテールにも設計者の丁寧な配慮がゆきとどいている．
（S.O）

テン・スタムフォード・フォーラム

Ten Stamford Forum
Stamford, Conn., U.S.A.
設計：Mitchell／Giurgola
〈AR 1981年12年号〉



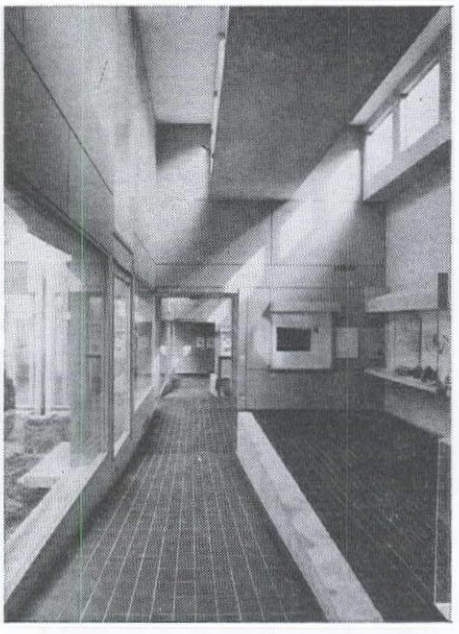




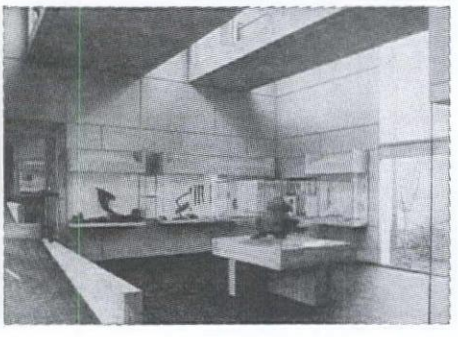
スタムフォード・フォーラムはC.ベリ，H.スタビンスらによる計4本のオフィスビルが計画されている20エーカーの開発地域である．　ジョゴラはその北東端にスタムフォード入口のランドマークとしてのモニュメントを完成させた．　2.4万m^2のオフィス部分は，ハイウェイの喧噪を避けて，基壇としての3万m^2の駐車場の上に計画され，ジョゴラ特有のカットアウトの手法による多角形プランはエレベータロビーに光と展望を与えている．　エントランスホールのアトリウムは4層の駐車場各階よりの出入口をとりこみ，さらには駐車場屋上の庭園へと空間的に連なる．　このインテリア空間は白と深緑の大理石により調和をもって構成され，人間味ある初期ルネサンス建築の職人芸を思わせる．　この硬質な中にヒューマニティを内包するオフィスは，「常に説得力ある建築は古典的なものである．」と述べるジョゴラの思想の昇華された形とみることもできよう。（Y.N）

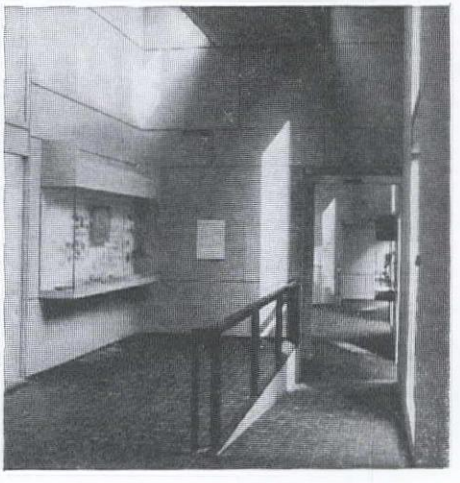
有史前博物館

Musée de la Prehistoire
Nemours, France
設計：Roland Simounet
〈AA 1981年6月号〉







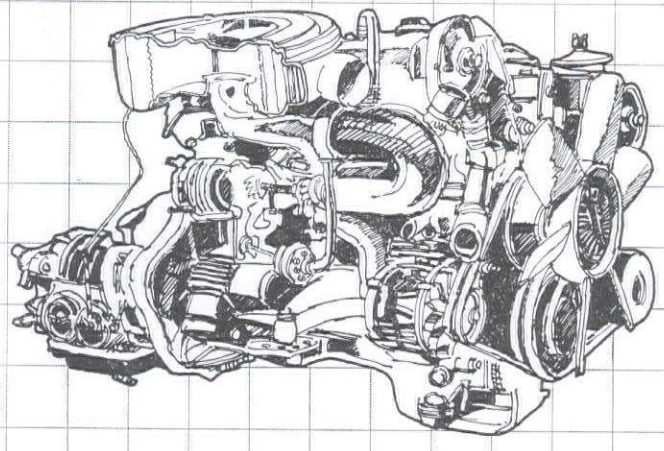


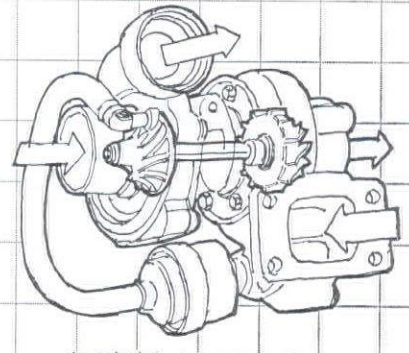
フランスの建築家 R. シモネの設計による有史前博物館である．　印象は，一見カーン風でありながら，焦点のない散文を思わせる．　それは個々の建築エレメントが，エレメントとしてのみ空間に介在しているにすぎず，部分および全体の空間を貫く意志の欠除をそこにみるせいであろう．　計算された壁の目地割，ハイサイドからの採光のデザイン，光井戸のスラブ，通路側からの採光窓，勾配のあるタイル貼りの床，すべてのエレメントはそれぞれよくデザインされている．しかし，これほどまでに苦慮した各々のエレメントによる空間演出も，この建物の主機能である，展示物をよく見せ，見る人と対話させるという点では明らかに失敗しているように思われるのが問題なのだ．　こうした部分から全体へ至るヒエラルキーの欠除と，計画に係わる根本的思索の稀薄さが時として見受けられる．建築の世界への没頭は，手法に優れる能吏でなく，ものを計画しつくる人間としてのハートを養い感性を磨くプロセスであって欲しいものである．（A）

いいものだけを世界から

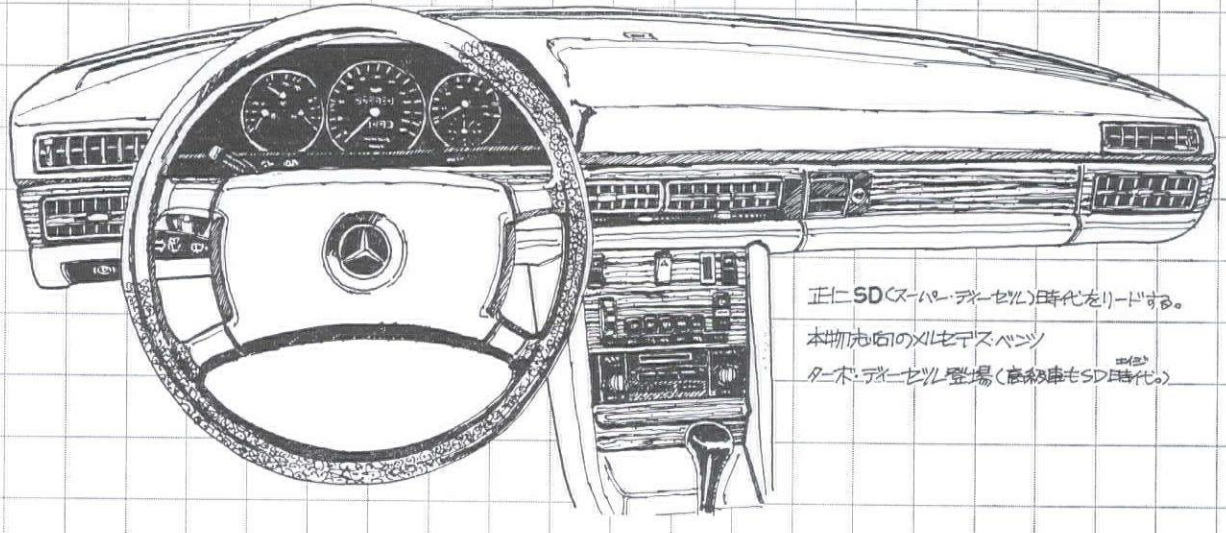
300 SD
TURBO DIESEL

画期的な5気筒ターボディーゼル 125HP

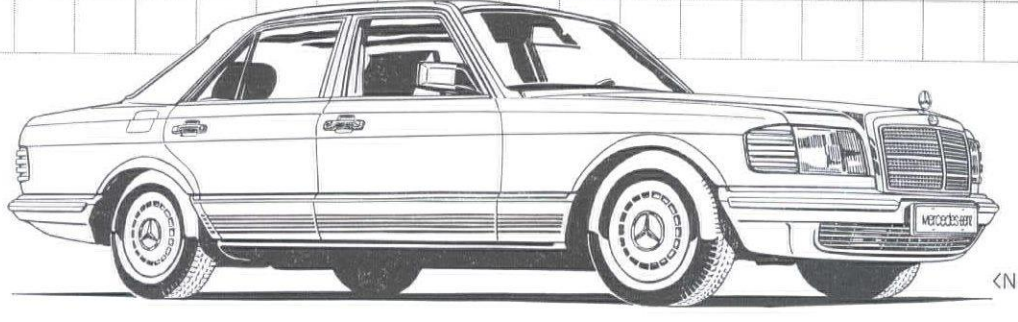




経済的なターボチャージャー



正にSD(スーパー・ディーゼル)時代をリードする。
本物志向のメルセデス・ベンツ
ターボ・ディーゼル登場(高級車もSD時代。)



〈N-126120〉

Mercedes-Benz

メルセデス・ベンツ 〈ターボディーゼル〉 300SD

〈SOHC 5気筒 3.0ℓ ターボディーゼル、4速オートマチックトランスミッション、4ドア5シーター〉

メルセデス・ベンツに乗ったら先ずベルトを

good new days
人間らしい美しい未来を

ヤナセ

総輸入元
ウエスタン自動車株式会社
東京都港区芝浦一丁目6番42号〒105
電話 東京 (03)452－1471(大代表)

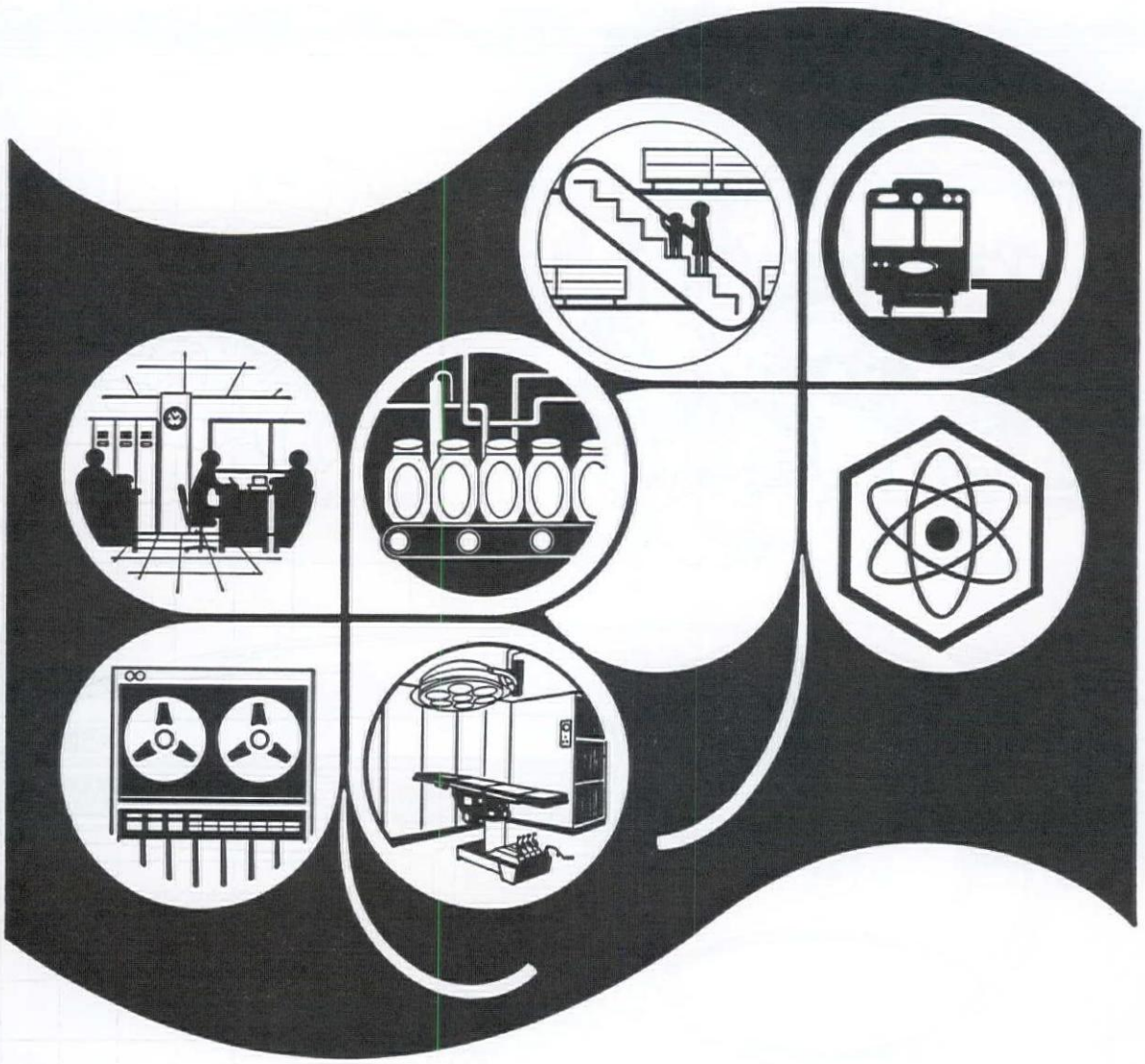
資料請求券
SD－8

ヤナセのメルセデス・ベンツは——
- 全国300余ヵ所におよぶネットワークを、フルにご活用いただけます。
- 程度の良い中古車も取揃えていますので、ご用命ください。

※カタログをお送りします。住所・氏名・年令・勤務先・電話番号・現在ご使用中の車名をご記入のうえ、ウエスタン自動車にお申し込みください。

MODAIR

あすの空気調和をになう



自然より清浄な環境づくり
それが東熱のねがいです

〔東熱〕がめざす「空気調和」とは、温湿度調整だけでなく、有毒ガスの除去、脱臭、除塵等、人間の生活環境、あるいは高度生産環境を作り出す総合技術です。

この開発された個々の技術を更に、総合的に発展させ、都市全体としての環境改善に寄与してゆくことに東熱としての使命感を持っております。

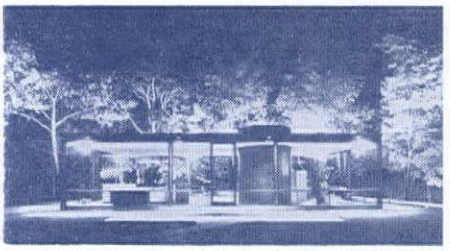
〔東熱〕によって開発された技術は●地域冷暖房●アイソレーター●サンシャイン計画●超高層ビル●病院●地下鉄等、あらゆる分野に生かされ都市環境の整備、浄化に貢献しております。

〔東熱〕は常に社会の要望に対応した、技術の開発をし、より清浄でより快適な生活環境を皆様に提供いたします。

東洋熱工業

本 社／〒104／ 東京都中央区京橋２－５－12
ＴＥＬ03(562)1351大代表
支 店／札幌・仙台・関東・横浜・名古屋・大阪・広島・九州
営業所／水戸・前橋・新潟・静岡・京都・神戸・岡山・高松

今、つまらないと思えること



●ガラスの家／フィリップ・ジョンソン／a+u 7906臨時増刊

磯崎新がフィリップ・ジョンソンについて述べている．「おそらく今日《ガラスの家》が注目されている一つの理由は，彼がこれを発表したときに(1952年)，数多くの歴史的な諸モニュメントからの引用の集積であることを，実例との関連を示しながら語ってしまったことだ．　これは，近代建築がその出発のときから内包していた創造性の神話に水をかけることである．　しかし，このようにひらたくいうと新しいものが何もなく，何から何まで先人の模倣をしたのだ，といいきるのは，1950年代の初頭においては，捨身で，傲岸な勇気のいる発言であったに違いない．　身を落し，一段とひくいレベル（とそのときに思われていた）に，おどけながら語るとき，それは決してアカデミックたりえない．正統派たる望みもないはずだ．　事実その時代は近代建築の巨匠たちの全盛時代だったのだ．」ロバート・ヴェンチューリも，またジョンソンと同じ戦術を用いて，身を落し，《Learning from Las Vegas》をものした．　この同じ戦術は今でも有効であろうか．　ある意味では有効である．　第2のヴェンチューリ，ジョンソンは建築雑誌に氾濫している．　彼らのポーズはいまだに建築の世界では進歩派の指標であり，前衛のシンボルである．

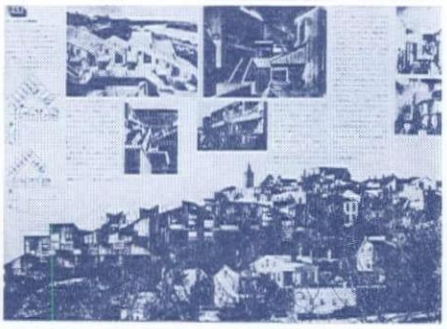
だから，今ジョンソンに倣ったところで，ヴェンチューリを気取ったところで本当に身を落としたことにはならないのではないか．（むしろ，彼らを再利用して身を助けている建築家も大学教授も山ほどいる．）　少なくともそれでは彼らの表層のポーズをなぞったに過ぎず，彼らの精神を汲んだことにならないのではないか．今，本当につまらないと思えること，くだらないと思えること，唾棄すべきと思えることに身を投じる．　あなたがそれをなし得た時に，ジョンソンは始めて，「我が息子よ!!」とあなたの肩を抱いてくれるのである．　でも何がそれに当たるのか．

そういうわけで，今回のグルッポ・スペッキオは現時点で〈つまらないと思えること〉をできる限り広く拾い集めることにした．　その話を友人にしたところ，「つまらないものといえば，まずグルッポ・スペッキオを挙げるべきだ」といわれた．　それを聞いて私は非常に光栄なことをいわれたと思った．　今，つまらないと思えることの中に，絶えず本当の真実は隠れているものだから．（吾）

集合住宅計画論のつまらなさ

いま，集合住宅がつまらない．　最近の《都市住宅》の集合住宅特集をみていると，何故マンションの広告ばかり載せているのかと，ちょっと腹立たしくなってくる．　もはや，小ぎれいな中庭のあるマンションや，緑あふれる低層集合住宅の事例は，先駆的でも啓蒙的でもなく（かつデザインに新しさがないのが一番たまらない），住宅市場に確固とした位置を占めるに至ったのであり，今さら雑誌に取り上げるほどのことはないのだ．　それでは，こうした事情はこれらのタイプを声高く主張してきた（かに見える）住宅計画論の勝利といえるのか．　否．　計画論は，一戸建はもはや建たない土地・住宅市場を反映してきたにすぎないし，新しい計画を進んで提案した訳でもない．　いまやく上からの住宅の大量供給〉という錦の御旗を失うと同時に，啓蒙性や指導性を喪失してしまった住宅計画論に残された道は，今何が売れていてこれから何が売れそうかという市場調査を，業者のかわりに請け負うことでしかないように見える．　例えば，低層集合住宅の〈外観における個性の表出〉だとか〈近隣交際のソシオメトリー〉だとかの調査を百積み重ねたところで，ひとつの〈創造的な跳躍〉たる計画を生み出さないだろう．　（それにしても昔は良かった．　住み方調査が新しい住宅型を生み，大量供給されて日本の住宅水準の向上に役立ったなどと無邪気に信じられた時期があったのだから．　はっきりいって建築にしろ都市にしろ計画論というのは，戦災や震災とかの非常時において最も良く機能するのだ．）　もちろんこうした繰り言は，あくまでも計画論が社会に対していかに働きかけうるかという観点に立つものであって，社会への回路を断った上での自閉的なアカデミズムの中で，研究の方法論を洗練，消費させていくことについては，やることはいくらでもあるだろう（ただしやる気がわけばの話だが）．　人が集まることがソク，お金に結びつく商業建築や，シンボルとしての広場をとりうる公共建築ではなく，居住することにおいて，槇文彦のいうような〈都市への回路〉を切り開くのは，単に形をどうするかといったレベルではなく，住宅の生産―流通―消費の過程そのものに係わろうとすること以外にはないということを，何度でも確認しておく必要があろう．　建築計画を学び，一度でも大それた夢を抱いたことのある者はせめて，集合住宅のつまらなさを我が身の痛みとしようではないか．（O）

❶都市住宅8206
❷建築文化7912

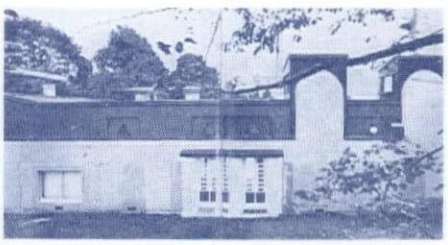


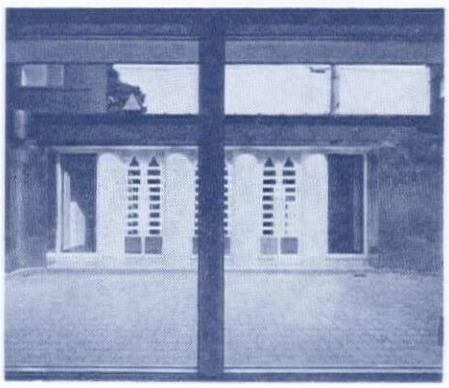
●Mt. アダムスの修道院／都市住宅7203, 7601



❶タウンハウス西神1団地／
神戸市住宅供給公社建設課＋坂倉建築研究所

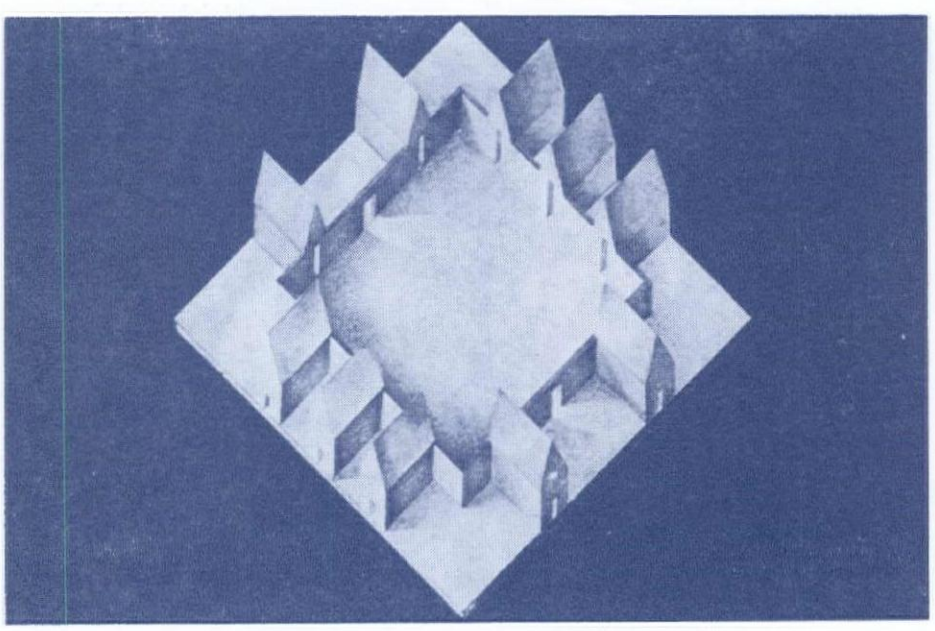
最近の若い学生には信じられないことかもしれないが，僕たちが学生だった頃の〈集合住宅〉の計画は，ちょうどいまの〈アート・コンプレックス〉のような最も人気のあるテーマだった．その頃の《都市住宅》の〈集住体〉特集の人気の高さは，想像を超えるものがあって，植田実の集住体特集の巻頭文，「もし住む人間の側に味方するならば，人間環境を占拠するための闘いは，絶えず不利に展開することになっているのだ．　けれども，美しい言葉しか口にできないときでさえ，それが力にならなかっただろうか？」＊（傍点筆者）の名文句に，当時の学生たちは血沸き肉躍る思いだった．　その〈美しい言葉〉たちがどのように破棄されあるいは回収され実現されていったのかを見据えること．　＊都市住宅7305





❷秋田邸／原広司＋アトリエφ

原広司は自分の住宅が都市の縮減模型であるとよく言っているが，実際これらの住宅を何倍かスケールアップして集合住宅を造ったらどうなるだろうか．　あれだけの世界中の集落調査をひっさげて，いずれは日本の都市住宅に還ってきてくれるというのは，やっぱりヒイキのひきたおしだろうか．



●Urban enclosure, 1979／
Massimo Scolari, Watercolors and drawings 1965–1980
ぼくはこのドローイングこそ，集合住宅（集住体）における（原広司のいわゆる）〈1枚のスケッチ〉にふさわしいと思う．

恐竜たちのロマン

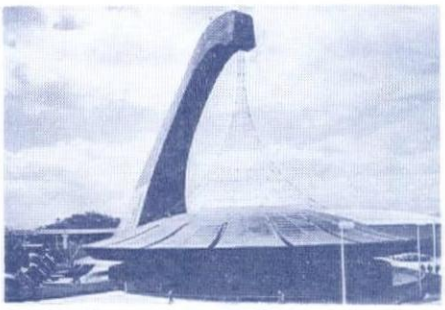
万博のオーストラリア館を覚えているだろうか．　そう，ちょうど恐竜が首をもたげたようなコンクリートの塊りから，まるであのスティングレイ（潜水艦さ，ほらTVであったじゃないか）の頭みたいな円盤が吊り下げられた……．　今，四日市の海岸沿いに，訪れる人もなく，ひっそりとたたずんでいる．　まるで忘れ去られた恐竜．　構造的なアクロバットで華麗なシェイプを描いた夢のせつなの名残りのように．

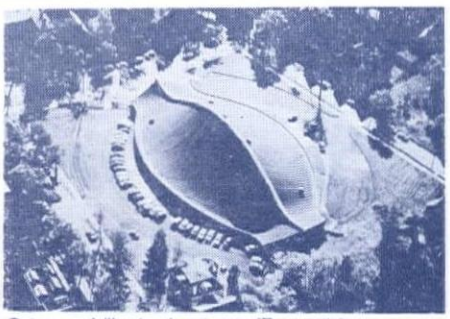
サーリネンの鶴の一声で決まったウッツォンのシドニー・オペラハウス．　その建設をめぐる紆余曲折がなんとか最後の花を咲かせた頃，いわゆる構造表現主義と称しうるかどうか，軽やかなコンクリート・シェルの建築はめっきり姿を見せなくなった．　コンクリートの質の低下や仮枠手間の厖大さ，そして時代がもはやロマンチックなうたかたの美のあやうさを好む度量を失ったか，今われわれは代々木の屋内競技場と竹の子族とのギャップからふと顔のぞかせる幸福な時代への郷愁に，同時代感の欠如を覚えすらする．　サーリネンの夢を，さらに日本的感性で磨きをかけて研ぎ澄ました美しき恐竜．　トロハ，キャンデラ，ネルヴィ達の，構造的合理に基づく軽やかな造形もまた，強者どもが夢のあと，滅びてゆく恐竜の悲哀を漂わせる．

コンクリートの本来有する特性に基づいた構造的可能性に夢を託すより，つまるところミースの均質空間が正しくとらえた近代を映し出す鏡として，いやおうなく措定された立体格子の可視形態，すなわちラーメン構造，その純粋表現をもって時代の主調音とする一般的了解があらためて確認されたというわけか．　ロマンの香りは放擲されて，立体格子になじむ美学，すなわち古典主義が復活ののろしをあげる．　いや復活などではなく，もともと脈々と息づいていた．　あらためて確認された，と，そういうことだ．

ともあれ，かつて華やかにシルエットの美しさを競い合った恐竜たちは，環境の激変の故か，もはやその命脈を断とうとしている．　多くの建築家の思い描くイメージの世界が，自由なシェイプといったロマンチックな発想から離れて，むしろ基本的な枠組を普遍へのよすがとして選びとりつつ，そこにいかなるニュアンスやアイロニーやジョークをこめることができるかという，いってみれば姑息な発想へと移ってしまった．　ゆったりと巨体を誇示する恐竜の時代でなく，知恵のまわる小動物の時代．　自ら立体格子の檻にたてこもって，気転と小業の冴えが自慢の種だ．　ただ，いつかその檻を蹴破るほどのしなやかなる肢体をもった恐竜が出現しないという保証はなく，ロマンの香もまた脈々と息づいているには違いがない．（聖）

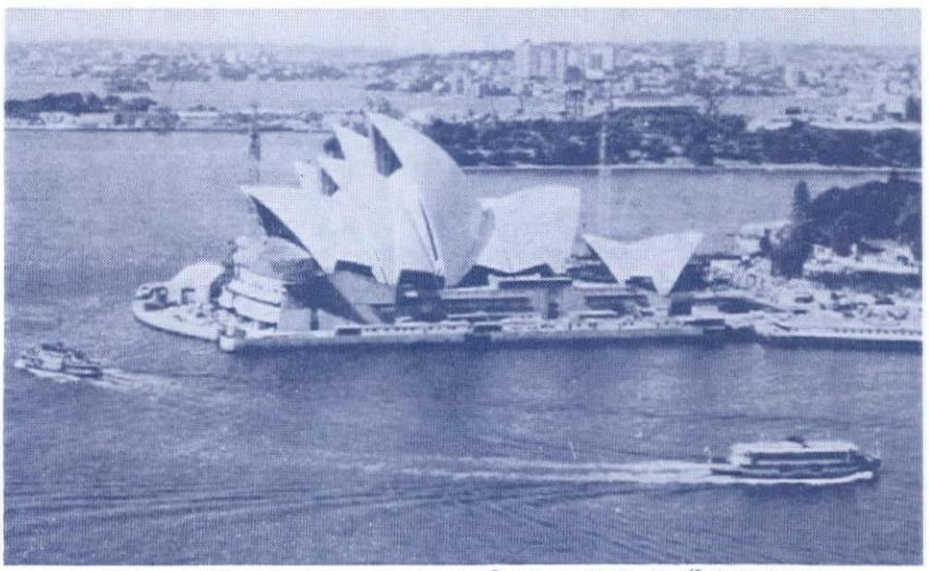
❶建築文化7004，新建築7005，近代建築7005
❷❸❺新建築別冊《現代世界建築の潮流》
❹《Twentieth-Century Architecture》Dennis Sharp
❻新建築別冊《建築昭和史》

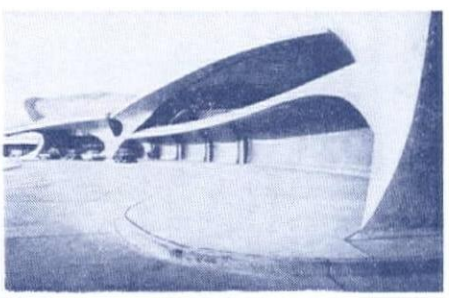

❶大阪万国博・オーストラリア館／J. C. マコーミック

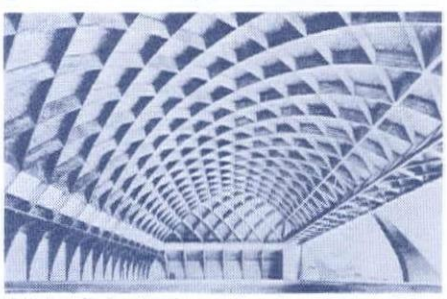

❷イエール大学・ホッケーリンク／E. サーリネン

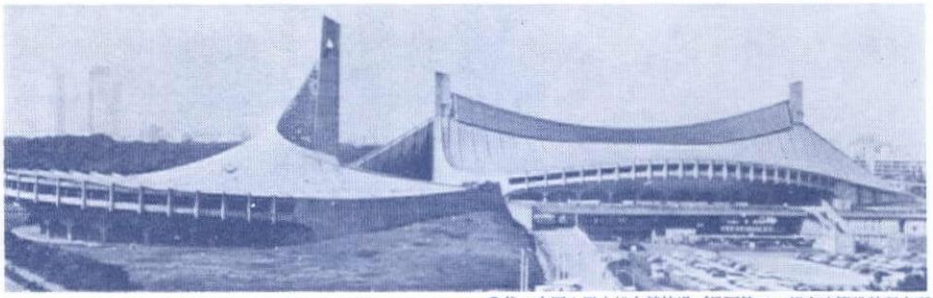
女の子の話をしようか．

時代によって，またところによって美の基準が違うのはいたしかたのないことだ．　ミス・ユニヴァースより隣りのミヨちゃんがいいという個人的差異もある．　平安朝の美人だね，といわれて喜ぶ女の子もさほどいまい．　かつての均整のとれた肉体派の美人がもてはやされた時代が建築にもあった．　恐竜などと呼んだから誤解を修正するために言い添えれば，そう，彼女たちは美人だったのだ，それも文句なく．　ただ文句なく肉体派の美人たちもいいけれど，いっしょに酒を飲んで楽しい冗談のわかる女の子もいい．　見た目に麗しいグラマラスな美人を肩肘張って造り続けてふと気がつくと，その圧倒的な肉体に押し潰されそうな自分がいる．　こりゃいかんとばかりに茶目っ気のある気さくな女の子を求めたのがヴェンチューリあたりからこのかたの，〈知性派〉建築．　ただ彼女たちは，むろんその発祥からして当然なのだが，もひとつ肉体的魅力に欠けるうらみがある．　もし目の前にとてつもなくしなやかな肢体を持って，なおかつ冗談のわかる，知性のきらめきを持った女の子が現われたら……てなことは男なら誰でも思ってることで，建築の世界だってそんなことがあれば簡単にでんぐりがえっちゃうだろうけど，ね．


❸シドニー・オペラハウス／J. ウッツォン


❹T.W.A. エアーターミナル／E. サーリネン


❺格納庫／P. L. ネルヴィ


❻代々木国立屋内総合競技場／丹下健三・都市建築設計研究所

展開しない変奏

〈オリジナリティーの神話〉が崩壊した後，〈変奏〉という操作が隆盛を極めている．　しかし最近の変奏曲の数々，どうもつまらない．　変奏そのものは従来から行なわれ，断片的なモティーフの流用，転用は芸術家の常套手段である．　要はそのオリジナルのモティーフを展開しどこまでその領域を広げ越えるかにある．例えばベートーヴェンの《英雄交響曲》．　この曲はロマン・ロランをしてエロイカ的奇跡と言わしめた程，作曲者自身にとっても，音楽史上に於いても画期的な飛躍であったが，この曲にも先輩同僚からの引用が随所に見られる．　以下現代に至るまで変奏という操作は名曲を生み続けている．　ところが例えばショスターコーヴィチの晩年の交響曲のひとつ，そこには他の名曲からのパッセージが幾つも散在している．　しかし，モティーフの展開はなく，呈示ばかりがある．それはひとつの形式であり，時代や状況の投影かもしれない．　だがこの曲では変奏の持つ威力はついに発揮されず，モティーフは萎縮し無残な姿を映している．曲が音楽以外の価値で作られ語られている．

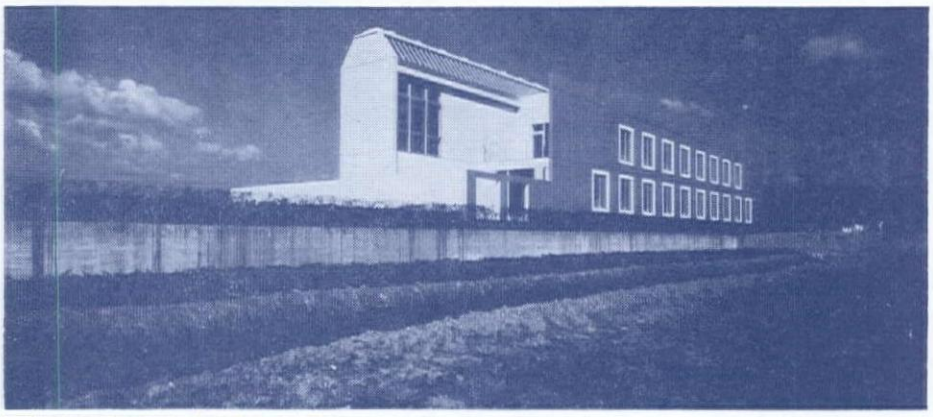
同様に昨今の建築．　モティーフの呈示ばかりで，展開がない．　受け手はゲーム性を楽しみ知的興味を満たさせられるかもしれない．　しかし，そこでは建築が建築以外の価値を基にし，受け手は新たな展開に飢え，それが与えられない時，飽き始める．　最近の建築ジャーナリズム以外での建築批判の根底にはこのような状況があると思われる．　それは一見すると相も変らない建築の機能上の欠点非難に集約されるように見える．　だから，まともに耳を傾ける建築家は少ない．しかしこの不毛な状況の主因は，やはり建築家サイドにある．　建築は作曲など以上に変奏に頼らざるを得ない．　それでいながら現在その技術は未熟であり，しかも建築をそれ以外の価値で計ることにも安住している．　従って現在の建築家は，まず変奏技術を謙虚に学ぶべきであり，その上で例えば大指揮者フルトヴェングラーの次の言葉を心に刻むことが必要なのである．「欠点のないこと，つまり完璧さが芸術作品の価値を決定するのではない．　むしろ表現の力と大きさである．　洗練された美しさ，完全無欠さは作品を広めるであろう．　だが作品の内的価値は，これにほとんど左右されない．」（K.I）



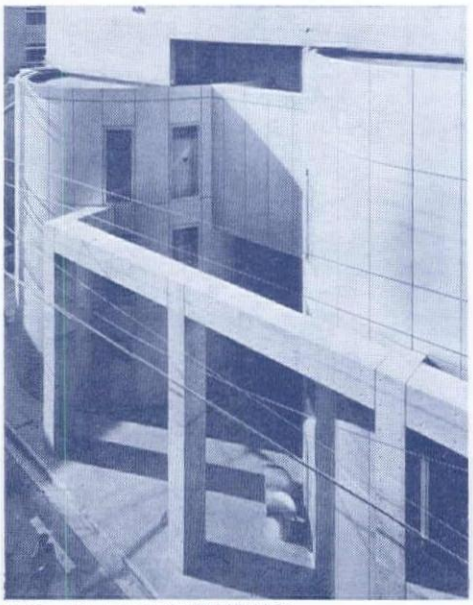
❶自由学園講堂／遠藤楽



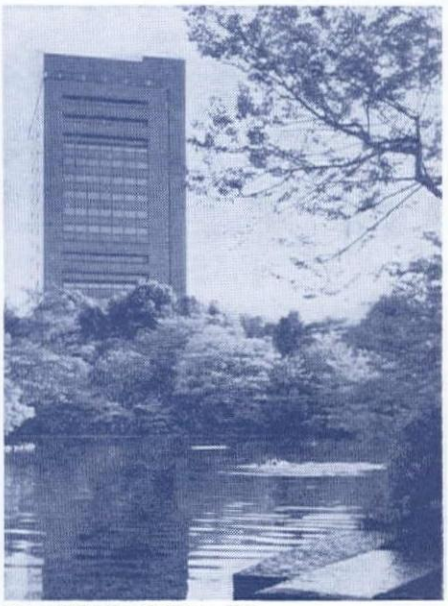
❷慶応義塾大学図書館・新館／槇総合計画事務所



❸衛藤クリニック／磯崎新アトリエ



❹サン・ブレイス／安藤忠雄建築研究所



❺トヨタ東京ビル／日建設計・東京

変奏曲の数々．　モティーフが容易に分るものもそうでないものもある．　これらの作品はいずれも手慣れていて，変奏曲の魅力を教えてくれる．　変奏は展開しなければつまらない．

❶新建築8206
❷新建築8206，建築文化8206
❸建築文化8112
❹新建築8206，建築文化8206
❺新建築8206，建築文化8206

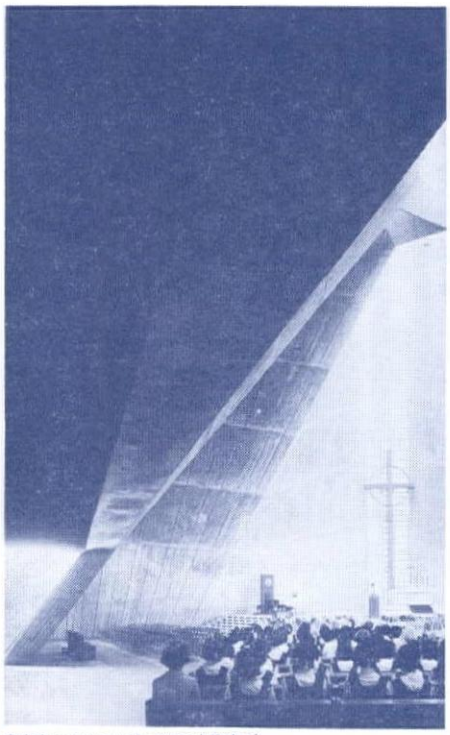
嫉妬できないことのつまらなさ

知性ある人は嫉妬をしない，もしくはすべきではないというのが通俗的な考え方のようだ．　例えば，アメリカの建築家は皆あれほど目立つことをやっていてもお互いがどんな作品を作っているかということに関してはまったく無関心であり，誰々がやたら売れていても嫉妬の微塵も感じず皆淡々とマイペースでやっているといった話があったりすると，さすがアメリカの建築家達は知的だ，それに比べて日本では……といった類の話になりかねない．　しかし他人の仕事ぶりを気にするのは決して悪いことではなく，問題はどのような態度で他人の良い仕事に接するかである．

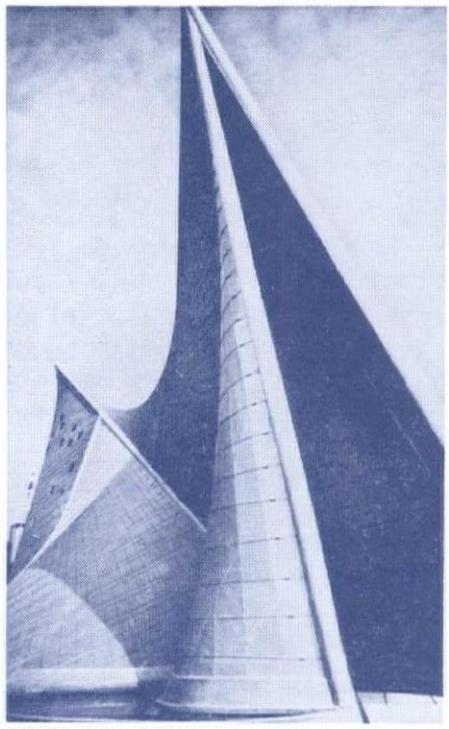
ある人類学者の貴重な発言に眼を向けてみよう．「われわれの周辺の知的環境の中では翻訳してしまいさえすれば，問題が一応片付いたかのごとく錯覚し，翻訳者は何とはなしに原著者とアイデンティファイした気分を味わって，さて次は，といったカモをあさる翻訳餓鬼道が一般化しつつあるように思われる――（重要なのは）ある本に刺激を受けたときに，原著者に猛烈に嫉妬することでないか――嫉妬するということは，なぜそのような本が自分または自分達によって書かれないのかを真剣に問い質すことである．　と同時に，そのような本または研究がいかにして可能であったのかという前提を，知的環境から文化にまで掘り下げて探ってみることである．」引用がやや長くなってしまったが，要は何であれこうした徹底した態度が重要なのではないだろうか．　一例をあげるなら，ポスト・モダンと称して涼しい顔で一見面白そうなデザインをあさるのではなく，何故ポスト・モダンなのかという疑問の奥にあるもうひとつの疑問――我々が今や，ややもすると懐疑的に感じてしまう建築の諸言語・諸教条を，近代アヴァンギャルド達は何故かくも熱意をもって信じることができたのか――に真剣に，そして大いなる嫉妬心をもって取り組むべきではないだろうか．

嫉妬は人間を変える．　それは全人格的な作業である．だからこそ，そこに真の面白味があるのだ．　嫉妬は時には殺人にもつながるんだって？　結構．　嫉妬によって，その相手を知的に抹殺し乗り越えることができるなら，それは随分と結構なことではないか．（K）

❶SD8001
❷Le Corbusier 1952-57
❸新建築7507，建築文化7507，SD7604

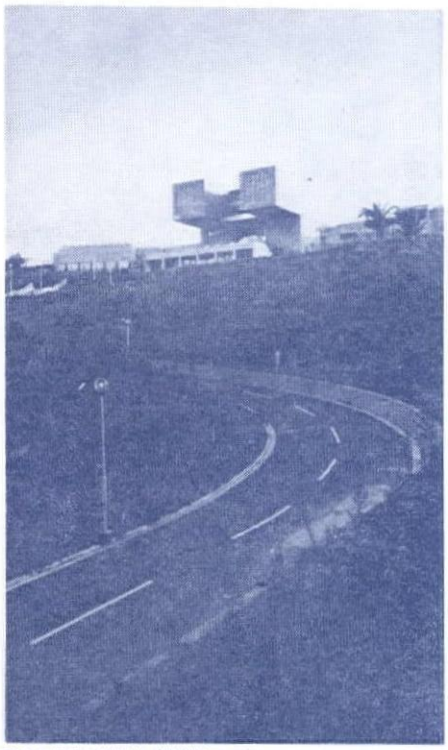


❶東京カテドラル聖マリア大聖堂／丹下健三・都市建築設計研究所



❷フィリップス・パビリオン／ル・コルビュジエ

嫉妬とは何とか他人の持っている物を自分の物にしたいという感情以外の何物でもない．　丹下が，かつてコルビュジエに猛烈に嫉妬して自己を磨いたのはあまりに有名な話で，今や神話になってしまったが，今日嫉妬される立場にある丹下自身はもはや他人の嫉妬から解放されてしまっているのだろうか．



❸北九州市立美術館／磯崎新アトリエ

引用という軽率な響きをもった言葉が建築界の一大主流となったのは，この言葉が当然ながら引用の対象に対する彼の真剣なそして卓越した眼力，そして嫉妬心のフィルターを通して発せられたからである．　そして一方，引用をまさしく転々と用いた人々は，軽々とした作品を産むだけであった．

❹

嫉妬心をもたない建築家による淡々としたあまり面白くない作品の例．――この例は，読者の皆様の御想像で埋めて下さい．

無口な婆さんの美しい娘

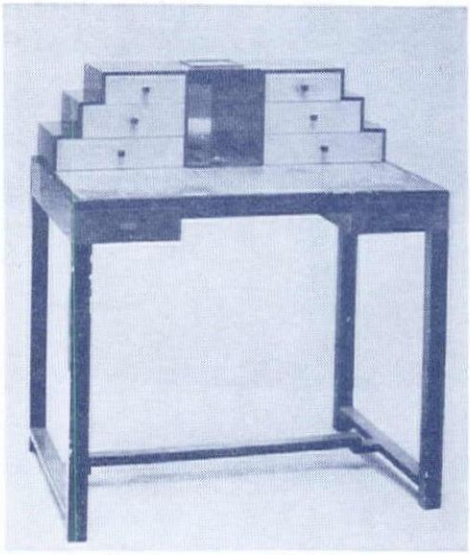
良いものはオモシロイ．　これは当然，当り前．　何の説明もいりはしない．　それではツマラナイものは悪いものか．　論理学の先生に言わせると，これは先の命題への対偶であるからして，絶対正しいのであります，ということになるらしい．　けれどどうも趣味の世界はアマノジャク，ツマラなくても良いものはあるし，オモシロイけど悪いのもある．　勿論ツマラなくてひどい建物は山ほどあって，そういうものは大抵，建築家がエネルギーをかけなかったか，考える頭もセンスもなかったかのどちらかだろうから，そんなものを考えるのは，それこそツマラナイ．

では何故，ツマラないけど良いなどという変なことが起こるのか．　こう考えてゆくと，そもそも建築を一言で良いとか悪いとか言うなんて，アナタって単純な人ねとシバカれそうだけれど，それは今は良く出来ているという一言で片付けて，あとは不問にしておくことにしよう．　とまれそういう種類のツマラナさは，結局〈退屈〉ということになるのではなかろうか．

そしてそれは新鮮味のなさ，すなわち〈飽き〉とか流行に外れているということだ．　あるいは堅実そのものというだけの建築もその中にはいる．　建築家にとって衝撃力がないのだ．　今となってはカプセルは過去のものだし，超高層もハーフミラーのカーテンウォールもダイナミックな大架構も，取りたてて目をひかない．　これらはむしろ良く出来ているけどツマラナイといった方が良いのかもしれない．

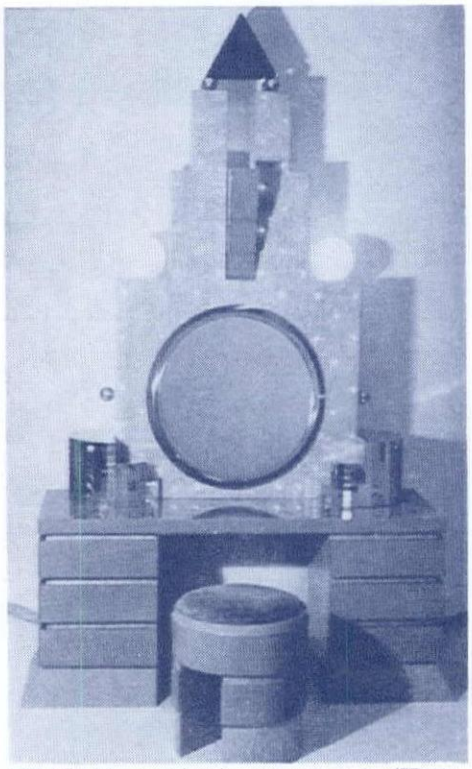
しかし，である．　今日オモシロイと思われているものも，その多くは嘗ては良く出来ているけどツマラないものだったのである．　例えばボザール流のカチッとした平面構成（L. カーン），チャチでキッチュな装飾（R. ヴェンチューリたち），町中の商業建築（安藤忠雄），コチャコチャした日本家屋（独楽蔵ら），アメリカ土着の泥臭いコテッジ（ムーアやスターン etc.）……その他いくらでもある．　完全に新しい刺激などめったにあろうはずはなく，そういう時にはあのデザイナーの基本的方法論，つまり〈逆手にとる〉方法が大きな力となるのだ．　制約があったらそれを足掛りにして発想を得，ツマラナイものがあったらそれをなんとかオモシロイものにしようとする．　特に，過去において一世を風靡していたものの中には，何か人が求めるものが，そして先人が苦労して考えた様々なアイデアがあるはずだから，その流行が冷えてしばらくしてツマラナイものとなってきたころにオモシロク使えば，これはうまい戦略となる．　どうです，あなたもツマラなくて見向きもされなくなった人に声をかけてみませんか．　無口なお婆さんに声をかけたら，美しい娘と巨万の富を手にすることだってママあるかもしれないよ．（E）

❶SD選書・アメリカ住宅論
❷住宅建築8106

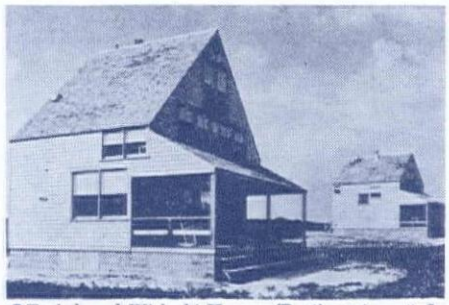


●〈アステカ寺院〉のかたちをした婦人用の机／《アール・デコ》バルコ出版局

良く出来ているけど誰も特に注目していなかった〈ツマラナイ〉ものを発掘し，オモシロイ，オモシロイと言いながら本当にオモシロイものをつくれば，みんなオモシロイと言ってくれるでしょう．　そしてそれはかなり上手くいく確率が高いものです．何故って昔流行った，あるいはずっと淡々と作られてきたものには，やはりそれなりの魅力と知恵があって，それを受入れる人の心はそれほど変化しようはずもないから．



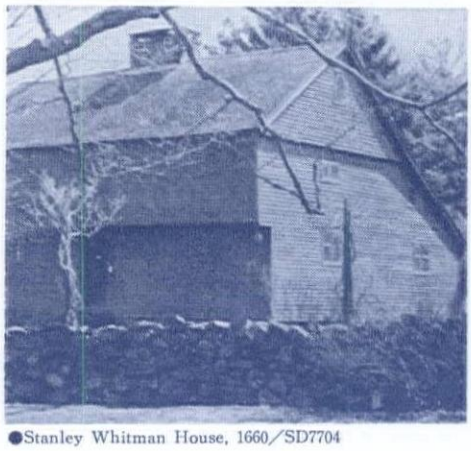
●PLAZA Dressing table／マイケル・グレイブス／SD8202



❶Trubek and Wislocki Houses／R. ヴェンチェーリ＆ローチ



❷子供隊地／独楽蔵



●Stanley Whitman House, 1660／SD7704



●建売住宅／都市住宅7311

レイアウト：田中多恵子

ALL COMPUTER CONTROLLED ELEVATOR

ACCEL



ビルの機能を向上させる

オール コンピュータ コントロール

全電子化エレベーターです

システムの柔軟性を向上

ビルの用途・性格に応じた、最適のエレベーターサービスが提供できるように、三菱電機は、乗用エレベーター全機種の全電子化を実現しました。エレベーターシステム専用に開発された高性能マイクロコンピュータが、オフィスビル、ホテル、ショッピングビル、といったビルの用途・性格に応じて、きめ細かくエレベーターをコントロール。運転効率を高め、ビルの機能を向上させます。

省エネルギーでビルの経費を節約

アクセルシリーズは、駆動装置の静止化、制御装置の全電子化によって、約35%(当社MG方式直流ギヤレスエレベーター比)の大幅な省エネルギーを達成しました。電力料金節約のめやすとしては、運転状態にもよりますが、1kWH25円として、1台あたり年間40万円～100万円程度の節約になります。何台もエレベーターを使う大形ビルでは、大きな経済効果を発揮します。

エレベーター機械室を省スペース

エレベーターシステムの全電子化により、エレベーター機械室に設置される制御装置の占有面積を約35%(当社MG方式直流ギヤレスエレベーター比)削減しました。とくに240m/min以下の機種では、従来電動発電機などを収容していた第2機械室が不要になります。この部分はレンタブルスペースとして活かせますから、ビルスペースの有効活用の面でも役立ちます。

三菱乗用エレベーター アクセルシリーズ

未来を開発する 三菱電機

●詳しい資料をご希望の方は資料請求券をハガキに貼って〒100東京都千代田区丸の内2-2-3(三菱電機ビル)三菱電機株式会社昇降機事業部へどうぞ ●お電話でのお問合わせは、お近くの三菱電機営業所へどうぞ。札幌(011)212-3723／仙台(0222)64-5633／新潟(0252)41-7221／富山(0764)42-2324／東京(03)218-2752／名古屋(052)565-3160／大阪(06)347-2271／広島(082)248-5278／高松(0878)51-0001／福岡(092)721-2163

カタログ請求券
M・エレベータ
SD
8208
あなたの電話番号をご記入ください。

ニチアスの建築用煙突ライニング材

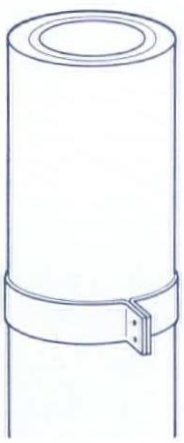
ニチアスは、煙突ライニング材『カポスタック』の発売(昭和39年)以来、長年の経験を生かし、各種の建築用煙突ライニング材を開発し時代の要求に応えてまいりました。ビル・集合住宅をはじめ、学校関係のボイラ・自家発電機の煙道の煙突ライニング材として幅広く利用されています。

●芯材不要 ニューカポスタックは、カポスタックの内側に特殊ライナー層を設け、コンクリート打込み時に芯材の不要な製品です。コンクリート煙突あるいは鋼製煙突のライニング材として使用されます。

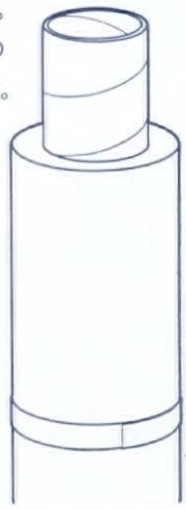
●地震対策 ニューカポスタック・ニューカポスタックボードは、カポ部のすぐれたコンクリート付着性・柔軟性・構造などから地震対策としてレンガ煙突の改修工事に使用されます。

●ユニット煙突 コンバインボードは外側をアングルで補強し、ユニット煙突として使用されます。

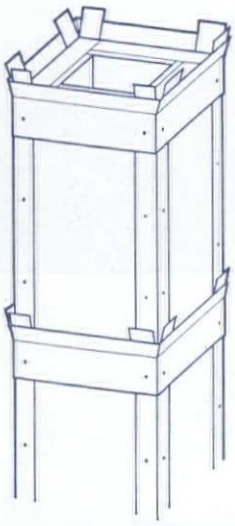
●角型用打込ユニット ニューカポスタックボード・コンバインボードは角型筒状の打込ユニットとして、内部補強し、コンクリート打込みます。



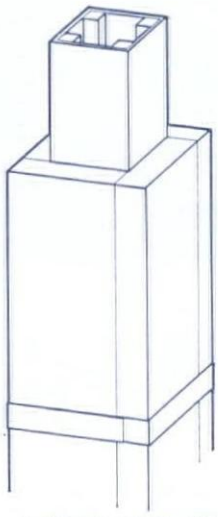
ニューカポスタック



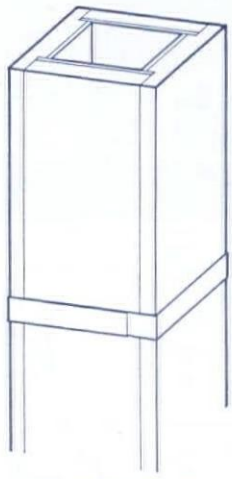
カポスタック



ニューカポスタックボード



カポスタックボード



コンバインボード

(単位:mm)

	商品名	構造	サイズ	厚さ	施工方法 コンクリート煙突	施工方法 鋼製煙突	施工方法 ユニット煙突	備考
丸型用	カポスタック	同筒	60φ～1034φ	※50・75・100	○	○	—	打込時、芯材必要
			1140φ～1500φ	※75・100				
	ニューカポスタック	複合円筒	212φ～914φ	※50・75・100	○	○	—	特殊ライナー＋カポスタック
			1014φ～1300φ	※65・75・100				
角型用	カポスタックボード	平板	605×910	※50・75	○	○	—	折込時、型枠必要
	ニューカポスタックボード	複合板	900×1200	※60・85	○	○	—	特殊ライナー(10t)＋カポボード
	コンバインボード	複合板	1220×2440	※50・70	○	○	○	高シリカ層(10t)＋ケイカル層

※印は標準品

ニチアスの建築用煙突ライニング材

カポスタック
ニューカポスタック
カポスタックボード
ニューカポスタックボード
コンバインボード

(旧社名: 日本アスベスト)

ニチアス

本社／東京都港区芝大門1-1-26 〒105
☎03(433)7241 大代表

東京支社☎ 03(572)0331(代)
名古屋支社☎052(931)9217(代)
大阪支社☎ 06(252)1371(代)
九州支社☎092(531)3031(代)

◀カタログご希望の方は本社広報課まで

資料請求番 煙突ライニング材 SD 82.8

SD (Space Design)
Back Issues and Price Lists
1977—1982
Price include seamail postage fee.
*** =hardcover edition**

SD

7701+7702 Alvar Aalto **$17.00***
All the major works including Finlandia Hall, Villa Carré, etc. Writings by Juhani Pallasmaa, Michele Merckling. With English summary.

7706 Carlo Scarpa **$17.00***
Great works of Italien maéstro covering architecture, furniture, and industrial design. With English summary. 162 pages.

7804 Kisho Kurokawa **$15.00***
Extensive works of Japanese metabolist, with writings by C. Lévi-Strauss, Kurokawa, etc. Full English texts.

7901 Kazuo Shinohara **$14.00**
31 individual houses of Shinohara whose exhibition were held at Paris, New York, etc. 192 pages. Full English texts.

7906 Fumihiko Maki **$17.00***
Selected works—architecture and urban design—of Fumihiko Maki, with writings by Philip Drew, Maki, etc. Full English texts.

7908 Kim Swoo Geun **$17.00***
All the major works of distinguished Korean architect. English texts.

7911 Lloyd Wright **$7.50**
Organic Architecture of Lloyd Wright. Writings by Bruce Goff, etc.

8001 Kenzo Tange **$17.00***
58 architecture and urban design of Tange, selected by himself. Chronological lists. 202 pages. Full English texts.

8006 Masako Hayashi **$17.00***
All works of Japanese female architect. Full English texts.

8010 Kiyonori Kikutake **$17.00***
All the major works of Japanese metabolist Kikutake and his writing "Architecture of the third generation". Full English texts.

8101 Andrea Palladio **$17.00***
31 works of Palladio by color photos and drawings. «I Quattro Libri dell' Architettura». 170 pages. English summary.

8102 Harry Seidler 1948–1980 **$8.00**

8105 Gio Ponti **$10.00**
Special issue edited by Lisa Ponti in memory of her father. Writings by L. Ponti, Alessandro Mendini, etc. Full English texts.

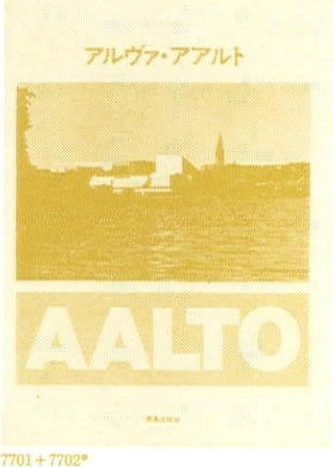
8106 Tadao Ando **$17.00***
Selected works and drawings of popular Japanese young architect. Writings by Y. Futagawa, T. Ando, etc. Full English texts.

8109 Shin'ich Okada **$15.00**
The Supreme Court Metropolitan Police Department, etc.

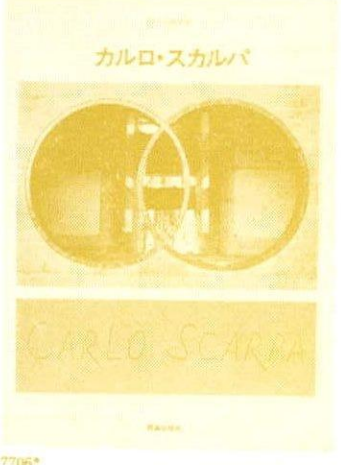
8110 Danish Design **$6.50**

8111 Kazuhide Takahama **$8.00**

8112 Masayuki Kurokawa **$8.50**
Industrial design and recent architecture of Kurokawa.



7701+7702*



7706*

Please enter my subscription to
Space Design (SD)
Starting in _____, 1982
☐new subscription
☐12 issues ¥90.000 (seamail postage included)
☐24 issues ¥170.000 (seamail postage included)
The amount is being sent in advance by:
☐international money order
☐enclosed check

Name .....
Profession .....
Address .....
Signature .....

Please register my order for the following back issues of **SD**

The amount is being sent in advance by:
☐international money order
☐enclosed check

Name .....
Profession .....
Address .....
Signature .....

POST CARD

stamp

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

POST CARD

stamp

Subscription Department

SD

Space Design

Kajima Institute Publishing, Co., Ltd.

5–13 Akasaka 6-chome, Minato-ku,

Tokyo, 107 JAPAN

8201 Sutemi Horiguchi $14.00
Organization of architecture and garden. Major works of Japanese pioneer of modern architecture. English texts.

8202 Memphis, VISIC, A. Mangiarotti $8.50

8203 Foster Associates $8.00
The Architecture of the Near Future. All the major works including The Hongkong & Shanghai Bank, etc. English texts.

8204 Gregotti Associati $8.00
The Geography of Architecture. 17 works of Gregotti.

8205 Istanbul $8.50
From Byzantine Architecture to Baroque Architecture.

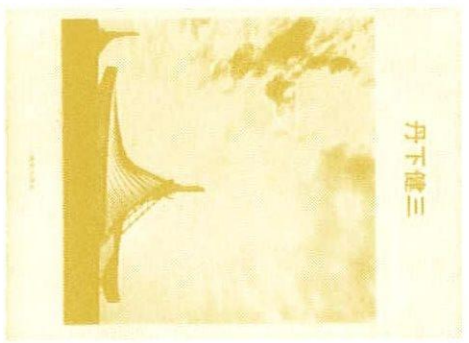
8206 I.M. Pei & Partners $15.00
28 Great works of I.M. Pei & Partners, including the Design Process of National Gallery of Art. Full English texts.

8207 Lost and Unbuilt Japanese Architecture $8.00

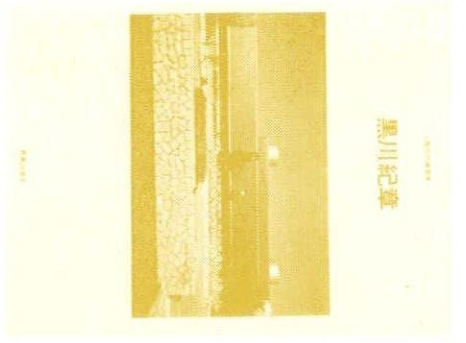
8106*



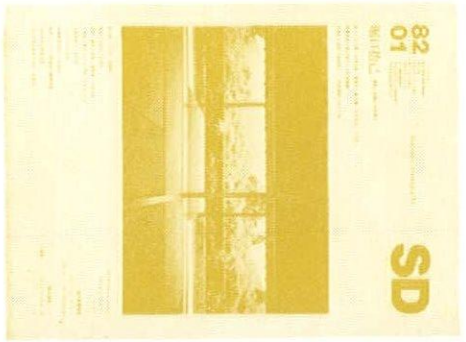
8001*



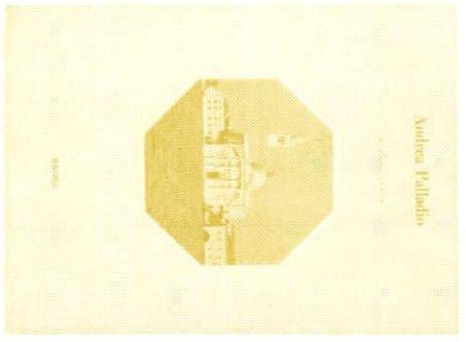
7804*



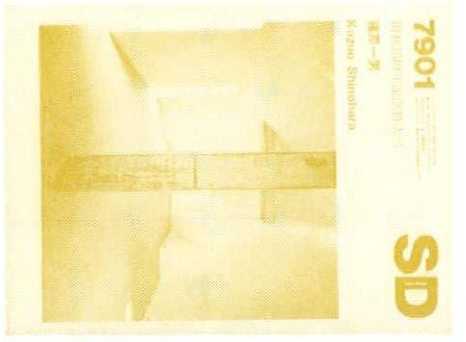
8201



8101*



7901





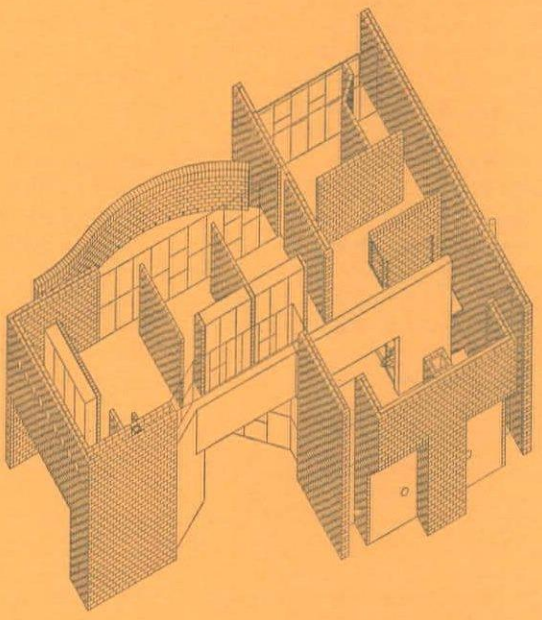
<都市住宅>1982年７月特大号　特別定価＝1,800円

特集｜歩車共存道路の理念と実践

座談会：
<みち>を媒介にコミュニティの再生を索めて
＝槇文彦＋天野光三＋仲尾和雄＋岡並木
歩車共存のためのデザイン・メソッド
＝GKインダストリアルデザイン研究所
歩車共存道路の成立基盤／歩車共存道路の空間構成／道路空間の構成要素の検討，ほか
<生活の庭>としての道を索めて
＝西武都市開発＋田島學
生きた<みち>づくりへの出発／生活道路の復権／新しい<みち>の悩み／生活空間としての装置／生活空間としての歩み
コミュニティ道路の実践
コミュニティ道路の今日的課題＝溝口忠
大阪市のコミュニティ道路＝村井哲夫ほか
生活道路の現状と改善策＝吉田隆一ほか
歩車共存道路の設計と整備効果＝小谷通泰
コミュニティ道路実施例一覧
計画的集合住宅団地における歩車共存の試み
＝神谷裕直＋海宝弘和
ヨーロッパの歩車共存道路
＝青木英明

<都市住宅>1982年８月号　特別定価＝1,100円

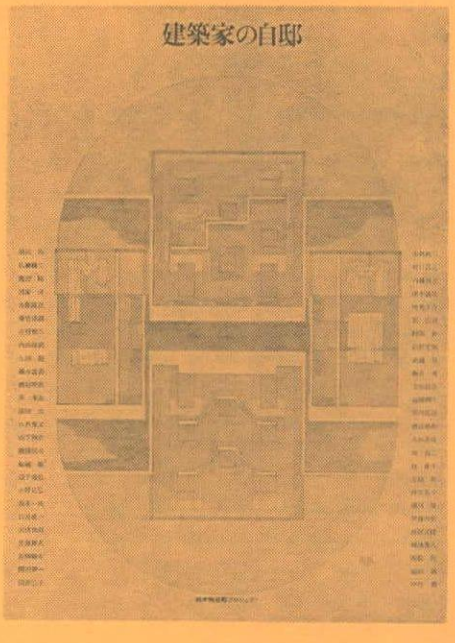
住宅12題
スイス若手建築家に見る<モダン>



オラート邸，フンツィカー邸，レアリーニ邸，シロス１，
バーゼル市の歴史的中心部の部分再開発の設計競技案
設計＝ルディ・フンツィカー
グエリエーリ邸，オデラス邸，キエザ邸
設計＝エリオ・オスティネッリ
タンボリーニ邸，クレリアのタウンハウス，住宅計画案３題
設計＝セルジオ・グリニョーリ＋アッティリオ・バンツェーリ

建築家の自邸

待望のハードカバー装　定価＝3,200円



論文：時代の投影としての建築家の自邸＝宮脇檀
小論：私にとって<自邸>とは何か＝清家清　菊竹清訓　藤木忠善　東孝光　原広司　西沢文隆
論文：建築家は<私>をいかに建築したか＝本田一勇喜
作品：自邸建築50選
増沢洵1952　広瀬鎌二1953　池辺陽＋今泉善一1954　清家清1954　吉阪隆正1955　菊竹清訓1958　吉村順三1958　内田祥哉1961　生田勉1962　藤木忠善1963　渡辺明次1965　東孝光1967　添田浩1967　六角鬼丈1967　山下和正1968　穂積信夫1968　船越徹1969　益子義弘1970　小野正弘1970　坂本一成1970　白井晟一1970　室伏次郎1971　光藤俊夫1971　岩崎駿介1972　関沢弘子・勝一1972　山根鋭二1972　村口昌之1973　内藤恒方1973　田中謙次1974　可児才介1974　原広司1974　阿部勤1974　白沢宏規1974　武藤章1974　鯨井勇1974　吉田研介1975　遠藤剛生1975　黒川哲郎1975　渡辺豊和1977　大杉喜彦1977　林昌二・雅子1978　土岐新1978　高宮真介1978　横河健1978　伊藤邦明1979　西沢文隆1979　堀池秀人1979　高松伸1980　仙田満1980　伊丹潤1981

SD 1979→1982　●：特集　ONS：Nice Space　OMO：モニュメント　ON：ニッポン　OP：PARIS　OS：2001年のSPACE DESIGN

1979　定価¥1100，＊＝特別定価

1＊ ●篠原一男／上原曲り道の住宅，花山第3の住宅，糸島の住宅，成城の住宅ほか，今，そして機能＝篠原一男　永遠の〈現在〉＝黒坂章雄　論文抄録　活動年譜　OMO＝飯田善国　＊＝¥2500

2 ●Dissing＋Weitlingの作品／在英デンマーク大使館ほか　●スーパー・ローラーコースター　●ボザールの新しい波／三宅理一＋古林茶編　文＝A.グランバック，F.モンテス　OMO＝泉真也　ONS アッシジ

3 ●芸計家としてのマッキントッシュ——水彩＋家具＋建築　文＝香山寿夫ほか　●イタリア建築1926—1943　八束はじめ編　●論文 V.グレゴッティ　OMO＝吉阪隆正　ONS　カサ・デル・ファッショ

4 ●ゲルカン＋マルク事務所：西ドイツの建築／ベルリン・テーゲル空港，バーラビ国立図書館，ディーキルヒ体育施設ほか　●建築と不安定な言語：F.ラッジの作品　OMO＝永井一正　ONS　グルントヴィ教会

5＊ ●SOMの近作：組織と建築家／ジェッダ国立商業銀行，シカゴ・アート・インスティテュート新館ほか　対談＝岡田新一＋三沢浩＋三栖邦博　OMO＝木村徳国　ONS　カルカソンヌ　＊＝¥1300

6＊ ●槇文彦／岩崎美術館，代官山集合住居，立正大学熊谷校舎，大阪臨海スポーツセンター，自邸ほか　対談＝原広司＋槇文彦　文＝P.ドリュウ　OMO＝相田武文　＊＝¥3000（ハードカバー装）

7 ●組織と建築家——A.ラムズデンとDMJM／フロリダ・ジュニア・カレッジほか　文＝M.F.ロス，高瀬隼彦ほか　●香川県直島町文教地区　●D.カンパニー社新館　OMO＝岡田新一　ONS　グワリオル

8＊ ●金寿根／馬山聖堂，韓国海外開発公社屋，徳成女子大学家政館・薬学館ほか　文＝吉村順三，S.Chang　対談＝西沢文隆＋金寿根　OMO＝神代雄一郎　＊＝¥3000（ハードカバー装）

9 ●HOK：ギョー・オバタの近作／コミュニティ・フェデラル・センター，マーリンクロウト・コーポレイト・センターほか　●もうひとつの木の空間／文＋写真＝須山義幸　OMO＝新宮晋　ONS　天壇，北京

10 ●フィレンツェの建築家：ジョヴァンニ・ミケルッチ／ロンガローネの教会，ヴィラ・ストロッツィ温室再建計画，赤ガニの居酒屋ほか　●川崎市民プラザ　OMO＝黒川紀章　ONS　セビリアのアルカサール

11＊ ●建築家ロイド・ライト——F.L.ライトⅡ世の生涯と作品／ウェイファーラーズ・チャペル，ジョン・ボウラー邸ほか　OMO＝宮脇愛子　ONS　パトモス島の聖ヨハネ修道院　＊＝¥1300

12 ●最近のエットレ・ソットサス Jr.　解説＝バルバラ・ラディーチェほか　●M.D.ルッキによる二つの住居計画　●ペリー・キングの照明器具新作5点　OMO＝槇田実　ONS　サダン・トラジャ族の葬儀広場

1980　定価¥1100，＊＝特別定価

1＊ ●丹下健三／広島計画，代々木国立屋内総合競技場，赤坂プリンスホテル，ナイジェリア新首都都心計画ほか　いくつかの経験＝丹下健三　作品年表　ON＝亀倉雄策　＊＝¥3000（ハードカバー装）

2＊ ●アムステルダム建築史——山口廣　アムステルダム株式取引所，文：第1章—4章＝山口廣　●葉祥栄——そのフォルムとエスプリ／木下クリニック，インゴット，マルタ号ほか　ON＝清家清　＊＝¥1300

3＊ ●組織と建築：チームによる建築・CRS／CRS本社ビル，デヴリー工業学校，ウェイク・フォレスト大学美術センターほか　ON＝山田脩二　ONS　ヴィーゲラン彫刻公園　＊＝¥1500

4 ●細江勲夫の近作：イタリアのカロッツェリアより／スパッツィオ，カーサ・モービレほか　インタビュー＝黒川雅之　●セインズベリー・アート・センター　ON＝川添登　ONS　オシオス・ルーカス修道院

5 ●ウィーン古典派建築——18世紀からオットー・ヴァグナー盛期まで＝川向正人／革命的古典主義，立体派，浪漫的歴史主義，厳格な歴史主義，後期歴史主義ほか　○驚異の工匠たち（最終回）　ON＝石井幹子

6＊ ●林雅子／ルーフテラスをもつ家，内部に外部をもつ家，自邸，三つの床，年表・経歴ほか　私の建築作法＝林雅子　対談＝林昌二＋林雅子　ON＝田中一光　＊＝¥3000（ハードカバー装）

7 ●アメリカの新しい波——フランク・ゲーリー／自邸，ディメニル邸ほか　文＝伊藤公文　●遅ればせのシカゴ・トリビューン・コンペ　文＝S.コーエン　ON＝小池岩太郎　ONS　マリア・ラーハ修道院教会

8 ●Studio PER／カーサ・トーマス，カーサ・ロニョーニほか　文＝松風正幸　●A.マンジャロッティの近作　●マイアミ大学アート・ミュージアム　文＝三栖邦博　ON＝原広司　ONS　メキシコ国立自治大学

9 ●シーザー・ペリの新局面／ニューヨーク近代美術館増改築計画ほか　文＝高瀬隼彦ほか　●松風正幸のプロダクト・デザイン　文＝A.メンディーニ　ON＝吉田光邦　ONS　ル・ランシーのノートル・ダム

10＊ ●菊竹清訓／スカイハウス＋増築，出雲大社庁の舎・神鮎殿，京都信用金庫ほか　第三世代の建築＝菊竹清訓　作品データ・分布図・年表・略歴　ON＝奈良原一高　＊＝¥2600，¥3000（ハードカバー装）

11 ●イタル・デザインの全貌／メデューサ，フィアット・パンダほか　文＝G.ジュージャロほか　●ネパールの王宮建築　日本工業大学ネパール古王宮調査団　○ヴィジョン・イン・モーション❶　ON＝伊藤ていじ

12 ●膜構造による大空間／ジェッダ新国際空航ターミナルほか　文＝石井一夫　●アメリカの壁画の現在　文＝一ノ瀬勝彦　R.ハースの作品／ソーホーの壁画ほか　ON＝横尾忠則　ONS　オルヴィエート

1981　定価¥1100，＊＝特別定価

1＊ ●アンドレア・パラディオ／ラ・ロトンダ，サン・ジョルジオ・マッジョーレ教会，バシリカほか　対談＝磯崎新＋高階秀爾＋長尾重武　論文・資料多数　OP＝高階秀爾＋田原桂一　＊＝¥2800

2＊ ●ハリー・サイドラー／パリのオーストラリア大使館，H.サイドラー自邸，文＝H.サイドラー，P.ドリュー　○ヴィジョン・イン・モーション❸　OP＝小宮山昭＋田原桂一　ONS　森州の庭園　＊＝¥1300

3 ●新古典主義／ポスト・モダニズムと新古典主義，〔Ⅰ〕考古学とイマジネーション，〔Ⅱ〕自然と形態〜〔Ⅷ〕　文＝八束・川向・菊池・彦坂・小林・青木　●W.プラットナーの近作2題　OP＝遠山一行＋田原桂一

4 ●グナー・バーカーツの近作／コーニング・ガラス美術館ほか　●ジャン＝J.ルクーの幻想画集　●ディッシング＋ヴァイトリングの作品　OP＝大久保喬樹＋田原桂一　ONS　ホーフブルクの旧宮廷図書館

5＊ ●ジオ・ポンティ 1891-1979／夢，タラント大聖堂，ピレッリ・ビルほか　文＝G.ポンティ，L.ポンティ，A.メンディーニ，三輪正弘ほか　OP＝進来廉＋田原桂一　ONS グルムシュクット芸術家村　＊＝¥1600

6＊ ●安藤忠雄／小篠邸，松本邸，福邸，STEP，上田邸，堀内邸，大植邸，石原邸，帝塚山の家，住吉の長屋ほか　作品リスト　対談＝西沢文隆＋槇文彦　文＝二川幸夫　OP＝堂本尚郎＋田原桂一　＊＝¥2800

7 ●シエナ——イタリア中世都市の生と死　田島学　文：①〜⑪　田島学　●北ヨーロッパのファクトリー・デザイン5題　○ヴィジョン・イン・モーション❻　OP＝田淵安一＋田原桂一　ONS　ハッサンのモスク

8＊ ●環境芸術としての建築——SITEの場合／BEST 社店舗シリーズほか　文＝J.ワインズ　●もうひとつの木の空間⑥／文＋写真＝須山義幸　OP＝森田一敏＋田原桂一　ONS　ピサの斜塔　＊＝¥1300

9＊ ●岡田新一：抽象と細密／岡山市立オリエント美術館，中近東文化センター，最高裁判所庁舎，警視庁本部庁舎ほか　作品データ・年表・経歴　抽象と細密＝岡田新一　OP＝植田実＋田原桂一　＊＝¥2500

10 ●デンマークのデザイン／家具，照明器具，テーブルウェア，ID，DSBほか　文＝渡辺力，光藤俊夫，梨谷祐夫，渡辺和子，藤本清春，今井一夫　OP＝野見山暁治＋田原桂一　ONS　ルイジアナ美術館

11＊ ●高浜和秀の建築と家具／建築：ウンブリアのヴィラ，家具：LEGO，MANTILLA，照明品具：SAORI，ほか　文＝清家清ほか　OP＝阿部良雄＋田原桂一　ONS　セビリアの大聖堂　＊＝¥1300

12＊ ●黒川雅之の仕事／VILLA-H，河野邸，銀座くのや，バンドラ，T-ジョイント，アクティング，メカビーンズほか　作品データ・年表　対談＝黒川雅之＋押野見邦英　OP＝高田博厚＋田原桂一　＊＝¥1500

1982　定価¥1300，＊＝特別定価

1＊ ●堀口捨己——建築と庭園の空間構成／紫烟荘，岩波邸，磯居，八勝館，大島測候所ほか　文＝堀口捨己，山口廣，木村徳国，東孝光，西沢文隆，富永譲，早川正夫ほか　年表・データ　OS＝泉真也　＊＝¥2500

2＊ ●メンフィス：ニュー・インターナショナル・スタイル，あるいは，家具のポスト・モダニズム　●VISIC：〈詩と音楽と映像〉の新たな創造的融合ほか　OS＝竹山実　ONS　ダダ・ハリズ・ワブ　＊＝¥1500

3 ●フォスター・アソシエイツ——建築の近未来／香港上海銀行，ルノー配送センター，IBMテクニカルパーク，オルセン・センターほか　文＝N.フォスター，杉村恵司　OS＝尾島俊雄　ONS　サンアントニオ

4 ●V.グレゴッティ事務所——建築の地理学／新カラブリア大学，ジュデッカ島造船所ほか　文＝V.グレゴッティ，松井宏方，松井源吾ほか　●公共空間の彫刻　OS＝小嶋稔　ONS　サンタンブロージオ教会堂

5＊ ●イスタンブールの都市と建築：ビザンチンからバロックまで／ハギア・ソフィア，オルタキョイ・モスクほか　文＝三宅理一，日高健一郎ほか　写真＝田原桂一　●現代建築と陶芸　OS＝林昌二　＊＝¥1500

6＊ ●I.M.ペイ・アンド・パートナーズ／ナショナル・アートギャラリー東館，グラス市庁舎，ジョン・ハンコック・タワーほか　文＝高瀬，林，神谷，高垣，渡辺　OS＝戸村浩　ONS　ストーンヘンジ　＊＝¥2800

7 ●幻の日本建築：失われた建築，描かれた建築／古代・中世・近世：西和夫編　近代：森田一敏編　現代：湯澤正信編　●コロムビア大学学生寮／ガスミー&シーゲル　OS＝鈴木博之　ONS　ジャイプール

SDバックナンバー常備店

●東京
中央区　八重州ブックセンター　03(281)1811
千代田区　三省堂本店（神田）　03(233)3314
　書泉ブックマート　03(294)0011
新宿区　紀伊國屋本店　03(354)0131
渋谷区　大盛堂書店　03(463)0511
豊島区　西武百貨店ブックセンター　03(981)0111

●札幌
旭屋書店　011(241)3007

●横浜
有隣堂本店　045(261)1231

●大阪
北区　旭屋書店本店　06(313)1191
西区　柳々堂　06(443)0167

●京都
駸々堂京宝店　075(223)1003
大龍堂書店　075(231)3036

●大学生協内書店
東北工業大学
早稲田大学理工学部
法政大学理工学部
関東学院大学

●SD 9 月号予告

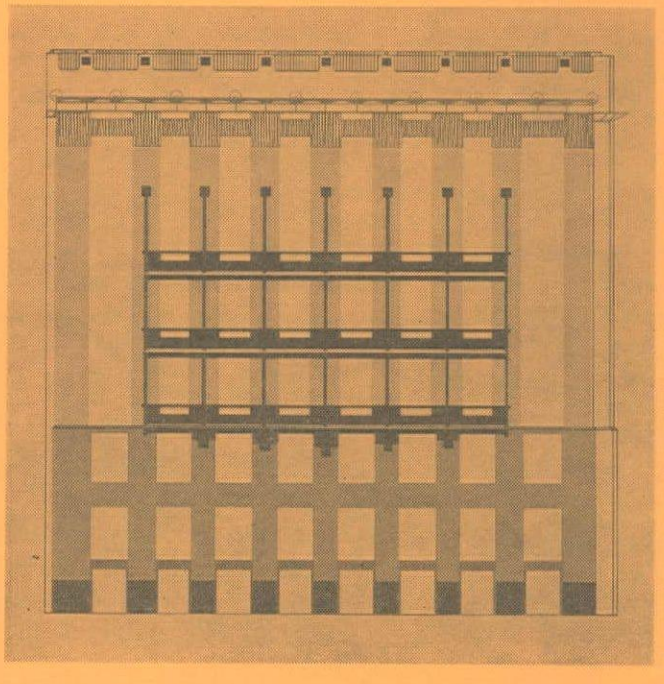
SD
Space Design

特集＝

世紀末ウィーンの都市と建築

ウィーンの都市の骨組みは，19世紀後半
ハプスブルク王朝の下で決定された.
その中心となる環状道路と，それに沿って展開する
華麗なる建築群の紹介！

Ⅰ：ハプスブルク王朝の遺産リンク・シュトラーセ
ソクラテス・ディミトリオ
Ⅱ：共生のデザイン——世紀末から戦間期までのウィーンの都市と建築
川向正人
Ⅲ：オーストリアから見た日本の空間
アントン・シュヴァイグホーファー＋川向正人



定価＝1300円

乞う御期待！

SD 現代の建築家シリーズ

《安藤忠雄》 Tadao Ando

数多くの建築家たちが，それぞれの建築理論と設計手法をもって
活躍する現代.　その中でもひときわ，安藤忠雄は異才とも言える
確固たる設計理念を持って，独自の世界を展開する！
その安藤忠雄を知る唯一の作品集!!

作品＝
小篠邸，松本邸，PORTPIA'81 "Fashion Live Theater"
STEP，松谷邸，ガラスブロックウォール（堀内邸）
大楠邸，ガラスブロックの家（石原邸）
帝塚山の家，領壁の家，番匠邸
住吉の長屋，双生観　ほか全主要作品＋ドローイング.

文＝
二川幸夫，竹山聖
対談＝
西澤文隆＋槇文彦
定価＝3000円



■ハードカバー装出来　**絶賛発売中！**

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話（03）582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書：各四六判

SD 選書

■今日の造形文化に関心のあるすべての人びとにおくる，新しいタイプの選書 ■現代文明のあらゆる課題をあつかい，新鮮でダイナミックな視点を提供する選書 ■高度に細分化し，専門化した現代文明の各領域をつなぐかけ橋となる選書 ■写真・図版を豊富に入れて，ヴィジュアルに編集し，感覚と知性に富む読者のよき伴侶となる選書.

①現代デザイン入門
勝見 勝著 ¥1,500

②現代建築12章
カーン，ルドルフ他著／山本学治訳編 ¥980

③都市とデザイン
栗田 勇著 ¥980

④江戸と江戸城
内藤 昌著 ¥1,200

⑤日本デザイン論
伊藤ていじ著 ¥1,500

⑥ギリシア神話と壺絵
澤柳大五郎著 品切

⑦フランク・ロイド・ライト
谷川正己著 ¥1,500

⑧きものの文化史
河鰭実英著 ¥1,200

⑨素材と造形の歴史
山本学治著 ¥1,500

⑩今日の装飾芸術
ル・コルビュジエ著／前川国男訳 ¥980

⑪コミュニティとプライバシイ
シャマイエフ，アレクサンダー共著
岡田新一訳 ¥1,500

⑫新桂離宮論
内藤 昌著 ¥1,200

⑬日本の工匠
伊藤ていじ著 品切

⑭現代絵画の解剖
木村重信著 品切

⑮ユルバニスム
ル・コルビュジエ著／樋口 清訳 ¥980

⑯デザインと心理学
穐山貞登著 ¥980

⑰私と日本建築
アントニン・レーモンド著 ¥980

⑱現代建築を創る人々
神代雄一郎編 ¥980

⑲芸術空間の系譜
高階秀爾著 ¥1,200

⑳日本美の特質
吉村貞司著 ¥1,500

㉑建築をめざして
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳 ¥1,500

㉒メガロポリス
J.ゴットマン著／木内・石水共訳 品切

㉓日本の庭園
田中正大著 ¥1,500

㉔明日の演劇空間
尾崎宏次著 品切

㉕都市形成の歴史
アーサー・コーン著／星野芳久訳 ¥1,500

㉖近代絵画
オザンファン，E.ジャンヌレ共著
吉川逸治訳 ¥980

㉗イタリアの美術
A.ブラント著／中森義宗訳 ¥980

㉘明日の田園都市
E.ハワード著／長 素連訳 ¥1,500

㉙移動空間論
川添 登著 品切

㉚日本の近世住宅
平井 聖著 品切

㉛新しい都市交通
B.リチャーズ著／曾根・森岡共訳 ¥980

㉜人間環境の未来像
W.イーウォルド編／磯村・星野共訳 ¥980

㉝輝く都市
ル・コビュジエ著／坂倉準三訳 ¥1,500

㉞アルヴァ・アアルト
武藤 章著 ¥1,500

㉟幻想の建築
坂崎乙郎著 ¥980

㊱カテドラルを建てた人びと
J.ジャンベル著／飯田喜四郎訳 ¥1,500

㊲日本建築の空間
井上充夫著 ¥1,500

㊳環境開発論
浅田 孝著 ¥980

㊴都市と娯楽
加藤秀俊著 ¥980

㊵郊外都市論
H.カーヴァー著／志水英樹訳 品切

㊶都市文明の源流と系譜
藤岡謙二郎著 品切

㊷道具考
榮久庵憲司著 ¥980

㊸ヨーロッパの造園
岡崎文彬著 ¥980

㊹未来の交通
ハル・ヘルマン著／岡 寿麿訳 ¥780

㊺古代技術
H.ディールス著／平田 寛訳 品切

㊻キュビスムへの道
D.H.カーンワイラー著／千足伸行訳 ¥980

㊼近代建築再考
藤井正一郎著 ¥980

㊽古代科学
J.L.ハイベルク著／平田 寛訳 ¥690

㊾住宅論
篠原一男著 ¥1,500

㊿ヨーロッパの住宅建築
S.カンタクシーノ著／山下和正訳 ¥980

(51)都市の魅力
清水馨八郎・服部銈二郎共著 ¥980

(52)東照宮
大河直躬著 ¥690

(53)茶匠と建築
中村昌生著 ¥1,500

(54)住居空間の人類学
石毛直道著 ¥1,500

(55)空間の生命―人間と建築
坂崎乙郎著 ¥980

(56)環境とデザイン
ガレット・エクボ著／久保 貞訳 ¥980

(57)日本美の意匠
水尾比呂志著 ¥980

(58)新しい都市の人間像
イールズ，ワルトン共編
木内信蔵監訳 ¥780

(59)京の町家
島村 昇他著 ¥1,500

(60)都市問題とは何か
レイモンド・バーノン著／片桐達夫訳 ¥980

(61)住まいの原型（Ⅰ）
泉 靖一編 ¥980

(62)コミュニティ計画の系譜
佐々木 宏著 ¥1,500

(63)近代建築
V.スカーリー著／長尾重武訳 ¥1,500

(64)SD海外建築情報（Ⅰ）
岡田新一編 ¥980

(65)SD海外建築情報（Ⅱ）
岡田新一編 ¥980

(66)天上の館
J.サマーソン著／鈴木博之訳 ¥780

(67)木の文化
小原二郎著 ¥1,500

(68)SD海外建築情報（Ⅲ）
岡田新一編 ¥980

(69)地域・環境・計画
水谷頴介著 ¥980

(70)都市虚構論
池田亮二著 ¥780

(71)現代建築事典
ウォルフガング・ペーント編
浜口隆一・神代雄一郎監訳 ¥1,900

(72)ヴィラール・ド・オヌクールの画帖
藤木康雄著 ¥780

(73)タウンスケープ
T.シャープ著／長 素連・もも子共訳 ¥780

(74)現代建築の源流と動向
L.ヒルベルザイマー著／渡辺明次訳 ¥980

(75)部族社会の芸術家
マリアン・W.スミス編／木村重信他訳 ¥780

(76)キモノ・マインド
B.ルドフスキー著／新庄哲夫訳 ¥780

(77)住まいの原型（Ⅱ）
吉阪隆正・他共著 ¥980

(78)実存・空間・建築
シュルツ著／加藤邦男訳 ¥1,200

(79)SD海外建築情報（Ⅳ）
岡田新一編 ¥780

(80)都市の開発と保存
上田 篤・鳴海邦碩共編 ¥980

(81)爆発するメトロポリス
W.H.ホワイト・他著／小島将志訳 ¥980

(82)アメリカの建築とアーバニズム（上）
V.スカーリー著／香山寿夫訳 ¥980

(83)アメリカの建築とアーバニズム（下）
V.スカーリー著／香山寿夫訳 ¥980

(84)海上都市
菊竹清訓著 品切

(85)アーバン・ゲーム
M.ケンツレン著／北原理雄訳 ¥980

(86)建築二〇〇〇
C.ジェンクス著／工藤国雄訳 ¥980

(87)日本の公園
田中正大著 ¥1,500

(88)現代芸術の冒険
オト・ビハリ＝メリン著
坂崎乙郎・宝木範義共訳 ¥980

(89)江戸建築と本途帳
西 和夫著 ¥980

(90)大きな都市小さな部屋
渡辺武信著 ¥980

(91)イギリス建築の新傾向
R.ランダウ著／鈴木博之訳 ¥980

(92)SD海外建築情報（Ⅴ）
岡田新一編 ¥980

(93)IDの世界
豊口 協著 ¥980

(94)交通圏の発見
有末武夫著 ¥980

(95)建築とは何か
B.タウト著／篠田英雄訳 ¥1,500

(96)続住宅論
篠原一男著 ¥1,200

(97)建築の現在
長谷川 堯著 ¥980

(98)都市の景観
G.カレン著／北原理雄訳 ¥1,500

(99)SD海外建築情報（Ⅵ）
岡田新一編 ¥980

(100)都市空間と建築
U.コンラーツ著／伊藤哲夫訳 ¥980

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話 (03) 582-2251 ●振替 東京6-180883 ●SD選書：各四六判

㉛装置としての都市

月尾嘉男著　四六判　208頁　¥1,500

都市は人間が集団で高密度に生活する装置であるという視点に立って，装置を構成する四つの技術（構築・情報・エネルギー・輸送）に分解して把え直した，いわば都市の技術史である．

「テクノポリス90」の概要書．

㉜建築家の発想―私の師匠たち―

石井和紘著　四六判　264頁　¥1,500

学生・修業時代から現在まで，著者が接し影響を受けた建築家約40名を，作家の目を通して論じた作家論．

この師匠たちは，そのまま現代の代表的な建築家が網羅されており，初心者にとっては実際的な現代建築入門書となろう．

---

⑩環境ゲーム
T.クロスビィ著／松平　誠訳　¥980

⑫アテネ憲章
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正編訳　¥980

⑬プライド・オブ・プレイス
シヴィック・トラスト著
井手久登・正子共訳　¥980

⑭構造と空間の感覚
F.ウィルソン著／山本・稲葉共訳　¥1,500

⑮現代民家と住環境体
大野勝彦著　¥980

⑯光の死
H.ゼーデルマイヤ著／森　洋子訳　¥980

⑰アメリカ建築の新方向
R.スターン著／鈴木　一訳　¥980

⑱近代都市計画の起源
L.ベネヴォロ著／横山　正訳　¥980

⑲中国の住宅
劉敦楨著／田中　淡・沢谷昭次共訳　¥980

⑳現代のコートハウス
D.マッキントッシュ著／北原理雄訳　¥980

㉑モデュロールⅠ
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳　¥1,500

㉒モデュロールⅡ
ル・コルビュジエ著／吉阪隆正訳　¥1,200

㉓建築の史的原型を探る
B.ゼーヴィ著／鈴木美治訳　¥980

㉔西欧の芸術1　ロマネスク(上)
アンリ・フォション著／神沢栄三・他訳　¥1,500

㉕西欧の芸術1　ロマネスク(下)
アンリ・フォション著
神沢栄三・他訳　¥1,200

㉖西欧の芸術2　ゴシック(上)
アンリ・フォション著／神沢栄三・他訳　¥1,200

㉗西欧の芸術2　ゴシック(下)
アンリ・フォション著／神沢栄三・他訳　¥1,200

㉘アメリカ大都市の死と生
J.ジェコブス著／黒川紀章訳　¥980

㉙遊び場の計画
R.ダットナー著／神谷五男・他共訳　¥1,200

㉚人間の家
ル・コルビュジエ他・著／西沢信弥訳　¥1,200

㉛街路の意味
竹山　実著　¥1,500

㉜パルテノンの建築家たち
R.カーペンター著／松島道也訳　¥980

㉝ライトと日本
谷川正己著　¥980

㉞空間としての建築(上)
ブルーノ・ゼーヴィ著／栗田　勇訳　¥1,500

㉟空間としての建築(下)
ブルーノ・ゼーヴィ著／栗田　勇訳　¥980

㊱かいわい〔日本の都心空間〕
村野博司著　¥1,500

㊲歩行者革命
ブライネス，ディーン共著
岡　並木監訳　¥980

㊳オレゴン大学の実験
C.アレグザンダー著／宮本雅明訳　¥980

㊴都市は「ふるさと」か
ローマイス著／武　基雄・他共訳　¥980

㊵建築空間「尺度について」
P.ブドン著／中村貴志訳　¥980

㊶アメリカ住宅論
V.スカーリーJr.著／長尾重武訳　¥980

㊷タリアセンへの道
谷川正己著　¥980

㊸建築 vs.ハウジング
M.ポーリー著／山下和正訳　¥980

㊹思想としての建築
栗田　勇著　¥980

㊺人間のための都市
P.ペータース著／河合正一訳　¥980

㊻都市憲章
磯村英一著　¥980

㊼巨匠たちの時代
R.P.バンハム著／山下　泉訳　¥980

㊽三つの人間機構
ル・コルビュジエ著／山口知之訳　¥980

㊾インターナショナル・スタイル
ヒッチコック・他著／武澤秀一訳　¥980

㊿北欧の建築
S.E.ラスムッセン著／吉田鉄郎訳　¥980

(51)続建築とは何か
ブルーノ・タウト著／篠田英雄訳　¥980

(52)四つの交通路
ル・コルビュジエ著／井田安弘訳　¥980

(53)ラスベガス―忘れられたシンボリズム
ヴェンチューリ・他著／石井・伊藤共訳　¥980

(54)ル・コルビュジエ
C.ジェンクス著／佐々木宏訳　¥1,500

(55)デザインの認識
R.ソマー著／加藤常雄訳　¥980

(56)鏡―虚構の空間―
由水常雄著　¥980

(57)イタリア都市再生の論理
陣内秀信著　¥980

(58)東方への旅
ル・コルビュジエ著／石井　勉・他共訳　¥980

(59)建築鑑賞入門
コーディル，ケノン共著／六鹿正治訳　¥1,500

(60)近代建築の失敗
P.ブレイク著／星野郁美訳　¥1,200

(61)文化財と建築史
関野　克著　¥1,200

(62)日本の近代建築(上)
その成立過程――稲垣栄三著　¥1,200

(63)日本の近代建築(下)
その成立過程――稲垣栄三著　¥1,200

(64)住宅と宮殿
ル・コルビュジエ著／井田安弘訳　¥1,200

(65)イタリアの現代建築
V.グレゴッティ著／松井宏方訳　¥1,200

(66)バウハウス――その建築造形理念
杉本俊多著　¥1,200

(67)エスプリ・ヌーヴォー
〈近代建築名鑑〉
ル・コルビュジエ著／山口知之訳　¥1,200

(68)建築について(上)
F.L.ライト著／谷川睦子・正己共訳　¥1,200

(69)建築について(下)
F.L.ライト著／谷川睦子・正己共訳　¥1,200

(70)建築形態のダイナミクス(上)
R.ルドルフ著／乾　正雄訳　¥1,200

(71)建築形態のダイナミクス(下)
R.アルンハイム著／乾　正雄訳　¥1,200

(72)見えがくれする都市
槇　文彦・他共著　¥1,500

(73)街の景観
J.バーク著／長　素連・もも子共訳　¥1,200

(74)環境計画論
田村　明著　¥1,500

(75)アドルフ・ロース
伊藤哲夫著　¥1,200

(76)空間と情緒
箱崎総一著　¥1,200

(77)水空間の演出
鈴木信宏著　¥1,200

(78)モラリティと建築
D.ワトキン著／榎本弘之訳　¥1,200

(79)ペルシア建築
A.U.ポープ著／石井　昭訳　¥1,500

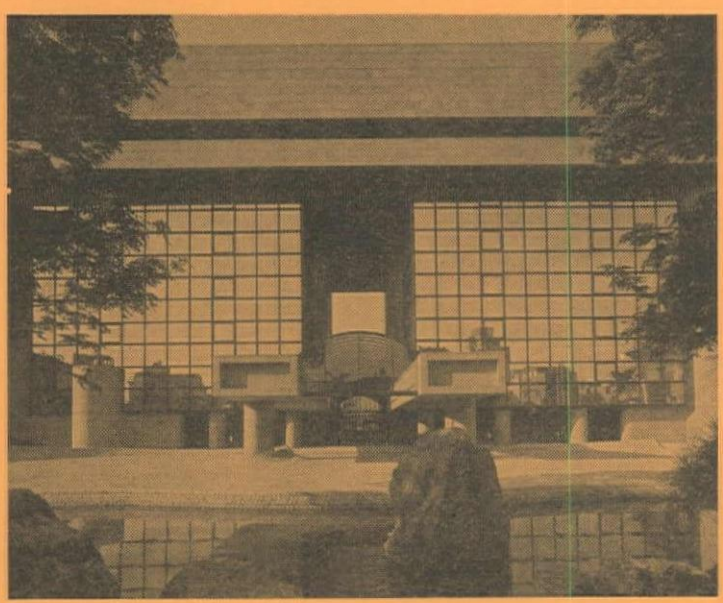
(80)ブルネッレスキ
ルネサンス建築の開花
G.C.アルガン著／浅井朋子訳　¥1,500

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話 (03) 582-2251 ●振替 東京6-180883 ●図書目録呈

建築論——日本的空間へ

黒川紀章著 四六判 314頁 ¥2,600

日本文化の文脈によって現代建築の再構築を目ざし，自立20年目を迎えてまとめた最新の建築論． 道の空間，共存・共生，両義性・多義性，中間領域など，日本の空間の特性を解き自己の未来への視点を明らかにする．



住居：その本質とプラン

アンドレ・ギュトン著／佐々木隆文訳 B5判 256頁 ¥5,800

エコール・デ・ボザールの定評ある講義録．

内容の6章は，Ⅰ住居，Ⅱ宮殿，Ⅲ都市の住居（A私的な邸宅，B積層集合住宅），Ⅳ郊外住宅，Ⅴ都市地域外の住居，Ⅵ住居の周囲：環境



マンションを長持ちさせる100章

棚沢成明著 B6判 224頁 ¥1,200 （図版約560点）

マンションを長持ちさせるには，いつどこが悪くなるかを早目に点検し，予防手当をすることである． 本書は分譲賃貸マンションの点検・補修・改装のチェックポイントをイラスト付きでまとめた，住まいの家庭医学。

はじめに

Ⅰ—マンション解剖学

地盤と杭，鉄骨鉄筋コンクリート造，鉄筋コンクリート造，鉄骨造，屋上・ベランダの防水，浴室その他の防水，外壁，サッシまわり，ベランダと手すり，室内の床，幅木と壁の下地と仕上げ，天井の仕上げ，マンションの設備計画，電気の流れ，照明とスイッチとコンセント，その他の電気設備，マンションの給排水システム，台所まわりの設備，洗面室まわりの設備，浴室まわりの設備，便所まわりの設備，給湯設備，ガス設備，冷暖房のシステム，その他の設備

Ⅱ—マンションを傷める症状・原因と修理

雨漏りによるしみ，ものをこぼした時のしみ，結露によるしみ，湿気によるはがれ，乾燥や衝撃によるはがれ，鉄部の錆，非鉄金属の腐蝕，モルタルのクラック（ひび），構造体のクラック，ガラスの割れ❶，ガラスの割れ❷，木部の割れ（和室まわり），木部の割れ（洋室の木部），白アリによる虫害，キクイムシによる虫害，油性ペンキのはがれ，水性ペンキのはがれ，結露によるかび，不完全通風によるかび，動かないドアとサッシ，造作家具の引出し・戸が動かない，建具まわりのすきま，汚れる，落ちる，壊れる，水がでない，とまらない，電気がつかない，排水が流れない，ガスがでない

Ⅲ—いつ、どこが傷みやすくなるか——その予防と手当

屋上の手当（アスファルト防水），屋上の手当（シート防水），屋上の手当（その他の防水），外壁の手当（モルタル塗り），外壁の手当，（タイル貼り），外壁の手当（金属板その他），コーキング部分（チオコール樹脂・油性），サッシ（アルミ製），サッシ（スチールその他），外まわり❶，外まわり❷，室内（パブリック・スペース❶），室内（パブリック・スペース❷），ドア・引戸まわり，床の手当，幅木・壁の手当，天井の手当，照明施設の手当，ガス設備の手当，水まわりの手当❶，水まわりの手当❷，設備機器❶，設備機器❷，設備機器❸

Ⅳ—マンション生活の工夫で長持ちさせる

増改築のアイディア❶，増改築のアイディア❷，設備の改装❶，設備の改装❷，マンションの管理❶，マンションの管理❷，近隣のつきあい，生活のサイクル，マンションのライフサイクル，マンションのチェックポイント，インテリアのアイディア❶，インテリアのアイディア❷，インテリアのアイディア❸，ベランダ庭園，落下事故，マンション案内パンフレットの見方，購入方法の検討，施工業者の見方，マンション業者の見方，売買契約時のチェックポイント，等価交換とは何か❶，等価交換とは何か❷

付録—あなたのマンションの点検チェックリスト

建築法規の変遷とその背景

——明治から現在まで——大河原春雄著 A5判 290頁 ¥4,600

西洋から直輸入したために我国の実情に合わない建物を規制するために，大正8年に制定された“市街地建築物法”が公布された経過，以後の発展の過程…など建築法規の歴史を詳述．

空中写真に見る国土の変遷

日本写真測量学会編 B5判 234頁 ¥8,300 ◉内容見本送呈

日本の国土の中で，この20年間にかなり変化の著しかったと思われる55地区について，昭和30年代，40年代，50年代の写真を並べて対比することにより，その変化の模様が一望できる．戦後，撮影された空中写真の集大成．

▶20年間の変貌の激しさに改めて驚かざるを得ない．20年の変化はわが国の高度成長が国土に刻み込んだ変容のパターンでもある．……「高度成長のパターン」の共通項は，実は「強引」ということではなかったか．

〈アサヒグラフ'84. 5. 14号〉から

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話（03）582-2251 ●振替 東京6-180883 （SS）シルバーシリーズ

〈シルバーシリーズ〉 SS

■幅広い視野から建築，デザイン，都市，さらに文化全般にわたる諸問題を解明する新しいシリーズ．
■学生諸君におくる SD 選書の姉妹シリーズ．

多様化する人びとの欲求

——図でみる個人パタン——

穐山貞登著 四六判 176頁 ¥1,500

今日人びとの態度・欲求は，画一から多様へと変化してきている． 本書は，その実態の分析方法を新しく開発したもので，今後の行政当局の住民への対応を考える上で最も参考となる，期待の書といえよう．

半過去の建築から

木島安史著 四六判 192頁 ¥1,500

近代建築の一貫した論理に対して，価値の多様性を対置し，過去50年に亘る建築を現在の自分との関り合いにおいて見直した試論．

目次：①微視的世界，③辺境のトータリティ，③水平線の彼方，④混在併存としての結構

建築美の世界—鑑賞・分析・比較—

井上充夫著 四六判 252頁 ¥1,900

学識経験ゆたかな著者が，実際に見て歩いた美しい建築の中から，具体例112（東洋41，中近東26，西洋45）の写真をとりあげて，肩のこらない，わかりやすい解説をつけた，楽しい鑑賞のための手引書．

建築美の種々相，その広さ，豊かさが誰にでも理解できる好著である．

絵で見る住宅様式史
M.M.フォーレイ著／八木幸二・他共訳 356頁 ¥2,800

水道の文化史＝江戸の水道・東京の水道
堀越正雄著 320頁 ¥2,200

盛り場＝人間欲望の原点
服部銈二郎著 196頁 ¥1,500

口紅から機関車まで＝インダストリアル・デザイナーの個人的記録
レイモンド・ローウイ著／藤山愛一郎訳 432頁 ¥2,800

創造するこころ
《山本学治建築論集・全3巻》第3巻 250頁 ¥1,800

造型と構造と
《山本学治建築論集・全3巻》第2巻 220頁 ¥1,600

歴史と風土の中で
《山本学治建築論集・全3巻》第1巻 230頁 ¥1,600

建物はどのように働いているか

エドワード・アレン著／安藤正雄・他共訳 四六判 288頁 ¥2,500

温熱環境から水仕舞，防耐火，人間工学，構造に至るまで，建物の成り立ちと機能すべてがわかる，生理学の入門書のような易しい建築の解説書．巧みなイラストも豊富で，素人，専門家，だれにでも興味深く読める書である． 7月下旬刊



新しい街路のデザイン
デザイン委員会＋イギリス都市計画協会共編／中津原努・他訳 224頁 ¥1,800

建物はどうして建っているか〈構造—重力とのたたかい〉
M.サルバドリー著／望月重訳 180頁 ¥1,600

建築を教えるものと学ぶもの
大江宏・近江栄・太田邦夫・他著 224頁 ¥1,600

建築の心理学
クリフォード・モーラー著／扇谷弘一訳 180頁 ¥2,100

個性ある都市＝横浜の都市デザイン
岩崎駿介著 216頁 ¥1,600

建築は兵士ではない
鈴木博之著 256頁 ¥1,600

タウンハウス＝町家の再生
上田 篤編 220頁 ¥1,800

実現されたユートピア
月尾嘉男・北原理雄共著 252頁 ¥1,800

フランス建築事情 付・パリ建築案内図
三宅理一著 220頁 ¥1,800

絵で見る建築様式史
O.ランカスター著／白石和也訳 216頁 ¥1,600

日本のすまい・内と外
E.S.モース著／上田篤・加藤晃規・柳美代子共訳 350頁 ¥2,900

オフィス空間＝サラリーマンの場所と生理
草森紳一著 224頁 ¥1,600

明日を築く知性と技術 ●鹿島出版会 ●東京都港区赤坂6-5-13 ●電話（03）582-2251 ●振替東京6-180883 ●図書目録呈

日影（ひかげ）チャート

確認申請用添付図書には——
「日影チャートによる」と書いて下さい

【建築基準法·日影規制と日影チャート】

制作＝鹿島建設／発行＝鹿島出版会
定価＝各1枚5,000　　詳細内容案内送呈

▷ 建築基準法改正で日影規制が追加されました.

▷ 従来のように

1. 日影図（建物の各時刻の影の作図）の作図

ばかりでなく

2. 敷地から5mまたは10m離れた線（チェックライン）上の，主要な点（チェックポイント）での日影時間計算

さらにできれば

3. 周辺領域全体の日影時間分布を示す図（日影時間計算）

も必要になります. この他にも事前の各種の検討も従来以上に厳密に行わなければなりません.

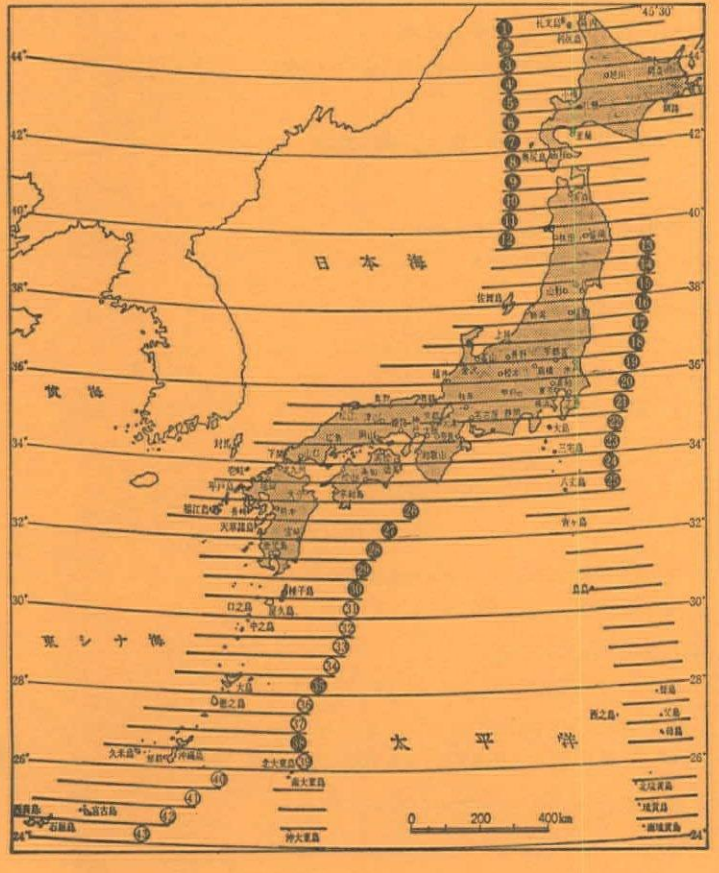
▷ 特定行政庁では建築確認申請で提出された 1.～3. のチェックが必要になります.

▷ 日影チャートは，これらの検討，作図をすべて1枚のチャートで，簡単にできるようにしたものです.

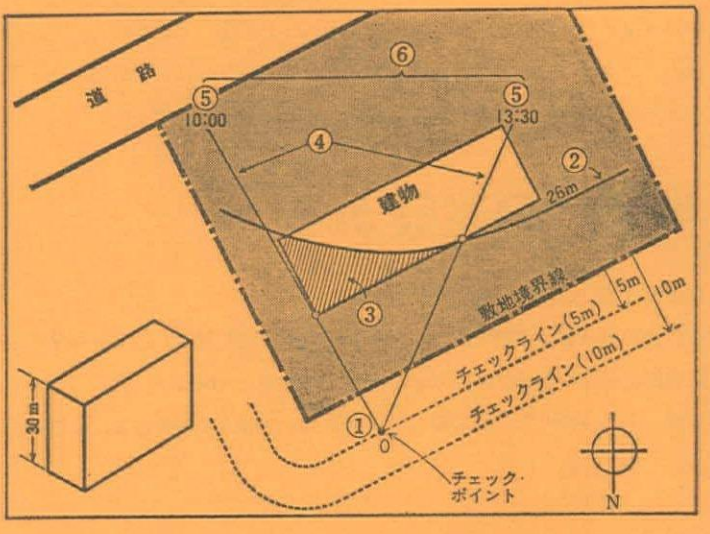
☆日影チャートは「日形規制の手引」（日本建築センター発行）に定めた基準に合わせて作ってあります.

▷ 建物の高さの目盛は 25cm 間隔（縮尺 1/100）と細かくしました.

▷ 日本全国を緯度 30′ のバンドに分けて，豊富な種類を揃えました.



☆日影チャートによるチェックポイントの日影時間の求め方は，こんなに簡単です!!



▷ 必要な手順はこれだけです（上図の番号と手順左端の番号を参照）.

① 建物の配置を示す図面にチャートを重ね，チェックポイントにO点を合わせ，方位を合わせる（このためにチャートは透明なフィルムです.）

② 建物の高さ（30 m）とチェックポイントの高さ（4 mであるとする）の相対的な高さ（30－4＝26m）に相当する限界線を見いだす.

③ その限界線より北側にある建物部分（チェックポイントへの影響部分——図の斜線部分）を見いだす.

④ その影響部分を両側から挟む時刻線を作る.

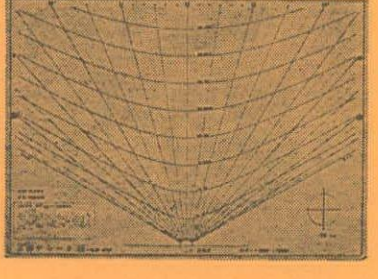
⑤ その時刻を読む（日影開始：10時00分，日影終了：13時30分）

⑥ 建物による日影時間（13時30分－10時＝3時間30分）が分かる.

▷ コンピュータも難解な計算もいっさいいりません.

☆日影チャートで日影図も簡単に作図できます!!

▷ 日影図を作るのに必要な太陽方位角，高度，影の倍率などのデータ表や，特殊な定規はいりません.



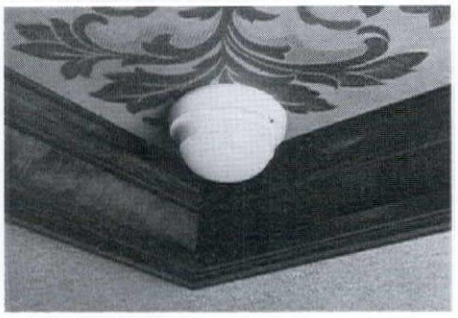
●42×59.4cm
特殊フィルムに裏から印刷——表から書いたり消したり自由
●使用説明書付き　●円筒入り

日影チャートの例
20　35°30′～36°00′用

《防犯設備》

スペース・センサー 複合型

竹中エンジニアリング工業株式会社



竹中エンジニアリング工業㈱では，今度人間の体温をとらえて，侵入者を検知する最新の宇宙通信技術，パッシヴ・インフラレッド方式を採用したスペース・センサーに新技術デュアル・ツイン方式とMAC回路を加えた複合型を開発し，今年の秋新発売する．

特長

①従来シリーズのコンパクトな形状，寸法のまま警戒エリアが広がった．

②ねずみ，犬，猫，照明，太陽光，すきま風などの諸条件に対して，信頼性が一段と向上し，それら諸条件と人間との自己判別がうまく処理出来る．

③ツイン方式のスペース・センサー2セットを使用する場合と比べて，価格が安い．

仕様

警戒エリア　立体警戒約 75m²

センシティヴ・ゾーン数　56本（28対）

警報信号　無電圧接点出力

使用電圧　DC10.5～30V，AC9～20V

消費電流　35mA（DC12V警戒時）

設置場所　室内天井，壁，柱

竹中エンジニアリング工業株式会社

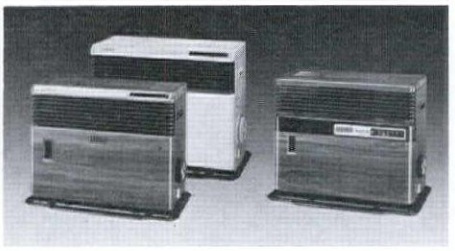
京都市山科区四ノ宮奈良野町7丁目1番地

〒607　Tel 075-593-3171（代）

《熱源機器》

石油ガス化ファンヒーター ダンファン

三菱電機株式会社



三菱電機㈱では，今度石油ガスファンヒーターの57年度商品として，基本性能の向上と燃焼コントロール方式に新機構を取り入れたデラックスタイプとタイマー，モニターランプなどの機能をほぼデラックスタイプ並みに装備させたカスタムタイプの2系列4機種を新発売した．

特長

①室温調節の設定温度と現在の室温が同時に表示されるので，暖かさが一目でわかる．

②室温調節の設定温度より，室温が5℃上がると自動的にOFF機構が働き，一時燃焼を停止して，室温が設定温度以下に下がると再び着火する．

③マイコンの規模をあげ，仕事量を増やし，部品点数を減らし，メカニズムをシンプルにして，システム全体の信頼性を向上させた．

④新型バーナヘッドにより耳障りな高域音を低減した．

⑤点火プラグをもう一本追加して，ツインプラグで着火性が向上し，臭気が低減した．

⑥予熱時間が約3分30秒に短縮された．

価格

デラックスタイプ　65,800円，69,800円

カスタムタイプ　62,800円，66,800円

三菱電機株式会社　広報部

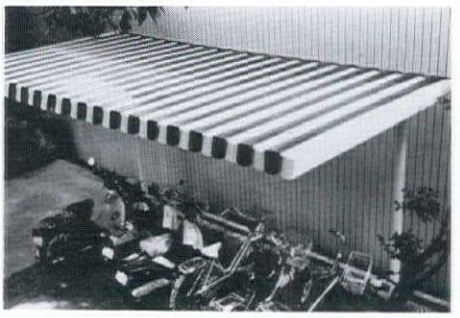
東京都千代田区丸の内2丁目2番3号

〒100　Tel 03-218-2359

《シェルター》

サンアルコ

三備アルミニウム工業株式会社



三備アルミニウム工業㈱では，今度古河アルミニウム工業㈱の資本参加と全面的な製造，技術協力と，米国ベレエア社との技術提携を得て，サンアルコルーフィングシステムを新発売した．

このサンアルコは，従来にない立体感と強度をもった，はめ込み式アルミシステム建材である．　弓なりに張り出したKパネルと，ストライプタイプの強化Cパネルとにより，アートと強度がみごとに一体化されたデザインになっている．　幅広のKパネルと幅狭の強化Cパネルの組合せ，幅広のKパネル同士の組合せなど，斬新なデザインが楽しめる．　パネル同士はしっかり組合わせられるので，雨じまいは万全で，従来のものより経済的である．　用途もバス停をはじめ，自転車置場，タクシー乗場，オーニング，装飾日途け，アーケード，通路，ゲート，カーポート，キャノピー，パラペットなど幅広い．　サンアルコに使われているパネルは，アルミ合金に化成皮膜をつくり，プライマーを焼付塗装し，さらにフッ素樹脂塗料を焼付塗装した，三層の塗膜構成になっている．

三備アルミニウム工業株式会社

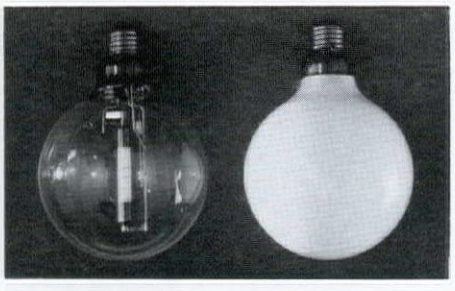
東京都港区芝大門1丁目2番7号

〒105　Tel 03-433-8091（代）

《照明器具》

ハイカライト ボール形

松下電器産業株式会社



松下電器産業㈱では，今度白熱電球に似た暖かみのある光色を持ち，しかも白熱電球に比べて約3倍の明るさ（効率）と9,000時間の長寿命を有し，大きな経済性を発揮する演色本位形高圧ナトリウム灯，ハイカライトのボール形150W 4品種を新発売した．　ボール形は，ランプの外管をそのまま見せて使用できるため，レセップ灯からインテリア性の高い多灯用シャンデリア器具まで，多様化する商業空間の照明に幅広く対応できるようにしたもので，さらに口金には一般電球などと同じE26口金が使われ，ランプ全長が従来の一般形に比べて約63mm短くなっているので埋込形器具などのように器具の薄さが要求される器具には，さらに薄形の器具設計が可能となった．　今回の発売によりハイカライトシリーズは合計22品種となった．

価格

高演色形

透明形　22,500円

拡散形　23,000円

高彩度形

透明形　22,500円

拡散形　23,000円

松下電器産業株式会社　管球事業部

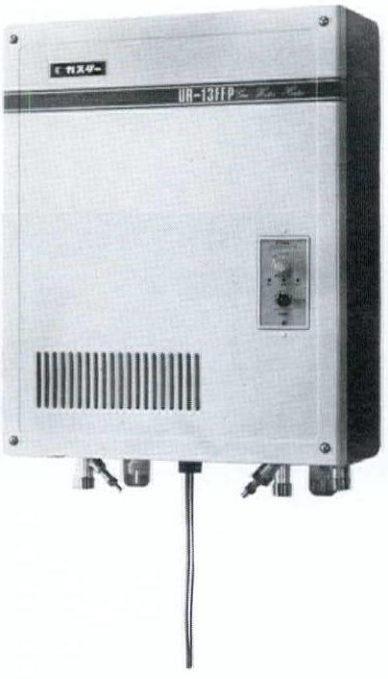
大阪府高槻市幸町1丁目1番地

〒569　Tel 0726-82-5521

《湯沸器》

屋内壁掛型給湯器 UR-13FFP

株式会社ガスター



㈱ガスターでは，ガス比例制御方式の採用により，能力3.8～13号の間で湯温は30～80℃の間で選択でき，湯量を変化させても給湯温度は変化しない，屋内壁掛型給湯器UR-13FFPを57年10月より新発売する．

特長

①奥行20cm足らずの薄型で今までの大型湯沸器のイメージを一新したコンパクトタイプである．

②強制給排気方式のため，室内は汚染されず，給排気管の取付けは多方向で，最大7m3曲りまで延長可能．

③瞬間湯沸器なので，貯湯式に比べて貯湯槽からの放熱損失がなく，お湯が必要なときだけバーナに直接着火するダイレクト着火方式である．

④凍結防止ヒーターとサーモスイッチが併用され，また器体過熱防止装置のほか全部で10種類の安全装置，機構が採用されている．

⑤器具の最低作動水圧は0.2kg/cm²と低く，2階給湯も可能である．

仕様・価格

寸法　高さ585×幅480×奥行190mm

重量　23kg

ガス消費量　最大25,000～最小7,900kcal/h

168,000円（工事費別）

株式会社ガスター　営業本部

東京都中央区日本橋浜町3丁目25番10号

〒103　Tel 03-663-6671

《手すり》

YMプロテクトレーリング

ワイエム工業株式会社



ワイエム工業㈱では，今度スチールパイプに軟質樹脂を被膜した，身障者保護手摺，YMプロテクトレーリングを新発売した．

特長

①樹脂被膜により冬期には金属製に比べて暖かく感じられる．

②従来の金属製手摺は，床面でたおれた時に衝撃が非常に高いが，軟質樹脂により衝撃が緩和される．

③樹脂の色調でカラーコーディネイトできるので，洗面所，手洗，風呂場など目的に合った色による区別も可能である．

④金属製に比べ美観，衝撃性，安全性など全ての面で優れているので経済的である．

⑤塩素，可性ソーダなど手洗の清掃に使われる薬品にも強い．

仕様

材質　スチールパイプ27.2φ×2.3t

軟質樹脂被膜3.2～3.4mm

先付施工　アジャスト可能・アンカー及び溶接止め

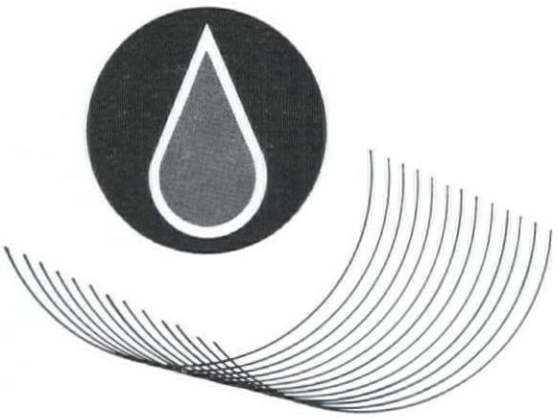
後付施工　アンカー止め

ワイエム工業株式会社

大阪市天王寺区上本町8丁目7番7号

〒543　Tel 06-772-0535（代）

誠意と情熱の30年



■ビル設備
（空調・給排水衛生）
■工場施設
（各種配管・公害防除）
■ガス施設
■土木・水道
■住宅設備

東横工業株式会社

本　　社	横浜市西区平沼２－11－11	☎045(323)2531
東京支店	東京都港区芝５－29	☎ 03(454)8591
仙台支店	仙台市本町２－16－３	☎0222(62)6271
川崎営業所	川崎市高津区末長仲町1288	☎044(866)9416
札幌営業所	札幌市中央区北三条西３－１－４	☎011(221)4063

構造が変っても ビニロイド防水 の信頼は変らない



すべてビニロイド防水が採用された新宿の超高層ビル群

営業品目

- ●ビニロイド防水工事
- ●アコシート止水・防水工事
- ●三星プラスタイル貼工事
- ●保温・保冷・防熱工事
- ●アコロード販売
- ●三星プラスオール製造・販売
- ●三星シーリング材製造・販売
- ●ＤＮ防水工事

アスファルト防水に取り組んで60年

三星産業株式会社

〒101　東京都千代田区神田小川町３－28（三東ビル）　TEL〈292〉1961㈹
事業所：東京〈292〉1961㈹・大阪〈443〉9721㈹・仙台〈62〉5201㈹
出張所：札幌〈551〉3781㈹・名古屋〈931〉3390㈹・福岡〈781〉3361㈹・長崎〈25〉3266㈹

豊かな生活環境を築く

量から質的な豊かさへの転換がせまられている'80年代
人間がほんとうの人間らしさをとりもどすための環境づくりをめざして
私達は技術開発に新たな意欲をもやしております。
人間生活に真に価値ある革新をおしすすめてゆく企業
太陽工藤工事にご注文ください。

●電気工事
ビル電気設備／工場電気設備／防爆電気設備
外線・発・変電設備／架空送配電線／通信線
地中送配電線
鉄塔工事
●アンテナ工事
●プラント工事
●計装工事
●空調工事
●給排水・衛生・特殊配管工事
●土木工事
●損保代理店業務・右記に付帯する一切の事業

総合設備工事のパイオニア

太陽工藤工事株式会社

取締役社長　代谷正元
本社／〒553大阪市福島区福島7丁目22番8号
☎06(452)1151(大代)
東京／〒105東京都港区芝2～2～17
☎03(454)7311(大代)



東光電気工事株式会社

取締役会長　杉　山　　慎　　取締役社長　松　本　福　男

東京都千代田区西神田1—4—5　〒101　電話292—2111 大代表

新工法！プレノテクト吹付工法

陸屋根防水には
奥山式 特許 絶縁工法
カッパー防水帯
コーパータイト

OKUYAMA KAKOGYO ・ WATER・PROOF ・ OAM

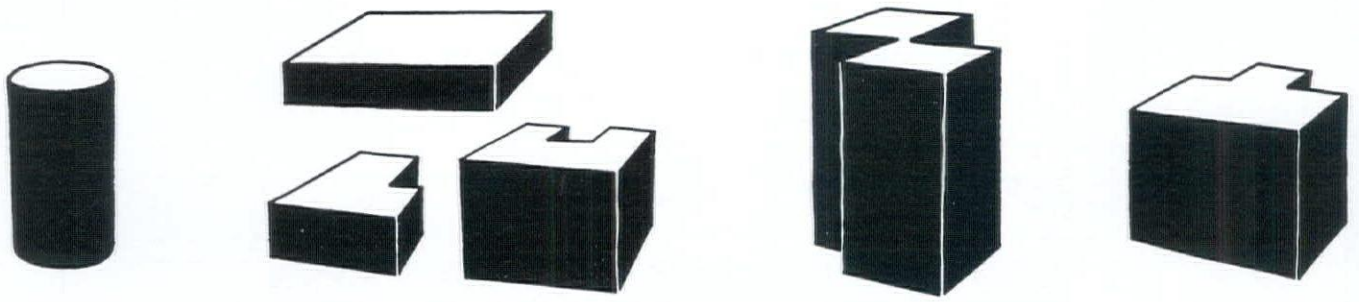
❖オクロン防水帯

特許 奥山式熱工法・冷工法綜合防水層

奥山化工業株式會社

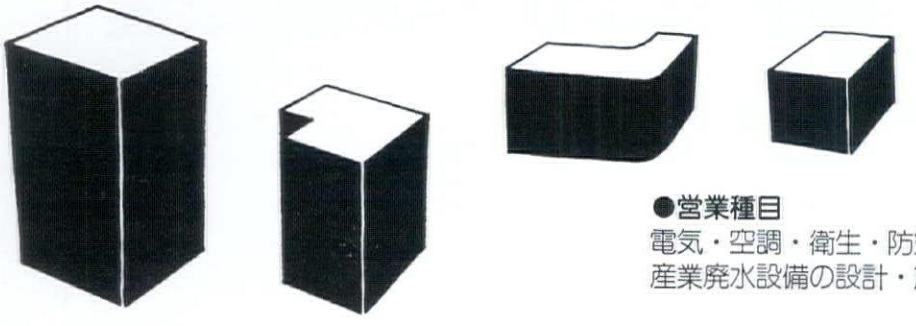
本　　社　東京都中央区銀座8－4－9　電話 03（571）2703
厚木出張所　厚木市金田字宮畑259　電話 0462(21)6092
大阪出張所　大阪市都島区都島中通り2－3－1　電話 06（921）2497
名古屋出張所　名古屋市南区若草町3-3　電話 052(811)3660
九州出張所　佐賀県諸富町　電話 0952(47)2945

●お申込次第カタログ進呈



まる～いビルに、四角いビルに、細長いビルに、広い工場にも……私たちの総合設備が生きています。

見えないところで活躍している電気暖房。でも、私たちの活躍が気づかれないことこそ私たちの理想——それは、あなたのビル・オフィスの生活が快適な証拠なのですから。



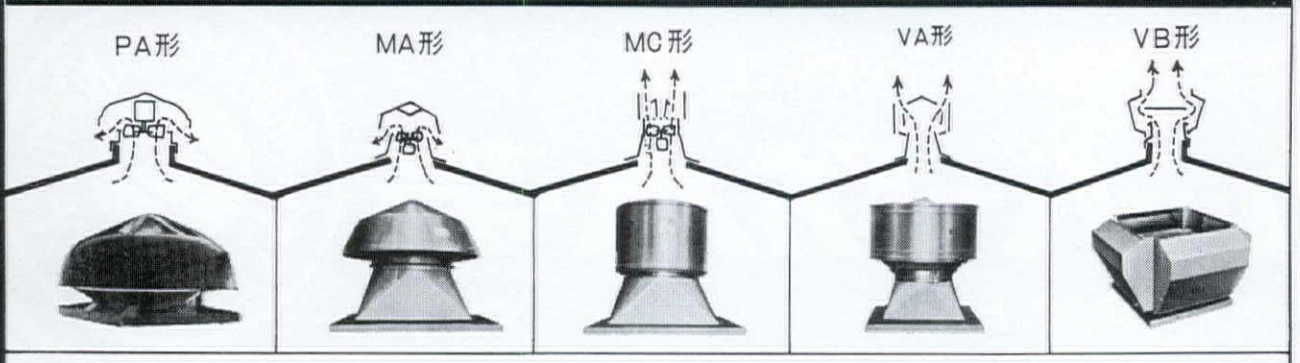
●営業種目
電気・空調・衛生・防災・
産業廃水設備の設計・施工

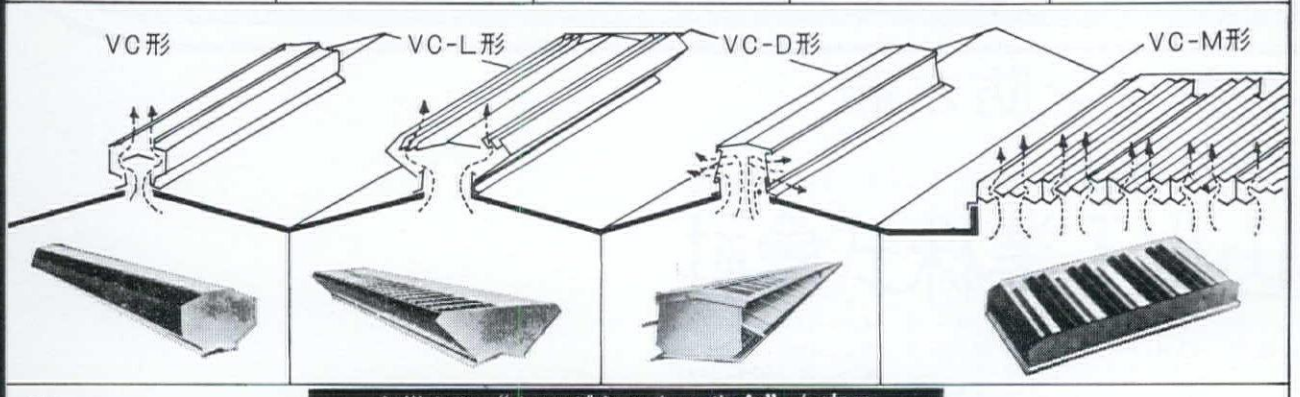
——光と空気と水を生かす——
電気暖房
大阪電気暖房株式会社
本店：大阪市西区江戸堀1丁目10番17号
TEL(06)441-8231
本社：東京都中央区銀座2丁目2番17号
TEL(03)535-5251

坂本商会は創業70余年換気・排煙・採光の専門メーカーです

強制換気・自然換気装置　排煙・ルーバー装置　採光装置

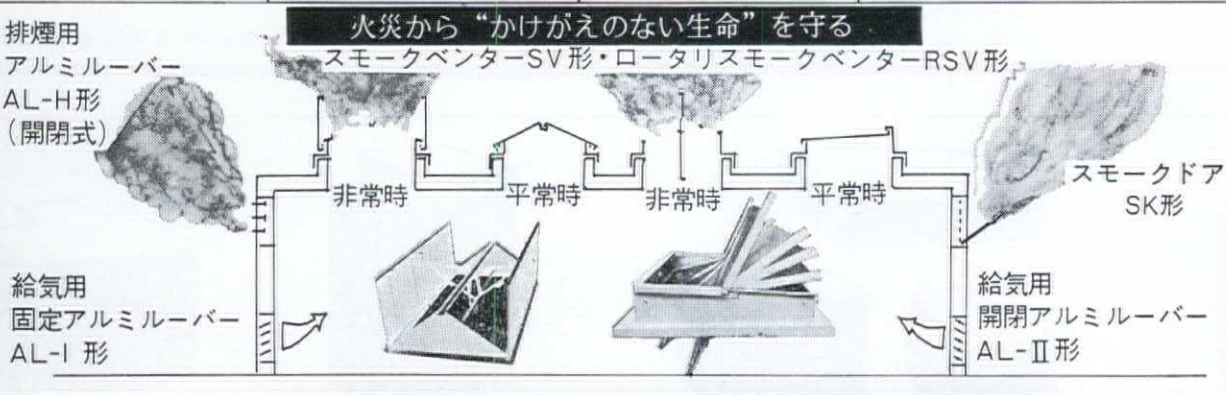
“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群



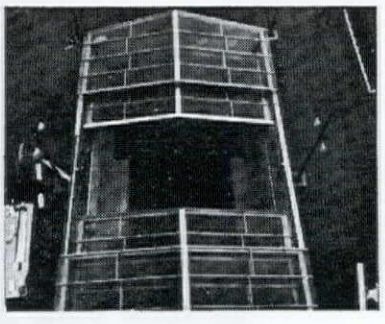


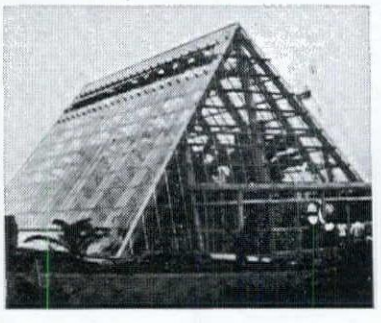
火災から“かけがえのない生命”を守る

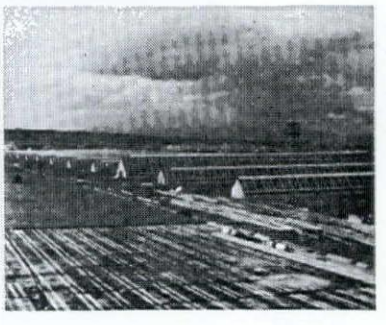
スモークベンターSV形・ロータリスモークベンターRSV形



“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂本商会

本　社　東京都中央区日本橋2－16－12（江戸ニビル）
〒103　電話 東京(03) 271－5591(代)
松戸工場　千葉県松戸市松飛台420番地
〒270　電話 松戸(0473) 87－6595(代)
技術研究所　千葉県松戸市松飛台字御囲217番地
〒270　電話 松戸(0473) 87－3148
施工部　東京都墨田区東向島2丁目15番11号
〒131　電話 東京(03) 619－2221(代)

カタログをご請求下さい

広告目次

SD誌に広告をお申し込みの際は

下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1

新田ビル（572）3381

大阪——大阪市北区西天満3-6-8

笹屋ビル（362）6515

●建報社

東京——東京都中央区銀座1-16-5

篠原ビル（563）2576

大阪——大阪市東区淡路町1-12

昭栄ビル（231）4548

●新建社

東京都中央区日本橋3-5-12

守尾ビル（271）3271

●創研社

東京都千代田区二番町1

番町ハイム（262）9921

●中外広業社

大阪——大阪市大淀区天神橋7-1-10

天六阪急ビル（351）7156

東京——東京都千代田区内神田1-11-1

酒井ビル（293）0621

名古屋——名古屋市北区柳原町1-11-2

キリンビル（914）7061

ア　旭電業㈱ 006
イ　岩城造園㈱ 007
オ　大崎電気工業㈱ 001
　　奥山化工業㈱ 021
　　大阪電気暖房㈱ 021
カ　㈱軽井沢ホテル鹿島ノ森 011
　　川崎電気㈱ 155
　　鹿島建設㈱ 009
　　㈱鎌倉製作所 008
キ　協和ガス化学工業㈱ 159
　　協和銀行 013
コ　㈱弘電社 005
サ　㈱坂本商会 022
　　三省堂 150
シ　新日本空調㈱ 156
ス　住友金属工業㈱ 002
タ　高砂熱学工業㈱ 表3
　　ギャルリーためなが 表2
　　大興物産㈱ 010
　　太陽工藤工事㈱ 019
　　㈱大気社 158
ト　東京芝浦電気㈱ 024
　　東邦アート㈱ 表2
　　東横工業㈱ 017
　　東光電気工事㈱ 020
　　東京避雷針工業㈱ 154
　　東洋熱工業㈱ 168
ナ　中立電気㈱ 012
ニ　日本板硝子㈱ 表4
　　日新製鋼㈱ 147
　　ニチアス㈱ 176
ノ　能美防災工業㈱ 151
ヒ　㈱日立製作所 003
マ　松下空調工業㈱ 004
ミ　㈱ミキモト 160
　　三菱電機㈱ 175
　　三星産業㈱ 018
ヤ　矢崎総業㈱ 014
　　㈱ヤナセ 167
リ　菱和調温工業㈱ 157
ロ　ロンシール工業㈱ 152
　　六興電気㈱ 012

TOSHIBA

イメージアップ

変貌した実感

操作盤に発光ダイオードを採用
センシティブなエレベーター
New Cerebellum（ニューセレブラム）が、さらに
デザインと操作性を高め新登場



操作性を高めたセンサータッチボタン
従来、押ボタンの配列は、一定の階床数を越えると2列配置にせざるをえませんでしたが、ニューセレブラムでは、この構造的制約を、発光ダイオードの採用により、美しいストレートな配列にし、軽くふれるだけで点灯するセンサータッチボタンを使用して、操作性を高めました。

省エネルギーにも一役かっています。
表示方式を発光ダイオードにかえた操作盤は、電力消費を最少限に止め、時代の要請に応える省電力にも一役かっています。

球切れをなくした長寿命タイプ
フィラメントレスの発光ダイオードは、長寿命を有する発光体であるため、従来発生した表示ランプの球切れによる不都合を解消しています。

高い運転効率と確かな安全対策

●マイクロコンピューターが、エネルギーとロスタイムの節約を実行します。
利用客がひとりでも、定員いっぱいでも戸開閉時間が同じ…これでは効率の良い運転はできません。
東芝エレメイト〈ニューセレブラム〉は、利用状況に応じて戸開閉時間を自動的に調整。いたずら押しによるムダな運転もチェックして、ロスタイムをなくしました。しかも、呼びがないときは照明・換気扇を休止します。

●マイクロコンピューターが素早く判断し安全を守ります。
万一、開閉中のドアのわずかなすき間に指などをはさまれた場合、〈ニューセレブラム〉ではそれを素早く検知し、開閉中のドアをくり返し反転させます。人体への被害を、極力防止する設計です。
また、万一、かごが故障して階と階の間で停止した場合は、自動的に再駆動させ、最寄階に停止してドアを開きます。

マイコン頭脳を備えた規格形エレベーター

東芝エレメイト New Cerebellum（ニューセレブラム）

お問い合わせ先：〒105 東京都港区虎ノ門1-26-5（第17森ビル） 東京芝浦電気㈱ 昇降機事業部 TEL(03)507-6905～16

Toshiba 東芝